

令和二年度（二〇二〇）
博士論文

山田寒山・正平を中心とする篆刻家の
実証的・総合的研究

神野 雄二

目次

山田寒山・正平を中心とする篆刻家の実証的・総合的研究

目次	1
----	---

凡例	4
----	---

序論

第一節 本研究の目的と意義	7
第二節 本研究の方法と構成	10

本論

第一章 山田寒山・正平における篆刻の美と表現に関する研究

第一節 山田寒山・正平における篆刻の美と表現に関する研究(I)	17
第二節 山田寒山・正平における篆刻の美と表現に関する研究(II)	33

第二章 山田寒山研究

第一節 篆刻について	51
第二節 印学と『印章備正』	70
第三節 「寒山新聞」に見える寒山の事績と業績	85
第四節 山田寒山年譜考	97

第三章 山田正平研究

第一節	篆刻について	105
第二節	詩について	125
第三節	書と書論について	132
第四節	画と画論について	146
第五節	用具・用材について	162
第六節	実父木村竹香について	171
第七節	山田正平周辺の人々とその交友	
1	周辺の人々とその交友(Ⅰ)	183
2	周辺の人々とその交友(Ⅱ)	195
3	周辺の人々とその交友(Ⅲ)	204
第八節	山田正平年譜考 附―山田家系図―	219

第四章 山田正平における教育面からの研究

第一節	山田正平における東京学芸大学での「篆書・篆刻」の講義に関する一考察(Ⅰ)	237
第二節	山田正平における東京学芸大学での「篆書・篆刻」の講義に関する一考察(Ⅱ)	246

第五章 山田寒山・正平に関わる篆刻家と、文人・芸術家の篆刻と篆刻論

第一節	小曽根乾堂の篆刻と篆刻論	261
第二節	富岡鉄斎の篆刻と篆刻論	279
第三節	会津八一の篆刻と篆刻論	293
第四節	中川一政の篆刻と篆刻論	309
第五節	西川寧の篆刻と篆刻論	323
第六節	保多孝三の篆刻と篆刻論	334

第六章 高芙蓉研究

第一節 高芙蓉の顕彰と墓碑について	343
第二節 中井敬所の高芙蓉研究	356

第七章 中国・日本の印史とその特色

第一節 中国の印史とその特色	369
第二節 日本の印史とその特色	381

結論

第一節 本研究の成果とその意義	395
第二節 本研究に残された課題と展望	398

附章 山田寒山・正平に関わる研究資料

第一節 明治・大正期新聞資料における山田寒山関連記事見出し一覧稿	401
第二節 園田湖城宛富岡鉄斎書簡翻刻 インタビュー「富岡鉄斎を語る ①中田勇次郎 ②小高根太郎」	424
第三節 桜井定市宛山田正平書簡翻刻	443
第四節 山田家蔵画日記翻刻三種	453

初出一覧	463
引用・参考文献一覧	467
あとがき	478

凡 例

一、本博士論文は、日本の篆刻家、主として山田寒山・正平父子を中心に日本の近現代の篆刻家を取り上げて実証的・総合的に研究したものである。

研究論文は、本博士論文に収録するに際し、全体の論旨に沿うべく表現を修正した。またいくつかの論文は、初出論文の記述内容を基にしているが、大幅に改稿したものがある。

一、初出論文名を改題したものがある。

一、本博士論文は、序論・本論・結論・附章を設けて展開される。

一、表記は原則として内閣告示の現代仮名遣いに準拠し、新字体が通用している文字については原則新字体を使用した。

一、本文中判読不明の文字は、□などで示した。

一、論文は、没故者の敬称は、客観的記述に徹するため省略するのが慣例であるが、敢えて付した箇所がある。

一、印影は、必ずしも原寸通りではない。

一、図版で所蔵先を明記していないものは、山田家蔵である。

一、図版で現在所蔵者不明の場合、論文執筆時の所蔵者としたものがある。

一、本博士論文は、先に刊行した『神野大光の世界―書・篆刻作品集―』（創想舎、二〇一三年三月）、『書写書道教育

論考』（創想舎、二〇一五年三月）、『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として―』（熊日出版、二〇一七年三月）、『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として―【改訂版】』（創想舎、二〇二〇年三月）等を踏まえたものである。

一、本博士論文は、博士学位申請論文を、加筆・修正した。

序 論

第一節 本研究の目的と意義

本研究「山田寒山・正平を中心とする篆刻家の実証的・総合的研究」の目的は、日本の近現代の篆刻家の研究、中でも明治から昭和時代を代表する山田寒山（安政三〜大正七年（一八五六〜一九一八））・正平（明治三十二〜昭和三十七年（一八九九〜一九六二））父子を取り上げ、実証的・総合的研究を行う点にある。

先に刊行した『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として―【改訂版】』（創想舎、二〇二〇年三月）は、本研究論文の基礎的研究書と言えるが、本研究論文において、全てに亘り精査し、加筆修正した。章・節を組み替え、研究の主題、目的と意義・方法と構成を見直し、新たな目的と意義による内容とした。また多くの資料・文献を追加し、これまでの研究を幅広く深めた。さらに新たに多数の論文を加えた。特に、本研究の中心課題といえる、篆刻の美と表現、鑑賞に関して詳細に論じた。

筆者はこれまで、日本や中国における印章や印人に興味を持ち、それへの史的考察や作品研究をテーマに据え論考を発表してきた。

日本の印人の研究、主として高芙蓉研究、並びに彼を祖とする芙蓉派の一系譜と目される、源惟良、小俣蟬庵、福井端隱、山田寒山、山田正平等の事績の調査・研究と作品分析、そして印学の継承とその発展を探ることを問題としてきた。また、わが国の印人伝における唯一の专著と言える中井敬所の『日本印人伝』をさまざまな文献・資料より拾遺し補訂することを課題としている。篆刻の専家はもちろん、篆刻に関わる傍系の文人・芸術家の研究も併せて進めてきた。

正平は、自筆の墨書履歴書に「篆刻ハ岳父山田寒山ニ師事シ寒山

没後大正八年ヨリ河井筌廬ニ從学シ昭和廿年ニ至ル」と、寒山が師であると記載している。

また、正平は「山田寒山・河井筌廬」（辰野隆編『近代日本の教養人』日夏耿之介博士華甲記念文集 実業之日本社 昭和二十五年六月）において、

「イイ和尚ダッタ」禪門のことに造詣深い人の言葉であつたが、盡された一言の如く忘れ難いのである。文人の如く、篆刻家の如く、画家の様でもあり、また樂焼家でもあつて、各々に見られるが、大觀して「イイ和尚ダッタ」のであらう。

と述べている。正平は、この寒山に関する一文を執筆するにあたり『寒山和尚事跡資料』として、寒山に関する資料を実に丁寧に作成している。

さらに、正平は寒山の墓参のために、喜美子夫人とともに、一九五八年八月に最明寺を訪れている。

その一方で、寒山は「正平は印の羅漢なり」と述べ、若年より大いに彼の天賦の才を認め、将来に期待した。そして彼を山田家の養嫡子として迎えたのである。

つまり、寒山と正平父子は、篆刻の技法的な伝授もあつたが、精神面・環境面におけるその関係性は多大であると思われる。本研究において両者を併せて研究するゆえんである。

寒山・正平の篆刻の美と表現に関する研究は、先行研究に散見す

るが、体系的・具体的に論じられたものは見られない。本研究の大きい目的と意義が認められる。

確かに正平は、芸術家であるが、教育面でも大いに功績がある。東京学芸大学における「篆書・篆刻」講義は、正平の研究において重要である。『山田正平先生篆刻講義ノート』、また当時受講した学生へのアンケート調査を通して、正平の教育者としての業績に焦点を当て教育の面から論じた。正平が当時行った教育は、教育の本質に関わるものであり、今後の高等学校芸術科書道の篆刻教育、また大学書道教育における篆刻教育の在り方を遠望する上で、大きな示唆を与え、有用であると思われる。

また、篆刻は、平成三〇年告示『高等学校学習指導要領』第2章第7節 芸術の「書道Ⅰ」3「内容の取扱い」(6)において『内容の「A表現」の指導に当たっては、篆刻、刻字等を扱うよう配慮するものとする。』とし、「書道Ⅱ」3「内容の取り扱い(4)」において『内容の「A表現」の指導については、篆刻を扱うものとし、生徒の特性等を考慮し、刻字等を加えることもできる。』と明記されており、篆刻の重要性が指摘されている。

さて本研究は、山田寒山・正平父子を中心としているが、寒山と正平との人と芸術を論じる上において重要と思われる、篆刻の専門家と文人・芸術家の篆刻と篆刻論に関して論及した。

また、本研究の基礎研究として、中国と日本の印史を概観するとともに、日本の印聖と目される高芙蓉の研究を行った。

本研究の意義は、篆刻が、歴史、文化、芸術の一翼を担っている点と、篆刻家が日中の書道史において果たした役割は少なくない点にある。書学書道史を語る上で、篆刻家の存在と功績は欠かせないものである。中国に比し、十分とは言えない本邦の篆刻家の研究は、大いに意義あるものと信ずる。

これまで「日本の印章・篆刻」の研究に、中田勇次郎編『日本の篆刻』(二玄社、一九六六年十一月)、三村清三郎著『三村竹清集 五』(青裳堂書店、一九八三年五月)、水田紀久著『日本篆刻史論考』(青裳堂書店、一九八五年一月)、新関欽哉著『東西印章史』(東京堂出版、一九九五年六月)、久米政雄著『日本印章史の研究』(雄山閣、二〇〇四年七月)などがある。ただこれらの研究は、印章や篆刻の考古学・文献学的、歴史学研究を主眼としたものである。近現代の篆刻家の事績研究やその表現面・鑑賞面での考察はあまりなされていない。本研究においては、これまでの研究動向を踏まえつつ、歴史学・考古学的な面での研究の発展と、表現技法・鑑賞の面からのアプローチを行った。

今、篆刻研究において、二つの課題に目を向ける必要がある。一つは、伝統的な観点から見直し解明すること、これは文献学的方法による。もう一つは、これは字形分析など美と表現の、実証的方法による。これまで自明のこととして見過ごされてきた視点の捉え直しである。本研究で扱うテーマの多くは、書学においても書道史においてもまだほとんど着手されていない。長い伝統を持つ篆刻という芸術を今日的視点から捉え直す端緒となるものである。その点において学術的意義は大きいと言えよう。

これまで筆者は、四〇数年に亘り、全国の学術諸機関・個人の収蔵家を訪問し、収蔵する印章や篆刻関係資料の調査・研究をし、基礎となる資料をより丁寧にデータ化し、その内容分析と作品研究を行った。印章や篆刻の考古学、歴史学研究の基礎研究を一步進めてきた。管見に及ぶ限りの、得がたい資料や文献を基に、また関係者から取材した貴重な証言を駆使して論考を執筆してきた。本研究では、これまでの基礎研究を踏まえつつ、文献学的に充実させるとともに、その表現技法面や鑑賞面での考察を行いたいと着想した。

本研究は「日本の印章・篆刻」の研究における広い視野に立った体系的な研究を目指したものである。筆者は、日本の印章や篆刻の歴史的、文化史的な解明を研究しており、総括的には日本の印学の体系化を目指している。同研究は、書学・書道史の対象としてだけでなく、美学・美術史、歴史考古学、文化史等その裨益するところは甚だ大きいと思われる。

第二節 本研究の方法と構成

本研究の研究方法は、まず全国の関連の研究機関・個人収蔵の篆刻や印章における関係資料の調査収集・研究分析を行うことから始められた。基礎となる資料をデータ化し、その内容の分析と研究を行った。そしてこれまでの先行研究を踏まえつつ、文献学的に充実させるとともに、その表現技法面からの実証的・科学的解明を実施した。

具体的には、以下の諸機関の調査・研究を行った。熊本大学、公益財団法人永青文庫、東京都荻窪在住の山田家の御子孫、長崎市在住の小曾根家の御子孫、京都市在住の園田家の御子孫、京都市在住の秦家の御子孫などに伝わる篆刻・印章の調査・研究、そして東京都の藤山商事株式会社に収蔵する文献・資料の調査・研究である。さらに、国立公文書館、東京国立博物館、大東急記念文庫、東京都立中央図書館、池大雅美術館、新潟県立図書館、山梨県立図書館、山梨県立博物館、早稲田大学、会津八一記念博物館、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、新潟市會津八一記念館、大阪府立中之島図書館、和泉市久保惣記念美術館、長崎県立美術館、長崎県立図書館等の収蔵品は、精しく調査・研究した。調査を行った地域は、岩手、東京、山梨、茨城、新潟、大阪、京都、奈良、三重、長崎、熊本、愛媛その他と全国に亘っており、現地に赴き研究を進めた。本研究は、フィールド・ワークが重要であるため、全国の文献資料の収蔵機関や個人収蔵家を訪問することとなる。そして日本の印章や篆刻の文献・資料を、日本各地の収蔵家や博物館、美術館、図書館、大学等を訪問して資料の蒐集をはかる以外に方法はない。そ

れは文献・資料の刊行部数が限られているために、その関係機関・関係者のもとにしかないものが多いからである。また資料・文献の蒐集をはかるとともに、古書や研究資料を購入した。その上篆刻・印章の研究は、中国の篆刻・印章の研究が必要で、両国のその比較検討が大切である。これまで多く中国を訪れ、研究を深めてきており、研究者の知友も多い。また、それに関する研究論文を発表してきた。中国・台湾・香港などにある関係機関は、印章・篆刻の収蔵に富む。本論文に必要な調査・研究を行い、それを基に本研究を深化させた。

以上本研究は、一次的基礎研究を踏まえた上で、これまで蒐集した文献・資料をより体系的に纏め、実証的・総合的・科学的に進め、日本の印学の体系化を図った。中でも、山田寒山と正平に関わる全国の関連の研究機関・個人収蔵家の訪問は略ぼすべてにわたって行われた。四〇数年にわたる蓄積された資料・文献は膨大なもので、今後同研究を進める場合、本研究は大いに役立つものと思われる。

また、私は現在までに、数千個の篆刻を実作しており、その経験を本研究で生かしたのも特色である。また二〇一三年五月、熊本市現代美術館において、美術館企画展「神野大光展―書と篆刻の世界―」の個展を開催し、作品を通し、篆刻の技法研究を行った。これらは、より実証的に研究を進める上で具体性を与えると考えらる。

本研究の構成は、序論、本論である第一〜第七章、結論、附章からなっており、その概要は以下の通りである。

序論では、第一節本研究の主題、目的と意義、第二節方法と構成

を示した。

本論は以下の通りである。

第一章では、山田寒山と山田正平の篆刻における美と表現に関して、以下の節に分け、実証的・総合的研究を行った。第一節山田寒山・正平における篆刻の美と表現に関する研究(I)、第二節山田寒山・正平における篆刻の美と表現に関する研究(II)である。

第二章では、山田寒山研究として、以下の節に分け、実証的・総合的研究を行った。寒山の詳細な年譜を編み、その事績と芸術に関して論じた。第一節篆刻について、第二節印学と『印章備正』、第三節『寒山新聞』に見える寒山の事績と業績、第四節山田寒山年譜考である。寒山の生涯、芸術(詩、書、画、篆刻、陶芸)など総合研究を目指したものである。

附章で取りあげた「明治・大正期新聞資料における山田寒山関連記事」は、当時の篆刻界や芸術界の状況が具に見て取れ、また寒山研究の得難い資料となっている。本研究は同資料に負うところが多い。これは寒山研究にとって一級の資料である。これを読むに彼の生涯、芸術観、芸苑での逸話などがあり興味は尽きない。

第三章では、山田正平研究として、以下の節に分け、実証的・総合的研究を行った。正平に関する膨大な資料文献を博搜、関係者へのインタビュー等を通して、本研究を進めた。第一節篆刻について、第二節詩について、第三節書と書論について、第四節画と画論について、第五節用具・用材について、第六節、実父木村竹香について、第七節山田正平周辺の人々とその交友1、2、3、第八節山田正平年譜考 附―山田家系図―である。正平の詳細な年譜を編み系図を示した。

第四章では、山田正平における教育面からの研究として、以下の節に分け、実証的・総合的研究を行った。第一節山田正平における

東京学芸大学での「篆書・篆刻」の講義に関する一考察(I)、第二節山田正平における東京学芸大学での「篆書・篆刻」の講義に関する一考察(II)である。

確かに正平は、芸術家であるが、教育面でも大いに業績がある。東京学芸大学における講義を纏めた『山田正平先生篆刻講義ノート』、当時受講した学生へのアンケート調査の分析や周辺資料を提示し、正平の教育者としての功績に焦点を当てた。正平は、芸術家・学者・教育者として、実に多面的な顔を持っていたといえる。

第五章では、わが国の印人伝における嚆矢と言える中井敬所の『日本印人伝』をさまざまな文献・資料により拾遺し補訂することは重要な研究といえるが、篆刻の専家はもちろん、篆刻に関わる傍系の文人・芸術家の研究の意義は小さくない。本研究では、寒山と正平の人と芸術を論じる上において重要と思われる、彼らに関わる篆刻の専家と文人・芸術家の篆刻と篆刻論を、以下の節に分け、実証的・総合的研究を行った。第一節小曾根乾堂の篆刻と篆刻論、第二節富岡鉄斎の篆刻と篆刻論、第三節会津八一の篆刻と篆刻論、第四節中川一政の篆刻と篆刻論、第五節西川寧の篆刻と篆刻論、第六節保多孝三の篆刻と篆刻論である。

第六章では、日本篆刻史の中で最も重要な篆刻家であり、日本の印聖と目される高芙蓉の研究として、以下の節に分け、実証的・総合的研究を行った。第一節高芙蓉の顕彰と墓碑について、第二節中井敬所の高芙蓉研究である。

第七章では、中国・日本の印史とその特色に関して述べた。中国と日本に分け、各々の印章史および篆刻史を概観し、その特色に関して考察を加えた。また本研究を進めるために必要な基礎資料・文献、印譜や図録類、先学の研究業績を述べた。

結論では、本研究における第一節本研究の成果とその意義について述べ、第二節本研究に残された課題と展望について明示した。

附章では、山田寒山・正平に関係する貴重な研究資料の紹介を行った。第一節 明治・大正期新聞資料における山田寒山関連記事見出し一覧稿、第二節 園田湖城宛富岡鉄斎書簡翻刻並びにインタビュー「富岡鉄斎を語る ①中田勇次郎・②小高根太郎」。第三節 桜井定市宛山田正平書簡翻刻、第四節 山田家蔵画日記翻刻三種である。

最後に、「初出一覧」と「引用・参考文献一覧」を示した。

本 論

第一章 山田寒山・正平における篆刻の美と表現
に関する研究

第一節 山田寒山・正平における篆刻の美と表現に関する研究 (I)

一 はじめに

本章では、本研究の主要課題といえる、山田寒山・正平における篆刻の美と表現に関する内容を取り上げ論究する。寒山と正平の篆刻における美や表現に関して、これまでいくらか指摘されているところではあるが、実証的・具体的に論及されたものは多くない⁽¹⁾。

本節では、具体例に添って、彼らの篆刻の美しさはどこに存在するのかに関して、歴史・内容に関して述べ、そして美と表現について作品分析を行う。また彼らが先人からどういった影響を受け、それを後世にどのように伝えたかに関して言及する。さらに、作風の変遷に関して触れる。

篆刻の美と表現に関して具体的に論述する時、以下の資料・文献が参考となる。

- ・ 西川寧著『河井荃廬の篆刻』（二玄社、一九七八年五月）
- ・ 全日本篆刻連盟監修『篆刻の鑑賞と実践』（全日本篆刻連盟、一九九五年四月）
- ・ 河野隆著『名印百話』（芸術新聞社、二〇一三年四月）
- ・ 小原俊樹・勝目浩司編著『図解篆刻入門』（木耳社、二〇〇〇年七月）
- ・ 菅原石廬編著『篆刻のてびき』（二玄社、一九九一年九月）
- ・ 菅原石廬編著『続篆刻のてびき』（二玄社、二〇〇四年三月）

本研究の歴史・内容からの考察に関しては「高芙蓉・山田寒山・山田正平」『日本の遊印』木耳社、一九八三年十月）の山田寒山・山田正平の項目を加筆・修正した⁽²⁾。

二 山田寒山の篆刻の美と表現

山田寒山の篆刻を数点取り上げ、その美と表現に関して述べる。



山田寒山の篆刻（図1～5）（印影縮小）

まず歴史・内容からの考察を行い、その後、篆刻の美と表現に関して論じる。

① 寸心千古（図1）

・歴史・内容からの考察

寸心、千万古。文字は本来、空なり。

山田寒山の篆刻は昔からの正しい筆法を伝えており、その作品は他の人と違った独特の風格がある。寒山の心には千年、万年の昔からの作風をそのまま伝えていく。文字というものは本来、どんな芸術性でも盛りこめるものである。

天海禅師が寒山の篆刻を述べた偈に「鉄筆、宗旨を伝う。寒山、独歩の風あり」とある。この偈を要約してこの四字でまとめたものである。

同印は、寒山が新潟の坂口五峰（一八五九～一九二三、政治家・新潟新聞社長、『北越詩話』を著す）のために刻した印である。側款に「辛丑秋日、寒山」とあり、寒山四十六歳の時の作であることが分かる。

・美と表現からの考察

同印は、字形は方形で、均等に四分割しており、文字の大小を大きくつけていない。横画・縦画ともに、並列する線の間隔は等しく、明快である。

高芙蓉の整然とした章法・印面構成と線質などの影響が見られる。線は、気を銜わず、自然な運刀による。その線質は、単純と思えるほど素直で直截である。実にさわやかな刻風といえる。これは寒山の真骨頂であろう。寒山の書もどちらかと言えば、単純化された線

質であるが、篆刻の線は篆書と軌を一にしている。たとえば、「寸」字の横画三本は、線質は等しく、起筆と収筆は自然で技巧を弄しない。寒山は印を刻すのが、非常に速かったと伝えられるが、その運刀は、爽やかである。

② 水清濯纓（図2）

・歴史・内容からの考察

水清まば纓を濯う。

水が澄んだならば、それで私の冠の紐を洗う。

これは『楚辞』の「漁父」にある言葉。この文は、屈原と老漁夫との対話形式をとっており、屈原の生き方を通して、人間本来の生き方を考えさせるものである。ここでは、老漁夫の「世の中の人みな濁って乱れているのなら、あなたも泥をかき立てればよいではないか」という言葉に対して、屈原が次のように答える。「私はこういうことを聞いている。髪を洗いたての者は、必ず冠の塵を弾いてかぶり、湯浴みをしたばかりの者は、必ず衣の塵を振うものである。これは清潔な者は一層身をけがすまいと思うのが人の情である。どうして潔白な身を以て、よごれた物を受けることができるか。いっそ湘水の流れに身を投げて、江魚の腹に葬られても、どうして真白いわが身をもって世俗の塵埃をこうむることができようか」と。それを聞いて老漁夫が次のように歌うのである。「滄浪の水が澄んだならば、それで私の冠のひもを洗うことができよう。」この言は、山田寒山の生活信条そのものと言える。

同印は、伊藤博文の需めに応じて刻したものである。これをもとに『滄浪閣印譜』が編まれた。同印譜に九顆押印されている。伊藤公と寒山の交友は、寒山寺の新梵鐘の寄進など、枚挙に暇がない⁽³⁾。

・美と表現からの考察

同印は、その字形は、略方形で、水字は横形に敢えて表現しており、清と濯のサンズイに変化を持たせている。同じ部首が続く字形の制作において、表現の良き参考例になろう。

線はやや細く、中国の玉印に似たさわやかな風趣を感じさせる。印材は鶏血材であるため、固く刻しにくいものであったと推測される。寒山の刀技の確かさを感じさせる佳品と言えよう。

③ 那伽犀那(図3)

・歴史・内容からの考察
那伽犀那。

一切の煩惱を破却しつくした十六人の尊者を「十六羅漢」と呼ぶ。その第十二番目に那伽犀那尊者が存在する。羅漢とは、阿羅漢の略称であり、小乗仏教においては、最高の悟りを得た者のことをいう。

山田寒山の印譜に『羅漢印譜』がある⁽⁴⁾。これは山田正平の実父木村竹香の編したものであり『瓦礫放光』『金石結縁』の二冊からなっている。前者には、寒山が明治三十六年の天長節の日に島田亮斎作の十六羅漢陶像と布袋和尚・観世音菩薩・文殊菩薩に刻した印影をおさめている。後者は、それに因んで諸家の題字・詩・書・画・印などを集めたものである。この『羅漢印譜』は、寒山の傑作であるとともに、竹香と寒山という当時一流の文化人が、心あたたまる交わりをもった証として、永久に伝えられることになった。

寒山は自分自身、日本の代表的系列である芙蓉派を善くするものとして、高芙蓉(一七二二〜一七八四)以後五世として「明治・大正期新聞資料における山田寒山関連記事」(以下『寒山新聞』と略す

⁽⁵⁾において位置づけている。同記事の掲載紙は不明である。それは、高芙蓉―源惟良―小俣蟻庵―福井端隱―山田寒山という一つの系譜である。寒山は呉昌碩の刻風を慕って明治三十年渡清している。その時、昌碩と親しく交わり、益を受けている。しかし寒山自身が明治四十年十月『東京日々新聞』の「百人一話」の中で「呉昌碩に入門し、昌碩の風を学んだが、芙蓉派を本領としている」と語っているように、寒山は芙蓉の血脈をしっかりと受けついで、芙蓉以後の代表的な印人といえる。

・美と表現からの考察

同印は、曲線が多いものの、小篆の筆意を生かしており、揺るぎない骨格を備えている。書と篆刻が融合した何ともない表現の中に格調を生み出している。

寒山の秀抜な技量を見せている。融通無碍な印面の構成は、彼ならではの大らかな存在感を示していると言える。文字と辺縁は「那」字の一面のみ接しているが、このことが印全体単調になるところを救っている。「伽」字は、人偏と力と口の三字に見え、印面をやや広くとっているが全体の調和を乱していない。この印、時流に捕らわれない超然とした彼の文芸への姿勢をみるようである。これは寒山が、幅広い文芸の教養に支えられた豊かさが感じられ堂々とした風格ある印である。

この印は、寒山の磊落な趣のある傑作であるとともに、所載の『羅漢印譜』は、内容からも日本の篆刻史上、特筆すべき印譜と言える。

④ 釜中生塵(図4)

・歴史・内容からの考察

釜中に塵を生ず。

釜の中には塵が積もっている。長らく釜を使っていない、つまり炊く米がないために塵がたまるということで、極めて貧しい生活であることを言う。これは『後漢書』『独行伝』にある、范冉のいかに貧乏であつても、それを苦にすることなく、無位無官で生涯を通したとの故事による。

この印文は、貧乏な生活をいう言葉であり、寒山の生き方そのものをよく表している。彼は、どのように貧乏であつても、本人自身は貧乏を気にかけず、平気でいた。

同印は、寒山が日本新聞の募集に応じたものであり、寒山自身による自注と浜村蔵六（五世）の評語がある。その後、第一回から第七回まで当選した印一〇七顆を編集して『日本印叢』（二九〇六年）として出版されている。寒山の自注に次のようにいう。「貧乏なわが家には人は誰もいなく、ただ私一人である。夜中に読書するのを休んで一篇の詩を作る。二銭の肴と三銭の酒、独りで酒をくみ飲むのはわが家の家風。誰がこのことを知っていようか」と。

また、浜村蔵六（五世）がこの印を評して「あなたの清貧は天下に有名であり、万里をとび歩くも得るものはなく、困窮してこの句を作ったのであろう。あなたは、文章も言葉も非常に巧みであり、詩・書・画・篆刻・陶鑄等すべて生まれつきの才能がある。能力は禅機をぬけでており、智慧は人間とは思えないくらいである。確かに現代の奇人である。この印はそのしるしといえる」と述べている。

・美と表現からの考察

同印は、実に堂々とした、寒山の性情のよく現われた風格のある印である。高芙蓉の刻風をさらに強固にしたようであり、寒山の刻

印の中の傑作の一つに数えてもよいものだろう。この印文構成は山田正平に受け継がれており、粗密の緊張感は一に充実したものである。

⑤ 恭賀新年（図5）

・歴史・内容からの考察

恭賀新年。新年をうやうやしく祝う。

山田寒山は風流を愛した君子人であり、多くの興味あるエピソードを残した人である。次にその一例を挙げてみる。

寒山は戯れに「八不刻」に倣って「三刻三不刻」というものを選んだことがある。「三刻」とは、仁義のある者は刻す、品格のある者は刻す、信用のある者は刻す。「三不刻」とは、たくわえのない者は刻さない、酒のない者は刻さない、銭のない者は刻さないというものである。これなど寒山の朴訥としたユーモアある一面が窺える。

徳富蘇峰は大正十三年十二月二十八日の『国民新聞』に「山田寒山翁を懷ふ」と題して一文を草している。

「山田寒山は、明治大正の際に於ける奇人であつた。雅にして雅ならず、俗にして俗ならず、僧の如く、仙の如く、商估の如く、山師の如く、文人墨客の如く、せんみつやの如く、殆ど傍人をして端倪する能はざらしめた」と。これは山田寒山という一人の人間をよくとらえた一文と言える。

・美と表現からの考察

日本の印に「大和古印」と称される和雅な楷書体によるものが存在する。同印は、大和古印風の楷書の印で、悠然とした趣を示している。山田寒山は多種類の書体を用いて印に刻している。篆・隸・

楷・行・草書体はもちろんのこと、仮名・梵字などもある。また、素材も鋳印、木印、陶印など多種に亘っている。彼の篆刻の多彩さである。

三 山田正平の篆刻の美と表現

山田正平の篆刻を数点取り上げ、その美と表現に関して述べる。



山田正平の篆刻（図6～15）（印影縮小）

まず歴史・内容からの考察を行い、その後、篆刻の美と表現に関して論じる。

⑥ 聊乘化以帰尽（図6）

・歴史・内容からの考察

聊か化に乗じて以て尽くるに帰す。

万物は変化にしたがって、最後には死にいたる。

陶淵明の「帰去来の辞」の最後の一句である。「帰去来兮」で歌い出される全文三百四十字からなる「帰去来の辞」は、淵明の代表的な名文である。淵明はこの文を賦し官を辞して田園に帰り、酒と菊とを愛して一生をおくったのである。

山田正平は、一止、一止廬、幾盒と号し、一止は「正」字を二分したものである。若年には、邵平、更生、更生居などと号した。新潟市古町に木村竹香の二男として生まれた。正平は父竹香が印判業を営み篆刻に志していた関係で、十五歳頃から篆刻を始めている。この印は、正平十六歳の時に編まれた『梅檀二葉香印譜』所載のものである（6）。この印譜の封面に、山田寒山が「梅檀二葉香印譜」と題しており、刊記に「大正三年冬至三日題す。正平君印々」とある。これには、正平自用印のほか多くの姓名印、遊印が押印されており、中井敬所（一八三一～一九〇九）の模刻なども含まれている。また、顧湘の刊行した『小石山房印譜』に所収の印も模刻しており、この印、配字そのものは相違しているものの、その模刻の一つと思われる。

・美と表現からの考察

同印は『梅檀二葉香印譜』所載で、正平が篆刻を始めてすぐの頃

のものであるため、正平初期の印風を知る上で絶好の資料となるものである。父木村竹香が中井敬所、一世岡本椿所（一八六二～一九一九）に篆刻を学んだため、正平の同印譜にある印は二人の影響によると思われるものが多い。また、篆刻はかなりの水準を示しているものの、まだ難点もあり、正平模索の時代といえるものである。

⑦ 死為忠義鬼極天護皇基（図7）

・歴史・内容からの考察

死しては忠義の鬼と為り、極天皇基を護らん。

もし、このまま死んでしまうならば、忠義の鬼となって、天地の続く限り、皇室の礎をお護り申し上げる気持ちである。

これは藤田彪（一八〇六～一八五五、東湖と号す）が文天祥（一二三六～一二八二、南宋末の忠臣）の正気歌に和して作った「文天祥の正気の歌に和す、並びに序」の最後の一句である。正平がこれを刻し印譜としたものが『正気印譜』である⁽⁷⁾。これは、正平が名を世に示した最初の印譜であり、正平十八歳の時のことである。印は総数六七顆。これには滑川澹如（一八八八～一九三六、篆刻家）の長い序文と寒山詩が付されており、それを版木に刻したのは正平自身である⁽⁸⁾。

正平の印譜には、生前に作られたものに『梅檀二葉香印譜』『正気印譜』『羅漢印譜』『八僊印譜』『正平陶磁印譜』などがあり、没後に、正平一周忌の追善供養として作られた『一止廬印存』などがある。公刊された印譜としては、最も初期のものである。

・美と表現からの考察

同印譜には、一世岡本椿所の風、つまり明末の何震を首とする篆

刻の流派である徽派の趣きや、山田寒山の風、つまり芙蓉派の趣きが随所に見える。方正平直なゆるぎのない謹厳なものである。この印は日魯漁業の前身、提商会主人であった堤清六が買いとり、これが機縁となり、後年、正平を中国へ遊学させてくれることになった。

⑧ 随類得解（図8）

・歴史・内容からの考察

類に随いて解を得。

法に随って理を悟る。

同印は『羅漢印譜』に収められている。同印譜の印材は、浅草橋の藤山末吉（藤山商事株式会社・印章用品、事務用品の卸販売を営む。昭和五十八年没す）が蔵していたものである。正平の養父山田寒山に羅漢印があるが、これは正平の羅漢印であり、これまで世に知られていなかったものである。十六羅漢陶像に正平が印文を刻したものであり、漆塗の厨子に収められている。これには『羅漢印譜』が一冊収められており、その刊記に「大正丙寅四月八日、正平製」とある。つまり正平二十八歳の時刻された陶印であり『八僊陶印』（一九二七年刊行、正平二十九歳）とほぼ同時期のものである。

・美と表現からの考察

正平は二十一歳と二十五歳の時二度中国に渡っている。この時、呉昌碩に画を、徐星州に篆刻を学んでいる。正平の印について語る時、その印は昌碩の影響を多分に受けていると述べる人が多い。これは、正平を理解する一面であると思う。正平には一個人の作家にのめり込んだ時期はなく、むしろそれを極力避け、多くの人と交わる中で正平芸術を創り上げていったものと思う。呉昌碩、徐星州に

しても同じであり、正平の出会いの中で最も印象深い人であるが、むしろ中国遊学は、自然風物や文物に触れた事が、正平にとり益する所が大きかったのではないだろうか。この印は、正平が中国から帰って、間もない頃のものであり興味深いものである。羅漢印は、正平晩年の作品のような格調の高い風韻は感じられないものの、雄偉な力強さが見られる。

⑨ 頂門上一眼(図9)

・歴史・内容からの考察

頂門の上の一眼。

頭のいただきにある一眼のこと。常眼を超えて物を見ることのできる眼である。

同印は、正平が画家の小川芋銭(一八六八〜一九三八)より依頼され刻したものであり、茨城県牛久の小川家に蔵されている。山田家に正平が芋銭との交流を綴った「芋銭翁の想出」(草稿)⁽⁹⁾が遺されている。それによると、この印は昭和十一・十二年頃、芋銭から依頼されたものであり、そのお礼として芋銭の画の代表作である「渴波童子」を贈られたことが述べられている。

・美と表現からの考察

正平と芋銭が初めて出会ったのは、大正九年頃のことであり、その後ずっと芋銭が亡くなる昭和十三年まで交流は続いている。正平は昭和六年に「寒山寺正平篆刻会」を催しているが、その時の推薦文を芋銭に委嘱している。正平は芋銭に私淑し多くの事を学んだが、中でも芋銭から聴聞した「何よりも自分の感興に真実であれ」「絵は七八分迄書道で行ける」や、作者の態度について述べた「深淵に臨

むが如く、薄氷を履むが如し」などは、深く感じる所があったようである。同印は芋銭の芸術観を受けてのものと言える。

「芋銭翁の想出」(草稿)によると、芋銭の自用印の中に芋銭が自分で図案した印があることが分かる。これが、正平が芋銭を尊敬するようになるきっかけである。また正平は、芋銭と富岡鉄斎とを近代を代表する二大画家として位置づけている。芋銭は、正平にとり篆刻家として生きていく上において、実にかげがえのない人であったといえる。同印、長方形の印材に纏められたもので、その配字は自然で、一行書を見るようである。

⑩ 天工人拙(図10)

・歴史・内容からの考察

天に工にして、人に拙し。

聖人といわれる人は、天地自然に対して事をする場合には正当を得て巧みであるが、いざ人というものを相手とする場合は正当を欠いて下手である。(遠藤哲夫訳『莊子』「雑篇」、明治書院、一九六七年三月)

同印は、昭和二十四年に開かれた現代印人展に出品されたものであり、正平五十一歳の時の作である。

・美と表現からの考察

山田正平は自身で作成した履歴書に「篆刻は、山田寒山に師事し河井荃廬に従学した」と述べている。正平が学んだ印人にこの二人を挙げたことは、それなりの理由がある。寒山は、正平の篆刻家への道を開いた一人であり、正平は、後には、寒山の養嗣子として寒山寺に入っている。荃廬は、正平を中国へ連れてゆき呉昌碩に会わ

せた人である。この当代きつての二人の篆刻家から正平は少なからぬ影響を受けたであろうと思われる。さて、保多孝三は「現代印人展評」（出典不詳）において、正平と荃廬の印を比較して次のように述べている。正平の印を理解する上において参考になる。ここに引用する。

支持する層の広範囲にわたる作家がある。支持層はそう広くなくとも、支持の程度の非常に深いものを持つ作家がある。山田正平先生の如きは後者に属するものである。河井先生の高度の叡智から構成される作品は、理を以て追究すればある程度までこれを理解し得る普遍性を持っている。ところが山田先生は、とぎすました「理」というものよりもっと人間的な体臭を持つ。ここに先生の作品の人間的な神秘がある。前者はその合理性の故に万人がこれを認める。後者はその人間的な神秘性の故に見る人の半ばは之を疑い、半ばは之に陶醉する。

荃廬は、正平の印に対し、最初は正平の印は玄人離れして困る、と嘆いていたようであるが、最後には、相当の評価を与えている。

この印面構成は四文字が有機的に絡み合い、隙間がなく充実したものである。天字の縦画の変化は心憎い。一番左の縦画と人字の右へと伸びる斜線の絡み、それを受けての拙字の旁の縦画の曲線三本の線の配置はまさに妙である。

⑪ 忘牝牡驪黄（図11）

・歴史・内容からの考察
牝牡、驪黄を忘る。

これは、『列子』の「説符」にある「牝牡驪黄」の故事による。「秦の穆公が伯樂の推薦により、九方臯を用いて馬を求めさせた所、黄色の牝馬を得たと知らせてきたので、人に馬をつれてこさせると、馬は黒色の牡馬であった。そこで、穆公が馬の色、牝牡さえ弁別できないものにどうして馬のよしあしが、見分けられようかといった所、伯樂が、これこそが九方臯のすぐれた点であるとして、馬を見分けるには、馬の天機（生気や素質）を観るべきで、外面的なことに拘泥すべきではない」と述べたことによる。（小林信明著『列子』、明治書院、一九六七年五月）

・美と表現からの考察

同印に対して、山田正平自身相当の自信を持っていたらしい。次の言からも分かる。「私が早い頃、日展に出した、『忘牝牡驪黄』の印、ひそかに意を得たものと思っていたが、別して世評にのぼらず、先生没後、新潟で山文（酒井議三郎）さんに逢って聞くに、当時非常にほめて居られ出典を示してながなが話された由、心下るおもいをしたのであった」（「会津先生と篆刻」求龍堂『渾斎秋艸道人』一九六八年十一月）この中の先生とは、会津八一のことである。

また、画家の中川一政もこの印は正平印の中で最も優れたものであるとして、特に「驪」の字の辺の温かさがいいといわれたらしい。これに対し西川寧氏は「むしろ私は冷たさを見ます。方寸の世界の厳肅さです」と述べている。（「山田正平遺作展」、『書品』第一五五号、東洋書道協会、一九六三年十一月）

正平の印の多くは、印篆体を基本としているが、同印は大篆体の趣きがあり、金文を思わせる自由さを感じさせる。これは、正平五十三歳の時の印である。正平晩年には、このような表現の印が見られる。「和して同ぜず」「遊雲魚」「谷神死せず」などがそうである。

これは、正平が晩年に到達した一つの美と表現の高い境地である。

⑫ 俱会一処（図12）

・歴史・内容からの考察
俱に一処に会す。

仏も衆生も共に浄土に生まれ会うという意味であり『阿彌陀經』の一節である。

同印には、「正平製、乙未六月」と側款があり、五十七歳の時の作である。印材は、寿山石、鳥鈕である。

さて、この印に関して正平自身一文を書いている。「開学祭に出品した俱会一処の朱文印、あれは四度目かに出た作である。最初は依頼者が取りに來し夜分、その人を側らに置いての作、少し硬い鶏血で、事、志と違った様であったが渡して支舞った。翌日思い直して別の石で試みた。朝の空気が爽やかなせいか、前作には勝る物が獲られたので速達で送って置いた。その翌日か、学校で生徒の前にながながと講釈しながら、また同文を刻って見せたが効能書き程に薬はきかず、此頃の梅雨模様一般でいかにも鬱陶しい。帰宅してから聳心一番、さらに作ったのが即ちあれである」（「一点一画」『山田正平先生篆刻講義ノート』（東京学芸大学書道科同窓会硯心会編、昭和三十八年六月、平成十六年七月復刻）

・美と表現からの考察

同印には、いわゆる毛筆で書いた潤渾の表現に近いものが見られる。この印で指摘するならば、「俱」字と「会」字に、にじみの効果が見られ、また「一」字と「処」字にかすれの効果が見られる。これらは、印の表現範囲を広げ、変化を与えたものとして評価できる。

また、印文と辺縁との関係は不離不即であり、絶妙である。

この「俱会一処」の印は、正平の墓の墓碑銘として拡大模刻されており、墓地は東京都の多摩霊園にある。

⑬ 養怡之福（図13）

・歴史・内容からの考察
養怡の福。

身も心も安らかに養う。

同印は、魏の時代の曹操の詩「歩出夏門行」にある言葉である。これは、曹操の遠征の苦しみを歌ったもので、烏桓討伐の時の体験により作られたものである。曹操は、この詩の終章で、人間の寿命について歌い、人間の寿命は天の定めによるのではなく、身も心も養い努力していけば、不老長寿の道が得られるという。（『曹操—その行動と文学—』竹田晃著、評論社、一九七三年七月）

この印は馬鈕の寿山石で、正平五十八歳の時の作である。

・美と表現からの考察

同印について書家の殿村藍田氏は次のように述べている。「山田正平氏。輕妙洒脱、刀法自在、布字の自由自然、氣宇の雄大さ、総てに余裕を十二分に残したこの作は、視る者をして氏の篆刻の魔術に引入れるに十分である。芙蓉派を更に完成せしめたと思われるこの作は最も日本人らしい体臭を感じしめる誇るべき逸品であると思ひける。（中略）正平氏の作はこの筆力の散歩がもつとも大きく育って居るのだ、それは散歩即ちこれが生活に迄成って居る筆力の随筆家、それが正平氏だ」（『篆刻めぐらへび』『書品』第七二号、一九五六年九月）

藍田氏はこの作に最も日本人らしい体臭を感じると述べているが、これは正平自身、常に心がけていたようである。松下英麿が正平の言葉を「一止道人追懷」(『古酒』第八冊、新樹社、一九六二年十月)に載せている。「国は亡びても芸術は残るというということを、このごろしみじみと感じますね。然し書にしても、篆刻にしても、中国の亜流でしかない日本のものはどうでしょう。大死一番大いにやらなきゃ」

寒山は、自分自身を高芙蓉の正統を継ぐ者として位置づけているが、美と表現から、正平もまた寒山を経て、芙蓉の正統を継ぐ印人とみてよいと思われる。

⑭ 世短意常多(図14)

・歴史・内容からの考察

世は短くして、意は常に多し。

人の生涯は短いのに、思うことはあまりに多い。

陶淵明の「九日閒居」の詩にこの一句がある。これは、陶淵明が九月九日に菊の花を酒に浮かべて、酒を飲むという風習にちなんで、自分も酒を飲もうとしたが、菊は庭一面に咲いているが、肝心の酒が手に入らない。そこで空しさのあまり、菊の花をたべながら胸中の思いを詩によんだものである。

・美と表現からの考察

山田正平の印の特質の一つに均衡美があるが、これはそれを代表するものである。それまでの多くの印は均整で漢印の方正平直な美を追ったものが多かったが、正平は文字の筆画を一度壊して再構成をしている。つまり、筆画と筆画とを微妙にからませて、バランス

をとった緊張感がある。これは正平独特のものであり、正平が画に志していたことと無関係ではないと思われる。同印は、正平五十九歳の時の作で、第一三回日展に出品している。

⑮ 無人華落(図15)

・歴史・内容からの考察

人無く、華落つ。

回りには誰も人はいなく静かなたたずまいであり、ただ花が一つ落ちていくだけである、という実にものさびしい光景をうたった言葉である。

同印は、昭和三十七年の一月に、日本美術院展に出品されている。同年の八月に正平は亡くなっており、正平最晩年の代表作であり、正平の絶作ともいえるものである。

さて、この印を刻したことに興味あるエピソードがある。それは正平の三女である山田梅枝が「買物三題―父の思い出・続」(『書品』第一四〇号、一九六三年五月)と題して触れている。

散歩にはよく骨董屋をのぞいていたらしいが、一昨年の暮頃だったろうか、西荻窪の方の店で欠け皿を見つけ、何様とか由緒ある家から出たという店の主人の説明に、書きつけてある「無人花落」という文句が気に入って、持ち合わせをはたいて買ってきた。ボール箱に綿をしき、皿が平らになるようにならべて持ち帰った。幸いになくなったところもなく、うちわ形の皿に復原した。眺めていくうちに、骨董屋のうすぐらい店の奥の方では気がつかなかった「無名」という署名に、その驚きと喜びよりは、はたで見ていくのもおかしいくらいだった。この皿を朝

となく夜となく、はては寢床まで持ちこんでは眺めていたが「無人華落」という印を刻り、これが最後の展覧会出品となった。

・美と表現からの考察

同印「無人華落」の印文による印は、布字のまま刻すことなく残されたものが一顆ある。これを見ると、正平は印面に何も塗らないで、まず朱で仮に布字をし、あたりをつけ、改めてその上に墨で布字をしたようである。すべて一筆で書かれており、実に生き生きとしたものである。一筆で書き、一刀で刻す。これは、正平の篆刻の根本姿勢であつたのであろう。書と篆刻の作風が非常に近い。

正平の篆刻の作風の変遷、分期に関して、その一端を見ておきたい。作品の美と表現から、大きく三期に分類できる。第一期は、模索の時期である。図6・7がそれに当たる。第二期は、発展の時期である。図8・9がそれに当たる。第三期は、完成の時期である。図10・15がそれに当たる。平静から発展、そして独自の表現となる。

⑯ 水野安雄・知足齋主人（図16）

・歴史・内容からの考察

同巨印は、山田正平の篆刻の中でも最大級の大印に属する。同印とともに、縦12・0cm、横12・0cmである。

水野安雄のために刻された二顆の巨印は、印影が山田家に残されている。これとは別にやや小ぶりの二顆の印影があるが、同じく水野安雄に刻された印である。これらは、正平が何歳頃の作か断定しかねるが、その刻風から比較的初期の刻印と見てよいだろう。

・美と表現からの考察

正平の篆刻の特長は、それが書法から発しており筆歌墨舞の妙があることである。それに加え、何といっても気迫の雄偉さであろう。そして、疎密の処理の大胆さは日本の印人の中でも傑出している。

正平は、日本人による日本人らしい篆刻といえる「雅」の美を心がけた。前に引用したが、松下英麿が正平の言葉として紹介している、先に掲げた次の一文からも理解できよう。

国は亡びても芸術は残るということを、このごろしみじみと感じますね。然し書にしても、篆刻にしても、中国の亜流ではないものはどうでしょう。大死一番大いにやらなきや。

（「一止道人追憶」前掲）

また正平は、篆刻をこよなく愛し、その将来に期待した。

篆刻は書と密接な関係をもつて書を取り扱って、金石の間に



図16 山田正平の篆刻 「水野安雄・知足齋主人」（印影は縮小・30%）

気分を現す、印人の芸術を表現する。従って書よりも一段と強い力と複雑な芸術精神とを働かせたものである。この点で、私は書よりも更に芸術的であり、一層深い味はひを含むものであると信ずる。そして印人の天才がどしどし出て、これが真の進展を見たいものと翹望して已まないのである。

〔篆刻の再興期〕『日本』、一九三八年八月）

日本の篆刻が大印化傾向を見せ始めたのはいつ頃であろうか。五世浜村蔵六や初世中村蘭臺に巨印があるが、これらは実用印で必要に迫られてのものである。私たちが目にするそれは、展覧会作品として刻されたものであり、会場芸術としての効果を狙ったものだろう。

同印は、彼が尊敬してやまなかった呉昌碩の風趣があり、また学び抜かれた漢印の古格に通ずる。漢印に倣った方直な表現で、疎密の配置が微妙である。これほどの巨印にかかわらず、空間は充実しており、正平の豊かな詩情が刀痕に見られる。確かな技量が窺えるものである。

四 おわりに

本節において、山田寒山・正平の篆刻の美と表現に関して言及した。またいくらか、系譜や作風の変遷に関して述べた。

寒山における篆刻の美と表現について纏めておきたい。

寒山の篆刻は、字形や線質が、日本の印聖と称される高芙蓉の系譜に繋がっていることが理解できた。彼の篆刻を具に見るに、殆んど補刀の跡は見られなく一刀彫である。陶印や鑄印にもいえ、簡素な作風である。これから寒山は、素朴で穏やかな趣に美を見出して

いたと言える。

彼は校字に『偏類六書通』（古森厚孝徳元重修嘉永元「二八四八」序）を使用しており、現在の文字学から見ると不適切な文字使用がある。ただ当時の文字学の限界でもあったろう。また章法においては、正平で端正な印面構成といえる。刀法は、線質に揺らぎが見られる表現で、これは芙蓉派の特色の継承である。この刀法は、中国の丁敬身の流派である浙派の表現ともいくらか相通ずる。寒山独自の印風は端整で清澄な韻致にある。むしろ刀法においては技巧を弄しない直截な表現が寒山の特徴である。それがゆえその美と表現は、いくらか単調に見えるものの、風格、個性が溢れたもので、雅趣に富んでいる。

寒山の篆刻における業績を纏めておきたい。以下の諸点に要約出来よう。これらの業績に関しては、第二章第一節と第三節において、個別に説明する。

- 1、日本の篆刻の流派「芙蓉派」を継承し発展させた。
- 2、鑄印や陶印に簡素な美による新境地を拓いた。
- 3、印聖高芙蓉の墓を発見し、その顕彰を行った。
- 4、玉印の趣のある、簡素で日本的な刻風の美による刻印を制作した。和印の最たるものといえる。
- 5、富取益齋の『印章備正』を校訂刊行した。
- 6、丁未印社の設立と篆刻の啓蒙をした。
- 7、明治印学会の創立会員になり篆刻の啓蒙にあたった。

次に、正平における篆刻の美と表現について纏めておきたい。

正平のすべての芸術の根幹に篆刻がある事は、いまさら言うまでもない。ただ篆刻と書との関係性は、彼の篆刻や書について論じる際一つの大きいキーポイントとなっている。次の彼の言からも理解

できる。

篆刻も結局書です。全体の結構布置そして着筆終筆、筆の向背少しく古印を二三模してそれから創作して下さい。余り急かすと最初の筆が全局に響きかかる様な気構へでそこまで心境を練ること（後略）。

（『一止道人山田正平先生の手紙』佐藤耐雪講演会、一九七九年一月、以下『佐藤書簡』と略記する（10））

また

篆刻は鉄筆とも申し筆なり。筆には骨格と墨情あり。漢印の正、平直素朴に見えるものも、実は古篆古隸の変化含蓄を兼ねて凝集あつてのこと。決して無味乾燥その物ならず。平静実のうちの妙味こそ書・篆刻の極処ならんか。ゆるゆる古典を玩味して下され度候。古典をふまえて現代を超出して。

（『佐藤書簡』）

このように正平の篆刻は、書を書くことにより鍛え上げられた骨法が重要となる。また、正平の篆刻は、日本篆刻史の中で類稀なる「金石の氣」が横溢したものといえる。彼は清朝後半期における碑学の浸透や金石趣味の定着がもたらした金石書法を継承している。若年期に二度にわたって中国に遊学したことも、大きい要因となっている。

正平の篆刻における業績を纏めておきたい。以下の諸点に要約出来よう。これらの業績に関しては第三章第一節において個別に説明する。

1、空間処理に突き詰められた緊張感にあふれた斬新さが見られる。

2、刀法における線質の変化に、繊細流媚な特色が見られる。

3、陶印における妙趣が見られる。

4、刻字における高い芸術性が見られる。

以上の内1と4に関して若干の説明を補足しておく。

1に関しては、印制作において篆刻家は必ず突き詰める問題である。正平においては特に考え抜かれたものであり、線と線との複雑な絡み合いにより織り成される空間の斬新な表現は限りない魅力を生んでいる。正平の印は、この疏密の法則を極限まで突き詰めたものであり、これが彼の印の最大の魅力と言えよう。

4に関しては、刻字は篆刻と関連が深い。篆刻家の多くは、刻字を手掛けており、優れた作品を残している。

正平の刻字について語ろうとする時、常に思い出されるのが、令夫人喜美子による次の言葉である。「木額も時折手がけましたが、一氣に彫り上げる氣迫のすさまじさは、今もなお、耳の底に残っている氣がいたします」（『増補版山田正平作品集』一九八四年七月、木耳社）。身内によるこの実体験談は、正平の芸術にかける魂を見る思いがする。

正平自身はどのような姿勢で刻字に取り組んだのであろうか。以前、正平の刻字に関して『墨』（通巻一五二号、芸術新聞社、二〇〇一年十月）に執筆したが、もう一度再考する。

それを教えてくれる格好の書簡が残されている。正平が刻字の依頼を受け、仕上げて送り届けたにもかかわらず、何の返答もない事に対する遺憾の書簡である。「拙生の仕事などは、派手の方面ならず。到底生活を支え得る報酬などは手にいり申さず。只作品が理解ある

人達の手に入り相楽しむ。其辺に聊か慰めを得るのみ」(樋口正平宛書簡、山田家蔵コピーによる、年月日不明)と記している。

正平が、刻字を単に篆刻の余技として制作したものでない事は、刻字の書稿の苦心の跡からも解かる。山田家に遺された幾枚も書かれた書稿は彼の印稿がそうであったように、工夫に工夫を重ねたもので、それへの執念さえも垣間見える。

私がこれまで過眼した正平の刻字は五十数点だろう。かつて令夫人から百点は刻したのではないだろうか、お聞きした。書体は篆書体が多いが、楷書体や隸書体そして行・草書体もある。材は桂材が多く、刻は陽刻・陰刻略半々で、線はあくまでも切れ味鋭く強い。線の揺らぎによる繊細な趣きは、彼の独壇場と言えよう。さらには一点一画にリズムがあり複雑で味わいに富む。一本の鑿でこれほど変化ある表現に刻し上げた事に驚嘆させられる。色彩はあくまで簡素で雅趣に富む。時を経るごとに、胡粉の白色は落ち着き、また金箔の金色や緑青の青色と板材の茶色が見事な色合いを示している。幽玄で何とも美しい。

書家松井如流は、白木屋で開催された「白光会展」に出品された草書の本額に対して「草書の額であつたが、魅力のある、まことに瞠目すべき作品であつた。私は欲しくてたまらなかつたが、戦後の貧乏時代で、その作品を譲ってくれと口に出しかねたことを記憶する」(『練馬草堂雜筆』霸王樹社編集室、一九八〇年八月)(図17)と述べる。如流が述べている草書の本額が「養如春」であるかは不明である。また伊東参州は「篆額は御逝去後御遺族から頒けていただいたもので、先生の刻字のうちでも傑作といわれているものである(図18)。文字には金泥が塗られて迫力がある。私はこれを書斎に掲げて、朝夕この作品を仰いでは先生の人間性を偲ぶとともに驚馬に鞭打っている」(『書道漫歩』日本習字普及協会、一九七四年三月)

と述べる。両氏は、山田正平という当代傑出した印人の刻字という作品を前にして言葉を失っている。正平の刻字は、刻字を単なる看板の世界から、芸術の世界へと引き上げている。

正平の刻字はその書や篆刻と極めて表現が近い。書を書く呼吸で篆刻を刻し、刻字を刻している。実に自然で、そして豊かである。簡素で優美な表現は古今独歩と言える。正平の篆刻を論じる際、刻字も併せて見てゆく必要がある。



図 17 刻字「養如春」



図 18 刻字「和致芳」

【注】

(1) 岩切誠氏が『書統』（萱原書房、現在続刊中）誌上において、「山田正平先生のこと」と題して、正平の篆刻や事績に関して、詳しく紹介している。

(2) 日本の篆刻家を代表する一七名の印人を取り上げ、内容からの考察、人と作品について述べたものである。

(3) 寒山は伊藤公に多くの印を嘱された。『滄浪閣印譜』所載の九顆以外に次の三顆がある。「指揮若定失蕭曹」「万古雲霄一羽毛」「勲章頗看鏡行藏独倚楼」。また、伊藤博文用印譜にも数顆載せられており、伊藤公と寒山の並々ならぬ親密さが理解される。

(4) 山田寒山は、その生涯に多数の印を刻している。書体、書風、素材は多様である。中でも羅漢印は、寒山の最高傑作といえる。それを押印した『羅漢印譜』は、日本における印譜の中で屈指の名譜である。寒山の篆刻について語る時、羅漢印と『羅漢印譜』を欠くことはできない。

(5) 山田家に、寒山関連の新聞記事の切り抜きを貼り込んだスクラップブックが数冊所蔵されている。これは寒山研究にとって一級の資料である事はいうに及ばない。これを読むと、彼の生涯、芸術観、篆刻観、芸苑での種々の逸話などが記されており興味は尽きない。これから寒山の事績、芸術（詩、書、画、篆刻、陶芸）、更に当時の芸壇、印壇の様子などが窺える。

(6) 『梅檀二葉香印譜』はこれまで発表されたことのないもので山田家に收藏される。正平の刻印手控え的なものであるが、彼の最も初期の作品として価値がある。印数は六四顆ある。印文は、姓名印や成語印など多種に亘たる。封面に寒山が「梅檀二葉香印譜」と題し、刊記に「大正三年冬至三日題正平君印々」とある。これから同印譜は、正平が山田寒山のすすめにより上京した直後に編まれたものであることがわかる。

(7) 同譜は、藤田東湖（一八〇六―一八五五）の正気歌を分刻したものである。印数は二六七顆である。帙に「正気印譜」と自題しており、表紙は「正気印譜正平謹篆」と版木に自刻している。序は滑川澹如（一八六八―一九三六）によるもので、やはり正平自身が版木に刻している。澹如は山田寒山と交遊しており、書・画・篆刻に秀でた。また、正平が山田家に入り婿する際幹旋したのが澹如夫妻である。

正気印は、一世岡本椿所の風、つまり明末の何震を首とする篆刻の流派である徽派の趣や、寒山の刻風、つまり芙蓉派の趣が見られる。それは章法の勤嚴さや、線質の揺らぎに窺える。正気印は形式が一定であり、一見すると平凡に見える。しかし仔細に眺めると、後年の正平の特徴である、観る人を魅了してやまない朴訥とした滋味ある美と表現が見られる。

(8) 滑川澹如（一八六八―一九三六、篆刻家）は、名は達、字は趣人。澹如と号す。別に禾魚艸堂と号す。千葉県海上郡の人。この印譜の序文の中で、正平は自分に書を学んだ、と興味あることを述べている。

(9) 山田家に正平自筆による「芋銭翁の想出」（草稿）が遺されている。未定稿と書写されており、発表すべく準備されたものと推測される。筆者は、以前、正平と芋銭に関して一文を草した。

・「山田正平研究（1）山田正平をめぐる人々とその影響―小川芋銭（1）」（『書道芸術』第四巻第五号通巻第二三三号、日本美術出版、一九八六年九月）

・「山田正平研究（2）山田正平をめぐる人々とその影響―小川芋銭（2）」（『書道芸術』第四巻第六号通巻第二四四号、日本美術出版、一九八六年十一月）

(10) 正平晩年、正平から篆刻、書画について教えを受けた佐藤耐雪は『一止道人山田正平先生の書簡』（佐藤耐雪後援会編著、一九七九年一月）として刊行している。これは正平の篆刻論や芸術観が述べられたものである。

る。ペン書きが多いが、その筆跡の美しさとともに、彼の芸術観を語る上でかけがえのない資料である。六六通の書簡によるが、正平と佐藤の作品を随所にもりこみながら、二人の交流を綴ったものである。佐藤宛正平書簡は、正平研究にとりかけがえのない価値を持っている。

第二節 山田寒山・正平における篆刻の美と表現に関する研究(Ⅱ)

一 はじめに

筆者は、先に、山田寒山（一八五六一一九一八）と山田正平（一八九九～一九六二）の篆刻における、その美と表現の全貌に関して、作例を通して述べた^①。本研究においては、その美と表現に関して、より実証的・理論的に論述する。

寒山・正平の篆刻そのものの美やその表現の価値について、印影に添って、彼らの篆刻の美はどこに存在するのかに関して、作品分析や作風の変遷を通して明らかにしたい。また先人からどういった影響を受け、それを後世にどのように伝えたかの系譜についての検討を深めたい。

二 印影図版掲載のための資料・文献

篆刻の美と表現に関して具体的・実証的に論述するため、次の資料・文献を用いて述べる。多くは、これまで印影が掲載されているものを主にした。以下の略号で記す。

・『書道講座』第六巻篆刻（西川寧編、二玄社、一九七三年二月）——S 新

・『書道講座』5「篆書・篆刻」（西川寧他編、二玄社、一九五五年

九月）——S 旧

・『書道全集』別巻Ⅱ 印譜 日本（平凡社、一九六八年十二月）——S 旧

・『書道全集』別巻Ⅰ 印譜 中国（平凡社、一九六八年九月）——S 中

・『定本書道全集』別巻印譜篇（河出書房、一九五六年五月）——S 定

・『毎日書道講座』九『篆刻』（関正人編、毎日新聞社、一九九一年七月）——S 毎

・『日本の篆刻』（中田勇次郎編、二玄社、一九六六年十一月）——N 中

・『篆刻全集』9 中国（小林斗盦編、二玄社、二〇〇二年一月）——T 中

・『篆刻全集』10 日本（小林斗盦編、二玄社、二〇〇二年一月）——T 日

・『三村竹清集五』（青裳堂書店、一九八三年五月）——M 青

・『山田正平作品集』（木耳社、一九七六年十一月）——Y 木

・図録『山田寒山・正平展』（篆刻美術館、一九九二年十一月）——図 T ①

・図録『山田正平展——寡作な文人篆刻家——』（篆刻美術館、二〇〇四年九月）——図 T ②

三 山田寒山の篆刻

山田寒山の篆刻に関して、作風からまた、生涯を通して重要な作例を数点取り上げ、その美と表現、作風の変遷と系譜に関して述べる。

1、篆刻作品の美と表現

山田寒山の作品の美の特色は、書体は、篆書体は言うに及ばず、隸書体・楷書体・行書体・仮名文字・梵字などさまざまなものを使用していることが挙げられる。印形から見れば、方形を中心とするが、円形や不定形など多様である。線質から見れば、直截で技巧を弄しない明快なものである。寒山ならではのゆったりした線質で外連味がない。ここに取り上げた白文方印「日下東作」「S新」(図1)は、彼の特徴がよく見られる。分間を等しくとった方形の字形の端正な佇まいや、ほとんど技巧を弄しない線質などに特徴がよく表れている。篆刻は二度刀を動かし刻すことで、一本の線が形作られるが、彼は終筆には刀を入れていないものが見られる。これは、「燕尾」と言われる(と)どちらかというと、篆刻の世界で避けられる表現であるが、寒山は敢えて使用している。「日下東作」の「下」字の第一画と第二画の終筆や、「作」字旁の上部の二本線の終筆などである。寒山の場合、これが、線の響きとなっており効果的である。

また、寒山の篆刻において伊藤博文のために刻した「滄浪閣主」(S新)(図2)は、線はふくよかで、揺らぎが見られ、これは芙蓉派の特色であり、系譜にある山田正平も多用している。また「相聞一相」(S新)(図3)は、款記の分かる数少ない作例である。同印は寒山の代表作と言える。明治三十九年(一九〇六)十一月三日の刻で、寒山五十一歳の作である。線は細いながらも引き締まったものであ

山田寒山篆刻作品



図1 日下東作



図3 相聞一相



図2 滄浪閣主



図4 百穂



図5 相州鎌倉円覚寺

る。次の二点は、寒山の『手控え印譜』から取った⁽³⁾。「百穂」は、二重の円形の辺縁（輪郭）に布字されたものである（図4）。「相州鎌倉円覚寺」は、縦長の印形に行書体で刻されたものである（図5）。難なく布字されたおり、彼の書として書かれる趣と同一で余裕が見られる。

山田寒山の篆刻における鑑賞は、これまでいくらか指摘されているところではあるが、実証的・具体的に論及されたものは殆ど見られない。本節では、具体例に添って、考察するものである。『羅漢印譜』所載の篆刻は寒山の代表作であり、彼の篆刻の美が最も端的に表現されたものといえる。それを取り上げて、美と表現に関して鑑賞をする。古人は篆刻における工程の要点を述べる際、「篆刻三法」つまり字法・章法・刀法の三種に分けて論じている。それに沿って見てみたい。

本研究は、印面と印影とを並べて鑑賞したが、単に、印影だけの研究よりもはるかに、深まる。それは、平面と立体との相違もあるが、印面に隠された、造形の秘密が見えるからである。篆刻の場合、彫刻的要素もあるが、単に篆書体を使用しているからでなく、印面に切り込んだ形と線に、すでに内含されている。印面を拡大した先例に、北川博邦氏監修・遠藤玄遠氏が編集した『缶翁印痕』（扶桑印社、二〇〇一年二月）、『近代四家印選』（扶桑印社、二〇〇六年四月）がある。刀法の解明に、印面の研究は欠かせない。

尚、図版の○印は分間を、△印は空間を示すものである。

2、篆刻作品の分析と鑑賞

①「跋陀羅」（ばだら、バドラ Bhadra）の印影と印面（図6）（図7）

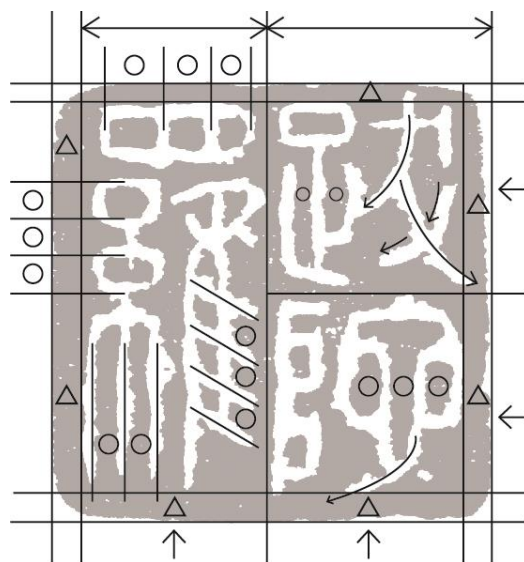


図6 跋陀羅の印影



図7 右印の印面

字法は、主として校字と撰文のことをいう。文字資料で字義を調べ、篆書に対する深い知識を必要とする。同印は、羅漢名を刻し、小篆によっている。

章法は、三字印として、字数や各字の繁簡を調整して、四角の印面の中に、右側に二文字、左側に一文字を配している。三文字を少し中央に寄せ全体を引き締めている。実に自然な文字配置で、効果的な造形の処理が施されている。寒山は、印面構成力に優れ、これは天賦の才といえる。字間の空間の取り方や点画の方向は、微妙に変化を持たせている。

刀法は、切刀法⁽⁴⁾を用い、陶印であるが、切り刻んでいくような趣を持つ。筆で書いたような自然な刀法で刻されている。線質は芙蓉派の特色である、揺らぎのある抑揚あるものとなっている。「羅」時の糸部分の縦画は「縣針篆」と呼ばれる画の先を鋭く尖らせた表現で、空間鋭く下方へ響かせている。

同印は『羅漢印譜』所載である。

②「迦理迦」（かりか、カーリカ Kalika）の印影と印面（図8）（図9）

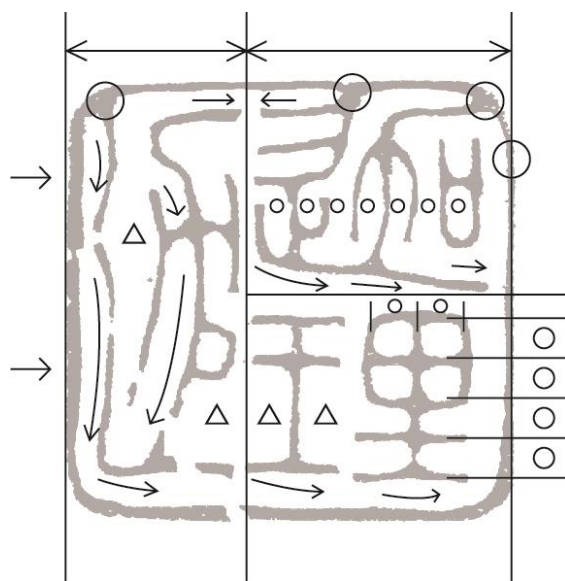


図8 迦理迦の印影



図9 右印の印面

字法は、羅漢名を刻し、小篆によっている。

章法は、印面全体を一つの画面に見立てて、空間を埋め尽くす構成で処理されている。辺縁つまり輪郭と中の文字が混然一体となっている。二文字が同字であるが、字形を大きく変化させ、工夫を施している。線が接触する所を太くし、にじみの効果を表現している。辺縁に文字をどのように接触させるかは、作品の表現を大きく変化させる。下辺の三本の横へ向かう画の変化は微妙である。「迦」字一字目のしんのような最終画と、「迦」字三字目の旁の左へ伸びた曲線の関連は印面全体を引き締めている。彼の篆刻は、屈託のない大らかな趣に富むが、同印にもそれが見られる。

刀法は、あまり線に太細や変化をつけていないが、仔細にみると微妙な変化を取り入れている。三字目の「迦」字のしんのようにいくらか強弱を持たせている。

同印は『羅漢印譜』所載である。

3、作風の変遷。

寒山は刻年の判明する有紀年の篆刻は多くない。まず、寒山の印譜や『寒山新聞』⁽⁵⁾に款記のある篆刻が見られるが、ここに列記する。刻年がはっきりしたもの、新聞掲載日によるものなど、いくらか刻年が前後することも考えられるが、略この時期と思われる。

・伊藤博文『滄浪閣印譜』所載印（九顆）（自己亥歳晚至庚子仲春間製）1899—1900

・「米齋」（明治三十三年一月）1900

・『羅漢印譜』所載印（明治三十六年）1903

・「啓天道度人間」（甲辰元旦）1904

・「皇謨恢宏」「国運開展」（明治四十年一月一日、丁未元旦）190

7

・「南山老衲」（明治四十年二月十七日、丁未春日 大正三年・二月十七日）1907

・「柳緑花紅」（『国民新聞』（明治四十年四月七日）1907

・「吉福」（『北越日報』（明治四十年四月二十日、庚戌元旦）1907

・「松吹説法度生聲」（『北越新聞』（明治四十年五月二十一日）（明治四十一年五月二十一日）1908

・「新年佛法如何聞依旧今朝日出東」（戊申元旦）1908

・「平々凡々」（『平々凡々印譜』己酉春日於寒山寺寒山田潤製）1909

・「長使英雄淚滿襟」（明治四十二年十一月四日）1909

・「興国元勲第一流」（明治四十二年十一月四日）1909

・「吉福」（庚戌元旦）1910

・「夜深和雪嚼梅花」（庚戌元旦）1910

・「恭賀新年」（『岩手日報』明治四十三年一月一日）1910

・「五祀六宗」（『国民新聞』明治四十四年一月三十日、明治四十四年孝明天皇祭日刻）（一月三十日）1911

・「湘水忠臣」（『国民新聞』（明治四十四年五月五日、壬子端午）1911

・「売神祝印」（『国民新聞』明治四十四年五月七日）1911

・「不折」（『萬朝報』明治四十四年六月十六日、六月十二日刻）1911

・「創意仙品」（『国民新聞』（明治四十四年十月二十日、辛亥秋日作）1911

・「福寿無量」（『国民新聞』明治四十五年一月七日）1912

・「皇帝萬歲」（『国民新聞』明治四十五年二月十一日、明治四十五年紀元節）（二月十一日）1912

・「高僧日入山門」『国民新聞』（明治四十五年四月三日、壬子四月上浣）1912

・「無事看山」『国民新聞』（明治四十五年五月十九日、壬子初夏）1912

・「明治天皇」（大正元年九月）1912

・「祖師心印鐵牛機」『国民新聞』（大正二年一月一日）1913

寒山は、生涯にわたって刻した作品全体から見る限り、刻風が大きく変化することはない。ただ、晩年になるにつれ、より書体・刻風が多彩なものとなり、外形も自由となる。また線質は複雑な刻印が見られるようになる。「無事看山」「創意仙品」など、寒山の性情がよく表れている刻印と言えよう。



図 16 保多孝三「長與善郎」



図 14 山田寒山「三遷居」



図 12 小俣蟻庵「石室閣」



図 10 高芙蓉「孟彪」



図 17 鈴木千秋「山春」



図 15 山田正平「白鷗心」



図 13 福井端隱「山高月小」



図 11 源惟良「全栄」

4、系譜

山田寒山の系譜についてみてみたい。

寒山は自身、日本の篆刻の代表的系列である「芙蓉派」を継ぐものと、高芙蓉（一七二二～一七八四）以後五世として「鉄筆閑話」（『寒山新聞』（新聞名・年月日は不詳））において「高芙蓉の伝燈を継いであるので、純粹たる古体家であります。芙蓉派と申しませば、高芙蓉―源惟良―小股螻庵―福井端隠と伝ひ、私まで五世であります。」これは、寒山本人の言説であり、最も尊重してよいだろう。三村竹清は、「伊勢と篆刻家」（『三村竹清集五』前掲）において「松木五峰からの聞き覚えとして「山田寒山も端隠門の様に聞いてゐたが、五峰翁の話では多分松阪の刀根端宜にでも就かれたかといふ事であった。端宜も端隠門かと思ふ」と述べている。しかし、これは聞き覚えであり、系譜としては、まずは寒山本人の言説によるのが妥当だろう。

次に、高芙蓉、源惟良、小俣螻庵、福井端隠の略伝を、水田紀久の訓読校注（『日本印人伝』『日本の篆刻』前掲）を基として紹介し、その篆刻と系譜について述べる。

高芙蓉（享保七～天明四・一七二二―一七八四）

江戸中期になると、印聖と称された高芙蓉が出る。芙蓉は学識に優れ、書画篆刻を善くし、画は山水を巧みに描いた。篆刻は彼の最も得意とする所であり、当時流行していた明末清初の低俗な方篆雑体を退けて、秦漢時代の古印を尊び復古を提唱した。ただ、当時は秦漢印の実物が見られることは少なく『漢晋印章図譜』『顧氏集古印譜』『秦漢印統』『蘇氏印略』などを鑑賞していたにすぎない。しかし芙蓉は、限られた古銅印から韻致をくみとり、高雅な刻風を創出した。これにより今体派は一掃

され、古体派が打ち立てられた。彼の印譜に『芙蓉軒私印譜』がある。さらに芙蓉は鑑識に精しく、著述に『漢篆千字文』や、『古今公私印記』の模刻がある。彼は当時著名であった文人や学者と交際したが、中でも柴野栗山・韓天寿・池大雅・木村巽齋等とは特に親密であった。

高芙蓉の復古的な刻風は、その門下の印人により広く流布された。逸材は京都・大阪・江戸の方面に出た。さらに地方にも彼の印風は波及し、明治の初めに至るまで芙蓉派は栄えた。曾之唯（一七三八―一七九七）は「芙蓉の影子」と称され、師の風韻をよく伝えた。また印学に精しく『印語纂』『印籍考』を著した。芙蓉の代表的な門人を掲げてみる。池大雅・源惟良・葛子琴・前川虚舟・木村巽齋・初世浜村蔵六・稲毛屋山・杜俊民・余延年など一々枚挙するに遑のないほどである。紀止も篆刻を善くし、中でも細刻に長じ芙蓉の称賛を受けた。

源惟良（寛政八～一七九六）

源惟良、あざ名は顕哉、号は東壑、また勘石と号す。通称森礼蔵。京師の人なり。学を好み文を能くし、旁ら篆刻を嗜み、高芙蓉に従いて、刀法を学び、遂にその室に入る。芙蓉の没するや、門人故旧相謀りて、まさに私印七十二顆を函し、もって東山一心院の寿碣の下に埋めんとす。惟良力を竭くし、芙蓉山房私印譜一百部を作り、付するにその家蔵の古印十六顆および印須十三事をもつてし、これを先生の親故に頒つと云う。

*京都車屋町二条上ル町に住す。伊藤氏を名乗ったこともあったか。A所収。（参考 三村清三郎・伊勢と篆刻

家（八） 書苑四の四）

小俣蟻庵（明和二―天保八・一七六五―一八三七）

小俣蟻庵、名は孟寛、のち孟彝と更む。あざ名は子猛、のち名六と更む。また栗斎と号し、晩に柴翁と号す。本姓は藤原、伊勢山田の人。その先は蒲生氏の族たり。故に自ら姓を修して苻と曰う。世々豊受宮の神楽職に任ず。人となり清雅、書画骨董を愛し、名品佳蹟は、重資これを購う。藏弃甚だ多し。また書を善くし、法を古法書に取り、参するに子昂（趙孟頫）・玄宰（董其昌）をもつてす。かねて画に工みなり。篆刻を源惟良に学び、頗るその法を得、教えを乞う者多し。のち家道衰え、筆硯を携えて、信越の間に遊び、霞樵再生の称あり。帰郷するに及び、僑居門を杜じ、また世事にあずからず、翰墨自ら娛しむ。遠近の文客、大神宮を拝する者は、必ず来たりてその書画篆刻を請う。性仁慈施を好む。かつて京師の人青来枵（青木木米か）なる者あり。家産を破り、伊勢に來たり、蟻庵の恵みを得て、歸りて洛陽陶冶の魁けとなる。晩年人の賊に遇い悉く財を失するを聞き、すなわち書画二十四頁を造り、これを与えて售らしむ。その人頼いにもって安んずるを得たり。貧富行を改めざるを觀るべし。天保八年八月九日没す。年七十二。

*A所収。天歩八年七月九日没す。年七十三。伊勢山田天神岡に葬る。

（参考 三村清三郎・伊勢と篆刻家（八）（九）

（十）（十一） 書苑四の四五六七）

福井端隱（明治一八・一八八五）

初名武熙。榎本氏。福井氏を嗣ぎ末彰と改む。あざ名は孔彰、別に凹隅・雨洗・緑雪書屋と号す。通称帯刀。正四位下外宮権弥宜。下久保に住し為田に移る。藪内流茶道をも善くす。明治

十八年（一八八五）八月二十二日没す。八十五。息、水琴、名は末経、あざ名士明、一に聴雪と号す。通称若狹。また篆刻を善くす。

この系譜は、高芙蓉―源惟良―小俣蟻庵―福井端隱―山田寒山―山田正平―保多孝三―鈴木千秋という一つの流れである。

ここに印例を取り上げ、この流れの特色を述べる。それは、高芙蓉「孟彪」（S新）（図10）と、源惟良「全栄」（S日）（図11）と、小俣蟻庵「石室閣」（図12）（筆者蔵『蟻庵印譜』）と、福井端隱「山高月小」（図13）（三重図書館収蔵印譜『福井端隱印譜』）と、山田寒山「三遷居」（T日）（図14）と、山田正平「白鷗心」（S新）（図15）と、保多孝三「長興善郎」（S新）（図16）と、鈴木千秋「山春」（S毎）（図17）を検討してみたい。

八家の篆刻を比較すると、字法では、当時の字書や文字学の限界も見られるが、略妥当な篆書体が使用されている。小篆体が多く、篆書の習熟は優れている。

章法では、方形を主としているが、それぞれが個性を持ったものである。福井端隱までの四家は、一文字で完結した、伝統に則ったものであり、寒山以下は、文字と文字に関連を持たせたもので、また文字と辺縁が融合したものであり、一つの画面として捉えられている。

刀法では、衝刀法と切刀法が交じり合ったものである。前の四家はやや硬直したもので、筆の動きはそれほど見られない。寒山以下は、書かれた文字に近く自然な動きが見られる。ただし、線の「揺らぎ」はすべての篆刻家に通ずるものである。確かに寒山の系譜は、高芙蓉の系列に存しており、中でも線質について言える。柔かで膨らみを持たせた「揺らぎ」がある。

次に、寒山は若年、長崎の小曾根乾堂⁽⁶⁾に面会している。ただし乾堂の篆刻と比較すると、類似する点は少ない。「小曾根栄印」(T日)(図18)と比較してみると、乾堂の印は線にあまり太細はなく同一であり、寒山の印は抑揚があり、変化を見せる。寒山は、篆刻技法や表現ではなく、むしろ乾堂の篆刻観や舶載した印譜・書画に学ぶところがあつたのではなからうか。

さらに、寒山は中国に渡り呉昌碩に面会している。篆刻の刻風を見る限り、寒山本人が言うように、昌碩からの大きい影響は見られない。昌碩の白文方印「日下東作」(S新)(図19)と寒山の「日下東作」(S新)(図1)を比較すると、昌碩の印は線質が重厚で、寒山の線は簡潔である。昌碩は章法では緊密だが、寒山は簡素である。

小曾根乾堂と呉昌碩の篆刻



図18 小曾根乾堂篆刻
「小曾根栄印」



図19 呉昌碩篆刻
「日下東作」

四 山田正平の篆刻

山田正平の篆刻に関して、作風からまた、生涯を通して重要な作例を数点取り上げ、その美と表現、作風の変遷と系譜に関して述べる。

1、篆刻作品の美と表現

山田正平の篆刻の特色として、「山田寒山・正平における篆刻の美と表現に関する研究(Ⅰ)」(前掲)で、正平の作品の美と表現の特色として五点あげた。ここでは、特に篆刻に関わる三点に関して実際の作品例により、詳しく述べてみたい。

- ① 空間処理に突き詰められた緊張感に溢れた斬新さが見られる。
- ② 刀法における線質の変化に、繊細流媚な特色が見られる。
- ③ 篆書体において、さまざまな形態を融合した文字を創始した。

①は、空間処理・構成から見ると、篆刻はもとも文字そのものは方形に刻されることが多いが、正平の場合、絵画を手掛けていたこともあり、一文字で完結した造形でなく、印面全体を一つの空間として捉えることが多い。この表現は、呉昌碩からの影響もあるだろうが、昌碩を更に発展させ、文字と文字、また文字と辺縁や界線などに絡みをもたせており、緊張感漲る刻風である。まさに「正平様式」といってよい彼独自の緊密な作風を樹立している。例えば朱文「中川一政」(S新)(図20)は、文字の画数のこともあるが、「中」と「一」字を極端に上に詰め、「川」と「政」を、空間大きくゆった



図 24 鑑華照魚目



図 22 巧在不捨



図 20 中川一政



図 25 忘牝牡驪黃



図 23 物新人旧



図 21 白蘋世界

りと取る。それが実に調和が取れており、複雑な構成となっている。「白蘋世界」(S新)(図21)は四文字が緊密な構成で、空間が充実に動かしがたい構図である。

②は刀法の結果として表現される線質から見るに、彼の特色が分かる。「巧在不捨」(S新)(図22)における「巧」字の横画三本の変化の妙、「在」字の傍の縦画などの線の揺らぎに見える、彼のいう「呼吸で切る」との行為の結果である。「物新人旧」(S新)(図23)「旧」字の横画は変化の妙を尽くしており、その揺らぎは、彼の呼吸とともに生みだされたものである。日本篆刻史上、正平ほど線に変化のある篆刻家は見られない。太細の変化が極限まで突き詰められたまさに妙品である。日本的な趣、日本の美術の特色の一つである「雅美なる線」といえよう。この深い情趣は、彼の石質の印材を知り尽くした、刀痕を限界まで表現したものであり、日本篆刻史でこれまで見られないものである。彼の篆刻は、優れた感性でもって、布字は慎重に、刀を動かす時は大胆に、生きた線で刻されている。一気に刻された線に篆刻の妙味を覚える。同印は、書と印が混然一体をなしている。「新」字の一画目は、逆筆で形作り、刀で文字を書くが如く奏刀されており、まさに「鉄筆の書」を生みだしている。

③は、正平の篆刻は、漢印の印篆体を基に刻されたものが多いが、大篆・金文体を融合させた趣のある「正平体」ともいえる独自の字形に消化している。「鑑華照魚目」(S新)(図24)、「忘牝牡驪黃」(S新)(図25)等である。表現の多様性、個性豊かな新生面を開いた。

山田正平の篆刻作品の具体例に添って、美と表現に関して検討する。印影を分析し、印面を具に研究する。同印は、正平の代表作であり、彼の美が最もよく表現されたものと言える。

1、篆刻作品の分析と鑑賞

①「飛鳥出林」の印影と印面（図26）（図27）

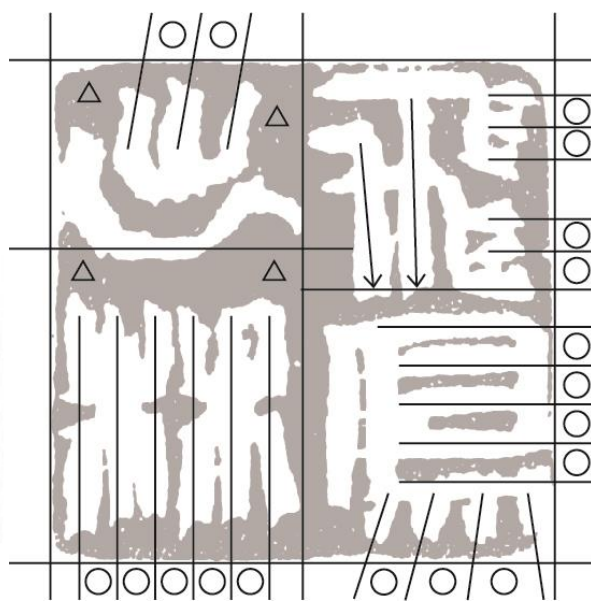


図26 飛鳥出林の印影



図27 右印の印面

字法は、主として校字と撰文のことをいう。文字資料で字義を調べ、篆書に対する深い知識を必要とする。「飛鳥出林」を刻し、印篆による。

章法は、「飛・鳥・林」字はほぼ同寸法で「出」はやや小さく上下を狭くしている。文字そのものが持っている形態をうまく生かしている。「飛」字は、上辺に近づけ、「林」字の下方を広くし、呼応させている。拡大すると、正平の篆刻作品がいかに、印面に緊張感があるかが分かる。

また、表現の工夫に、「飛」字の縦の中心画の右下への響き、「鳥」字の下部四点の微妙な方向の変化、「出」字の最終画の筆の捻じりの効果、「林」字のそれぞれ起筆と終筆の変化の妙は、各点画の呼応が虚実軽重の変化を与えており、彼の独壇場と言える。微妙な筆画の変化を大胆な刀法で印面を引き締める手法による緊張感に新意が見られ斬新である。

刀法は、衝刀法と切刀法を併用して刀痕が残された複雑な味わいがある同印は、正平の特徴を遺憾なく発揮した名印である。

篆刻は、印影でもって完成とされるが、印面の研究が重要である。刻面に印影の秘密が隠されている。本印で言えば、「出」字の最終のしんによは、刀と石との抵抗の跡が表現されている。また「林」の終筆が、響きとなって表現されている。「飛」字は印の縁が印刀で叩かれたり、切り込まれており複雑な表現となっている。



図29 右印の印面

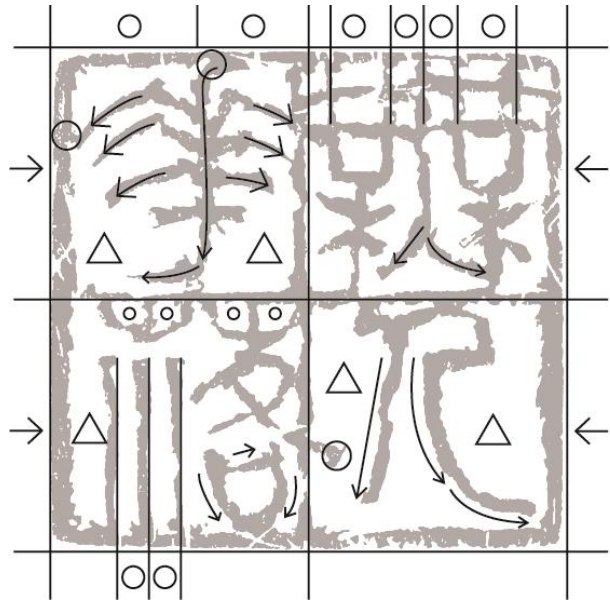


図28 無人華落の印影

字法は、「無人華落」と刻し、大篆による。

章法は、同印「無人華落」の印文による印は、布字のまま刻すことなく残されたものが一顆ある。これを見ると、正平は印面に何も塗らないで、まず朱で仮に布字をし、あたりをつけ、改めてその上に墨で布字をしたようである。すべて一筆で書かれており、実に生き生きとしたものである。一筆で書き、一刀で刻す。これは、正平の篆刻の根本姿勢であった。書と篆刻の作風が非常に近い。界線を使用したことにより四文字の関連に複雑さを出した。全体の単調さを解消し、空間が引き締まっている。「落」字の右方向への画を「人」字の中に侵入させ、「人」字の空間に緊張感が生まれた。これは意図的であると思われるが表現として成功している。

刀法は、衝刀法と切刀法を併用した複雑な味わいを表出しており、彼の感性によるものであろう。彼の篆刻の方法である「一筆で書き、一刀で刻す」という方法である。

印面を見ると、中央部分をやや高くして、印泥がべったりつかないようにしている。あまり表面を整えないでザラザラしたままである。印刀はかなり斜めに入れてある。彫りは、深い所と浅い所の変化が見られ、自然に筆圧の変化を持たせたものとなっている。縁は刃先で切り込んであり、これらが印影に表現されている。刻面の研究は篆刻美の表現において重要である。

同印は、正平の代表作で最晩年の作品である。大篆を用い、呉昌碩・高芙蓉などあらゆるものを消化し、これまでにない正平調を築き上げた。

さらに、正平の篆刻に影響を及ぼした篆刻家を挙げる。実父の木村竹香（山田家蔵印影による）（図30）、そして徐新周（丁中）（図31）や錢厓等（丁中）（図32）の民国から現代にかけての金石諸家の影響が見られる。竹香からは、正平若年期、より端正で整齊の趣を、新周からは、實際刻すところを見せてもらっており、昌碩の篆刻の本道を、瘦鐵からは、風韻のある刻風を受け取っている。ただ単にそれらの模倣ではなく、彼の天性による美感や詩・書・画などの、文人としての幅広い学芸が彼の芸術の根本となっている。

そして、印以外の金石諸碑（印外資料）を広く求めていることも見逃せない。彼は多くの金石諸碑の模写を遺していることから分かる（7）。

また正平の篆刻の根幹に、古印の模写により研鑽された骨法や風韻が見られる。

山田正平に影響を及ぼした篆刻家



図30 木村竹香「鈴木由印」



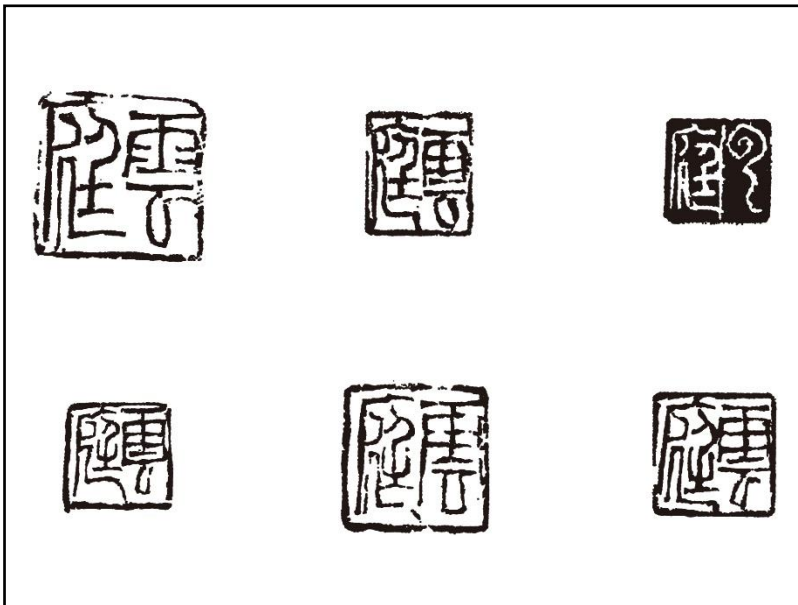
図31 徐新周「華語樓」



図32 錢厓「渾齋」

次に、正平が篆刻を刻す際、いかに工夫をしているか作例を通して見てみたい。書家の赤羽雲庭に刻した六顆の雅号印「雲庭」を比較検討する（図33）。「雲」字の基本形は、縦長方形であるが、下部の「云」部分をそれぞれ工夫して変化させて、多様な表現をしている。①は、説文古文を使用。②から⑥は印篆を用いているが「雲」字下部「云」の表現は、すべて形が相違している。字形・線質に見られる微妙な表情はそれぞれ別趣を醸し出している。

書家赤羽雲庭に刻した六顆の雅号印「雲庭」（図33）



3、作風の変遷

次に、正平の篆刻の作風の変遷を見てみたい(8)。正平の作品は大きく三期に区分して考えられる。編まれた印譜に関連させながら見てゆきたい。

第一期は「萌芽期」(一九一六年、大正五年、十八歳)の時代である。第二期は「独自の作風の成立期」(一九一七年、一九三六年、大正六年、昭和十一年、十九歳、三十八歳)の時代である。第三期は「完成期」(一九三七年、一九六二年、昭和十二年、昭和三十七年、三十九歳、六十四歳)である。

これに関して、実例を基に、詳しく論じてみたい。







第一期を代表する印譜に『梅檀二葉香印譜』(大正三年、十六歳)と『正氣印譜』(大正五年、十八歳)収載「天地正大氣粹然鍾神州」(Y木)(図34)「秀為不二嶽巍々聳千秋」(Y木)(図35)が挙げられる。ここに収載された篆刻は、正方形に近い結構を取っており整齊である。整然とした中に一画一画に強弱の変化を持たせており、単調になっていない。

第二期を代表する印譜に『八遷印譜』(昭和二年、二十九歳)と、『正平陶磁印譜』(昭和十一年、三十八歳)収載「松菊傲霜」(Y木)(図36)「風月雙情」(Y木)(図37)が挙げられる。ここに収載された篆刻は、刻風はより自在で豊かさが感じられる。多様な要素が込められており、独自の篆刻の成立を感じさせる。

第三期を代表する印譜は『一止盧印存』(一帙二冊)(昭和三十八年)に収載された篆刻「白鷗心」(S新)(図38)と「心廣體胖」(Y木)(図39)を例として挙げられる。これらの篆刻は、正平調ともいえる刻風で、構成・線質がこれまでの先人に類例は見られない。雄大で雅美が感じられ、骨太な趣の中に実に繊細な性情が見られる。

筆意に満ちた自然な変化の妙、これが三期の大きい特色である。まさに多様な要素が込められた鉄筆による書といえる。

山田正平篆刻の作風の変遷

<p>第一期『正氣印譜』</p>  <p>図34 天地正大氣 粹然鍾神州</p>  <p>図35 秀為不二嶽 巍々聳千秋</p>	<p>第二期『正平陶磁印譜』</p>  <p>図36 松菊傲霜</p>  <p>図37 風月雙情</p>	<p>第三期『一止盧印存』</p>  <p>図38 白鷗心</p>  <p>図39 心廣體胖</p>
--	--	--

4、系譜

山田正平の系譜は、前節山田寒山「3、系譜」で示したが、高芙蓉をはじめに、山田寒山、山田正平、保多幸三、鈴木千秋への流れが見られる。ただし、いわゆる通常の相伝でなく、それぞれが独特の個性を持ったものである。系譜としての特色を挙げるとすれば、「日本的な雅美」ともいえる作風であろう。同系譜は技法の忠実な継承でなく、その作風は異なっている。先師の作品を学んで消化しているといえよう。これは各自の受容の態度でもあろう。

ここで作品に添って分析してみる。印をつぶさに鑑賞すると、字形よりはむしろ線質に継承があることが理解できる。それは線の揺らぎである。筆の表現を刀で表現している。筆で書くように、刀で刻すことで、これは呼吸の問題である。実に自然である。篆刻は工芸的要素が強く、デザインのとなることが多いが、同系譜の篆刻家たちは、篆刻が書そのものであり、自然でなめらかな動きが見られる。

次に、正平が最も影響が色濃いと指摘される篆刻家は呉昌碩である。両家の「美意延年」の刻印を通して、その美と表現に関して、比較を試みてみたい。(図40)(T中)(図41)(Y木)。正平は若年に呉昌碩と出会い益を受けた。確かに彼の篆刻は昌碩から多大な影響を受けているが、正平独自の作風を形成するにおいて昌碩を消化し、その刻風から離れることが重要であったと思われる。

正平の作風における昌碩との類似点と相違点について述べる。篆刻は印影をもつて鑑賞されるが、刻面そのものが重要である。実はここに根本がある。昌碩は線質が丸みを帯びるが、正平は角ばっている。昌碩は一度線を刻した後、印面の線のあたりを印刀で叩いて丸みをつけている。正平は一刀で刻すことが多い。これにより線の

表現が大きく違っている。「延」字で比較すると一目瞭然であろう。昌碩は線質に丸みがあり、正平は鋭さがある。つまり昌碩は大らかでゆったりとした表現で、正平の篆刻は直截でシャープな線質である。

作品の構成は、昌碩は茫洋とした大らかさを表現しており、正平は緊張感漲る表現に徹している。二家の印の美と表現は相違していると言えよう。

山田正平と呉昌碩「美意延年」印の印影と刻面の比較
(『呉昌碩篆刻硯銘芸珍』(上海呉昌碩紀念館編)による)



図40 呉昌碩篆刻
印影と印面



図41 山田正平篆刻
印影と印面

四 おわりに

本研究において、山田寒山・正平の篆刻の美と表現に関して具体的・実証的に論及した。また、作風の変遷と系譜に関して述べた。そして彼らの篆刻の美の根本に関して検討した。

字法は寒山・正平、両家ともに、現在からみれば、当時の字典・文字学の限界はあるものの、表現として、篆書を理解し習熟し、古今の篆書を十分に咀嚼している。

章法は、印面構成において、表現の効果に力を尽くし、文字の粗密や大小のバランスを考え、それぞれの文字が呼応しており、寒山は簡素に、正平はより濃密である。正平が表現しえた「氣満」に溢れた、雅美で朴訥とした美は、日本篆刻史で見られないものである。

刀法は、両家ともに、優れた感性で「小心落筆、大胆落刀」と何震が述べているように⁹⁾、布字は慎重に、刀を動かす時は大胆に、生きた線で刻されている。一気に刻された線に篆刻の妙味を見る。また、魏錫曾が述べた名言「書は印よりいで、印は書より出ず」のごとく、書と印が混然一体をなしている。

同系譜の祖高芙蓉の篆刻の表現に、「書くように刻していく」がある。

芙蓉の印を考える上で参考になる逸話を紹介しておく。石田元季「風塵隨筆」(『江戸時代文学考説』)の一文による。余延年と初対面の高芙蓉が述べた言葉に、「印章は篆を入れたる上を刻するとおもふ尋常のことなり、似て非なり。刀を以て印面に篆を書くとおもふ心肝要なり」である。

これは、寒山・正平の系譜にある篆刻家に共通する美と表現に係する。つまり、印を刻す時、筆で書いていく如く、運刀するとい

うことで、刻された線が書かれた線にすこぶる近いということである。

また、寒山・正平は、表現の多様化、個性豊かな新生面を開いた。

具体的には、寒山は、何にもとらわれない構図の多様性に、正平は複雑で雄偉な線質にそれは見られる。また寒山における、中国の玉印に似た線質の簡素さは、日本篆刻史の中で評価できよう。特に陶印による字形と線質の自由さは彼の真骨頂で、特筆してよい。正平は、その線質は複雑で金石の強靱さとともに、石材の石質を知り尽くした運刀による多様な表現は、渾穆で悠然たる風格を示している。篆刻史の中で、最も書と篆刻が近似している作家と言える。これが、正平の最大の魅力であろう。印から醸し出される深い情趣は、彼の刀痕を限界まで表現したもので、それまでの篆刻家に見られないものである。彼の篆刻は、豪放雄偉という表現が適しているが、これは、正平が使用した厚刃鈍刀による効果も考えられる。

両家ともに、その美と表現は、日本篆刻史の中で特色あるものである。系譜は高芙蓉一派ではあるが、一つの様式に流されたものではなく、それぞれが独特な刻風となっている。全体に貫かれているのは、学芸に関心を寄せつつ、見識と確かな刀技をもって、非常に個性的なその美と表現を確立した点であろう。

本研究から、彼らには、ある特定の作家や作風の影響では指摘し得ない作風形成の要素があり、独創的で不変の美があることが考察できた。日本の近現代篆刻史の中に位置づけられる美と表現の内容を持つている。これは高い学識とたゆまざる努力を背景として成し得た成果であろう。それは寒山の平正実直な刻風、正平の雄偉で剛毅な篆刻に結晶したと言える。明の沈野が『印談』で述べた「印は小技と雖も、須らく是れ静座読書すべし」、つまり篆刻は小技ではあるが、良書を熟読し、文物を博覧すると、その世界は大きく広がっ

てゆくとの言を体现している。また、篆刻は「方寸の芸術」だと言われるが、この小さな方寸の世界に生気溢れる存在感でもって、独自の美を表現しえた寒山と正平父子は高く評価される篆刻家と言えよう。

【注】

(1) 「山田寒山・正平における篆刻の美と表現に関する研究(Ⅰ)」として、

その美と表現の全貌に関して述べた。『全九州大学書写書道教育研究』第四号、全九州大学書写書道教育学会、二〇二〇年三月)

(2) 「燕尾」とは、線の終筆が二つに分かれる形で、篆刻の表現として避けられることが多い。寒山・正平はこれを多用している。

(3) 『山田寒山手控え印譜』は、山田寒山研究の第二章第一節で説明した。

(4) 篆刻の刀法は、十数種類に細分化されることがあるが、衝刀法と切刀法の二種に大別される。衝刀法とは、刃先を印材に入れて連続して刀を進める刻し方である。線質はすっきりしたものとなる。切刀法は、印刀を印材に突き刺し、小刻みに刀を動かし断続的に刻してゆく刻し方である。線質は古拙な表情となる。

(5) 『寒山新聞』に関して、平成十五年度全国大学書道学会徳島大会において紹介しその価値を論じた。また『国語国文研究と教育』第四三号(熊本大学教育学部国文学会、二〇〇六年二月)において「日本印人研究―明治・大正期新聞資料における山田寒山関連記事見出し一覧稿」と題し、見出し一覧の索引を作成し、より詳細に論じた。さらに「日本篆刻家の研究―山田寒山年譜考―」(『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』第四卷第一・二合併号 No. 一八 九州地区国立大学間連携 教育系・文系論文集編集委員会、二〇一七年三月)において、追加修正した。そして、『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として―【改訂版】』(創想舎出版)(前掲)で取り上げた。これは寒山研究にとって欠くことが出来ない資料

である。

(6) 筆者は小曾根乾堂の研究として、「小曾根乾堂研究(一)」(『修美』第一五巻通巻五三号、修美社、一九九六年一月)、「小曾根乾堂論―篆刻を中心として―」(『書学書道史研究』第七号、書学書道史学会、一九九七年九月)、「日本印人研究―小曾根乾堂と星海―」(『熊本大学教育学部紀要』第五七号 熊本大学教育学部、二〇〇八年十二月)を執筆した。

(7) 正平は印以外の金石諸碑の印外資料を駆使していることも見逃せない。彼は多くの金石諸碑、石鼓文、泰山刻石、琅邪台刻石、戚伯著碑、夏承碑、天発神識碑などを双鉤に取り遺している。

(8) 筑波大学芸術研究科の修士論文において、正平の篆刻作品を編年別に並べた。「第二章第四節『篆刻』第五項、刻印年譜」(『山田正平―人と芸術―』筑波大学大学院修士課程芸術研究科美術専攻修了論文、一九八三年二月)また、図録『山田寒山・正平展』(篆刻美術館 平成四年十一月)では、篆刻作品が、編年別に並べられている。

(9) 「小心落筆、大胆落刀」は、明代の何震(雪漁と号す)が、『続学古編』第十八挙で述べた言である。雪漁は、安徽の人で、徽派の祖と仰がれる。

第二章 山田寒山研究

第一節 篆刻について

一 はじめに

本章は、第一章で論じた山田寒山（安政三〜大正七年〔一八五六〜一九一八〕）の「篆刻の美と表現」について、それに関係する資料・文献を精査し、実証的・具体的に考察するものである。

平成四年（一九九二）は、日中友好平和条約が締結されて、二十周年の佳節にあたる。日本各地で、記念のさまざまな催しが開かれた。その一つとして、読売新聞社主催により、東京江東区にある森下文化センターはじめ、三カ所において「蘇州博物館展」の巡回展が開催され、同館の貴重な宝物が、日本に紹介された。中に、寒山が（図1）、大正三年（一九一四）に、蘇州の名刹姑蘇寒山寺に寄進した新梵鐘（図2）が含まれていた。唐代の詩人張継の詠んだ「楓橋夜泊」で名高い旧梵鐘が日本に流入し、日本人の手により鑄潰された事を悲しみ、寒山が伊藤博文公を壇中総代として新鑄造し、この事業をなしたとげたのである。

また、茨城県古河市にある古河歴史博物館別館篆刻美術館において、平成四年十一月三日より、平成五年一月二十四日迄「山田寒山・正平展」が開催された^{（1）}。十一月二十四日には、東京学芸大学教授小木太法が「山田正平を語る」と題して講演した。さらに同館では、新資料を含む作品図録を刊行した。

本節は、寒山の本領ともいえる篆刻に関して論究するものである。

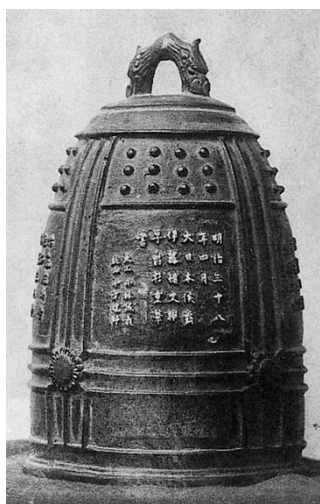


図2 姑蘇寒山寺に寄進した新梵鐘

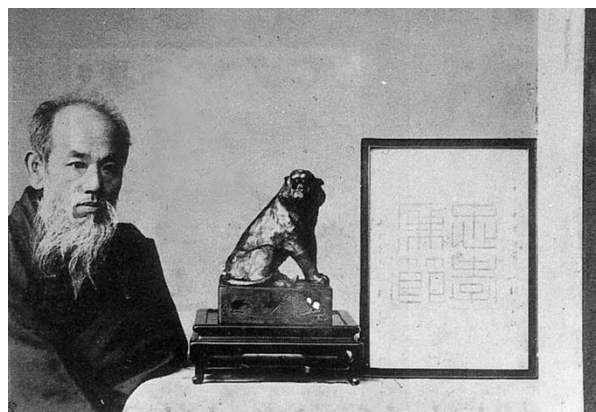


図1 山田寒山と銅印

二 印 譜

山田寒山の印譜を代表するものとして、次に掲げる四種が挙げられる。

- 1、『羅漢印譜』
 - 2、『滄浪閣印譜』
 - 3、『寒山印譜』（一帙八冊本）
 - 4、『寒山印譜』（折り帖四冊本）
- これらの印譜の由来や内容に関して述べる。

1、『羅漢印譜』

山田寒山は、その生涯に実に多数の印を刻している。素材、書体、書風は多様である。中でも羅漢印は、寒山の傑作といえる。それを押印した『羅漢印譜』は、日本における印譜の中で屈指の名譜である。寒山の篆刻について語る時、羅漢印と『羅漢印譜』を欠くことはできない。

羅漢印は、新潟の篆刻家木村竹香が、明治二十四年（一八九一）に、その印と印譜制作を発願したことに始まる。これについての経緯は竹香自身、昭和八年春『竹香居羅漢印譜来歴』（図3）として書き記しており、来歴はこれ以外に山田家に蔵している『竹香居羅漢印譜』（一帙二冊本、明治四十四年七月十八日）の原本と『山雲海月』（卷子本、明治四十四年七月）の二種に記されている。略ぼ内容は同様であるが、文字の異動が若干ある。昭和八年の来歴が最も詳述されたものである。この来歴から以下の事が分かる。

○明治二十四年

木村竹香は、偶ま感到に触れ、羅漢紐印十六顆を製し、斯道の名家

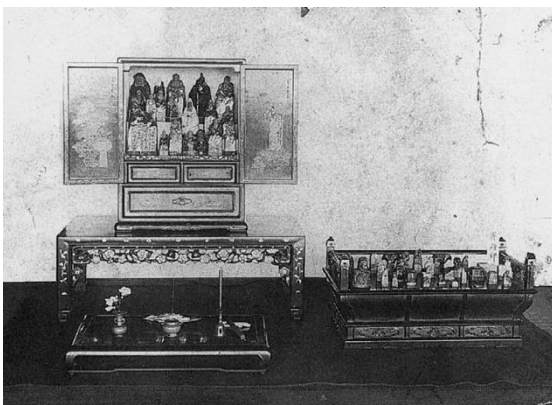


図4 竹香居羅漢印宝龕



図3 『竹香居羅漢印譜来歴』

にその篆刻を請い、以て印影を同好の志に頒つことを発願する。
鈴木八十吉、羅漢印の陶材用土を調理する。

○明治三十年夏

島田亮齋、十六羅漢像と、観音、文殊、布袋の三体を製鈕する。

○明治三十六年

山田寒山刻す。

○明治三十六年天長節日

瑞光禅寺に於て、星見天海禅師の修行により、開眼法要式が举行される。山田寒山礼拝す。

○明治三十九年八月十五日

青山碧山漆塗の印龕を完成する。(印龕後部の刊記による)

○明治四十一年一月

白山公園偕楽園に於て開龕式を举行する。

○明治四十一年四月三日

白山公園偕楽園に於て、羅漢印譜発行式追吊会を兼修する。

○昭和七年

回向院に於て、羅漢印譜中諸名師と、篤志賛助員諸名士のために謝恩会を勤修する。

ここで、羅漢について触れておく。『佛教語大辞典』(中村元著、東京書籍、一九八一年五月)による。十六羅漢名図は『図説佛教語大辞典』(中村元編著、東京書籍、一九八八年二月)による。

正法を護持しようと誓った十六人の羅漢。各自は多くの眷族をもち、供養の時は率いて集まるという。『法住記』の所説で、漢訳されて以来、おもに禅宗寺院で造像され、神仙のようなすがたが表現された。

十六羅漢名図

十六羅漢	
實度羅跋囉脩闍尊者	Pindolabharadrāja (西瞿陀洲、一〇〇〇人)
迦諾迦伐蹉尊者	Kanakavatsa (加濕弥羅、五〇〇人)
迦諾迦跋釐闍闍尊者	Kanakabharadrāja (東勝身洲、六〇〇人)
蘇頻陀尊者	Subinda (北俱盧洲、七〇〇人)
諾距羅尊者	Nakula (南贍部洲、八〇〇人)
跋陀羅尊者	Bhadra (耽沒羅洲、九〇〇人)
迦哩迦尊者	Kālīka (僧伽茶洲、一〇〇〇人)
伐闍羅弗多羅尊者	Vajraputra (鉢刺拏洲、一〇〇〇人)
戎博迦尊者	Jivaka (香醉山、九〇〇人)
半託迦尊者	Panthaka (三十三天、一三〇〇人)
囉怛羅尊者	Rāhula (畢利颺瞿洲、一〇〇〇人)
那伽犀那尊者	Nagasena (半度波山、一二〇〇人)
因揭陀尊者	Angaja (広脇山、一三〇〇人)
伐那婆斯尊者	Vanavāsin (可住山、一四〇〇人)
阿氏多尊者	Ajita (鷲峯山、一五〇〇人)
注荼半吒迦尊者	Cūḍapantaka (持軸山、一六〇〇人)

十九体の陶像は、青山碧山が明治三十九年に製作した漆塗印龕（図4）に収められている。印龕の扉は、五世浜村蔵六が「瓦礫放光」「金石結縁」と書いたものになる。左右と上面はすべて象眼塗で文様が彫られている。裏面に碧山の刊記、「明治三十九年丙午中秋望後製於東台山麓懷古琴堂、時経星霜四百有七甲子碧山小仙」がある。また、この印龕は、さらに木箱に収められており、正面扉に、瓦当風に「誰家無明月海風」と刻されている。印龕内側は、三段に作られており、上段に羅漢陶像が置かれ、中段に引き出しが二個、下段に一個ある。その前面も象眼塗がされている。この印龕自身、重要文化財級の物といえる。

十九体の陶像は、羅漢像第一「賓度羅跋囉惰闍尊者」に、寒山の側款が刻されている。

「癸卯秋日舟江客中応需篆十六羅漢尊者之陶印為竹香居主人雅鑒姑蘇寒山田潤」また、陶像の多くは「亮齋」と名が記されている。この十九体の陶像も、印龕同様優れたものであり、寒山の刻と、竹香の編んだ印譜と併せて「四妙合一」と言えるものである。

『羅漢印譜』は、全部で四種存在する。便宜上左記のように名称を附す。

- ① 『竹香居羅漢印譜』（原本）
- ② 明治三十七年刊『羅漢印譜』（一帙一冊本）
- ③ 明治四十一年刊『羅漢印譜』（一帙二冊本）
- ④ 大正十四年再刊『羅漢印譜』（一帙二冊本）

① 『竹香居羅漢印譜』は、山田家に蔵するオリジナル本（図5）である。『瓦礫放光』（縦一八・三〇糎、横一三・七五糎、折り帖、表三四枚貼り込み、裏三四枚貼り込み）と、『金石結縁』（縦一八・三〇糎、横一三・七五糎、折り帖、表三四枚貼り込み、裏三四枚貼



図6 『瓦礫金石帖』

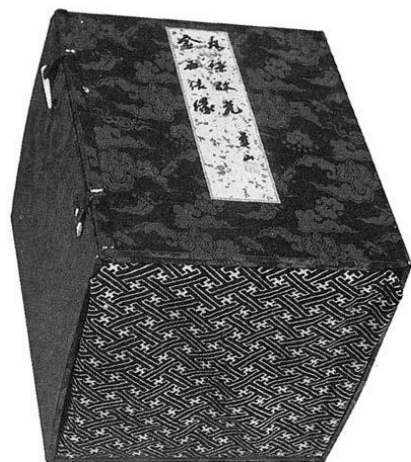


図5 『竹香居羅漢印譜』（原本）

り込み)から成っている。

これは桐箱に、一帙二冊仕立てで収められている。桐箱蓋の表に寒山による「羅漢印譜」の墨書があり、その裏に、「竹香居主人曾編羅漢印譜当代名家之筆跡盡存此中、乙卯八月舟江客中応土人需、寒山老人誌」と刊記がある。これは大正四年(一九一五)、寒山六十歳の時である。

二冊を収めた帙題簽は、寒山が「瓦礫放光金石結縁」と墨書している。また、『瓦礫放光』の表の題簽を寒山が「瓦礫放光」と、裏の題簽を前田黙鳳が「瓦礫放光」と書している。「金石結縁」も、寒山と黙鳳の手になる。

次に同譜の内容を見てみたい。

『瓦礫放光』は、一九顆の羅漢印の名目を寒山が刻した印影と、その一顆づつに対して、秋川古香の羅漢画像と、前田黙鳳の羅漢名目と、鴻雪爪の讃を一葉に記したものとが組となっている。その後明治三十九年、偕楽館において羅漢の開龕式が挙行された際、賦詩刻印が行われたが、これが別に『瓦礫金石帖』(図6)として一冊にまとめられている。折り帖に三六枚の貼り込みと書き込みとがある。縦二〇・二五糎、横一四・五〇糎。これらの賦詩刻印のほとんどは、明治四十一年刊本では『瓦礫金石』の附録として収載されている。『金石結縁』は、『瓦礫放光』での鴻雪爪の讃に対する賦詩刻印が諸名家によりなされたものである。

まず、小野湖山の表題、次に山田寒山が伊藤博文に刻した三顆の印、伊藤公による「金石結縁」の題字があり、西園寺公望題字、矢土錦山序、杉聴雨題画、永坂石埭題画、榎本梁川題字、山田寒山題詩画、田能邨直人題字、阿部鷲峰題字と続く。

次に諸名家による賦詩刻印が収載される。「雲出水湧」語に対して、永坂石埭の詩と中井敬所の印、「燈々無盡」語に対して、森槐南の詩

と益田香遠の印、「法无生滅」語に対して、岩谷一六の詩と小波の俳句と河井荃廬の印、「墻壁瓦礫」語に対して、高島九峰の詩と山本雨石の印、「誰非法身」語に対して、勝間田鉄琴の詩と宗星石の印、「雷動風行」語に対して、野口寧齋の詩と田口逸所の印、「背面動人」語に対して、土屋香国の詩と五世浜村蔵六の印、「六塵并人」語に対して、永井来青の詩と岡邨梅軒の印、「我以道眼」語に対して、大久保湘南の詩と広川湖山の印「形与道一」語に対して、岩溪裳川の歌と一世岡本椿所の印、「〇乎妙哉」語に対して、小室屈出の詩と山本拝石の印、「空山無人」語に対して、手島海雪の詩と大橋醒仙の印、「花開水流」語に対して、本田種竹の詩と道香禅師の印、「有覺無修」語に対して、西岡宜軒の詩と賀谷松塘の印、「默座者形」語に対して、高津柏樹の詩と郡司梅所の印、「空飛在神」語に対して高津柏樹の詩と賀谷松塘の印、「默座者形」語に対して金井金洞の詩と山本寸艸の印、「春風楊柳」語に対して股野藍田の詩と高森碎巖の印、「阿耨多陀」の語に対して、伊藤鏡雨の詩と富中天池の印、「前三後三」語に対して、円覚宗海の詩と木村竹香の印、と順次収載される。続いて、前田黙鳳の書と井内竹仙の画がある。

②明治三十七年刊『羅漢印譜』は、縦二五・五〇糎、横一二・九五糎、鴻雪爪の表題一枚と五五丁から成る。

内容は、原本と略ぼ同様であるが、原本は随時補訂され明治三十六年から明治四十四年迄のものが収められているため、当然明治三十七年刊本には載せられていないものがある。

この印譜から、二、三考えられることを記してみる。

「金石結縁」は、伊藤博文の命名した題であるが、「金石契」との言葉もあるように、金石をもつて交友を結ぶことを言うのであろう。『金石結縁』の矢土錦山の序に「書譜也、画譜也、印譜也、具に三妙を備ふ」とあるが、当時一流の文化人が、こぞって参加したこの

ような印譜は、他に類例をみない。木村竹香の執念のなせる事業であり、山田寒山との交友の広さを物語る。

また、五世浜村蔵六は『金石結縁』に序を寄せている。

西川寧は、これは蔵六の名をかりた河井荃廬の文と書であろうと推察している。〔河井荃廬の篆刻〕一九七八年五月、二玄社。この中で「瓦礫放光累々十八枚雖僅成于一手一日之間寒山畢生之力歴々可見渾融秦漢唐宋元明清及皇朝各式而為我有神化幻妙一變古法」と述べる。更に、中井敬所は『瓦礫放光』の題詞において「瓦礫放光印々見示篆体刀法之妙簡老逆逸無一筆不占最上乘」と述べる。両者の言は、同譜の評語となっている。

③明治四十一年刊『羅漢印譜』は、一帙二冊『瓦礫放光』（縦二〇・二〇糎、横一二・一〇糎、鴻雪爪の表題一枚と六五丁からなる、内一丁は印箋のみ）と、『金石結縁』（縦二〇・二〇糎、横一二・一〇糎、鴻雪爪の表題一枚と、六三丁からなる。内一丁印箋のみ）より成る。

同譜は『羅漢印譜』の完本である。『瓦礫放光』は、原本と『瓦礫金石帖』を併せたものである。また『金石結縁』は、原本に次のものが加えられたものである。筏喻禪師題画、岩谷一六題字、伊東碧海題字、東久世竹亭題画、服部五老題画（これは『瓦礫金石帖』にある）、五世浜村蔵六序等である。

『羅漢印譜』は、この明治四十一年本をもって完成する。

④大正十四年再版『羅漢印譜』は、山田正平が寒山の七回忌追善供養のために、明治四十一年刊本を一五〇部再刊したものである。

2、『滄浪閣印譜』（図7）

本印譜は、わずかに二冊作成された稀覯本である。寒山が伊藤博文より依頼された九顆の印影に寒山自身釈文を附している。原鈴木

である。

題簽は寒山の墨書になる『滄浪閣印譜』である。見返しに徳富蘇峰が「寸鐵殺人」と墨書している。印影の後に、寒山の刊記「右自己亥歲晚至庚子仲春閣製、寒山田潤」がある。次に永坂石埭の跋文を附す。

古人論画云、従有墨処求法度、従無筆処求神理、更従無墨処参法度、従有筆処参神理、刻印亦然、寒山師此滄浪閣印譜僅々数章、深得其口矣、所謂擬議神明進于技者耶、己酉九月十日、石埭老人周栻志。

続いて、同印譜の成る由来が、当時の『やまと新聞』（年月不詳）に掲載されているので引用してみる。これは寒山談によるものである。

滄浪閣印譜の由来

明治三十二年の冬、□て伊藤公より依頼された印材四個が仕上ったので、大磯の滄浪閣に公を訪ねた時、私は前日此所へ来る途すがら眺めた富士を觀るの詩を、即席筆を執って印箋に記し、之を公に差上げた、其折の私の詩は、「暁天離野寺、矯首聽林鐘、古鏡当心照、寒山對雪峰」、公は早速和韻を認められて、「寒山存旧跡有日復洪鐘、問法天台上、応攀第一峯」。其時公は私に向かつて、「自分は未だ刻まぬ印材を所有して居るが、貴公に是非篆刻して貰いたい」と云われた。そこで其印材を拝見すると、実に立派な水晶や鶏血石である、珠に水晶の印材は宮殿下から拝領の品であるから念を入れて呉れいとの事であった。

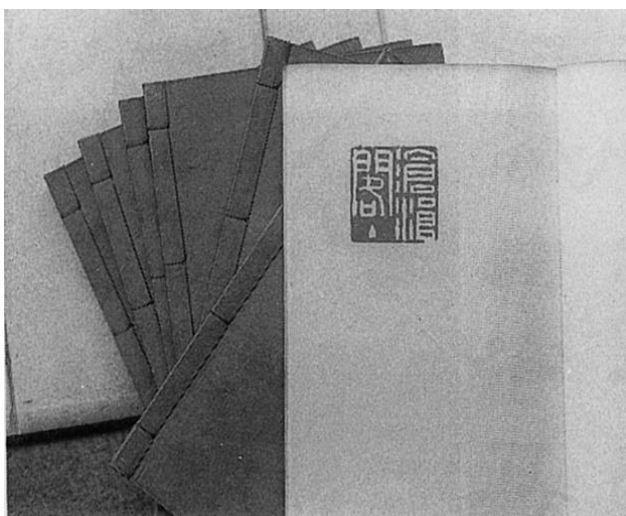


図9 『寒山印譜』（一帙八冊本）



図7 『滄浪閣印譜』

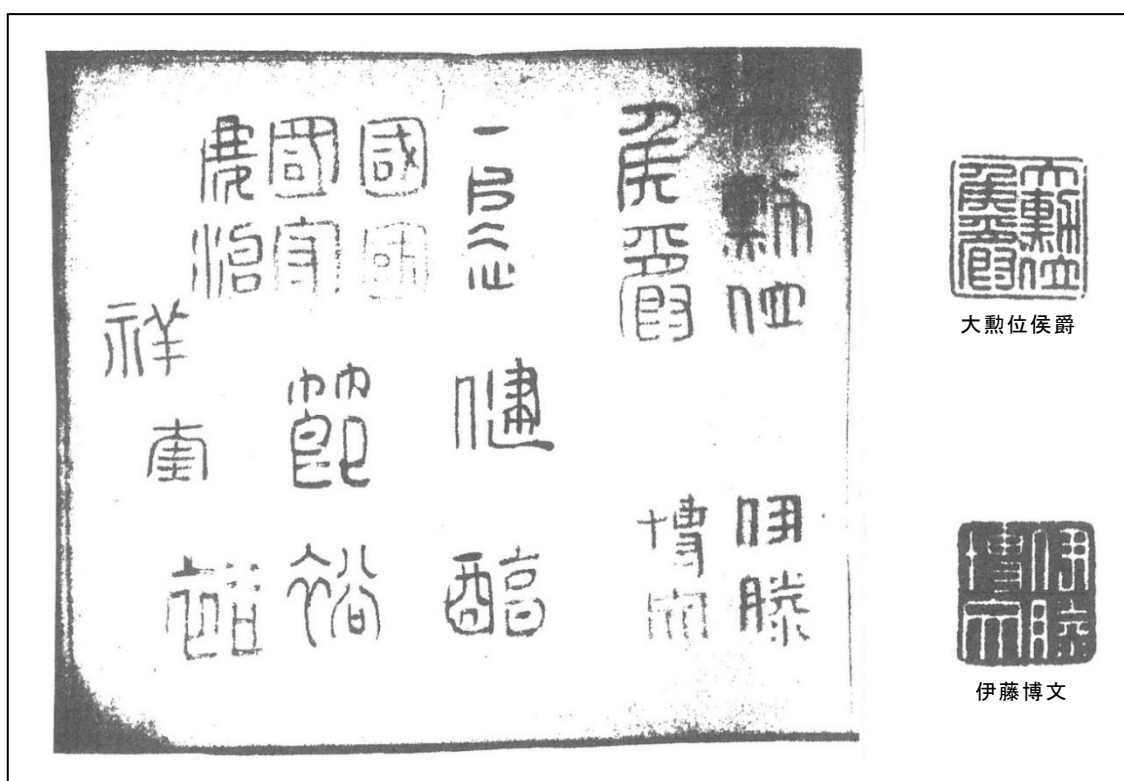


図8 山田寒山刻伊藤博文用印と印稿

私は命を受けて直ちに仕事に着手したが、水晶などは余程注意を拂って取扱はねばならぬので、出来上るまでには同年の冬から翌三十三年の春三月まで凡そ四ヶ月間を要した。そこで印譜を二部作って公に伺候すると、公は殊の外悦ばれて、其際黄金若干と印譜一部を賜わって、冒頭に「鐵心石」の三字を記され、「一体ならば鐵石心と書く処なれど特に恚う記したのは、之を仕上るまで、君の心が専念鉄筆と石の間に在ったからじゃ」と微笑まれた。

寒山は伊藤公に多くの印を嘱された。『滄浪閣印譜』所載の九顆以外にも数顆見られる。「大勲位侯爵」「伊藤博文」(図8)や「指揮若定失蕭曹」「万古雲霄一羽毛」「勲章頻看鏡行藏独倚楼」。また、『伊藤博文用印譜』にも寒山の印が数顆載せられており、伊藤公と寒山の並々ならぬ親密さが理解される。

3、『寒山印譜』(一帙八冊本)(図9)

山田家に蔵する一帙八冊本から成る手控えの稿本鈴印譜である。縦一六・六五糎、横一一・一〇糎である。序跋はない。三顆組の姓名印を中心に姓名字号印を編んだ譜で、一葉に一〜三顆押印している。

第一冊	三二印	第二冊	三二印
第三冊	五八印	第四冊	十三印
第五冊	六〇印	第六冊	九〇印
第七冊	二九印	第八冊	八四印

4、『寒山印譜』(折り帖四冊本)

山田家に蔵する折り帖に押印された手控えの稿本鈴印譜である。四冊から或る。一丁に三顆から七顆押印されている。内容は多種にわたっている。

第一冊	縦二八・四〇糎×横八・七〇糎	一六五印
第二冊	縦二三・八〇糎×横九・一〇糎	一六印
第三冊	縦二八・六〇糎×横八・九〇糎	一三九印
第四冊	縦二八・四〇糎×横八・七〇糎	一四九印

三 篆刻を始めた動機

山田寒山が篆刻を始めるにあたっての理由はいかなるものであったのだろうか。

小僧うちから篆刻が好き、其禪師の血脈に押してある印に、誤刻あると批難してゐるのを聞き、篆刻を研究し、雲水を幸に改刻せんに志す。(『寒山新聞』(新聞名等不明))

これが、寒山自身が語った動機である。また寒山は、陶印をよくしたが、陶印を始めたきっかけについても述べている。

これは明治四十年十月『東京日日新聞』に「百人一話―山田寒山氏の篆刻流派談―(下)」として載せられたものである。

然し自分の楽焼は、別に伝統もなく、師授もなく、全く寒山流の楽焼だ。昔京都に玄玄齋と云ふ陶印師があつて陶印を拵て居たが、陶印は先ず印材を焼き、其に彫って又焼くのだから、篆刻と焼物との両方が出来なければ遣れぬ所から、遣手が少な

い、自分は此の陶印を試み様としたのは、名古屋で竹田の焼た急須一つ茶碗五つを見たのが動機で、つひ楽焼家に成った。

以上が、寒山が篆刻に手を染めることとなった契機である。

四 系譜

山田寒山がその生涯において益を受けた、また何らか関係ある篆刻家として三人が挙げられよう。小曾根乾堂⁽²⁾、福井端隠、そして呉昌碩⁽³⁾である。

寒山は明治七年(一八七四)、十九歳の時、長崎に赴き、印人乾堂の門をたたき、篆刻を学んだ。乾堂とはどのような人物であろうか。

小曾根乾堂(文政十一〜明治十八、一八二八〜一八八五)名は豊明。字は守辱。乾堂と号した。通称六郎また栄。長崎の人。父も文雅の趣味あり。乾堂は書を錢少虎らに、画は陳逸舟、鉄翁に就き、篆刻は大城石農に学んで若くより内外に名声を馳せた。清人も商舶に託してその刻印を求めたほどである。嘉永年間、乾堂印譜を編み、篠崎小竹、草場佩川、広瀬淡窓、河野鉄兜らが序を寄せた。自らも「興到らざれば即ち刻せず、材佳ならざれば即ち刻せず、書匠画工のためには即ち刻せず」云々と述べ、古体を宗とする雄渾な刀風を確立した。明治四年石材に国璽を刻し、また伊達宗城に従って清国と通商條約締結に与った。小曾根町を拓き郷土の発展に盡した。明治一八年十一月二十七日没。年五十八(水田紀久『書道全集 別巻Ⅱ 印譜 日本』(前掲))

また、寒山は、明治十二年(一八七九)、二十四歳の時、伊勢の篆刻家福井端隠に入門して芙蓉派の篆刻を学んだとされる。端隠は、水田紀久編になる「続補日本印人伝」(『日本の篆刻』(前掲))に次のようにある。

福井端隠 初名武熙。榎本氏。福井氏を嗣ぎ末彰と改む。あざ名は孔彰、別に凹隅・雨洗・緑雪書屋と号す。通称帯力。正四位下外宮権弼宜。下久保に住し為田に移る。藪内流茶道をも善くす。明治十八年(一八八五)八月二十二日没す。八十五。息、水琴、名は末経、あざ名士明、一に聴雪と号す。通称若狭。また篆刻を善くす。

次に、寒山は明治三十年(一八九七)に中国に渡り、呉昌碩に面会している。

明治二八年に初めて東京に出で、日下部鳴鶴の所で、清国蘇州の人呉昌碩の刻した印を見て、其風を慕い日下部に聞いた所が、当時上海に巡査を奉職して居るので、日下部の紹介で、自刻の印影を郵便に附して教正を乞いに送った所が、幾枚の附箋がされて返されて来たので、大に失望して、日下部に相談。すると、日下部の云うには、それは上海から他へ転任したのであろう。戸籍が不備であるから手紙では届かぬ。自分で出かけて会って来た方がよいというので、三十年の秋渡清しました。其時に呉倉碩は、警視という様な職に就いて居られました。私の訪います時に、「海内知音少、天涯忽訪君、欲談千古事、独步万山雲」という小絶と、外に墨竹を持って行きました。其墨竹の拙画の上へ「羊毫画竹寒山子、一日不可無比君、歳晚姑蘇

一相見、喜極同看寒山雲」という平仄違いの詩を題して返されました。平仄が違って居っても、平気で一向気に介して居る風が見えません。確に規矩に出でて規矩の牽束する所とならぬ、一種の仙氣を帯びて居る人であります。其篆法は純粹の古体を奉じ、其上仙氣を加味しているのです、何うも古今に独歩して居るようです。『寒山新聞』（新聞名等不明）

寒山はこの時、呉昌碩から篆書五言聯「騏驎生絶或、鸞鳳本高翔」を贈られている。また『缶盧詩』も同時に贈られており、その表紙には「大清光緒徐月、日本詩人寒山子薄遊吳下踏雪訪別時贈此、苦鉄」とある。印は朱文方印「缶記」である。寒山は昌碩に深く傾倒しており、正平に「篆書はこの風を学ばよし、また旁書きの行書については、この筆使いは到底日本人にはやれぬ」と述べている。また、「百人一話」記者（二）（前掲）では次のように言う。これは、寒山の呉昌碩観ともなっている。

所が、近頃支那に呉昌碩と云ふ人があつて秦漢以上の印を作る。周あたりが其ねらう所であるらしい。去れば之を秦漢以来を取った芙蓉派に較べると、実に太古印とも謂ふべきもので、昨今は此の風を遣るものがぼつ／＼ある。実は最新派、新舶来派であるが、其印風から云へば太古体で、今は之を古体と称し、芙蓉派は、却て近体と云ふことに成った。此の缶に日本から往つて門人と成つたのは、京都の桑名鉄城が最初で、明治廿二三年か四五年頃、往つて之に学び次は自分が二番に入門した。自分分は、明治廿八年日下部鳴鶴の処で頗る面白い印を見誰の作であるかを問ふて呉昌碩の手に成つたことを知り、上海に居ると云ふから、郵便で印を送つて添削を乞ふたが、呉の宿所が分か

らなくて郵便が返つて来た。其処で大に困つて居たが、明治三十年渡清の時、漸く尋ねて入門したのである。次に河井仙郎が往き、次に濱村蔵六が入門し、其印風を学び、現に桑名、河井、濱村三人は、此の古印派を以て立つて居る。自分も勿論此の風を学んだが、矢張り芙蓉派を本領として居る積りだ。缶は篆刻ばかりでなく、書も画も立派に出来、近頃印界の人物である。

このように、呉昌碩に相当心酔していたようである。ただ、彼は昌碩の印風を好みながらも「自分も勿論此の風を学んだが、矢張り芙蓉派を本領として居る積りだ」と語っている。

三村竹清は「伊勢と篆刻家」『三村竹清集五』青裳堂、一九八三年）において、松木五峰⁴から聞いた話として次の事を紹介している。

山田寒山も端隠門の様に聞いてゐたが、五峰翁の話では多分松阪の刀根端宜にでも就かれたかといふ事であつた。端宜も端隠門かと思ふ。

また、第一章第二節4、の系譜で述べたように、寒山本人の言説から、その系譜は高芙蓉につらなる篆刻家とみることができよう。事実彼の温雅にして和風な作風は、福井端隠、そして端隠の師小俣蟬庵に影響を受けている。寒山は日本印史の中で、芙蓉の系譜にある代表的篆刻家として位置づけられよう。ただ彼は、博く学の吸収にとめており、自分の学系以外からさまざま学び取っている。

五 学 書

山田寒山は篆刻をどのように学んだのであろうか。その手がかりとなる摹刻と仿刻がある。両印とも漢印であり、寒山は漢印を学んだ事が理解できる。「鎮邦印」(図10)は『印文学』第二一号に掲載された寒山の漢印の摹刻である。「吉福」(図11)は、寒山の漢印の仿刻である。これは『北越日報』(明治四〇年四月二〇日)に掲載された。

「鎮邦印」の刻は緻密で、彼の篆刻は、漢印からその布置の妙を得ていることが分かる。寒山は、漢印の芸術性を評価し、その風韻を宗としたのであろう。



図10 漢印摹刻「鎮邦印」

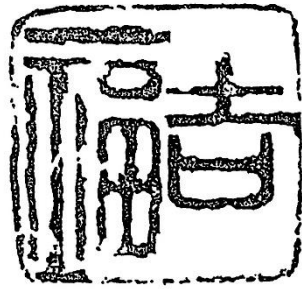


図11 漢印仿刻「吉福」

六 篆刻詩

山田寒山は、詩人としても当時名を成していたが、唐代の僧寒山

の遺響とも称するものである。

彼は詩や詩稿を多く遺している⁽⁵⁾。ここでは篆刻に関する詩を引いておく。

○自題瓦礫放光癸卯天長節

鉄筆伝宗旨、寒山独歩風、寸心千万古、文字本来空

○西游小吟

礼円光大師墓、入一心院、同游日、此寺有高芙蓉墓、大悦、問寺主、一基断碑、苔蝕不可読、愴然有感、華頂山深处、青苔三尺碑、清風明月外、不許世人知

○寒山三不刻

無詩者不刻、無洒者不刻、無錢者不刻

七 丁未印社の設立

明治四十年(一九〇七、丁未)、五世浜村蔵六、一世岡本椿所、河井荃廬、初世中村蘭台、山田寒山の五人は「丁未印社」を結社した。翌年三月、印学会規約を頒布する。「丁未印社」は、前期の五人が正会員となり、近時篆刻の流盛を機とし、一層の発展を謀り、並に潤規を設けて弘く篆刻の需に応ずるための合同結社である。一世岡本椿所の所に事務所が置かれ、篆刻界の錚錚たるメンバーが集まった。潤例が、三村竹清の「篆刻料の話」(『三村竹清集五』前掲)にある⁽⁶⁾。

丁未印社潤例

篆書揮毫	篆刻評正	印章鑑定	玉印	金印	晶印	銀印	銅印	牙印	木印	石印
			寶石同		磁同				竹同	
										五分以內 一寸以內
面魏	每件金	每件金	每字金	每字金	每字金	每字金	每字金	每字金	每字金	每字金
	五拾錢以上	壹圓以上	五圓以上	四圓以上	貳圓五拾錢以上	貳圓五拾錢以上	貳圓以上	壹圓五拾錢以上	壹圓以上	壹圓五拾錢以上

「丁未印社」は、篆刻家の育成や、印学の啓蒙発展に寄与したところ大なるものがあつた。

八 篆刻料について

山田寒山は、明治二十一年（一八八八）、三十三歳の時最明寺の住職を退職してから、生活費は売芸により得ていたものと思われる。中でも篆刻はその中心といえるものであったろう。三村竹清は「篆

「刻料の話」の中で、寒山の潤例を挙げている。

寒山鉄筆化縁

曾テ清国ニ遊ヒ蘇州寒山寺住職ノ奇縁ヲ得テ帰朝　以来風流諸
公ノ贊助ヲ蒙リ我日本東京ニ於テ同寺別院草堂ヲ建設シ併セテ
仏前常什ノ寒山印譜ヲ編製シ以テ同人翰墨ノ勝縁ヲ結ヒ永世風
流ノ佳名ヲ伝ヘンコトヲ欲ス左ノ法ニ依リ御結縁アラシムコトヲ
敬テ白ス

東京市下谷区下谷町一ノ二三橋東へ入人

寒山寺住職 山田寒山

衍
單

一石印貳枚 金壹円

金壺円到達ノ日ヨリ十日以内二左ノ印章二枚ヲ郵
送呈上ス

一印章二枚 印材支那寿山石獅子鈕字篆書七字以內トス

并記

寒山鉄筆定規

一金銀銅玉水晶寶石類 各一字刻料金貳円

一陶磁牙竹乾漆香木類 各一字刻料金壹円

一鷄血白黃蠟壽山石類 各一字刻料金五拾錢

寒山篆刻潤規

金銀銅玉水晶印 一字報酬金五円

蠟石象牙香木類 報酬一字金三円

銅印一種者、寒山独特之合金、黃銅、雨雪點金、故不要材

料、他皆要材料

大正二年壹月改正

東京下谷区下谷町一丁目一番地 寒山寺

九 『印章備正』の校刊

山田寒山は、北越の富取益斎の著した『印章備正』を補正校勘し、大正二年一月五日に民友社より発行した⁽⁷⁾。寒山の序に次のように言う。

近時文芸の昌運に際し、篆刻に志すもの亦日に多きを加へたりと雖、そが簡便切要なる指針の書乏しきを以て、学者往々途徑に迷ひ、怪詭に趨る、予毎にこれを以て斯道の恨事と為す、本書は益斎富先生の著にして、篆刻家の座右に無かる可からざるものなり、もと入門の士に非ざれば敢て伝授謄写を許さざりしが、現今の状勢に鑑み、永く秘籍と為すに忍びず、茲に同志の賛助を得て校正刷印し、世に公にすることゝせり、学者もし此書に拠りて法式を尋求せば、庶幾くは印章の一路また邪曲に陥らざるべし

大正元年十一月 寒山 山田潤しるす

また、三村竹清は、「五適先生杜激伝」(『三村竹清集』五、前掲)で以下のように述べる。

処が外に印章備正といふ書が七巻、これも写本で伝はつてゐる。が殆んど徴古印要と内容が同じで、北越益斎富鴻公範著となつてゐる。これは近年山田寒山翁藏本を以て公刊した。なぜ徴古印要を採らなかつたか、或はこの印章備正の方が多少節略の気味で、簡便であるから採つたといふ説もあれど、剽竊では無いかといふ疑のあるものを、公刊するはひどいと言ふので、

大正四年二月鳶魚三田村君が国書刊行会の雜藝叢書の一へ収めて刊行した。其印章に就ては山田清作君が大層骨を折つて集古印譜に拠つて校正せられたと聞いてゐる。両書を比較すると大同小異で文章まで同じ所が多い。双方の目を挙げ文章を抄出するのであるが、両書共に已に活字本がある以上煩きを避けてこゝでは載せぬ。唯印章備正には末に印章繫説として古体論今体論といふ短篇一章を附してゐるが、寒山本にはこれが欠けてゐたと見えて、公刊本には無かつたと思ふ。

寒山は、大正七年、越後で不明となつていた富取益斎の郷貫を探索し、その宗家富取芳谷、中村口吉翁を招し、その菩提寺たる常昌寺に法要を営んだ。その折の寒山の偈に、「印章備正待君成、斯道從之天下行、一炷心香拜墓石、南無妙法蓮華經」とある。

尚、『印章備正』の写本は、山田家に藏されている(図12)。

十 寒山の使用した字書

山田寒山は、校字に次の字書を主として使用している。これは山田正平令夫人喜美子様から生前お伺いした。

『偏類六書通』(全二冊)

修本(図13)

伊勢 古森厚孝徳元重

十一 後進の育成

山田寒山の主な弟子として乙川大愚⁽⁸⁾、山田正平、北条卍山等が挙げられる。ここでは前二者を取り挙げる。



図 13 『偏類六書通』



図 12 『印章備正』写本

乙川大愚は新潟宗現寺乙川文獅の弟子で私の法兄である。寒山が師匠の好意で宗現寺滞錫中、正平と共に篆刻を学んだものである。正平はその後寒山の養子となつて喜美子夫人と東京寒山寺に住居を構えていたが、大愚は永平寺に修業に行き其後上京駒沢大学の聴講生になり、縁あつて津川の正法寺に住し、寺務の余暇に篆刻や、文人画、篆額などを趣味として打込んでいた。だが趣味や道楽の域に止らず立派な作家であつた。作品としては「篆刻般若心経」(図14)「三同契」の印譜があり「観音経印譜」は石に刻らなかつたが、朱筆の配篆は未完のまま和冊に綴られて遺されている。四六時中酒盃を離さず、同室で寝る

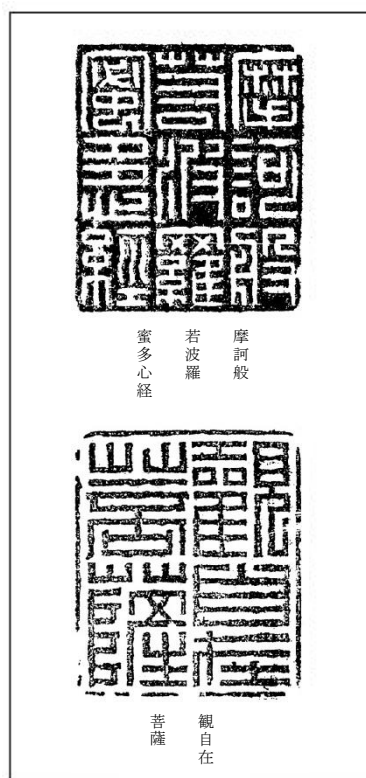


図 14 乙川大愚『篆刻般若心経』

乙川大愚は、彼の『篆刻般若心経』(三圭社)(図14)の三井峡江の「出版の言葉」によると、禅宗の正法寺の僧侶であり、山田寒山の衣鉢を承継した印人である。
また、新潟法来寺の住職であつた今川文暁は、「印人」正平・大愚「画人」靈山の想い出(『いしぶみ』第三号、新潟拓本研究會、一九七五年五月)で次のように言う。

とかん声雷の如く眠れるものではなかった。鯨飲六十歳、技いよいよ枯淡に入らんとする時、惜しい生涯を閉じたが、交友としては磯野靈山、竹工家飯塚琅玕斎、板面の棟方志功などみな大愚の印を愛用、作品に光輝を放たしめたものである。その縁で私もこの三人を知り、その風格にもふれ得たことはいい思い出になっている。

『篆刻般若心経』を仔細に見ると、章法や刀法が実に寒山と酷似している。

次に、正平は新潟で篆刻家本村竹香の次男として、明治三十二年（一八九九）に生まれた。正平は、大正七年（一九一八）に、寒山の養嗣子として寒山寺に入り、長女喜美子と結婚することとなる。正平は、竹香と寒山の関係と、彼が上京することとなるいきさつを「会津先生と私」『書品』七九号 東洋書道協会 昭和三十二年四月）で述べる。

この辺で私が山田姓になるについての由来の話に入りたいが、その前に、師でもあり岳父でもある寒山翁と実父竹香との関係を少し、述べねばならぬ。寒山師の新潟への初游は明治三十六年で私は幼少で殆ど記憶とてない。

その折実父竹香の依頼で羅漢鈕の大陶印十九顆を篆刻し、それが中井敬所はじめ当時の印壇で寒山一生の傑作と賞賛され、更に竹香老人の発願でこの印を主体とし当時の名流、詩人、書画家、印人八十余家の題跋を附し、金石結縁、瓦礫放光、上下二冊の墨集を成さんの企てをなし、竹香献身十年の努力が結晶して新潟でその羅漢印譜が刊行出来たのである。

このため寒山が竹香に与へた手簡三百二十余通。印譜集録の名

家は、伊藤、西園寺、槐南、寧斎、敬所、香遠、荃廬、鳴鶴、一六、黙鳳と云った人々を網羅し、寒山翁なればこそ、また竹香老人を得ればこそその感を深くする。

（中略）竹香老人は来游の五世蔵六、初代蘭台の至芸をきわめて尊重し幹旋も至らざるなしで、交游もここまでいたればの嘆も覺えず出る位であるが、寒山翁に対してはまた格別でほとんど心を傾けた感じである。

私の物心ついた頃は蘭台やうやく病篤く、蔵六すでに世を去り、寒山独り活躍の最中で、何かにつけ来信もあり、坐客との話題にも日として出ないこともない位で、私の十五から始めた、たどたどしい篆刻もいつしか寒山和尚の目に入り是非出京しろと矢の催促となった。私の実兄は水産学校だし父は私を手離すのはなはだ躊躇したが、ついに十六才の初夏上京し、上野の停車場には翁が迎へに出て居られ上野の山下忍ぶ川のほとり寒山寺裏の者となった。

寒山は、大正七年（一九一八）、正平が二十歳の時没したが、正平の最も初期の印譜『梅檀二葉香印譜』や、『正氣印譜』には、多少影響が見られる。

ただ、正平は寒山から寒山の人間関係、つまり寒山をめぐる人達を継承したといえる。この事は、正平の生涯を思うにつけ幸運に恵まれたと思われる。

十二 「竹香居羅漢印譜来歴」について

本節「二 印譜」において、木村竹香が羅漢印が作られた由来を述べた「竹香居羅漢印譜来歴」を紹介した。これは『羅漢印譜』制

作の重要な内容を含んでいる。

ここでは、来歴の全文を載せる。

竹香居羅漢印譜来歴

余明治二四年辛卯の三月偶ま感に触れ羅漢紐陶印十六顆を製し斯道の名家に其篆刻を請ひ以て印影を同好の志に領たんことを発願せり乃ち之を知己の彫刻家島田翁亮齊に謀る翁いに此挙を賛し以て自から其印鈕を彫刻せんことを約諾せらる然り而して其陶材用土を土口師鈴木八十吉氏に懇囑す氏時に病痾に羅りて休臥すと雖も余の熱心を賞し病を侵して用土を調理し之を一生の記念なりと称して余に贈与ありたり后ち数日にして氏は道山に赴けり一志より以降寫田翁に製材刻鈕を促進すること数十回翁常に多事荏苒年を閲せり余厭くことなく春又秋必ず往き懇請するを例とす明治三十六年首春年賀の爲め翁を叩き更に促して云く製鈕の事約し去て既に十有二年の星霜を経たり中間恰かも残夜の一夢のみ翁亦感を同うし此年翁三十寿古稀を出る五歳而も益々健なりと雖も其健敢て恃とするに足らざるは金文のゆる所などの談話交ごも出たり余之を機として厚く製鈕の早からんことを促したり翁の内政亦傍に在て余の言を助け其速成を勧告せり茲に於て翁確言して曰く本年夏斯を以て完成すべし誓意益然として面に顯はる此夏果して一六の尊者印鈕に現成し且つ添ゆるに觀音文殊布袋を以てし併せて十有九軀齊然妙相を円かにす余の勸喜何事か之に加へん恰も好し此時姑蘇寒山師偶ま新潟に遊び鉄筆を弄して宗現禪寺に寄寓す天池堂主人余に告て曰く老篆寒山師即今新潟に在り宜しく請ふて羅漢陶印の円成を謀るべしと茲に於て主人も亦幹旋する所あり遂に之を寒山師に請ふ師口印材を一覽し応供尊者其他の聖容を欽仰して過かに布篆を

快諾せらる所謂因縁会遇なるものか乃ち日を卜して師は竹香居に移遇し其楼上に於て篆刻に従事せられたり師薰沐刀を振ひ一氣呵成僅かに一日を以て十有九軀の大印を篆了せり余傍に在りて五枚の鉄筆を研磨するに其遅きを責めらるる数回終始運刀を□窺するの邊まなかりき蓋し応真の通力其刻を助けたるものか爾来□々の趣向加はり師及び同人の周旋に因り諸大家の詩書画篆刻序跋等の惠贈を辱ふす其間五回の春秋を累ねて始めて竹香居印譜即ち瓦礫放光金石結縁の前后両編を大成するに至りたり此間師の余に通信せられたる書柬実に二百二十有通一も散逸せず蔵して筐底に在り其他名家の往復に罹る文書数十通も亦併せて蔵せり今茲に四五通を選択して一卷となし之を印譜来歴の一斑として永く羅漢印龕に収め以て竹香居の珍宝となす

山雲海月

寒山 題

附 言

明治四十一年戊申三月印譜大成するや同人余に勸むるに之が発行式を兼ね印譜に因ある名士にして逝去せられたる各位の爲めに追吊の意を表せんことを以てせり乃ち之を松風亭（新形）主人に謀る主人大に其事を賛し式場は亭の全部を貸付すべき旨を以てせらる寔に篤志と云ふべし而して挙行の準備粗ぼ成れるに際し池魚の災厄殆んど全市に及び故に之を中止し僅かに白山公園偕楽館に於て在港の知己を招請し其發行式と追吊会との兼修に擬せしのみ同年九月更に祝融の大災あり此時竹香居も亦類焼の厄に逢ふ然れども羅漢の庇護するところ印譜に関する一切の什具幸に無事搬口一も毀闕することなかりしは實に福田の余榮と謂ふべきが唯今に遺憾なるは印譜發行の部数不足なりし爲め詩書画篆刻序跋を惠贈せられたる諸大家に対し未だ印譜の遍ねかさざるは常に余頭に懸りて措く態はざる所なり他日機を得

て此宿望を遂行せんことを冀図す

南無十六大阿羅漢等伏垂照鑑

明治三十六年天長佳節於瑞光禪寺

開眼法要式 最乘天海禪師修行

姑蘇寒山和尚礼拝

同四十一年一月於白山公園偕楽館開龕式举行

同年四月三日於同上偕楽館

羅漢印譜発行式追吊会兼修

昭和七年□治佳節於

日和出前奈利賀岡街道

曹洞宗回向院内

為

羅漢印譜申諸銘師

各々位謝恩全勤修

篤志贊助員諸名士

篤志贊助芳名録

東京蔵六

濱村雄志 田代良助氏 中山忠次郎氏 八木とも

直氏 藤井忠太郎氏 安宅善平氏 伊藤鏡雨氏

保倉彦市氏 富山天池氏 尾林義一氏 □野竹里

氏 片桐賢三氏 風間福□氏 高野桑四郎氏 松

永源吉氏 味方幸三氏 飯高録造氏 幾野五□氏

今井庄原氏 本田寅吉氏 吉田徳右□氏 竹ノ内

金次氏 田邨五一郎氏 大竹幸吉氏 八幡五助氏

八幡良平氏 小山雪亭氏 小林吉蔵氏 味方利平
氏 阿部津右エ門氏 酒井儀三郎氏 皆川亀三氏
日野千代太氏 森川奇秀氏

新潟市古町三番町 篤志各々位

同々四番町 全町篤志各々位

列挙□各々位

補佐 大関菊太郎 田邨二十一 星周平

本邨軍平

東京寒山寺 山田正平 木邨幸平

于時昭和八年春彼岸央日

羅漢窟 木邨政平敬書

十三 おわりに

山田寒山の篆刻について、全貌を述べた。寒山は芙蓉派の刻風を学し、けれん味のない作風を得意とした。何とも言えぬ風格を漂わ



図 15 山田寒山刻 「蘇峯学人」



図 16 山田寒山刻 「不折」

せている（図15・図16）、『寒山印譜』による。

また篆刻の啓蒙にも尽力し、斯界に多大な貢献をした。その歴史的意義はきわめて大きいと言わなければならない。彼は多芸多能で、篆刻以外に、書画・陶芸等の諸芸を善くした。当時の名流との逸話は枚挙に暇がない。

寒山の芸術に関する諸家の寒山評をみてみる。

樋口銅牛の編になる『七十二候印存』に、山田寒山の印「螻蛄鳴」とともに、寒山の紹介がされている⁽⁹⁾。

刻者は何許の人なるかを知らず。或は曰く。名古屋の人と。能く書し、能く画し、能く漢詩俳諧し、能く陶窯し、能く製菓子し、能く経師屋し、能く鑄銅し、能く篆刻し、能く借金し、能く貧乏す。能くせざるなきこと刻者の如きは蓋し匹敵なかるべし。矮軀凸額、笑へば小兒の如し、自ら清国蘇州寒山寺和尚と称すれども、平生嘗て袈裟を著けず。経を誦せず、但永平寺本山に於ては緋衣の格を有せりと云ふ。伊藤大勲位公国葬の際悟由禅師と駟車に同乗して人目を驚かし、は刻者畢生の大得意ならむか。安政三年生。

また、徳富蘇峰は「羅漢印譜山田寒山翁を懷ふ」と題して、『国民新聞』（大正十三年十二月二十八日）に一文を寄せている。

山田翁寒山、仙去勿々既に七年。頃ろ寒山寺後住、翁の養嗣子山田正平君、阿翁追善の爲め、羅漢印譜を重刷し、寄せ来る。

羅漢印譜は、二冊より成る。甲は瓦礫放光と云ひ、乙は金石結縁と云ふ。前者は明治癸卯—三十六年—の歳、北越の島田亮斎君の所作十六羅漢陶像に、寒山翁が、一気呵成に鉄筆を揮う

たるもの。後者はそれを因みとして、当代の諸家が、詩を題し、印を刻したるもの。二冊与に、名流諸家の題跋、書画太だ饒し。其初刊は明治丙午—三十九年—の歳に成った。今度寒山翁の七回忌に、之を再刊したるは、良とに故人の志を得たるもの寒山後ありと云ふも、過言であるまい。

山田寒山は、明治大正の際に於ける奇人であつた。雅にして雅ならず、俗にして俗ならず、僧の如く、仙の如く、商估の如く、山師の如く、文人墨客の如く、せんみつやの如く、殆ど傍人をして端睨する能はざらしめた。

記者は夙に彼を知るも、逐ひに其の素生に就て、深く知る所なかつた。彼の多能多芸に至りては、論より証拠、印人として一家を成すは勿論。製陶、鑄金、決して凡手にあらず。加ふるに其墨竹の如きは、逸韻洒脱、自ら一種の風神がある。現に記者も、彼が大正三年正月元旦の試毫の墨竹を、山王艸堂の壁上に掲げてゐる。

寒山翁は、金錢には頗る淡泊であつた。さりとして金嬴けが嫌ひと云ふではなかつた。彼は計企家であり、又若干その計企を行つた。されど概観すれば、彼の耐久朋は、福神よりも貧乏神であつた。彼の算盤は、十円を得んが爲めに、百円を損するを顧みざる、寒山一流の遺繰法であつた。

されど彼は決して窮を意と為さなかつた。貧乏を苦にする程では、とても寒山流の生活は出来まい。彼は風流人に不似合に、何時も倥傯、遽々、惚々、忙々であつた。所謂の孔席暖なるに遑あらずとは、彼の生活状態であつたらう。されど斯く稼ぎ廻りても、逐ひに一生安樂郷には住するを得なかつた。然も彼は之を以て、決して不平とは為さなかつた。彼の愛すべき所以、恐らくはこの恬淡に存したであらう。

寒山を知る者は、何人も彼を親しまぬ者はなかった。彼は取ることを欲せぬではなかった。されど彼の生涯は、寧ろ奉仕的であつた。必ずしも有心的の博愛者ではなかったが、其骨折の結果は、他人が概ね収め去つたから、事実上の博愛者と云ふも妨げあるまい。今や此冊中へ名を列したる伊藤春畝、杉聴雨、秋月古香の諸名流、中井敬所、益田香遠等の諸老印人、若しくは槐南、種竹の詩家、何れも寒山翁と与に、幽界の客となる。披読の際、覚えず人をして恨然たらしむ。

寒山が亡したのが、一九一八年であり、すでに七十五年の歳月が経っている。明治時代は、現在では遠く、その歴史は朦朧としてきている。今において、その歴史の真実を後世へ伝えることはできない。寒山という一人の一級の文化人の事績を辿るにつけ、篆刻が単に書芸に止まることなく、広く諸文化と結びついたものであることが理解される。当時は、現代とは大きく相違する広い教養と学芸の蓄積のある土壌を持った時代であり、寒山もそのような中で生活した。これは彼の事績や学芸そして篆刻世界を考えていく上において忘れてはならないことだろう。

【注】

(1) 山田寒山は一級の文化人として、そして日中友好に果した役割はけつして小さいものではない。寒山寺は、すでに宗教的な色彩はむしろ少なく、蘇州のシンボルとして、また夜半鐘は、文化交流の友好の鐘としてとらえられている。寒山の篆刻は言うに及ばず、詩や書画においても、彼の当時一級の文化人としての面目躍如たるものがある。

(2) ・筆者「小曾根乾堂論―篆刻を中心として―」(『書学書道史研究』第七号、書学書道史学会、一九九七年九月)

・筆者「小曾根乾堂研究(一)」(『修美』第一五卷通卷五三号、修美社、一九九六年一月)

(3) 筆者「山田正平研究(3) 山田正平をめぐる人々とその影響―吳昌碩・徐星州―」(『書道芸術』第五卷第一号通卷第二五号、日本美術出版、一九八七年一月)

(4) 二松学舎大学附属図書館に、松木五峰の自刻印影集『自刻印譜』(中本二十八卷二十八冊)が収蔵される。

(5) 本研究、第二章山田寒山研究第三節『寒山新聞』に見える寒山の事績と業績」で寒山詩を取り上げた。

(6) さまざまな潤例が、三村竹清の「篆刻料の話」(『三村竹清集五』(前掲)に掲載されており、当時の篆刻事情を知る上で興味深い。

(7) 本研究、第二章「山田寒山研究」第二節「印学と『印章備正』」で詳しく論じた。

(8) 岡村浩氏「山田寒山に見る近代文人の動向」(『大学書道研究』第五号、全国大学書道学会、二〇一二年三月)

(9) 北川博邦氏解説、高橋蒼石氏制作になる『七十二候印存―特装版―』(字典舎、二〇〇六年五月)がある。

第二節 印学と『印章備正』

一 はじめに

わが国の印人伝における唯一の専著と言える中井敬所の『日本印人伝』(一)をさまざまな文献・資料より拾遺し補訂することを課題としている。篆刻の専門家はもちろん、篆刻に関わる傍系の文人・芸術家の研究も併せて進めている。本研究はその一翼を担うものである。

明治の篆刻家、山田寒山の業績は多岐に亘るが、なかでも『印章備正』の刊行は甚だ興味深い(以後『寒山本印章備正』と称す)。山田家に蔵される『印章備正』(一帙六冊)は(図1)、寒山等による公刊本の元となった写本である。ここに新資料として提示する。また、早稲田大学の会津文庫に、会津八一旧蔵の印譜・印籍が所蔵されている。中に『印章備正』を含み、八一の書き入れが見られる。彼は印学に詳しく、この書き入れを考察しその印学を探った(二)。

本節では、山田寒山の印学面である。『寒山本印章備正』の成立と内容を見、『印章備正』に纏わる事柄を精査し、日本印学史の一端を明らかにする。

二 山田寒山の業績再考

山田寒山の伝記は詳細なものはない。筆者は『国語国文研究と教育』(第四三号、前掲)で、寒山関連の新聞記事の見出し一覧の作成をし、併せて彼の略伝を記述した。



図1 『印章備正写本』(1帙6冊)



図2 『印章備正写本』(2冊)
(中野三敏蔵)

水田紀久『続補日本印人伝』(中田勇次郎編『日本の篆刻』(前掲))では、

名は潤子。愛知の人。長崎に小曾根乾堂を訪ね、伊勢の福井端隠に師事。大阪天満寒山寺に滞留、号を名乗る。上京。中国蘇州寒山寺住職となり、夜半の鐘の新鑄に努む。大正七年(一九一八)十二月二十六日没す。六十三。羅漢印譜あり。

と簡潔に述べる。篆刻に関わる業績を「篆刻について」(本章第一節)に追加、補正しておきたい。

1、日本の篆刻史における一大勢力高芙蓉派を継承し発展させた。芙蓉派は、卑俗な今体の弊風を脱し復古体を築いた。その作風は門流により全国に波及した。寒山もその一人で、古体の正制を学び、印刀を筆の如く使用し、刻線が書線に極めて近い。ただ彼は芙蓉派の印風を墨守するだけでなく、芙蓉派の印人の中で個性を発揮し、多様で飄逸な印風を樹立した。

2、篆刻の字形は方形で簡素さを主としている。線は芙蓉派の特色である、点画の中央部分に膨らみを持たせた揺らぎ、抑揚がある。また、終筆は燕尾を多用し余韻ある印を刻した。

3、篆刻の鑄造印、陶印に新境地を拓いた。さまざまな素材を自在に用いた。

4、篆刻に、ローマ字、仮名、梵字また図象等幅広く多様な文字を使用した。

5、京都において高芙蓉の墓を探索し芙蓉墓を発見するとともに、「高芙蓉百三十年祭」を挙げるなどその顕彰に貢献した。

6、大和古印風の趣のある簡素で日本的な刻風の印を制作した。

7、『印章備正』を校訂刊行し、印学の啓蒙・発展に寄与した。
8、『日本新聞』紙上で募集された印に五世浜村蔵六とともに評語を寄せた。

9、丁未印社を設立し、斯界の発展に寄与した。
10、明治印学会の創立会員になり篆刻、印学の啓蒙にあたった。
11、山田正平、乙川大愚、北條卍山等後進の育成をした。

三 『印章備正』について

1、『印章備正』概要

わが国において刊行された印学の専著は多くない。『印章備正』は、日本の印学について考えようとする時貴重な文献といえる。まずは同著について概説しておきたい。

『印章備正』は富取益斎の著と伝えられており、古印や篆刻に関して概説した書物である。全七巻から成っており、その目録によると、巻一は古体印説、巻二と巻三は字法、巻四は文法、巻五と巻六は制度、巻七は今体印令の内容である。末に「古体論」「今体論」を付す。ただし、山田寒山公刊本には見えない。

多くは、写本で伝えられてきた。過眼したものに、山田家所蔵本(一帙六冊)、中野三敏収蔵本(二冊)(図2)がある。前著は、公刊された。後著は、小俣螭庵、福井端隠の識語があり、奇しくも芙蓉派の印学の系譜が知れるものとなっている(3)。

『印章備正』は高芙蓉一派の復古主義を説いたもので、今体の弊風を改めることを目的としている。寒山が写本で伝えられていた一本を入手して秘蔵していたがそれに忍びず、大正二年(一九一三)の一月五日に民友社より校訂刊行した。底本は伝写精ならず、さらに脱誤が多く、寒山の凡例によると、原文を尊重してはいるが、文

意の解しにくい箇所は悉くこれを改竄補訂したという。なお、挿入の印章図版は顧氏集古印譜より写真凸版とし、更に欄外の補注は、丁未印社同人の加筆に係るものという。

本書は富取益齋の著となつてゐるが、その内容は殆ど、高芙蓉門下の杜漱が著した『徴古印要』と類似しており、恐らく益齋の手写本が其の儘彼の著書として伝えられたものであらう。

さて寒山は民友社から刊行した『寒山本印章備正』においてその主旨を次のように説明している。

近時文芸の昌運に際し、篆刻に志すもの亦日に多きを加へたりと雖、そが簡便切要なる指針の書乏しきを以て、學者往々途徑に迷ひ、怪詭に趨る、予毎にこれを以て斯道の恨事と為す、本書は益齋富先生の著にして、篆刻家の座右に無かる可からざるものなり、もと入門の士に非ざれば敢て伝授謄写を許さざりしが、現今の状勢に鑑み、永く秘籍と為すに忍びず、茲に同志の贊助を得て校正刷印し、世に公にすることゝせり、學者もし此書に拠りて法式を尋求せば、庶幾くは印章の一路また邪曲に陥らざるべし

大正元年十一月 寒山 山田潤しるす

また凡例として、以下のよう記す。

- 一 著書ハ京都ニ住シ篆刻ヲ以テ業トセシコトアリ文化平安人物志其名ヲ載ス
- 一 原本伝写精ナラズ且脱誤頗多シ可成原文ヲ存スルニ勉メタリト雖ソノ解シ難キ所ハ悉ク之ヲ改竄補訂セリ
- 一 挿入ノ印章ハ特ニ顧氏集古印譜ヨリ写真凸版ニ付セシモノ

ナリ

- 一 欄外ノ補注ハ丁未印社同人ノ加筆ニ係ル
- 一 本書ノ補正校勘ニ就キテハ丁未印社同人ノ示教ニ負フ所多シ茲ニ記シテ感謝ノ意ヲ表ス

寒山記

『寒山本印章備正』は、首に初世中村蘭台の題字、杉聴雨の題字、永坂石埭の題詩、徳富蘇峰と、河井荃廬の序を掲載しているので訳出する。

徳富蘇峰の大正壬子（一九一三）十月の序に、

篆刻の一道、小技と雖も、之を精にすれば、道に進むべき豈に軽んずべからざるや。寒山尊者、丁未印社諸彦とともに相ひ謀りて、北越の富益齋氏著はす所の印章備正を校訂す。来りて属せらるるに一言を以てす。余曰く、此の事善きかな。大ひに余が意を得たり。今時印章を以て成業とする者、都鄙少なからず。而れども多くは文字を読まず。故に篆法を会せず。師承に依らず。故に刀法を知らず。這の輩の所作を觀るに、醜陋厭ふべし。信を古に示すに足らざるなり。益齋氏之書、所謂兒を憐んで醜を忘る。丁寧心切、能く其の要を盡す。古来印人之間に秘襲せらるれば、世人或は焉を知らざるなり。今一に世に出て、印人を益する有ること大なり。余既に之を賛し、且つ告げて曰く、倘し名匠雪漁のごとき有らば、凡夫は相踵崛起するなり。則ち実に芸苑の幸なり。窃に祝して之を俟てり。尊者良久にして曰く。善きなり。之が爲に序す。

大正壬子十月 蘇峰学人

と述べ、同著の刊行を祝福する。

また河井荃廬は、

富益齋なる者、余未だ事蹟に詳らかならず。或ひは云ふ。印を于華亭道人に学ぶ。道人名は激、平安の沙門なり。徵古印要七巻を撰びて、世に罕に伝抄する有り。益齋の此の書、諸を印要に較ぶるに、体例全て同じ。文は簡にして異を為すのみ。書中に時に僻説なきに非ずと雖も、要し是れ一篇の印論を復古するあれば、其の意は流弊を矯さんと欲するに在るなり。二書余別に考有り。寒山翁夙に此の書を蔵し、以て印家の韜略と爲す。今私秘せず。排印して世に布く。其の詒を後学に恵まる。必ずしも著者の下に在らずして云ふ。壬子秋杪。荃廬居士序。

と記し、『印章備正』の著者について疑問を呈し、『徵古印要』との類似を指摘する。ただ、その刊行は称賛している。

『寒山本印章備正』について当時の新聞に取り上げられている。

- ① 平安の人富益齋の遺著にして鉄筆家の秘珍たるを山田寒山氏が校訂して世に出だしたるもの、上下二巻、古印に関する諸説字法、文法、制度、今體印制等に互りて能く正邪を辨じ平易に解説して素人にも此技の正法を窺はしむるに足るの好著なり丁未印社諸子の評釈亦懇切（金二圓、民友社）

（『東京朝日新聞』大正二年一月二十八日）

- ② 木舌「北越名流遺芳 富益齋」九四 中村蘭臺「印章備正」の題字

（『北越日報』大正二年五月三十日）

『印章備正』の刊行は、丁未印社同人、明治印学会会員の力による所が大きい。丁未印社は一世岡本椿所を中心に篆刻の發展に寄する目的にて設立された。続いて明治印学会協会が、後に大正印会が設立され、その事務所は椿所の元に置かれた。これらは会派を超えて印壇に大きい足跡を残した。当時の新聞に丁未印社に関する記事が掲載されている。

- ① 舊臘都下の篆刻家濱村蔵六岡本椿處河井荃廬中村蘭臺山田寒山の合同結社にして近時篆刻の隆盛を機とし一層之が發展を謀り並に潤規を設け弘く篆刻の需に應ずと云ふ

（『中央新聞』明治四十一年一月八日）

- ② 舊臘より都下の篆刻家濱村蔵六、岡本椿處、河井荃廬、中村蘭臺、山田寒山の五氏合同して結社し近時篆刻の隆盛を機とし一層之か發展を謀り並に潤規を設け弘く鉄筆の需に應ずる由

（『日本』明治四十一年一月八日）

また明治四十一年三月に「明治印学会規約」が制定された。規約は一枚の文書として残されている。それによると正会員には丁未印社の五氏が皆含まれている。規約には次のようにあり『印章備正』の刊行は、この規約と無関係ではないだろう。

- 一 本会ハ印学ノ發達ヲ図ルヲ以テ目的トシ左ノ條項ヲ行フ
一 隔月集會ヲ開キ斯道ノ研究ヲ為スコト
一 印譜ヲ製シ頒布スルコト
一 名家ノ墨蹟又ハ篆学ニ関スル書籍ヲ上梓頒布スルコト

- 一 篆刻教授、篆刻評正、印章鑑定、及六書ノ質議等印学ニ関スル便宜ヲ計ルコト
 - 一 会員ハ左ノ三種トス
 - 正会員 準会員 賛成会員
 - 一 正会員ハ東京ニ住スル篆刻専門家タルコト
- 現在正会員は左ノ如シ
- 濱邨藏六 岡本椿處 河井荃廬 中邨蘭臺 山田寒山
- (後略)

このように、『印章備正』の刊行の価値は多くの諸賢が認めている。ただ、著者に関しては、当時から富取益斎の著となっているものの、その内容は略高芙蓉門下の杜澂が著した『徵古印要』に類似しているとの理解があった。単に写本に富益斎とあることに拠ったと考えるのが妥当だろう。

内容を見比べるに、山田家所蔵本(一帙六冊)と『寒山本印章備正』は、いくらか文言の修正があるが、同様である。杜澂が著した『徵古印要』とは、内容は類似する。

ここに諸本の内容が相違する例を掲げておく。

明製ニ関防ト云フコトアリ

(山田家蔵『写本』一帙六冊、「附録」二六丁裏)

明製ニ条印、条記関防ト云フコトアリ(荃廬による補正校勘)

明制ニ條印、條記、関防ト云フコトアリ(『寒山本印章備正』)

明制に條記関防と云こと有(『雜芸叢書』徵古印要)

2、『印章備正』の著者について

『印章備正』の著者について考えてみるに、『寒山本印章備正』には富益斎と記すが、その内容は杜澂の『徵古印要』に類似するものである。まず、著者とされる富取益斎であるが、中井敬所著水田紀久訓読校注『日本印人伝』(『日本の篆刻』前掲)に、

富益斎、名は鴻、あざ名は公範、益斎はその号なり。篆刻を善くす。京都四条高倉西に住す。印章備正・印章概説の著あれども、いまだ世に公けにせず。伝写して罕に蔵する者あり。

本姓富取。越後西蒲原郡地藏堂の人。医を業とす。文政五年二月十日没す。同所常昌寺に葬る。印章備正は大正二年、山田寒山が刊行(参考三村清三郎・五適先生杜澂伝『書苑』一の十)。

と述べる。また益斎について「人物編」(『分水町史資料編IV民族・人物』分水町編、二〇〇三年)に、彼の人物と略系譜の紹介がある。

富取 益斎 とみとり えきさい 生年月日不詳 文政五年(一八二二)二月十日没

名を鴻といい、大庄屋富取家の六世武左衛門正房の三男で、少時に志を立てて京都に遊学して漢方医となり、その地で開業した。かたわら篆刻を中江杜澂(京都住、後に出雲崎の橋以南を頼つて来遊、文化十三年(一八一六)五月同地に没す)に学んで名をなし、『文化平安人物誌』の篆刻部に記載されている。『印章備正』(大正二年山田寒山出版)を著わした。

近年、円上寺潟排水隧道真景画と記文(村上市立資料館蔵)、詩書、書翰の多数が現れて、その事蹟の概要が知られるように

なった。大正五年五月に山田寒山が北遊して地藏堂の中村公久家に逗留し『印章備正』の著者、富取益齋が当地の富取家出身であったことを知り、これを機に日蓮宗常昌寺の益齋墓前に法要を営んだ。この時の寒山師の二詩書が中村家に伝えられる。

その一に曰く、

印章備正は君の成す有り 斯道之より天下に行わる

一炷の心香もて墓石を拝す 南無妙法蓮華經

なお、益齋は江戸の僑居で没したと思われるが確かなことは不明である。

父の大庄屋富取家六世武左衛門正房に五男二女があり、長男は六世長太夫正則。次男は出雲崎の敦賀屋の養嗣子となった長兵衛政広。三男が京都に遊学して医者となった益齋鴻。四男が蕙畝で良寛の親友。五男は儒者で幸右衛門大武。長女タズは出雲崎の敦賀屋長兵衛方で客死。次女リサは地藏堂の中村要蔵の室で、それぞれ名をなした。

また日蓮宗日栄山常昌寺に関して、「由緒沿革」を常昌寺三十七世住職小川原潮俊氏より提供されたので紹介したい。これは、『新潟県寺院名鑑』（新潟県寺院名鑑刊行会、一九八三年）による。

由緒沿革

開基常昌院妙福日来禪門は当地の大庄屋たる富取武左エ門の室で、武左エ門の死に伴い出家し尼僧となつて常昌庵を結ぶが、尼僧のため寺号公称ならず。村田蓮念寺より十世の本樹院日悟を迎え、寛文元年（二六六一）に常昌寺として創立された。

天保九年（一八三八）に火災にあい堂宇を失つたが万延元年（一八六〇）に本堂を再建し、明治元年（一八六八）に鐘楼を建立、庫裡は大正十一年（一九二二）に再建された。なお大本山京都妙顕寺四十七世日栖上人は当山に隠居し、近郷の布教伝道に従事、また当山三十六世明浄院日秀は大本山清澄寺第五世別当に就く。通師法縁。

次に、『徵古印要』の著者と目される杜澂に関して見てみたい。『書道全集 別巻Ⅱ 印譜 日本』（前掲）の水田紀久の解説を引く。

杜澂（寛延一—文化一三 一七四八—一八一六）は、

字は澂公また師叔。松窠・華亭道人・看雲子・五適散人・真賞齋などと号した。中江氏。京都または近江の人という。はじめ黄檗に入山し華語、刀法を習い、長崎に留学。帰京後母を伴い東下、画を董九如に学んだ。在府十年、火を失し越後出雲崎の山本以南（良寛の父）に寄寓。母の死後一旦帰京、再び出雲崎に遊びその地で没した。五適の号は詩書画弹琴および篆刻の五芸に因む。復古の気運に目覚め、天明二年三十五歳で徵古印要を著わし、また享和三年徵古画伝、文化元年盛世翰藪（平安集のみ）を出版した。他に東皐琴譜刪定など著述が多い。出雲崎浄玄寺に葬つたが墓碑は失われている。（佐藤吉太郎 五適先生杜澂伝 三村清三郎 五適先生杜澂伝 書苑一ノ十）

また人見迥は、『五適先生杜澂伝』（佐藤吉太郎編、出雲崎町教育会、一九三七年）の「序」に次のように記す。

凡そ、古人の伝記をものするに、既に天下知名の士を、更に

委ぶさに調べて完好な全伝にするといふ事も大に意義を有つが、又、未だ一般ならず甚だ模糊たる其伝を、明瞭にする事は亦大なる意義の存する仕事である而してこの編者の意を達する為に拂はれる苦心は一通りでない。

杜氏徵古伝、盛世翰藪、徵古印要、などの著者、中江松篁は、詩書画琴印の五道に遊んで、自ら五適と号した風雅の一名士であるが、一部篤学の外、一般には知られて居ない。五道に於ての道人の技巧論はこゝには言はず、静かに心を道の研鑽に傾けつゝ、一人の母に孝養を致しながら、塵外高士の態度を持したことは実に欽慕に堪へない。其印学に見ても、画伝に見ても、道人はよく古を温ねて境涯を学んだ。雅人の常として道人は富裕でなかつた為に、粗末な揮毫もしては居るが、佳作の書画に至つては真に頭の下るものがある。又、安永三年の冬、方西園の徒が我が房川へ漂着した時、道人の筆語通話は見る者をして歎服せしめたといふが如き、亦道人が漢学の力量を推測することができる。方西園の原画を模した谷文晁の漂客奇賞には浜田杏堂が跋を書いて居る、道人が徵古画伝中に載する杏堂の雨晴山水に題する詩があるより推せば、漂客奇賞には、道人の一語無かるべからずと思ふのであるが、道人の性格の文晁と合はぬ為か、早く江戸を去つた為か、それとも西園の画を眼中に置かなかつた為か、何も関係を結んで居ない。兎に角、道人は真隠である。其の隠士も今日よりすれば是非其人を得て伝へねばならぬ。幸に、こゝに吾が耐雪翁佐藤吉太郎氏がある翁また至誠の人、敬神崇仏、生平俳諧に遊び、傍ら世に隠れたるを顕して超然の樂みをなす。往年、釧路雲泉の墓を修し。或は良寛堂建立に奔走し又、寛師の遺墨集を編み、又、以南伝を綴り、又今、五適伝を刊行せらる寔に篤志と言はねばならぬ。

恰も、昭和十年十一月十三日であつた、耐雪翁は有志と謀つて、五適道人一百二十年忌法会を厳修さるゝに当り、道人と同じ平安から主賓にとの慇懃黙し難く、遂に私は不肖の身を以て、之に赴いて其の盛典に臨み、講演をも試み、且つ展観遺墨中の若干点を選んで撮影すると共に、予て翁の此著の為に序文と装幀の任を擔つたことであつた。其後往再二年を経過した。頃者、既に内容印刷完備を報ぜられた。乃ち慚懼して病後の体に鞭ち倉皇旧債をつくなひ、翁が此の好著を敬祝する次第である。

昭和丁丑十月於平安白鷺洲洽陽草廬 人見迥

また、三村竹清は、「五適先生杜澂伝」(『三村竹清集』五、前掲)の「徵古印要和印章備正」において、以下の如く述べる。

「富鴻」文化十年の平安人物志篆刻の部に、三雲僊嘯など、並べて、富鴻字公範号益斎、四条高倉西と見えてゐる外、此の人の伝が分らなかつた处、大正五年五月新潟の阪本君から、北越新報の切拔を送られた。其れに拠ると、山田寒山翁が北越漫遊中、中村卯吉老人に聞いて、富鴻の墓を掃展したと云ふ記事である。富取氏、西蒲原郡地藏堂の人、医を業とし、文化五年午二月十日歿し、其邑日蓮宗常昌寺に葬る、法号清山院宗游益斎居士といふ。五月十日に其裔富取芳谷氏等と追福会を営み、印章備正待君成、斯道従之天下行、一炷心香拜墓石、南無妙法蓮華經といふ寒山翁の偈が載つて居た。阪本君の話には此の富取氏は画人富取芳斎の家だと云ふ。こゝに文化五年午とあるが、文政五年壬午の植字違ではないか。文化五は午ではない。扱て富鴻の在京した文化十年は、五適は却て出雲崎に居た。盛世翰藪の一番終に富鴻の書が載つてゐる。書も流石に、五適に似て

ゐる。尤も書は時代を示すもので、明治大正でも宝丹渡辺簪梧竹及某の様に理屈はつけてはゐるが怪癖な書を作つてゐる。五適の頃も、洪園星陵などの書が、どこかに激の書と共通した感があるから、一概には断ぜられぬが、先づ御弟子と見てもよからう。それには、松窠杜公、有翰之撰、及平安集成、微余之書、余固書法潰々、剩頃肘後有毒腫、痛牽指頭、執七寸管、恰若持十斤之鉄椎、欲無書則得罪於杜公、欲強書則遺醜於大方、遺醜与得罪、肥瘠胸中、欠伸苦唸、偶得一絶、及書以質諸杜公教正、当以藻華伝不朽、特慚清致難成偶、縦能勒得徒劳君、蔵拙幸為覆瓿古、富鴻とある。どうして徴古印要が印章備正と云名に改まり、著者名が富鴻になつたか、悪意に解釈すれば、富鴻が剽竊したとも云へるが、まさかそんな事もあるまい。富鴻が師説を伝え、書留めて置いたのが、其儘富鴻の著として世間へ伝はつたのかも知れぬ。又或は御弟子とはいへ、所詮旦那弟子で、原稿を買つたかも知れぬ。いづれにしても褒められぬ事で富鴻には気の毒である。

また、

これは一番五適の徴古印要が宜しいと篆刻家の評である。此の話は十余年前河井荃廬先生からも承つて、先生帳中の秘を借るのを遠慮して、黒川家蔵本を拝借して写した。其れは常陸土浦真鍋村小林寒林、名は翠字士幹といふ人の写しであつたが、再三伝写されたと見えて、誤字と覚しきものが多いので、其後色々異本を索め比較して見た。処が外に印章備正といふ書が七卷、これも写本で伝はつてゐる。が、殆んど徴古印要と内容が同じで、北越益齋富鴻公範著となつてゐる。これは近年山田寒

山翁蔵本を以て公刊した。なぜ徴古印要を採らなかつたか、或はこの印章備正の方が多少節略の気味で、簡便であるから採つたといふ説もあれど、剽竊では無いかといふ疑のあるものを、公刊するのはひどいと言ふので、大正四年二月鳶魚三田村君が国書刊行会の雑誌叢書の一へ収めて刊行した。其印章に就ては山田清作君が大層骨を折つて集古印譜に拠つて校正せられたと聞いてゐる。両書を比較すると大同小異で文章まで同じ所が多い。双方の目を挙げ文章を抄出するのであるが、両書共に已に活字本がある以上煩きを避けてこゝでは載せぬ。唯印章備正には末に印章概説として古体論今体論といふ短編一章を附してゐるが、寒山本にはこれが欠けてゐたと見えて、公刊本には無かつたと思ふ。

と同著と筆者に関して記述する。

以上、両著の目次や内容そして諸家の言を検討するに、文言は略同一であり、富取益齋の著とはいいがたい。三村竹清が指摘したように、杜激の『徴古印要』が富取益齋の著と誤つて伝えられたものと考えるのが妥当だろう。

また、『寒山本印章備正』は、寒山所蔵の写本そのものに「富益齋」と記されていたことによるもので、著者を富益齋としたことに他意はないと思われる。

3、『印章備正写本』の校勘

山田寒山校訂本『印章備正』の基となった写本が山田家に蔵されるが、寒山が凡例において、「原本伝写精ナラズ且脱誤頗多シ可成原文ヲ存スルニ勉メタリト雖ソノ解シ難キ所ハ悉ク之ヲ改竄補訂セリ」また「本書ノ補正校勘ニ就キテハ丁未印社同人ノ示教ニ負フ所多シ玆ニ記シテ感謝ノ意ヲ表ス」と述べているように、数人の手が入っている。校勘は主として二人の手になる。朱筆と青筆により、青筆はその書風から河井荃廬の手になることがわかる（図3）。朱筆は、五世浜村蔵六か一世岡本椿所の手になるものと思われる。『河井荃廬の篆刻』（二玄社、一九七八年）に掲載された「古銅印譜―序跋―」と文字の比較をするに全く同筆である。写本を仔細に見ると、まず朱筆により補正校勘がなされ、後青筆による補正校勘がなされていることが分かる。荃廬の補正は全篇に亘るが、訓読の正誤、文言の追加や入れ替えなど、実に精査なものである。荃廬は寒山の『印章備正』写本とは別に同著の写本を所持しており、補正校勘に使用されたであろうことは想像される。ここでは、荃廬の補正校勘の跡を辿り、彼の印学の学識の確かさを見てみたい。

山田家蔵『印章備正』写本第一冊の頭注は次のようである。頭注が施されているのは第一冊のみである。

- ・五丁 按秦有八体漢有六書（鉛筆による）
 - ・九丁 按漢摸印篆謂之繆篆（以下は青筆による）
 - ・九丁 按八当作六
 - ・十一丁 以下七行削ルベシ
 - ・十四丁 按模印篆ノ書繆篆分韻漢印分韻両書アリ六書通ニ優ルコト
- 万々

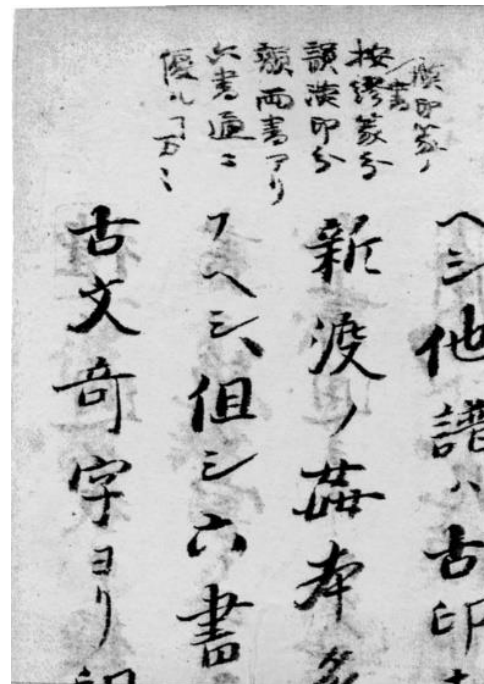


図3 河井荃廬による補正校勘

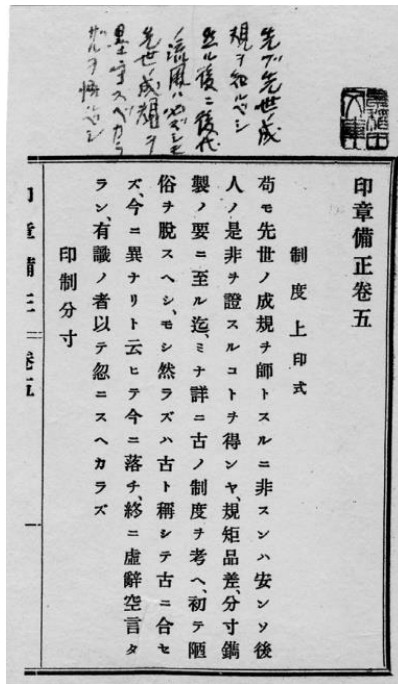


図4 会津八一による書き入れ
（早稲田大学蔵）

- ・十五丁 蘭台曰按古籀文ハ三代通用ノ文字ナリ猶今日ニ於ケル楷行書ノ如シ当時ニアリテハ何ノ読難キコトアラン
- ・十六丁 按無上當有学字

次に、文言の追加や補正の例を紹介したい。

- ・第一冊七丁六行 大ニ古制ニ復シ↓大方ヲ唱ヘテ古制ニ復シ↓大ニ復古ヲ唱ヘ
- ・第一冊十四丁四行 模印篆ノ他ハ印用ニアラズ
- ・第二冊五丁七行 ヲテラシアラワス↓ヲ照シ、名ハ家世ヲ顕ス
- ・第三冊六丁三行 二つ名字トキス（写本）↓二つ名字ト記スル（朱筆による）
↓名印ト字印トニツ捺ス（青筆による）↓蓋シ名印ト字印ト捺ス時ニ（『寒山本印章備正』）

荃廬は印学の泰斗と目されており、学問の深さを指摘されるが殆ど著述公刊されたものはなく、この『印章備正』への補正は貴重なものといえよう。彼の印学の学識の一端を窺い知ることができる。

4、会津八一『印章備正』について

早稲田大学会津八一記念博物館は平成十年（一九九八年）に開館した。それまでは、会津八一が生前私財を投じて蒐集した東洋文物に関するコレクションは、早稲田大学の「会津博士記念東洋美術陳列室」に収蔵されてきた。古代中国の明器・青銅器・仏像・貨幣・陶器・瓦甎・拓本などを中心にコレクションは数千点に及んでいる。

また八一は蔵書を昭和二十年四月の大空襲で家屋とともにすべ

てを失ったが、新潟に移り住んでからの晩年の十年、精力的に蒐集し、総数五千余巻に及ぶものとなった。金石文・拓本類も数多く含んでいる。彼の蒐集で重要な点は、同種のを数種類集めていることである。つまり八一はそれらを比較検討したものであろう。蒐集を単なる骨董趣味的なものとせず、学究的態度によった。この事は研究における「実物主義」「本物主義」への志向ともたれよう。八一没後、遺族により全てが早稲田大学に寄贈され「会津文庫」となっている。早稲田大学図書館では、八一旧蔵書を整理し『会津文庫目録』（早稲田大学図書館、昭和三十七年十一月）として、昭和三十七年に発刊した。

同文庫には、印譜・印籍が約四〇冊含まれている。今回、そのすべてを調査した。中に、富取益斎の著『印章備正』を山田寒山が校訂刊行したものが含まれており、これには八一の書き入れがある。八一は「篆刻について」（長島健編『会津八一書論集』二玄社、一九六七年一月）で、これに関して辛辣な評価をしている。

山田寒山の拵へた『印章備正』といふ本がありますが、これを私は廿歳の頃貰つて見てをつたが、その本の序文に河井荃廬君が僻説であるといふことを書いてをります。河井君のいふやうに僻説である、一寸やそつとでない、本一冊自分の寸法で書いてゐるやうなわけであります。いつてゐることは正しいのです。目の前は正しいのですが、大体日本人がそんな議論をすべきであるかといふことを省みるといふと、どうも窮屈千万であります。（中略）

処がさうせさうせといふことを『印章備正』は何十頁に亘つてそのこと許りいつてゐる。実につまらないものです。『印章備正』といふ本がつまらないといふのではないのです。これは支

那人には大切なことです。然し日本人はなんの関係もないことです。

彼の『印章備正』への書き入れを辿ってみたい(図4)。

同館所蔵の『印章備正』は、一帙二冊(縦一八・七×横一二・六糎)からなり、一冊は巻一―巻四(一四八丁)、二冊は巻五―巻七(一〇六丁と奥付け)で、帙に「印章備正」と八一の墨書がある。

第一冊

・巻一 表紙裏(朱書)

此書初印の時たまく寒山寺を訪ひて一本をもとめたることあり今新潟の巷間にこれをもとめて再読す僻説あると荃廬が云ふが如し

丁亥二月六日

・巻一 三丁 表(朱書) 頭注

世代とともに書風画面風変遷すひとり印のみ変すべからずとするは陋見なり

・巻一 五丁 表(朱書) 頭注

著者は摸印篆以前に印ありしを知らず

・巻一 五丁 裏(朱書) 頭注

法トハ法則ニアラズ一様相トイフコトナリ

・巻二 一丁 裏(青色) 頭注

日本ニハ一字の姓一字の名なるもの極めて少し強て彼土の風に従ふは陋なり

・巻二 四丁 表(青色) 頭注

彼土ノ人一字ノ姓多キガ故ニコノ体ヲ生ジタルナリ

第二冊

・巻五 一丁 表 頭注

先ヅ先世ノ成規ヲ知ルベシ然ル後ニ後代ノ流風ハ必ズシモ先世ノ成規ヲ墨守スベカラザルヲ悟ルベシ

・巻五 十二丁 裏 頭注

当時の人玉をだに識らざりしことこれにて明かなり世を隔つるのおもひあり

・巻七 十六丁 裏 頭注

秦漢に吉語の印あり詩句とは称しがたきもまた相述し後人の為すところを以てすべて古制にあらずとして排するは陋なり

これから理解できることは、八一は、『印章備正』を評するにあたり、丁寧にその全文に目を通してのことである。つまり彼の篆刻論は空論ではなく、現物主義に立脚しており文献に基づいたものとなっている。実に史観がしっかりしており、これは八一の篆刻観を探る上で貴重な資料といえる。

四 諸家による『印章備正』考と、

その日本印学史上の位置づけ

諸家による『印章備正』考を取り上げ、同著の日本印学史上の位置づけを行う。

まず、三田村鳶魚は『雑芸叢書』第一「例言 徴古印要七卷」(国書刊行会、一九一五年)において、

曩日公刊せられし印章備正は、徴古印要を最も拙く節略せし

もの也、著者富鴻は平安人物志に北越富鴻、字公範、号益斎、京四條高倉西とあり、越後の人なるは知れたれど、富は富田か富塚か、何の姓を修せしか明ならず、釈の印譜に富鴻の印あり、印要に釈が越後に遊びし事あれば、其の際の門人ならんと逞臆せられざるにもあらず、富鴻が釈の門人なりや否を強弁せずもあれ、他の著書を節取抄略して、恣に自己の名を署せるは言語道断の沙汰なり。

さて徴古印要は伝本頗る罕なるのみならず、幾度か伝写せられて誤脱甚だしく、殆ど読むに艱めるものあり、三村竹清氏夙に鉄筆の技を嗜み、屋島の愛は本書に及び、校勘鑑定すること多年、稍々完璧を称すべきを見る。今次特にその本を請求し、印影は徴古印譜に質し、顆々に就正するを得たれば、難覓の写本を力索せんよりも、這の刊本の善美にして易得なるが勝れるを誇負すべし。篆刻といふ事は黄檗僧渡来の後に発起し、宝永の頃、長崎の儒雅が競つて之を試みしより、陸続として文人墨客の戯鉄盛に、高芙蓉漸く印人顯門の魁たり、延いて方今に至るも古態全く泯びず、售技印人以外、素嗜を好尚にせる者尠からず。

大正四年二月

鳶 魚 学 究 劄

と、山田寒山の刊行を辛辣に批判する。

三村竹清は、『五適先生杜濬伝二』（『三村竹清集』五、前掲）において、

富取益斎は、文化十年の平安人物志、篆刻の部に三雲僊嘯などに並んで、富鴻、字公範、号益斎、四条高倉西と見えてゐる外、此人の伝が分らなかつた所、大正五年五月新潟の阪本香連

君から、北越新報の切抜を送られた。それに拠ると、山田寒山翁が北越漫遊中、中村卯吉老人に聞いて、益斎の墓を掃展したといふ記事で、益斎は西蒲原郡地藏堂の人、本業は医、文化五年午二月十日に歿し、同所の日蓮宗常昌寺に葬り、法号清山院宗游益斎居士といふ。大正五年五月十日に、寒山翁は其裔富取芳谷氏等と追福会を営み、印章備正待君成、斯道從之天下行、一炷心香拜墓石、南無妙法蓮華經といふ翁の偈が載つてゐた。それで名高い越後の画家富取芳斎も益斎と同族であると、阪本君は書添へられた。但こゝに文化五年午とあるのは、明かに文政五年壬午の誤植である。文化五年は午ではない。又寒山翁の偈にある印章備正といふのは、益斎の著書となつてゐるもので、従来写本で行はれてゐたのを、寒山翁が刊行された。併し其内容はやど五適の徴古印要で、或は益斎が師説を書留めて置いたのが、其儘益斎の著として、世に伝はつたのではあるまいか。

と弁護する。

吉本文平の『印章綜説』（技報堂、一九七一年四月）の「印章と文献」に、

富益斎著、山田寒山校 「印章備正」二冊 大正二年刊

著者富益斎は名を鴻、字を公範といい、益斎と号した。越後の人で、京都に住み医を本業とし、文政五年（一八二二）に歿した印人である。

江戸後期には篆刻は隆昌を極め、門下の子弟に刀法を伝授し、そのかたわら印説を講じた篤学の印人も少なくなかつたが、益斎もその一人であつた。彼は自ら先人の印論を編集した「印章備正」を門弟に講じたが、入門の士でなければその謄写を許さなかつた。その後この稿本を入手した山田寒山（一八五六—一

九一八）は、これを印家の韜略として所蔵していたが、このまま秘籍とするに忍びず、自ら増補校訂して大正二年公にしたのが本書である。

さて、江戸時代から明治初期にかけて出版された印史印説に関する刊本のほとんどは、中国の原本の覆刻本か、さもなければその解説書であった。しかしこれらの文献でひとしく説かれている秦漢印章への復古論は、わが国印人に日本古印の認識を新たにさせ、折から考証考古の学問も盛んとなった江戸中期からは、日本古印の本格的研究も起こった。この風潮はやがてわが国独自の印史印論の編著を促がすこととなった。

とある。

中田勇次郎は、「日本篆刻史」(『日本の篆刻』前掲)において、

さて、明清の卑俗な裝飾趣味に陥った篆刻の風は、上に述べたような正しい篆刻の研究のもとに次第に改められてゆき、やがて高芙蓉一派の人々の復古主義によつて、秦漢の古印を主とする古体の風が起つてくるのであるが、この間の変遷をもっともよく説明しているのは、高芙蓉門下に出た杜澂のあらわした徴古印要(雑芸叢書第一輯)である。杜澂(一七四八—一八一六)、字は澂公といい、松篁と号し、また華亭道人と号した。京都の人。この本は標題の下に、華亭積澂撰、芙蓉山房補とあり、高芙蓉が手を加えたものと見える。

と指摘し、更に、

初期江戸派以来、明末清初の卑俗な裝飾趣味に陥った篆刻の風は、篆文の字典や篆刻の専門書の刊行されるにつれて、次第

に正しい篆刻の道に方向づけられてゆき、やがて高芙蓉一派の人々の尚古主義によつて、秦漢の古印を宗とする古体の風が起つてくるのである。この間の事情をもっともよく説明しているのは、高芙蓉の門下に出た杜澂のあらわした徴古印要である。

これには天明二年(一七八二)の自序があり、芙蓉山房補とあるので、あるいは高芙蓉が手を加えているのであろう。その要旨は「秦漢魏晋は印の正なり、六朝に至つて印の変あり。唐宋以降は印の偽なり。故に秦漢魏晋、是れを古体とす。印の正制なり、唐以下を今体とす。印の偽制なり云々」といい、印章の制は秦漢を正制とし、唐以下は偽制であつて取るに足らないとした。かれは元の吾丘衍の学古編や明の甘暘の印正附説や清の朱象賢の印典の説に基づいて、明代の変制を承けた初期江戸派以来の弊風を矯正すべきことをしきりに説いている。かれはまた古体派は正制であり、今体派は変制であると言っているが、今体を排除するのではなく、元明の印論の復古主義に依つて、時流の習気に蔽われた今体の弊風を正制に改めようとするのである。さらに印制、印式、印文等についても、古印に本づいた正しい法式を詳細に論じている。この書によつて高芙蓉一派の古体派の理論を知ることができる。

このほか高芙蓉門下の曾之唯の印籍考には古今の印譜の優劣上下を品評して、これもまたよく古体派の論拠を明らかにしている。

との位置づけをする。

山田寒山が刊行した『印章備正』の内容を見るに、確かに関係を指摘される杜澂の『徴古印要』七巻と類似している。ただそれとは別に、寒山が同書を刊行し斯学に啓蒙した事は評価できる。甘暘の

『印正附説』との関連、これに根本があると指摘される高芙蓉派の印学について考えてみても、芙蓉派の印学の基本著書といえるもので、公刊の意義は大きい。更に清初の朱象賢の『印典』八巻を根本とし、これらは、系統的なものであり、杜澂の『徴古印要』に当時としての印学の大系化されたものをみることができ、印学の水準を引き上げた業績として評価したい。

五 おわりに

本節で取上げた明治の篆刻家山田寒山の業績は多種多様である。中でも印学の啓蒙は重要である。『印章備正』の校訂刊行において、斯学の発展に寄与したことは評価できる。本節で紹介した山田家蔵『印章備正写本』(六冊)は、公刊本の元となったもので貴重なものである。校訂にあたった丁未印社同人達、中でも河井荃廬の補正校勘の内容から、彼の印学に対する見識が理解できる。これは明治当時の印学の一つの水準を示すものといえよう。

また、会津八一による早稲田大学会津文庫収蔵の八一旧蔵の『印章備正』への書き入れから、彼は印学に詳しく、何よりも印への愛着がみてとれ、八一の書字における印学的重要性を再認識させられた。

今後は、『印章備正』と杜澂の『徴古印要』七巻との関係をより精査するとともに、甘暘の『印正附説』との関連を調査し、これに根本があると指摘される高芙蓉派の印学について考究したい。ここでは、清初朱象賢の『印典』八巻を根本とし、これらは、系統的なものであり、杜澂の『徴古印要』に当時としての印学の大系化がなされたと考えられるとの提起に留めたい。

以上、本節では、寒山の印学面での業績を、口頭発表以後の新知

見を加え考述するとともに(4)、『印章備正』に纏わる事柄を精査、新資料を紹介し、日本印学史の一端を明らかにした。

【注】

(1) 中井敬所の『日本印人伝』は、わが国の印人伝における唯一の専著といえるもので、好著である。印人伝には、これ以外に、中野(一九三五)二〇一九)所蔵本と家蔵本などがある。前著は、表紙に「印人録」と墨書の題簽がある。著者は不詳。本来二冊のものを、一冊に改装している。一六・四×一一・七糎。二冊本だが、一冊は二三丁、一冊は一二丁。人名と略伝を簡潔に記す。ご好意で、所蔵本の印籍・印譜を拝借、調査させて頂いた。ここに、印籍に関する貴重本を紹介する。

一、『印籍考』曾之唯編、全一冊、二六丁、一二・七×一五・六糎、享和紀元辛酉秋九月、大阪書肆寿梓。(山崎闇斎・黙斎蔵本)。

一、『甘氏印正』甘暘著、大本一冊、写本、二七丁、一六・九×一二・一糎、宝暦歳次癸未孟夏、平安 書肆林伊兵衛発行。

一、『彫印運刀法』殿村亞岱撰、小本一冊、一五丁、一八・九×一一・二糎、安永七戌戌歳九月吉日、平安書林。

一、『小俣(畑)栗斎一家言』一冊、全一冊、二三丁、二三・一×一六・〇糎、天保甲午四月、門人行栗久野永抗秘之一、明治十七年二月十日 香雲 松木偉彦写之。

(2) 筆者は「会津八一の印学(上)」(『修美』四三号、修美社、一九九三年七月)において、早稲田大学会津文庫に収蔵される道人旧蔵の印譜・印籍の紹介をしたが、二〇〇五年九月に再度詳細に調査を行った。

(3) 中野収蔵本『印章備正乾』に、小俣螭庵の識語が見られ、同本に「富益斎の述べたものであり、初学の者にとつて有用だ」と記す。また『印章備正坤』には、福井端隠が「天保四年九月、久野政永より同本を購得した」と記す。

高芙蓉を祖とする芙蓉派の一系譜に、源惟良、小俣蟬庵、福井端隠、山田寒山、山田正平等がある。都立中央図書館「加賀文庫」に邦人印譜を蔵するが、『蟬庵印譜』（一帙二冊）に、寒山の刻風に極めて類似する印がある。字形と線質が近似している。また三重県立図書館に収蔵する『彫虫館印譜上・中・下』（宝暦六年刊）、『福井端隠先生印譜』（一一丁、折本、刊行年等不詳）の刻風からも同派の継承が分かる。

これら、印譜の刻風を見るに、寒山の談話記事「鉄筆閑話」（『寒山新聞』）で、「芙蓉派と申しますば、高芙蓉―源惟良―小俣蟬庵―福井端隠と伝ひ、私までゝ五世です」と述べていることが実証できる。

- （４）口頭発表「日本印人研究―山田寒山の印学と『印章備正』を中心に―」（書学書道史学会第十六回大会、四国大学、二〇〇五年十月）

第三節 『寒山新聞』に見える寒山の事績と業績

一 はじめに

山田寒山は⁽¹⁾、名は潤子、字を白王と称し、寒山、不二山人、菊香園と号した(図1)。齋号は芝仙堂、風火仙窟である。曹洞宗永平寺派の僧侶を務めた。元来彼は多芸多才で、詩・書・画・篆刻・陶芸すべてを善くした(図2・図3)。篆刻は小曾根乾堂、福井端隠に益を受けたとされ、芙蓉派の系譜に連なる。河井荃廬や初世中村蘭臺らと丁未印社を結成し、斯界の発展に寄与した。印譜に『羅漢印譜』『滄浪閣印譜』『無名印譜』等がある⁽²⁾。彼の業績は多岐に亘っているが、蘇州寒山寺に新梵鐘を再建し送ったのは夙に有名である。簡素で日本的な作風による篆刻家、書画家として知られる⁽³⁾。

本節では、架蔵による当時の新聞の切り抜きを貼り込んだ新聞資料と(図4)、山田家に所蔵される寒山関係の新聞記事の切り抜きを貼り込んだ新聞資料二種を紹介する⁽⁴⁾(図5)。これは寒山研究にとって一級の資料である事に及ばず、当時の芸壇の風流を知る上で欠くことが出来ない。これを読むに彼の生涯、芸術観、芸苑での逸話などがあり興味は尽きない。本節は、新聞ファイル資料を紹介しその価値を述べる。さらに、新聞記事に掲載された寒山の伝記資料と篆刻作品の紹介、そして彼の印学に関して言及する。



図3 墨竹を描く山田寒山



図1 山田寒山(右から2人目)

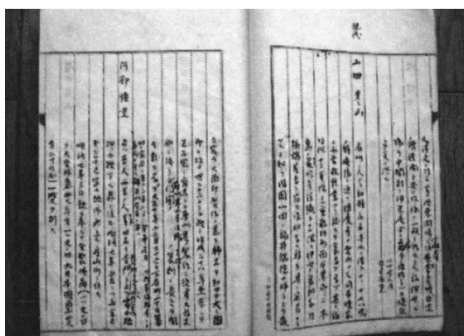


図4 岸本昌齡稿本『篆刻家略伝』(筆者蔵)



図2 山田寒山の墨竹画



図5 『寒山新聞』寒山と梵鐘

二 新聞資料二種の内容

新聞記事や雑誌等の逐次刊行物は当時の時事情報を得るに最適な情報源である。幾らかの例外を除いては社会事象を忠実に報告しており、後代において史的資料として一大文献となる。ただ保存となると量と紙の劣化の問題がある。最近ではマイクロフィルム化が進み閲覧が容易になってきた。明治時代の主要な新聞記事を集めた集成版に、『新聞集成明治編年史』全一五巻（財政経済学会、一九三四―三六年）がある。さらに『明治ニュース事典』全九巻（毎日コミュニケーションズ出版部、一九八三―八六年）があり、明治期の情報が得られる。また新聞目録も参考になる。

『新聞集成明治編年史』の第一五巻は全巻索引となっているが、「山田寒山（潤）」「寒山寺云々」「篆刻」「楽焼」などの項目に寒山に関する記事が見られる。ここに列挙しておく。

- ① 明治四十年三月十七日『都新聞』寒山寺の商売
- ② 明治三十三年六月十九日『日本』姑蘇寒山寺副住職 山田寒山が寒山寺を開帳
- ③ 明治三十四年二月二日『国民新聞』寒山寺向島へ
- ④ 明治三十五年十二月二日『大阪朝日新聞』印聖高芙蓉の墓 山田寒山探しあつ
- ⑤ 明治二十九年五月七日『東朝新聞』山田寒山 即席陶印
- ⑥ 明治三十二年四月十二日『東京日日新聞』山田寒山の陶友会 清水谷の皆香園

寒山に関する資料・文献で公刊されたものはむしろ少ない。山田家に収蔵されているものが根幹をなす。筆者は、長きにわたり山田家に伝わる寒山・正平の資料の整理にあたってきた。中でも最も重要と言えるのが、当時の新聞を切り抜きファイルされたものである。山田家蔵『寒山新聞』と架蔵の二種を紹介したい。前者は数冊存在するが、寒山に関する事績を切り抜き、ファイルされたものである。切り抜きは、東京市京橋区采女町廿二番地にあった東京切抜通信社による。新聞は全国紙に亘っており、重複する記事も多い。また新聞は古く劣化がすすんでおり、文字不明の箇所や、新聞名さえ判読できないものが数多くある。『寒山新聞』資料から寒山に関して、以下の諸問題が解明できそうである。それを列挙しておく。

- ① 生涯、伝記
- ② 書・画・篆刻作品
- ③ 詩
- ④ 篆刻学・印学
- ⑤ 楽焼き、陶友会について（「寒山の陶友会」「中外商業新聞」明治四十三年四月二十二日）（「東京の寒山寺」「東京日日新聞」明

治三十三年六月二十日)

⑥ 墨竹十万講について(「日本寒山寺建立結縁墨竹十万講主意書」『新愛知』大正元年十二月二十六日)

⑦ 夜半の鐘について(「古鐘再び鳴る」『神戸新聞』大正三年六月十七日)(「寒山寺の鐘来る」『朝日新聞名古屋附録』明治四十四年三月十日)(「藤公の撰べる鐘名」『中央新聞』)

⑧ 伊藤博文と寒山との交友(「公の詩才」『読売新聞』)(「滄浪閣印譜」『やまと新聞』)

⑨ 寒山と良寛(「良寛忌と展観」『北越新報』大正五年一月八日)

⑩ 日本寒山寺について(「日本に寒山寺が出来る」『実業報知新聞』大正四年三月十五日)

⑪ 寒山と滑川澹如(「寒山翁と滑川澹如」掲載紙不明、大正五年四月十一日)

⑫ 寒山と富益斎(「富益斎と寒山」『北越新聞』大正七年五月十九日)

⑬ 寒山と前田黙鳳(「黙鳳寒山法要、大慈寺に於て」『岩手日報』大正九年十二月二日)

⑭ 健筆会について(「健筆会を観る」『国民新聞』明治四十五年五月二十九日)

またその他の篆刻に関しては、次の記事が掲載されており興味を引く。

① 五世浜村蔵六について(「篆刻の名匠逝く濱村蔵六氏の事共」掲載紙不明)

② 中井敬所について(「古今一の印学者中井敬所翁の事」掲載紙不明)

③ 山田正平弱年期印

・ 木村正平篆、白文方印「花香竹色」竹香二男、十七歳(『新潟新聞』大正四年九月三日)(大雅堂印中観家傍青山竹径開、之白文、與此印氣韻相通敬服々々、於長岡、寒山山田潤)

・ 木村正平「梅花経一雪」丙辰元旦試刀(『国民新聞』大正五年一月)

・ 木村正平篆、白文方印「谿雲初起日沈閣」竹香二男、於東京寒山寺(『新潟新聞』大正四年九月三日)

・ 木村正平氏篆、白文方印「四海皇風洽」竹香氏二男、於東京寒山寺(『新潟新聞』大正六年二月十一日)

④ 日中名家印人と印影

ここでは、同新聞資料の中で、寒山の伝記や印学を研究する上で貴重な記事を以下の四点に分ち、1「伝記」、2「印学」、3「篆刻作品」、4「詩」として、その主たる記事のタイトルを紹介しておきたい。

1、伝記

山田正平は、『寒山新聞』をもとに、「山田寒山・河井荃廬」(『近代日本の教養人』)を執筆した。これは、山田家に『寒山事蹟』として正平自筆の抜書きが保存される。略総てが、『寒山新聞』によるものである。

① 「中央舞台の愛知県人(四八) 僧侶山田寒山」(『新愛知』大正三年五月)

② 「寒山寺の鐘声」(『満州日日新聞』明治四十年)

③ 「寒山和尚の懐旧談(一)——(六)」(『新愛知』明治四十年六月六日、七日、八日、九日、十日、十一日)

- ④ 「毎日譚海 山田寒山（一）―（四）」『毎日新聞』明三十五年三月二日、三日、四日、五日）
- ⑤ 「寒山一夕話（一）―（三）」『北越日報』四月二十一日、二十二日、二十三日）
- ⑥ 「山田寒山翁を訪ふ」『海南新聞』明治四十三年四月十日）
- ⑦ 「応接室、山田寒山師」『東京毎日新聞』明治四十三年四月二十二日）
- ⑧ 「鉄琴遺韻（二）―（九）山田寒山氏談」（四月二十七日、二十八日、二十九日、三十日、五月一日、二日、三日、四日）
- ⑨ 「変物画伝（一）（伊藤公に愛せらる）楽焼の寒山師」
- ⑩ 「寒山寺譚り」
- ⑪ 「釋松楼の一夕」

（⑧）⑪の記事の掲載誌等不明）

2、印学

- ① 「百人一話（二）山田寒山氏の篆刻流派談（上）、（中）、（下）」（一記者、『東京日日新聞』明治四十年十月二十四日、二十五日、二十六日）
- ② 「鉄筆閑話」 山田寒山
- ③ 「鉄筆閑話」 山田寒山師談話
- ④ 「閑話休題」
- ⑤ 「小集の記」
- ⑥ 「鉄筆閑話《四》」 山田寒山師談話
- ⑦ 「鉄筆閑話《五》」 山田寒山師談話

（②）⑦の記事の掲載紙等不明）

3、篆刻作品

『寒山新聞』に掲載された、寒山刻印の自註、そして他の篆刻家の刻印への山田寒山による評語の幾つかを取り上げる（図6）。



図6 寒山刻印三方（『寒山新聞』）

これを読むに、寒山の篆刻に対し、同時代の篆刻家はかなり評価しており、たとえば拝石評「風神古奥」や蔵六評「古色満面」はその特色をよく捉えている。また寒山の他の篆刻家への評語は、そのまま寒山の篆刻観ともなっており興味深い。たとえば、「無一点塵氣」や「無法天真」の評語は彼の篆刻論の根本と言えよう。

寒山の刻した白文方印「柳緑華紅」『国民新聞』明治四十年四月七日）に評するに、

益田香遠云ふ、布置に拘束無きも、亦た怒張の氣無し。叨に漫漶なるを模す者とは異なれり。敬服なり、嘆服なり。即ち坤皐の評語を以て之に充つ。丰秀絶塵、飄々たるかな。列子の御

風の若し。

濱村蔵六云ふ、敢て漫漶を剥触せず、而れども古色満面、壮士の剣を撫するに如かず。而れども気格は清高なり。意有り、意無くして開く。自ら秦漢の遺法を存す。那の結構を移して、宜しきを得れば、飘逸なること其の人を見るが如し。寒山近時の傑作なり。世の治印する者、之を解するや否や。

と記す。また、「釜中生塵」（掲載紙、掲載年不詳）には、

寒山自ら注す。四壁に人無く、半夜の時、読書を休みて又た詩を吟ず。二銭の肴^{マツ}、三銭の酒、独酌するを、家風口誰か知るを得ん。象鹿云ふ、衲、清貧を天下に誇る。萬里を飛行するも、得る所無し。窮困にして句を成す。筆舌走鬼、詩・書・画・篆刻・陶鑄すること自在なり。皆な天稟に属す。才は禅機を脱し、智は人界を逸す。当世の奇人に的る也。將に之の印の證たるべし。

と述べる。また朱文方印、銅印鑄文「南山老衲」は、伊藤博文に丁未春日に恭呈した印で、明治四十年二月十七日に掲載された。中井敬所や浜村蔵六が、

中井敬所云ふ、近世皇朝古印を仿ずると称する者、概に欹斜漫漶を以て宗と為す。遂に用ふるに堪へざる者有り。此の印、字様、鑄法皆な古鑄印の真趣を得て、観る可し。

山本拜石云ふ、風神古奥なり。

濱村蔵六曰く。鑄印の法に二有り。曰く撥蠟、曰く翻沙。余は撥蠟を専らにせり。寒山は翻沙を善くす。其れ鑄印なるや、猶ほ錢を鑄するがごとくして、数枚にして立成す。而れども鈕

式簡古なり。流金にして紋を為す。宝光目を射る。其の価の幾千元なるか測定すること能はず。此の印一に刮磨の手を歴て、稍や神韵を減ずるに似たり。猶ほ埋麝発香を繙くがごとし。奈良朝の郡国印を読むに、古趣横生、今人の作に似ず。寒山独得の妙と謂ふ可きかな。

と評している。

次に、巖谷一六が刻した、白文方印「忘筌」（掲載紙、掲載年不詳）に寒山が評して、

寒山老衲云ふ、布置は磊落、刀法は輕妙、居士の生涯読み来りて了はる。

と言ひ、また頼山陽の刻した、白文方印「醉世」（掲載紙、掲載年不詳）に寒山が評して、

寒山老衲云ふ、布置と刀法は共に磊落、一点の塵氣無し。

と述べる。同印は、明治四十年七月十四日に掲載された。

4、詩

寒山は詩壇の一奇人として、随鷗吟社例会での聯句等詩作も多い。詩は現在八〇首程度蒐めてゐる。これは、『寒山新聞』や書画讀、その他の書き付け詩稿による。私意を去り世俗の名利を離れ、自然風物に没入した心境や感慨が平易な語句で表現されている。形式にとられない「和習」あるものである。本節では彼の生涯を示唆している詩、また篆刻や書画に関わる詩数首を提示する。

自注吉福仿漢印 自ら吉福を注し漢印に仿う

春畝贈烏金 春畝 烏金を贈り

寒山描緑竹 寒山 緑竹を描く

道貧無俗塵 貧に道ありて 俗塵無し

錢盡多天福 錢盡き 天福多し

呵呵 呵呵

訪君

海内知音少 海内に 知音少し

天涯忽訪君 天涯忽ち君を訪う

欲談千古事 千古の事を談ぜんと欲し

独歩萬山雲 独歩す萬山の雲

自題寒山壽像 自ら寒山の寿像に題す

眼横鼻直 眼は横はり 鼻は直

髮短袖長 髮は短く 袖は長し

寒山其號 寒山の其の號

別曰白王 別に白王と曰う

寒山寺裏寒山子 寒山寺裏の寒山子

三尺洞中三尺童 三尺の洞中 三尺の童

短髮袖長兼俗異 短髮 袖長 俗を兼ねて異なり

眼横鼻直與人同 眼横 鼻直 人と同くす

一二三竿竹 一二三竿の竹

虚心聳碧空 虚心 碧空に聳え

山僧游戲筆 山僧 戲筆に遊ぶ
不學畫師風 畫師の風を学ばず

自題瓦礫放光癸卯天長節

自ら瓦礫放光に題す 癸卯天長節

鐵筆傳宗旨 鐵筆は 宗旨を傳え

寒山獨歩風 寒山は 獨歩の風

寸心千萬古 寸心 千萬の古

文字本來空 文字 本來は空し

寒山三刻三不刻

有道者刻 道ある者刻す

有德者刻 徳ある者刻す

有信者刻 信ある者刻す

無詩者不刻 詩なき者刻さず

無酒者不刻 酒なき者刻さず

無錢者不刻 錢なき者刻さず

西游小吟

禮圓光大師墓、入一心院、同游曰、此寺有高芙蓉墓、
大悦、問寺主、一基断碑、苔蝕不可讀、愴然有感

西游小吟

圓光大師墓に礼し、一心院に入り、同に遊びて曰く、此の寺
に高芙蓉の墓あり、大悦し、寺主に問う、一基断碑し、苔蝕
して読むべからず、愴然として感あり

華頂山深處 華頂 山深の處
青苔三尺碑 青苔 三尺の碑
清風明月外 清風 明月の外
不許世人知 世人の知るを許さず

過大雅堂

古竹老松柴作門 古竹 老松 柴にて門を作り
團茅開此別乾坤 團茅 此に開き 乾坤を別つ
飄然來訪池翁迹 飄然として 池翁の迹に來訪す
風流歷歷典刑存 風流 歷歷として 典刑存す

鷗汀伊澤老人見寄自畫墨竹一幀賦謝

寫出胸中畫 虚心君子風 筆筆變無限 枝枝妙不窮
斯君何可欠 落筆奪天工 揭在壁間見 清風在此中
直節何人似 虚心與我同 誰知形似外 露葉見圓通

鷗汀伊澤老人の自畫墨竹一幀を寄せらるるに賦して謝す

胸中の畫を寫出すれば 虚心なるは君子の風 筆筆として無限
に變じ 枝枝として 妙なること窮らず 斯の君 何ぞ欠くべ
けんや 落筆し天工を奪う 掲げて壁間に在るを見れば 清風
此中に在り 直の節は何人に似たるか 虚心は我と同じ 誰か
形似の外を知る 露葉圓通を見る

後者架蔵本は、筆者が某古書肆にて購入したものである。鹽谷長
坪所有印のある岸本昌齡稿本『篆刻家略伝』である。これは北川博
邦氏が『日本印人伝』（伏見沖敬編『印人傳集成』汲古書院、一九七

六年）で触れている。岸本昌齡による日本の印人略伝についての自
筆稿本で、他に明治・大正期の篆刻に関わる記事の切り抜きが貼付
されている。これには山田寒山に関する記事では「陶画篆刻の名人
山田寒山翁今朝逝く」が貼りこまれている。同資料は、中井敬所の
『日本印人伝』、水田紀久の『続補日本印人伝』の不備の幾らかを補
うことができる。

三 印 学

山田寒山自身、印学についてどのような考えを持っていたか、新
聞資料に即して見てみたい。ここでは系譜を中心に簡明に述べる。

寒山の刻風はその字形や線質を見るに、日本の印聖と称される高
芙蓉の系譜に繋がることが理解できる。日本印人の系譜に、高芙蓉
を祖とする一系譜、つまり源惟良、小俣蟻庵、福井端隱、山田寒山、
山田正平が考えられる。印学、そしてその字形と線質において継承
と発展が見られる。印学は、「芙蓉の影子」とまで称された曾之唯（一
七三八〜一七九七）に伝授されているが、一方源惟良もその法をよ
く得ている。つまり芙蓉が卑俗な裝飾趣味の明清今体の余習を一掃
し、秦漢の古印を宗とする古体の風を採用したが、その形式や印風
を踏襲発展させている事である。

ただ芙蓉一派は、今体の風を全く排除したのではなく、古体の正
制に改めようとした（5）。

さて寒山は、自身が芙蓉五世を継ぐと述べるように、印学、刻風
ともに芙蓉派に属すると考えてよいだろう。

高芙蓉の伝燈を継いであるので、純然たる古体家であります。
芙蓉派と申しませば、

高芙蓉―源惟良―小俣螭庵―福井端隱と伝ひ、私まで、五世です。

〔鉄筆閑話』『寒山新聞〕

元来我邦の篆刻は、高芙蓉から漢印の風采を写し得た印らしい印を作ることになったので、其れ迄の印は、殆ど文法も規律もなかったと謂つて可い。芙蓉は天明頃の人で一時の名流柳里恭、大雅堂等に交り、書も画も出来、其篆刻は、温厚篤実を旨とし、篆書も模印篆と称するものを用ひた。模印篆の作法は、字画が隸書と楷書とを合せて出来た様なもので、大体文字が方正に出来て居て、之を印に用ひると配合が好い、又読み好い。印には姓名印、姓字印の二種があるが、大切な人の姓名を彫るに、杜撰な字や読めない字を彫つては済まない筈である。現に秦漢以来用ひた印章は、重に此の模印篆を用ひ、其外は用ひなかつた。其を芙蓉が発見したのである。其故芙蓉の篆刻は、流石に名人だけあつて善いものが沢山あるが、変体は見えない。従て末流に成れば、つひ面白くなくなり易いのである。之を従来古体と称し、其後の篆刻は何れも其流れから出て、現に自分の如きも、芙蓉第五世と云ふことに成つて居る。

然るに芙蓉派即ち古体の印が余りにきまり切つて面白くないと云ふ所から、種々の新体が現はれて、細川林谷の林谷派、濱村蔵六の蔵六派、益田勤斎の勤斎派と云ふ様な諸派が出来た。蔵六、勤斎など皆芙蓉派から出たに拘らず、何も独自の意見を加へて一流をなして居る。此等を総て是迄近体と称した。之を絵画に譬へれば、古体は狩野派で近体は円山派とでも謂ふべきものである。一見優美に出来て居て、文字の取り方も模印篆ばかりでなく、古文も取り、奇字も取る。林谷派其他が皆然りだ。して、晩今は此の近体が流行して、篆

刻者の十中七八は此の方に成つて居た。

所が、近頃支那に呉昌碩と云ふ人があつて秦漢以上の印を作る。周あたりが其ねらう所であるらしい。去れば之を秦漢以来を取つた芙蓉派に較べると、実に大古印とも謂ふべきもので、昨今は此の風を遣るものがぼつゝある。実は最新派、新舶来派であるが、其印風から云へば大古体で、今は之を古体と称し、芙蓉派は却て近体と云ふことに成つた。此の呉に日本から往つて門人と成つたのは、京都の桑名鐵城が最初で、明治廿三年か四十五年頃、往つて之に学び次は自分が二番に入門した。自分は、明治廿八年日下部鳴鶴の処で頗る面白い印を見、誰の作であるかを問ふて呉昌碩の手に成つたことを知り、上海に居ると云ふから、郵便で印を送つて添削を乞ふたが、呉の宿所が分らなくて郵便が返つて来た。其処で大に困つて居たが、明治卅年渡清の時、漸く尋ねて入門したのである。次に河井仙郎が往き、次に濱村蔵六が入門し其印風を学び、現に桑名、河井、濱村三人は、此の古印派を以て立つて居る。自分も勿論此の風を学んだが、矢張り芙蓉派を本領として居る積りだ。呉は篆刻ばかりでなく、書も画も立派に出来、近頃印界の人物である。

「百人一話（一記者）（二）山田寒山氏の篆刻流派談（上）」
〔東京日日新聞〕明治四十年十月二十四日

四 刻 風

寒山の刻風は、その実物に當つて見るに、字形や線質が、日本の印聖と称される高芙蓉の系譜に繋がるのが理解できる。石材の刻はそれほど深くなく、むしろ浅く、殆んど補刀の跡は見えない。陶印はやや刻は深いが運刀は簡素である。鋳印は粗雑な作りであるが、

それが返って無造作の美を提供してくれる。寒山の好んだ美は意匠を凝らした物でなく、素朴で穏やかな趣であったのだろう。

篆刻三法から見てみるならば、字法は、『偏類六書通』（古森厚孝徳元重修）などに因っており、現在の小学からみると幾らか不適当な文字使用がある。また章法においては山田正平が伏見冲敬に語った「寒山の言」も頷ける。つまり、「章法は障子の格子の如く四角の枠の中に入る」というものである。平正で樸実な印面構成といえる。刀法は線質が、揺らぎのある独特の表現で、これは芙蓉派の特色となっている。人の呼吸とともに運刀された「揺らぎ」である。ただその端整で清澄な韻致は、寒山独自の印風と言えよう。むしろ刀法においては技巧を弄しない所が寒山の特徴である。そのためによくらか単調に見えるが、ただそれを差し引いても寒山の篆刻は風格、個性があり、雅趣に富む。

五 業績

寒山の業績は以下の諸点に要約出来よう。幾つかの項目に関して少しく補足する。

- 1、芙蓉派を継承し発展させた。
- 2、鑄印、陶印に新境地を拓いた。
- 3、高芙蓉の墓を再発見し、その顕彰をした。
- 4、玉印の趣のある簡素で日本的な刻風の刻印を制作した。和印の最たるものである。
- 5、富取益齋の『印章備正』を校訂刊行した。
- 6、丁未印社の設立と篆刻の啓蒙をした。
- 7、明治印学会の創立会員になり篆刻の啓蒙にあたった。

次に篆刻以外の業績を述べる。

- 1、詩は寒山詩の遺響とも云うべきものであり、随鷗吟社同人と応酬した。
 - 2、書は四体書にすぐれ、篆書は芙蓉の衣鉢を継ぎ、行草書は蘇東坡に似た文墨の香り豊で清澄な作風である。
 - 3、画は清雅な墨竹を最も得意とした（図7）。
 - 4、陶器は書画のある楽焼きで知られ、陶友会を開き多くの人に愛された。
 - 5、蘇州寒山寺の新梵鐘を再建し中国に送り、文化面における日中友好に貢献した（図8）。
 - 6、伊藤博文、尾崎紅葉、中村不折など、多数の文人と交流し当時の文化サロンの中心的人物であった。
 - 7、書籍虫除帙、本帙形巻煙草入れ、葉書入れ、料紙入れ、仙菓（西湖の蓮の実の砂糖漬けを帙型の箱に入れ雅客に頒つ意匠の考案）等、多くの発明をしその業を始めた。
 - 8、前田黙鳳、中村不折等と健筆会を催し、文人書画の時代を創出した。
- 篆刻に関する項目の中で「3」に関して、幾らか新聞記事に即して説明を加えておく。寒山は京都に遊んだ時、偶々高芙蓉の墓を発見した。其の後芙蓉の顕彰に努めている。高芙蓉百三十年祭の折は、その発起人として名を連ねている。

池大雅、韓天壽と兄弟の交りを為し三人相携へて名山、靈蹤を探り三岳道者と号して後世に其盛名を伝へたる高芙蓉先生百三十年祭典は十六日午前九時より清水谷皆香園にて執行さる、



図 8 寒山寺日本鐘（蘇州寒山寺）



図 7 山田寒山画（筆者蔵）

発起人は岡村梅軒、足達疇邨、岡本椿所、山田寒山、芦野楠山、河井荃廬の六氏なりと。

（「高芙蓉百世年祭」『報知新聞』大正三年十一月十八日）

次に「5」に関して、新聞記事に即して、説明を加えておく。富取益齋の『印章備正』を寒山は、丁未印社同人の協力を仰ぎ校訂刊行した⁽⁶⁾。校訂にあたったのが河井荃廬である。寒山の印学の啓蒙出版と評価できよう。

益齋は、北越の人なりといひ、又平安の沙門なりと称す。而も其事蹟を詳かにせず。纔に一卷の『印章備正』を存するのみ。

益齋伝は、拙著『北越名流遺芳』に収めたるも、遂に其郷貫を明かにするを得ず、一に『印章備正』に拠りて立伝せるに過ぎず、居常之を憾みとす。昨、山田寒山、卒爾我が草堂を訪ひ、例の破鐘の如き声もて、『解つた解つた、益齋は地藏堂の者だ、中村卯吉老人から聞いて漸く解つた』と、且つ其遺墨一葉を示す。今、寒山の語る所に依りて益齋伝□補ふ。

益齋、姓は富取、字は鴻、西蒲原郡地藏堂の人也。医を業とす。其病没せるは文化五年午二月十日にして、邑の常昌寺（日蓮宗）に葬る、法諡を清山院宗游益齋居士と曰ふ。

往年、寒山、『印章備正』を補正校勘し、刷印して世に布く。河井荃廬、寒山の挙を賞讃し、其恵を後学に詒す、必らず著者の下にあらざと謂へり。寒山は世の所謂印人にあらず、而も其篆法に忠をる、以て知るべし。然るに寒山に依りて益齋の郷貫を明かにするを得たるは、真に奇縁と謂ふべきなり。

寒山、去る十日の忌辰を卜し、益齋の宗家富取芳谷、中村卯吉翁を招じ、益齋の法要を其菩提寺たる常昌寺に営み、供養の

塔婆を建てたりといふ。寒山の偈あり、
印章備正有君成。斯道従之天下行。一炷心香拜墓石。南無妙
法蓮華経。

亦以て芸苑の佳話と称すべし。

（「富益斎と寒山」木舌、『北越新聞』大正五年五月十九日）

六 おわりに

本節では、当時の山田寒山関係新聞記事が貼付されたファイル資料二種を提示し、同資料の価値を指摘した。中でも『架蔵本』は岸本昌齡の稿本であり、天下唯一本の新たな発掘新資料である。『日本人伝』の欠を補うものであるが、たとえば高岡永年、賣酒郎、国技右内、山田道安、廣山古山など、取り上げられていなかった印人の伝記が掲載されており貴重である。更に同資料に掲載された寒山の篆刻の紹介と印学に言及し、寒山の功績の一端を明らかにした。また高芙蓉から寒山への印学の継承とその発展、そして寒山がその系譜に列なることを述べた。これは芙蓉派の篆刻芸術の特異点とも解される。

寒山はこの時期を代表する印人の一人に数えてよい。最も日本人らしい簡素な刻風や、その多様性は、古今独歩といえる。なかでも風趣ある陶印の制作は、田辺玄々（一七九六～一八五八）以来の印人といえよう。彼の『羅漢印譜』は、玄々の『玄々瓷印譜』と並んで、陶磁印による邦人印譜の二大名譜といえる。徳富蘇峰は「山田寒山翁を懐ふ」（『国民新聞』大正十三年十二月二十八日）で、「山田寒山は、明治大正の際に於ける奇人であった。雅にして雅ならず、俗にして俗ならず、僧の如く、仙の如く、商估の如く、山師の如く、文人墨客の如く、せんみつやの如く、殆ど傍人をして端睨する能は

ざらしめた」と述べた。

芸壇の異端児と言われた寒山の生涯は、探れば探るほど面白い。日本の畸人伝中の人として推奨したい。伴高蹊の『近世畸人伝』の再続編を編むとすれば、寒山の名はしかと記さるべきであろう。彼の性格は、豪放磊落、名利を求めずその生涯は小説にさえなりうると思はれる。飄逸の風流人寒山の芸術は、篆刻が第一、書が第二、画が第三、詩が第四そしてなによりも人物が面白い。

【注】

（1）山田寒山の生歿年は、文献により異同があるが、寒山自筆の『寒山手控え帳』の履歴書と、新聞記事、戸籍謄本等により、これが妥当と思われる。

（2）以下の拙稿において、山田寒山の篆刻、印譜の紹介を行った。同印譜の全ての印影は、データ化してある。

○「山田寒山研究（上）―篆刻について―」（『修美』第一二巻通巻四一
号、修美社、一九九三年一月）

○「山田寒山研究② 篆刻について（下）」（『修美』第一二巻通巻四二
号、修美社、一九九三年四月）

○「寸心千古」「水清濯纓」「那伽犀那」「釜中生塵」「恭賀新年」の五顆
に対して解説する。（高畑常信編『日本の遊印』木耳社、一九八三年十
月）

（3）山田寒山研究は、小木大法（一九三三～二〇二二）、柴田光彦氏、柿木
原紫鈴氏、岡村鉄琴氏等が労作を発表なさっている。この新聞資料の見
出しの索引をぜひとも作られてはとアドバイス下さったのは柴田氏であ
る。

（4）同資料は山田正平令夫人、ご令嬢から紹介され、複写の許可並びに研究
発表のお許しを頂いていた。筑波大学の修士論文で取り上げる予定であ

つたが、機が熟さずとりやめた経緯がある。

(5) 芙蓉派の印学の内容は杜濬の『徵古印要』から知れる。

(6) 『印章備正』は、早稲田大学図書館に収蔵する会津文庫に会津八一の書き入れ本がある。八一の印学の一端が見え興味深い。本論文集の第二章 山田寒山研究第二節「印学と『印章備正』」で詳しく述べた。

第四節 山田寒山年譜考

一 はじめに

山田寒山（安政三〜大正七年（一八五六〜一九一八））に関する資料・文献で公刊されたものはむしろ少なく、東京に住する山田家の収蔵品が大部分であろう⁽¹⁾（図1）。筆者は四十数年にわたり山田家に収蔵する資料の整理・調査にあたらせていただってきた。

本節では、山田家に所蔵される寒山関係の新聞記事の切り抜きを貼り込んだ「明治・大正期新聞資料における山田寒山関連記事」（以下『寒山新聞』⁽²⁾と称す）などを基に年譜を編み、彼の生涯に関して明らかにするものである。

二 年譜を編むうえでの主たる資料・文献

山田寒山に関する詳細な伝記はまだ編まれていない⁽³⁾。筆者が「山田寒山研究②篆刻について（下）」（『修美』第一二巻通第四二号、修美社、一九九三年四月）において、年譜を作成したのが、最も詳細なものといえる。

まず寒山の伝記を編む上での主たる資料・文献を挙げ、若干の略解を施しておく。

1、「明治・大正期山田寒山関連新聞資料」（『寒山新聞』）

山田家に蔵する『寒山新聞』は、四十年前に、複写させて頂いた。その後数度拝借、調査・研究させて頂いた。

同資料の採録対象紙は広範で、東京や大阪の主要紙のみならず、地方紙や外地紙に亘っている。また、同一内容記事を複数採録している。

同資料は、全てで五冊からなる。スクラップ帳は、二段もしくは三段組みの予め枠が朱色で印刷された台紙に、新聞の原紙の切抜きを貼付したものである。寒山名の記事部分に朱線が施されている。また各段に新聞名と日付が印刷もしくは手書きされている。手書きは、墨や朱書きによるもので、木村竹香⁽⁴⁾と寒山本人の手になる。

- ① 第一冊 縦三〇・二×横二一・三糎、二〇〇頁
- ② 第二冊 縦二九・八×横二一・七糎、二〇〇頁
- ③ 第三冊 縦二六・〇×横三六・八糎、七四頁
- ④ 第四冊 縦二四・五×横一七・五糎、七六頁
- ⑤ 第五冊 縦二八・五×横一八・五糎、一三一頁

同『寒山新聞』の記事で伝記に関係する主たる記事は、以下の通りである。⑨〜⑬の記事の掲載誌等は不明である。

- ① 「中央舞台の愛知県人（四八）僧侶山田寒山」（『新愛知』大正三年五月）
- ② 「寒山寺の鐘声」（『満州日日新聞』明治四十年）

- ③ 「寒山和尚の懷旧談（一）―（六）」『新愛知』明治四十年六月六日、七日、八日、九日、十日、十一日
- ④ 「毎日譚海 山田寒山（一）―（四）」『毎日新聞』明治三十五年三月二日、三日、四日、五日
- ⑤ 「寒山一夕話（一）―（三）」『北越日報』四月二十一日、二十二日、二十三日
- ⑥ 「山田寒山翁を訪ふ」『海南新聞』明治四十三年四月十日
- ⑦ 「応接室、山田寒山師」『東京毎日新聞』明治四十三年四月二十二日
- ⑧ 「百人一話」（山田寒山氏の篆刻流派談（上）（中）（下））
『東京日日新聞』（中）は、明治四十年十月二十五日
- ⑨ 「鉄琴遺韻（二）―（九）」山田寒山氏談（四月二十七日、二十八日、二十九日、三十日、五月一日、二日、三日、四日）
- ⑩ 「鉄筆閑話（山田寒山師談話）」
- ⑪ 「変物画伝（二）」（伊藤公に愛せらるる楽焼の寒山師）
- ⑫ 「寒山寺譚り」
- ⑬ 「榊松楼の一夕」

2、『寒山手控え帳』

山田寒山自筆墨書による手控え帳である。縦三一・〇×横一一・八糎、五三丁。

内容は、年表や、漢詩、住所等多岐に亘っている。寒山の若年期の足跡が分かる。

3、寒山自筆日記

寒山自筆になる、明治三十三年七月一日から八月三十一日までの日記（5）。

4、山田正平執筆による記事

「山田寒山・河井荃廬」『近代日本の教養人』実業之日本社、一九五〇年六月）山田寒山の生涯と正平の生涯が『寒山新聞』の記事を基に記述されている。

5、水田紀久『続補日本印人伝』

中田勇次郎編『日本の篆刻』（二玄社、一九六六年十一月）の水田紀久『続補日本印人伝』は、山田寒山に関する記述がある。

名は潤子。愛知の人。長崎に小曾根乾堂を訪ね、伊勢の福井端隠に師事。大阪天満寒山寺に滞留、号を名乗る。上京。中国蘇州寒山寺住職となり、夜半の鐘の新鑄に努む。大正七年（一九一八）十二月二十六日没す。六十三。羅漢印譜あり。

6、『篆刻家略伝』

架蔵本『篆刻家略伝』は、筆者が某古書肆にて購入したものである。鹽谷長坪所有印のある岸本昌齡稿本『篆刻家略伝』である。これは北川博邦氏が「日本印人伝」（伏見冲敬編『印人傳集成』汲古書院、一九七六年十一月）で触れている。岸本昌齡による日本の印人略伝についての自筆稿本で、他に明治・大正期の篆刻に関わる記事の切り抜きが貼付されている。これには山田寒山に関する記事として、「陶画篆刻の名人山田寒山翁今朝逝く」が貼りこまれている。同資料は、中井敬所の『日本印人伝』、水田紀久の『続補日本印人伝』の欠の幾らかを補うことができる。

三 山田寒山年譜考

本節においては、山田寒山の年譜を作成する。旧稿「山田寒山研究②篆刻について（下）」『修美』第一二巻通巻第四二号、修美社、一九九三年四月）その他における年譜に加筆・修正したものである。

凡例

- 一、本年譜の対象期間は、山田寒山が出生した年から、埋骨された年までとする。
- 一、出典は煩瑣を避けて最小限に留めた。
- 一、事蹟で年代不明であるが、略ぼ推定されうるものは、「この頃」として、その年の項目として記載した。
- 一、年齢は数え年をもって示した。
- 一、字体は原則として現行の字体を用いたが、原文書の字体を用いた場合がある。

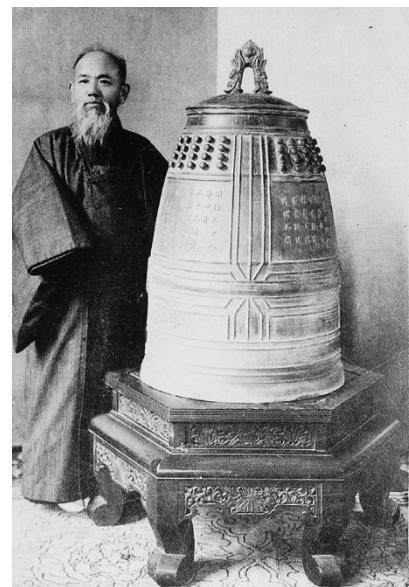


図1 山田寒山と寒山再建夜半鐘



図2 貞参尼像と厨子（龍淵寺）
（高さ×幅×奥行 35.5×30.5×18.0 糎）

西暦	和暦	年齢	事蹟
一八五六	安政三 丙辰	1	七月三日、愛知県愛知郡長久手村（現在の長久手町）に生まれる ⁽⁶⁾ 。父山田丈助、母貞参尼（図2）。本名潤子・菊香 ⁽⁷⁾ 、不二山人、寒山と号す。齋号は芝仙堂・風火仙窟。
一八六六	慶應四 丙寅	11	三月二十四日、尾張国丹羽郡伝法寺村薬師寺住職大如に就て得度する（得度）。
一八六九	明治二 己巳	14	夏、尾張国愛知郡熱田新宮阪町円通寺住職羽休達閑再会に首先安居（入衆）。
一八七一	明治四 辛未	16	四月二日、明治七年二月二日、美濃国不破郡竹ヶ鼻村本覚寺住職一牛に随侍する（修学）。
一八七四	明治七 甲戌	19	この頃（明治五年？）長崎に赴き、篆刻家小曾根乾堂を訪問し、益を受く。
一八七九	明治十二 己卯	24	この頃、伊勢の印人福井端隠のもとで、芙蓉派の篆刻を学ぶ。
一八八一	明治十四 辛巳	26	六月一日、紀伊国南牟婁郡二木崑浦最明寺住職虎嶽の室に入つて嗣法（伝法） ⁽⁸⁾⁽⁹⁾ 。 八月二十三日、紀伊国南牟婁二木崑浦最明寺へ首先住職（住職）。 九月二十日、東京能本山に就て伝衣（伝衣）。
一八八五	明治十八 乙酉	30	夏、最明寺に於て初会修行。
一八八八	明治二一 戊子	33	五月三十日、最明寺を退職する。その後大阪府摂津国西成郡北野村四百七番屋敷法界寺内に徒弟刀彌鼎と共に閑居する。 十月六日、転居する。大阪府沓号支局へ編入届。 「退職後他管に閑居に付御届」と「御所轄内へ閑居に付御届」を提出する。前者は三重県宗務支局並に曹洞宗務局宛、後者は大阪府第壱号宗務支局並びに曹洞宗務局宛。
一八九〇	明治二三 庚寅	35	四月一日、七月三十一日、第三回内国勸業博覧会、第五類の篆刻で褒状を受ける。
一八九一	明治二四 辛卯	36	三月、木村竹香、羅漢印並に印譜製作を発願する。 四月十三日、『独占話断易学指南』を発刊する。（鹿田書房発行）

西暦	和暦	年齢	事蹟
一八九五	明治二八 乙未	40	晩秋、東京に移住する。三田芝公園内瓢箪池付近に住し、芝仙堂と名づける。同所にて、篆刻・書画・樂焼を再開する。 この年、日下部鳴鶴の所で呉昌碩の印を見て、その風を慕う。
一八九六	明治二九 丙申	41	伊藤博文主催による滄浪閣落成詩会に参加し、公の知遇を得る。
一八九七	明治三〇 丁酉	42	四月二十七日、長女喜美子生まれる。 六月 日下部鳴鶴から呉昌碩の話を聞く。また中林梧竹が中国へ遊学することを聞き、中国へ渡り、当時荒廢の極にあった蘇州寒山寺の住職となる。中国に約四ヶ月滞在の後、寒山寺の再建並に夜半鐘の行方探索のため帰国する。
一八九九	明治三二 己亥	44	四月十四・十五・十六日、麴町清水谷皆香園にて陶友会を開く。
一九〇〇	明治三三 庚子	45	春、『滄浪閣印譜』を二部作成する。 六月九日、深川鹿島私邸において園遊会餘興が催される。即席樂焼をする。 六月二十日、銀座一丁目二十一番地に、寒山寺の開帳式を営む。巖谷一六、日下部鳴鶴、勝間田蝶夢、鴻雪爪、野口小蘗、竹内桂舟、大岡長峽、尾崎紅葉、巖谷小波、森槐南等来会する。 七月一日、八月三十一日、『山田寒山自筆日記』（山田家蔵）
一九〇一	明治三四 辛丑	46	二月、この頃向島小梅町五十八番地へ寒山寺を移し、本窯を開く。 九月七日、十月二十九日、新潟及長野に赴く。
一九〇二	明治三五 壬寅	47	十一月二十六日、次女壽美恵生まれる。 大阪・阿波・京都に遊び、京都東山一心院で、高芙蓉の墓「寿蔵碑」を発見する。
一九〇三	明治三六 癸卯	48	新潟へ百余日にわたり客遊する。 木村竹香の需めに応じ、羅漢鈕大陶印十九顆を刻し、竹香発願の『羅漢印譜』刊行に協力することを約して帰る。 木村竹香『羅漢印譜』（瓦礫放光）、その後「金石結縁」を加える。を制作する。この頃、下谷へ引越す。 天長佳節、瑞光寺に於て羅漢印の開眼法要式を行う。
一九〇四	明治三七 甲辰	49	八月、木村竹香『羅漢印譜』（瓦礫放光 一冊本）を補訂刊行する。

西暦	和暦	年齢	事蹟
一九〇五	明治三八 乙巳	50	春、夜半鐘が北陸の某寺にて錆潰された形跡を発見する。伊藤博文、寒山は、新梵鐘再建の業を発願する。 (伊藤公檀中総代、寒山願主) 四月、伊藤博文に新梵鐘の鐘名を請う。 四月、夜半鐘再鋳の主意書を頒布する
一九〇七	明治四〇 丁未	52	岡本椿所・五世浜村蔵六・河井荃廬・初世中村蘭臺等と丁未印社を創立する。 第一回寒山墨竹百幅会を催す。
一九〇八	明治四一 戊申	53	一月、白山公園偕楽園に於て開齋式を挙行する。三月、明治印学会規約を頒布。正会員は、五世浜村蔵六・岡本椿所・河井荃廬・初世中村蘭臺・山田寒山である。 四月三日、木村竹香『羅漢印譜』(「瓦礫放光」「金石結縁」一帙二冊)を刊行する。また、行形亭において「羅漢印譜披露並書画煎茶大会」を催す。
一九〇九	明治四二 己酉	54	十月二十六日、伊藤博文薨去す。(六十九歳)
一九一〇	明治四三 庚戌	55	夏、新梵鐘完成する。 十月頃、寒山寺梵鐘の分身、甲乙丙三種の頒布を始める。 十二月二十四日、小林誠義邸において、新梵鐘の撞初式を挙行する。
一九一一	明治四四 辛亥	56	十一月二十二日、芝公園増上寺において、故伊藤公三回忌法要を兼ねて、鐘供養と撞初式を挙行する。 十一月三十日、第二回寒山墨竹百幅会を催す。
一九一二	明治四五 壬子	57	一月、「日本寒山寺建立化縁墨竹十万講主意書(大正元年)」を起案する。
一九一三	大正二 癸丑	58	一月五日、富益齋の著『印章備正』を校訂刊行する。
一九一四	大正三 甲寅	59	六月末、新梵鐘を、神戸港から上海蘇州寒山寺へ送る。 寒山屏風百双会を開く。
一九一五	大正四 乙卯	60	三月二日、千葉県海上郡野尻村字長山の地において、日本寒山寺建立地鎮祭を修する。 日本寒山寺建立結縁墨竹十万講のため、新潟各地へ巡遊する。

西暦	和暦	年齢	事蹟
一九一六	大正五 丙辰	61	五月、寒山墨竹画会を開く
一九一八	大正七 戊午	63	一月十五日、伊豆長岡温泉の遊園地に寒山寺別院を建立する計画を企てる。 十二月二十六日午前七時、下谷区 下谷町一丁目一番地の寓居にて没する。今春来、痔ろうに罹り療養中であつた。
一九一九	大正八 己未		一月十八日、本葬が、浅草松葉町海禅寺において執行される。導師は宗演老大師、副導師は中原秀岳師が勤める。会葬者は、細川侯、杉子、末松子等を始め文人画家、工芸家、仏教家無慮五〇〇余名に達した。鎌倉円覚寺大本山佛光国師塔下の骨清窟、紀州最明寺に埋骨。

四 おわりに

本節で取上げた篆刻家山田寒山は、性来多芸多能で多方面にわたって活躍をした。詩・書・画・篆刻・陶芸すべてを善くした。また豊富な逸話を残し、明治の元勳伊藤博文との交流は有名である。篆刻は小曾根乾堂、福井端隠等に益を受け、芙蓉派の系譜に連なる。また彼の業績の中で、印学の啓蒙は重要である。『印章備正』の校訂刊行において、斯学の発展に寄与したことは評価できる(10)。

本研究では、山田寒山の生涯を、旧稿に新知見を加え年譜考として編むとともに、新資料を提示し、寒山の研究の一端を明らかにした。

【注】

(1) 山田寒山の生歿年は、文献により異同があるが、寒山自筆の『寒山手控え帳』の履歴書と、新聞記事、戸籍謄本等により、これが妥当と思われる。

(2) 新聞資料は昭和五十五年当時、山田正平令夫人喜美子、ご令嬢梅枝から紹介され、複写の許可並びに研究発表のご許可を頂いていた。平成十五年度全国大学書道学会徳島大会での研究発表に引き続き、本研究執筆でその責のいくらかを果たしたかと思う。

(3) 柴田光彦氏による「(参考) 山田寒山年譜」(『山田寒山と寒山寺鐘をめぐって』『書道研究』五四号、萱原書房、一九九三年八月)がある。

(4) 木村竹香(一八六八～一九四三)は、近代日本の篆刻家である。名は政平、号は竹香、齋号に醉古堂がある。新潟県新潟市の人。『羅漢印譜』を編集・刊行したことで知られる。山田正平の実父。竹香に関して、本論文集の第三章第六節で詳しく述べた。

(5) ・柿木原くみ「寒山陶友会と銀座『寒山寺日記』」(『相模女子大学紀要』68 A、相模女子大学、二〇〇五年三月)

・柿木原くみ「山田寒山・銀座『寒山寺日記』に登場する人たち」(『相模女子大学紀要』69 A、相模女子大学、二〇〇六年三月)

(6) 前掲の『寒山手控え帳』によると、本貫は「紀伊国南牟婁郡二木烏里浦二十三番地」とある。

(7) 雅号は「菊香園」の可能性がある。

(8) 熊野市文化財調査委員岡本実記氏「二木島町海福山最明寺について」(昭和五十四年八月吉祥日)による。

(9) 筆者は、二〇一二年七月二十日、愛知県日進市の龍淵寺(伊藤正見師)と、三重県熊野市二木島町の最明寺(榎本幾穂師)を訪問し、山田寒山と正平の関係資料の調査をした。

龍淵寺では、山田正平の書簡が収蔵されていることが確認された。一九

五四年三月二十四日、封書ペン書き、三葉。伊藤靈雲宛。内容は、山田寒山の出自に関する事と、正平自身の近況に関するものである。最明寺では同寺に収蔵する印章の調査をした。中に北條卍山(癸卯初冬卍山と側款あり)の刻になるものが見られた。また「月白風清」(竹印、白文)は寒山の刻風に類似する。

○柿木原くみ「山田寒山―二木島・最明寺時代を中心に―」(『相模国文』第二七号、相模女子大学国文研究会、二〇〇〇年三月)

○柿木原くみ「北條卍山論―熊野における山田寒山師承―」(『相模国文』第二八号、相模女子大学国文研究会、二〇〇一年三月)

(10) 「日本印人研究―山田寒山の印学と『印章備正』―」(『熊本大学教育学部紀要』第五九号、熊本大学教育学部、二〇一〇年十二月)

第三章

山田正平研究

第一節 篆刻について

一 はじめに

本章は、第一章で論じた山田正平（明治三十二～昭和三十七年（一八九九～一九六二））の「篆刻の美と表現」について、それに関係する資料・文献を精査し、より実証的・具体的に考察するものである。

本節では日本の篆刻の祖「印聖」と称される高芙蓉（一七二二～一七八四）⁽¹⁾の系譜に連なる印人山田正平の篆刻に関して論じる。清朝以後「詩書画」三絶の文人活動は、文人必須の条件として詩・書・画に加えて篆刻を取り上げている。これらは四絶としてその一体化された文人活動がなされて、初めて文人の理想郷に到達できる。つまり一つでも欠けると、文人としての教養は成り立たないとされている。正平はこの事に関して次のように述べている。

中国及び東洋には詩・書・画・篆刻と並称せられる。詩は志をいふもの、書は、詩句言語を筆墨を借り間架結構行筆に意興、感情を託すもの。画は、草樹鱗介自然の物象の形態色彩を借りて或は扱って情懷を寄せる。篆刻とは何ぞ。これは簡単に書と同じ、鉄筆とも言ふ所以なり。この頃、或洋画家言ふ。彫刻と、絵画と、書の綜合芸術ならずやと。或は篆刻の一面ならん。書を扱って印を造る。象形、指事、抽象に尤も近接する篆書を多く用いられるのが多いのでその感想もあるも実際あらう。更に事実、古代より已に完全に絵画、人物、車器、草獸を取り扱って

肖生印あり。彫刻は書になき処篆刻には毛筆にかへ、刀を以て筆画を為り、朱白を鏤刻し、印面その物に錯綜、変化、彫刻の妙あり。その運刀の深淺曲折の妙を味ふなれば彫刻の領域にも入ることならん。書と彫刻絵画なり。更にそれに加へんか、印文を選び、印側に時の意興を識す。記事詠歌し、詩句を按じ、選摘し、文学的の領域にも関与す。しかして古来中国には詩書画篆刻と並称し、文人の嗜しなみとせられ、事実詩書画に著名の人々の伝記を見れば殆どこの篆刻のことにも及んで居る。日本の印人また然り、高芙蓉、大雅、韓天寿、杏所、林谷、明治に入りても然り。詩を作ればこれを書し、書し了れば印を押すと言ふ一面実用的の面からも関係づけられるのであるが、翻ってこれを、この詩、画、篆刻の一部門の芸道とみて、これに深く研鑽するとなれば勢ひ、この諸芸にも心を致さなければ、償鑑に入らず。或は思ひの及ぶ位でなければ、大成とは考へられないとも言へる。単に借りに篆刻一芸よりすれば、現に篆刻をする者、書を能くせざるば印見るに足らずと、周楸園云ふ。更に加ふれば篆刻をやれば書に対して注意力深まり、書を学ぶに益する所多しとも言はれる。而して、更に初めに戻して詩画と書の関係を考へれば、書は詩文を書すもの自ら明白の關係あり、而し、詩、画の關係も古来、詩中有画、画中有詩、或は有声の画、無声の詩の語もある所以なり。然らば詩情なき画ならずやと言へば、画は画なり。但上位のものならず。芸術とし芸苑の珍重とはせず。詩は別才なりの語あり、然れども読書せざ

るの詩人なし。六書の学を考究しない篆刻家としての名家なし。書画篆刻また然り。諸子已に学芸の人。茲に吾等非才を詩について第三節顧みず説きてすすめる所以でもある。諸芸はその教養に比例すとも言はれる。その養ふ所浅ければ、自ら従つて意興浅露する疑ひなし。一点一画一花一枝のたたづまひ、一挙手一投足のたたづまひに其人を感じとる。

『山田正平先生篆刻講義ノート』(前掲)⁽²⁾

これから正平は詩・書・画・篆刻四絶を並列して研鑽を積んでいこうとしたことがわかる。

筆者は正平の芸術について考えるにあたり、詩・書・画・篆刻と分類して考察する。本来この四種は切り離して考えるべきものではないが、正平の芸術をより一層具体的に明らかにするために敢えて分けて述べる。

尚、本節の中で基本資料として『山田正平先生篆刻講義ノート』(前掲)と『一止道人山田正平先生の書簡』(前掲)⁽³⁾を基とし、多くを引用した。

二 篆刻観

清朝以後、文人必須の条件として詩・書・画・篆刻が取り上げられる。この四つは四絶と称されており、一つでも欠けると文人としての教養は成りたないとされている。山田正平はこの立場を受け継いでおり、正平自身篆刻を四絶の中の一つとして位置づけている。

中国及び東洋には詩・書・画・篆刻と並称せられる。詩は志をいふもの、書は、詩句言葉を筆墨を借り間架結構行筆に意興、

感情を托すもの。画は、草樹鱗介自然の物象の形態色彩を借りて、或は扱つて情懷を寄せる。

篆刻とは何ぞ。これは簡単に書と同じ、鉄筆とも言ふ所以なり。この頃、或洋画家言ふ。彫刻と、絵画と、書の綜合芸術ならざやと。或は篆刻の一面ならん。書を扱つて印を造る。象形、指示、抽象に尤も近接する篆書を多く用いられるのが多いのでその感想あるも實際であらう。更に事実、古代より已に完全に絵画、人物、車器、草獸を取り扱つて肖生印あり。彫刻は書になき処篆刻には毛筆にかへ、刀を以て筆画を為り、朱白を鏤刻し、印面その物に錯綜、変化、彫刻の妙あり。その運刀の深淺曲折の妙を味わふなれば彫刻の領域にも入ることならん。書と彫刻絵画なり。

更にそれに加へんか、印文を選び、印側に時の意興を識す。記事詠歌し、詩句を按じ選摘し、文学的の領域にも関与す。しかして古来中国には詩書画篆刻と並称し、文人の嗜しなみとせられ、事実、詩書画に著名の人々の伝記を見れば殆どこの篆刻のことに及んで居る。日本の印人また然り、高芙蓉・大雅・韓天寿・杏所・杏谷・林谷明治に入りても然り。

(「篆刻と書道、書と美術についての考察」『講義ノート』)

正平は篆刻を理解するには、篆刻の本質を知らねばならないとする。それには「印」を知り、篆刻と印との関係を把握することが大切であると述べる。

ただ茲に篆刻を始めるに際しまして最も肝要の一事があります。それは印の場と云うことを頭に置くことでしょう。

印の発生した意義を知り、篆刻とはその宗旨に基づいて開花

した芸門であることを心の底に置けば、決して浅陋の玩具に堕ち入らぬということです。これは次第と古典に親しまれれば自ら釈然とすることで難解のことではありません。『印とは信を示すの要具』また構りや想念をこめたものという古代には必然の用のために発生したもので、充実した、よさ、が自からある。その、よさ、を宗旨としたのが篆刻と云い現してもよいでしょう。

（「始めて篆刻を試みる人に」『書道講座 第六巻 篆刻』以後『書道講座』と略す）

以上述べたように、正平にとり篆刻とは悠久の歴史を持つものであり、その根本を見失っては篆刻が篆刻として成り立たないとする。ここに引用した一文には、正平の篆刻に対する真摯な姿勢が読み取れ、また高邁なる見識が表れている。

三 篆刻三法

古来、篆刻には三法があると言われている。これは、篆刻の要点を、字法・章法・刀法の三種に分けて論じたものである。ここでは篆刻三法に基づいて、山田正平の篆刻の作品を併せて分析しながら、正平の篆刻の美の特色と篆刻観を探ってみる。

1、字法（図1）

まず正平は字法について次のように述べる。

字法とは文字の成り立ちを考察すること。文字は古代文化の縮図とも見られ、時間があつたら楽しい項目。それから大切な

ことは印にふさわしい印文の選びかたなど。

（『書道講座』）

つまり字法とは、言葉をかえていうならば、篆刻制作の一過程である、選文と校字の段階のことである。正平は選文には実に慎重であつた。

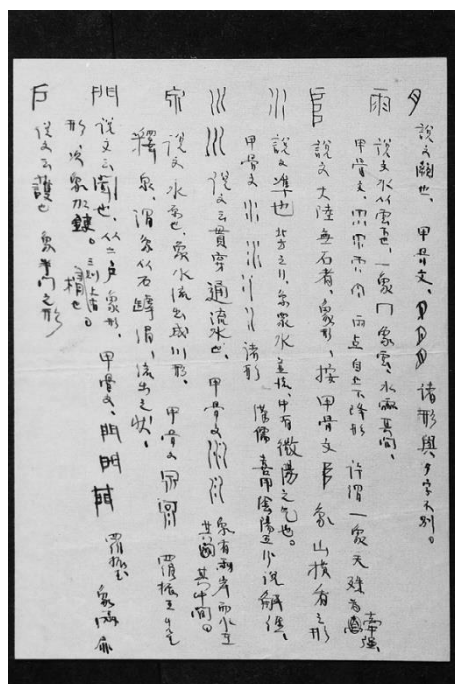


図1 字法

私は游印を刻す場合撰文には相当時間をかける場合があり、容易に決らぬこともある。使い古したものには、その時と人と、感興を催し、切実に刻して見たいといふ文字には、綺語美言の東西古今何萬種あつてもこれを撰びとりたいといふ字、文句に行当らぬことも不便な不思議のことである。

たしかに、自分の下手の詩句を書くより、自分の意を充分に

出して呉れた古人の句を借りる、これも立派の態度でよく歌ふ者に歌はしめて共に楽しむ。已に貸借はなく彼我一如である。別にはづかしいことではない。但し撰びとり扱ひ方はその人の創作となり識見の顕はれとなるだけである。

〔画法寸感〕『講義ノート』

それでは正平は、具体的にどのような印文が印に用いるのに適していると考えていたのだろうか。

余り軽くならず、苦心経営して後の暢快こそ望ましく、細心落墨、大胆奏刀と古人も申しています。五字印二字或は三字はなかなか難し。四字位に印文を選び、殊に篆形の手に入り易き趣きの多い文を用ゆるこそよけれ。

〔佐藤書簡〕

二字にても若し成語印游印の場合はやはり語として働くもの存して、寸鉄殺人的の文字少なく、意長きものこそよけれ。

〔佐藤書簡〕

寒山詩は宜しいですね、自然瀟洒で潤達で。字句五字多く、印文にウマクツメて見たらと考えることもあるが、これはなかなかむづかしい。私の物新人旧は物新人惟旧と云ふ陶淵明の句からです。これ位は無理ないと存じます。字句の趣が豊かでも印として纏らぬことあり。しかし、苦心惨憺、難事を料理するの快は、又格別かとも存じます。

〔佐藤書簡〕

以上のように、印文は印としての印面効果があがるのが大切であるが、印文における文学的内容に共感することも選文の重要な条件としていたことが分かる。事実、正平の刻印の印文を調べてみると、単に『墨場必携』や『書家自在』などから選文したのではなく、漢籍の中から心に留まる詩句を取り出していることが分かる。山田家に蔵するノートに書写された文献・資料から校字に充分に時間をかけ、念入りに調べていることが確認できる。

2、章法

続いて、章法について山田正平は次のように述べる。

平たく云えば構成で、疏密の照応、小印は寛緯に、大印は緊密にと云った纏め方、才も働らき字びも得易い、ここに重点を置いて教え進める人もあります。

〔書道講座〕

一字には一字の章法あり。全局には全局の章法あり。或は字画を増減し、或は位置を移譲し、拘束なく懶散なく、自然配合宜しきを章法といふ。

〔篆刻法（一）〕『講義ノート』

章法とは、印稿を練り、布字をする過程である。正平が行った章法の過程は三段階に分けて考えることができる。一段落は校字とも関連してくるが、字典にあたり文字を拾い出したものに工夫を加える段階である。多くはこの段階では字書から多くの字体を探し、文字の形を誤りなくおさえるといったものである。しかし、正平はその文字の字形を変形して何種類も書いてみて、一字としての構造を

確かめていたようである。次に第二段階の印文による印稿作りであるが、ここではまず四角の枠を取り、その中に印文を書き入れている。これは他の作家と同じ方法であるが、ただ正平は、これには充分すぎるほど時間を費やし「金寿斎」の印文においては、五、六〇種類以上も作っている(図2)。また正平の代表作「無人華落」の印稿が遺されている(図3)。これらは一つ一つそれぞれが形を変えており、正平の創作力の豊かさを物語っている。第三段階の布字であるが、現在山田家に布字をしたままで刻すことなく残された印が数顆ある(図4)⁽⁴⁾。これを見てみると、まず印面に朱で仮に布字をし、あたりをつけ、改めてその上に墨で布字をしている。そして意に満たない所があれば、その部分を朱と墨で再度書きかえている。すべて一筆で書かれており、線質は生き生きとしたものである。正平は印稿を作る過程を非常に重視したが、それは次の一文より分かる。

印稿とは、苦心惨憺の末に漸く成るもの、或はならぬ了ることもあり、印稿の成る時は印の成る時。

(『佐藤書簡』)

篆刻も結局書です、全体の結構布置そして着筆終筆、筆の向背、少しく古印を二、三模して、それから創作して下さい。余り急がずと最初の筆が全局に響きかかる様な気構へで、そこまで心境を練ること。

(『佐藤書簡』)



図2 印稿 金寿斎

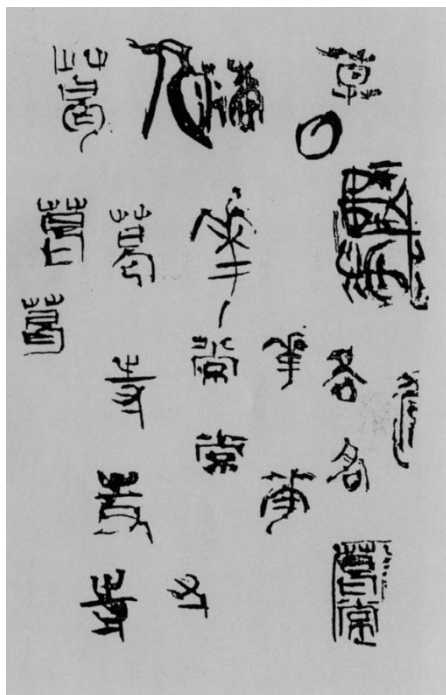


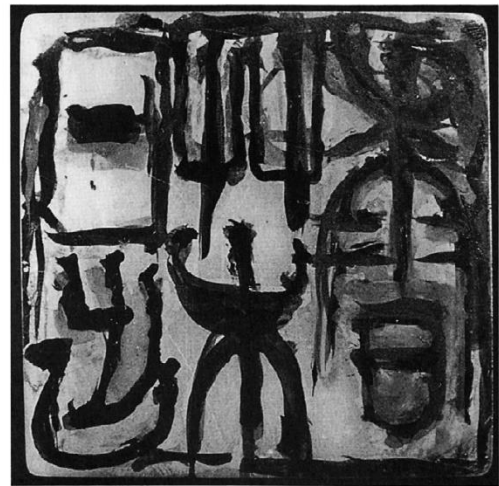
図3 印稿 無人華落



1 無人華落



3 棟方志功章



2 日出艸木香



4 不知其名



5 図書館



6 樹人



7 樹人



8 未仙



9 彌

図4 山田正平の布字（原印寸法とは一致しない）

3、刀法

篆刻三法の最後は刀法である。正平は刀法について次のように述べる。

さて第三の刀法は、古来伝え難しともいいますが、また一面、習わずとも自ら備るものとも云えましよう。一字を書いて十人十様と云うところに妙味もあり、また親子でも不伝という境界も出て来るのでしょうか。この辺は深く立ち入る要もなく、百鍊自得でよいでしょう。

〔書道講座〕

刀法は多作して自得するに在り、伝授すべからず。

〔講義ノート〕

正平は、刀法は親子といっても伝えられるものでなく、百鍊自得、多作して自得するより方法はないと述べる。また、刀法は習わずして備わっているものであるとも述べる。そして、筆を運筆するのと同様に運刀すればよいとする。

さて、正平の刻した印の印面をみると、刀と石との摩擦によりできた皺のようなものがみられる。これは刀と石とのやむにやまれぬ抵抗の跡と思われる。正平の印を模刻してみても、どうしても真似しきれないものがあるが、それはこの刀法からくる線性である。章法は目につきやすくある程度似せることができるものの、この線性は正平独自のもので、たやすく真似られるものではない。正平は刀法について次のようにも述べる。

布置の意匠、まことに一番目に判り易く、大切の面でもあり

ますが、それを大きく響かせるのはやはり筆であり刀でせう。

〔佐藤書簡〕

正平は補刀についてもいくつかの見解を述べている。

刀を執る前に充分の工夫用意、そして意興が油然而したら一気に運刀、そうすれば必らず快作を得べし、いくら力をこめて刻つても、一刀で刻つても駄目、何度補刀してもその補刀が真に生きて居るならそれもよし、要は美の一点ならんか。

〔佐藤書簡〕

正平は補刀を肯定も否定もしないが、それは自分の美意識に照らし合わせて行うべきであると卓見を示している。

さて、それでは正平はどのような種類の印刀を用い、どのように運刀したのであろうか(図5)。正平が用いた印刀は、平頭の中鋒の何の変哲もない印刀であるが、厚みがある。また木印には編鋒を用いたようである。用刀法は双鉤法であり、印床は使わなかったようである。これには興味ある話がある。篆刻家である保多孝三が印床の使用の有無について正平に尋ねたところ「印床は使わないで、印を手にとって刻した方が左手が生きるからね」と答えたという⁽⁵⁾。さて、正平は運刀には「引き彫り」を多く用いているが、印面から推測するに「突き彫り」をしている箇所もみられ、また印面を印刀で叩いたと受けとれる所もあり、運刀はかなり自由なものである。そして、朱文では刀を線がなくなるくらい極端に斜めに入れており、これなども正平の線性の複雑さを表現する一つの特徴であろう。正平が印を刻す時の筆順は、一応は文字を書く時の筆順に従うが、横画は横画だけをまとめてまず刻し、その後、縦画は縦画でまとめて

刻したこともある。これなども正平のアンバランスとも思える章法を構成する一方法と思われる。ただ、正平の刻印は一度刻した線はあまり補刀することなく、終筆や線の太細を修正するために刀を加えていた程度である。これは正平の刻印後において仮押しした事例から窺える。

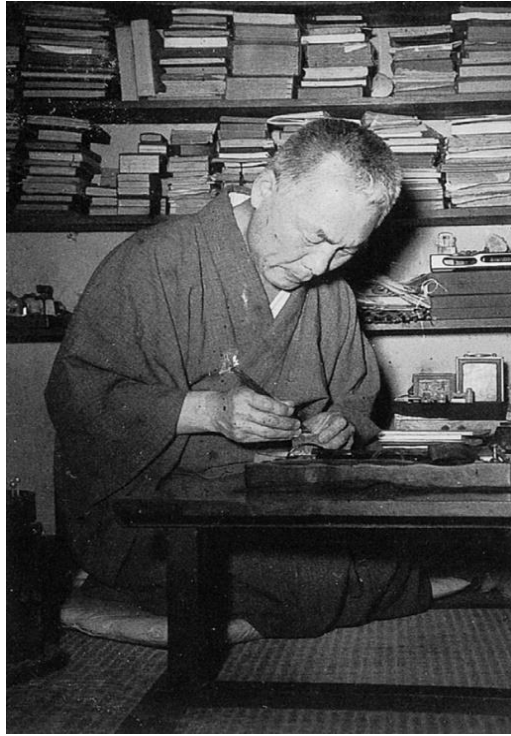


図5 篆刻執刀中の山田正平

4、学書経歴

正平はいかなる学書経歴を経て、晩年の魅力に溢れる独創的な刻風を形成したのであるか。これはまことに興味ある問題である。ただ、正平が常に「篆刻は書なり、書は人なり」と語っているように、正平の篆刻を理解するにはまず正平の書を理解する必要がある

う。正平の書の学習経歴を跡づけてみたい。正平は、鄧石如・金農を好み、呉昌碩が臨した石鼓文（林少東氏本『書品』一〇一号、東洋書道協会、一九五九年七月）や、権量銘を臨書している。また、石鼓文・泰山刻石・琅邪台刻石・戚伯著碑・夏承碑・天発神讖碑などを双鉤に取り遺している（図6）。

さて、正平は篆刻を学ぶ上において古典をしっかり凝視することが大切であると述べる。次に正平の古典観を述べておく。

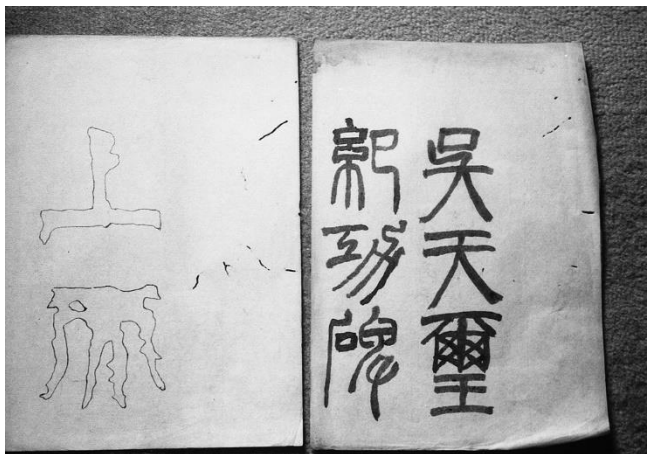


図6 模『吳天璽紀功頌碑』

印は必ずしも篆書でなくとも、楷、行、草、隸、草木、禽獸、器皿、さては欧文も差支えなく、形状また、角、円、奇形、敢

えて拒む必要もないが、浅晒な遊戯に堕しては断じてならぬ。古典を凝視し、古人と語る。古代の文字には変化の妙があり、素朴の中に美があり、その純一不雑な刀痕には、今日の社会を築いた人間叡智の恐るべき力が秘められている。その古代人の創造意欲と強い願望こそ芸術本来の姿である。それを知ることなしに書も芸術も理解出来ないであろう。断じて贗古であつてはならぬが、古代人と同じ命を、我々が現代にどのように展開すべきかというのが作家の態度でなくてはならぬ。

『書道講座』5 「篆書・篆刻」、前掲

篆刻は鉄筆とも申し筆なり。筆には骨格と墨情あり、漢印の正・平直素朴に見えるものも、実は古篆古隸の変化含蓄を兼ねて、凝集伝統あつてのこと。決して無味乾燥その物ならず。平静美のうちの妙味こそ書・篆刻の極処ならんか。ゆるゆる古典を玩味して下され度候。古典をふまえて現代を超出して。

『佐藤書簡』

そこで、古印を模刻することが篆刻を学ぶ要決だと述べる。

古印を模刻して心眼を高め、胸懷大いにせられなば、次第と進境せらるべし。

『佐藤書簡』

半歳位篆書をやり、百顆位を古印を模刻すること、ただ急々勿々と刀を執る、空転に了り更に益なし。

『佐藤書簡』

それでは、正平は実際に古印の模刻をどのくらいしているのだろうか。かつて古川悟から、古印を正平が模刻した印譜を収蔵していると伺ったことがある。また、正平は古印の模写を数多く遺している。それは細長く切ったトレッシングペーパーに、朱で古印を敷き写したり、臨したりしたものである(図7)。これは骨格を押さえたものである。このことは正平の篆刻の根本を考える上で重要である。

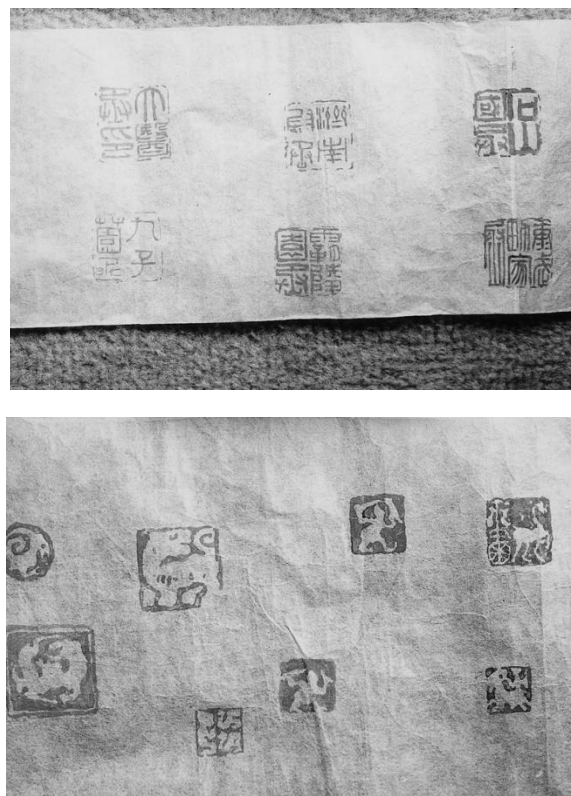


図7 古印模写

四 印 譜

山田正平の主たる印譜は十一種類である。正平の生前には九種類の印譜が、没後には二種類刊行されている。また、昭和五十一年十月に、木耳社より『山田正平作品集』が出版されている。印譜名・刊行年・正平年齢の順に提示し略解する。

- 1、『梅檀二葉香印譜』（一帙一冊） 大正三年 十六歳
- 2、『正気印譜』（一帙一冊） 大正五年 十八歳
- 3、『羅漢印譜』（一帙一冊） 大正十五年 二十八歳
- 4、『八遷印譜』（一帙一冊） 昭和二年 二十九歳
- 5、『吾妻印譜』（一紙） 昭和三年 三十歳
- 6、『銷夏鉄筆』昭和四年 三十一歳
- 7、『辛未印譜』昭和六年 三十三歳
- 8、『信毛印譜』（一紙） 昭和七年 三十四歳
- 9、『陶靖節印譜』（一紙） 昭和九年 三十六歳
- 10、『正平陶磁印譜』（一帙一冊） 昭和十一年 三十八歳
- 11、『聴雪盧寿印譜』（一帙二冊） 昭和二十五年 五十二歳
- 12、『正平鉄筆』（一帙二冊） 昭和三十七年
- 13、『一止廬印存』（一帙二冊） 昭和三十八年
- 14、『一止道人印譜』（一帙二冊） 平成十二年
- 15、『山田正平作品集』（一冊） 昭和五十一年

1、『梅檀二葉香印譜』（図8）

『梅檀二葉香印譜』は、これまで公表されたことのないもので、現在山田家に蔵されている。正平の印譜として最も古いものであり、非常に価値が高いものである。印文は、姓名印や遊印など多種にわ



図8 『梅檀二葉香印譜』

たっている。押印数は六四顆ある。この印譜の封面には山田寒山が「梅檀二葉香印譜」と題しており、刊記には「大正三年冬至三日題正平君印々」とある。この事からこの印譜は、正平が寒山のすすめにより上京した直後に編まれたものであることがわかる。次頁に誰によるものかは不明だが、山水が描かれており「儒家更世空□外不許人間禮白雲癸丑冬為三五童正平木村君」と賛がある。また次に、石図が描かれており「癸丑暮冬写為十五童正平木村君雅囑雪亭」とある。また最後の一項にも画が描かれており「大正貳年癸丑十二月下浣為木村□清沅對石学人」と賛がある。

さて、この印譜は正平が篆刻を始めてまもなく刊行されたものであり、正平の初期の印風を知る上で絶好の資料となるものである。

この時代、正平は、実父の木村竹香や寒山など多くの人々から様々な事を吸収していた頃であり、まだ正平にとり模索の時代といえる。ただ印を逐一見てみるに、章法においてはやや不自然さを感じさせるものがあるが、実に多様な形式をとっているのには驚かされる。

2、『正気印譜』（図9）

『正気印譜』は、正平の名を世に示した最初の印譜である。『正気印譜』を刊行するいきさつについて正平自身が次のように記している。

そのころすでに蘇州の寒山寺へ新鑄の梵鐘も贈り、新たに千葉へ日本寒山寺建立のことを発願、墨竹を描いて全国募縁を企て、私が上京して四、五ヶ月目に越後高田方面から柏崎佐渡と出掛けられた。それがついに二年となり三年にも及んだのであったが、少年時の私も勃々とした制作への情熱が抑へ難くなつて来ていた。旅先きの和尚からの通信やら送金も私の手を通じてであった。偶々四十円かの為替が送られて来てあって、今の妻その頃の家娘、私を揶揄して一銭でもゴマカセヌだろうと云ふ。ヨシそんならやると、そのまま神田で二階を借りうけ一ヶ月間で完成したのが石印六七顆の正気印譜である。澹如先生の長い序文を得て、その版木も自刻で、今の陛下の立太子式の御祝に別製の一部を献上した。あとから菊の紋章のついた嘉納の謝状が来て実父に送ったら大いに喜ばれた。印譜の仕事の最先づ片づいた頃、日光の紅葉が盛りと云ふので出掛けて行って東照宮を参観してからマシラの如く山肌を攀じ登り中禅寺湖を半周して帰った。満山、照り輝やくすばらしい紅葉であった。帰ってから恐る恐る澹如先生へ印譜を持参すると序文の彫り方

は賞められたが、時にお前は寒山寺に居らないそうだが皆が心配しているから帰れと云はれ、道具をぶらさげて寒山寺へ戻った。この正気印譜の印は実兄の勤めていた日魯漁業の前身堤商会主人であった堤さんが買つて、負債は賞還され面目は潰れなかった。堤さんとはこれが縁となり後年、支那へも游学させてくれたのである。印譜は旅先きの和尚へも送り跋文を得てこれが私の十八才の出来ごとである。河井先生もどこかで御一瞥を給つたらしい。

翌年は京都へ遊びに出掛けこの印譜が縁で国画創作協会直前の土田麦仙氏と知り、麦仙氏の帝展出品作の春禽趁晴の絵に私の作印が用いられてある。

（「会津先生と私」『書品』七九号、一九五七年四月）

これは藤田東湖（一八〇六―一八五五・水戸の人・幽谷の子・名は彪・字は斌卿）の正気歌を刻したものである。印数は六十七顆で



図9 『正気印譜』

ある。帙には正氣印譜と自題しており、表紙は「正氣印譜正平謹篆」と版木に自刻している。序は滑川澹如（一八六八～一九三六・名は達）によるもので、やはり正平自身が版木に刻している。澹如は山田寒山と親しかった人であり、書・画・篆刻をよくした。また、正平が山田家に入る時幹旋したのが澹如夫妻である。序を次に引用してみる。

滑川澹如『正氣印譜』序

印譜、濫觴宣和。其後、正厚之有考古印譜、吾衍有古今印式、姜夔有集古印譜、趙子昂有印史。踵芳趾美代有作者。王元章用花乳石、鐫篆、石印治行。迨明文何相繼而出、治印之法大備。至清朝丁龍泓唱之於前、吳昌碩接之于後。文質彬彬、超絶乎。前代、周櫟園云、治印之人不能書、其印不足觀矣。木邨正平幼而善鐫印、就余學書。頃者膺皇太子冊立、檢藤田東湖正氣歌、布二字於石、而製印譜一冊奉上。殿下問序於余。盖古人集印譜者、多採異代異人而彙集焉。據集自家所作、而為譜者、輒於明末也。其體非古、惟正平所作、非敢誇自家之技。聊欲鼓吹、邳隆之治耳。雖體非古、不容尤也。正平年齒、僅壯、勉而不忘、他日之成、可跂企也、勉々旃々。

大正丙辰十月、澹如滑川達

この中で澹如は正平は自分に書を学んだと興味あることを述べている。次に、寒山の題詩があり、これも正平の自刻によるものである。次の通りである。

題詩

天地正大ノ氣、觥々トシテ照ス二神明ヲ一、之子運刀シ鑿スルニ、聊カ將ニレ頌セント二太平ヲ一、彈ジ二古調ニ十字ヲ一題ス二正氣印譜ノ後ニ一 寒山山田潤

さて『正氣印譜』に関して岡本椿處（一九〇四～一九九二・篆刻家）は次のように述べている（6）。

大正二年（十五歳）この頃より篆刻を始めるとありますが（印を刻し始める）とても訂正なさった方がよろしいでしょう。父親の竹香に教えを受けたのは事実です。翌年会津八一を訪ねたのも本当の事です。しかし同時に正平さんはこの時期、父椿所より篆刻の指導を受けているのでございます。門人というには多少疑問が残りますが、竹香さんに見れば息子の正平さんを篆刻の道に進めたかったのでございましょう。当時は先代椿所が東京で勢力をもっていましたから、木村父子が椿所の門を叩いても不思議ではありません。ただし父は徽派の印人でした。当時は徽派も浙派も実力主義だったのです。五世濱村蔵六、河井荃廬、山田寒山等と一緒に仕事をした事を見てもお解りいただけるでしょう。ですからそれほど党派にはこだわりませんでした。正平さんが生きておれば「椿處さんの言うとおりだ。」と言うに違いありませんが、十六歳の折、会津八一と岡本椿所に

入門したのは確かな事でございます。『正氣印譜』大正五年、正平十八歳の作品「天地正大氣粹然鐘神洲」の印は椿所の筆法の模倣です。『八僊印譜』大正十五年の作から大きく正平さんは変化していきますが、これは荃廬翁の随伴として支那に渡り、呉昌碩、徐星洲の影響を受けたからでしょう。ですからごく初期の作品は先代椿所や後の父君山田寒山の影響がありますが、師は椿所でしたので、父の匂いが作品に芬々としているのでございます。これも年譜につけ加えた方がよろしいかと思われます。徽派から出発した事に後ろめたさはなにもないはずで。正平さんが自分自身で年譜を編むとすればきっとそうするでしょう。従兄弟の安藤更正もこの事についてはあちらこちらで書いていますが、『書豪会津八一』をごろんなればお解りいただけるでしょう。その事よりも私が事実、父の取り次ぎ役をしているのですから、年回りが同じような正平さんと私は、篆刻以外でも随分とおしゃべりをしたのでした。

（『私の篆刻道』一荳書房、一九七九年十月）

また、安藤搦石（一九一六～一九七四・書家）の記述がある。

「正氣印譜」は弱冠山田正平の天稟を当時の芸苑に示したばかりでなく、若き日の土田麦仙と相知る因縁となったことは「会津先生と私」にも記されているが、爾来、前後を知らぬまに書きつければ、平福百穂、小川芋銭の知遇を得たほか、棟方志功、中川一政等々の画家と相知って、寧ろそうした他のジャンルの造型芸術家の観賞眼に曝され乍ら、其の芸魂を練っていったものと考えられる。寒山の印風は、高芙蓉以来の日本式漢印風とも呼ばれるものを継いでおり、「正氣印譜」また後のさまざま

な可能性をはらんで柔軟だが、尚寒山の刻風に依っている。伏見冲敬氏の言葉では、先生の刻風には特に大きな変り目と言うものはない、ということだ。偶目した壮年の「天工人拙」と近作の「天工人拙」とを比較すると、成る程後年の「天工人拙」は、壮年のそれに殆んどそのモメントを求め得るもののごとくである。人はその処女作に向かって結晶する、と云う。今尚、山田先生自身「正氣印譜」を愛しているらしいのは、そこに先生の青春の日の追憶が籠められているからばかりではなく、無限の創作のためのイメージもまたそこに籠められているからかも知れない。

（「歴訪・山田正平」『書品』九八号、東洋書道協会、一九五九年四月）

椿處・搦石の二人が言うように、正氣印には、先代岡本椿所の風、つまり、明末の何震を首とする篆刻の流派である徽派の趣や、寒山の風、つまり芙蓉派の趣が随所に見える。それは章法の勤儉さや、線の揺れに窺える。また正氣印は正氣歌という忠君愛国の思想をもちこんだものを印文としたためか、形式が一定であり、一見すると平凡に見える。しかし仔細に眺めると、後年の正平の特徴である観る人を魅了してやまない素朴で滋味ある美が見られ興味ある譜といえる。

3、『羅漢印譜』（図10）

『羅漢印譜』は、今回調査する中において新しく発見されたものである。これは現在浅草橋で印材の御し業を営む藤山鳴堂が蔵している⁽³⁾。藤山の話によると、今から数十年前、東京の某骨董屋が藤山鳴堂の元に山田寒山の印があるがどうかということ売り

にきたらしい。寒山なら買おうということで買ったが、当時の金額にして百万円の高値のものであったという。しかしその後羅漢印をみてみると、これは正平の刻印であり、現在では非常に光栄に思っているという。

羅漢印は全て陶印であり、印の形式も大小さまざまで、方印あり、円印あり、多種に亘っている。また、羅漢印は、漆塗の厨子に収められており、外扉は五世浜村藏六が「有水皆含月無山不帶雲」と刻している。また、印譜を収めている小扉には初世中村蘭台が「聖朝無口物」と刻している。印譜の帙は「羅漢印譜」と正平自身が題している。封面は「十六羅漢陶印」とこれも自題している。刊記は「大正丙寅四月八日正平製」とある。つまり、正平二十八歳の時のものである。また、永平元峰が無形張現と題している。印文は、「不勞亦

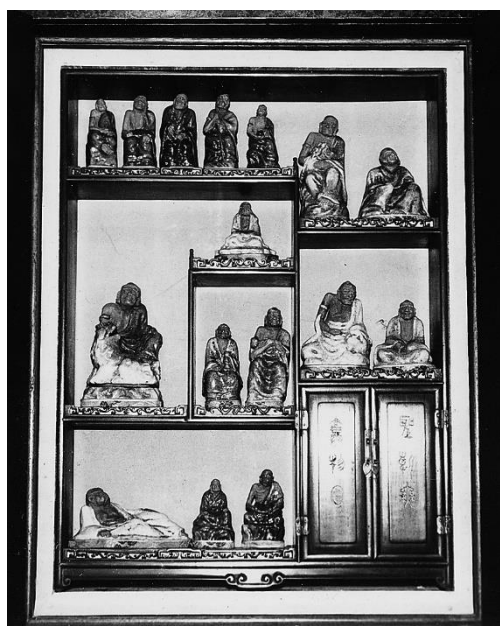


図 10 羅漢印と厨子（現在藤山輝夫氏蔵）

休・「三界超倫」・「転環無首尾」・「随類得解」・「孤月分照」・「白毫一糸捲須弥」・「道懷空寂冷湫々」・「真龍更愛龍」・「円融法界撥転仏魔」・「普薰難思議」・「白石眠醒所青山笑點頭」・「展開無字経」・「前釈迦兼後弥勒中間大法一肩擔」・「友枯枝涉崖」・「拈起玉如意」・「端坐默游空劫春」である。印譜の片面には尊者の名と印文を書き、片面には押印している。『羅漢印譜』は『八僊印譜』と同時期のものであり『正気印譜』から丁度十年後の制作である。印の形式はすべて異つたものであり、その素材を十二分に生かし刻しあげた正平の技量は非常に優れたものである。

4、『八僊印譜』

『八僊印譜』は、新潟県安田村の富豪斉藤徳太郎のために刻したものである。徳太郎は正平にいろいろな方面で援助をした人である。徳太郎がある日山田家に蔵されていた山田寒山の傑作、羅漢印を求めたが、正平はそれは譲れないがそのかわりにということ刻したのが八僊印である。

帙は正平が八僊印譜と自題している。また封面は「八僊人陶印」とこれも正平筆による。刊記は「丁卯臘月正平自題」とある。つまり、正平二十九歳の時のものである。印譜の片面に八僊人の画を描き印文を書いており、片面に押印している。印文は、「長生久視」・「日行数万里」・「青山雲水窟此地是吾家」・「瓢蔵造化」・「心即天々即道」・「黄梁猶未熟一夢到華胥」・「似狂非狂」・「食雲母」である。八僊印は前者と同じく陶印であり、印の陶像の形式は多種にわたっている。

5、『吾妻印譜』

『吾妻印譜』は、筆者が見たかぎりでは、普通にいう印譜の体裁

はとっていない。これは一枚の用紙に印と印文が交互にあり、印文は版木に刻したものである。押印数は十三顆である。刊記に「昭和戊辰七月遊上州吾妻谿谷客窓下乗興作此正平」とあり、正平三十歳の時に成っている。印は刀の非常にきいた神経の行き届いたものであり、正平の神経のこまやかさが感じられるものである。版木に刻した印文もすばらしいもので、正平の刀技の確かさが分かるものである。

6、『銷夏鉄筆』

『銷夏鉄筆』は、一枚の印箋に十二顆押印されたものである。款記に「己巳七月」とあり、正平三十一歳の時に成っている。

7、『辛未印譜』

『辛未印譜』は、一枚の印箋に押印されたものである。款記に「辛未夏日」とあり、正平三十三歳の時に成っている。

8、『信毛印譜』

『信毛印譜』は、『吾妻印譜』と同じく一枚の印箋に印文と印とが交互に押印されたものである。押印数は十一顆である。款記に「壬申八月遊於信毛之山水帰来作此正平」とある。つまり正平三十四歳の時に成っている。

9、『陶靖節印譜』

『陶靖節印譜』は、私が調べた限りにおいては見あたらなかった。元昭学院美術教師関健一によると、一枚の紙に押印されたものという。印文は陶淵明の詩句である。正平の自筆年譜にもこの印譜名がみられ、当時は存在していたことがわかる。正平三十六歳の時に

成っている。

10、『正平陶磁印譜』

『正平陶磁印譜』は、大坂の陶芸家丹司豊山を訪ね、寄寓一ヶ月にして成ったものである。正平は陶磁印は求めに応じ譲ったが、その時印譜を一冊づつ進呈したものらしい。

帙には正平陶磁印譜と版木に刻しており、表紙も同じものが附されている。初頁に正平陶磁印初集とこれも版木に刻している。押印数は三〇顆である。刊記に「昭和丙子四月浪華客中作此」とあり、正平三十八歳の時のものである。さて、七月二十八日付の『新潟毎日新聞』に正平は印二顆とともに紹介されたが、その時の印が白文「風月雙情」と朱文「不繫之舟」であり、両印とも『正平陶磁印譜』所収のものである。この「風月雙情」印は、新潟の桜井定市が求め、現在も所持している。桜井によると、この印を求め、正平に話すと是非見たいということで預けておいた所、帙箱入りで「風月雙情」と題してかえされたそうである。正平は翌年から泰東書道院審査員に委嘱されており、陶磁印は正平が世に出る前の篆刻として興味深いものである。

11、『聴雪廬寿印譜』

『聴雪廬寿印譜』は、詩人日夏耿之介（一八九〇～一九七二）の華甲記念に刻されたものである。帙には正平が「聴雪廬寿印譜」と自題している。刊記に「日夏先生華甲記念印譜正平刻」とあり、正平五十二歳の時のものである。押印数六〇顆であり、これらは三、四分角の小印による姓名印である。同印は耿之介が華甲記念として有縁の人達に贈ったものである。一印一字のものが多く、他の印譜とまた別の味わいを見せている。それは非常に現代的で、文字の造

型を突き詰めた構築的なものである。

12、『正平鉄筆』

『正平鉄筆』は、正平没後まもなく、正平次男潤平氏により押印されたものである。潤平によると、山田家に蔵していたものを散帙するのを防ぐために押印したという。帙には「正平鉄筆」と正平の印譜の印箋の文字をとり題字としている。押印数六一顆である。山田家には現在では更に多くの印を収蔵するが、これは所蔵者の方が亡くなられ、贈られたものや、山田家から見つけ出されたものである。

13、『一止廬印存』(図11)

『一止廬印存』は、正平没後一周忌(昭和三十八年)に正平の追善供養のため作成したものである。五十部を完成し、山田家より関係者に贈られている。

帙・冊の題箋と封面を保多孝三(一九〇八〜一九八五)が刻しているが、その経緯について保多に師事した鈴木知秋は次のように記している。

一止道人山田正平先生の一周忌に「一止廬印存」五十部が完成し、山田家より関係者に贈られた。

所収の印は、山田家にある展覧会出品作に、武者小路実篤、棟方志功、中川一政、津金雀仙、赤羽雲庭、松井如流といった諸先生方の蔵印を併せて、計四十一顆である。

この「一止廬印存」の冊・帙の題箋二種と封面とを保多孝三先生が刻られた。

遠慮深い保多先生がこういった事を引き受けられるのは稀

な事であるが、欽慕して止まぬ山田先生の事ならば、という事であったのだろう。

私は、先生が紙に書かれた段階で見せていただいたが、さてこれを板に刻るとどうなるかと、大変興味深かった。

この三点の中で私は、封面が一番好きである。楷書の小さい字の部分など、先生の緊張して刻つられる姿がうかがえる様で好きなのである。

後にわかった事だが、山田先生の門人栗野大允氏は、山田先生の刻印を譜となし、山田先生に「一止廬印存」の題箋二葉を

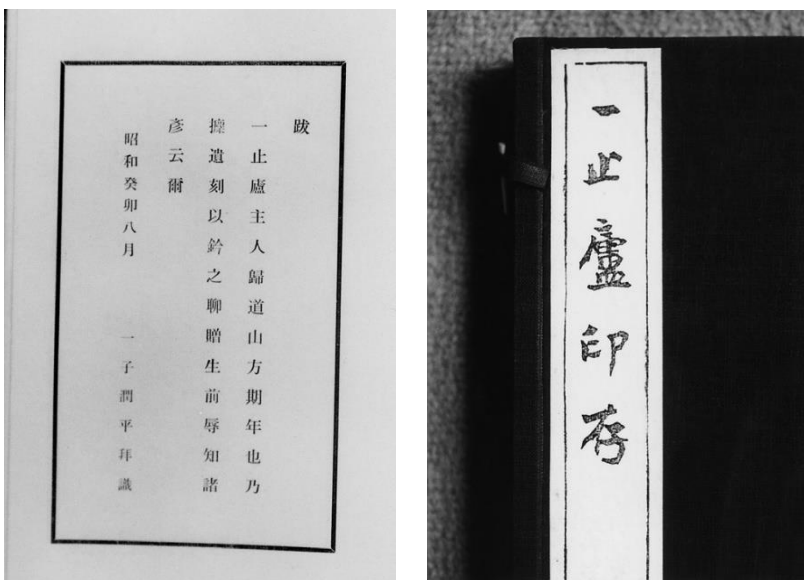


図11 『一止廬印存』

書いていただいていた。

この時その存在を知っていたら、或は慎み深い保多先生のこと、題簽は刻られなかったかも知れない。

（鈴木知秋「解説」『保多孝三作品集』谷川商事株式会社、昭和五十四年十二月）

私は、山田正平と保多孝三の所縁が形をなして世にある事を、幸せな事と思っている。

この印譜所収印は四一印であり、印は展覧会に出品した代表作と姓名印などが収められている。『一止廬印存』は正平の篆刻のすばらしさを十二分に味わうことのできるものといえよう。

14、『一止道人印譜』（図12）

『一止道人印譜』は、限定五十部作製された。四十九顆収載されており、二顆は印刷である。発行者は山田潤平、木版作製は計良袖石氏である。

15、『山田正平作品集』

昭和五十一年十月木耳社より『山田正平作品集』が出版された。これは印譜そのものではないが作品集所収の印数は多数に及んでおり、正平篆刻の魅力をあますところなく掲載しているといっても過言ではあるまい。そこであえて印譜の項にとりあげる。また作品集の出版を記念して、昭和五十一年十月五日から十一日まで木耳社主催による「山田正平作品展」がアメリヤ書廊で開催された。出版の経緯について小木太法は次のように述べている。

木耳社から「山田正平作品集を出版したい。」と申し入れがあ

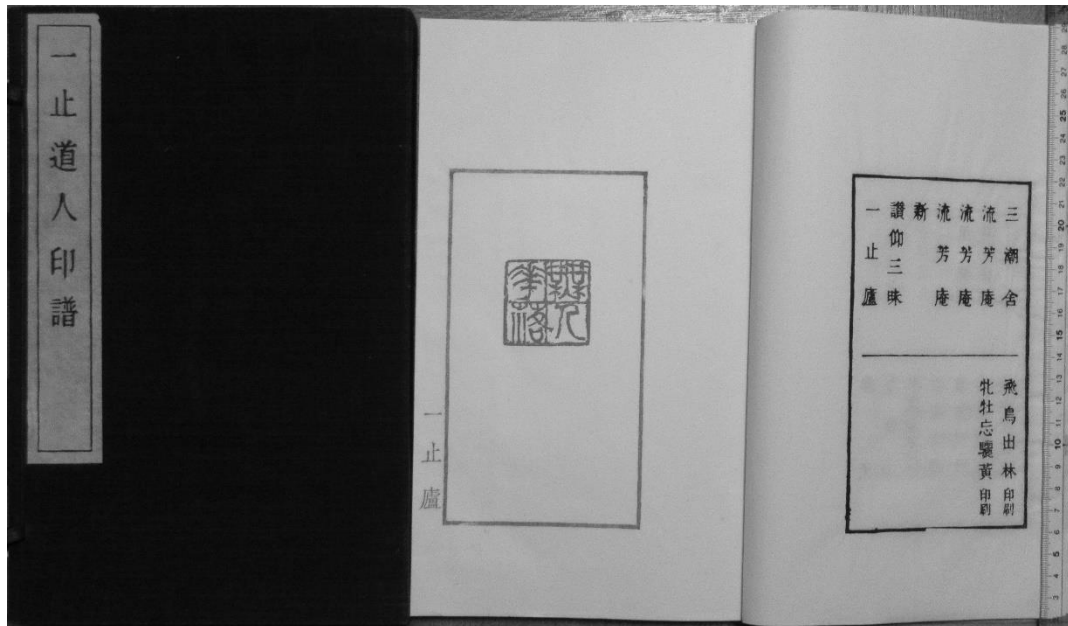


図12 『一止道人印譜』

つてから十年近くもの歳月が過ぎた。この間に資料集め、整理、編集などと仕事も進んだが発刊には至らず、徒らに曆を捲った。近年になつて併せて作品展も開催するとの意も加わり、またこれとは別に、アメミヤ企画から山田正平展の企画の話も出たりして、氣運が熟してきた。幸にも喜美子夫人がご健在で、この話の実現を楽しみにしておられた。

昭和五十一年十月五日から十一日まで、木耳社主催、山田正平作品集出版記念、「山田正平作品展」がアメミヤ書廊で開催された。札幌の松倉晴海氏、愛媛の鴻池榮齋氏は翁と一面識もない方、両氏をはじめ多くのの方がこの為に上京され、入場者数は二千数百に及んだという。芸術院会員瀧井孝作、西川寧の両氏が熱心にご覧になり、若い学生が毎日足を運ぶ風景は何と解すべきだろうか。

山田正平翁には、いわゆる弟子がいない。しかし一止精神を理解している人は多い。益益多くなったと思う。この作品展も作品集もこの点久し振りのヒットとなった。私への私信に、「秋霖心暗し。」とあるが、今秋の雨は実に爽やかだ。

〔筆とエンピツ〕飯島書店、一九八一年八月〕

これから、作品集出版については相当以前から計画されていたことがわかる。また、この時出された出陳目録には次のように述べている。これは昭和三十九年に中央公論画廊において開催された「山田正平遺作展」の時の案内状に載せられた文に加筆したものである。

一 止道人山田正平先生

その書は篆隸の蒼石に出でて真草また後世の嫵媚を厭い、その画は朱奄の風骨に傾倒して兼ねて木米、鐵齋の高逸を攝り、

さらにその印に至つては呉趙を透過して直ちに丁敬身の古格に参ずるものがありました。

先生少きより跌宕不羈、中年城西の地に棲遲して蹤迹を韜晦し、芸境いよいよ高きを加えましたが、昭和三十七年書道使節に長として中国に渡り、途中病を得て遂に起たず、芸苑頓に寂寞を想わしめるものがありました。

先生逝きて既に十四載、書壇夙に盛栄なりと謂ども、巨星墜ちし里の落莫覆い難く、先生の芸境を欽慕する声の頓に高きものがありました。因つて遺作を蒐めて作品集を編み、江湖の清鑑に供し、併せて在天の芸魂を慰めんとするものであります。識者各位のご声援が得られれば幸いです。

作品集は七〇部限定で実押三点帙入の特製本と、普及版とが出版されている。A4の変形判で二六六頁にも及ぶ豪華本である。題簽は中川一政により、序は中川一政、西川寧、堀口大学の三人による。堀口大学のものは一周忌の遺作展の時に図録に載せたものを転載したものである。この作品集出版について宮川寅雄（一九〇八―一九八四年、和光大学教授）は次のように述べている。

昨年十月に、大久保の雨宮で、山田正平作品展が催され、木耳社から『山田正平作品集』が出版された。三女の梅枝氏に確かめると、没後三周忌に、中央公論画廊で「遺作展」が開催されて以来というから、世間は、この偉大な印人を埋めたまま、十三年も空欠にしたのである。一止先生のたぐい稀れな篆刻、刻字、書画類の分かる者が多くない。ともかくも、ようやく『山田正平作品集』が刊行された。これを通して、その秀拔、高古の技量を窺い、その奥底に、六十四年の生涯を珠玉のように美

しく生きた一世の印人がいたことを偲んでほしいと思う。

『会津八一の世界』文一総合出版、一九七八年十二月）

私も宮川に同意するものである。現在、正平没後二十年になろうとしている。正平芸術に新しい評価がなされてもよい時期ではないだろうか。

五 正平の篆刻における一解釈

山田正平の篆刻が、これまでの長い篆刻史において類似点を見い出せる時代、また印人がいるとすれば、いかなる時代、いかなる印人であろうか。これは今後十分な検討を要するが、それは秦漢時代と、呉昌碩（一八四四～一九二七）、日本の印聖と称される高芙蓉（一七二二～一七八四）、そして養父山田寒山が挙げられよう。正平が秦漢印を学んだことは、本節の中で述べたが、山田家に残されている正平の秦漢印の模写から窺える。また、正平が篆刻学や文字学において多くの益を受けたと思われる会津八一が、秦漢印を非常に好んでいたことから理解できる⁽⁷⁾。実際正平の印をみると、印そのものが持つ莊重典雅さにおいて秦漢印と同類のものとなっている。ただ秦漢印を宗としながらも、それを脱却した近代感覚に立脚した作品を制作した。

次に高芙蓉について見てみる。芙蓉は、詩・書・画・篆刻を善くした。中でも篆刻に最も優れており、徐々に舶載されつつあった古銅印譜を学び格調の高い刻風で知られる。当時の明末清初の低俗な刻風を退けて、直接秦漢印を尊び、復古を提唱した。芙蓉はわが国の篆刻の印聖として仰がれている。正平の篆刻は、この芙蓉に類似点を見出すことができる。それは両者とも日本人的な高雅な刻風で

あり、正平の刻印そのものが醸し出す風韻や、正平の志向していたものを考えてもいえる。そして正平が師としていた寒山が、芙蓉派の篆刻を善くしたことなどを考え合わせてみると妥当と思われる。

芙蓉も正平も秦漢印を学び、換骨奪胎日本人的な刻風を創始した。これは西川寧のいう「俳精神」、伏見冲敬のいう「軽み」といったもののへと繋がっているものである。正平を日本篆刻史上、芙蓉派の系譜を継ぐ篆刻家として位置づけてみたい。ただ、芙蓉派を単にそのまま受け継いだのではなく、中国に遊学し、清朝から民国にかけての印人の影響のもと、それまでの芙蓉派に新生面を開いたのである。更に、正平の刻印における近世以後の印の歴史を鑑みて、特異点を列挙する。

- 1、空間処理の斬新さ
- 2、刀法における新生面
- 3、陶印における妙趣
- 4、刻字における芸術性

以上の内1と2に関して多少の説明を補足しておく。1に関しては、これは印人なら誰しも考える事であるが、正平においては特に顕著に見られる。それは線と線との複雑な絡み合いにより織り成される空間の斬新な表現であり、充実である。これは包世臣が鄧石如から学んだ書の根幹である「字画の疏なる処は以て馬を走らしむ可く、密なる処は風を透ら使めず。常に白を計りて以て黒に当つれば、奇趣すなわち出づ」（包世臣『安吳論書』「論書一述書上」）⁽⁸⁾などと相通ずる。正平の印は、この疏密の法則を極限まで突き詰めたものであり、これが彼の印の最大の魅力になっている。

2に関しては、毛筆で書かれた線の刀法への応用ということである。つまり、筆意を生かした刀法のことである。これは篆刻がまぎれもなく書であり、工芸やデザインなどと一線を画する重要な点と

いえる。つまり、書の大切な特質ともいえる線の一回性である。もう一つは毛筆による潤渇表現の印への活用である。これは、印の表現範囲を広くしたといえる。

六 おわりに

山田正平の篆刻は、これまで「卒意」、「無技巧」などと説明されてきたが、これは妥当と言えない。むしろ彼の篆刻の表現は、技巧を超越した、より自然な趣まで消化されたものである。

正平の篆刻は、養父寒山以来の多くの師友に恵まれた環境の中、風韻ある独自の境地を開拓した。古今の印や諸家の長を取り一家を成した。その感興を重んじた斬新で気魄の雄大な刻風は、芸域の広さによるものといえよう。文人気質を持った数少ない篆刻家である。正平の本質ともいえる布置の妙や刀技は、感覚的ではあるが、単なる軽妙・洒脱なものではない。卓越した金石の学を背景に、それを徹底して追求し自家薬籠中のものとした成果である。正平芸術の風格は、芸境の高さであり、高邁な美意識と表現による。正平が篆刻を芸林の域に昇華させた功績は極めて大きいといえよう。

正平は四絶の芸術境を目指したが、彼の成し遂げた類まれな偉業を考えるに、高芙蓉がわが国の「印聖」と呼ばれるのに対し、「印仙」と称してもよいだろう。

【注】

(1) 筆者編著『高芙蓉の篆刻』（一九八八年六月、木耳社）。高芙蓉（享保七年～天明四年、一七二二～八四）は、甲斐高梨の人、名は孟彪、字は孺皮、

芙蓉と号す。書・画・篆刻を良くし、高雅で風韻ある篆刻を刻し、「印聖」と称される。本著は、高芙蓉についての総合的研究書である。芙蓉の生涯と芸術、なかでも篆刻に関して研究するとともに、彼を祖とする「芙蓉派」の篆刻家達の系譜を明らかにしたものである。更に新資料の提示も行なった。

(2) 『山田正平先生篆刻講義ノート』は、一九六三年六月、正平に指導を受けた東京学芸大学の卒業生のOB会である「硯心会」の人達の手により纏められたものである。正平の講義ノートと受講生の講義メモを基としている。正平の篆刻論として最も纏ったもので、彼の芸術論を知る上で欠くことが出来ない。

(3) 佐藤耐雪は書道家・篆刻家、山田正平に師事する。山形県東田川郡庄内町に私設耐雪書道美術館を開設する。

(4) 山田正平が布字して遺された篆刻を紹介した。

「山田正平研究―周辺の人々とその交友（Ⅰ）―」（『広島文教人間文化』第三号、広島文教人間文化学会、二〇〇三年三月）

(5) 「保多孝三小考―附保多孝三談話録―」（『楽篆』第四六号、三圭社、二〇〇九年二月）

(6) 岡本岱「初世・二世岡本椿所の篆刻」（『栃木史学』第十五号、二〇〇一年三月）

(7) 奈良本辰也「歌と字」（『会津八一全集』第八卷附録「月報八」中央公論社、一九六九年五月）による。

何といっても印は漢時代のものが最高だ。漢時代の仏像の力強さ、稚拙な美しさが、そのまま印に現われている。漢時代の印を刻ってみるんだね。自分の手で刻って漢時代の線の美しさ、力強さを実感としてつかむんだ。

(8) 『中国書論体系』（第一五巻清五）（二玄社、一九八三年十月）

第二節 詩について

一 はじめに

山田正平は詩作は多くない。しかし詩精神を大切にし、四絶の芸術境に心を尽くした。本節では、正平の詩に関して論じる。

二 若年の詩と文

まず山田正平の詩に対する考え方をみてみたい。「詩は志をいうもの」、「詩は別才なりの語あり、然れども読書せざるの詩人なし」と述べている。また詩と書と画との関係について「詩・画と書との関係を考えれば、書は詩文を書すもの自ら明白の関係あり。而し、詩・書の関係も古来、詩中有画、画中有詩、或は有声の画、無声の詩の語もある所以なり。然らば、诗情なき画ならずやと言え、画は画なり。但上位のものならず。芸術とし芸苑の珍重とはせず」と語っている。正平の芸術観の中では、詩・書・画・篆刻は合一するもので切り離すことのできないものであることが推察できる。つまり、文人的教養の上に立ち東洋芸術の伝統を継承発展させようとしたのである。

さて、正平には自作の詩はほとんど遺されていない。しかし松下秀麿が「古酒」第八冊（一九六二年十月）で次のように語っている。

むかし、一緒に酒を飲んだころ、私に示した自作詩のなか

に（走馬燈中逐六塵）とか（^①）、または（孤高笑殺百年身）と
いうような句があったが（^②）、山田さんは、やはり時代を超越
して天空の一角を睨んでいた人である。

また、松下は私宛の書簡で次のように記している事からも理解できる。

正平の詩作は、山田家の遺稿について調査しなければ分らない。しかし、この国の高芙蓉一門、葛子琴らを見ても篆刻人は詩人である。又詩の心得のない刻者は技外の余韻が浅い如くである。正平は東洋的な詩の理解は完璧に近かったと思われ、同時にその詩作も文人としての究極境を打ち出したと（作品は少なくとも）私は思います（一九八〇年十月十六日）

私は山田家に遺された正平の資料を整理するにあたり、詩作が遺されていないかに注意した。正平が山田家に養子として入る前木村姓を名乗っていた頃の詩と随想を発見した。「百瀬版」の八枚の原稿用紙にペン書きされたものである。これらは正平二十歳以前のものであると考えられる。詩の文字の書風は、彼が一九一四年（十六歳）の時に蘇軾の「前赤壁賦」を刻した、竹製の筆筒の文字に類似している。ここにやや長文であるが掲載する。

掲載にあたっては、原本にいくらか誤記・誤写・誤脱が見られるが、そのままとした。また底本の字体を尊重しでうる限り忠実に記した。更に濁点・句読点・行移りなどもそのままとした。不明字は□で示した。

高尾登山途中作

木村正平（図1）

高尾の登山十二人 途中の行事奇珍を盡くす 鶏鳴き犬吠
ゆ寥々たる夜 一路の暗香浮動すること頻なり

同

首を回らせば雲は深く去路は遥なり 西天向はんと欲せば
更に迢々 暫時吟望して橋上に立つ 月出でて島啼き寂寥を驚
かす

同

萬里に雲垂れ月は四更 一連の旅客西を指して行く 淙潺



図1 山田正平 漢詩

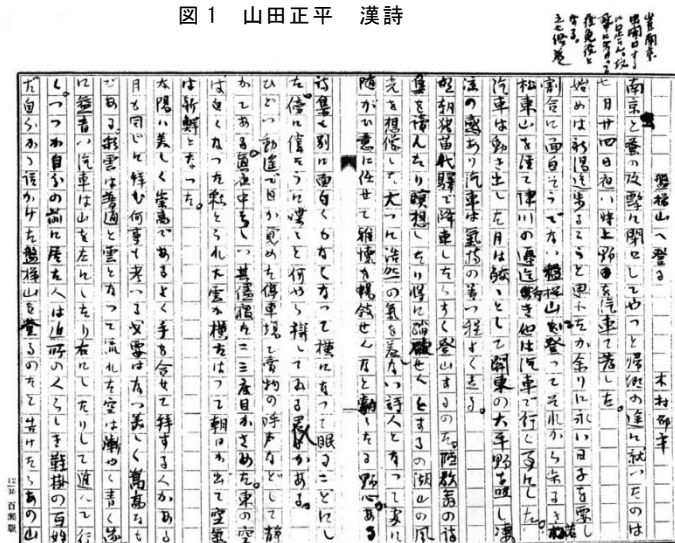


図2 山田正平 随想

たる野水は東に向ひて去り 影は黒く茫々として艸樹平かなり
頂上

収盡す微茫十二州 天表獨立す縦に吟眸す 満腔に浩然の
氣を養ひ得たり 古今萬斛の愁を笑擲す

この詩に対して評が書き加えられている。正平は一九一八年二十
歳の時、二松学舎に入り漢学者三島中洲に漢学を学んでおり、その
時のものと思われるが評者は不明である。「評 筆墨横逸にして脱俗
底には感服には感服にて、去りながら関八洲繩を以て引つける様な
点もある所謂無理な点の事。多謝。」

盤梯山へ登る

木村邵平（図2）

南京虫と蚤の攻撃に閉口してやつと帰郷の途
に就いたのは七月二十四日夜八時上野を汽車で發
した。

始めは新潟迄歩るころと思ふたが余りに永い
日子を要し割合に面白そうでない盤梯山に登って
それから歩るき若松東山を経て津川の邊迄行き他
は汽車で行く事にした。

汽車は動き出した月は皎々として關東の大平
野を照し凄涼の感あり汽車は氣持の善い程よく走
る。

明朝猪苗代驛で降車したらすぐ登山するのた。
陸放翁の詩集を讀んだり瞑想したり將に踏破せん
とするの湖山の風光を想像した大いに浩然の氣を
養ない詩人となつて處に随がひ意に任せて雅懷を

暢敘せんなど勃々たる野心がある詩集も別に面白くもなくなつて横になつて眠ることにした。傍に偉そうに喋々と何やら辯してゐる人がある。

ひどい動揺で目か覚めた停車場で賣物の呼声などして静かである。眞夜中らしい其儘寝た二三度目かさめた。東の空は白くなつた彩どられた雲か横たはつて朝日か出て空氣は新鮮となつた。

太陽ハ美しく崇高であるよく手を合せて拝する人がある月も同じに拜む何事も考へる必要はない美しく嵩高なものである。彩雲は普通と雲となつて流れた空は漸やく青く遂に益青い汽車は山を左にしたり右にしたりして進んで行く。いつか自分の前に居た人は近所の人らしき鞋掛の百姓だ自分から話かけた磐梯山に登るのと告げたらあの山です幸い今日はハれて雲かない山に雲かあると咫尺を辨辨せず壑底へ落ちる危険があるからおよしなされ。と注意して呉た。だん、見えて来た思ふたより低い様だ。しかし一体山は低そうで實際登るとなか、高い山は偉人の資格がある今一人百姓と一緒に居る青年上野から乗つて居るらしい話して見ると上野薬学校の生徒で若松へいくのだ。そうした桃をくれた貰うて食べた美味だった。

猪苗代驛へ着いたあ、やつと乃公の舞臺だ腹も減つたし服装も整へねはならぬ茶屋へ寄つてゴサ、鞋、握めし、など用意全くなる登山しかけたい十時滅法暑い流汗淋漓拭き、、杖を立て、上へ上へと登るやあや雲か出た忽ち頂上の方は雲に包まれ振り顧ればもう下にも雲かある車中の人の注意を思ひ出さずには居られない。一寸間違へると軍武之獄の二代目を臆病にも抜け出したそれとて返る勇氣もない今は全く前後四五間しか見えぬがさ、音かする路傍の樹下で老人か縄仕事をして居る

あ、嬉しい町寧に帽子を取つて雲あり登山危険なるや否やを問ふ答ひて曰く可なり雲忽ち晴るべし其声底力ありて信用するに足る安心の銘は打たれたり意氣雲を拂ふべし一合目天の庭に達した。巨巖磊々石雲を生ずるか。人をさらつて行く様だ仙人は露や雲を食ふそうた人間ハ息かつまで變な臭がする握めし一つ尤食ふた渴して苦しいか水かない雲の中谷の底で潺々と流水の響かある。

道は巨岩を越えて行くのだ今度は細かい焼石た墳火の遺物たろう泰山鳴動して鼠一疋出ぬと云ふ語があるか此山も甚寂々として虫一疋出そうかない大なる秘密ハ閉ち籠められてゐる様だ。無茶苦茶に登つて来たがどこが峰やらさっぱり分らぬ二合目に到る頃雲は晴れて四望相尋いて展開せり自分はもう大分高く上つて居るのた左の方を見るとひよつと青い奴か中空に現れた見る雲は吹き流されて一大峰を兀然たる見たあ、磐梯山の頂上だ自分の立つて居る二合目ハ子分の連山に過ぎない素敵にいい山だ始めて敬虔の念を生した。白雲は又峰を襲ふて濛々の中に入り右を見れば猪苗代町は平野の片隅にかたまって連山が平野を取り巻いて居る。三合目へ着く頃沼の様なものがある周圍は三十間もあろうか水は澄み切つて居る底には名も知れない塵芥や大きな木などか雑然としてゐる波紋一つ生しない丸て死物だ謎の湖の様だ昔々或國の王子か沼の邊に遊びて水の精の姫さんか出て来た。てなお伽喃的の氣持ちになつた。少し下りてまた上る此先に墳火口あり注意と立て札あり恐る、窺つたいや大變だ山か眞二つ幾百尺がばとかけて其儘平原に續いて遠く微茫に入り碧赤黄など大小の湖か模糊の間に點在してゐる。快哉を呼ぼうか否か惨として心膽を寒からしむと云ふへきか。小心者は或は度膽を抜かされん天地はやつぱり大きな仕事をやる。

四五箇所硫黄の燃ゆる有り余憤猶有る如く敬遠するに足る四合目天狗岩あり形似たればなり雲いつか去りて頂上は巍々として碧空に屹立せり洋画でもこんな生きた色を出す事が出来るたろうか。あゝこゝ迄来る道に廣い原を通った細い水か幾筋も道を横切て十里蘆花南画ののよく畫きそうな處もあつた驚か二三足飛出してもよさそうだ幾度顧みても山と草と樹た配合の妙を得て画中を行くはこの境なるべし狭苦しい都會などで電車自働車朝から晩迄風車の様に騒き廻てゐる思ひは氣の毒だ。日は平原より出て、平原に入る支那の大平原では余に無趣味であらうか、こゝらか理想的によい。今日は磐梯山の先生乃公にこの美景を一任したのかしかし一人で失敬するのも贅澤過ぎる四合目から頂上迄尤も峻嶮額は土に接する位を熊笹をがさゝ、分け入るのだが熊公でもひよっこり出られようものなら大變だ

休息々々して行つたかじき頂上た麓の一合の距離かと較らべるとずつと短かい欲窮千里目吾獨り立ちて縦なり苗湖は在り平原は圍れり山連なりて更に圍る。細より微に入り幽より瞑に入る終に雲となる衣を翻へして暫時形骸を忘れて恍惚たり。

贏得磐梯第一峰。回瞻山路碧重々。忽来忽去雲如沸。

縹緲苗湖入眼濃⁽³⁾

こんなのを並べて手帳へ記した熟語となつてゐない様だ
下山は翁島の方へ向けて路を取る大分危険の様た上りの道とは全く異なりて草の上へ幅二三寸位の道た無造作で石を渡つたり木に擱まで下りたり笹を握て降つたりする一步踏み外つせは奈落の底測るべからず片方は墳火口蜀道難も斯くやと思はる。しかし人は通るらしい。この道は一人一人足の跡か道となつたのだ世々豪傑の士乏しからずとすべし。

墳火口に添ふて行く事暫時底に二棟の平家がある人らしき

ものか動き出した人だ。唐人寸馬豆人の語あり余寸屋分人と改たむべし。下山ハ意外と早し温泉有り道を離れて一二丁行かざるべからず温泉なと老人か病人の物なりと見搦りて□くるを略しぬ。これより路平坦の如く黄鳥頻りに啼き吐□また叫けぶ。

水声の始めは決したりしか麓に従ふて大となり山谷に響き囂々たり日は傾むきたりしかし午を過ぐ未た遠からざるべし一六樹地を敝ふて涼陰憩ふによし人己に有り一青と牛を牽ける老翁なり清水湧出する有り嗽きて頭を洗ふて蘇生を覚ゆ。青年ハ語りたり余は答ふ彼ハ詩歌雜誌の短歌の選者をすと歌を示した。自分ハ此道に疎いからぬか善い様な氣もした。頂上で作つた詩を見せた彼ハ詩は余り別からぬらしい。彼ハ山に登り余は下つた。彼の目かぴかゝ、して薄氣味か悪かつたか敬服してゐる某にも似た處がある。麓へ着いたのは四時頃、茶屋でうどんを食ふた。すぐ有栖川宮御別邸の方へ足を運んだ湖が見えた風の故か波か強い嘗て中禅寺湖へ行つたか静寂で處女の様であつた琵琶湖ハ只漠々海の様である猪苗代湖はなかなか凄い處があるいかにも男性的だ。

日は漸く西に落ちんとし林樹畑を籠めて蜩の声なんとも云へぬ旅客の情緒を覚えたり。□別邸の近所へ来たりしに日は全く没したり。幸一つの旅舎あり泊めるかと問ひは諾と。足を洗ふて室に入る取扱ひ迂遠なれど質樸にして面白し湯なと沸かし茶菓など持ち来りたり客は余一人なり一老嫗ありて世話せり晚餐など持ち来りて話せり若かりし時新湯に在りしと高砂の能舞そつくりの顔自分の身内の片端なども知つて居れり。食を畢れば月は出て、湖上に有り萬頂の銀波ただちに座に入らんとす團々明鏡の如し数ふれば正に今夕望後一日なり趨り出て、沙上の虚舟ニ坐す。寄せては返へす滔々の響実には蘇子の言を借るに

あらねと恨むか如く泣くが如く訴るか如し。誰か罪ありて誰か恨かある。不關□なる者も又多情感なきを得んや。室に帰へりて寝に就く遙かに□声枕上に至る

目さむれは日高し湖ハ白い山は青い急に朝餐濟まして宿を出た老嫗ハ出て来なかつた。旅舎の前。水の邊で碑か立てある。湖に声よことうやほとゝぎす芭蕉□世としてあつた。

三 題画詩文

画人は時に画に賛をし作者の心情を吐露することがある。自作題画詩文は、山田正平自身それほど多くはないが、幾らか遺されている。これには正平の詩情がよく表現されており、正平の詩文に対する姿勢を窮い知ることができる。また正平はノートやスケッチブックに題画詩文の稿を書き付けている(図3)。

「風涛の気吞吐す 艱険なれど此生を寄す 肉を腐し化し盡くし去り 白骨は金声を作す 丁丑六月自題す」

(一止道人自像画賛)

「癡人の勝公は桶匠の児なり 態度容として童幼と相ひ親し今にして佳時を追想するに一種の春風駘蕩の気味有り 一止道人併びに識す」(癡人画賛)(図4)

「仁吉は余の幼時に見る所乞丐なり 眉目端正にして動作は俊爽 風雨の陰晦なる時節に市上に現はれ 温暖佳期には其の姿は見へず 好く阿呆駄羅経を唱へ 毎戸に乞はず 僅に二十戸於に佇立するのみ 一止道人併びに識す」(癡人画賛)

(図5)

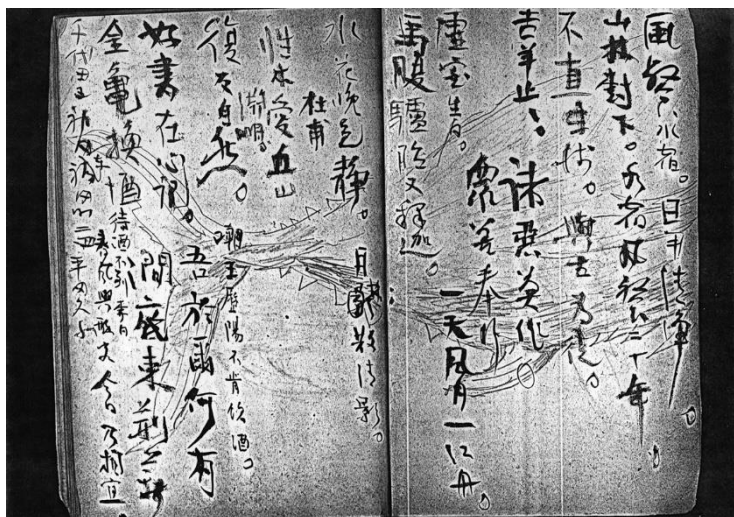


図3 題画詩文稿



図4 癡人画賛



図5 癡人画賛

また、正平がさまざまな雑誌に書いた文、散歩や旅行時に携えていったスケッチブックに書いた日記、そして多くの人に出した書簡などに書かれた文にも、溢れんばかりの詩心が表出されており、正平の情感の豊かさがよく表れている。正平は日常の些細な生活の中においても自身の性情を養っていたのであろう。

ただ、正平自身は自分の詩文に対してはそれほど自信を持っていなかったようである。作家の今東光が「わが交遊録」として正平について一文を書いているが、二人の会話の中で正平が次のように語っている。

「私は篆刻を学んでいるうちに絵が描きたくまりましたが、一番、だめなのは詩文です。こればかりは詩才に恵まれていないせいか、とんと駄目です。絵も少し、書も少し、篆刻も聊か自得したと思えるのに、手も足も出ないのは詩文です。四君子のうち一つでも欠けたら」「三才で良いじゃありませんか」「欲張るようですが」と言って笑った。

『週間読売』 No・18、一九七七年四月

私は正平自身このように謙遜しているものの、「詩とは志をいうもの」とするなら、正平は暇があれば、読書に時を費やしており、むしろ詩精神は旺盛なものがあつたと了解できる。

四 印文の選文

さて、篆刻家にとってどのような印文を選び出し、それに感情をもり込み刻すか、これは実に重要事であり、ここに、印人の詩精神が現れるといえよう。山田正平は、印文の選択に関しては実に慎重

であり、相当神経を使っていたようである。それは正平の次の一文から見て取れる。

私は游印を刻す場合撰文には相当時間をかける場合があり、容易に決まらぬこともある。使ひ古したものには、その時と人と感興を催し、切実に刻して見たいといふ文字には、綺語美言の東西古今何萬種あつてもこれを撰びとりたいたいと云ふ字、文句に行き当らぬことも不便な不思議のことである。たしかに自分の下手の詩句を書くより、自分の意を充分に出して呉れた古人の句を借りる、これも立派の態度でよく歌ふ者に歌はしめて共に楽しむ。已に貸借はなく彼我一如である。別にはづかしいことではない。但し撰びとり扱ひ方はその人の創作となり識見の頭はれとなるだけである。

『講義ノート』

「印文は、寸鉄殺人とやら寸言不尽の妙旨をなど申し居り……」

『一止道人山田正平先生の手紙』（前掲）（6）

また、正平の印の傑作の一つである「白鷗心」の印文に対して正平は佐藤耐雪に次のように語っている。

浜辺によくかもめと遊びたわむれる我が子を見た父が、或る時そのかもめをつかまえるように話したところ、その日からかもめが近づこうとしなかったという意味の印文であるよ。

『佐藤書簡』

絵の方も拝見、但望むらくは余り早く物にせず、ゆっくり構

成、実感第一、拙を繁を厭はず、そして更に減と嚴とそんなことで数多くせず、詩を画くつもりで精進して見られたら、兎に角楽しんで苦しんでやって居るうち上達疑いもなし、欣差切望。

『佐藤書簡』

この書簡の中で述べている、「詩を書くつもりで精進していく」という姿勢、これこそが正平が常に心がけた生き方であろう。ここに正平の作品が譲し出す一種独特の風韻を生み出す要因が隠されているのであろう。

五 おわりに

「詩書画」と言う三字の連用は、唐の玄宗が杜甫の友人定度の詩書画を三絶と称して以来のことであるといわれている。「詩書画」三絶の文人活動は、清朝以後文人必須の条件として詩・書・画に加えて篆刻を取り上げている。この四種は、四絶として一つでも欠けると文人としての教養は成り立たないとされている。ここで山田正平の文人としての境涯を知る逸事を紹介したい。正平の学芸の師ともいえる会津八一が没した時、宮川寅雄と安藤更生は正平に八一を追慕する長聯の揮毫を依頼している。「寒林空シク見レバ 日斜メノ時秋草獨リ尋ヌルモ 人遠ク去ル」というものである。これは正平の書作の代表作であるとともに、詩の内容が八一を追慕するに当を得たものである。この詩句は唐の劉長卿の七言律詩「長沙過賈誼宅」による⁽⁴⁾。選者は不明であるが、正平の意向も含まれたものであるう。

以上述べてきたように正平は、漢詩・漢文を作ることはいくつか

つたが、詩精神・詩心を常に大切にしており、通常の詩人とはやや意味を異にするが、彼は東洋の「詩意」を正統に体得した一級の文人と称してよいと思われる。

【注】

(1) 走馬燈中に 六塵を逐ふ

(2) 孤高笑殺す 百年の身

(3) 羸し得たり磬梯の第一峰 山路を回瞻すれば碧重々たり 忽ち来りて忽ち去る雲沸くが如し 縹緲たる苗湖眼に入りて濃し

(4) この長聯は、会津八一の東京での告別式が三十五日忌に当たる、一九五六年(昭和三十一年)十二月十一日、早稲田大学大隈小講堂において執り行われた時、祭壇中央に吉野秀雄による「渾斎秋艸道人靈位」が配置され、そしてその左右に飾られたものである。『新潟日報』の同年十二月十二日の紙面に、この時の記事が写真とともに掲載されている。これは現在早稲田大学の所蔵となっている。

第三節 書と書論について

一 はじめに

山田正平は、書は篆刻の根幹であると考えていた。本節では、正平の書と書論に関して論じる。

二 書論

清朝以後文人必須の条件として詩・書・画・篆刻を取り上げている。この四種は、四絶として一つでも欠けると文人としての教養は成り立たないとされている。また篆刻家は印を刻すことができれば、それで事足りるとする人もいるが、はたしてそうであろうか。山田正平はこの事に関して次のようにいう。

近時、しきりに東洋特種の学芸伝統が異国の人達に注目せられ、東洋独特のうちにも禅と書がその最高であり、尤も神秘に富めるが如き印象を与へて居る。ここに仮に禅と書とをあげたが、禅とは如何、茲に説く用もないが已に仏頂国師、一休、或は寂厳、良寛でもその墨蹟にふれなば確かに書道の関係の広さは了解出来ることであり、書道と云ふものは狭い立場に孤立するものでないことは明瞭であろう。今日の書道と云つても結局は遠く弘法大師、聖徳太子更に中国の古典に遡ることによって、話は順序立つのであらう。(中略)書は篆刻も含めて古来小技と

いはれ諸芸のうちでも小さな芸とされた。画や彫刻その他に比べれば道具は要らず、時間を要せず、一本の筆、一枝の鉄筆でなした。小枝といへばまことに小技なり。然り而して已に成年を過ぎて体力、智力、情操豊かの諸子が全魂を傾注してなほ自己の満足の域に達せぬ悩みを覚へらる。何の故であらう。単的に云つて実用の書に、芸がつき道がつき何千年の歴史が背景にあるからで実に悩み即ちまた楽しみと云つてよろしい。(中略)清朝乾隆の高士淞派の世祖、丁敬身先生は、書篆刻は三不朽の余支別派と喝破した。まことに明快と思ふ。小技といはるる書篆刻に対し大いに自身を持つことを望む。

(「篆刻・書道」『篆刻講義ノート』(前掲))

このように正平は書は決して狭い立場に立つものでなく、悠久の歴史を持つ優れた芸術であるとしている。また、

書は、詩句言語を筆墨を借り間架結構行筆に意興、感情を託すもの。
(『篆刻講義ノート』)

と明快に書について語る。そして、正平は、周亮工の「書を能くせざれば印見るに足らず」という言葉をしばしば引用しており、篆刻を本業とする正平であるが、書に重きを置いた。それは、正平が何度も繰り返し述べている「印は書なり、書は人なり」という言葉に集約されている。正平にとって篆刻の根本となるものは、書であ

ったが、更につきつめていくならば、その人となりに帰着するとい
う、所謂東洋古来の倫理観に基づいた思想を持っていた。正平はこ
のことを次のように言い替えている。

先づ第一に心懸くべきは、芸の高きは其人の教養に比例する
ものである。殊に書・篆刻はその言葉を適切に反響する芸域で
あろう。

『篆刻講義ノート』

また越後の文人桜井定市に宛てた書簡で次のように記している(1)。

やはり東洋の書、それはなかなか標準高く、高過ぎます。一
寸今の書道家達には無理なのでせう。いづれ御意見も承り度く、
国宝展の絵巻類なかなかよい物あり。私もいま一度と思ひ乍ら
でした。めぐり逢いもむずかしい。御話の一、学人の屏風のこ
と面白く拝聴。我身もその境に在る思いで□した。物と渾一と
なる。人生その他何もなし。鉄斎翁の手簡、并ニ茶譜、本田氏
の著書、又芋銭翁の追頌集と、色々珍重に存じました。鉄斎翁
の手簡は、画論あり、叙景あり、当時の翁の気構えも充分表は
れていて、真ニ貴重品の品、悉く永宝可致。この年代のこと、年
譜にもあり。或は書中の古聖賢屏風も現存してあるや二覚えま
す。芋銭先生の追頌集も初見之珍重に存じます。□□の貴書一
行、甚楽しくいづれ書の同好者とも共、心賞致し度く存じます。
又、拙刻が用いありし、色々参考にもなりました。

(昭和三十六年十一月二十五日、消印十一月二十四日)

このようにその人の持っている教養が芸術を高くもし低くもし
ていくという、これなどもある意味で東洋思想を背景とした考え方

によっているのであろう。

さて、正平という一人の芸術家にとり、学書は日常行なわれてい
た行為であり、生活の中に生かされていた。このことは正平の三女、
山田梅枝嬢が「父を憶う」(『書品』一三五号)に一文を書いている。
この中で、

父は普段は自分の部屋で、夏でも冬でも火鉢をかかえ、番茶
とたばこを絶やすことなく、本を読むかお習字をしていた。私
が何が面白くてそんなにお習字ばかりしているのか、と聞いた
ことがある。字がうまく書ければ気持ちがいいし、気持ちよく
書けなければ書けるまで書く、雨が降ればまた書きたくなるな
どといった。私たちが小学校に通うようになって、お弁当
を包む新聞紙はみんな書きつぶしてある。兄が、よく白い新聞
で包んでくれ、といったのを思い出す。

と述懐している。書を書くということは正平の生活の中に定着して
いたことであり、日常の営みであった。人知れず弛まざる研鑽が続
けられていたのである。

三 篆書観

さて山田正平は篆刻の最も基本となる篆書の学習について「篆刻
三法」の字法を取り上げて次のように述べる。

篆書の体一様ならず。且歴代風習異なり或は古籀、或は小篆
或は繆篆、若くは漢、若くは唐、其篆体と世風とを考へ印内に
各種各様の篆文を雑厠せざるを字法とす。(『篆刻講義ノート』)

また、篆書の運筆や筆法については次のように記す。

篆字の運筆を解せざるもの安んぞ佳印あることを得んや。字、筆法を得て屈伸、俯仰、輕重粗細、各、宜に適ひ即ち半神流動、莊重典雅なり。これを筆法といふ。
『篆刻講義ノート』

このように筆法の重要性を語っている。そして、篆書の学習に際しどのような古典を学ぶかについて、

篆書を習ふに際し何を選ぶか。人々の興味に従ふべきであるが、先づ秦時代の小篆より入り、上下の時代に移行するのが尤も入り易すからんか。何となれば小篆は篆書の集大成の整理の時代に出来た篆書である。直ちに金石刻を学ぶか、近代の人の手本に依るか。
『篆刻講義ノート』

といい、当時新しく発見された甲骨文に対しては、

説文の解釈に訂正すべき処を近代甲骨文の研究の結果により色々あるが、しかしそれは、百中の一、二と云ふことと考へ、説文の解を一応尊重すべきこと。

甲骨文字、素朴に似て、一刀一画まことに着実、体勢また飛動、書法の大本すでに備る。近時この文を用ひて新様を試みる人やうやく加へ来る。必ずしも甲骨文ならずとも、前人未踏の場面を聞き、真に創作の妙境に進んでこそ、その創作の意義も生じ、その快、実にこのところにある。しかし、奇に似て怪

なるべからず。玩具に墮して印とならざるは避けたし。神奇とは、別物ならず。真趣の流露か。

〔「神奇」『篆刻講義ノート』〕

と触れ、文字学的には説文を基本とするが、篆刻に関しては甲骨文を用いてもいいが、奇異に走つてはいけなさと戒めている。

また、次のような一文がある。

近代作家一家につき習ふことを得策とする意見。それより各作家に渉る。

要は如何に見るか、解釈するか。意興、いかに感興を生ずるか。

或人は、手本は見るだけ。直線と曲線の練習、見て習ふこととあり。

結局その人ならんか。

『篆刻講義ノート』

そして篆書の書き方については、

書も篆刻も学ぶ時は第一に形から入ること。表現が則ち芸である。運刀運筆の力、無限の魅力のある場合もあるが、これはある域に達した後である。先づ分間布置をよき古典により学ぶこと。つまり忠実に丁寧な形のあり方を学ぶこと。

書の骨格が少し足りない。流暢に見へる篆書でも、やはり楷行草隸と同じく人体の如く、背と肩と両手足とがあつて、そして健康の姿体がなり立つ。

『篆刻講義ノート』

と語り、また、

稚氣あれど滯氣ある勿れと言ひ、をとりと素直に、蘊蓄あり何処となく底力見ゆるものを上乘とする。熟すると兎角甜くなりたがる。又枯れると瘠せすぎる。古人の所謂熟後の生拙と言ふことは、与人の尤も力を用ゆべき所であらう。用意としては常に逸脱の氣を養ひ、これによりて調節すべきである。逸脱の氣とは画から離れたさばさばした氣持ちを言ふ。生拙の生は生動の趣、拙は自然の姿にて偽巧なき古拙の趣。

古人六法の中、氣韻に次ぎ骨法用筆を言ふのも骨書を重んじたことが分る。氣韻は人格天分によりて自ら發揮されるもので勉強の外だが、骨法用筆は勉強によりて得られるから学ぶ人は励め。

『篆刻講義ノート』

と述べ、

書も篆刻も形も離れては成立しない芸ですが、形だけ整つてゐても無味乾燥で芸術の域に入らない。そこで君の言はれる第一印象、これは大切に情感に響くものがある。これが尤も大切でせう。精彩よい言葉ですね。高い情操と広い経験、そして大きく育つのでせう。

『篆刻講義ノート』

と結論づける。

以上のことから理解できることは、正平は篆刻における篆書学習の大切さを第一に挙げ、その中で骨法用筆は学ぶことができるが、氣韻は天分によると考えていることである。また彼は、伝統を非常に重んじており、決してそれを軽視していない。そして深い古典の

探求の上にたった創作によつてこそ、真実の芸術作品が生れると考えている。

次に、正平の学書の系譜は、実父木村竹香、養父山田寒山、そして吳昌碩と徐星州等に連なる。また正平の本格的な初めての印譜『正氣印譜』の滑川澹如による序文は、興味ある内容を含んでいる。

これから正平は若年に一時期澹如に書を習ったことがわかる。事実山田家に澹如の説文部首を折帖に書いた篆書が遺されている。澹如に関して柴田光彦氏の論考がありこの件に触れている⁽²⁾。ただ正平の学書は、その生涯を概観するに、特定の誰かに継続的に師事したというより、彼の趣向により、そしてその都度人との出会いのなかで育まれていったとみるのが適切だろう。そして孤高を保ち続けたが故、従来になかった斬新な表現を生み出す事となった。

四 篆書学習

山田正平は日々書を習うことを日課としていたが、實際何をどのように学んでいたのであろうか。現在山田家には正平の臨書と、さまざまな古典を双鉤に取られたものが遺されている。

臨書では、それに類するものとして古印の模写がまず挙げられる。これは、古璽印の印譜を朱で雁皮紙に写されたものである。これは当時の篆刻家により鑑賞の手控えとしてよく行なわれた方法であるが、寸分違わぬようにとるのが一般的であるが、正平の場合骨格を押さえるもので一筆で書かれている。臨書作品はそれほど多く遺されてなく、吳昌碩臨石鼓文の臨書、黒板板書権量銘などである。また旅行した時過眼した作品をスケッチブックに模写している。石涛の書画、池大雅書、副島蒼海の扁額、中川一政の書画等である。これらは模写とはいえ天性の妙味を發揮したもので、卒意のものであ

るが正平芸術の一斑を窺い知ることができる。

当時は拓本や真蹟の影印本はそれほど多く出版されていなかったが、正平は実にさまざまな拓本の双鉤を取っている。ここに数種を紹介しておく。「泰山刻石」「瑯邪台刻石」「漢刑徒磚」「夏承碑」「戚伯着碑」「天發神識碑」等である。

また、以前山田家に遺されている蔵書の目録を作成したが、蔵書はむしろ少なく、拓本や印譜にしても多くはない。

次に正平は、胡澍（一八二五—一八七二）と趙之謙（一八二九—一八八四）の作品を技法解説し、篆書学習法に関して執筆している。「胡澍篆書學習法（二）—（五）」『書道』七—二、七—四、七—五、七—六、泰東書道院出版部、一九三八年）、「趙之謙篆書學習法（一）—（三）」『書道』七—七、七—九、七—十、泰東書道院出版部、一九三八年）である。胡澍の作は『淮南子』（説林訓）の一節を書いたと思われる。

趙之謙の作は、『悲盦臚墨』に掲載されている潛夫論の一節を書いた之謙の代表作である。これは正平の両家への多面的な解析が成されておき、篆書の学習法や指導法が理解できる。解説のポイントを抄録し彼の学書の方法論に迫ってみたい。

只一つ私の申し上げたいのは、写真版でなく真蹟一々御眼に懸られない遺憾さである。西川氏は云ふ、「学習者はどの順で如何に筆を動かすかより第一にこの字を見つめて、自分のうれしく思ふまぼろしを先ず把握しなければならぬ。次にそのまぼろしを再現する工夫、ここで始めて筆の技巧である。この技巧は考へればわかるものである。」勿論この言端は真蹟に對しても写真に對しても廣く適用の出来る趣の深い言端であるが、私が真蹟を見ての感動は写真とは比較にならないのである。あの紙に、

あの調子のよい濃い墨が作者の心の律動を傳へて或は重厚にふくよかに或は快よいうねり鋭さに、觀者は光りに、香りに、響きに忽ち魂は奪い去られる。真に勝手の云ひ分だが学習者は真蹟から受ける感激をつけ加へて習つて載きたい。影のかたさ、平板でなく、生きた躍動、豊かさを味つて欲しい。

（「胡澍篆書學習法二」）

大字は結密に難く、小字は寛綽に難しと云はるゝが、この結密と寛綽とは書道には大切のものらしく、複雑に組んで撞着することなく、ゆったりと暢びて醸し出される味、相関連して構成された、豊かな生きた世界とでも云ふのでせうか。

今回提出された八字のうち（扶）（与）（讓）など特に寛綽と結密に困しむようです。初めはなかなかしつくり組み合わず、散漫に或は窮屈に、形は略ぼ出来ても何となく物足りない。これは結局、百鍊を経て手に入れるより法はないでせう。

肉付きのよい書は、骨格が呑み込める迄に目と手が熟して来なければ、墨あつて筆のない嫌なものになり勝ちである。殆ど線と線を畳み込んで書く様な心待ちで始めて美しい分間が生れる。それにはこの骨格が充分呑み込めるまで練習を積まなければならぬのでせう。

（「胡澍篆書學習法三」）

古代のより近代の作者の物が習ひよいとも云ふ。漫然と諸家に出入するより一家を充分に研究せよとも云はるゝ。然し充分に胡澍の篆書を味ふなら同学の趙之謙、それから呉讓之更にその宗を成す完白山人と一通り見たい。どんなものが養分となつて発明の機縁となつてゐるであらうか。周代の金文か、先秦の石鼓次に秦代の各種、秦漢時代の瓦当文及漢の碑額の類か降て

呉の天發神識碑、唐の李陽冰などを一巡り、そしてこの胡澍の篆を見直し習ひ反して見ませう。 (「胡澍篆書學習法五」)

只ここに一つ私の錯覚を率直に申上げると、趙撫叔は光緒十年明治十七年(五十五歳)でその一生を了って居ると云ふ事が、余り時代が新らしく、年齢も若かったと今更思ふことである。完成された堂々たる風格、夥しい作品の量からして、もつと年もとつて、更に時代も遡るやうに漠然と思はれるのである。実に驚くべき偉さである。

さて此度掲出の八字は、昔聖王之治天下の七字一行となり、咸字が次行の首となつてゐるのであるが、掲載の都合二字二字を横並べに置き変へたため、筆畫の長短欹斜が稍強く目に映つて来る様である。條幅として通觀すると、一字一字の動きが美しい諧調を作つてゐて、その恍惚とした世界にひたるばかりで、一字一画の曲がりくねりは目に入らぬのである。つまり悪い意味の鹽梅とか、加減とか工夫とか云ふ人為的の目障りは頓とないのである。趙書を学ぶにはこの処が肝要なのであらう、表面にのみ捉はれると、所謂似而非なるもの態ざとらしい、鼻もちならぬものとなり勝ちである、この点殊に趙書を学ぶに就いて、うんと覺悟してかかり、形似に了らずその神を学び得たいものである。

(「趙之謙篆書學習法一」)

この輕妙瀟灑は練達の末でなければ到り得ないであらう。淡々たる運筆であるが、筋力骨格の動健は見逃せぬ。

先ず習字は形の似ることを勉めることが第一。次には筆と筆とのうけこたへである。これで漸やく字が息をして来る。つまり骨格と血脈と肉づきが欲しいのである。趙之謙を習つて陥ち

いり易い難点は、筆の柔かさ、氣分の甘さの様の所に氣を取られて、秀骨のない媚体になることであらうか。剛健婀娜をふくみ、端壯流麗をまじゆと行きたい。試みに分けて見れば、剛健と端壯は古格とか形質とかに当り、婀娜流麗は詩味とか性情に当りはすまいか。

吾々が最初に趙書に魅力を感じるのは、この婀娜とか流麗の方面で、また趙氏としても乾燥無味、依樣式になり易い篆書をかく迄に自由勝手に生々しい味はいを盛り得たことは偉い特色であらう。しかし趙書の柔かさ自由さには剛健と端壯の裏づけのあることを知りたい。情緒に棹させば流される。骨のないだらとした嫌味のものにならぬ様健康な習い方をして見たい。

(「趙之謙篆書學習法二」)

以上から正平の篆書觀が理解できる。

つまり、篆書學習においては、單なる形を写し取るのではなく、感激をつけ加え生きた表現とすることをめざしている。

五 篆刻と書

山田正平の芸術の根幹に篆刻がある事は、いまさら言うまでもない。ただ篆刻と書との關係は、彼の書について論じる際ひとつの大きいキーポイントとなっている。つぎの言からも理解できる。

篆刻も結局書です。全体の結構布置そして着筆終筆、筆の向背少しく古印を二三模してそれから創作して下さい。余り急かす最初の筆が全局に響きかかる様な氣構へでそこまで心境を練ること…。

（『一止道人山田正平先生の手紙』、前掲）

また篆書習熟の重要性を説く。

東披、大字は結密に難しと云ふ。密処風を通ぜしめず、疎処馬を通らすとも古人云う。概して芸は篆刻は感興第一、次に心手相応ずの手的確がなければならぬ。篆刻で云えば、先づ第一に篆書に習熟すること。感興もなく手の確かさもなく、徒らに刀を弄せば全く素人芸に了りなきに等し。篆書を見るにも、この筆この点がどうしてこう変化したかを考へて楽しむこと。徒らにイガメたり空しくノバシタリに了らぬこと。

（『佐藤書簡』）

篆刻は鉄筆とも申し筆なり。筆には骨格と墨情あり。漢印の正・平直素朴に見えるものも、実は古篆古隸の変化含蓄を兼ねて凝集あつてのこと。決して無味乾燥その物ならず。平静実のうちの妙味こそ書・篆刻の極処ならんか。ゆるゆる古典を玩味して下され度候。古典をふまえて現代を超出して。

（『佐藤書簡』）

このように正平の書は、篆刻に対する思考や技法が生かされたものであり、事実その書は篆刻で鍛え上げられた骨法や刀意が見られる。これが正平の書と通常の書家の書とが相違する決定的な要因となっているのである。つまり正平の書は類稀なる「金石の気」が横溢したものといえる。正平は清朝後半期における、碑学の浸透や金石趣味の定着がもたらした金石書法を継承した数少ない金石家の一の人といえよう。

六 書作品解題

山田正平における書作品はそれほど数多くはない。しかし日々書の臨書や習字、制作は継続して行なわれていた行為であり、日課ともいえるものであった。ただ作品として遺されていないだけである。彼の代表作品と、これまで未発表の作品や習作を中心に紹介し、さらに日常の書き物を掲げ多少の注解を加える

① 『耕香館畫牘』題署（図1・図2）

正平最も初期の模写である。款記に「大正元十一月正平」とあり、一九一一年、正平十四歳のものである事が分かる。正平の篆書で書かれた最も早い筆跡として貴重である。

② 敬所中井先生銅像記（図3）

同書は、我国において初めて篆刻家として帝室技芸員に選出された中井敬所（一八三一〜一九〇九）の銅像記を、正平が端正な隸書で書いたものである。これは卷子装にされており、敬所の肖像他河井荃廬の巻頭題署などもある。款記に「大正乙卯仲春竹香二男正平謹写歳十七」とある。これから一九一五年（大正四）、正平十七歳の時書かれたものであることが分かるが、正平最も初期の作品例といえるものである。正平の確かな書の技量が窺える。



図2 『耕香館畫牘』第1図

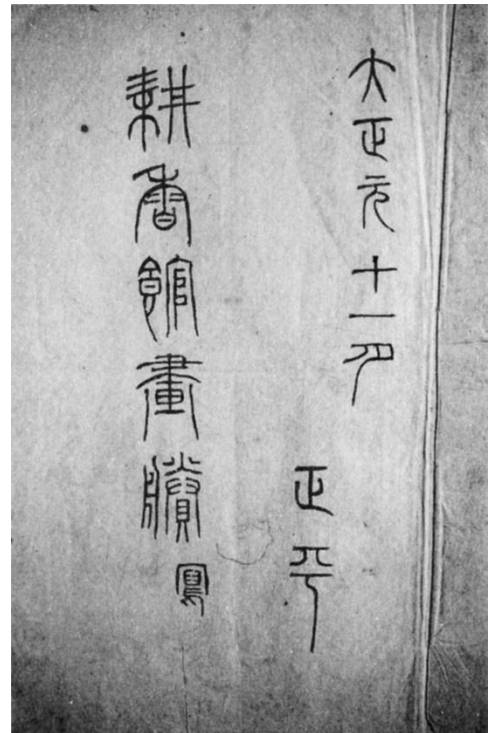


図1 『耕香館畫牘』題署

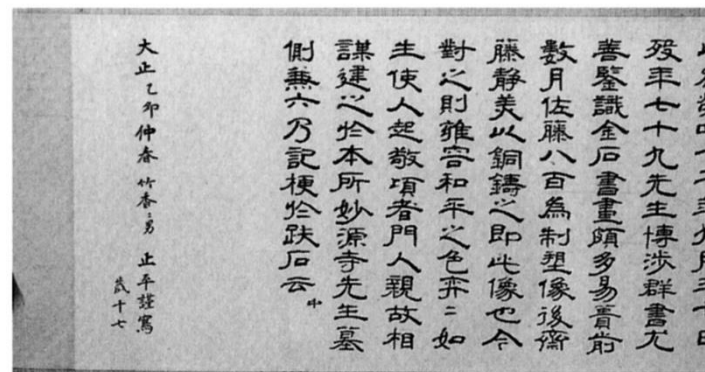
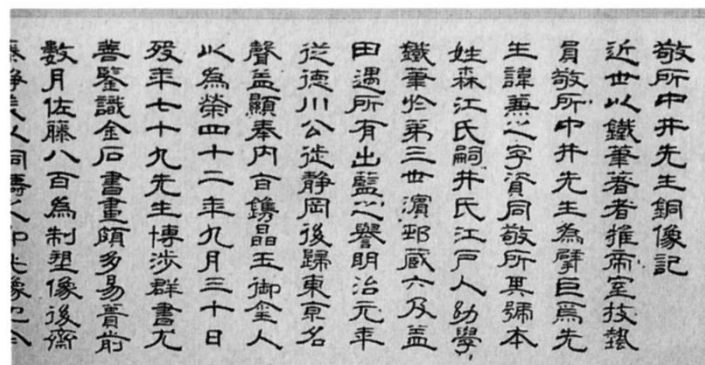


図3 敬所中井先生銅像記

③ 『羅漢印譜』帙題簽並びに封面(図4)

『羅漢印譜』は、東京藤山鳴堂所蔵の漆塗りの厨子に収められた、十六羅漢陶像に正平が刻印したものを押印したものである。款記に、「大正丙寅四月八日正平製」とある。正平二十八歳の時の刻印であることが分かる。印譜の帙題簽並びに封面も正平の手になる。印譜は、法量二〇・〇×一三・七糎で、片面に押印し、片面に緑色の顔彩で尊者名と印文の釈文が書かれており、正平の斎号更生居の印が押されている。



図4 『羅漢印譜』帙題籤並びに封面（現、藤山輝夫氏蔵）

④ 荒木寅三郎撰文丸田潤二郎哭文（図5）

夭折した丸田潤二郎を悼み、枢密院顧問荒木寅三郎が撰文し、山田正平が丹精こめて篆書体で書いた書である。丸田氏が没したのは昭和十三年で、この直後にこれが書かれたとすると、正平四十歳の書となる。正平の多字数のそれも整齊な篆書は少なく貴重な作といえる。これは葉書に印刷されている。

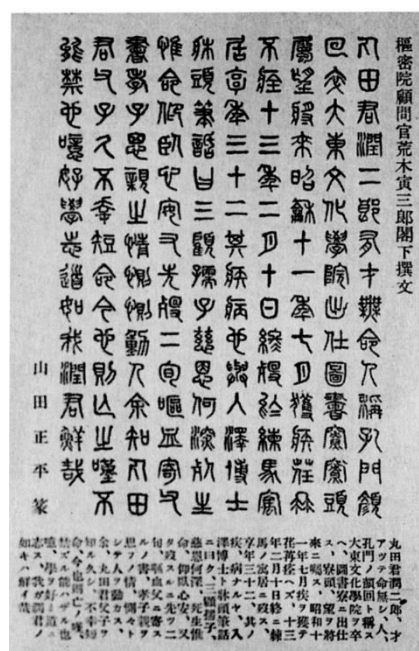


図5 荒木寅三郎撰文
丸田潤二郎哭文

⑤ 会津八一追慕長聯（図6）

正平の学芸の師ともいえる会津八一が没した時、宮川寅雄と安藤更生は、正平に八一を追慕する長聯の揮毫を依頼している。「寒林空しく見る 日斜めの時 秋草 獨り尋ぬるも 人遠く去る」というものである。これは正平の書作の代表作であるとともに、詩の内容が八一を追慕するに当を得たものである。この詩句は唐の劉長卿の七言詩「長沙過賈誼宅」によるものと思われるが、句は前後入れかわっており、詩語も原句は「人去後」となっている。選者は不明であるが、正平の意向も含まれているよう。

会津八一の東京での告別式が三十五日忌にあたる、昭和三十一年（一九五六）十二月十一日早稲田大学大隈小講堂において執り行われた。祭壇中央に吉野秀雄による「渾斎秋艸道人霊位」が配置され、そしてその左右にこの長聯が飾られた。「新潟日報」の同年十二月十二日の紙面に、この時の記事が写真とともに掲載されている。これには鉛筆の骨書があり、その点でも西川寧が「山田正平遺作展」において「エンピツがあるんですか。それはおもしろい。正平の正平たる所ですね。梁楷に焦墨の骨がきがある。その鉛筆は消してはだめ、鉛筆がなかったら書家になっちゃう。これは安藤さんに勧めてけさないようにしなけりやだめだ。そして下聯の余白に安藤さんにそのことをうたった跋をかいとおいて貰わなければ」『書品』一五五号」と語っているように、珍重される書といえる。筆者は、以前山田家において、この書を見せて頂きその骨書きを確認した。それは鉛筆による、書作にあたって字形のあたりをつけたもので、実際書かれた書は大きく骨書きからはずれていた。これは現在早稲田大学の所蔵となっている。正平五十八歳の書である。

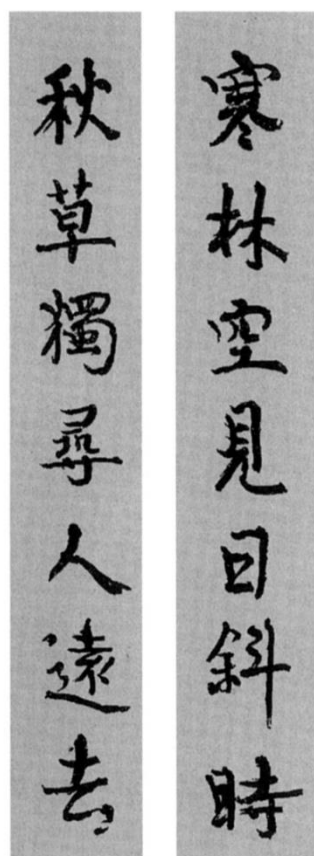


図6 会津八一追慕長聯
(早稲田大学蔵)

⑥ 秋艸道人墓碑銘（図7）

正平が宮川寅雄と安藤更生の依頼により謹書したもので、謹厳にして剛毅なものである。肉筆は新潟市會津津八一記念館所蔵で、筆者は小柳胖氏御存命時、これを拝見し拙稿で紹介した⁽³⁾。道人の墓は、東京の法融寺と、新潟の瑞光寺にあるが、後者に正平の書した墓碑銘による墓がある。

⑦ 黒板板書権量銘（図8）

正平は昭和二十八年から十年間にわたり東京学芸大学において「篆書・篆刻」の講義を担当した。講義内容は「山田正平先生篆刻講義ノート」（前掲）として刊行されている。正平は、板書が苦手であり、チョークが折れて困っていたが、田邊古邨のアドバイスで折れなくなったらしい。当時の受講生が正平による板書の素晴らしさに感動し、カメラを教室に持ち込み写したのがこれである。書線紙背に徹するという言葉があるが、生き生きとした躍動感溢れる板書は、金石家の書の面目を保つものである。

⑧ 呉昌碩臨石鼓文の臨書（図9・図10）

呉昌碩臨石鼓文を山田正平が臨書したものと、石鼓文の双鉤を一帙に収めたものである。落款が書かれていないので推測の域を出ないが、正平と交流を持ち正平没後山田家に遺された資料の整理にあたられた関健一にこの写真をお見せしたが、正平の臨書とみて間違いないとのことであった。『呉昌碩臨石鼓文二種』『書品』第一〇一号）に掲載された呉昌碩七十五歳の臨本を基にしたと思われる。呉昌碩の臨本を基に多少創作的要素が加味されている。これは山田家に所蔵されているが、一帙二冊本である。



图 8 黑板板書權量銘



图 7 秋艸道人墓碑銘
(新潟市會津八一記念館蔵)

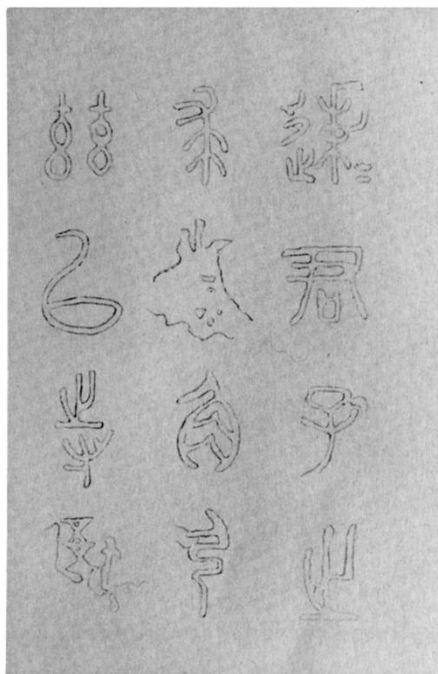


图 10 石鼓文双鉤



图 9 吳昌碩臨石鼓文的臨書

⑨ 「応無所住而生其心」二作（図11・図12）

正平は「応ニ住ム所無クシテ其ノ心ヲ生ズ」の詞句を好み、日本芸術院買い上げとなった彼の代表印と掲載の書幅、そして色紙に書作している。この幅など、多分に動勢をはらんだ悠々たる優品といえよう。またこの幅であるかどうか確証はないが、逸話が残されている。松下秀麿が「古酒」第八冊（前掲）に記している。

戦後、市井に酒の乏しかったころ、小倉理化学研究所長の小倉千麿が、甘藷から盛んに純良な酒をつくったので、我党の士は阿佐谷の彼の家に暇をつくって集り飲んだ。そのある日、黄眠先生を首座に山田正平、大鹿卓、それに小倉所長と私が会して、したたかに、純良焼ちゅうの、アルコール分四十二、三度位から最高五十五度位のを傾けた。大酔の後、古歌などうたい、やがて散歩かたがたこんどは聴雪廬にうかがった。携えた大瓶をここで空けると次は筆硯である。先生は「そえ子、そえ子、紙だ」へはい、はい、ちよっとおまちて」と台所でごちそうの準備中の奥さんは、この荒武者の闖入にてんてこ舞いをされた。二、三面の硯にむかい、筆筒から先生のとおきおきの筆をとりだして、おのおの天馬空を行く底の書画を書きなぐった。印も「それ、それ」と先生が投げ出されるものをひろっては、西冷印社製の印泥をべたべたつけて、おした。すると、一止道人はその泥をたっぷり指先きにつけて、こそそこそ次の間の本のあいだに隠れ、裾をまくり上げて大切な一物を塗っている。これは一大事、気でも狂ったのではないかとのぞいてみると、何のことはない、感慨の詩書の末尾に、ごそごそいわせて押捺しているのである。道人曰く「一世一度の試、これこそ稀に印史に伝えられる亀頭印である。僕も生涯に一たびは試みた

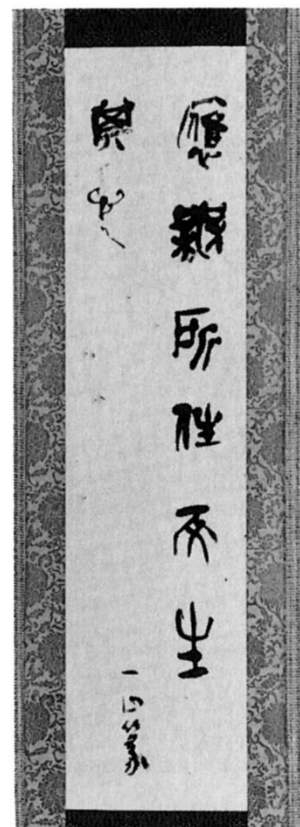


図 11 應無所住而生其心

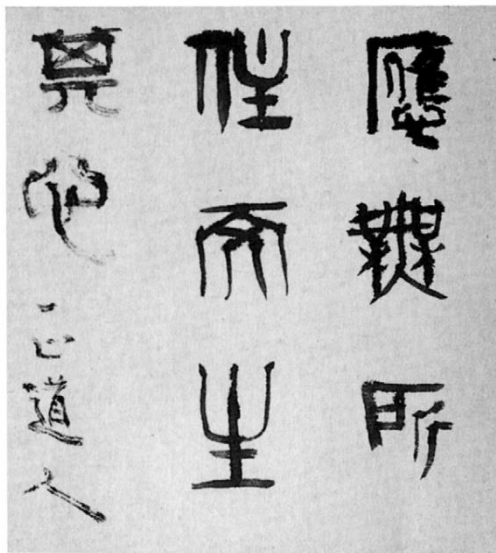


図 12 應無所住而生其心

いと思つたが、今日これを実験しえて、何の幸かこれに過ぎん」と。先生はじめころがつて笑い呆け、平素の一止さんを知るものにとつては、晴天の霹靂ともいうべき天真爛漫の一風景であつた。聴雪廬の床の柱にいつもかかつていた片聯の〈応無所住而生其心〉は、その時、私が句を選んで、道人が書したものである。

⑩ パスポート署名 (図 13)

昭和三十七年(一九六二)、正平は第三次訪中日本書道団団長として、中国へ赴いた。その折に使用されたパスポートの署名である。正平のペン書きは金石の気の横溢したもので、汲みても尽せぬ雅味がある。

⑪ 「古壺新酒」(図 14・図 15)

正平は書作にあたり実に慎重であつた。過年正平の資料を山田家で整理していた折「古壺新酒」の四字句を画仙紙に書いたものが数十点残されているのを見せて頂いた事がある。この一事からもその事がうかがえよう。また彼は篆刻家が本業であり、書にしても篆書の作例が多いが、楷・行・草作品にも金石家らしい筆触による作品が見られ興味が尽きない。



図 14 古壺新酒

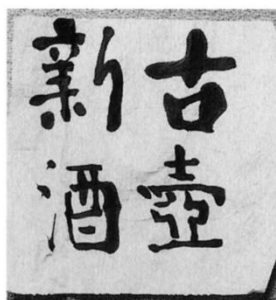


図 15 古壺新酒

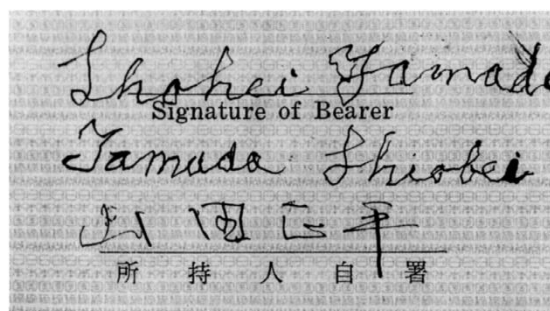


図 13 パスポート署名

おわりに

本節では、山田正平の書並びに書論を取り上げた。松下秀麿は「古酒」(第八冊)で「正平の書は豪宕で、書の拠って来る所は、鄧完白に出自がある」と述べている。また古印や古碑帖の模写は彼の作品形成の上において大きい影響を及ぼしている。さらに篆書においては、呉昌碩や銭厓の篆書、漢の印篆を、隸書は漢隸を根幹としている。そして楷・行草は秋艸会津八一の影響も見られる。ただ彼の書は特定の師や限られた古法帖によるものでなく、彼の嗜好による中国、日本の多種多様の古碑帖や古名跡の臨字によりその骨格が築かれたものと考えられる。彼の金石の気が横溢した書は、高雅な書品と相俟って魅力に富む。田邊古邨は『篆刻講義ノート』において、「私は翁の篆刻について評する資格をもたぬ。ただ翁の書に現はれた風韻の高さに対しては無条件に頭を下げている。講義ノートのペン字や板書の字に見る刀痕の妙味は、世に謂う芸術書などとは全く次元を異にし、森然たる中に生命の閃光を放っている。翁の履歴書に至っては、感極まって歎声を漏らすのみである」と記述している。

正平の遺作展のうちに作成された挨拶文に「その書は篆隸の蒼古に出でて真草また後世の嫵媚を厭い」とある。彼は生涯ひたすら文人世界を憧憬し独自の境地を切り開いた。正平の芸術の功績を考える時、根底に該博な東洋全般に渡る学殖が背景になっており、その書や書論もまた高く評価されてよいのではないだろうか。

【注】

(1) 桜井書簡は、山田正平に私淑した桜井定市に正平が宛てた書簡である。

筆者は「山田正平研究(一)——桜井定市宛書簡——」(『修美』第一四巻通巻四九号 修美社 平成七年一月)において翻刻した。

(2) 柴田光彦氏「滑川澹如について」(『書学書道史研究』第六号、書学書道史学会、一九九六年九月)

(3) 筆者「会津八一の印学」(『書学書道史研究』第三号、書学書道史学会、一九九三年六月)

第四節 画と画論について

一 はじめに

山田正平は四絶の芸術境を目指し、篆刻芸術に命を賭した。正平の作品は、強烈な個性で貫かれており、魅力に溢れている。それは画にもいえる。

本節ではこれまで殆ど触れられる事のなかった、正平の画とその画論に関して論じる。

二 画作品と関係資料

一九二〇年に正平が描いた画の初期作品は、彼の画業を探る上で貴重なもので注目される。伝統的な日本画技法に拠るもので、彼の篆刻がそうであったように、まずは伝統の技法に則った作品を手がけている。ただ相当早い時期に彼の独自の作風に変化していく。

彼が制作において、重視したのは、自然のスケッチから感得した実感である。そして特色あるのは、篆刻家としての空間意識と鋭利な刃物で切り込むような線の直裁な表現であろう。それは、山田家に遺されたスケッチの画面構成や線質からも確認できる。一九三七年（三十九歳）の時に描かれた「一止道人自像」は、すでに正平の独自の画風に拠るもので、一九三九年（四十一歳）に開催された第一次個展に出品された。次に、正平の画作品と関係資料を一覧にする。

本節では、図版はすべてを掲載していないが、これまでに刊行された以下の作品集で参照できる。

1、作品集・図録・雑誌特集号

山田正平の画が掲載された主な作品集・図録・雑誌特集号を列記する。

○「山田正平先生遺作展特集号」『書品』第一三五号 東洋書道協会 昭和三十七年十一月十五日

・磯部草丘「一止道人を偲ぶ」

・松井如流「山田正平さん」

・伏見冲敬「山田正平先生略年譜」

・山田梅枝「父を憶う」

○『山田正平遺作展図録』（山田正平遺作展委員会 昭和三十九年八月十日 中央公論美術出版）

・中川一政「生きている文人趣味」

・堀口大学「巖々清崎の人」

・武者小路実篤「逢えなかった人」

・西川寧「くもの巣がかかっている」

○『山田正平作品集』（山田喜美子編 木耳社 昭和五十一年十月十日）

・中川一政「山田正平印譜」

・西川寧「一止道人の印譜・序」

・堀口大学「巖々清崎の人（昭和三十九年「山田正平遺作展図録」より再録）

・山田喜美子「あとがき」

○佐藤耐雪『一止道人山田正平先生の書簡』（佐藤耐雪後援会 昭和五十四年一月十六日）

○増補版『山田正平作品集』（山田喜美子編、木耳社、昭和五十九年七月二十日）

・小木太法「山田正平論」

・神野雄二「山田正平年譜」「山田正平研究文献目録」「山田家系図」

○図録『山田寒山・正平展』（篆刻美術館 平成四年十一月六日）

・神野雄二「山田寒山年譜」「山田正平年譜」「山田家系図」

○特別企画「山田正平の世界」（『墨』第一五二号 芸術新聞社 平成十三年十月一日）

・小木太法 評伝「正平交印録」

・小池邦夫 作品論「正平のひとり遊び」

・真鍋井蛙 作品論「篆刻と書とその時間」

・小木太法 コラム「芸術は教わるものではない」

・神野雄二「山田正平の刻字」

・神野雄二 資料室「山田正平略年譜」

○『月刊絵手紙』『特集山田正平文人画』第七一号（平成十三年十一月一日 日本絵手紙協会）

・小池邦夫「山田正平さんの書画について」

・島田正治「正平先生の思い出」

・「小池邦夫の課外授業、桜井定市さんの書簡より、山田正平先生の思い出」

○『正平文人画』（山田潤平編、日本習字普及協会 平成十三年十一

月六日）

・中川一政「生きている文人趣味」

・小木太法「名印二顆」

・山田梅枝「父を語る」「あとがき」

○図録『山田正平展』（篆刻美術館 平成十六年九月十七日）

・神野雄二「山田正平年譜」「山田正平研究文献目録」「山田家系図」

2、画作品と関係資料の紹介

昭和五十一年秋、令夫人喜美子は『山田正平作品集』（木耳社・前掲）の「あとがき」に次のように述べている。

正平は旅行が好きで、よく一緒でしたが、いつも写生帖を肌身離さずもち歩き、旅で得た素描を、数回の個展に役立てたようでございます。画を描く時はたいそう楽しそうでございますでしたが、本業の印を刻る時はそれはそれは厳しい態度になって、心ゆくまで印稿を練り、一度で刻りあげることもありましたが、時には何度も何度も刻り直しをくり返し、納得がいく作品ができる頃は、印材の丈が半分以下になっていることもしばしばございました。それでも快心の作が仕上がり、印箋を前にして満足そうな姿を見かける時は、ひとときの仕合せを味わったものでした。

山田家に多くのスケッチブックが残されており、スケッチとはいえ、生き生きと写生されたもので、それが一幅の作品と称してもよいものとなっている。山田正平は、旅の途中、また折にふれ、富岡鉄斎・石濤・岡田米山人・中川一政・小川芋銭などの作品の模写を

試みている。

ここでは、筆者が管見に及んだ正平の画作品と画論に係る資料を提示する。

凡例

一、丸括弧内は、西暦、年号、干支、年齢（数え年）の順に示した。
一、本年譜は、山田家收藏品並びに左記文献、資料等により作成し、その出典表記に当っては次のように略記した。

・山田正平自筆年譜―（自）

・スケッチブック・ノート―（ス）

・『山田正平作品集』（木耳社、前掲）所載年譜―（木）

一、『山田正平作品集』に掲載の作品について、掲載頁を「（木頁）」として記載した。

一、山田正平の作品については、作品形状・寸法・落款印・所蔵先等を記すべきであるが、煩雑を避けるため最小限に留めた。

○（一九一二・大正一・壬子・十四）

『耕香館畫牘』を模写する。款記に「大正元十一月正平」とある。
（山田家蔵）

○（一九一七・大正六・丁巳・十九）

土田麦麁の知遇を受け、国画創作協会の同人達に紹介される。

○（一九一九・大正八・己未・二十一）

日魯漁業社長堤清六の援助を受け、河井荃廬に随伴して上海に行く。呉昌碩・徐星州より指導を受ける。この時星州より朱文「正平之印」を刻される。側款に「己未冬星州」とある。蘇州・長沙

に遊ぶ。（「会津先生と私」）（前掲）

○（一九二〇・大正九・庚申・二十二）

小川芋銭の来訪をうける。（「山田正平「芋銭翁の想い出」草稿、山田家蔵」）

「山水図」（掛幅・絹本墨画淡彩）を画く（図1・図2）。款記に

「庚申秋日正平」とある。（山田家蔵）

「故郷晩夏」（掛幅・絹本墨画淡彩）を画く（図3・図4）。款記

に「庚申秋日正平」とある。（山田家蔵）

「山水図」（掛幅・絹本墨画淡彩）を画く（図5・図6）。款記

に「嘗遊湖南岳麓山風光不能忘合想起以写大正九年七月正平」とある。（山田家蔵）



図1 山水図（部分）（1920年）

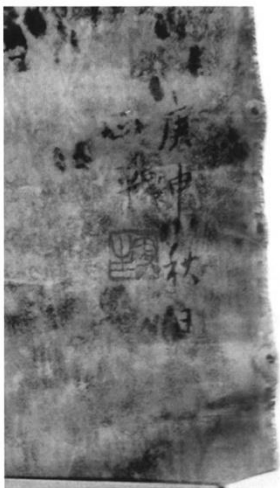


図2 図1の画讀

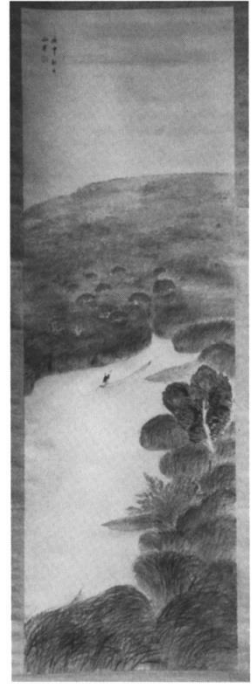


図3 山水図（1920年）

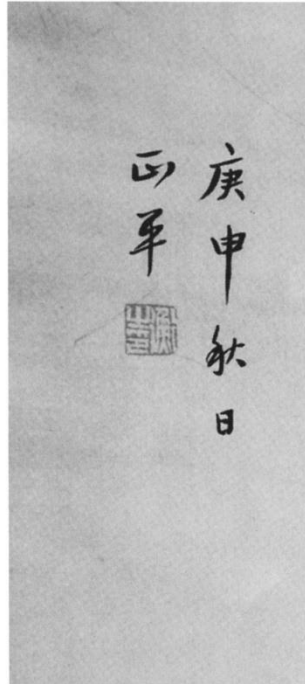


図4 図3の画讃



図5 山水図（1920年）

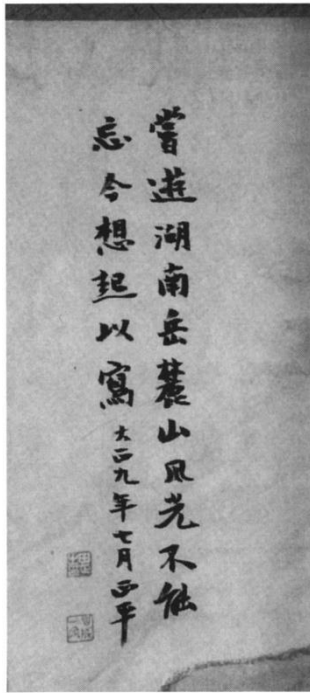


図6 図5の画讃

○（一九二一・大正十・辛酉・二十三）

「蘭図」（色紙・墨画）を画く。款記に「辛酉春日正平」とある。（山田家蔵）

小川芋銭より葉書を受け取る。（この後芋銭より、書簡一三通、葉書五通を受け取る。これは山田家に現存する）

御茶の水の川端画塾に通い、油絵を描きはじめる。（木）

○（一九二三・大正十二・癸亥・二十五）

大同・天津・白河（北京郊外）に遊ぶ。四月六日、九日に大同の石佛寺に遊び、写生をする。とともに石仏の拓本を取る。（ス）
北京を経て帰国する。（自）

○（一九二五・大正十四・乙丑・二十七）

「壺図」（掛幅・紙本墨画）を画く。款記に「乙丑四月正平作」とある。（山田家蔵）

○（一九二六・昭和一・丙寅・二十八）

西荻窪の児玉希望の招宴の席で磯部草丘と会う。（磯部草丘「一止道人を偲ぶ」『書品』一三五号）

「寅図」（短冊・墨画淡彩）を画く。款記に「丙寅正平試筆」とある。同画に喜美子令夫人による賛「千里同風喜美」がある。（山田家蔵）

○（一九二八・昭和三・戊辰・三十）

「梧竹幽居」（掛幅・紙本墨画）を画く。「梧竹幽居」と題し、款記に「戊辰冬日正平製」とある。（山田家蔵）

○（一九二九・昭和四・己巳・三十一）

花卉画（折り帖、紙本淡彩）を画く。款記に「昭和四年五月九日幾庵写」また「隣家同種花大加倍雖口弱小著花可慰更生又署」とある。（山田家蔵）

「百日草図」（掛幅・紙本淡彩）を画く。「百日不厭」と題し、款記に「己巳九月正平写」とある。（山田家蔵）

○（一九三〇・昭和五・庚午・三十二）

「水仙図」（色紙・墨画淡彩）を画く。「春意」と題し、款記に「庚午四月初三鑑下読近思録有此語正平并記」とある。（山田家蔵）

○（一九三一・昭和六・辛未・三十三）

小川芋銭の推薦による「寒山寺正平篆刻会」を行なう。この後四、五年続く。（芋銭翁の想い出）

「水仙図」（紙本墨画）を画く。「生涯落魄惟耽酒客路蒼茫自詠詩」と題し、款記に「辛未春日正平并題」とある。（山田家蔵）

○（一九三三・昭和八・癸酉・三十五）

山田寒山の十七回忌を記念して寒山寺書画篆刻頒布会を催す。

「百合図」を画く。款記に「癸酉七月一止道人并題」とある。（山田翁十七回忌記念「寒山寺書画篆刻頒布規定」パンフレット（山田家蔵））

「夏山遊行之図」（掛幅・紙本墨画淡彩）を画く。款記に「癸酉八月一止道人製」とある。（パンフレット）
令婦人きみ子作墨竹に賛をする。（パンフレット）

○（一九三四・昭和九・甲戌・三十六）

「石榴図」（紙本淡彩）を画く。「子露佳人齒肌勻美女腮」と題し、款記に「甲戌六月念六黎峯漁人偶未過醉餘及之正平製提籃并泉」とある。（山田家蔵）

磯部草丘と佐渡に遊ぶ。（ス）
『越佐画冊』成る。（木）

○（一九三六・昭和十一・丙子・三十八）

「山水図」（掛幅・紙本墨画）を画く。款記に「丙子四月正平戲墨」とある。（渡辺秀英蔵）

○（一九三七・昭和十二・丁丑・三十九）

磯部草丘の「富士図」に「神州真面目」と題す。款記に「丁丑元旦正平題」とある。（山内正二蔵）

「一止道人自像」（掛幅・紙本墨画）を画く（図7）。款記に「丁丑六月自題」とある。これは第一回個展に出品する。（山田家蔵・木二〇三頁）

「金冬心と丁鈍丁」を執筆する。『書道』六一七）

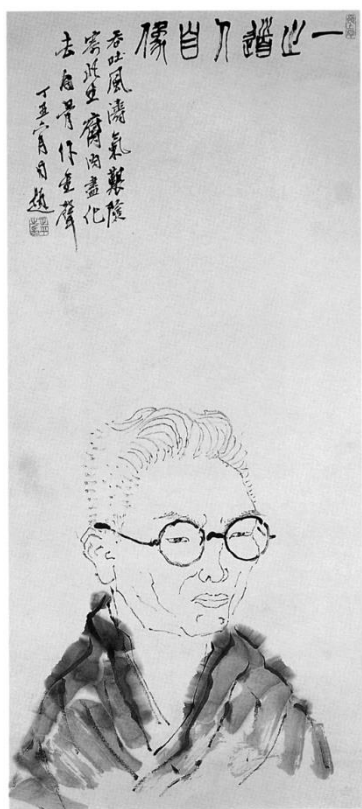


図7 一止道人自像

画冊「無盡蔵」を画く。款記に「丁丑八月六日鐙下写畢」とある。
(桜井定市蔵)

百草園にて氷炭会を催す(同会は荻窪付近に住む磯部草丘他数人の画家と、月一回、出題の作画をもちより会したもの)。(ス)

○(一九三八・昭和十三・戊寅・四十)

小川芋銭を病床に見舞う。(ス)

第一回北越美術家「清盟会展覧会」に出品する。白木屋美術部五階ギャラリー(北越出身者の美術家展)

小川芋銭の通夜に小川家を訪れる。(芋銭翁の思い出)

○(一九三九・昭和十四・己卯・四十一)

第一回「一止道人個展」を銀座鳩居堂にて開催する。(主催氷炭会、支援徳富蘇峰・安田靫彦) (「毛筆履歴書」)

○(一九四〇・昭和十五・庚辰・四十二)

棟方志功が、山田家において「朱鯉魚」を画く。

○(一九四一・昭和十六・辛巳・四十三)

「海福山最明寺全景」(掛幅・紙本墨画淡彩)を画く。款記に「昭和辛巳四月浪華客中正平写」とある。(山田家蔵・木一七三頁)

○(一九四二・昭和十七・壬午・四十四)

油彩自画像を描く(正平油彩画は二点山田家に遺されている)(図8)。(山田家蔵)

伊東に遊び、水墨画「鯉魚帰路」など画く。(木、ス)



図8 山田正平油彩画

○(一九四四・昭和十九・甲申・四十六)

第二回正平作品展を銀座鳩居堂にて開催する。

「八仙人」(掛幅)を画く。款記に「甲申十一月正平写并景」とある。(「第二回正平個展写真集」)

「十六羅漢」(掛幅・紙本淡彩)を画く。「神通妙用」と題し、款記に「甲申十一月一止敬写」とある。(山田家蔵・木一七六頁)

○(一九四七・昭和二十二・丁亥・四十九)

「八仙図」(掛幅・紙本)を画く。款記に「丁亥秋日一止製」とある。(山田家蔵)

芋銭翁旧居を訪ね、牛久沼附近のスケッチをする。(ス)

○(一九四八・昭和二十三・戊子・五十)

第三回「山田正平水墨画個人展」を、東京銀座松坂屋美術部にて開催する。

○（一九五〇・昭和二十五・庚寅・五十二）

「水滴図」（紙本、墨画淡彩）を画く。款記に「一止道人庚寅試毫」とある（これには、大鹿卓「蒼々亭」と松下英磨による画賛がある）。（山田家蔵）

○（一九五二・昭和二十七・壬辰・五十四）

冬心会に参加する。中川一政に貰い受けた柿の写生あり（同会は金冬心の詩を読む会で、この前後数年にわたり、中川一政宅で開かれた。池田古日、真田但馬、中川一政、山田正平、国安芳雄、嵯峨寛、保多孝三らが会員）。（ス）

富岡鉄斎作「古仏龕図」を模写する。（ス）

○（一九五六・昭和三十一・丙申・五十八）

「長嶋北彩」を執筆する。（『篆刻講義ノート』）

○（一九五七・昭和三十二・丁酉・五十九）

磯部草丘著句集『氷炭』（渋柿図書刊行会、昭和三十二年四月十日）の序文を執筆する。

「壺、玉葱図」（掛幅、紙本墨画淡彩）を画く。「吉福」と題し、款記に「丁酉歳旦一止試毫」とある。（木一五九頁）

○（一九五八・昭和三十三年・戊戌・六十）

「画讃の書きかた」を執筆する。（松井如流編『條幅・扁額の研究』二玄社、昭和三十三年三月）

「大雅堂と南画」を執筆する。（『南画研究』一一七、中央公論美術出版、昭和三十三年九月）

○（一九五九・昭和三十四・己亥・六十一）

「壺柿図」を画く。「清楽」と題し、款記に「己亥歳旦一止試毫」とある。（山田家蔵作品写真）

○（一九六〇・昭和三十五・庚子・六十二）

「急須蓮根橘図」（掛幅、紙本墨画淡彩）を画く。「寿康」と題し、款記に「庚子歳旦正平試毫」とある。（木一四九頁）

喜美子夫人と共に九州の桜島・阿蘇・別府などに遊ぶ。（ス）

大分県中津市の自性寺にて池大雅の作品を鑑賞、模写する。（ス）

○（一九六一・昭和三十六・辛丑・六十三）

「柿・靈芝図」を画く。「美意延年」と題し、款記に「辛丑歳旦正平試毫」とある。（山田家蔵作品写真による）

喜美子夫人と共に北海道に遊ぶ。（ス）

○（一九六二・昭和三十七・壬寅・六十四）

第三次訪中日本書道団団長（秘書長香川峯雲、団員佐藤祐豪・殿村藍田・今井凌雪）として出発する。（自）

訪中時の写生がある。（ス）

手帖に、五月七日から三十日までの日記がある。（山田家蔵）

病氣帰国のため、団員と別れ香港に向う。（『書道』九一三、泰東書道院出版部、昭和三十八年三月）

香港より空路帰国する。（『書道』九一三、前掲）

東京警察病院に入院する。（木）

同病院（三一五号室）にて、〇時十六分、腹部大動脈瘤のため没す。（木）

三 画 論

山田正平には、画に関して縷々述べた画論が見られる。その中から、特に正平の考え方が顕著に表れていると思われるものを抄録する。そして正平の文章を追いつながら、彼が求めた画境を探ってみた。

彼は晩年佐藤耐雪や桜井定一と交流を持ち、多くの書簡を送っている。中に芸術論が散見できる。かつて、そのいくらかを翻刻した。附章の第三節と第四節に掲載した。これらを併せて彼の画に対する姿勢や画論を考察する。

南画とは何であろう。南画の始祖は王摩詰か、摩詰は官人で詩人。牧谿も雪舟も僧である。また北画に対して南画と云うところには何かがある筈である。牧谿、雪舟は南画といわぬかもしれぬが、水墨画を描いたところは通じたものもあり、玉洲の琳派まで南画にとり入れる系列法にしたがえば、両者を適時借用に及んで差し支えないかもしれぬ。ともかく山水方滋とか、林泉の気とか、胸中山水とか、院体北画にない別の宗旨が南画精神らしい。むずかしい。

「大雅堂と南画」『南画研究』一一七、昭和三十二年）

知識。勿論重んずべきであるが、書、画は物識りの詰め合はせではない。芸術の世界は別に在る。時たま私に画法を問ひたいと言う人があるが、その時の答はいつも同じである。絵は書法で殆ど推せる。人の絵を模倣するより直ちに自然に就いて対して学びとることより自家の形を創り出ささいと。世間に在

る画法を読むこれも無益ではない。しかし作って自得するのが、ホントである。人の目で見たある型を表面だけ達者に模倣した様なものはないがなである。大人の型通りの絵より子供の絵の幼稚であるが、時に感興を覚へるのは純真、画境に遊んで居るからであらう。芋銭翁に時々絵の御話を聴いたことを想ひ出して忘れ難いことが色々あるが、何よりも自分の感興に真実であれと云ふ一条には教へられるところが深かった。

「画法寸感」『篆刻講義ノート』

次に佐藤耐雪に宛てた書簡を七通掲載する（不明字は□とした。読解に便なるを考え、適宜句読点を付した）。

○『佐藤書簡』①（昭和三十三年七月十五日）

文人画の本旨はやはり伝神に在り。それにはやはり形似の城も徹して洞察して、減筆は繁を経過しての減筆こそ望ましく、数筆をかねたる一筆。

○『佐藤書簡』②（昭和三十四年五月七日）

御手紙を拝見しながら、御返しも出来す甚失礼致して居りました。印影と畫の小包御受けして、只今寸感を陳べようと存じます。妄評不当これ亦作品の如くその時の感想なれば、時を経て確評となるか否か定め難し。大凡作品は出来た時に自ら会心と否とは知り得る。十中の八九まで。余の分は暫時保存して熟観せば、取捨また自ら決し得。御申越しに因て大凡の順位とは致し置きしも、格段と等差あるに非ず。

百事大吉の墨画、小生とし尤も好ましく。墨色もよく。奥行きもあり。題字の位置その心意気も画に溶け込み居る処あり。強いて難を拾えば印少し大きい。若し吉福の○印を用ゆるとせばいまだ少し小さいか、或は一分位字の方へ寄せるか致したし。

次ニ山水仙境春長俊嶺、上部は氣力充ちてよろしと存します。游印なき方よし。題字も引きしめて耐雪写位にしては如何、チト散漫なり。江南春雨、写生スケッチ風にて軽く、その意味よりすれば捨て難し。水上よく舟浮びあり。題字の位置むしろ右方上部にひきしめて、江南とは多支那人の云ふ言端なれば、別に工夫して并題は不用。むしろ瞰取の場所にても書きては如何か。と云ふのは、スケッチ風なれば、并題など仰々しいより軽くさりげない方適當かと存ず。

春山早行、題字も画と相応して先づよし。早春残雪。残雪とあれどこの場合文字に残雪とするよし。画となれば残雪を画にして、残雪とコトワリ書させずに。別に感興を増すよう文字を附したら。游印の位置若し押すなら右の方へ。

筍の画少し達者過ぎて余味に乏し。

書も画も願はしきものは余韻氣品なり。上手、達者概念的は忌むところ。清白、氣分筍よりよし。泉字は□力の作を摘録するの意なれば、清白なる文字別ニ誰の語句と云ふものにも考えられざれば、泉字は一寸不適當ならずや。清白の字も、特に氣張りたることもなし、単に号位にしては自然かと存ず。郵情心趣の分はチト余白空疎なり。やはり画とし不充分的処あるならんか。

忘評多謝

兼字ヨク字引きにより工夫ありたし。

昭和三四年、印これはこの様な体はウント工夫して、しかも卒

意の味こそよけれ。ウント工夫すると云つても、ツマリ單純なものは尤も精神の純粹を要すと云ふこと。甘梅するよりむしろ卒意なれ。

右匆々、

山田正平

五月七日

耐雪様

○『佐藤書簡』③（昭和三十四年六月七日）

情墨墨一味五彩を兼ねを忘れぬことに致し居り信じ居り候。筆墨深沈にして始めて賞鑑に入る。○を四角にしても立体を平面にあつかつても、兎に角自己の真実を表現することこそ我が制作なり。徒らの乱塗乱抹は目を掩はしむる耳。此頃流行の非具象派としてホンモノに近いものと偽物とあり。その別れは真と実なり。その真も実も表現の芸、芸なれば手と心と表裏一体は云ふ迄もなし。東洋の山水画はむづかしい。南画の手本による依樣的のものは現代には己に適用せぬ。今の人が今の山水画を作る甚だ難事業なり。風景画はよくあれど所謂東洋山水画の伝統を今に開くこれ難し。

○『佐藤書簡』④（昭和三十四年七月十四日）

拝復。この處色々と混雜して方々へ御返事も出来ず失禮して居ります。

今日小間、別紙御作の印々に就き所感申述べました。印をやり出したのですからこの方少し進展せられては如何。絵の方も従

って展開と存じ候。文人画の本旨はやはり伝神ニ在り、それにはやはり形似の域も徹して洞察して減筆は繁を経過して、能減筆こそ望ましく。数筆をかねたる一筆。

「ふじ」誰も描くが自分の観たふじこれこそ画なり。大山木、幹不安定。自賛の玉堂富貴は牡丹のこと、并題はなき方よろし。あやめは位置あしく、不安定。左右ツメル。守拙の印をとる位に「印もなき方この場合よろしからんか」あじ魚素朴の筆意稍親しみを感じたれど、その物の個性が見えず。十枚二十枚とウント写生して、その上独自の解釈をして絵にする。そしてやつとマヅイながら自分らしいものが生れる。そんな態度でやつてみては。

当分絵の方は、自ら楽しんで、勉強を進めて御送りになる要はなしと存じます。

山田正平

七月十四

耐雪様

私の絵に対しての考えは書篆刻に対すと同じ。よく物象を観じて真を促え形よりも神仙をと願ふのです。文人画は私はその態度なのです。

○『佐藤書簡』⑤（昭和三十四年九月十日）

半分位の大きさに。適格に物象を立体的に観じ悟り、そして墨を惜しみ筆を減じ。或はその反対にうんと墨を駆し筆を馳せても。つまりスケッチ風の浅い一面でなく、自分は斯く観ると云ふ所を筆に創作するのであれば。それにはやはり物象を描

くタンレン工夫が必要であろう。筆がなければ。墨の濃淡の真味が味解出来ない、乱塗乱抹に了る。大雅曰く、一点も染めざる所尤も難しと。勿々の画。生きたる余白は一筆一点の筆墨が醸し出す独自の世界であろう。この頃の抽象派と雖も平面描写派も大宇宙の活気骨格を忘れては意味ないことでせう。画はやはり一つの芸道。単に一片の氣力だけでは成り立たず。苦心慘憺経営工夫ありて、それを経て僅かに万一を達し得らるゝか。決して挫折してはならない。あせってはならぬ。徐ろに古人の跡を鑑賞玩味して学び取り、形の模仿に了らず。我真意を創造することを第一、それに徹して行ふこと。

○『佐藤書簡』⑥（昭和三十四年十二月十九日）

処理の妙味を欠き、尤も使用には注意し適宜の場合に限るが如し。近世簡略上に使用は別義ならんか。

この處色々多忙のことあつて甚失礼。別紙は四、五日來懸案の印稿、少しは御参考と相成るか同封致します。形のみに終始せば物なし。よく、筆結構など玩索、形骸を離れ自己の心境はなつて来て居る様ですから、大いに自信を以て御精進下さい。古典をふまえ現代を超出して。

絵の方も大略見ました。大分墨色も筆意も落着きを見せて来られた様ニ思ふ。八大とか白石とか先覚の妙處を参酌学びとること大いに結構。彼等は東洋のデントウをやはり見につけてその時代に傑出せるもの、何か特殊のその作家独自の處、極単に言へば破格の處あるも、これは今申す古典のうらつけあれば自分法となり賞鑑ニ入るなり。それを単に形だけの模仿に了り徒らに悪達者になれば、具眼者の世の嘲笑受ける耳。飽く迄大切

なるは、自己の信実自己の目。自分の歌をうたふこと。この一点なくしては芸といひ難し。この度のうち大根など私はスキです。菊など慎重の写生甚好ましい態度なれど、これが八大白石の如く一つの自己の構図自分の増減省略が出来ればと。これは然し私にもなかつてです。

いつも同じこと申して繰り返しなり。申し上ぐる意志十の一同竭難く甚もどかし。

師走 十九日 夜

山田正平

耐雪様

○『佐藤書簡』⑦（昭和三十五年二月十九日）

絵の方も拝見。但望むらくは余り早く物にせずゆっくり構成実感第一、拙を繁を厭はず。そして更ニ減と厳と、そんなことで数多くせず、詩を画くつもりで精進して見られたら。兎二角楽しんで苦しんでやって居るうち上達疑いもなし。欣羨切望。

以上から読み取れることは、正平は伝統的な画や画論に飽き足らず、より現代的な考えを持っていたことが分かる。これは、正平が古来の伝統的手法を重んじつつも現代に生きた作品を志向していたからにはかならない。

正平の画や画論に新規性が見られるのは彼のこのような考えからであろう。

彼は画賛に苦心をしたが、彼の端的な文章が残されている。松井如流編『條幅・扁額の研究』（前掲）に掲載された「画讚の書きかた」である。

いささか長文であるが、ここに引用しておく。

画讚について書けということであるが、それには先ず画に対する私の態度から語らねばならない。昔は文人画というと、蘭竹四君子から、樹木山水と順を追って習い、それを一応学びおえれば足りるという考えが一般であつたようであるが、現在私たちが画をかくにはこうした法にはよらない。ただちに自分の眼で自然を見、物象を写生して、自からのものとして構成——創作する。これは決して私、個人の態度ではなく、今日の画家の一般的な態度であることはいうまでもない。旧来行われた法も一つの確実な方途ではあるが、今われわれのとっている態度は、これより自由であるとともに、また苦難の道であるといえよう。

そこで、落款の入れ方、題賛の位置をどうするかという点にたち至つても、やはり、単純に一種の法を定めてそれに依るということはできないのである。そもそも法というものは、その人によつてその法が立つものであつて、一般に通ずる法というものはないと思う。古人のいわゆる法なるものが、必ずしも法として成立するものではないのである。

実作に當つてみればすぐわかることであるが、何処に落款をいれ、何処に印を押し、どこに讚をするかということは、常に作品が教えてくれる。作品自らが、それを要求しているのである。つまり画と讚とはそれほど切つても切れない契合があるのであつて、その無いのは画でも書でもないといつてもいいであらう。

古人の作品を見ると、ある場合には不思議なところに落款や讚をしたものがある。これは実にその人、その場合にのみ許さ

れ、また成功する独特の法なのである。だから古人にあるからといってそれに倣うのは愚なことである。例えば玉堂琴士の画などには、ときに非常に破格の題字をしたものがある。それが何とも言えない趣を成しているのであって、誰か他の人が、それに倣ったとしてもこうはいかない。何というか、思いきり踏み込んだ位置のとり方をしているのである。

これを裏返して考えるならば、約束された位置に約束の言葉を書くなどということは、むしろしない方がよいであろう。讚によつて一種の趣をかもし出せばこそ、その必要があるのであつて、そのような働きもなく、むしろ趣を妨げるようなものは、本来文人画とは無縁なものではあるまいか。古人もこのことについては、「俚鄙なる匠習よりも、よろしく没字碑に学ぶを是と為すべし」と言つて痛烈にやつつけている。

結局、画が出来上がつて、それに落款をする場合、また印だけ押す場合、二字でも一句でもこれに題賛する場合、ともにそれは画の延長であり、どういう意味の文字が書いてあるかということには関係なしに、そこに筆で書いてあるその字の線の動きが、画の言わんとしていることを更にうけ継いで表現していなければならぬものと思う。これが画題の作用の一つの大きな分野であることは確かである。

この一文で述べられた「今われわれのとつている態度はより自由である」や「法というものは、その人によつてその法が立つ」などは、正平の篆刻論にも通じる考えであり、彼が実作主義また古人の考えを尊重しながらも、独自の手法を常に探つていたことが見て取れ興味深い。

四 山田正平が影響を受けた画人

山田正平の画や画論を考えるにあたり、益を受けた重要な人物として、池大雅・富岡鉄斎⁽¹⁾・小川芋銭・呉昌碩が挙げられる。これは、筆者は以前、正平が東京学芸大学で指導した学生に対してのアンケート内容からも理解できる。正平は授業中に、池大雅・富岡鉄斎・小川芋銭・呉昌碩に関して種々語っていることが見られた。

正平が草した文章を引きつつ、彼らへの人物観を見てみたい。まずは、呉昌碩であるが、正平自身が語つたものとして「呉昌碩を訪ねる」(『好古』昭和十四年十一月)と「呉昌碩先生と先人寒山翁と私」(『書道』第五卷第一〇号、泰東書道院出版部、昭和十一年十月)が詳しい。いささか長文であるが、ここに引く。両者は略ぼ同文であるが【】内の引用は、『書道』により、他は『好古』による。

私が、呉昌碩先生にお目にかゝつたのは、岳父寒山の歿後、大正八年晩秋、河井荃廬先生に伴はれて渡支した時のことであつた。最初に翁を訪ねた時は、その日は少し薄曇りの日であつた。河井先生に伴はれて、日本人には殆んど行き合はない町々を迂曲してから狭い小路へ入り昌碩先生の門前に立つた。黒塗りの文餘の門扉が堅く閉ざされてゐる。これは要心の為めで、支那人の一寸した住宅はみなさうであつた。門を叩いて案内を乞うと左右に開かれ、其處は六七坪位の石畳みの空庭となつてゐて、それを圍んで、家があるのである。その空庭に面した右方の奥行き四間もあると思はれる部屋が應接室で、すぐ翁は出て來られた。まことに老婆さん然とした温容で、逸氣稜々の作風に似合はしからぬものであつた。

河井先生は如何にも愛情に満ちた握手をされ、久澗を叙する挨拶をされて、我々は卓を圍んで腰を下ろした。私は言葉が判らないので翁がまたしても小さな扁壺の鼻煙を袖中から取り出しては絶えず指先きにつけて鼻孔へなすられるのを、物珍らしく眺めてゐた。いろゝ話のうちに、現在支那で所謂高德の隱者に書をよくする人の有無の質問に、翁は沈思甚だ久しくしてゐられたが、容易に名前が出て來さうになかった。翁からの質問もいろゝあつたやうで、そのうちに日本人は何故に色彩の強きを好むかとか、藝道は、親子でも仕方のないものであるなどの話のあつたのを覚えてゐる。その日は應接間で面接しただけで歸つたが、その後耽單獨で度々行つて、こんどは書齋で仕事をされるのを見せて頂いたのはうれしい思ひ出である。薄暗い階段を靴のまゝで昇り、書齋へ案内された。書齋での翁は薄汚れたとしか思へぬ鼠色の長衣を着て下腹の邊を白い紐で縛つた無雜作の風體で、卓子の傍には雜書や仕事に必要な雜道具が置いてある位で、極めて簡素なものであつた。千卷の書も、萬里の道も何の苦もなく頭の何處か、或は腹の隅にでも小さく畳み込まれてゐるらしい。卓子の上へ紙を展べ、立つて揮毫される。一枚出來ると「不好、不好」と愛嬌を言はれる。私が言語を知らぬので、大體筆談であつたが、時々草體で長々と書かれるのには一寸應酬に困つたものである。御訪ねする毎に應接間には翁自作の巨幅が掛け更へてあつて、其れは坊間に見る所と異り、如何にも會心の作らしく、自ら楽しむといふ翁らしい心境が窺へる様な氣がした。

【吳翁は特に梅と菊を好んで描いた様である。篆を作るの法を以て之を写し、造化を師とするとか、梅を写して世を出づるの姿を取り、菊を写して傲霜の骨あるを取るとか、篆刻にも等

しくこの性情が窺へる屈彊不羈な梅の姿幽寂遺世の思ある菊の香が感じられる。】

私の訪ねた頃は依囑者門に市をなすの繁昌で、随つて多作の弊も伴つたやうなことも聞き、また歿前一二年に滅燭一輝で面白いものが出來たとも聞いてゐる。兵燹に迫はれ他郷に流寓し、自ら酸寒の一尉と称し奔放の情熱を詩書畫篆刻に傾注した時代の話が懷しまれる。

兎に角翁は近代支那掉尾の大家であつた。石鼓文を學んであの換骨脱胎、前代未曾有の刻風、實に山を移し流れを逆にもする痛快無比な變化清新を、目前に示された事には、我々古へを尋ぬる者、藝にたづさはる者の終生の鞭撻であり、深く鑑とせねばならぬことである。

如何に缶翁の氣魄の雄偉なるか左に印刻と題する長篇の一部を摘録して見よう。

【天下幾人學秦漢。但索形似成疲癢。我性疏濶類野鶴。不受束縛彫鐫中。少時學劒未嘗試。輒暇寸鐵驅蚊龍。不知何者他為正變。自我作古空群雄。】

小川芋錢とは生涯に亘つて交流を持ち続け益を受けている。

かつて芋錢が正平に宛てた書簡を取り上げ、正平の芋錢への思いを探つた。それは「山田正平研究（1）山田正平をめぐる人々とその影響」（『書道芸術』第四卷第五号、通卷第二三号、前掲）と「山田正平研究（2）山田正平をめぐる人々とその影響」（『書道芸術』第四卷第六号、通卷第二四号、前掲）である。

正平と芋錢の画風は大きく相違するが、自然觀察や、芸術に向かう姿勢に影響を受けている。正平と芋錢の関係を箇条的に纏めておきたい。（一）内は、西暦と正平年齢である。

○小川芋銭の来訪をうける。(一九二〇・22)〔「芋銭翁の想い出」〕

○小川芋銭より葉書を受け取る。(一九二一・23)〔この後芋銭より、書簡一三通、葉書五通を受け取る。これは山田家に現存する〕

○小川芋銭の推薦による「寒山寺正平篆刻会」を行なう。この後四、五年続く。(一九三一・33)〔「芋銭翁の想い出」〕

○芋銭翁旧居を訪ね、牛久沼附近のスケッチをする。(ス)

○小川芋銭を病床に見舞う。(一九三八・40) (ス)

○小川芋銭の通夜に小川家を訪れる。(一九三八・40)〔「芋銭翁の想い出」〕

次に正平が益を受けた人物への彼による人物観ともいえる記述がある。本節では文献・資料の紹介に留め、第六章で記述する。

まず鉄斎であるが、彼が草した「鉄斎と篆刻」(『三彩』第三八号、美術出版社、昭和二十五年一月)に詳しい。

大雅については、「大雅堂と南画」(『南画研究』一七)に記す。

また直接的ではないが、会津八一の東洋画への考え方の益も受けている。それは「会津先生と私」(『書品』七九号、東洋書道協会、昭和三十二年四月)と「会津先生と篆刻」(渾斎同人編『渾斎 秋艸道人』川村徳助発行、求龍堂、昭和四十三年十一月)に詳しい。

五 正平画への評価

山田正平の画への評価はどのようなものであろうか。同時代人の言説からみてみたい。まずは生前交流のあった中川一政を取り上げる。

正平さんのふところに日本紙のスケッチ帖があるのを私は知っていたが、生前私は正平さんの絵をみたことがないのである。山田正平追悼号で五、六枚見たのがはじめてである。そして宛然、中国人の絵だと思った。何より俗気がない。そして刀法がきいているところは矢張り見逃せない。私は死んでいる文人趣味はすきでない。しかし、正平さんのは生きている。

中川一政「生きている文人趣味」(『山田正平遺作展』

中央公論美術出版、昭和三十九年八月)

続いて、中央公論社の編集長を務めた松下秀麿である。

戦後、市井に酒の乏しかったころ、小倉理化学研究所長の小倉千麿が、甘藷から盛んに純良な酒をつくったので、我党の士は阿佐谷の彼の家に暇をつくっては集り飲んだ。そのある日、黄眠先生を首座に山田正平、大鹿卓、それに小倉所長と私が会して、したたかに、純良焼酎の、アルコール分四十二、三度位から最高五十五度位のものを傾けた。大酔の後、古歌などうたい、やがて散歩かたがたこんどは聴雪廬にうかがった。携えた大瓶をここで空けると次は筆硯である。先生は「そえ子、そえ子、紙だ」(はい、はい、ちよつとおまちて)と台所でごちそうの準備中の奥さんは、この荒武者の闖入にてんてこ舞いを

された。二、三面の硯にむかい、筆筒から先生のとつておきの筆をとりだして、おのおの天馬空を行く底の書画を書きなぐつた。印も「それ、それ」と先生が投げ出されるものをひろつては、西冷印社製の印泥をべたべたつけて、おした。すると、一止道人はその泥をたつぷり指先きにつけて、こそこそと次の間の本のあいだに隠れ、裾をまくり上げて大切な一物を塗つていく。これは一大事、気でも狂つたのではないかとぞいてみると、何のことはない、感慨の詩書の末尾に、ごそごそいわせて押捺しているのである。道人曰く「一世一度の試、これこそ稀に印史に伝えられる亀頭印である。僕も生涯に一たびは試みたいと思つたが、今日これを実験しえて、何の幸かこれに過ぎん」と。先生ははじめころがつて笑い呆け、平素の一止さんを知るものにとつては、晴天の霹靂ともいふべき天真爛漫の一風景であつた。聴雪廬の床の柱にいつもかかつていた片聯の「応無住处而生其心」は、その時、私が句を選んで、道人が書したものである。

これも戦後間もなくのことであるが、山田さんと二人で中川一政氏自慢の金冬心を見に行こうということになつて、阿佐谷から永福町まで歩いて行つた。長巻の書作品、墨梅図もあつたかと思う。それに冬心先生銘のある硯など五、六件を見せて貰つた。食いつくように眺め入つていた山田さんは「さすがのものですな」と会得するところがあつたようだ。帰りに、阿佐谷の大通りにたつた一軒やつてゐるソバ屋で、行列をして、やつとソバを啖べ「国が亡びても芸術はのこるということ」を、このごろしみじみと感じますね。しかし書にしても、篆刻にしても、中国の亜流でしかない日本のものはどうでしょう。大死一番大いにやらなきあ」と述懐したことを忘れ難い。そういう意味では山田さんは真に芸術の鬼であつた。鬼であつたが故に、

世間に示す作品は数少なかつたのであろう。その厳しい制作態度は、およそ世渡りにはふさわしくなかつた。その厳しさを最後まで崩さなかつたのは、一面からみると、きみ子夫人の内助の功に帰さねばならない。

いま「万象院永樂一止居士」と化した山田さんは、現世のあらゆるものから解放されて、小川芋銭や河井仙郎や会津八一、それに呉昌碩や鄧完白、金冬心、さらにはセザンヌ、ゴッホなどと、かつて自から画いた「八僊図」のように、時間のない漠々たる天上で、アツハハハハと急調子で供笑してゐるであらう。合掌。

松下秀麿「一止道人追懷」

『古酒』第八冊、昭和三十七年十月

また松下秀麿は筆者宛の書簡において、

小川芋銭は印人にとつて、芸術人として最も影響を受けた作家と私は考える。芋銭には畏敬を以て対している。長男の時か潤平君の時か今は明瞭でないが、五月の節句に朱筆よる鐘鬼の図を芋銭より贈られてゐる。中川一政氏の芸術人としての境涯に共鳴し、その画□に同一の究極点を期したものがあつた。

と述べてゐる。

これら諸家の言説より正平の画に対する所感が見て取れ、概してその評価は高いといえる。が、彼の正当な評価や日本画史での位置づけはまだこれからといえよう。まずは彼の絵画を主体とした作品集が編まれることが望まれる。

六 おわりに

本節では、山田正平の画と画論に関する文献・資料を精査し、正平の新たな功績の一端を明らかにした。また正平の画における初期資料を提示をし、同資料の価値を指摘した。

正平は篆刻家であることは論を俟たないが、画においてもこの時期を画する画人の一人に数えてよいと思われる。古今東西の画に学び、最も日本人らしい風趣ある簡素な画風を確立した。その独自性は古今独歩といえる。

確かに正平の画は東洋古来の伝統を重んじてはいるが、決してそれにしぼられるのではない。篆刻家としての刀意あるもので、彼の独自性は線と画面構成に見られる。画論は洋の東西を問わず融合されたもので、彼独自の美学に基づくものといえる。

昭和三十九年七月に中央公論画廊にて開催された第一回「山田正平遺作展」の図録の「趣旨」を、正平に私淑した篆刻家の保多孝三が起草した。正平の画に対する内容をよく表していると思われるので、ここに引く。

趣 旨

一 止道人山田正平先生。

その書は篆隸の蒼古に出でて真草また後世の嫵媚を厭ひ、その画は朱耷の風骨に傾倒して兼ねて木米・鐵斎の高逸を摂り、さらにその印に至っては呉趙を透過して直ちに丁敬身の古格に参ずるものがありました。

先生少きより跌宕不羈、中年城西の地に棲遲して蹤迹を韜晦し、藝境いよいよ高きを加へましたが、昭和三十七年書道使節

の長として中国に渡り、途中病を得て遂に起たず、藝苑頓に寂莫を想はしめるものがありました。

先生歿して二載、ここに遺墨・遺作を蒐めて江湖の清鑑に供し、いささか在天の藝魂を慰めんとするものであります。

昭和三十九年七月

正平の生涯は、探れば探るほど興味が尽きない。没後五十年を記念した展覧会は魅力にとんでいた⁽²⁾。日本の畸人伝中の人物として推奨したい。伴高蹊の『近世畸人伝』の再続編を編むとすれば、山田寒山と同様正平の名もしかと記さるべきであろう。彼の性格は、豪放磊落、名利を求めることにはなかった。飄逸の風流人正平の画は、六法の一である「氣韻生動」が表現されており、画論は、彼の作品や作風を知る上で貴重な資料的価値を有している。

【注】

(1)・筆者「富岡鉄斎の篆刻」「富岡鉄斎と印人との交友」、「インタビュー富岡鉄斎を語る」、「中田勇次郎 富岡鉄斎の芸術と学問」・「小高根太郎富岡鉄斎の芸術と鉄斎研究」、「富岡鉄斎文献目録」(『季刊書道ジャーナル』季刊三八号通巻第二〇一号、書道ジャーナル研究所、一九九四年八月)

・筆者「富岡鉄斎研究―園田湖城宛書簡―」(『修美』第一三巻通巻四八号、修美社、一九九四年十月)

・筆者「日本篆刻家の研究―富岡鉄斎の篆刻と篆刻論―」(『熊本大学教育学部紀要』第六六号、熊本大学教育学部、二〇一七年十二月)

(2) 二〇一二年は、山田正平没後五十年に当たっている。記念の展覧会が鳩居堂画廊で、十月二十三日から二十八日まで開催された。

第五節 用具・用材について

一 はじめに

古来文人墨客は、詩文・書画などの風雅の道に親しみ制作した。趣味性を尊び、書斎で使用する文房具には愛着を抱いた。山田正平もまた同様であった。伝存する遺愛の品々は、一級の道具とはいえないものの、制作にその材質の特色を生かした。そういう意味で彼は単なる蒐集家ではなくむしろ実作の人であったといえよう。

本節では、彼が使用した用具・用材を紹介し、用具・用材観に関して論じる。

二 山田正平の文房四宝観

古来文人は、趣味性を尊び、書斎で使用する文房具には愛着を抱いた。山田正平もまた同様であった(図1)。伝存する遺愛の品々は、高価な道具とは言えないものの、制作にその材質の持ち味を生かした。

ここでは正平の文房四宝に関する資料・文献を紹介し、正平の文房四宝観を見てみたい。まず正平関係資料、続いて会津八一関係資料、最後に山田寒山関係資料を提示し若干の考察を加える。

1、山田正平関係資料

山田正平関係資料から印材①～⑦、印泥⑧⑨、印刀⑩⑪、印箋⑫の順に提示する。

①出講の日は大学の教官も揃って聴講しておられた。「石はいいものですね。黙っているようだけど私に語りかけてきますよ」と、第一回の講義の日、寿山石を手にして誰にいうなくぼつりと一言いわれた。古武士のような風貌が私には忘れられない。

(筆者「アンケート」による、東京学芸大学での講義)

②開学祭に出品した俱会一処の朱文印、あれは四度目かに来た作である。最初は依頼者が取りに來し夜分、その人を側に置いての作、少し硬い鶏血で、事、志と違った様であったが渡して支舞った。翌日思ひ直して別の石で試みた。朝の空気が爽やかなせいか、前作には勝る者が獲られたので速達で送って置いた。

(「二点一画」『山田正平先生篆刻講義ノート』前掲)

③この頃、私の所で四五人の人が一緒に篆刻を習い始めて居ります。皆それぞれ教養のある人達ですから、こちらの話しにも推量が早く早速に刻す方も始めて見ました。石が欠けるばかりで線をなさないと困って居りましたので私が目の前で刻って見ました。なる程、稽古用の粗材でもろく欠けるところもありま

したが、全局に心持ちを置いて、ゆつくりと、しかも引きしめて、少々の欠けなどは寧ろ、腕の冴え、刀筆の花くらいに心得て、充分に堂々とおやりなさいと申しました。次回から持つて見える印はすっかり刀が生きて来て、忽ち五六七八と数が増して進歩が目に見えてはつきりして参りました。

〔「始めて篆刻を試みる人に」『書道講座 第六巻 篆刻』〕

④御欣賞の鶏血材、大二顆は、美材にて甚眼を楽しませるに堪へる品、堂々たる材質、心おくれせぬ横逸の感興などと、今より懸念ニ御座候。いま一つの方、これは一寸硬質の奏刀には不適のもの如何ニすべきや。印文五台山御承知致し候も、何か別の手持ちの材にて試むことも有しと、此分自由御許し置き願上候。

〔「桜井定一宛書簡」昭和三十五年四月十一日〕

⑤先般は、印材と御手紙を受けながら、つい取紛れ失礼してしまいました。印材、たしかに、二ツの方ですか、あれはよろしいか。三ツ緑色の分は、新玉の質一寸鍔筆には適し難く、折角の御入手の品、惑は特に紀念的の物でもあれば、何とかし出来ぬこともなし。只運刀にさわやかとは参らず。御承知願度。

〔「桜井定一宛書簡」昭和三十五年十月二十八日〕

⑥印材三つも正ニ落掌。印文のこと拝承、材型上、万里一條鍔もよく。迂定。鉄廬。なども面白いと存じます。

〔「桜井定一宛書簡」昭和三十六年十一月二十五日〕

⑦一體鈕のある印材に刻印するのには

鈕に首尾のあるものは大抵首を手前に尾が前方になるやうに刻することか近古からの慣しとなつて居る

印泥のはなし

水印 奈良博物館 ある

道具

ニュー棒 ニュー鉢 楊枝様の刷毛

印□□□のかよいか

静安平實をよしとす

〔「講義ノート」山田潤平編『正平文人画』、日本習字普及協会、二〇〇一年十一月〕

⑧印泥の手入れは暑中やはりよくかきまわす位の□が。冬はどうしてもかたくなり。暑中は油うく。中国の上製品はそのこと割ニ少かりしやニ思つて居りました。

〔資料・出典不明〕（山田家蔵）

⑨朱のこと指先きにつけて作りて、結果よろしければそれにてよし。和製の色のあしきより勝らんか。要は効果なり。紙は必ず□紙と限らず。鶯牋にてもくるしからず。

〔資料・出典不明〕（山田家蔵）

⑩そしてこれは、徐星州からもらった刀だがお前にやると申され、お渡しになりました。

〔小池邦夫「小池邦夫の課外授業 桜井定市さんの書簡より」『月刊絵手紙』第七一号、日本絵手紙協会、平成十三年十一月一日〕

⑪緒で巻こと

蛤鋒

（「講義ノート」山田潤平編著『正平文人画』前掲）

⑫印箋一枚作るにも其人の全精神を働かすべきである。またこんなことも思い出して見た。材料なども金玉、陶磁、漆木と開拓したら、また取り扱う字体も楷行草隸も試みたいなど。
若い人達よ、大きく息吹きして高き趣きを愛する現代の人達の魂を奪え。

（「篆刻の審査に当りて」『書品』第一二号、東洋書道協会、昭和二十六年一月）

2、会津八一関係資料

会津八一関係資料から篆刻学①～⑤、印材⑥～⑨、印譜⑩、印泥⑪～⑭の順に提示する。

①山田正平、石川蘭八の二人は彼等の方から私の門人と称して居りました。その関係で私から五峯先生へ紹介したのでした。しかし私は技術上の師匠でなく篆印、文字学、印章学上の師であつたかも知れません。

（坂口獻吉宛書簡、昭和二十七年二月二十九日、『會津八一全集』第一〇巻、中央公論社、昭和五十八年）

②篆刻論はこれこそ何か一冊の書物にかきて、諸家の御批正を仰ぐやうに致したきものと存じ居候（一）。

（坪内逍遙宛書簡、大正十一年四月十日、柳田泉・長島健編

『坪内逍遙會津八一往復書簡』、中央公論美術出版、昭和四十三年）

③拙筆の墨蹟一、二巻とり敢えず出版のつもりにて候。その後にて書道の理論に関するもの、篆刻に関するもの、各一冊相まとも申す可しと存じ候。

（横山有策宛書簡、大正十三年九月二十七日、植田重雄著『秋艸道人會津八一書簡集』、恒文社、平成三年）

④近来、篆刻の革新といふことを考へ居り候。考へることは実に十年もまへから考へぬいたことなれども、これからは主として實際問題を考ふべき順序と相成り候。此の事業を以て、老生が今生に於ける記念にもせばやと思ふばかりに候。

（小泉清宛書簡、推定大正十年四月三日、『秋艸道人會津八一書簡集』前掲）

⑤拙者は近来篆刻界の現状打破の必要につきて感ずるところ深く、いづれ何等かの手段方法を執ることに至るべく、その際には自分でも刀を執りて制作のつもりにて候。意見の一般は先般蝠亭と貴兄とに御話致したる通にて候。あれは前漢以来の革命にて賛否ともに喧しかるべしと樂み居り候。

（伊達俊光宛書簡、大正十一年四月二日、『秋艸道人會津八一書簡集』前掲）

⑥印は一種の文房具にてもあり、美術品にてもあり、製作の具にてもあり、高価を投じてでも決して不経済とは申しがたく、且つ半永久のもの故、考へればやすきものにて候。之に反して安直

にして粗悪なる材に拙劣なる篆刻を加へしめたるものは、自家の鑑識の進むに従ひて、座右におくさへ堪へがたく相成るものにて候。これも拙者自家の経験に御座候。前書註解の為め如此候。

(伊達俊光宛書簡、大正八年十二月二十四日、『秋艸道人會津八一書簡集』前掲)

⑦ 先生の透邇村莊の印は、印材のいゝのが見あたりませんから木印にさせることにしました。

(坪内逍遙宛書簡、大正十二年一月十一日、『坪内逍遙會津八一往復書簡』前掲)

⑧ 印材は佐渡相川町の佐々木邦藏と申す老匠に命じて造らしめたるもの。篆は出発の前夜木村正平を喚びて刻せしもの。併せて御一笑被下度候。

(坪内逍遙宛書簡、大正七年七月二十一日、『坪内逍遙會津八一往復書簡』前掲)

⑨ 拝啓 いよ／＼冬来り、寒く湿つぽく閉口致し居り候。さて甚だ御面倒のことにて候へども、只今印材三顆相送り候間、勝田先生へ篆刻御願ひ被下度上候。前便も申し上げし如く、拙者印章百五十顆焼失致し、使用すべきもの無く候ところ、明春正月四日より京都大丸にて拙墨個展開きたしと突然申来り、額面も五六點所望を受けしにて困居候。乍恐縮、特別大至急に勝田先生へ御たのみ被下、数日中に頂戴致したきものに存じ候。文は

北越會朔

白文

秋艸道人

朱文

渾齋

白文

自分としては日限つきの揮毫は謝絶し居り候へども、窮し来れば他へは頼み候ことにて甚だわがままの沙汰にて申わけなき次第にて候。印材は老來少しにても軽きを欲し候間、墨線のところから切断して御刻を願ひたく候。潤資も軽少にて恥かしく候へども金百五十圓封入の小為替差上げ被下度候。徹底的全焼にて囊裏無一物の場合にて恐縮の至に御坐候。貴下へは面識も無く、失禮ながら御好意に甘え候儀と御ゆるし被下度候。これより十日間は翰墨に没頭致し候間、木村氏など御遣はし被下るまじく候。

右のみ如此候。敬具

十二月六日

會津八一

桑山太市様

印材の切り取られたるのこりの部分も、他日何かのため利用可致候間、あはせて御送下され度候。

(桑山太市宛書簡、昭和二十年十二月六日、『會津八一全集』第九卷、中央公論社、昭和五十八年一月)

⑩ 秋艸道人印譜をつくりたく久しく心がけ居れども、印箋がまず出来ず、今冬までには何とか致し度候。

(坪内逍遙宛、大正九年四月五日、『坪内逍遙會津八一往復書簡』前掲)

⑪ 追啓 昨日稍々大なる肉池を晩翠軒にて見つけ、早速相もとめおき候間、不日御眼にかけ可申候。つきては先生には小生所用の朱肉を御目にとめさせられ、同様のものとの御命にて候へども、尚ほ別紙印色四種比較して御目にかけ候間、更に御高鑑相

ねがひ候。李肅之印東西南までは晚翠軒の特製にて、北は小生現在所用のものに御座候。東は少しく古色を含めて黒味を帯びしめしもの、これは當今最も黒人筋の愛用するもの、殆ど朱と茶との間とも見ゆるばかりに御座候。南は最も世俗門外の人の眼に喜ばれ候ものにて所謂黄口と申すもの、小生はこれを好み申さず候。西は其間にてこれ小生愛好の色に御座候。日常小生の用候ものはこれに似て稍と相劣り候やうにて候へば、先生へは西を御すゝめ申上度存じ候ところ如何候哉。

東ハ一匁 十錢 北ハ一匁 七錢

西ハ一匁 九錢

南ハ一匁 六錢

値段の示すところにみても、黄口の格式は明瞭なるに、世俗の人印肉は黄ばみたるものとのみ思ひ、小生所用のものをさへかれ(マ)申し候もの稀ならず候こと、笑止千萬と存じ候。晝より晝は朱肉の少しく黒みを帯びたりと見ゆるばかりのものの上品にて、落ちつきありと相信じ候。敬具

八月十一日

會津朔

逍遙先生 函丈

印色の御比較は晝間になし披下度、灯火にてはとかく黄口のみ目につき可申候。

(坪内逍遙宛書簡、大正七年八月十一日、消印八月十一日、

『會津八一全集』第八卷、昭和五十七年十一月)

⑫尚ほ／＼昨年御とりつぎ申上たる印肉ハ、油のわき候やうすも御座なく候哉。たいてい心配なき考にて候へども、念の為め肉池をさかさまになしおき被下候はゞ安全に御座候。

(坪内逍遙宛書簡、大正八年五月八日、『坪内逍遙會津八一往

復書簡』前掲)

⑬御印肉酷暑の為め少しく油わき候やうに、印影にて拝見致し候然らば蓋のまゝにてさかさまになしおき被下度候。

(坪内逍遙宛書簡、大正九年七月十五日、『坪内逍遙會津八一往復書簡』前掲)

⑭続本はよろしく候へども、絹は印肉のつきもあしく、篆刻癖の拙者としてはことに好まず候。

(式場益平宛書簡、大正九年一月九日、和泉久子著『新資料付注會津八一書簡集—式場益平宛書簡—』笠間書院、昭和四十三年二月)

3、山田寒山関係資料

山田寒山関係資料から印の製法について提示する。

①山田寒山、山田正平宛書簡、(年月日不明)、(山田家蔵)

大森宗伯爵家ノ

届ケモノ銀印小包

ニテ送ル

電話ニテ在否ヲ

タシカメ特ニ持参スヘシ

此印ノ製法表裡印

面ノ具合等微細ニ実

見シテ記憶スヘシ将

来以此印法發達

センコトヲ要ス

家人一同ニ能ク示シ

説明ヲシテヲケ

製法ハ其内一度呼寄

伝授スルモノナリ

寒山

正平子

②陶印を始めましたのは、昔京都に玄々斎と云ふ名人がありました。近頃では、私が東京へ来て二十八年にやつたのが始めてだ、マ―中興とでも申しましょ。今日では濱村も造りますし、又岡本椿處が、佐渡の常山に従つて陶法を学び、大分やるので流行して来ました

銅の鑄印といふものは、陶印よりは一層趣味の深いもので、折角造つた篆文が、湯の廻り工合でシ偏がン偏になつたり、一や―が消江たり、天然の鑄分で色々字形に変化を現はします工合は、トテモ人工の及ぶ所でありません

(「鉄筆閑話五(山田寒山師談話)」「寒山新聞」年月日不明)

山田正平の文房四宝観を探るため、山田正平関係資料を、続いて会津八一関係資料、最後に山田寒山関係資料を掲げた。これにより、相当正平が文房四宝に意を用いていたかが理解できる。当時中国から舶載される文房四宝はそれほど多くなかつたと思われるが、その中で可能な限り蒐集し、実際に使用した。作家としての立場で文房四宝に対しての点はやはり注目してよい。正平関係資料の中で、印材に関する①～⑥は、篆刻家としての経験のいる事柄であり、正平は印材の質を知り抜いていたと考えられる。

また別に、印泥(図2)、印刀(図3)、筆墨硯紙(図4～6)などがある。ここでは印刀に関して紹介する。三種の印刀が山田家に伝えられている(2)。

①両刃 刀身に、「正平先生清囑、庚寅十二月昭平作」とある。

②片刃 刀身に、「昭平作」とある。

③両刃 刀身に、布が巻かれている。

正平の使用した印刀は、かなり厚手のものであり、鈍刃である。

彼の篆刻の作風は重厚で韻致の高いものであるが、このような印刀を使用したのがゆえ生み出されたことも頷けよう。

三 おわりに

山田正平の用具・用材について、山田家に遺された遺品や、関係資料から探った。

一流の芸術家は手に合った一流の道具を使用すると言われる。それは用具・用材が作品に大きい影響を及ぼすからである。篆刻は展覧会の会場に展示されるようになり、その寸法は大きくなり、デザイン的要素が強くなってきた。今こそ篆刻の在り方、またオリジナル性を考える必要がある。篆刻は本来一寸四方の大きさに、その美を盛り込むものと言える。確に正平に大印も見られるが、正平の作品や用具・用材観に触れるにつけこのことが思われる(3)。

本節は、平成十六年十二月十八日に開催された「平成十六年熊本・大学国語国文学会」での口頭発表に新知見を加え、新たに考察するとともに、新資料を提示し、正平の研究の一端を明らかにしたものである。

【注】

(1) 八一は印章や篆刻に関して一見識を持っていた。一冊の書物にすることを望んだが、生前纏めることは果たせなかった。今後八一の意を汲んで『会津八一の篆刻論』として上梓致したく思う。

(2) 正平の印刀は、両刀で厚みのあるずしりと重みのあるものである。呉昌碩の印刀と類似する。

(3) 古筆学を大成した小松茂美は「仮名が本来持っている美しさは、色紙大の寸法に凝縮されるものである」と語られた。このことを考えるに際し、示唆される。



図 2 山田家蔵 印泥



図 1 山田正平の蔵書並びに用具・用材
(1993 年頃)

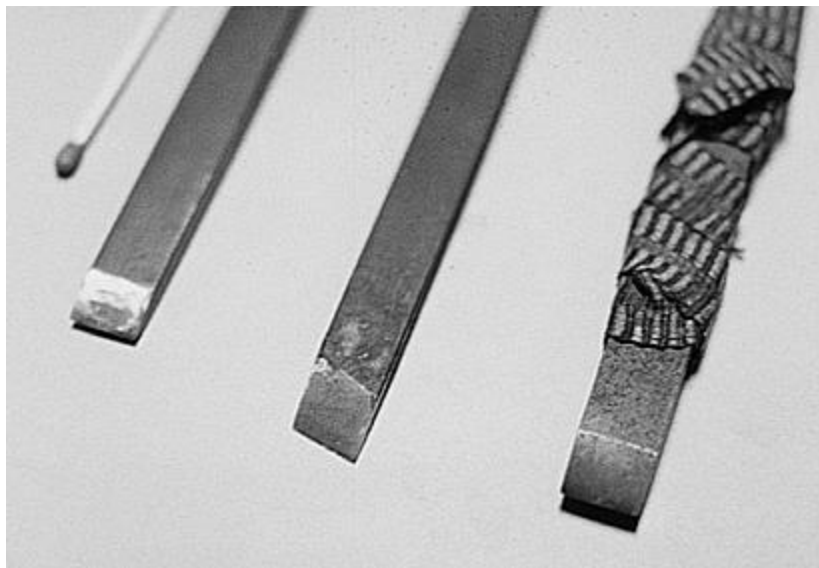


図 3 山田正平使用印刀



图 4 山田家藏 筆



图 5 山田家藏 墨

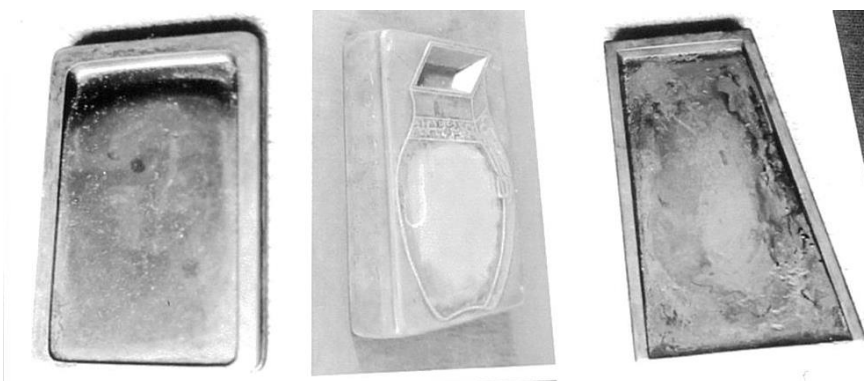


图 6 山田家藏 硯

第六節 実父木村竹香について

一 はじめに

山田正平は、明治三十二年（一八九九）二月一日、新潟県新潟市古町に、篆刻家木村竹香の次男として生まれた。幼少（十五歳）から父のもとで篆刻に志している。一九一四年、十六歳の初夏、東京に出ており、竹香とは十五年間生活したことになる。正平が篆刻に志したのが十五歳の頃であり、当時すでに篆刻技法の基礎を学び終えていたことを考え合わせるならば、竹香との関係を探ることは意義あることと思う。

本節では、正平の実父竹香に関して人と芸術に関して論じる（図1）。過去に同テーマで執筆したが、新知見を加え、改めて考察するものである（1）。

二 木村竹香について

1、生涯

木村竹香に関して、本節において新しい知見を新資料とともに紹介する。竹香の生涯を通覧するに際し、基本となる資料は次の四種である。一は竹香の戸籍謄本である。二は横野春松が月刊誌『北溟』（昭和十一年十月十日）に「人物春秋（十二）、名人木村竹香老人」として述べた一文である。三は新潟大学教授岡村鉄琴氏の論考であ

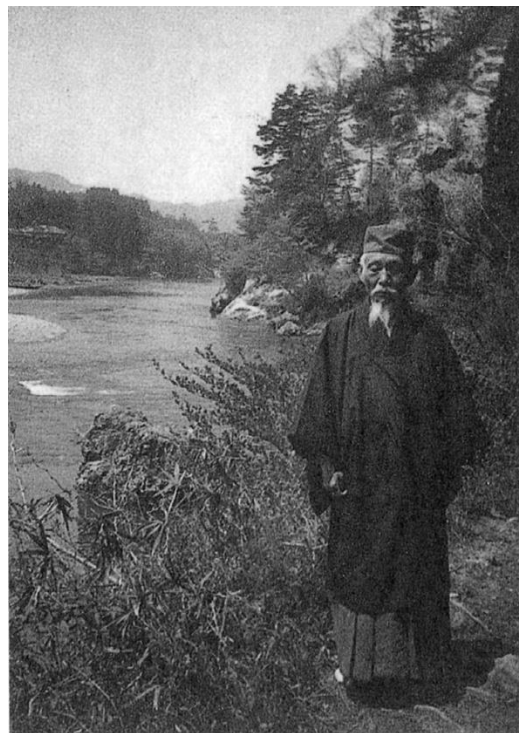


図1 木村竹香肖像（昭和15年5月7日）

る（2）。四は高原哲氏が『はくぼく』に執筆した「篆刻家木村竹香小伝」である。本研究はこれら諸氏の論考に負うところが多い。

竹香の業績は、篆刻の制作と、邦人印譜として屈指の名譜である『羅漢印譜』の刊行に代表されるが、その仕事は実に緻密で繊細である。

山田家に印譜や写本、また彼の生涯を知る上で格好の資料が遺されている。ここに新史料を二種提示したい（3）（図2）。その一は『写意式』で「醉古堂印」の押印のある写本である。醉古堂は竹香の齋号である。これは三〇丁からなり、縦二四・五糎、横一七・二糎である。内容は印章や篆刻作品の模写で、他に古瓦硯の拓本、大江平



図2 木村竹香写本2種

次郎の御用標章などを貼り込んでいる。その二は『舞花積雪一』で「酔古堂印」の押印のある写本である。三六丁からなり、縦二四・五糎、横一七・〇糎である。内容は当代篆刻家の篆刻作品の印影、他に一世岡本椿所の転居通知葉書、泉布の拓本などを貼り込んでいる。

筆者は以前に竹香について、函館在住の、正平の兄軍平の妻木村キクイ氏に書簡で竹香に関してお尋ねした折の返書から、竹香が昭和十八年に没した際、篆刻に係る資料は山田家に贈られたということが判明した。そこで、羅漢印もその折に木村家から贈られた

ものと推測できる。

まず、竹香の生涯を述べる。竹香は慶応三年（一八六七）三月十日、新潟白根に生まれた。名は政年、斎号を羅漢窟という。明治二十三年十二月五日、中蒲原群白根町大字白根の田村半平の二男として入籍している。妻は木村マス、二人の間に三男三女が生まれている。長男軍平、次男正平、三男幸平、長女キミ、次女テイ、三女フミである。

竹香は若年呉服の行商をしていたが、勉学の時間がとれず、東京に出てみたいと考えていた。名人堅気の性質であり、商売には不向きであった。ただ手先は極めて器用であり、これを生かした仕事をしたいと望んでいた。これを知った竹香の甥にあたる田村二十一は、竹香の父親の反対をおしきって礼物を整え、当時の越後印刻会の名工大江萬里の門を叩かせた。萬里は、中年者はものにならないという理由で入門を断った。本来なら悄然として家に帰るところであろうが、竹香は直接上京し、帝室技芸員である中井敬所（一八三一～一九〇九、名は兼之、字は資同）の門を叩いた。敬所のもとで一年半の間勉学に励み、香草の香の一字を許され、竹香と号すことになる。この後、以前入門をことわられた、古町三番町に住んでいた大江萬里の真向いに門戸を張った。相当の一徹者であったことを物語っている。

また、敬所に自刻の印を送りその叱正を乞うたが、十年の間一日もかかすことがなかったという。壮年は一世岡本椿所（一八七〇～一九一九本名山名氏、名は義邦、叔禮・椿所と号す、岡山津山の人、中井敬所の門に学び徽派の印をよくするを師とし、終生その師弟の情誼も立派であった。竹香の篆刻は緻密で繊細な刻風である（図3）。竹香の人間性を知る上で興味ある逸話を二、三紹介してみる。

ある日のこと竹香の物事に対する潔癖さが司直の知る所となり、



図3 木村竹香篆刻

犯罪の有無を決める印章判定の嘱託を受けた。解明できると五円が、できない場合は三円が支払れることになっていた。竹香は後者の場合が多かった。これは竹香の慎重さの現れといえよう。

更に竹香は骨董を愛翫することを常としたが、ある日それらのすべてが差し押えられた。これは以前某人に泣きつかれ、額面もみず印を捺したことが原因であった。この中に有名な山田寒山の刻した十六羅漢の入った紫檀の龕があった。これは厄を免れて、現在は寒山寺山田家蔵となっている。

晩年は長男の軍平、三男の幸平が勤める日魯漁業の関係で函館に移り住んだ。

その折の引越しの挨拶状は次に掲げる文面である。

拝啓 尊家益々御多様に被渡奉慶賀候 降而老生儀年来の持病難患も島田医院長の懇切なる御診療に依り次第快方に御座候へども未だ全快に至らず候処 此程子息等（母妙英尼）の三十三回忌法要を営辨の為め孫兒ともく来会すること修了

これを機会に病軀を我等兄弟に任せ函館に静養をと切望致

志候 郷土の尊く辱けなさ各位の深甚なる御芳情茲にまた十年愛護訓育を賜り分外至極只管感銘拝謝に堪へず候 情去り難く御座候も子息等の意に任せ急々身辺の玩具雜器を片着け次第更に兒等の迎を待ち渡函杉並町一八三、或は松蔭町一七四の両方へ随意住居致すことに決定仕候

一々参庭拝芝の上御礼申述べべきの処身体不自由にて甚失礼ながら書中御挨拶迄我儘勝手何卒御寛恕願上候

竹香事

頓首

木邨 政平

しかし、長年住みなれた故郷が忘れられず帰郷し、回向院の副住職となった。昭和十一年の春には古稀を迎え、自らの葬式を兼ねて寿筵を開いている。昭和十六年夏頃まで回向院の羅漢窟に住んでいた。その後再び函館に渡り、昭和十八年一月二十八日亡くなった。享年七十七歳。同年二月十五日会津八一は竹香の死を悼み『般若心経』を書き霊前に捧げた。

竹香の墓地は、新潟市西堀通六番町・祐櫛山浄泉寺境内にある。浄泉寺は浄土真宗大谷派である。墓銘は「俱會一處」と正面に刻まれており、台座部に「竹香居」「木邨」とある。また右側面には「大正二年七月十二日」、左側面に「釋妙英 釋竹香木村政復修」とある。墓銘は、山田寒山の筆になる。

ここに葬儀通知を掲げる。これは北海道新聞の昭和十八年一月二十九日、三十、三十一日付けにて掲載された。

父竹香議豫而病氣／療養中の處養生不相叶七十／七歳の高齢を以て一月廿八／日午前八時永眠致候間生前／の御厚誼を拝

謝し此段御通／知に代へ謹告仕候／追而葬儀は三十日午後零／時三十分自宅に於て告別／式執行可仕候尚午勝手通／夜の儀は御辞退申上候

一月廿九日 杉並町一八三

男 木村軍平

幸平

東京 山田正平

友人総代 山田繁造

外親戚友人 一同

御會葬御禮

一月廿日 杉並町一三八

木村軍平

竹香の文章で遺されたものは少ない。そういう意味で次に掲げる二件は重要といえよう。これは元新潟新聞紙上に掲載されたが、その後、鏡淵九六郎（一八六九—一九四〇）が『新潟古老雑話』として、昭和八年六月に出版した中に掲載された。それが更に平成三年五月、新潟明治大正文化研究会代表の蒲原宏氏監修のもと新潟県民俗学会から覆刻出版された。

この新潟新聞の同記事の切り抜きが山田家に遺されている。それによると「青山碧山翁」は「続古老雑話（二五）」に「羅漢印と三大家の合作」は、元は見出しが「三大家の合作」であり「続古老雑話（二六）」に掲載された事がわかる。また新聞記事とはいくらか文字の異同がある。竹香六十六歳の時の文章である。

さて、竹香の文章は次の二件である。これから『羅漢印譜』制作の動向が伺え興味深い。そして如何に竹香がこの事業に執着したかが見て取れよう。

（1）青山碧山翁 日和山畔回向院 木村竹香翁 六十六歳

私の長男は函館で実業に従ひ二男は東京下谷の山田寒山師を襲名して篆刻に従事してゐるが私は新潟が氣分にピッタリするので、孤独生活を覚悟して再住することにした。新潟の美術家としては青山碧山を挙げたい。此人は若松生れだが父に従ふて、若年から新潟東堀七番町に移居し、早くから明清漆器の制を究め、箔絵沈金等の唐物細工を好み、漆に作つた種々結構のものを遺され、又白漆を工夫し碧紫等を案出された。読書の趣味も高尚で手に古本を放たず、新聞は遠ざけて読まなかつた。苦心の作も俗眼に入らず其業少しも振るはなかつたのを憫れんだ楠本県令が、翁に勧めて東京に移らせたが、碧山と号したのは青山御所の唐机を修繕されてからだと聞く。嘗て聖武天皇御遺愛の古琴を模する勅許を受けた時、漆の部分は翁が擔任された。第二回内国勸業博覧会に、四曲小屏を出品し、其精巧と高価とに紳士を驚かしたといふが、それは今宮内省に納まつてゐる。翁は新潟で獲た乾漆の観音像を愛蔵し、非常の高金で乞ふものもあるも決して手離さなかつた。当時翁の座してゐる畳は摩り切れ、紙に糊して覆ひ置くほど窮迫してゐたから友人の高森碎巖、西田春耕、鈴木順丈の諸氏が之を以て衣食に換よと勧めたが、貧は我家の常である。今此像に別れては何を樂しみに生きやうと翁は頻りに惜むので、遂に勧告をやめたといふ。私が十数年間心がけてゐた十六羅漢の印龕を作つて貰はうと東京下谷に翁の宅を訪ふた処、翁は観音像に向つて永々と礼拝してをられたが晩景であるから大いに困つた。見れば像は五寸ばかり

で小さき千体仏が幾十となく周囲に置かれてある。やがて翁は座右にあつた盃を取り御茶代りとしてさゝれたが、帰る時に青貝入りの小さき香合を贈つてくれた。謹んで拝見せうとすると、マアく帰宅の上ゆつくり御覧下さいといはれた。爾来上京毎に訪問したが翁の逸話は頗る多い。その中に新潟からの門生が赴いた時、邸前の小さき空地の一隅に柿の葉其他枯葉の堆かいのを見つけて綺麗に棄てゝしまつた処、家内が見つけてそれは毎日こゝで座禅をされる所であると注意され恐縮してゐると、翁が聞きつけお前はあまり出過ぎたことをする、人の命ぜぬことをするものぢやないと叱られたことがあつたといふ。

(註) 岩船の富豪国井氏が観音像のために、同邸に小堂を建て安置せんことをはかつたが、金に換るのでないからとて翁も喜んで其意に応じ、大正の初年入仏式を執行し三日間附近へ写経を頒与された。

(2) 羅漢印と三大家の合作

青山碧山の事は先般も話したが更に附加すべき佳話がある。碧山は新潟から出世して日本の名匠となつた程だから従つて変人でもあつた、明治廿四年春、私は畢世の望みとして十六個の羅漢印を思ひ立ち、まづ島田亮齋に乞ふた、その形大なるは五寸、小なるは二寸、いづれも羅漢各自の風貌躍如として出来たが、其間春と盆とに催促して十二年を要した。斯くて漸く出来上がった時、故山田寒山氏が来港中なのでその篆刻を引受けてくれたが出来上つた頃小田原の天海禪師が当市瑞光寺で羅漢供養をした際奇縁にも私の羅漢印の開眼式を施行してくれた。それから印龕の木地を新潟で製作したが高さ二尺幅一尺三寸で

あつた。こゝまで来ると私はこれからの事は碧山氏に相談する外なしと考へ上京して懇囑した。扉は天海禪師撰の瓦礫放光の四字と、伊藤博文公の題せる金石結縁の四字を、中村蘭臺が篆書したのを碧山が凸字に彫り、裏は金紫銅の経筒に天然の如意、又一方に蓮と花卉で白漆を用ひ上蓋には蝙蝠と桃、即ち福寿の意を現はし二年ほどかゝつたが、鄭重の荷造りで届けてくれた。この時恰も濱村蔵六を富山天池が同伴して来たので、御馳走に荷ほどきした処、この彫この塗、天下の珍なりと激賞し蔵六先生も、初めて碧山の非凡を知り帰京したら何か注文したいといふのに乗じて、私は同氏にも其裏の経筒に禅語の一句を依嘱した処、早速快諾されたので茲に碧山の作に蘭臺の篆書と、蔵六の篆刻がそろひ三大家の合作となり、今でも之を家宝としてゐる。

(註) この竹香氏に贈つた碧山翁の書簡によつても名人の面影がしのばれ、書も文意も高士の面目が見える、全文を紹介したいが長くなるから省略する、翁は関東大震災の翌年病歿、享年七十八(或は九?)

2、竹香に関わる事績

筆者は昭和五十六年夏、山田寒山・正平父子の調査を計画し新潟を訪れた。その折交友のあつた数人の方から木村竹香に纏わる逸話を伺うことができた。

一人は笹川勇吉である。笹川は新潟市西堀通り四番町で笹川もち店を営んでいる。氏は石州流怡溪派(茶道)の師承小池上翠春の弟子であつた。竹香は笹川の弟弟子にあたる。昭和十五年十一月十日、皇紀二千六百年を祝して、草竹庵鍋茶屋において「奉賛茶道大会」を催した。その時企画にあつたのが笹川と木村竹香であつた。竹

香は仁義に厚く、清廉さと純粹さを貫いた人であつたという。

続いて、新潟市西堀通りで骨董商を営む今井幸平にお会いできた。今井の父尚平は竹香と親交を結んでおり、竹香晩年には尚平の妻が何かと竹香の身の回りの世話にあたつたという。これを感謝して、竹香が亡くなった後、軍平と正平がお礼に訪れている。

竹香は新潟の財閥の印を刻すことが多く、人格者であつたらしい。晩年回向院の副住職をしていたが耳を病み、二階にいては来客の声が聞こえない。そこで一階の門戸に「在・不在」の札をかけ、鐘をつるし、来客がそれを鳴らすと降りてきて応対した。

ある日のこと孝平が羅漢窟を訪ねた所、竹香は満面に笑みを浮かべている。孝平氏が「何をどのように喜んでおられるのか」と問いただした所、竹香答えて言うに「正平が徳富蘇峰の印を刻し、私の所へ蘇峰の書軸と書翰を送り届けてきた」と。ここに述べた印は「日本男児」（白文）と「蘇峰」（朱文）と思われる。両印とも『増補版山田正平作品集』（前掲）に掲載されている。

更にもう一人は、新潟市鹿瀬町にある宝来寺住職今川文暁師である。今川師は寒山に篆刻を学んだ津川正法寺住職乙川大愚の法弟にあたる。魚心子と号し、篆刻・刻字に巧みで、洒脱な書画をよくする。今川師は「〃印人〃 正平、大愚 〃画人〃 霊山の想い出（上）」『いしぶみ』第三号、新潟拓本研究會、昭和五十年五月）で竹香・正平に触れている。

話は昔に遡るが大正八、九年頃、新潟の古町通り四番町の西側、木村竹香印房の硝子戸の店に、父竹香と机を並べて仕事をしていた紺緋の着物をきた正平をよく見かけたが明治生れの人か或いは記憶にあるかもしれない。（中略）この寒山と親交のあったのが、正平の父木村竹香で、其後古町四番町の家をたたん

で宗現寺の別院日和山の回向院に当時本師の命によって独居していた私の二階へ、山文の世話で移り来たり、暫くの間自由な趣味的な生活を楽しんでいた。二階には独居老人、下は独居若人の私、□と老若が或る年の暮、近くの昭楽軒の二階で忘年会をやった事がある。老人中々元気で坐布とんを腹の下に下げてドスコイ、ドスコイと相撲甚句の独演をやつて若い私を驚かせた。角顔の白髪白髯の老人であつた。

正平も二回ほど父を訪ねて泊つたが、喜美子夫人手製の帙仕立の物容れをみやげに頂いたことがある。其後竹香老人は寄る年波の自炊も憶劫になつてか、北海道から長男が迎えにきて行つたが、其後歿くなつたとあとで山文から聞いた。思えばこの竹香と寒山の邂逅によって正平、大愚の巨歩的な印人が新潟に出現したのであつた。

竹香が回向院にいた頃の事柄が簡にして要を得た文章で綴られている。竹香の平生の生活の一端が窺える。今川師が文中ふれた乙川大愚は、彼の印譜『篆刻般若心経』を見るに、相当の刻技を持っていたことがわかる。寒山の刻風を徹底して学び咀嚼し、氣韻の高い作風をたてている。寒山の系譜の一人として加えるべき篆刻家である。今川氏が大愚について述べる。

「乙川大愚」は新潟宗現寺乙川文獅の弟子で私の法兄である。寒山が師匠の好意で宗現寺滞錫中、正平と共に篆刻を学んだものである。正平はその後寒山の養子となつて喜美子夫人と東京寒山寺に住居を構えていたが、大愚は永平寺に修業に行き其後上京駒沢大学の聴講生になり、縁あつて津川の正法寺に住し、寺務の余暇に篆刻や、文人画、篆額などを趣味として刻つてい

た。正平はその道で身を立てたが大愚は趣味として打込んでいた。だが趣味や道楽の域に止らず立派な作家であった。作品としては『篆刻般若心経』『三同契』の印譜があり『観音経印譜』は石には刻らなかったが、朱筆の配篆は未完のまま和冊に綴づられて遺されている。四六時中酒盃を離さず、同室で寝るとかん声雷の如く眠れるものではなかった。鯨飲六十歳、技いよいよ枯淡に入らんとする時、惜しい生涯を閉じたが、交友としては磯野霊山、竹工家飯塚琅玕斎、板画の棟方志功などみな大愚の印を愛用、作品に光輝を放たしめたものである。その縁で私もこの三人を知り、その風格にもふれ得たことはいい思い出になっている。

更に今川師は、正平・大愚の才を重んじ後世へ伝えたいと念願する。

この卓絶せる二人の篆刻の妙手は共に新潟の生れであり、その作品印影等は後世に遺さなければならぬし、斯道後進の好みに資したいものと思う。印譜の作製・篆額の拓本、それに代表的な画も加えて一巻の帙とする。その以前に二人の諸作品を蒐集して一般人に展覧江湖に味得の機会を得さしめたらと、念願してやまないものである。

竹香の逸話から大愚へと話題がすすんだが、寒山を継ぐ篆刻家が正平以外にも存在したことは特記してよいだろう。

3、木村竹香と山田寒山

山田正平は「会津先生と私」『書品』第七九号・東洋書道協会、昭和三十三年四月）において、実父木村竹香と岳父山田寒山について述べている。

この辺で私が山田姓になるについての由来の話に入りたいが、その前に、師でもあり岳父でもある寒山翁と実父竹香との関係を少しく述べねばならぬ。寒山師の新潟への初游は明治三十六年で私は幼少で殆ど記憶とてない。その折実父竹香の依頼で羅漢鈕の大陶印十九顆を篆刻し、それが中井敬所はじめ当時の印壇で寒山一生の傑作と賞讃され、更に竹香老人の発願でこの印を主体とし当時の名流、詩人、書画家、印人八十余家の題跋を附し、金石結縁、瓦礫放光、上下二冊の墨集を成さんの企てをなし、竹香献身十年の努力が結晶して新潟でその羅漢印譜が刊行出来たのである。このため寒山が竹香に与へた手簡三百二十余通。印譜集録の名家は、伊藤、西園寺、槐南、寧斎、敬所、香遠、荃廬、鳴鶴、一六、黙鳳と云った人々を網羅し、寒山翁なればこそ、また竹香老人を得ればこそその感を深くする。（中略）竹香老人は来游の五世蔵六、初代蘭台の至芸をきわめて尊重し幹旋も至らざるなしで、交游もここまでいたればの嘆も覺えず出る位であるが、寒山翁に対してはまた格別でほとんど心を傾むけた感じである。

私の物心ついた頃は蘭台やうやく病篤く、蔵六すでに世を去り、寒山独り活躍の最中で、何かにつけ来信もあり、坐客との話題にも日として出ないこともない位で、私の十五から始めた、たどたどしい篆刻もいつしか寒山和尚の目に入り是非出京しろと矢の催促となった。私の実兄は水産学校だし父は私を手離す

のをはなはだ躊躇したが、ついに十六才の初夏上京し、上野の停車場には翁が迎へに出て居られ、上野の山下忍ぶ川のほとり寒山寺裏の者となった。

『羅漢印譜』に関しては稿を改めて述べるが、竹香、寒山という二人の文化人の交友が『羅漢印譜』に結晶し現在に伝えられたということは幸運といえよう。

4、山田寒山と会津八一

山田寒山は、新潟に明治三十四年九月七日に初遊する⁽⁴⁾。新潟新聞社は寒山の新潟来遊を記念し寒山の印を賞に俳句を募集した。八一はこれに応募し、最優秀でこの印を贈られた。その後、寒山は八一に逢ったが、あまりの少年で驚いたようである。これが交りの機縁となり八一が東京に出てからも交遊は続いた。『会津八一全集』第十巻、中央公論社、昭和五十八年三月）に「明治三十五年（一九〇二）に篆刻家山田寒山を下谷に訪ふ」とある。

八一の書翰中に寒山のことが散見できる⁽⁵⁾。これによると八一は自用印を寒山に依頼するとともに、友人の印も依頼している。『秋艸道印譜』（宮川寅雄編者、二玄社、一九七九年十二月）に寒山刻印七顆を収めている。

八一は寒山の印をどのように評価していたのであろうか。これを知る書翰がある。大正二年九月十四日付で式場益平に宛たものである。「寒山は老勁一気呵成に数顆立地に作り天真の趣あれど、従て変化は乏しく候。勿論寒山の方遙に名人と存じ候へども、蘭八の将来は注目の値ありと存じ候のみ」

石川蘭八（一八六七～一九三一）は、名は太郎、篆刻を初世中村蘭台に学び、蘭台歿後は河井荃廬に益を受けた。

『秋艸道印譜』に石川蘭八の印を六三顆収めており、八一が蘭八の印を極めて好んでいたことがわかる。八一は寒山の印をさわやかな刻風と愛用していた時代があるらしいが、むしろ蘭八の瀟洒な風韻を好んだようである。ここに八一の印に対する好尚が見られる。

『秋艸堂印譜』所収の印から推察すると、会津八一の周囲の印人の多くは、八一の漢印を宗とする篆刻観の影響が見られる。中でも石川蘭八、山田正平・錢瘦鉄にはそれが言えそうである⁽⁶⁾。

宮川寅雄は「この現代における第一級の篆刻家を、道人はふかく愛し、教えて倦むところがなかった。正平の作品は時流をぬき、また書画も独自の境をつくった。そして一九六二年、道人におかれること六年、六四歳で病没した。道人は自らは刻することをしなかったが、篆刻は正平に托し、正平の求める学問を惜しみなく正平に与えた。このようにして、道人と篆刻について考えるとき、正平とその作品にふれずに核心に入することは許されないという関係であった。」（『秋艸道人の用印について』『秋艸堂印譜』と述べるが当を得ていると思われる。

5、木村竹香と会津八一

木村家と会津家は、古町通五番町、古町通四番町と地理的に近く両家は極めて親密であった。山田正平は「会津先生と私」において次のように述べている。

来客も多彩だったが、殊にこの私の家と会津御一家とは極めて親密で、先生の御両親の慈顔も昨の如く目に浮かんで来るのである。

実父は若い八朔郎（会津先生の俳号）さんを非常に珍重し、会津さんはまた竹香老人と云って知己としていた。会津先生が

いっぞや御機嫌よろしき時、俺の書は竹香老人が見付け親だと笑話しをされたが、そのときのお話に、先生の叔父さんに新潟市助役をやり歌も書きよくした方があつて、八一は字がマジイと小言を云つて居られた際、住所印かの書を依頼したので竹香君が八一に書を頼む位ならもはや小言は止めると言つたことがあつたそうである。

この事に関し八一自身述べている。

さう致しますうちに、或る時下宿へ帰つて見ると叔父から手紙が届いてゐる。また書道のお小言かと思つて封を開いてみますと、

これまで私は兎角お前の字を非難して来たけれども今日からはやめた。どうか今までの処は悪しからずお許しを願ひたいことが一つ起つて来た。といふのはお前も知つてゐる木村竹香といふもの―数年前に亡くなりましたが新潟の古町通五番町に木村竹香といふ判木屋があつたのであります―がこの間来て、私は判を彫るのを業としていろいろな人にお近づきを得てゐますが、氣にいつた書き手を見つけて、自分の名刺を書いてもらつて、それでツゲの判を彫つて一生涯名刺として刷つて使ひたいと思つてをつたけれども、自分の胸にピッタリする字に未だ會つて出合つたことがない。ところが自宅の八一さんといふ人の字は、私が年来希ふところの字にピッタリしてゐる。それで、どうか一つお宅様から序いでの際に、「木村竹香」といふ四字をお書き願ひたいといふことを願つて頂けないでせうか、といふことをいつて来た。さういつては何だが、私はともかく

市内では名筆であるといはれてゐるのに、私のことは何もいはずにお前のことを願つて来るので、私も、これは悪いことをした、八一に向つて今までまことに不適當な意見を加へてをつたといふことがわかつた。誠に相済まなかつた。といふ意味の手紙を叔父からもらつたのであります。私がその手紙を見て、いろいろな感情が起つたであらうことは申すまでもありません。生れてからはじめて私は自分の字を賞められたのであります。

木村竹香が私の字のどういふ所を感服したのか、後日よく問ひ質してもみませんでしたけれども、君は日本においても、僕の字を初めて賞めてくれた人だといつて、私はよく茶のみ話にしてをりましたが、だからお前の子の正平は一生涯私が指導してやる。正平を必ず有名な男にしてやる。といふことを私は口に出して申したこともあるし、實際今でもさう思つてゐるのであります。

山田正平と申しまして山田寒山の養子になつて、今日まづ日本の篆刻界では新しい、といつても彼も相当の年輩になりましてけれども、今日も私は何かと相談を受けて彼のために致してをり、時折正平にもそのことを申すのであります。お前の親が、何人もけなしてゐる私の字をはじめて賞めたのである。お前も一つもつと偉くなれといふことを、赤ん坊に対する如くに私は常に申してをるのであります。

〔書道について〕『会津八一書論集』長島健編、

二玄社、一九六七年一月）

八一は竹香に印を依頼している。この印は『秋艸堂印譜』に収録されている。「北人」（白文方印）である。八一は伊達俊光に宛た明

治三十年十二月六日の書翰の中で「予が新刻の図書之章御高評被下度候。刻者木村竹香新渴之人、山田寒山と友としよし」(『会津八一全集』第八卷、昭和五十七年十一月)と、この印について触れる。八一の書簡で最も早く竹香のことが表れたものである。

ここで会津八一と竹香との関係について若干触れておきたい。会津家と山田家は非常に近く、両家は懇意にしていた。八一は終生篆刻に注目しており一冊の書物にしたいと考えていた。八一が篆刻に興味を抱いたのは、この竹香に追うところが大きいと思われる。

次に八一が竹香に贈った俳句が「高田新聞」に掲載されている。明治四十二年五月二日である。

篆友木村竹香この頃其居をうつして新居の句を需むるに応じて、

机据て新居の春も暮れにけり

春光や瑠璃を刻む刀のさき

鉄筆を握れば遠し鳴く乙鳥

店さきや印ほる耳に飛ぶ燕

(和泉久子著『新資料付注会津八一書簡集』笠間書院、

一九六八年二月)

山田家に八一の俳句が二句書き残されている。

羅漢寺やさくらの上の月一つ 八朔郎

木村竹香子に羅漢の句を問はれて

花ちりてひくれ白いなるら可ん哉 朔

八一がなぜ正平をそこまで庇護したのか、次の一文「書道について」(『会津八一書論集』)から明瞭である。いくらか八一の脚色も感じられるが、略ぼこのような経緯であったのであろう。

三 竹香からの教え

それでは具体的に正平は竹香から何をどのように学んだのだろうか。

山田正平は『耕香館画牘』の摹写を残している。この款記に「大正十一年元正平」とあることから、一九一二年正平十四歳のものであることが知れる。これは正平の書画として最も初期のものであり、繊細で感情の細やかさの表れたものである。大正三年(一九一四)正平十六歳の時、会津八一の依頼を受けた竹印「秋草堂」と石印「獅子宮人」を刻した。更に同年、竹製の筆筒に蘇軾の「前赤壁賦」を小楷で刻している。また「中井敬所先生銅像記」の隷書がある。大正五年(一九一六)正平十八歳の時刊行した『正氣印譜』の序に見られる版木の刀技も水準の高いものであり、竹香譲りといえるものである。このように正平若年の作品に竹香の繊細に細工する刀技の影響が多分に見える。

正平は大正三年(一九一四)十六歳の時『梅檀二葉香印譜』を成譜している。これは手控え印譜ともいうべきものである。『正氣印譜』を溯ること二年、正平が篆刻を始めた頃の印を収めたものであり、正平研究において貴重な資料と言える。『日本の遊印』(木耳社、昭和五八年十月)で紹介した。封面は山田寒山が題しており、刊記に「大正三年冬至三日題正平君印々」とある。印影総数六四顆収めており、正平の自用印の他、中井敬所の摹刻、顧湘の刊行した『小石山房印譜』所収の印の摹刻などが含まれている。

竹香の印譜に『一画千金』、『鉄筆三要』(山田家蔵)がある。これに収められた印をみるに、竹香が中井敬所や一世岡本椿所に篆刻を学んだため、この二家の影響が見える。更に正平においてもこれは

言える。『正氣印譜』になると一つの様式化された型が見られ、この新潟時代は正平模索の時代といえ、章法は多岐にわたる。

正平は竹香をどのようにとらえていたのであらうか。「会津先生と私」(『書品』第七九号)の中において述べている。

私は新潟市の篆刻の家、木村竹香の二男として生れた。実父竹香は羅漢印譜の刊行者でもあり、その風流とそして徹した真念とで七十七の一生を終始し、新潟市は勿論県下では知られて居るので、偶々私は帰郷すると致る処で実父竹香の想出話しが出て覚えす坐を正すことさへあるのである。壮年にして岡本椿処を師とし、終生その師弟の情誼も立派であつたが、楣間には竹香居主人の為め書きのある敬所の篆書、一六、黙鳳、初代蘭台の木彫の額なども賑やかで、青山碧山が丹青こめて漆り上げた羅漢印龕を床側にして香花をたやさず、床の間の幅は時に応じて懸け更へるのを楽しんでいた。来客も多彩だったが、殊にこの私の家と会津御一家とは極めて親密で、先生の御両親の慈顔も昨の如く目に浮かんで来るのである。

安藤搦石は正平と竹香の関係を「歴訪・山田正平」(『書品』第九号、一九五九年四月)の中で述べている。

正平と竹香の関係の核心をついた文章である。ここに引用する。

「会津先生と私」の中に山田先生は実父木村竹香について詳しく述べている。これによって寒山和尚の一代の傑作となった羅漢印十九顆は竹香の依頼で作ったものであり、竹香はこれをもととして、所謂羅漢印譜を刊行する顛末が知られる。このため寒山が竹香に与えた手簡三百二十通に及んだと言うのである

が、三百二十余通とは寧ろ竹香の苦心のあとと見るべきである。印譜中の浜村蔵六の序文(河井荃廬の筆跡)「寒山尊者、北越舟江に竹香と云う拾得を得て云々」と言う文章も体裁上の面白さをひねった訳ではない。事実竹香老人が羅漢印完成に至るまでの縁起を綴った、肉筆の一卷を見せてもらったが、蟻の頭程の細字で認められた数万の文字は、完成までの二十年の辛苦を彷彿させている。よくもまあ他人の作品の完成にこれ程の情熱が続くものだ、呆れないではいられないと云うのが今日の実際だが、寒山に対する敬慕の念の深さはさておき、翰墨風流に対する竹香自身の妄執のようなもの、これは又とんでもなく大変なものだと言わなければならない。

山田正平の芸の執念の中に竹香の妄執が籠っている、と言つたら怪談めくが、親と子との関係とは元来そう言うものなのだ。正平先生はそれを知っている。寒山について語る時は非常に雄弁な先生が、竹香については殆んど羞らいを含むかのように、多くを語ろうとしない。先生自身のこととなると、韜晦して一語も語らない。これは単なる謙遜か。確かに謙遜でもあらう。然し人はその語ろうとしない処に彼自身が有るものだ。

確かに正平は竹香について多くを語ろうとしなかったのかもしれないが、竹香没後、正平は新潟を訪れ竹香有縁の方々を尋ね、丁寧にお礼をしている。正平の竹香への深い思いが、附章第五節で示した画日記からも読み取れる。

四 おわりに

本節では、山田正平の実父木村竹香に関して実証的・総合的に言及した。

また、正平と竹香の関係、正平の新潟時代の一端を述べた。正平が篆刻に志したのは竹香の元にいた十五歳の頃である。正平若年の作品は竹香の影響を受けているが、これは当然ともいえる。

竹香は一級の文化人であり篆刻家であった。それは竹香の周辺を見渡せば分かる。竹香が交流した人物の多彩な顔ぶれ、そして何よりも山田寒山との合作とも言える『羅漢印譜』の刊行は特筆できる。

これは竹香の寒山に対する思い入れもさることながら、自身の篆刻への執念が窺われる。正平はそういう竹香を尊敬していた。それは竹香没後「竹香居追福」の梅木印を刻し、友縁の人達に贈った一事からもみてとれる。竹香の関係資料はそれほど多くはないが、そこから読み取れることがある。確に竹香は印版業を営んではいたが、これは業であり、むしろ彼は一級の篆刻家であったといえる。彼の為し遂げた業績そして文化人として生きた足跡を辿れば、新潟の地という豊かな文化土壌を受け、実に悠々と生活した彼の姿が見える。正平の芸術は竹香や新潟という風土の中で大きく花開いていった。

幼年期の環境がその人の生涯を決定づけることは多分にあるが、正平に関してもそれが言えそうである。篆刻家竹香の次男として生まれあわせたこと、会津八一、寒山との出会い、すべて正平新潟時代の出来事であり、正平芸術の根本は新潟時代にその端緒をみることができそうである。

【注】

(1) 筆者がこれまで発表した木村竹香に関する拙稿は以下の通りである。

①「山田正平研究―正平と木村竹香―」(『日本書道新聞』第三号、第四号、日本書道新聞社、一九八六年一月二十五日、二月十日)

②「山田正平研究(二)―山田家藏画日記翻刻―」(『修美』第一四巻 通巻五〇号、修美社、一九九五年四月)

(2) 岡村浩「越後路の篆刻家・山田寒山(Ⅰ)」(『阿賀野市誕生記念五頭山麓ゆかりの文人山田寒山集』山田寒山展実行委員会、二〇〇四年九月)

(3)「日本印人研究―山田正平の生涯と芸術(Ⅰ)―」(『熊本大学教育学部紀要』第五二号、熊本大学教育学部、二〇〇三年十一月)で紹介した。

(4) 柿木原くみ「越後路の寒山・正平と会津八一」(『相模国文』第三二号、相模女子大学国文研究会、二〇〇五年三月)

(5)「会津八一の印学」(『書学書道史研究』第三号、書学書道史学会、一九九三年六月)

(6)「会津八一の印学」(『修美』第十二巻 通巻第四三号、修美社、一九九三年七月)

第七節 山田正平周辺の人々とその交友

1 周辺の人々とその交友 (I)

一 はじめに

筆者は山田正平をよりよく理解するため、正平と交流した同時代人にインタビューを試みてきた。また書簡にて質問をした。今は鬼籍に入られた方も多い。大学院に在籍していた頃教官から「文は足で書け」と教えられた。取材は訪問地に赴き、撮影機や録音機、さらに必要資料一式を携えての過酷なものであった。費用も写真代や、旅費等嵩んだ。しかし、運命とも思える一人の偉大な芸術家との出会いに感謝しつつ、その真実の姿を後世に伝え遺したいとの思いが私を揺り動かしていた。今となつては貴重な証言や資料となるものも多い。ただ調査の初期の頃は様々な環境や条件により、調査・取材は完全とはいかないこともあった。再度調査する事は難しく、当時のままとせねばならない内容もある。

本節は、篆刻家もしくは篆刻に造詣の深い方に関してのインタビュー内容を紹介するとともに、正平への評価について考察する。これらは正平の業績や人物像、芸術観を知るに足るものである。インタビューは内容により弁別、整理する事も考えたが、より生の声を残した方が良いと考え略そのままとした。そのため幾らか正平に関する以外のものも含まれる。本研究において、音声不明の箇所は□とした。また内容上記載を伏せた箇所がある。

二 周辺の人々の追憶

1、西川 寧 (芸術院会員 文化勲章受賞)

年月日 昭和五十五年一月

場所 新宿アートセンターギャラリー

一、正平さんは実に謹直な人であった。

一、私と懇意だったが、少し離れていた。正平さんに遠慮があったと思う。

一、作家としては好かれた人だったし、極端な崇拜者がいた。これは保多孝三さんも同じであろう。

一、中井敬所は篆刻家としてはまずしい。印の研究は深いが、印版屋の親爺といつていいでしょう。

一、山田寒山はおもしろい。私は西川春洞の所へ来たことを記憶している。

一、正平さんは河井荃廬の所へ行つたが、直接習ったわけではない。

一、河井荃廬は権威を嫌った、真の文人であった。神聖化するがそうではない、文人だ。

一、初世中村蘭台と河井荃廬、そして二世中村蘭台と山田正平は見事な違いがある。以前この両者を比較して、どっちがより以上

に芸術家なのかと考え回らせたことがある。そして初世中村蘭台と山田正平が右の座に据えられる、と述べたことがあるが、これは冗談です。

一、二世中村蘭台に、あなたの作品は装飾に過ぎるのではないかと言ったことがある。が、蘭台も正平も文人である。

一、画と書における両者の違いが、蘭台と正平の違いである。

一、日本人はすぐ俳諧趣味という、この定義にゆくがどうだろう。

2、伏見冲敬（大東文化大学教授）

年月日 昭和五十七年九月

場所 伏見冲敬宅

一、私は正平先生から具体的な事を習ったわけではない。断片的ではあるが、本質の話を伺った。

一、自宅の書籍はむしろ少ない。

一、骨董趣味はない。

一、磊落的に見えて小心な人だった。

一、人に非常に神経を使う人だった。神経を使いすぎると、瘍とかセツという病気になる。正平先生もそうであった。早く亡くなられて残念だ。

一、訪中する時団長として行くので、ああいう古風な人なので、どのように挨拶すればよいかに関して質問を受けた。

一、二世中村蘭台は偉い人で、人間としても優れた人であった。蘭台は工芸家、山田正平は芸術家と言えるが、肌合いの違いがある。篆刻や篆書には必然性があり、蘭台の篆刻にはその必然性があった。意味なく曲げているのではない。

一、篆刻は文人の仕事であり、正平は篆刻を芸術の世界まで引き上

げた人でその功績を認める。

一、高芙蓉から河井荃廬までは、印章と言ってよい。職人の仕事である。正平に至って始めて篆刻家と称していい。つまり書とか画とか渾然としたなかで篆刻をしている。

一、鉛筆のスケッチを多く残しているが、鉄筆や筆と一緒に、筆の深みを究めた人である。

一、この頃解かったことだが、正平先生晩年の印には、「かるみ」があり、つまり俳諧の伝統です。そういう点で呉昌碩などと違う。それを強調したのが保多孝三さんです。

一、山田先生は、家族が先生を尊敬していて大事にしてくれて幸せです。だから作品や資料もすべて保存してあります。高校で美術の先生をしていた関健一さんがよく整理された。

一、正平はしっかりとした篆書を書くが、追隨者は崩れた所だけまねをする。

一、正平は油絵のセットを誰からか贈られて習っていたが、ある画家から絵はすぐに描けないと言われ、画学生にあげてしまい、その後水墨画を描くようになった。

一、正平さんの印には山田寒山の風が晩年まで残っています。正平さんは、「家の老人が、寒山が、篆刻というものは障子の棧のようなもので、ピタツと真っ直ぐに入っていなければならない」と語っていたと話した。明治あたりの篆刻家の篆書は障子の棧に入っている。

一、正平は、河井荃廬を伺っていたが、添削はされていない。弟子というわけでない。

一、正平は書も絵もひっくるめて、誰も至り得ない境地までいった。

一、本格的な正規な印としてやった。

一、私は朱の鐘鬼を描いてもらったが、反古の山が出来たらしい。

一、学芸大に教えに行っていたが、学生が分かっているのか、分かっているのか分からない、反応がない、と言っていた。

一、分からないことも、模索して学校へ行って話した。時代が正平のような人を作ったと言える。

一、貴方のような人が正平先生の延長線上の仕事をされるとよい。

一、何といっても作品を見れば一番作者の考えがわかる。

一、ドイツ語の文法で意味形態と言うが、どういうふうに、何故こういう言葉を使うかという、それには使うという理由があるということ、篆書も筆画を曲げるという理由があるということだ。正平も蘭台も無意味なことをしていない。技巧的といっても蘭台さんの技巧は篆書を生かす技巧をしている。引っ張ったり撥ねたりしても、無意味でない。

一、石井雙石と議論したが、雙石は「この印には筆意がない」と言うが、筆意とは雙石のいう起筆や終筆で筆先を出すといったことではなく、もっと本質のことである。

一、篆刻は刻す技術自体は簡単といつてよい。僕の印にしても何の変哲もない印で、僕自身の考えで装飾はしない。印篆なら印篆、小篆なら小篆で普通に収める。山田先生は確かに僕よりうまいですけど、風趣は同じです。つまり山田先生は余計な事はしていない。

一、僕は弟子にもなるべく正しい篆書を書いて余計な曲げ方をしないで、さっと正直に書きなさいと話している。僕の考え方に山田先生の影響がある。僕のはつまらない印で何ということはない。人に自慢して見せられるようなものではない。ただ今の日展篆刻のような、ああいうガタガタした印は作らない。

一、正平先生は印を刻る時も随分字を書いていた。

一、久保田大卿はいい話をしてくれるでしょう。

一、山田先生は日夏耿之介先生と懇意にしており、僕も日夏先生の家につれていくてくれた。其の後、僕も日夏先生の所へよく行くようになり、親しくしてくださるいろいろと教えてくれました。

一、水墨画は小川芋銭に私淑していろいろと学んだでしょう。正平先生は、「サット描いているような芋銭先生の画は、薄い墨で描いて、乾かしてまた何度も描く」と言っていました。僕も近所に太平洋洋画会の人がいて、少し通ったことがあります。

一、□□□□なども弟子入りしたが、くずれただけで、何もならなかった。皆、くずれた所だけ真似する。先生の篆書を見ればわかりますけど、非常にしつかりした篆書を書いている。そこを習わなければいけない。あの歪んだような所は、デフォルメだと思えますけどね。皆それだけ真似る。

一、画の小品に良いのがありました。不動明王の画など力作です。画を描いて題を書いても、内山雨海などと違って書がりっぱだからいいです。僕も画を二点くらい持っています。画もずいぶん良かった。自信もあつたのでしよう。

一、日本篆刻史上、河井荃廬を最高とする考え方があります。西川先生なんかは河井先生の、苦勞して印譜を作っておられましたかね。あそこまでいった人はほとんどありません。山田先生はある意味では河井荃廬をつきぬけた所があると思う。先代の中村蘭台、それほど。むしろ二世蘭台の方が技術的には。二世蘭台も、父が早く死んで、彼は独協中学へ行つて、亡くなつて残念だが。ドイツ語が少しできました。僕もドイツ語の勉強しました。会うとよく篆刻の話をしてないでドイツ語の話をして、あの人は初代蘭台の技術を教わることをしてなくて、独力で門前の小僧で、ただ見てただけで、自分であそこまで境地を切り

開いた。

山田正平先生はお父さんの木村竹香からすでに教わって、東京に来てから河井荃廬の影響を受けて、ただ本当に門人として教わったのではない。

一、正平先生は河井先生の所へ行っても、手ぶらで行った。関西の人は、東京の人より旧式です。田口二州がいますね。田口二州は河井先生の所へ行くのに、彼は立派な果物籠持って、正平先生は手ぶらで行くので、恥ずかしかったと言っていました。

一、河井先生に教わる場所もあつたでしょうけれど、何か教わったというより、また呉昌碩の所へ行ってもどういうこと教わったかということではないでしょう。僕にしても河井先生にも西川先生にも山田先生にも随分会いました。具体的にどういう話があつたか、教わったというより、ただ僕は印を刻して持つていくと、ああだこうだと言ってくれて、僕が日展に出品する時に、こう印箋はりつけて、山田先生に、今回はこれを出品しますと言うと、ああいいでしょうと、添削してもらった事は一度もない。

一、山田先生自身も河井先生に添削してもらった事はないでしょう。木村竹香の子供ですから、印刻士にして道を継がせるつもりだったでしょうから、竹香は教えたことがあるでしょう。

一、正平先生は今まで誰も至りえない境地まで行ったことは確かだと思えますね。印と書と画も一緒にひっくり返るために確かに人の真似のできない、それは一般の人とは全然レベルが違いますね。

保多孝三さんとか□□□□さんなんかと見方が違います。もつと本格的な真面目な意味で、正規の印としてやったということがいえると思います。篆刻界というのは僕自身はよくは知らないが、松丸東魚さんなんかとは、だいぶ親しくしました、若い

頃は。

一、山田先生チャボを飼ってました。ペキンパンドンです。可愛いですね、と言うと、じゃああげましょう、と頂いてきて飼っていた。

一、正平先生は、大学で学生は分かっているのか、分かっているのか分からないと悩んでいました。『篆学叢書』の一冊の中に「ソウケイ」という一節がある。これはどういう意味なんだろうって言うんです。深みのある力強さをいつているんでしょうけれど。莊子なんかの「天の：」澄みきった空を「蒼」という。日本語の「青」というと黒馬のことを青という。陶器の場合は「翠」という言葉があります。「翠」とか「緑」というのはね、非常に難しい。

3、保多孝三（篆刻家）

年月日 昭和五十年以降

場所 保多孝三宅他

一、山田正平先生に「自分は鄧完白から習ったが、甲骨、金文から入っていたら印が早く良くなったと思う」と申し上げると、「今、その事を気づいただけでも宜しいではないですか」とお答えになられた。

一、山田先生は実に神経の細かい人であつた。そして誰とも朋友という付き合いをしなかった。

一、山田先生の印面を拝見すると、周りを凹まし真ん中を高くしておられた。なぜなら押印の時、周囲に印泥が付きすぎるからである。

一、山田先生の手はごつい手であつた。土を掘っている手だ。

一、「印を刻す時は、左手を生かさなければいけない。両方の手で切り込むのだ。印床は使わない方が左手が生きるよ、どうかな」と、正平先生から教わった。

一、山田先生の個展を見に行った時声を掛けられ感激した。

一、私は、現代篆刻家の中で山田正平先生にのみ頭を下げる。

山田正平先生に益を受けたということです。

4、古川 悟（篆刻家）

年月日 昭和五十年以降

場所 筑波大学、新宿カルチャーセンター他

一、見えざる章法、計算をたてた人。

一、技の正平といえる。

一、五十顆くらいの『模刻印譜』がある。私は漢銅印譜と間違えたくらいのものであった。

一、蘭台二世と正平どちらが好きかといえば、正平のほうが好きと
いってよいくらいだ。それは実に日本的であるという点による。

一、浙派の影響が強い。風土、食事、気候が似ているからだろう。

一、八分くらいの印は実に素晴らしい、大印は刻れなかったか？

5、山田桃源（篆刻家）

年月日 昭和五十三年七月二十七日

場所 山田桃源宅

一、山田正平の印は風趣のある刻であり私と似ている。

一、一刀彫りである。

一、正平さんは水墨画を本格的にやった人である。だからあれだけ

の印が刻せた。やはり詩書画をやらなくてはだめだ。

一、山田正平の篆刻は日本化した篆刻である。呉昌碩を学んだが、それを離脱した時正平調は歴然と表れてきた。

一、正平先生の画を数点持っている。

6、鈴木知秋（篆刻家）

年月日 昭和五十三年十一月五日

場所 保多孝三宅

一、山田先生に二度お会いした。一度は保多先生と一緒に山田先生の家に伺った。もう一度は、「無人華落」の作品を受け取りに伺ったときである。

一、山田先生の蔵書はむしろ少ない。良いものをお持ちだが。だから蔵書が有るからといってその人の価値が決まるものでない。

一、正平先生の布字のまま遺された印に「無人華落」がある。このことは、何を意味しているのか。

7、長曾我部木人（篆刻家）

年月日 昭和五十六年六月三十日頃

場所 長曾我部木人宅

一、画は優れている。

一、人間性はぶきつちよであるが、好人物である。

一、学芸大学で学生にいろいろ質問され困る、と言っていた。

8、小林斗盒（芸術院会員 文化功労賞受賞 文化勲章受賞）

年月日 昭和五十四年頃

場所 小林斗盦先生マンション他

一、正平先生は銭松の印に興味を持っていた。

一、古璽印の話の折、漢印と南北朝期の印を取り違えられていた。

9、今井凌雪（筑波大学名誉教授）

年月日 昭和五十年以降

場所 東京教場他

一、正平先生の印は真似られない。

一、正平先生の印は一見稚拙な感じを受けるが、触れば指が切れるかと思うぐらい切れ味鋭い。僕は先生の印を持っているが、揺るぎない確かな造形がある。

一、日本の上代の金石文を見るような独特の味がある。

三 評価

本節で取り上げた諸家の山田正平への評価を、これまで刊行された文献から抽出してみたい。

西川寧は「一止道人の印譜・序」『山田正平作品集』木耳社、一九七六年十月）において、次のように評価する。

文人という言葉は古いが、今日でも昔と違う意味で使うにふさわしい場合がしばしばある。いい言葉だと思う。そのある段階と解釈して一止道人の印は、その書と画とともに実に文人らしい作である。或はこんな文人は又となかったといってもいいのではないか。

道人は初めから印学のおきてに随うことを好まなかったのかと思う。私は道人の初期の印をよく知らないが、時の篆刻者流を抜け出ていたればこそ、蘭台とカタラつて泰東書道院に入ることをすすめたのである。しばしば見るようになってから、たしかに印は徹して坐っていた。こころの揺曳にまかせて定型を排除しながら、自ら特別の土俵を作りあげていた。それは気ままのようであるが、自ら特別の土俵を作りあげていた。そこを広げて、道人の印を俳精神と見る人があるのではないかと思うが、近世日本の永い印の歴史で既にあっていい筈で、まだ無かったものをきり開いた人である。

同時に昭和期の印人に中村蘭台がある。この人の印はデザイン性の強いもので、その風姿はハイカラである。この二人の対照はまことにもしろい双壁であった。もう一つ遡って明治の末から大正にかけて、また印人の双壁があった。初世蘭台と河井荃廬である。初世蘭台は徹頭徹尾のちを印にかけた人であるが、荃廬は神気をさぐって止まなかった。蘭台を生活の人といえ、荃廬は唯美主義といわざるを得ぬ。そう考えるとおもしろいことに、二世蘭台は探美の人、一止道人はむしろ生活の人であるのか。この対照観は、私自身の立場に引きかえて妙に私の胸にゆらめき続けている。私は嘗て子供のうちに、この二人のどつちがより以上に芸術家なのかと考えめぐらしたことがある。この空想は、前代において初世蘭台が、今において一止道人が「右」の座に据えられるという所におちてゆくのである。これは全くたわいの無さすぎる一時の空想に過ぎない。

また「日展の書と印」『書品』二号、昭和二十五年一月）に以下の記述が見える。

二三年度の日展で戯れに人にいった、「第五科第一の作はどれだとおもふ。一つもないつて。さうだらう。だが僕は一つ発見した。山田正平の印だよ」と。「功在不舎」の朱文であった。或は山田さんの平常に比べてかたいと評した人があったさうだ。何といつてもあの独自の風格で高く鳴つてゐるところは立派であった。

今度の五科はどんなことにならうとは誰も最も気掛りのところであつたらう。蓋をあけて見て去年よりよい作をいくつか発見出来たのはうれしいことだ。だが段々考へるとどうやら又もしてやられたやうな気がする。山田正平の印はやはり立派であつた。

山田さんは本来一種の洒脱の風韻をもつ人である。その洒脱はひどく日本的な俳味といったものを連想せしめる。しかもその率意が往々「私はどうでもいいんで」といった風なションボリとした小さな主観にすねこんだやうなものになった。そこが正平独特のところであり、数寄者にほれられるところであらうが、前後にまれなこの人の為に、現代の日本篆刻の為に僕のさびしくおもふところでもあつた。それがどうだ。格腹がついて来た。従来往々率意になづんで空間がしぼんでしまったやうなものを刻つた。その空間が大きく強くものを言ひ出して来た。印が客観性を得て来たのだ。「飛鳥出林」妙な所がとがった随分勝手な線を出してゐるがそれが悉く効果的である。古人の句に「目送飛鴻」といふのがある。古来芸術の至境を道破した言葉として愛されてゐる。僕はふとこの句を思ひ出す。山田さんの印はこれから見ものだ。先日偶然川島理一郎氏と共に印のケースをのぞいた。川島画伯も山田さんの印に感嘆しておられた。

更に「日展印譜」『書品』六六号、昭和三十一年一月）において「鑑華照魚目」の印評として言う。

「鑑華照魚目」山田正平―三四年も前にならうか謙慎展の会場で、金山君の助力で印を陳列してゐたとき、山田正平の印にはクモの巣がかかつてゐるねといったら、アツさうですか、ぢやすぐ払ひませうと飛んでいかうとしたことがある。さてそのクモの巣は段々かがやいてくるやうだ。露の白玉がやどつたのか、真珠をちりばめたのか。もつとも性根は私のいつも口にする書といふ塩煎餅なのだから、お互に、美しい女人のアクセサリにもなり得やうものではない。

別に寧は「くもの巣がかかっている」『山田正平遺作展』昭和三十九年八月）において、次のように指摘する。

ある展覧会の陳列の日、山田さんの刻印のならんでいるケースをのぞき、次のケースに移つて、そこで働いているK君に、「やつぱり山田さんの印はいいね。今度のにも、やつぱり、くもの巣がかかっているね」といったら、「アッ、そうですか、すぐ払いましょう」といったので大笑いしたことを思いだす。

ごく昔のことはしらないが、多分昭和十年頃、すでに立派な一格をなしていたその印は、父翁寒山先生にも似ず、過去の日本中国の誰にも似ぬ、一種間淡の風格を示していた。結局日本的な俳諧のころであつたのだらう。それがぐんぐん變つて、次第に複雑な旋律をたたえ、無駄がなくなり、ちぢみが増して、くもの巣がかかつて来たのである。

昔、新潟紀行の面に長文の賛をしたものを持って来て、その

漢文を見てくれという。よむとその文が甚だおもしろい。少しもつれたような所にかえって胸懷十分にあらわれている。これはおもしろい、このままでなければだめですよといったことを思い出す。こんどもその絵が出るか。絵も文も、印とおなじ風格である。山田さんの書も同じである。書といえ、会津秋草道人の東京の告別式場に掲げられた大字楷書の長聯などは一世の傑作だった。あれも再び見たいものだとおもう。山田さんの話術もこれ、一語一語が糸切り歯のあたりで一度さまよってから出てくる。山田さんのペン字なども、引くはずのペンを逆につっかけるように操って突兀たる風韻を示す。隠者芸術の系譜におけるたった一人の存在であつたとおもう。

伏見冲敬は、「山田正平先生の想い出」『東洋の美』昭和三十七年十月）に触れている。

僕はいきなり先生に接近しすぎ、近視眼的な目ばかり先生を見ていたから、先生の屹立した孤高の姿は却って分らないのではないかと思う。先生は狷介な人のようにいわれるが、僕は慈父のような温かい面しか知らない。

保多孝三は、昭和三十七年八月二十二日に執り行われた山田正平の葬儀に際し、弔辞で次のように述べている。(1) (図1)

印を弄ぶ者として早くから先生の作風に傾倒しながら、初めて先生からお声をかけられたのは、松坂屋での絵の個展を拝見に行った時のことでした。

それからもうじうじと引籠もりがちな私には、冬心会の続い

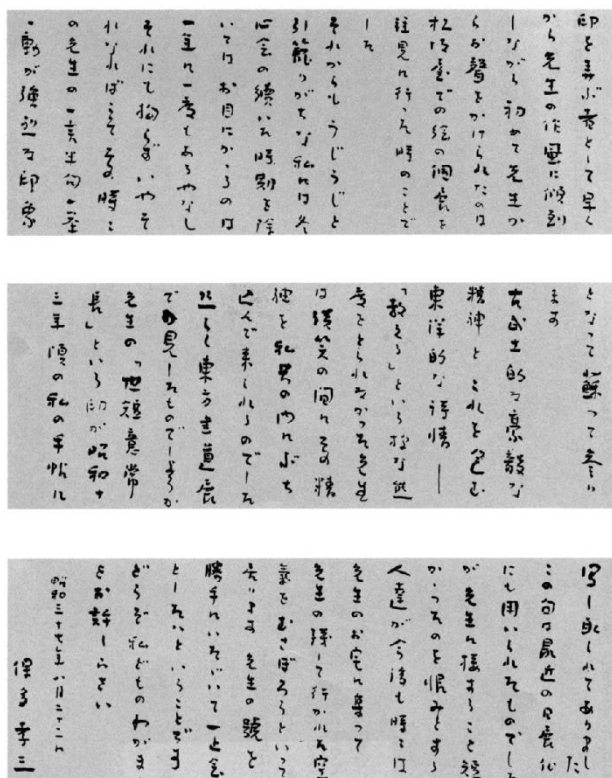


図1 保多孝三弔辞

た時期を除いては、お目にかゝるのは一年に一度もあるやなし。それにも拘らず、いやそれなればこそ、その時々先生の一言半句、一挙一動が強烈な印象となつて蘇つて参ります。

古武士的な豪毅な精神と、これを包む東洋的な情情―「教える」という様な態度をとられなかった先生は談笑の間に、その精神を私共の内にぶち込んで来られるのでした。

恐らく東方書道展で拝見したものでしょうか。先生の「世短意常長」という印が、昭和十三年頃の私の手帳に写し取られてありました。この句は、最近の日展作にも用いられたものでしたが、先生に接すること短かゝったのを恨みとする人達が、今後も時々、先生のお宅に集つて先生の残していかれた空気をむさぼろうと居ります。先生の号を勝手にいたゞいて一止会としたいということです。

どうぞ私どものわがまゝをお許し下さい。

昭和三十七年八月二十二日

保多孝三

また昭和三十九年に中央公論画廊にて開催された第一回「山田正平遺作展」の図録の趣旨を孝三は起草した。ここに引く。

趣旨

一 止道人山田正平先生。

その書は篆隸の蒼古に出でて真草また後世の嫵媚を厭ひ、その画は朱奄の風骨に傾倒して兼ねて木米・鉄斎の高逸を摂り、さらにその印に至つては呉趙を透過して直ちに丁敬身の古格に参ずるものがありました。

先生少きより跌宕不羈、中年城西の地に棲遲して蹤迹を韜晦

し、藝境いよいよ高きを加へましたが、昭和三十七年書道使節に長として中国に渡り、途中病を得て遂に起たず、藝苑頓に寂寞を想はしめるものがありました。

先生歿して二載、ここに遺墨・遺作を蒐めて江湖の清鑑に供し、いささか在天の藝魂を慰めんとするものであります。

昭和三十九年七月

次に孝三は、「篆刻周辺」(『書品』三十一号、昭和二十七年)において論じる。

書とちがつて、篆刻の方は、あとからいくらでも手が入れる。錢瘦鉄さんなどは、人と話をしながら印面を至極のん気に削つて行くさうだし、河井先生に至つては弟子の印を削りに削つて、まるで別の面貌にまで仕上げられるといふ。

だから河井先生の所へ持つて行く時は、朱文はなるたけ太く、白文は出来るだけ細く刻つて行くのだと聞いた。

この印は誰の手がはひつてゐるといふ様なことがよく言はれる。印檀の事情に通じた人には、これがよくわかるらしい。

直してもらふ先生もなし、直してやる弟子もゐない僕など、はゝあそんなものかなあとよそ事のように聞いてゐたが、これによそ事でなくなつた。

君の印は山田先生に見てもらつてゐるのだと誰かゞ言つてゐたよと話してくれた人があるのである。去年の暮頃の事だつたらう。

僕は無然とした。そんな事を山田先生が聞かれたら、さぞ迷惑に思はれるだらうと気に病んだ。

だが、一方では、つくづく人の眼といふものの恐ろしさを感じ

じた。先生の印を、乏しい機会ではあつたが、機会ある毎に見つめて、あこがれに近い尊敬を抱いて来た僕が、去年からふとした機縁で、ひと月に一度は先生にお目にかゝれる様になつた。篆刻中心の会合ではないが、先生が居られるから、自然、話は篆刻のことにも触れる。印影を見せて頂くこともある。僕の印影を見て頂くこともある。

先生はほとんど批評らしい批評はおつしやらないが、何がない、目に見えぬ影響は受けてる様な気がしてゐたのである。

事実この頃から、それまで苦手であつた白文印に興味が出て来た。

河井先生の印は、点画のはし／＼にまで行きわたつた知性が、洗練されきつた技巧と相まって比倫のないあの莊嚴世界を現出した。書品に載つた印稿に見る様に、隅の隅まで初めから計算して割出しかゝるのが河井先生の行き方だが、山田先生に在つては、一つの骨格を立てると、それを強調して、あとの細部はどうなつても大して意に介されないらしい。

先生は河井先生から「少し工夫した印も刻つたらどうです」と言はれた事があるさうだが、河井先生の立場から見れば、山田先生の印は工夫した印ではなかつたらう。

しかし山田先生の印は、決して率意の作品ではない。刀を執るまでも、人知れぬ推敲を重ねられるらしい。たゞその工夫のしどころが、河井先生とちがふのだらうとひそかに思ふ。

僕の性情は河井先生の世界に到底ふみ込み得べくもない。僕はしきりに、山田先生の世界に逃げ込まうかと思ふ。しかし僕には、山田先生の骨がない。

書品誌上、かつて松丸大人が僕の印を評して「山田正平の妙な影響」といったのも、つまりはこの所ではないかと自ら省

みる。

ことしの春、それこそ本当に、山田先生の批正を仰いだことがある。

正月の日書展に出した金子鷗亭さんの「賢字子遠」が、どうしても気になつたのである。(2) (図2)

一年も前からさん／＼に苦しんで、対の印材をすっかりちんばにしてしまつた揚句、ふいと刻つたのが、珍らしく補刀もなくて一番よさ／＼そうだ。そのまゝにしておけばよかったのに、やっぱりちよつと気になつて、賢字の臣部に刀を加へたら賢の字だけが堅くなつた。もつと臣の線をくづしたらと思つたが、決心がつかぬまゝ展覧会に出してしまつたものだった。

金子さんは印にもやかましうだし、それでなくても、気にかゝるまゝ贈つて悔いを残すのもと思つて、山田先生の所へ伺つたのである。

まづい事には、字と子の二字は、先生の刻られた三田清白さんの「和字子順」からそっくり拝借したもので、先廻りして申訳をいふと「ほゝう余裕しやくしやくたることをするんですな」先生も中々皮肉である。

賢の字に何とかぱりつと刀をあてゝ頂いたら、この印も助かるのではないかと願ひしても「いやあ、なか／＼いゝぢやないですか」と取りあつて下さらぬ。

たうとうしびれを切らせて引きさがらうと腰をうかせながら、それでもしつこく色々言葉をかさねてゐると、先生ははじめて「そんなに気になるのですか」といはれて、それから本気で見て下すつたのである。

指をあてたり、燈にすかしたり、ためつすがめつ印面を見て居られたが、「賢に刀を入れることはない。むしろ子の字の方が



賢字子遠 (補刀後)

保多孝三刻印
賢字子遠 (補刀前)

山田正平刻印
和字子順

図2 山田正平刻印と保多孝三刻印(拡大)『保多孝三展図録』(篆刻美術館)

弱い」字と子は先生からの借り物、そこには大した問題もあるまいと、賢字にばかりこだはって居た僕の頭を、がんとやられた形である。

それから先生は、これも今年の日書展に出品された「和而不同」を僕の印と並べて、「わたしの印は汚いなあ」とつぶやかれる。顧みて他を言ふ、先生得意の話術である。

印面を並べて手にとると、全くえらい相違である。僕の印には骨がない。印に骨がないのは、僕自身に骨がないのであらうか。

天野文相は、漢文を復活して背骨を作らうとした。僕も学校で漢文は習ったのだから、まるで骨なしでもないかも知れぬ。いわしの背骨位はあるのかも知れぬ。しかし、いわしにいくらカルシウムを注射しても、遂に鯛の背骨にはならぬ。

天野さんは漢文復活で作らうとしたが、広川弘禅和尚でも文相になったら、禅でもやらせて腹を作らうといひ出すかも知れない。

さらに、保多の正平の篆刻に対する評語を紹介する。

まず、昭和三十三年の新日展に出品した「瓦礫放光」に対する評である。これは「篆刻総評」(『書品』九三号、昭和三十三年)に掲載された。

剛毅な骨格は場中第一といっていい。蘭台作品の瀟洒な姿と並べて見る時、両者ともにその人に接する思いのあるのはまことに興味深い。究極のところ、作品はついに作者の人間そのものだとつくづく思う。技巧のすべてを振り捨てて赤裸々、露堂々。これをわずかに覆うものが無数に施された刀痕であ

ろうか。

次は、毎日展に出品した「白蘋世界」に対する評である。これは、「毎日展四五部評」〔『墨美』昭和二十六年十月〕に掲載された。

審査員、例の「正平鉄筆」の印箋に「白蘋世界」、これは山田正平先生のみを持つ不思議な魅力である。中国篆刻の道統を追わず日本旧派の系列に入らず、しかも醇乎たる日本人、山田正平一個の毅然たる世界である。その逞しいバックボーンは瑣瑣たる刀技の末に拘からぬしかもずばりと切つてすてたあとに何か幽かな匂さえうかぶ。恐ろしい境地である。句は芋銭子の書いたものからとられたとか、水郷牛久の乾坤思いなしが蘋字の刀の自らなる起伏に浮草の蕩揺が見える。

ここで参考に、山田正平が保多孝三の印を評した一文を掲出する。孝三は正平に私淑した、と述べているが、まさに正平の芸術の最も正當なる理解者であり、同質の作風であるものの、別派を開拓したといえよう。

保多孝三氏、この印箋をみてホットした。自分の歌を歌っている。文雅の香り豊かで楽しい。（「篆刻の審査にあたりて」『書品』一二号、昭和二十六年一月）

以上掲げた人たちの正平への人物評さらに作品評から、正平が當代きつての作家である事が理解できよう。彼は理知の人というよりむしろ感性の人であった。名利を求めることなく孤高を保ち、ただひたすら文人の世界に行きぬく彼の姿は尊い。稀有雄大にして画趣

に富む正平の世界は、その高潔な人格と相俟って少なからず多くの人に感化を及ぼした。

四 おわりに

ここに取り上げた篆刻家や篆刻に造詣の深い諸賢の発言は、山田正平を知る上で貴重な内容を含んでいる。正平を廻る彼らの本研究で紹介した言説は、正平の伝記資料や篆刻観を知る上で得がたいものである。中でも正平の篆刻が学問研究と深く結合しており、書巻の氣や金石の氣の横溢した馥郁たる印を数多く生み出すことが出来た要因が理解できるものである。

【注】

（1）保多孝三による弔辞は二種存在する。一は、平成十二年に篆刻美術館において開催された保多孝三展の折刊行された図録に掲載された。もう一は山田家に遺されている。おそらく図録に掲載されたものは、草稿であろう。内容は語句の差違のみで殆ど変わらない。

（2）「賢字子遠」の、補刀前後の印は、平成十二年に篆刻美術館において開催された保多孝三展の折刊行された図録に掲載された。転載させて頂く。ここでは、孝三が参考にした正平の「和字子順」の印を掲げた。これらの印を仔細に見るに、孝三は正平のアドバイスを得て、補刀したことが分かる。

2 周辺の人々とその交友(Ⅱ)

一 はじめに

山田正平周辺の人々とその交友として、「1 周辺の人々とその交友(Ⅰ)」において、幾人か取り上げた。私が直接インタビューを試みたり、書簡で質問した方々であった。(Ⅰ)は、篆刻家もしくは篆刻に造詣の深い方に関して言及した(Ⅰ)。これらは正平の業績や人物像、芸術観を知るに足るものであった。本研究はそれに次ぐもので、篆刻家、書画家や教育者を取り上げ、新たな資料として提示するとともに考察を加える。

二 逸話とその注解

これまで試みてきたインタビュー、往復書簡などによる資料を提示し、人物・事項のいくらかに注解を施す。

1、田邊齊廬(篆刻家)

聞き手 神野雄二
年月日 昭和五十五年頃
場所 田邊齊廬宅

○ 説文会という河合孝太郎が説文を読む会があった。新井琢斎が世話役で樋口銅牛、河井荃廬両先生が聞いておられた。篆刻家

では山田正平氏がときどき顔を見せていた。

○ 昭和二十九年に、伏見冲敬と篆刻の知識を広めるため縮社という会を作った。縮社という名は河井先生に命名していただいた。『文字蒙求』『篆刻鍼度』を輪読した。山田先生も参加していた。

2、大久保翠洞(篆刻家)

聞き手 神野雄二
年月日 昭和五十五年頃
場所 大久保翠洞宅

○ 人間味のある作品で内容がある。

○ 秦漢を底流として、独自の世界を創りあげている。

○ 呉昌碩の神髓を盗み自己を打ち出している。

○ 不均衡の均衡である。

○ 芋銭と鉄斎の影響がある。

○ 文章がうまく、漢籍の素養があった。

○ 河井荃廬と正平は、表現様式の相違がある。荃廬は整理している。

○ 職人芸ではない。

○ 自己主張を曲げない厳しさがある。

○ 一作ごとに刻風が違い、ここに価値がある。

○ 感興や心情を吐露している。

○ 「篆刻は、掘ることではなく、本を読むことだ。掘るまでの内容

を作ることだ」と言われた。

○ 芸術は一代のもので、継承できない。

○ 中村蘭台二世は初世を踏襲した部分がある。正平は寒山と全く相違する。

○ 「万巻の書物を読むよう心がけよ。単に印を彫り、書を書いても無駄だ。手法のみではならぬ」と話された。

3、松下英麿（評論家）

（筆者注）（明治四十年（一九〇七）長野県生、中央公論社編集長、本間美術館常任理事歴任する。著書に『池大雅』その他がある。）

筆者宛書簡による

消印 昭和五十五年十月十六日

便箋、ペン書き七枚

① 「油彩画について」特に印人に聴いたことはありませんが、独習しそれも展覧会や図録によったものと思います。純粹の油彩画も試みた（三、四点拝見）と思いますが、むしろ油彩の手法を日本画に応用する狙いが主であった。鉄斎、芋銭、梅原、中川一政の画に関心をもったことは周知の事です。

（筆者注）（山田正平が描いた油彩画が二点山田家に残されている。一点は自画像で、もう一点は風景画である）

② イ 木村竹香（印人の父）

ロ 山田寒山（師、後に義父）

ハ 河井荃廬（篆刻上の師、斯人に逢って渡海し中国の印風を摂取する）

ニ 小川芋銭（印人にとって、芸術人として最も影響を受けた作家と私は考える。芋銭には畏敬を以て対している。長男

の時か潤平君の時か今は明瞭でないが、五月の節句に朱筆による鐘鬼の図を芋銭より贈られている）

（筆者注）（和鐘廬の図は、正平次男潤平のため描かれたものである。乾隆朱墨を使用しており芋銭の傑作といえる作品である。賛に「用乾隆朱写日本鐘廬、及是素尊威容也、為山田正平君愛息、芋銭子」とある）

ホ 中川一政（中川氏の芸術人としての境涯に共鳴し、その画詞に同一の究極点を期したものがある）

ヘ 堀口大学（斯人との関わりは大学の父九萬一との交流からか。九萬一は外交官でいて、書画に興味をもち明治風の文人であり、その子大学外国文学出身乍ら東洋芸術に関心深く、その点日夏耿之介との関りもあり、更に正平の近代詩への嗜好から大学を重んじたと思われる。

私〔松下〕は堀口氏とは、日夏耿之介の関係で会ったことがない。日夏、堀口は佐藤春夫を加えて大正初頭詩壇の英才とされたが、とあることにより、前二者の間にカクシツが生じ往来が絶えた。正平は日夏とも交りがあり、日夏はしばしば寒山寺を訪うて、かなり親しい仲であった）

③ 鄧、金、八大、呉、徐との印学の上の交流は、前三者は境涯の上で（勿論印風を含めて）で共鳴し、後二者は貴稿に窺う如く直接の接触によつて教示を受けたと思われる。

④ 正平の詩作は、山田家の遺稿について調査しなければ分らない。しかし、この国の高芙蓉一門、葛子琴らを見ても篆刻人は詩人である。又た詩の心得のない刻者は技外の余韻が浅い如くである。正平は東洋的な詩の理解は完璧に近かったと思われ、同時

にその詩作も文人としての究極境を打出したと（作品は少なくとも）私は思います。

- ⑤ 黄眠先生Ⅱ日夏耿之介の別号（元早稲田大学教授、文学博士）

ロ 大鹿卓Ⅱ詩人、小説家、田中正造を軸とした足尾鉅毒事件を描いた『渡良瀬川』『谷中村事件』の著。昭和十六年第五回新潮文学賞を受く。『文藝日本』の幹部、詩人金子光晴の実弟。

ハ 小倉千鷹Ⅱ理学者、戦争末期ショウチュウ（酒）を研究し友人に試飲させて愛飲者を喜ばせた。詩人でもある。

- ⑥ 正平作品（亀頭印押捺）は黄眠草堂にある筈なるも、戦後の混乱にて如何になりしか不明。（当日は阿佐ヶ谷の小倉研究所にてしたゝか飲み、ついで黄眠草堂にて二次会をせし。余勢にて皆々文人気質を露呈せしものか）

（筆者注）（松下英麿は、『古酒』第八冊、昭和三十七年十月に「一止道人追懷」の文章を執筆しており、この件に關して述べている。）

- ⑦ 正平の西欧文化への傾例は相当強烈なものがあつた。それは東洋の芸術を深めるというよりも、自己の新しい道を補強するためであつたと考える。

- ⑧ 確かなことは分らないが、武者小路、土田は面識があつたが、岸田、志賀はなかつたとおもう。

- ⑨ 会津八一との交際

正平の実父木村竹香は印人という關係で同国の八一と相識であり、十七、八歳にして北越俳壇の雄であつた八一を重んじたと思像される。従つて正平がいよいよ山田家に入るについて（大正七年）は親代りの労を懇請したものと想像され、八一は事実

その死に至るまで正平に教えアドバイスした。結婚に際して木村家より（実は八一が）提出したといわれる三条件は、あり得べきことの如く考えられるが、この事実は山田家の喜美夫人に正すより外ない。八一と正平については多くの話題があつたろうが、迂生はその類に怯えない。

- ⑩ 正平氏と松下との交渉

昭和十一、二年頃からと記憶する。正平（以下敬称省略）が八一と師弟に近い關係にあつたことはいうまでもないが、他方日夏耿之介（早大教授・詩人）等も先輩（明治二十三年生）文人として重んじた。八一、耿之介は同僚というのみでなくその芸術上の認識において極めて共通した間柄にあつた。松下はこの両者を尊敬するのみでなく、二者の生涯にわたつて内輪の人の如き間柄に終始した。正平との出会が、この二恩師の書斎のいづれかであつた。従つて正平とは生涯気のおけない知人であつたといえる。正平はもともと謹嚴な人物であるが、八一と對するとき、嚴肅であつた。時には油汗を流した。私が同座するとそれだけで気が楽になると笑つたこともある。正平について私はその一事に一貫した態度を敬仰する。その一事は篆刻を軸とした芸術という広大無辺の世界に新生面を開こうと体当りの努力を重ねたことである。

- 4、田邊古邨（東京学芸大学名誉教授）⁽²⁾

聞き手 神野雄二

年月日 昭和五十四年一月十四日

場所 電話による聞き取り

○ 山田先生を学芸大学にお呼びする時、山田先生に会つたことは

なかったが、人物、篆刻ともに優れていることを聞いていたの
で、また会津八一先生が可愛がっていたこともあり、山田先生
の家まで出かけていってお願いした。

○ 教授会に履歴書を提出されたが、自分は寒山の養子である、と
いったことくらいしか書かれてなかったが、すばらしい人であ
るという事で採用された。

○ 端的に心と心の交流をする人であった。

○ 邪念を持っていると烈火の如く怒った。

○ 地味な生活をしていて、小さな家に住んでおられた。

○ 篆刻もやりたくなければ十年もやらなかった。

○ 純粹無垢であられた。

○ 篆刻に輝きがある。

○ やめる時は保多君を後任にと言われた。

○ 現代篆刻家は縁を細工するが、山田さんは自然である。小細工
はしない。一刀で刻す。

○ 漢印に近く漢の人を想わせる。古風な人である。古人といつて
もいいのではないか。

○ 山田先生に深入りできないところに他の人のずるさがある。

○ 不潔なふうに感じると、かっと顔を赤くして怒られた。己に対
しても厳しいが、人に対しても厳しかった。

○ 自分の心の琴線に触れると兄弟のごとく話をされた。

○ 汚い話は耳に聞いてもすぐ忘れた。

○ 本当の芸術家であった。

○ 現代のいう普通の人ではない。常に道を求めていた人。

○ 細工のない人、書の如く一刀で切った。

○ 印は呼吸で切る、吐く息で切る、息をしながら自然に切る、息
を吐く力で切っていく。田辺先生が「篆刻は呼吸で切るのです

ね」ということを、山田先生に話すと、それは名文句だとほめ
て下さる。

○ 造型がいつまでも頭にあっては呼吸が出てこない。

○ 呼吸が切っていく、造型は気にしない。

○ 授業をされていた時、チョークが折れてしかたなかった。側で
田辺先生が板書をし、チョークの使い方を教えてさしあげた。

○ その後はあまり折れなくなった。

○ 生活もぐつと高度な緊張を保っていた。なんともない生活は耐
えられなかった人である。

○ 一つの事に集中すると、精一杯やった。

○ 田辺先生が心から尊敬し頭を下げた人であった。

○ 商売っ気のない人。

○ 日本一になっても生活は貧疎であった。

○ 現代を超越していた。現代の芸術家は八方美人的でよくないが、
山田先生は現代の芸術家と全然違っていたからよかった。現代
の人は山田先生を避けて通る、嫌ってはいないがあまり真つ正
直すぎるから。

○ 年月が経てば経つほど山田先生は分かってくるであろう。

○ 権勢というものがなかった。一人ぼつんと離れていた。財を作
るでなく、金を作るでなく。

○ 高い教養を身につけた自然人。

○ 洗練された文化的自然人。

○ 生の人間のよさを備えた人。

○ 歳を取っても、ちよつとしたことにすぐ感動される方であった。
感動家であった。

5、伊東参州（東京学芸大学名誉教授）

聞き手 神野雄二

年月日 昭和五十六年三月二十日

場所 伊東参州宅

○ 『筆』試上に水墨画を描いていたが、正平先生もそれを見られたのか、「日下部道寿先生にそっくりだね、もっと勉強しなくては」と話された。

○ 学校で講義の前後、書道界の不平不満をよく話された。

○ 先生と話したことは世間一般の事、書道、画の事が多かった。

○ 孤独に徹することが大切だということを話された。

○ 授業は一貫性がなかった。系統立てて話すことをしなかった。

○ しかし作家としての体験を通して話をされるので説得力があった。

○ 石井雙石批判をされた。篆刻はやはり篆書を刻さなくてはという思想から、あまり新奇に走ることを好まなかった。

○ 文人との交友があると自と見識が高くなると話された。

○ 漢詩文にしてもすべてを暗記しているのではなくて、短いエキスの部分を重んじていた。

○ 「含蓄」ということを大切にされた方であつた。

○ 正平先生は必ず再評価される時がくる。

○ 寒山の時代と今の書家との教養の差は歴然としている。

6、吉田繁（東京学芸大学名誉教授）

聞き手 神野雄二

年月日 昭和五十三年九月二十一日

場所 吉田繁宅

○ 高山棟行さん（東京学芸大卒）が「篆刻講義ノート」の間違いを指摘した人を知っている。

（筆者注）『篆刻講義ノート』は、山田正平が東京学芸大学で講じた講義用のノートやちらしなどに書かれたメモ（図1）を、書道科同窓会「硯心会」の有志が纏めたもので、これまで二回に亘って刊行されている。二種の目次を掲げる。

『山田正平先生篆刻講義ノート』（前掲）

・ 田辺萬平「序」

・ 伊東寿「遺稿に学ぶ」

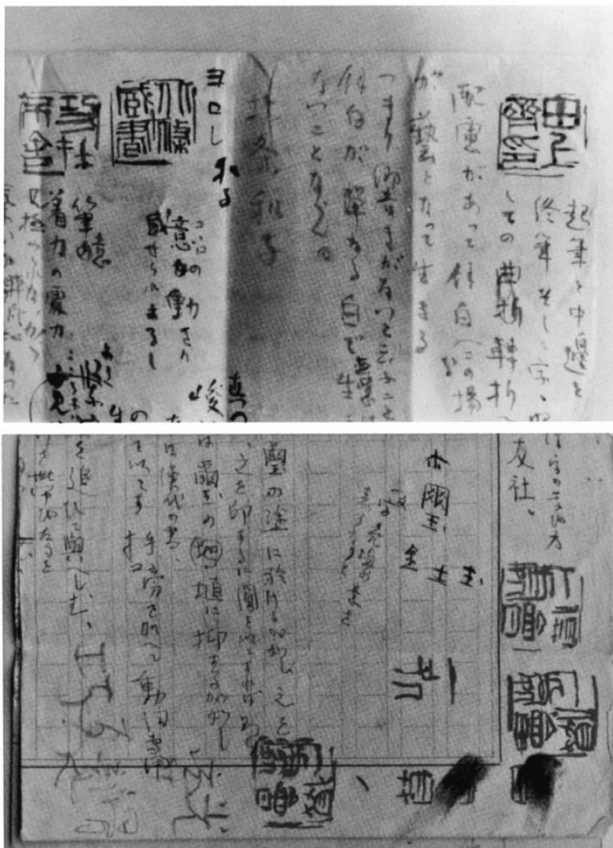


図1 『篆刻講義ノート』のもととなったメモ（山田家蔵）

- ・鈴木武夫「山田先生と吉福の雅印」
- ・吉田繁「思ひ出の断片」

『回顧山田正平―東京学芸大学における教育者としての側面―
付篆刻講義ノート（復刻）』（東京学芸大学書道科硯心会 平成
十六年七月二十日）

（十一月三日、東京学芸大学において、「山田正平先生を語る」シ
ンポジウム開催される。（シンポジスト 小木太法、杉本鞆香、
塚本虚斎、益子素州、神野大光）

- ・蔵元訓征「ごあいさつ 感化―山田正平展に寄せて―」
- ・山田正平展览展示資料
- ・「山田正平先生を語る」シンポジウム
- ・「篆刻講義ノート（復刻）」
- ・山田正平年譜
- ・岩切誠「あとがき」

○ 正平さんは、田辺萬平先生が善い人だということで、ああいう
人が学大の教員ならということ で学大に來られた。

○ 背広は学大に來る時初めて作つたと聞く。それまでは着流しで
あつた。

○ 学生の清さを羨ましがつていた。

○ 日展の篆刻家に対し「あんな奴には爆弾を落としてやりたい」
とさえ言つていた。

○ 八一先生とは肉親的な感じであつたのだろう。

○ 翁は恥ずかしがりやであつたのか、講義の時は前や横を見て、
正面を向いて話をされなかつた。

○ 山田先生に机上で印を刻していただいたが、その時の姿は生涯

○ 忘れられない。まさにライオンが獲物に飛びつかんとするが勢
いであつた。怖いくらいものすごいものであつた。一点一画決
しておろそかにしない人であつた。
○ 印稿を考えられる時、ちよぼちよぼとウイスキーをやられなが
らされた。

7、加藤 淳（早稲田大学名誉教授）

聞き手 神野雄二

年月日 昭和五十二年七月八日

場所 東京学芸大学

○ 正平氏は実に展覧会をよく見て歩いた。

○ 八一先生は「俺は正平の里親」だと言われた。

○ 昭和六年前後、八一先生から正平の話を聞いた。『八一印譜』を
作っている時、正平刻「秋草堂」という印を押した。

8、関 健一（昭和学院中学校美術教諭）

聞き手 神野雄二

年月日 昭和五十八年十一月二十五日

場所 昭和学院中学校

○ 棟方志功と正平はよく会つていた。会うと印を刻してくれとね
だられたらしい。

○ 戦前、戦後で刻風変わる。

○ 銭松の印が好きであると話していた。

○ 鉄斎の絵を持っていたことがあつた。

○ 大雅の印を持っていたことがあつた。

○ 「五井」の人が刻字を持っている。

○ 九州に遊んだため、その地方に刻字作品が多く残っている。

○ 松山に刻字と篆刻持っている人がいる。

○ 栗野大允が錢瘦鉄と席を同じくする会があった時「日本の印人で第一人者は誰だね」と尋ねたところ「山田正平だ」と答えが返ってきた。そこで正平に入門すべく山田家を訪れたが、僕は弟子はとらないと断られた。ちょうど伏見冲敬が居合わせており部屋に入ることができた。

○ 正平は絵を描くとき壺にしても、いいものをみて描いていない。しかし正平の手にかかる生き生きとしてくるのである。今の画家はいいものを描いて悪くしている。

9、横山藤三郎（木屋製作所所長）（山田潤平の紹介による）

聞き手 神野雄二

年月日 昭和五十六年三月十八日

場所 木屋製作所

○ 正平さんとは、同郷の長島北彩さんを通して知った。

○ 子息潤平さんの就職を世話した関係で、正平さんは時々会社へ見えた。

○ 菩薩像の除幕式の折、正平さんも見えた。

○ 「和」と社訓を揮毫してもらった。

10、井上恒也（画家）

（筆者注）（一八九五—一九七九、静岡県富士市出身の日本画家。東京美術学校日本画科卒。寺崎広業・川合玉堂に師事する。花鳥画を得意とした。伝統的な花鳥画とは異なる

鮮やかな彩色による独自の絵画世界を創造した）

聞き手 神野雄二

年月日 昭和五十三年七月二十八日

場所 東京都世田谷区成城学園井上恒也宅

○ 山田先生は人物が違う。

○ 酒を飲んでも乱れない人だった。

○ 私の印を良くないからと刻しなおしてくれた。

○ 山田寒山の印を所持しているが、これは私の叔父が山田先生と懇意にしていたからだ。

○ 山田先生は松下玉川堂の主人と懇意にしていた。

○ 山田先生の絵は、絵描きの絵でないので楽しい。篆刻が一発勝負なので絵でもそうなるのであろう。

11、堀切商店主人（荻窪骨董屋店主）

聞き手 神野雄二

年月日 昭和五十五年頃

場所 荻窪骨董店

○ とにかくつかまえどころのない人であった。

○ よく来て画を見てこれはいい、これは悪いとか言っていた。

○ 書画を買っていくことはほとんどなかった。

○ 自分のことはほとんど話さなかった。山田先生が篆刻をしていることは知っていたが、えらい人など全然知らなかった。

○ 一度石印材をたくさんぶつきらばうに包んで持ってきて、石の種類などを教えてくれた。特に田黄はよく覚えておきなさいと

言われた。

○ 薄い薄いゲタを履き着流しにチャンチャンコのようなものをひっかけていた。

○ 気さくな人でいばらない人であった。

○ いま思えば書画を見ながら勉強をしていたのであろう。

○ あの頃は若い時だったから、孫くらの気持ちで付き合ってくれたのであろう。お互いに本当に好きなことをずけずけと言いたったものだ。

○ 大声でよく笑われた。

以上の諸賢の言説を整理すると、山田正平の人物像や篆刻観を次のように纏めることができる。

正平の篆刻は学問研究と結合したものであり、深い学書に裏付けられたものである。書巻の気や金石の気の横溢した印が数多く生み出された要因がここにある。彼の芸術の独自性と学書の特質は、類まれなものであるが、それは多くの文化人や芸術家との交友の中で生み出されている。

三 おわりに

ここに取り上げた山田正平を廻る諸賢による発言は、正平を語る上で貴重な内容を含んでいる。概ね同業者は辛口の評をするものである。しかし正平を廻る彼らの本研究で紹介した言説は、より好意的なものであった。これらは片言隻語といえども、正平の伝記資料や印学や人物像の具体的な一端を知る上で貴重な内容を含んでいるといえる。

安藤掲石は、「歴訪・山田正平」『書品』九八号、昭和三十四年四

月)において(図2)「優れた芸術が生まれる要因は必ずしも一様ではないだろう。しかしその環境や人との繋がりには大きい意味を持つ。彼の逸格の芸境も稀有の人格も、おそらくは人間関係に拠る所が多い」また「山田正平は、そのような時代の余映のうちに、寒山を中心として当時の芸術家の芸境にも触れ、生活の仕様も見且つ聞き、芸苑の名門山田家の後嗣として亡養父寒山の知友の間に残された訳だ」と述べている。確かに山田寒山から受け継いだ人脈も在るが、

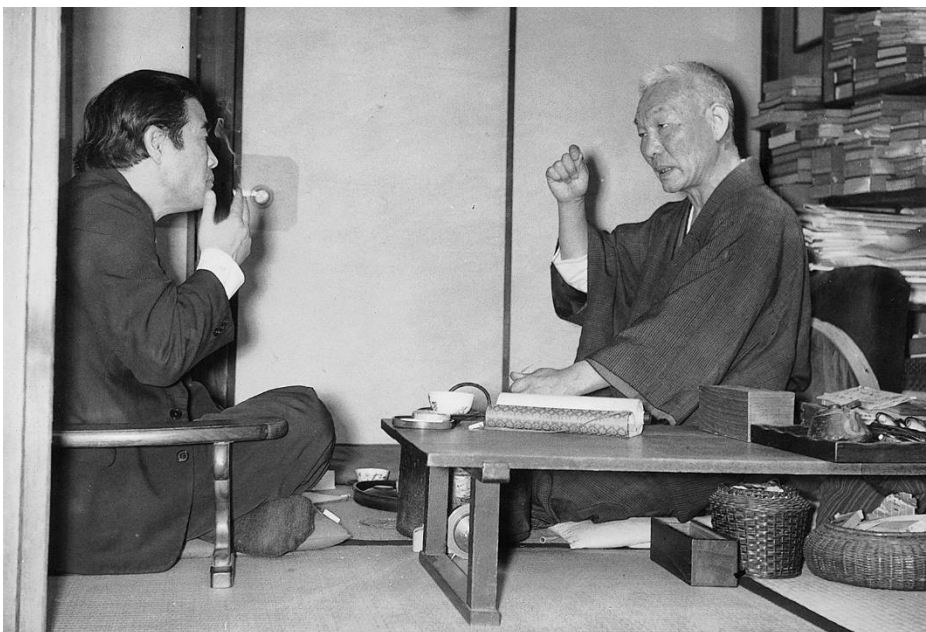


図2 談笑する山田正平と安藤掲石

正平の類稀な才能と芸術に惹きつけられた人も多いだろう。正平の印が日本の篆刻の中でもひとときわ光彩を放っているのも当然と言える。

【注】

(1) 拙稿では、西川寧、伏見冲敬、保多孝三、古川悟、山田桃源、鈴木知秋、長曾我部木人、小林斗盦、今井凌雪を取り上げた。(「山田正平研究―周辺の人々とその交友(Ⅰ)」『広島文教人間文化』第三号 広島文教女子大学人間文化学会 平成十五年三月)

(2) 田邊古邨(一九〇三―一九八〇、号古邨、本名萬平、別号は白茅。書道一元会初代会長、東京学芸大学名誉教授。東洋文化研究所所長。著『田邊古邨全集(全五巻)』(芸術新聞社、二〇一五―二〇一九年)他。書道、漢学、短歌などに関しての多くの著作がある。山田正平を東京学芸大学講師として招聘した。

3 周辺の人々とその交友(Ⅲ)

一 はじめに

本節では山田正平を廻る人々とその交友について述べる。周辺の人として過去二回に亘り「正平周辺の人々とその交友」について言及した。これらは正平の事績、人物像や芸術観を知るに足るものであった。本研究はそれに次ぐもので、三回目として、最も身近な存在であった、正平令夫人喜美子（明治三十〇昭和六十二年（一八九七―一九八七））を取り上げる。

二 山田正平令夫人喜美子に関して

まずは山田正平令夫人喜美子に関して、資料を提示し概略述べておく。喜美子自身による山田寒山の十七回忌を記念して、寒山寺書画篆刻頒布会が催された折の一文を紹介する。「山田寒山翁十七回忌記念寒山寺書画篆刻頒布規定」のパンフレット（昭和八年九月）の記載によるものである。山田正平の賛が書き添えられた喜美子による墨竹が掲載されている（図1）。

池田蕉園先生には七年余り、其後は輝方先生、荒木十畝先生の御教を受け、勉強して居りましたが、家事に忙しき身になりまして、時折画心の起るにまかせて、研究を続けて居りました。此頃は追々子供等も手を離れ、絵筆執る暇も得られるやう

になりましたので、丁度亡父の十七年忌を迎へるのをよき記念として、これからは好きな丹青の道に精進したいと存じます。どうぞ宜敷御指導を御願申上げます。



図1 山田喜美子作墨竹・正平賛（「山田寒山翁17回忌記念寒山寺書画篆刻頒布規定」パンフレット）

また、別に「芸術界の新花、山田寒山師の愛嬢山田蕉宇さん」（『国民新聞』大正七年一月廿四日）（図2）として掲載されている。

余技として竹を描いては天下一品の評ある山田寒山師の長女です。本年二十二歳家に在つては家事万端を切り盛りして行く事の能る家庭的な娘さんです。不忍川の辺りのお宅をお訪ねすると優雅な蕉宇さんが出て来られて、丹青の道に志す迄のお話や其後の事に就て種々語られました。

『妾は蕉園先生の絵を見て絵が好きになりました。而して未だに蕉園先生方の御厄介になつてゐるのですが、先生がお亡くなりになつてから画塾は輝方さんお一人で教へてゐらつしやい

ます。然ですれモウ五六年にもなりませうか？此頃ぢや家事に逐はれて迎も皆さんの如うには勉強が出来ません…。斯様のを前年異画会へ出した事があります』と云てお示せになったのは綺麗な美人画でした。夫から蕉宇さんは又続けて語る『そんな風ですから此頃ぢや時々研究会へお伺ひする位ですが、背景を描いたり花鳥を研究したりするには矢張り専門へ行かなければ駄目ですから、荒木十畝先生のお宅へ習ひに伺つてます』と尤も謙遜な態度です。更に今度読画会へ出品された『秋』に就ての話を聞くと『アレですかあれは昨年玉川へ遊びに行た時見て来た実景から思ひ付いた題材です。芒を背景として娘が砧を打

大正七年 四月 日
第七四
國民新聞



図2 藝術界の新花
（『國民新聞』大正7年1月24日）

つてる所ですが、時代は春信の天明時代に致しました』と説明し了ると『父を御紹介致しませう』とて寒山師を呼んでゐらつしやいました。師は長鬚を撫しつゝ『娘の絵はまだ問題にはなりません。モツと勉強させなくては』と、話題を転じて高島北海画伯が二十年も前に水彩画を応用した山水を試みたことや、鉄筆のことやらを語られました。

妻喜美子は蕉宇と号し、日本画に専心努力していたことが分かる。その画風は伝統的なもので格調が高い。彼女自身が芸術に志していたことは、芸術家としての正平を理解することに大きく寄与したことと思われる。

三 山田正平令夫人へのインタビュー1

- ・山田正平令夫人喜美子（喜と略す）・ご令嬢梅枝（梅と略す）
- ・聞き手 神野雄二（神と略す）・宮坂直樹（宮と略す）（武蔵野美術大学講師）
- ・年月日 昭和五十三年十二月二十五日
- ・場所 東京都荻窪山田家

神 まず日常的な山田先生の事をお聞きたいののですが、一緒にずつと過ごしてこられて…。山田先生の嗜好品や、趣味など。お風呂が大変お好きだったと梅枝さんからお聞きしましたが。

喜 大体お分かりですわ。そんなもんです。後は忘れてしまつてます。

神 好きな食べ物。果物、魚、肉など。
喜 何でも好きです。嫌いな物ないです。

神 お体はお元気でしたか、病気などほとんどされなかったのですか。

喜 そうなんです。大動脈瘤というのがいつから始まっていたんだか分かりませんが。中国へ行く時にだいぶ具合が悪うございました。大変苦しがつて行きました（図3・図4）

神 大動脈瘤。
腹部大動脈瘤破裂って言いました。警察病院で亡くなりました。

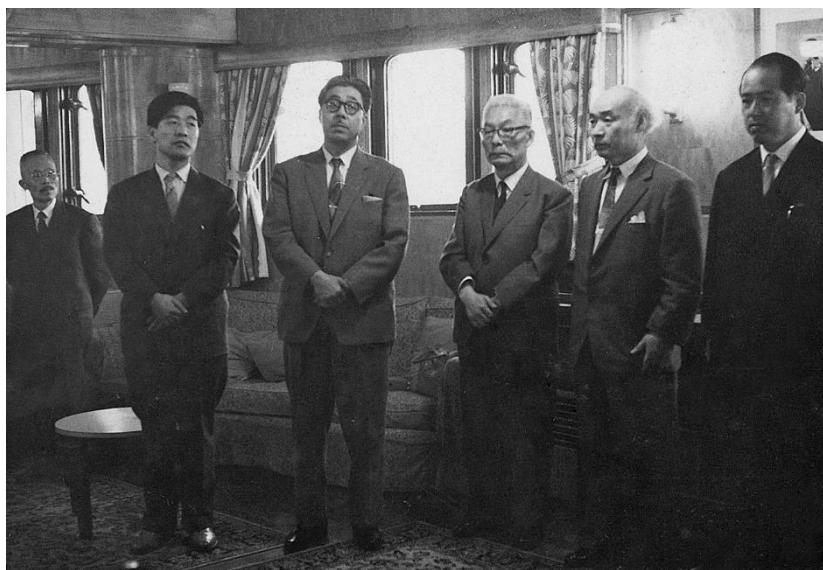


図3 第3次訪中日本書道団（1962年）
（右から3人目 山田正平、5人目 今井凌雪）



図4 正平を見送る家族（右から2人目 山田正平）

神 中国へ行かれる前から悪かったのですか。

喜 はい。どうしても行きたいと。昔長沙まで行っておりましてからね。もう一変見てきたいと……。随分苦しかったようですけども、それを押して行きました。帰ってきて入院した時は大分良かったんですけど。

神 それじゃ行く時が一番調子悪かったのですか。

喜 そうです。行く時が一番調子悪かったんですよ。

宮 お茶碗やいい絵を買ったときなど、一日中眺めていらつしやったのですか。

喜 そうです、そうです、よくご存じで。

宮 自分の好きなものには。

喜 寝ずに眺めておりました。そういう好きなものが手に入ったときには。

神 一つのものに凝る人でしたか。

喜 そうですね。

神 お酒はすごく好きでしたか。

梅 若い時は随分たくさん飲んだんでしょう。

喜 若い時はね、それこそ日夏先生のお家に行った時なんか、帰りにドブなんかに落っこちて帰ってきたりして。(笑)

梅 そんなに量は飲まないんでしょうが、すぐ酔っぱらっちゃって。そうね。

梅 そんなにひどく、一升酒飲むってほどじゃないみたいだけど。じきに寝てしまいます。

梅 お酒の回りがいいのかしらね。飲んだらもう上機嫌で……。よそへ伺ったときはもつと飲むんでしょうね。あんなにへべれけになつちゃう、家あたりじゃ経済がそう許さないから。お酒はおいしく飲んでいたいみたいです。

梅 お酒飲むと面白くなる性質みたいですね。だから皆さん、お酒

の席に呼んで下さるのでしょいかね。

宮 大学へ講義に行つて家に帰ってきた時、何か大学生のことなど話しませんでしたか。

喜 アルバイトして困るって言っていました。アルバイトするのが一番気に入らない。

神 学生は勉強しなきゃいかんという感じでしたか。

梅 遊ぶためのお金を稼ぐのにアルバイトするのはけしからんと、昔の人の考えじゃないかしらね。

喜 伊東先生は大変弁解してらつしやいました。アルバイトしなきゃ学生はできないって。

アルバイトして首が足りなくなると、先生方が一緒に出てきて後に座つてらつしやいました。

梅 先生稼業に慣れてないから全力投球で学校へ出かけていったから、生徒さんが少ないと、がっかりしちゃうんじゃないでしょうか。

喜 参考書をもういっぱい持つて、よくあんなに持てたもんだと思います。いっぱい持つてお出かけしました。

神 準備なんかも時間かけて。

喜 時間かけました。

梅 そう準備が大変みたいでした。一日終わつて帰つてくるとくたびれちゃつて。その次は仕事にならない感じでね。

神 そうするとやつぱり一つのことに力が抜けない人でしたんでしようね、やり始めると。

梅 慣れてないからでしょうね。だんだんと年数が経つ間に楽しくなつてきたんでしょいかね、学生さんを教えることが。だから、死ぬ時も学校は辞めないぞって言いました。続けたいって。

神 学大に来られる時、田辺先生からお願いされたと聞きましたが。
梅 なんかそのようでしたね。
喜 長い間せつていらつしやいました。
神 田辺先生とは親しかったのでしょうか。
喜 さあ、めつたに伺ったことはなかったようですけど。
神 話をよくされていたような事を『篆刻講義ノート』に書かれていたようです。
吉田先生から伺ったんですけど、田辺先生みたいないい方がいらつしやるから学大へ行く事になったと聞きました。
喜 ああそうですか。
梅 なんか続木先生って方が。
喜 続木先生、旅行の時なんか充分お世話になりました。
梅 母と父が、夏休みに九州・北海道に行く時、計画を立てて頂いて、宿の心配などして頂いて。
喜 吉田先生にもお給料を送って頂いたりして。
神 最初は学校へ行くのが大変だったのでしょうか。
喜 慣れないからでしょうね。
神 学校へ行くようになる前、講習などされる事はなかったでしょうか。
喜 あまり無かつたんですけど、時々講習なども、鎌倉などへ。
宮 あまり人の前で大勢集めて話をするとは。
喜 ええ嫌いでした。
神 本来が密室の仕事だから。
喜 旅行の時の様子などは、一緒に行かれてどうでしたか。
梅 スケッチばかりしてました。
神 それが目적인みたいで、旅行に出たのでしょうかね。
神 絵を描かれるようになったのは寒山の影響ですか。

喜 それ以前、子どもの時から好きだったらしいです。
神 それでは、幼少の時から絵も篆刻も書も一緒にやってきたのですか。確かに絵は書と似たジャンルだけど、書だけやっても大変なのに、絵も手がけられたり、漢詩にも造詣が深いし、いろいろ幅の広さを感じます。
喜 お習字は好きでしたね。暇さえあればお習字をしていました。
神 半紙に書いて。
喜 新聞紙です、裏表書いた、子どもが小学校行つてるとき、皆字書いた新聞紙にお弁当包んで持って行きました。
神 普段、新聞に字を書く事が多かった。
喜 この机の上で書いて、むこう向いて。
宮 よくできた時など奥さんに見せることなどなかったんですか。
喜 いや、全然そんなことしません。いくら書いても上手に出来なかったんでしょう。
神 書は何か古典見て。
喜 手本見て書いていることもあり、ただ、ただ筆を動かして書いていることも。
神 篆刻を刻されるのは少なかったのですか。
梅 そうですね。よっぽど気が向かなければ。
神 篆刻を刻されている時の姿はどんな感じですか。
喜 大変厳しい感じですね、篆刻の時は。子ども達の声を出させないようにつけてました。
神 刻し始めると一日中篆刻を。
喜 やつて、気が向けばちよつと散歩に行つて。このあたりはいい所でしたから、川が流れていて。
宮 善福寺などへは。
喜 ええ、善福寺へはしょっちゅう出かけていました。

宮 スケッチがありますが、動物、犬とか猫は好きでしたか。

喜 猫を貰ってきて「げん」という名をつけて飼ってました。子どもたちが好きでしたから。

神 奥様が、作品集の後記で書かれてましたが、刻字なんかする時すごい剣幕だったと。

喜 ええ、板が割れないかしらと思う剣幕で刻ってました。

神 絵なんか描いている時は気楽に描いてましたか。

喜 そうですね。絵を描いている時は案外気楽でしたね。

神 東京芸芸大学の卒業生の前田さんに聞きましたが「絵は教えられるが篆刻は教えられない。」と、先生がおっしゃったと聞いたんですが。

喜 絵だって教えられませんか。

神 学校へ行くこと、学生に会うのが楽しみだったんでしょうか。

喜 そうでしょうね、休まずに行きましたからね。

神 山田先生が親しくしてらっしゃった方、影響を受けた方、書や画をやる上で。会津先生など。

喜 そうですね、会津先生だの、小川芋銭先生だとか、中川先生だとか。

神 会津先生はここによく来られましたか。

喜 よくいらっしゃってくださいました。

神 そういう時、どういった話をされるのですか。

喜 面白そうに話してらっしゃいました。

神 お酒をちよびちよびやられながら。

喜 家じゃそんな馳走はできませんから、お茶ぐらいで。

神 父親みたいな感じを持ってらっしゃいましたか。

喜 そうですね。

宮 タバコが好きだと伺ったのですが。

喜 唐紙など真っ赤になってしまします、タバコの煙で。

神 お話など好きでしたか。

喜 大好きな方がいらっしゃると、つかまえという離さないで話していました。

宮 子どもに対しては厳しかったですか。

喜 そうでもないです。大したことないです。

宮 やさしいお父さんでしたか。

喜 そうでもないです。やさしいって程でもないです。

神 印象に残っていらっしゃること、ずっと生活をされていて。

喜 普通の人でしたですね。

宮 案外そうなのかもしれないよ。

喜 面白い話ばかりしてましたです。みんな忘れてしまいました。

宮 洒落が上手でしたね。

喜 歌なんかは。

喜 「おけさ」ぐらいは歌いますですね。

神 山田先生には決まった弟子なんかはいなかったんですか。

喜 弟子というのは嫌いなんです。

神 それでは自分では弟子など取ろうとしなかったんですか。

喜 そうです。

喜 □□□□さんみたいな押しかけ弟子は…。

神 自分一人で篆刻をやってきました。

喜 あまり外へも出ませんね。ただこの机に向ってお習字をしているのが一番楽しかったらしゅうございます。

神 篆刻をやってて苦しいなんて言われた事は。

喜 一生懸命ですから、苦しいことなんてことないですね。頭から汗流して、ガリガリガリ作品なんぞ作ってました。

宮 日展の審査員になったからといって喜ぶことなどはなかった

たですか。

喜 そんなことはないです。

宮 賞とか、何かになるということは。

喜 ええ、そうですね。

神 先生の根本の生き甲斐とは、篆刻そのものだったんですね。

喜 そうですね。

神 奥様として、私達に期待する事はありますか。たとえば、山田先生をこういう風に理解してもらいたいとか…。

喜 そういうこと言える頭を持っていればいいんですが…。血圧つもの困ります。どうも忘れてしょうがないと医者に言うと、動脈硬化が頭に昇っちゃたんですと言われ…（笑）。

宮 僕らにこういうことは曲げてとってもらいたくないってこともあるんじゃないでしょうか。

喜 ごらんになった通りです。

神 家族にとっちゃいいお父さんでしたね。

喜 ええ、いいお父さんでした。

宮 東大で法律学んでいる人で正平先生を好きな人がいます。隠れファンも多いですよ。

喜 ありがたいことです。

神 学生なんかも此処によく来てましたか。

喜 学芸大学の方はよくいらつしやってました。

神 中川一政先生とも会ってよくお話をされてましたか。

喜 よく伺ってはご馳走していただきました。

宮 きっかけは絵ですかね。

喜 篆刻の方ではないですかね。中川先生篆刻好きですからね。ご自分でたくさんやってらつしやいますからね。陶印をたくさん作ってらつしやいますからね。こんな大きな引き出しにいつ

ばい作ってらつしやいますから。

神 結構気が合ったんでしょうね。

喜 そうでしょうね。

神 僕らには分からない通ずるものがあつたのか知りませんね。

喜 幾度か中国へ行かれていますか。

喜 そうですね。

神 長く滞在されたんですか。

喜 最後に行った時は苦しいもんですから先に帰ってきて、皆さん置いて帰ってきたんですから。一番最初呉昌碩先生にお会いしに行った時は、ちよつと長く半年くらい行っていました。

神 結婚された後すぐですね。

喜 ええ、すぐです。

神 中国には魅力があつたんでしょうね。

喜 ええ、大好きでしたからね。

神 最後病気で帰ってきてお話をされてましたか。

喜 してましたね。ご馳走になったとか、飛行機に乗せてもらって一人で長沙の方まで行ったことなど嬉しかったようですね。長沙の方へ二度目に行きましたんですからね。長沙が見たい、長沙が見たいって言って、あんな体して行ってきた。

神 大変だったろうな、帰ってまたすぐ病院に入られて。二カ月…。

喜 病院でどういったこと、篆刻の話をしたり。

神 いいえ、全然。お客さんがいらつしやると楽しそうに大笑いしてお話してました。亡くなる日なんぞ、お昼前篆刻なさる方ですけど、その方とそれこそ談笑されてました。急に発作が起こりまして…。

神 最後に会われた時何か言ってらつしやいましたか。

喜 いいえ別に。だってあんなに楽しそうに大笑いして話してて、

まさかと思いましたよね。

神 よく帰りたいと言ってらっしゃった。

喜 帰りたい帰りたいなんて言っていました。医者がお家はトタン屋

根だそうでもとも暑いですよ、此処はこんな風通しもいいし、

すばらしいからもう少しいらっしゃいなんてね、なだめられて。

先生はもうちゃんと分かってらっしゃったらしいです。何を食

べてもいいからそれこそ近所にいいのがありましたから、よく

買って食べてましたんですよ。

神 帰ってらして入院された時病気は進んでたんですか。

喜 ええ…。

神 それは家族の方は知ってらっしゃったんですか。

喜 いいえ、全然知りませんでした。

神 じゃあ、医者だけが。

喜 手術しよう手術しようなんて先生が言ってらしたんですけどね。

亡くなった時ああ…手術しなくて良かったですねって、手術し

てたらそれつきりだったんで。ちゃんと知ってらっしゃったん

ですね。

神 びっくりされたでしょうね、それほど元気ですつといらっしゃ

ったのに、急にそういうことだから。

喜 暑いさなかでしたから。

四 山田正平令夫人へのインタビュー2

・ 山田正平令夫人喜美子（喜と略す）

・ 聞き手 神野雄二（神と略す）

・ 年月日 昭和五十四年一月十六日

・ 場所 東京都荻窪山田家

神 今日は、お父上の事、木村竹香老人と山田寒山和尚のことなど

をお聞きしたいと思います。

喜 はい、そうですね、どうぞなにしろ頭がござってますから。

神 奥様は、竹香老人とはよくお会いになられましたか。

喜 はい、よく東京へ出てきましたし、私もよく参りましたから。

神 非常に頑固な人だったと聞いたのですが、どんな感じの方でし

たか。

喜 非常に几帳面な人でしたね。

神 話なんかはよくされましたか。

喜 話は上手ですね。私達とは違って頭のいい方ですから。

神 竹香老人の作品は残ってますか。

喜 残ってるはずなんです。押したものはあるはず。細かいこ

とをよくやりましたね。とつてもこまかい仕事をしてみんな立

派なものです。

神 細かい手仕事が得意だったのですか。

喜 そうです。

神 山田先生によく似てらっしゃいましたか。

喜 ああいう几帳面なことは正平にはできませんですから、本当に

几帳面で。

神 新潟で篆刻の仕事をされてたんですね。

喜　そうです。

神　こっちには山田先生に会いにこられた。

喜　それもありますね。いろいろお友達がいらっしやったから。

神　こちらの方ですか。

喜　そうです。狩野鉄斎という彫刻家の方なんかの所に訪ねてみえました。

これなんぞ、竹香先生が、羅漢印譜ですね。印面は寒山が刻りまして、後でこんなお厨子こしらえたり、印譜を作ったり、竹香先生がやられました。これはご覧になったことはあるでしょう。

神　一度もありません。外からはあります。

扉に彫られたのは竹香老人が。

喜　これは誰だったでしょうか。

この印材作りしたのは、違いますけど。これは新潟の大変いい印材を作った方で、印面は寒山が、羅漢印譜はこの箱の中に入ってます。ごみだらけになって、触るとホコリが落ちるんです。十六羅漢よりも多くあります。観音様もありますし。ここにございますのが、寒山和尚が作った支那の寒山寺に贈りました分身です。小さい釣り鐘です。

神　十八体あります。

喜　観音様と何が多いんでしょう。

神　寒山和尚が、これ刻られている時など見られました。

喜　新潟の家で。

一晩で刻ってしまいました。これだけ。

神　一晩で。

喜　ええ。

神　かなりのスピードで刻られたのですね。

喜　ええ、これ蘭台先生が書いたものです。みんなそういう物をこ

ういう風にして書いてくれて、竹香先生が他の先生の所へ持つていつては頼んで書いてもらって、漆屋に頼んでこれだけの物を作りました。

神　山田先生は竹香老人についてあまり話されなかったとか、なぜでしょうか。安藤榻石先生が書いてありました。

喜　別に話したくないような、竹香先生つて人、そんな人じゃない、立派な人ですからね。大いに自慢してお話していい先生です。

神　体格なんかも大きい方でしたか。

喜　そうでもないです。中肉中背ですね。寒山和尚よりは大きゅうございました。寒山和尚は小さかった（笑）。

神　竹香老人の元に寒山和尚はよく行かれてたのですね。

喜　はあ、ごく親しくしていましたからね。

神　山田先生のことを気に入って、そして寒山寺の方に。

喜　寒山寺が下谷にありました時に。

神　山田先生は甘い物なんか好きでしたか。

喜　ええ、食べましたよ、余計なんですけどね。甘い物よりはお酒の方がよかったです。お酒だつてそうたいして、お客様でもあれば。

神　毎日晩酌してたわけではないですか。

喜　晩酌は、ええしてました、少しずつ。

神　酒飲むと上機嫌になって。

喜　そうなんです。すぐ寝てしまつて…。

神　寒山和尚は楽焼が好きだったそうですけど。

喜　楽焼の道具を持つては、滄浪閣へ伊藤博文さんのいらっしやつたとこ、熱海大磯にございましてね。荷物持つては出かけて楽焼を。楽焼は釉薬のかかっている盃を焼きますので、炭火で焼きますから、簡単に焼けますから。伊藤さんなんぞに書いても

らったり。お客さんでもあると呼ばれて楽焼して、博覧会なんぞであると焼いて。

神 お茶碗も。

喜 お茶碗も、抹茶のお茶碗なんぞ、本焼はできませんから、商売人の所へ絵づけだけして頼んで。

神 伊藤博文ですか。

喜 随分世話になりましたんです。

寒山寺の釣鐘が無くなったのを心配しましてね。そして、実は釣鐘捜しに行ったのが、本当は捜しに行ったのではなくて、呉昌碩に篆刻を習いに行きましたんですよ。そして、行ってるうちに、あちらへ本願寺の布教師が松林孝純っていう人ですけど、あっちへ行つてまして、寒山っていう名前だから寒山寺の住職になってくれないかって。実は私は寒山寺の住職してるんだけど、日本に帰らなければならぬから、代わりにやってくれまいかって。そして引き受けてしましまして。そしてあの有名な「月落ち烏啼いて」の鐘がないことが分かりまして。それじゃ鐘捜す方が本題だって、鐘を捜したんですが、無くって。

長髪族の闘いの時、日本人が持つていっちゃったことが分かりまして、それじゃ申し訳ないことをしたと。それじゃ日本へ帰つて捜して持ってきましたと言って、そして篆刻の方はそこそこにして帰ってきましたね。それでいくら捜しても無いんです。そして自分の手で捜してたんじゃとても埒があかないから、伊藤さんに頼んで全国の新聞に広告して、随分いつまでも捜したんですけど。とうとう出ないもんですから、どうしようかって。それからどうしようかなんて言っているうちに、何か汽車に乗っている人が、山田寒山があんなこと言つて鐘捜しているけど、鐘はどうしても出てこやしない。能登のお寺でつぶして

しまつて自分の釣鐘に入れちまつたから、出ないということが分かりまして。それからそれじゃしようがないと伊藤さんに銘を書いてもらつて新しく造ることにしました。そして三尺三寸の釣鐘を日本郵船の船で送りましてね。今寒山寺に吊り下げてるそうです。

神 いつだか正月の除夜の鐘に鳴らしたたことがあるそうですね。

喜 一度新聞に出てたと思います。

神 ああ、そうでしたね。

喜 貧乏ばかりしてましてね、面白い人でした、私の父は。

神 何か新しい物が非常に好きだったとか、人力車とか。

喜 ええ人力車は大好きでした。下谷に居りましたから、下谷で一番の足の早いのが近所におりまして、毎日御用聞きに来るんです。電話が引かるといふと、すぐ電話を引きますし、電気がつくとすぐ電気、それこそもう自動車なんぞ真つ先に乗ったんでしようが、自動車はなかなか高値の花で。千枚描きだなんて、一日千枚描くなんて言つて、健筆会つてのがありました、前田黙鳳つてのがやつてまして。

神 絵の方ですか。

喜 そう、竹を描いてまして、前田黙鳳先生が大将になってましてね。日本美術協会つてのがありましてね、そこでいつでも展覧会して。いつもそこへ行っちゃ千枚描きだなんていつて、本当は千枚なんてとても描けないでしょうけど。新聞広告しましてね、新聞の切り抜き持つてきたらタダで描いてやるなぞ言つて。楽焼をやつてみたり。

神 仕事としては。

喜 篆刻をやつておりました。篆刻やつたり書を書いたり、竹を描いたり、書を書くより竹画く方が早いなぞ言つて。

竹は大変描いて残してあるはずです。

神 よく話をしてましたか。

喜 話は上手でした。それこそ忙しくってしょうがないと言って、じゃあ五分間でお断りだなぞ言って、さあ、話が弾むといつまでも引つ張ってお話してまして。また話が上手なもんですから。神 やっぱり画とか楽焼の話、多かったですかね。

喜 そうでしょうね、それにお付き合っている人が面白い方ばかりですから。話がそれからそれへと弾みます。頭がいいですから、忘れないで。

神 正平先生は寒山和尚とよく話をしましたか。

喜 話してたんでしょう、同じ趣味ですから。

神 篆刻を同じ部屋で刻したりしたのでしょいかね。

喜 滅多にないでしょうね。

神 何か本当にいい和尚だったと、正平先生が文に書いてましたが、そのことに尽きるのでしょいかね。山田先生は竹香老人と寒山和尚とどちらの方が影響を受けてますかね。

喜 さあ、それは、竹香老人の方がいいんじゃないですか。子どもの中から側についているんですから。

神 篆刻なんかは寒山和尚の方に影響を受けているんでしょうかね。

喜 はあ、何しろ忙しく跳んで歩いてますからね、座って教えてるなんてことないですから。

神 家にあまり居なかったんですか。

喜 ええ、滅多に居たことないです。

神 痔が悪うございまして、悪くなると家に帰ってきて寝てました。とうとう痔ろうで亡くなりました。

神 何歳で。

喜 六十三でした。同じ年ですね、正平と。

神 何か因縁があるのかな。

神 寒山和尚亡くなられて、山田先生はよく寒山の事話してましたか。

喜 よく話してました。面白かった事を。

神 部屋は同じ部屋に居ましたか、寒山と正平先生。

喜 家に居ます時は同じ部屋におりましたけど、たいてい留守でしたから、お友達が多いもんですから。

神 じゃあ、夜なんかも帰ってこないで。

喜 そうでもないです。

神 寒山和尚のお墓は。

喜 紀州の二木島という所に、本当は永平寺のお坊さんでしてね。

神 お坊さん修行しまして、その紀州のお寺に埋まっているんです。

喜 竹香老人のお墓は何処に。

神 新潟にあります。

喜 寒山和尚の友達はどんな人が、篆刻の人が多かったんですか。

神 そうですね、絵描きさんが多かったですね。中村不折さんは根岸にいらつしやいましたから、しじゅう遊びにいらつしやいまして。あの方書を書かれますから、書道博物館ってのこしらえていらつしやいます。

神 他にはどのような人、尋ねて来ましたか。

喜 いくらでもいらつしやったんですよ、浜村蔵六、篆刻の、あと：人様の名前忘れるのおびただしいのですよ。

神 お母さんは。

喜 八十いくつで亡くなりました。

神 お母さんはどういう人です。

喜 気の強い人でした。間違った事が大嫌いで、竹香先生の奥さんはやさしい人だったらしゅうございます。竹香先生が片人で、

もうちよつと曲がつた事でもすると、大変叱られて苦労されたようです。

神 正平先生はどちらの影響を。

喜 ……（笑）。

神 寒山和尚と正平先生と一緒に篆刻したことご覧になったことは、画を描いたり、字を書いたりしているところなど。

喜 そんなことはなかったでしょうね。字を書いていることはあつたかも知れませんね。

神 寒山和尚は趣味が多かったんでしょね。

喜 本心に趣味は多ごさんしたね。

神 小川芋銭先生はよくいらつしやいましたか。

喜 下谷に居ります時はね。牛久は上野の駅から行きますからね、よくお見えになりましたです。こちらでもよく伺いましたし。

一番尊敬してました。絵描きさんで。

神 正平先生が。

喜 ええ。

神 正平先生と芋銭先生の最初の出会い。

喜 お友達からでも紹介されたんでしょ。

神 どういう所を尊敬されてたんでしょかね。

喜 立派な方ですからね、本当に立派な方でした。

神 やっぱ曲がつたことの嫌いな。

喜 そうですとも。

神 山田先生はよく芋銭先生について語られましたか。

喜 ええ、芋銭先生の事はよく伺って、小豆かなんかでお酒飲んでらしたとか、よく伺って。

神 家に芋銭先生がいらつしやった時、絵など描かれましたか。

喜 いいえ、家へいらしては描きにならないですね。大急ぎでお帰

りになられて。

寒山和尚の居る時は芋銭先生はいらつしやいませんでしたけどね。下谷の家で亡くなったんですけど、寒山和尚は、下谷の家へ芋銭先生いらしてくださいました。

神 じゃあ、ちよつと立ち寄ってすぐ帰られたんですね。

喜 そうなんです。

荷物なんか預けたりして、ちよつとした頼みものにいらしたりして。

神 中村蘭台先生なんかもよくいらつしやいましたか。

喜 ええ、よく下谷の家にはいらつしやいました。

神 毎日いろんな方がみえたんですね。

何かカップが、芋銭先生はお好きだったんですね。

喜 ええ、カップの傑作が家にあるんです。

神 それは正平先生が頂いたのですか。

喜 ええ。

神 正平先生は、朝起きるとまず何をされましたか。

喜 そうですね、まずタバコを吸って、お習字始めるでしょう。

神 朝は何時頃起きられるんですか。

喜 割に早いんですよ。

神 じゃあ、七時頃には、もっと早く。

喜 もっと早い事もあつたでしょう。

神 夜寝るのは。

喜 夜寝るのはやっぱ早いんですね。仕事の都合で。

散歩が好きでしてね、よく散歩をしてました。

神 タバコを吸って習字して、そして疲れたら散歩に行つて、お風呂に入つて。

神 一日のうちでお習字していたのは。

喜 朝していました。

神 夜はあまり。

喜 しない事はありません、気が向けば。

神 朝から夜までずっと勉強されてましたか。

喜 本読んでいる時はね。

神 机に座って。

喜 ええ、机に座って。建て替えたんですけども、前の通りそのまま作りました。

神 スケッチはずっとされていましたか。

喜 一生スケッチやっていたようなものです。必ず小さいスケッチブック懷に入れて出掛けてました。善福寺も近いですから。善福寺だとか、井の頭だとか。

神 スケッチしている時の様子はどうでしたか。

喜 普通です。

神 鉛筆で。

喜 ええ。

神 色をつけるのは。

喜 帰ってきて旅館で。

神 じゃあ、絵具を持って。

喜 ええ、旅行の時は小さい絵具持って行きました。

神 その他旅行に行く時何を持って。

喜 スケッチブックと絵の具だけぐらいですね。

神 絵なんか特別に学校に行って習われたことは。

喜 写生を習いに行ったことがあります。お友達の所へ行って、モデルが来ると写生して、大したことしておりません。

神 絵は独学で。

喜 ええ、

神 絵も書も篆刻も、すべて独学で。

喜 そうですね

神 絵描くの好きだったんですかね。

喜 ええ、子供の時から好きだったようです。

神 絵の先生といえば小川芋銭先生。

喜 先生といえるかどうか、芋銭の影響は受けてますですね。

神 スケッチ旅行は日本中行かれたんですか。

喜 そうですね。九州なんぞよく行きましたです。

神 汽車に乗っている時、何されてましたか。

喜 汽車の中では本読んでいることありました。写生したり。

神 正平先生は怒られたりしたことありますか。

喜 そうたいして。

神 学生が来てカミナリ落とされたり、怒られたりしたとか、学校で出さない大声で叱られたりとかされたようですが。あまり怒る事はなかったですか。

喜 そうですね。そう、気に入らないときは少し怒りますけど。

神 正平先生の一番の楽しみは何だったんでしょうか。

喜 旅行でもしている時が一番楽しいんじゃないですか。

神 篆刻をやっている時の様子はどんな感じでしたか。

喜 それこそもう側へも寄り付けないような、汗びっしょりかいて、冬でも汗っかきでした。

神 篆刻やっている時に部屋に入ると怒りましたか。

喜 怒られそうですから入らない。子どもたちも寄せ付けないようにして、せっかく印のできかけた時に邪魔しちや悪いと思って。大変な剣幕でした、仕事している時は。

神 音もよく聞こえましたか。

喜 ええ、額なぞ刻る時は大したものでした。

神 大体一つ刻りあげるのにどれ位の時間を。
喜 二日もあつたら出来るんじゃないですか。額なぞ大きい物も、
神 だいたい一日位で出来たんでしょうか。
喜 いっきに刻り上げたんでしょうか。
神 ええ、いっきに。
神 ノミなんかは。
喜 自分で研いでいました。
神 叩くのは。
喜 木槌で。
神 どういうかつこして。
喜 畳の上で座って。
神 木額はどれくらい刻りましたか。
喜 どれくらいありますかね。
神 百くらいですか。
喜 全部で百じやどうでしょうかね。旅行しても刻ってきましたこともありますしね。
神 かなりたくさん。
喜 たくさんあると思います。その内でなかなか気にいらないと割ってしまったります。
神 木額とか印の注文なんかあつたらすぐ刻られましたか。
喜 なかなかそうはいきませんですね。
神 気が向いたら。
喜 ええ、気が向かないと仕事手に付かないらしいですね。
神 山田先生、お茶入れるのが上手だったらしいですね。
喜 ええ、とても上手でしてね、私達が入れたのは気に入らないらしくて。竹香先生が上手で、お茶の名人だったようです。竹香先生はお茶の先生みたいでした。

神 正平先生は学生が好きだったんですね。
喜 そうみたいです。
神 よく展覧会なんか見に行かれましたか。
喜 ええ、よく行っていましたですね。
神 テレビは当時なかったですね。
喜 いいえ、梅蘭芳の時なんか近所へ行つて見せてもらいました。
神 中国の舞楽の、綺麗な人でした。男の人でしたけど。
神 テレビとか映画はよく見てられましたか。
喜 ええ、よく見てました。
神 ラジオなんかは。
喜 いいのがあれば聞いてました。
神 どういったものが好きだったんでしょうか。
喜 いろいろでしたね。
神 今日は貴重なお話し有難うございました。
喜 何のお役にも立ちませんで。

五 おわりに

本研究で紹介した身近な近親者である正平令夫人喜美子やご令嬢梅枝(図5)へのインタビューは、正平の日常の姿を如実に見せてくれている。正平の篆刻にかける厳格さとともに家族へのおもいやりや、親子の交流が見られまことに興味深い。これは正平が東京学芸大学において学生に対した情愛に類似するものである。これらは片言隻語といえども、正平の事績や篆刻観そして人物像を語る上で得がたいものである。ご家族の話から、これまで以上に、正平の篆刻が学問研究と深く結合したものであり、多くの芸術家との交友の中で生み出されていったことが詳らになった。また書巻の気や

金石の気の横溢した珠玉の印が数多く生み出された根本を理解でき
た。



図 5 山田正平ご令嬢山田梅枝と筆者

第八節 山田正平年譜考

附——山田家系図——

一 はじめに

日本篆刻史上傑出した印人山田正平の生涯は、まさに、印に生き、印に没した六十四年の生涯であった(図1-3)。その古意を得た質朴で豪放な作品とともに、求道の精神は、篆刻に志す者のよき指標である。

本節は、山田正平年譜、山田家系図を掲出するものである。

二 年譜を編むうえでの主たる資料・文献

山田正平に関する年譜はこれまで数種編まれている。中でも最も基本資料となるのは、正平自身が昭和三十三年に作成した「自記年譜」(『増補版山田正平作品集』山田喜美子編、木耳社、昭和五十九年七月所収)である。これは原稿用紙三枚にわたりペン書きされたもので、明治三十二年正平の生年から、昭和三十三年正平六十歳まで、かなり詳細なものである。これ以外に、正平自身作成した略年譜が三種類ある。昭和五十九年に開催された「第三回山田正平遺作展」に出陳された「毛筆履歴書」は(図4)、正平の芸術を語る上で、重要な内容となっている。他は覚え書き程度である。

さて、正平は日頃スケッチをすることが多かったが、それにはその時々足跡が克明に記されており、画日記ともいうべきものになっている。これはスケッチブックやノートに書かれており五十数冊

にわたっている。筆者は、かつて山田家のご承諾を得て、詳細な年譜を作成すべく、スケッチ帖、並びに関係資料を複写させて頂いた。これらは年譜作成に欠くことのできない貴重な一級資料といえる。

次に、正平没後編集された年譜がやはり数種ある。『増補版山田正平作品集』(前掲)に収められている年譜は最も信頼のおけるものである。これは、山田正平令夫人山田喜美子、並びに元昭和学院教師関健一、東京学芸大学教授小木太法などにより作成された。また、これと記載はほとんど同じであるが、『一止道人山田正平先生の書簡』(佐藤耐雪著、佐藤耐雪後援会発行、昭和五十四年一月)に年譜が附されている。

これ以前には三種の年譜がある。その一は、伏見冲敬により作成された「山田正平先生略年譜」(『書品』一三五号、昭和三十七年)である。その二は、昭和三十九年八月に中央公論画廊で開催された「第一回山田正平遺作展」(中央公論美術出版、昭和三十九年八月)の時に刊行された図録に附された年譜である。その三は、昭和四十六年十二月に魅丹古美術書道出版会より孔版印刷出版された、東京学芸大学卒業の高橋達郎氏の卒業論文「山田正平論」に附されているものである。

筆者は、正平に関して過去四度にわたり年譜を編み系図を作成した。ここに列記しておく。1が最も詳細なものである。これらの年譜を基に新たな資料を加えて、より詳しい年譜を作成すべく編集したのが本年譜である。



図1 山田正平夫妻

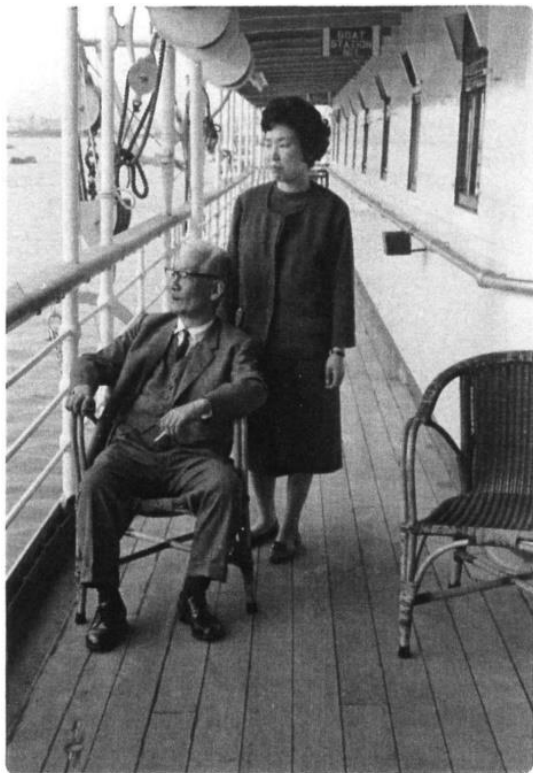


図3 山田正平と梅枝嬢



図2 二松学舎時代の山田正平（中央）

1、山田正平年譜・山田家系図

『増補版山田正平作品集』木耳社、昭和五十九年七月）

2、山田正平年譜・山田家系図

『山田寒山・正平展図録』篆刻美術館、平成四年十一月）

3、山田正平略年譜

『墨』通巻第一五二号、芸術新聞社、平成十三年十月）

4、「山田正平年譜考 附―山田家系図―」

『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として【改訂版】』、創想舎、二〇二〇年三月）

筆者は山田家に遺された正平が描いた画帖日記の書き入れをすべて含んださらに詳しい年譜を用意している。

正平の「金石の気」溢れるペン書きは、それ自体が芸術作品ともいえるもので、実に美しい。田邊萬平は、正平年譜の手蹟のすばらしさを『山田正平先生篆刻講義ノート』の序において次のように識している。

私は翁の篆刻について評する資格をもたぬ。ただ翁の書に現はれた風韻の高さに対しては無条件に頭を下げてゐる。講義ノートのペン字や板書の字に見る刀痕の妙味は、世に謂ふ芸術書などとは全く次元を殊にし、森然たる中に生命の閃光を放つてゐる。翁の履歴書に至っては、感極まって歓声を漏すのみである。

また正平のペン書きの見事さは、佐藤耐雪氏（一九二三～二〇〇一）にもお伺いしたが、氏は御自身書家で、正平先生に師事し、晩年やり取りした書簡を『一止道人山田正平先生の書簡』として、刊

行されている⁽¹⁾。ただこれは、正平の書簡内容のすべてを紹介したものではない。本年譜を作成するにあたり、山田家、山田正氏、岩切誠氏のご指教を得た。

三 山田正平年譜

凡例

一、本年譜は明治三十二年山田正平の出生から、平成二十四年十月に東京銀座鳩居堂画廊で開催された「没後五十年山田正平展」までを中心とした。

一、本年譜は山田正平の年齢を数え歳で記した。

一、山田正平の事蹟・論文・作品については、山田家所蔵品並びに研究文献、資料等により作成し、その出典表記に当っては次のように略記した。

・山田正平自筆年譜―（自）

・スケッチブック・ノート等の画日記―（ス）

・『山田正平作品集』（木耳社、昭和五十九年七月）所収年譜―（木）

一、山田正平刻印における主要展覧会出品作品は、事蹟中に書き入れた。

一、『山田正平作品集』に掲載の作品について、掲載頁を木（頁）として記載した。

一、山田正平の作品については、品質・形状・寸法・款記・印章・所蔵先等を記すべきであるが、煩瑣を避けて最小限に留めた。

一、参考事項については、主として左記文献の年表を参照した。

・小林斗盒編「日中文人歿年表附印籍刊行年表」（一七五〇―一九五五）（『定本書道全集』別巻印譜編、河出書房、昭和三十一年五月）

- ・水田紀久編「日本印籍年表」(『日本の篆刻』二玄社、昭和四十年十一月)
- ・水田紀久編「年表」(『書道全集』別巻Ⅱ印譜日本、平凡社、昭和四十三年十二月)
- ・近藤高史編『明治・大正・昭和書道史年表』(木耳社、昭和六十年三月)
- 一、表記は、新字体と旧字体を併用した。
- 一、山田正平について論及された論文は後出の「引用・参考文献一覧」に載せた。
- 一、別記として、山田家系図を示した。

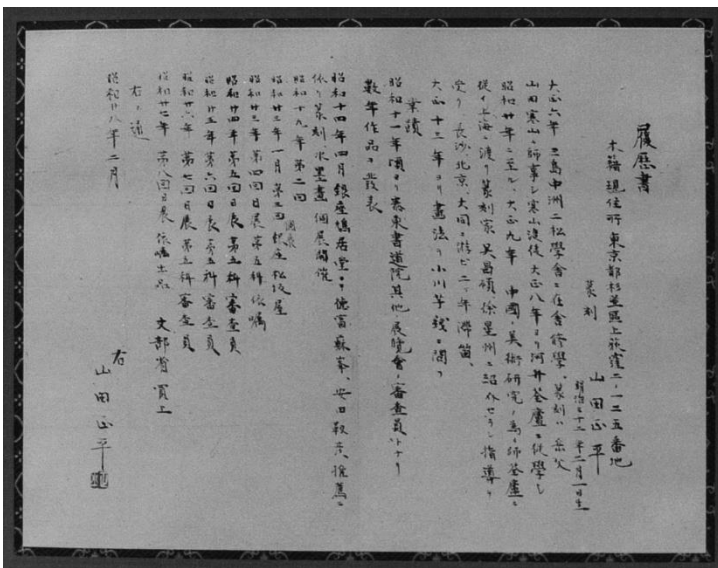


図 4 毛筆履歴書

西暦 年号 西暦	月・日	事蹟	刻印	参考事項
一九〇三 明治 癸卯 36 三	2・1	新潟市古町通り四番町六四五番地に生まれる。父は篆刻家木村政平(号は竹香)、母はマス。父竹香は新潟県白根の田村半平の次男。中井敬所、岡本椿所について篆刻を学ぶ。一人の間に三男三女あり。正平は次男。(木村政平「戸籍謄本」、『北溟』一二号)		四月、十四・十五・十六日と山田寒山の陶友会が尾崎紅葉・巖谷小波・野口寧斎らの主唱で趣町清水谷公園内、皆香園で開かれる。この年、甲骨文が殷虚から発見される。
一九〇二 明治 壬寅 35 二				六月、山田寒山が銀座一目二一番地に寒山寺の開帳式を営む。
一九〇一 明治 辛丑 34 一				二月、山田寒山が向島小梅町に寒山寺を移し、本窯を開く。
一九〇〇 明治 庚子 33 〇				この年、高田忠周が説文会で説文の講義を始める。十二月二日、山田寒山が京都で高芙蓉の墓を再発見する。
一九〇三 明治 癸卯 36 三				秋、山田寒山が新潟を訪れ、木村竹香の需めに応じ羅漢鈕大陶印十九顆に篆刻をする。(木村竹香『羅漢印譜』自序)

一九〇一 明治 庚戌 12 戊辰 43	一九〇九 明治 己酉 11 西 42 九	一九一〇 明治 戊申 10 申 41 八	一九一〇 明治 丁未 9 未 40 七	一九一〇 明治 丙午 8 午 39 六	一九一〇 明治 乙巳 7 巳 38 五	一九一〇 明治 甲辰 6 辰 37 四	
4	4	4	4	4	4		
鏡淵小学校六年級となる。	鏡淵小学校五年級となる。	西堀小学校四年級となる。 (この年、西堀小学校火災のため、鏡淵小学校に転校する編入は五年級からである。)	西堀小学校三年級となる。	西堀小学校二年級となる。	新潟市西堀小学校一年級に入学する。(山内正一私信)		
七月、長思印会創立。	五月、健筆会が、第一回展覧会を東京の美術協会で催す。 九月三十日、中井敬所没。 十月二十六日、伊藤春畝没。 十一月二十五日、五世浜村藏六没。	三月、明治印学会規約を頒布する。 四月三日、木村竹香が行形亭において、羅漢印譜披露並書画煎茶大会を催す。山田寒山来会。竹香居木邨政平『羅漢印譜』を刊行する。	この年、談書会が成立。 この年、岡本椿所・五世浜村藏六・山田寒山・河井荃廬・初世中村蘭臺等丁未印社を設立する。	この年、中井敬所が帝室技藝員となる。	九月、日露戦争終結。	二月、日露戦争が始まる。	この年、会津八一が山田寒山を下谷に訪れる。(会津八一自筆年譜ノート)

一九一五 大正 乙卯 17 卯 4	一九一四 大正 甲寅 16 寅 3	一九一三 大正 癸丑 15 丑 2 三	一九一二 大正 壬子 14 子 1 二	一九一 明治 辛亥 13 亥 44 一
2	この年 この年 12 7 初夏 2	この頃 夏 3	4 11	3 4 13
隸書「中井先生銅像記」(「鳳翥龍蟠」(箱書き)を書く。款記に「大正乙卯仲春竹香二男正平謹写歳一七」とある。(山田家蔵)	前年会津八一より依頼された印二顆を刻す。 上京し、山田寒山の許に寄寓する。(会津先生と私) 竹製の筆筒に「蘇軾の「前赤壁賦」を小楷にて刻す。款記に「甲寅初秋舟江木村正平」とある。(山田家蔵) 『梅檀二葉香印譜』(手控え印譜)成る。封面は山田寒山が題しており、その款記に「大正三年冬至三日題正平君印々」とある。(山田家蔵) 初世中村蘭臺を訪ねたが病氣療養のため面会できず、夫人と面会す。(山田正平「中村蘭臺翁に就いて」『書壇新報』第五一号) 一世岡本椿所に指導を受く。(岡本椿處「私の篆刻道」)	新潟尋常高等小学校を卒業する。 会津八一の訪問をうけ竹印「秋草堂」と石印「獅子宮人」の印二顆を依頼される。(山田正平「会津先生と私」『書品』第七九号) 篆刻を始める。(会津先生と私)	新潟尋常高等小学校二年級となる。 『耕香館畫牋』を模写する。款記に「大正元年十一月正平」とある。(山田家蔵)	鏡淵小学校を卒業する。 新潟尋常高等小学校一年級に入学する。
春日、白文「羸得青樓薄倖名」(模蘇氏印略中之一章大	二月、「獅子宮人」(安藤きよ蔵) 竹印「秋草堂」(安藤きよ蔵)			
一月十四日、楊守敬没。 五月十二日、三島中洲没。 八月十日、西川春洞没。	一月、大正博覧会が開催される。 六月七日、東山一心院において平安印会主催の高芙蓉百三十年忌が営まれる。 六月末、山田寒山、新梵鐘を蘇州寒山寺に送る。	一月五日、山田寒山、富益斎著「印章備正」を校訂刊行する。 四月七日、蘭亭会が東京日本橋俱樂部で開催。九月、大正癸丑蘭亭会が京都府立図書館で開催。『蘭亭印譜』(桑名鉄城編)。 八月四日、中林梧竹没。 九月二日、岡倉天心没。 九月十六日、高芙蓉百三十年祭が東京麹町清水谷の皆香園で修奠され『芙蓉軒私印譜』二〇〇部が複製される。	一月二十八日、談書会が開かれる。 二月、宣統帝が退位、清王朝が滅亡。中華民国政府樹立。	十一月、法書会「書苑」創刊。

一九一八 大正七 戊辰 20年	一九一七 大正六 丁巳 19年	一九一六 大正五 丙辰 18年	夏
8・16	この年	10	山田寒山より白文印「木村正平号亦正平」を刻される。側款に「乙卯夏日寒山」とある。(山田家蔵)
秋 この年	この年	この年	『正気印譜』成る。滑川澹如による序あり。款記に「大正丙辰十月」とある。(山田家蔵) 日光に遊ぶ(「会津先生と私」) 今上陛下の立太子を奏祝して、別製『正気印譜』一部を献上する。(「会津先生と私」)
会津八一より書簡を受け取る。(この後正平が八一より受け取り、現存している書簡は三九通に及んでいる。(山田家蔵) 木額「丘陽樓」(杜甫詩)を刻す。款記に「丘陽樓杜子美戊午秋日邵平作」とある。(山田家蔵作品写真葉書による) 山田寒山没す。(享年六十三歳) 山田寒山の養嗣子として再び寒山寺に入り長女喜美子と結婚する。(木)	京都に遊び『正気印譜』の縁により土田麥僊の知遇を受け、国画創作協会の同人達に紹介される。(「会津先生と私」) 二松学舎に在舎修学する。(毛筆履歴書)	正乙卯春日竹香二男正平篆) 春、朱文「春洋」(山田家蔵) 九月三日、白文「花香竹色」が、九月三日付『新潟新聞』に掲載される。 秋、木印「家傍青山竹徑開」(桜井定市蔵) 十一月、東京寒山寺において、陶印方三寸二分「尊徳学道」を刻す(山田家蔵印影写真葉書による)	九月十日『日本印人伝』(中井敬所輯)。 十一月十八日、初世中村蘭臺没。
十月十日、一世岡本椿所没。	三月、園田湖城「同風印社」創立。 十一月十九日、前田黙鳳没。	十一月五日、円山大迂没。 十二月九日、夏目漱石没。	

一九二二 大正十 辛酉 23年	一九二〇 大正九 庚申 22年		
2・1	初夏	この年	8・9
春	秋	秋	秋
会津八一奈良の歌を数首寒山寺にて書き正平に与える。これは「庚申十二月云々」の小書きのある用箋に書かれている。(自。山田家蔵) 「蘭図」(色紙・墨画)を画く。款記に「辛酉春日正平」とある。(山田家蔵) 小川芋銭より葉書を受け取る。(この後芋銭より、書簡一二通、葉書五通を受け取る。これは山田家に現存する。) 長男朗生まれる。 会津八一、安藤更生、山田正平等はじめての奈良美術研究のため、奈良、飛鳥、室生の地に遊ぶ。(長坂吉和『続会津八一と書』)	中国上海より帰国する。(自) 小川芋銭の来訪をうける。(山田正平「芋銭翁の想い出」草稿、山田家蔵) 「山水図」(掛幅・絹本墨画淡彩)を画く。款記に「嘗遊湖南岳麓山風光不能忘今想起以写、大正九年七月正平」とある。(山田家蔵) 「山水図」(絹本墨画淡彩)を画く。款記に「庚申秋日正平」とある。(山田家蔵) 「故郷晩夏」(絹本墨画淡彩)を画く。款記に「庚申秋日正平」とある。(山田家蔵) 木額「道在爾」を刻す。款記に「庚申秋日正平作」とある。(木一九六頁。山田家蔵作品写真葉書による)	正平の入夫婦姻屈提出する。同日入籍する。(戸籍謄本) 日魯漁業社長堤清六の援助を受け、河井荃廬に随伴して上海に行く。呉昌碩・徐星州に對面する。この時星州より朱文「正平之印」を刻される。側款に「己未冬星州」とある。蘇州・長沙にも遊ぶ。(会津先生と私) 河井荃廬に従学する。(昭和二十年に至る)(毛筆履歴書)	
一月朱文「高橋光威」(小木太法蔵) 「蘇峰」(木64頁)			
一月三日、益田香遠没。大正印会創立。日本美術協会創立。			

一九二五 大正乙丑 12月27日	一九二四 大正甲子 12月26日	一九二三 大正癸亥 12月25日	一九二二 大正壬戌 11月24日	
42	この年	春4 夏5・6 25	11・25 この年	この年
寒山詩「浄緑瓜……」(対聯)を書く。款記に「乙丑二月正平書」とある。(山田家蔵) 「壺図」(掛幅・紙本墨画)を画く。款記に「乙丑四月正平作」とある。(山田家蔵)	国民新聞に徳富蘇峰の「羅漢印譜 山田寒山翁を懷う」が掲載される。(「国民新聞夕刊」) 山田寒山七回忌追善供養のため『羅漢印譜』(一帙二冊)一五〇部を再刊する。(自) この年より小川芋銭に画法を問う。(履歴書)	木額「温泉恭儉讓」を刻す。款記に「癸亥春日正平製」とある。『越後の書』 大同・天津・白河(北京郊外)に遊ぶ。四月六日、九日に大同の石佛寺に遊び、石仏の拓本を取る。(スケッチ帖にスケッチとともに記載あり) 北京を経て帰国する。(自) 次女謙子生まれる。 木額対聯「移華兼蝶至……」(姚合寄元緒上人詩)を刻す。款記に「癸亥夏日正平作」とある。(山田家蔵、作品写真葉書による。関塚墨円所蔵とある。)	岸田劉生の依頼により銅印「岸田劉生」と「劉生」の二顆を刻す。『劉生絵日記』第一巻) 第二回中国遊学。(自) 下谷から巣鴨に新築移転する。(自)	大阪高島屋呉服店美術部に於て「富岡鉄斎展」が開催され、大阪に向う。(木) 御茶の水の川端画塾に通い、油絵を描きはじめる。(木) 木額「飛魚図」白魚武王渡孟津入于王舟」を刻す。款記に「大正十年正平口占」とある。(山田家蔵、作品写真葉書による。それによると孤柳菴五朔蔵とある。)
五月、朱文「月下一群」 「大学過眼」 (堀口すみれ蔵)		九月、朱文「恭字釣人」 (坂口徳蔵)	銅印「岸田劉生」「劉生」 (木六五頁)	
徐新周没。 金文編(容庚撰)。 古籀編(高田竹山著)。 補正朝陽閣字鑑(高田竹山編)刊行。 徐星州没。	八月二十四日、永坂石球没。 十二月三十一日、富岡鉄斎没。	九月一日 関東大震災。	一月二十七日、日下部鳴鶴没。	

一九二八 昭和戊辰 3月30日	一九二七 昭和丁卯 2月29日	一九二六 昭和丙寅 1月28日		
7	6 8 12 27	4 4月頃 この年	4 7・8 8 8 この年	4
群馬県川原湯吾妻溪谷の敬業館に一カ月滞在し木額「敬業館」を刻す。款記に「戊辰七月正平製」とある。(磯部草丘「一止道人を偲ぶ」、本田和宏「山田正平と磯部草丘」) 「吾妻印譜」成る。款記に「昭和戊辰七月游上州吾妻郷谷客窓下乗興作此正平」とある。(山田家蔵)	上荻窪に新築移転する。一止廬完成。(自) 磯部草丘の茅庵で印側を刻す。款記に「丁卯八月正平記」とある。(磯部草丘「一止道人を偲ぶ」) 「八僊印譜」成る。款記に「丁卯臘月正平自題」とある。(山田家蔵) 次男潤平生まれる。	山田正平の刻になる『羅漢印譜』成る。款記に「大正丙寅四月八日」とある。(藤山未吉蔵) 西荻窪の児玉希望の招宴の席で磯部草丘と会う。(磯部草丘「一止道人を偲ぶ」) 「書品」(三五号) 「寅図」(短冊・墨画淡彩)を画く。款記に「丙寅正平試筆」とある。 同画に喜美子夫人による賛「千里同風喜美」がある。(山田家蔵)	木額「緘口勿言天下事……」を刻す。款記に「乙丑四月製於更生居正平」とある。(木額乾拓による。山田家蔵) 青梅街道上井草に移転する。(自) 三女梅枝生まれる。 木額「空山不見人」を刻す。款記に「乙丑八月正平製」とある。(宮澤春城蔵) 木額「随所樂」を刻す。款記に「乙丑八月下流正平製」とある。『いしぶみ』三号、猪俣国雄蔵) 堀口大学の依頼により朱文「月下一群」を刻す。(堀口大学「巖々清峙の人」『山田正平作品集』)	
秋日「堤清三郎」(田上恵一蔵) 「吾妻印譜」所収の刻印(木二一六―二一八頁)	五月下流白文木印「斎藤恒甫之印」(桜井定市蔵)	春、朱文「甫恒」(渡辺秀英蔵) 七月、朱文「羅漢窟」(桜井定市蔵) 「八僊印譜」所収の刻印(木二〇九―二一五頁)を刻す。		
『印文学』(前田黙鳳編、三圭社)復刊。	十一月六日、呉昌碩没。	十一月、藤井有鄰館創立。		

一九三〇 昭和五 庚午5 32	一九三 昭和 己巳4 31	一九二 昭和 己巳4 31	一九三 昭和 己巳4 31
冬	5・9	7	9
「梧竹幽居」(掛幅・紙本墨画)を 画く。「梧竹幽居」と題し、款記に 「戊辰冬日正平製」とある。(山田 家蔵)	花卉画(折り帖、紙本淡彩)を画 く。款記に「昭和四年五月九日幾 庵写」また「更生又署」とある。 (山田家蔵)	「銷夏鉄筆」成る。款記に「己巳 七月」とある。(山田家蔵)	「百日草図」(掛幅・紙本淡彩)を 画く。「百日不厭」と題し、款記に 「己巳九月正平写」とある。(山田 家蔵)
堀口大学に 「日学詩乎」 を刻す。	木額「松浜館」を刻す。款記に「己 巳十月正平製」とある。『越後の 書』	木額「長養」を刻す。款記に「己 巳初冬正平作」とある。(高見寛 爾、後、宮坂蘭州蔵)	「水仙図」(色紙・墨画淡彩)を画 く。「春意」と題し、款記に「庚午 四月初三鑑下読近思録有此語正 平并記」とある。(山田家蔵)
「辛未印譜」 所収の刻印 (木二二九 二二頁)	長嶋北彩に 「華涯」を刻 す。	最明寺十七世寒山和尚の十三回 忌法要のため、養母と共に最明寺 へ向う。奈良・京都・大阪・名古 屋に遊ぶ。(ス)	小川芋銭の推薦による「寒山寺正 平篆刻会」を行なう。この後四、 五年続く。(パンフレット、山田正 平「芋銭翁の想い出」草稿)
五月十六日、石川蘭八 没。九月十八日、満州事変勃 発。	『古靈漢印文字徵』(羅 福頤輯)。六月十五日、泰東書道院 結成。	「生涯落魄惟耽酒客路蒼茫自詠 詩」と題し、款記に「辛未春日正 平并題」とある。(山田家蔵)	「生涯落魄惟耽酒客路蒼茫自詠 詩」と題し、款記に「辛未春日正 平并題」とある。(山田家蔵)

一九三 昭和 甲戌9 36	一九三 昭和 癸酉8 35	一九三 昭和 壬申7 34	一九三 昭和 壬申7 34
6	3	11	8
この 年	この 年	この 年	この 年
木額「花下攜琴見此僧……(高青 邱詩)を刻す。款記に「高青邱詩 甲戌三月正平刻」とある。(山田家 蔵木額の拓本による)	「石榴図」(紙本淡彩)を画く。	「百合図」を画く。款記に「癸酉 七月一止道人并題」とある。(寒山 寺書画篆刻頒布規定)パンフレッ トに作例として載せる。	「夏山遊行之図」(掛幅・紙本墨画 淡彩)を画く。款記に「癸酉八月 一止道人製」とある。(山田家蔵)
「高芙蓉先生百五十年祭」に『高 芙蓉先生遺著一冊』等所蔵品を出 品する。(芙蓉先生百五十年祭展 観目録)	「高芙蓉先生百五十年祭」に『高 芙蓉先生遺著一冊』等所蔵品を出 品する。(芙蓉先生百五十年祭展 観目録)	「高芙蓉先生百五十年祭」に『高 芙蓉先生遺著一冊』等所蔵品を出 品する。(芙蓉先生百五十年祭展 観目録)	「高芙蓉先生百五十年祭」に『高 芙蓉先生遺著一冊』等所蔵品を出 品する。(芙蓉先生百五十年祭展 観目録)
「鑄印姓名印頒布会」を『茶わん』 誌上で行なう。『茶わん』	「鑄印姓名印頒布会」を『茶わん』 誌上で行なう。『茶わん』	「鑄印姓名印頒布会」を『茶わん』 誌上で行なう。『茶わん』	「鑄印姓名印頒布会」を『茶わん』 誌上で行なう。『茶わん』
「趣味銅印の会しるべ」(『書道』 二二二)	「趣味銅印の会しるべ」(『書道』 二二二)	「趣味銅印の会しるべ」(『書道』 二二二)	「趣味銅印の会しるべ」(『書道』 二二二)
白文「火国男 児」、朱文「蘇 峰 古稀以後」	白文「火国男 児」、朱文「蘇 峰 古稀以後」	白文「火国男 児」、朱文「蘇 峰 古稀以後」	白文「火国男 児」、朱文「蘇 峰 古稀以後」
『書道全集』印譜編(平凡 社)刊行。	『書道全集』印譜編(平凡 社)刊行。	『書道全集』印譜編(平凡 社)刊行。	『書道全集』印譜編(平凡 社)刊行。
『篆刻字林』(服部耕石著) 刊行。	『篆刻字林』(服部耕石著) 刊行。	『篆刻字林』(服部耕石著) 刊行。	『篆刻字林』(服部耕石著) 刊行。
一月、泰東書道院編『書道』 創刊。	一月、泰東書道院編『書道』 創刊。	一月、泰東書道院編『書道』 創刊。	一月、泰東書道院編『書道』 創刊。
四月三日、東方書道会創 立。	四月三日、東方書道会創 立。	四月三日、東方書道会創 立。	四月三日、東方書道会創 立。

[illegible]

一九四〇 昭和庚辰 42 15	一九三九 昭和己卯 41 14	
8・19 夏 8・4 10・1	4・4・17 11	3・1・2 7・1・1 9・1・1 10・1 初夏
<p>借楽園にて廣東六榕寺住職鐵禪老師を迎えて清歡する。村松梢風・井上正夫・小杉放庵・古川英治・岡本一平・和田三造・岩村成允・春日井柳堂・吳清源・山田正平らが招待される。(蓼山莊主人「漫談(一四) 鐵禪老師清歡」「茶わん」)</p> <p>木額陰刻「翠扇亭」を刻す。款記に「庚辰夏日一止道人」とある。(秋野光治藏)</p> <p>夜間部 第十一回夏期書道講習会(主催 財団法人泰東書道院、会場 駒本小学校講堂)において「篆刻の知識」の講義をする。「篆刻の知識」を執筆する。『書道』九(十)</p>	<p>第一回「一止道人個展」を銀座鳩居堂にて開催する。(主催 水炭会、支援 徳富蘇峰・安田靉彦)。(毛筆履歷書)</p> <p>「吳昌碩を訪ねる」を執筆する。(「好古」)</p>	<p>小川芋銭を病床に見舞う。(ス)</p> <p>「趙之謙篆書學習法」(一)―(三)を執筆する。『書道』七―七、七―九、七―十)</p> <p>群馬県勢多郡黒根村宿廻の温泉旅館「梨木館」の木額を刻す。款記に「昭和戊寅初夏一止道人」とある。(本多和宏・山田正平と磯部草丘)</p> <p>「篆刻の再興期」を執筆する。(「日本」)</p> <p>第一回北越美術家「清盟会」展覧会に出品する。白木屋美術部5階ギャラリー(北越出身者の美術家展)</p> <p>小川芋銭の通夜に小川家を訪れる。(草稿「芋銭翁の想い出」)</p>
<p>三月、朱文「鳥聲居士」</p> <p>白文「鳥聲居士」</p> <p>主「井上恒也(藏)」</p> <p>四月、白文「糸」</p> <p>「糸」(山田家に印箋あり)</p> <p>夏、保阪三郎に朱文「金陵所得」を刻す。</p> <p>(鈴印控)</p> <p>太田夢庵に「夢庵」を刻す。(木)</p> <p>朱文陶印「壺裏長春」(紀元二六〇〇年記念出版『清真帖』碧山坊刊所載)</p>		<p>二月、白文「菟盒」(清水真一藏)</p>
	<p>一月四日、比田井天来没。</p> <p>一月六日、「己卯印社」創立。</p> <p>九月二十日、服部耕石没。</p>	

一九四四 昭和甲申 46 19	一九四三 昭和癸未 45 18	一九四二 昭和壬午 44 17	一九四一 昭和辛巳 43 16
5 10・10・3 11 24	8・8・18 10 11	6・1 7・15 11・7 この年	3 4 この年
<p>篆書「亘子孫」(色紙)を書く。款記に「甲申五月一止道人篆」とある。(山田家藏)</p> <p>仙台に遊ぶ。(ス)</p> <p>長男朗出征する。(自)</p>	<p>秋 8・8・18 10 11</p> <p>7・7・15 5 13 29 23</p> <p>5</p> <p>2・5</p> <p>1・1・29 28</p> <p>実父木村竹香没(享年七十七歳) 函館に行き竹香の通夜をする。(ス)</p> <p>新潟浄泉寺にて納骨式をする。(ス)</p> <p>書を書く。「間游華頂上」(掛幅、紙本)款記に「癸未五月正平篆於一止廬南窓下」とある。(木一九〇頁)</p> <p>奈良に遊び、秋篠寺に泊まる。(ス)</p> <p>「竹香居追福」の梅木印を刻し始める。側款に漢古語印の句を刻し胡粉を入れる。これはスケッチブックにあるが、その款記に「癸未盆祭正平造」とある。(ス・木二三頁、二三五頁)</p> <p>新潟に遊ぶ。(ス)</p> <p>長男朗徴兵される。(ス)</p>	<p>油彩自画像を描く(山田家藏)(正平油彩画は二点山田家に遺されている。)</p> <p>『大雅堂書画帖』の題字を揮毫する。(編著 青山氏吉、日下部書店)</p> <p>長男朗と塩原・新潟角田に遊ぶ。(自)</p> <p>伊東に遊び、水墨画「鯉漁帰路」など画く。(木・ス)</p>	<p>寒山和尚二十三日忌法要のため寒明寺に参じ、帰路丹司豊山宅に寄寓する。(木)</p> <p>「海福山最明寺全景」(掛幅・紙本墨画淡彩)を画く。款記に「昭和辛巳四月浪華客中正平写」とある。(山田家藏・木一七三頁)</p> <p>「秋篠寺印」を刻し寄進する。(昭和十六年三月十五日付による徹空雪旦の札状、山田家藏による・木一三八頁)</p>
<p>二月、長谷川白田に「白田画印」を刻す。(鈴印控)</p>	<p>二月、白文「齊藤」(渡辺秀英藏)</p> <p>「竹香居追福」の梅木印(木二三四・二三五頁)</p>		<p>日夏耿之介に朱文方印「聰雪廬圖書記」を刻す。陶印「随人呼馬牛」(木44頁)</p>
	<p>六月六日、中村不折没。</p>		<p>十二月八日、米英に宣戦布告する。</p>

一 昭 己 51 九 四 二 4 九	一 昭 戊 50 四 子 23 八	一 昭 丁 49 四 亥 22 七	一 昭 丙 48 四 戌 21 六	一 昭 乙 47 四 酉 20 五	
7 7 2 ・ 12620	10 3 1 1 ・ 1712	11 秋 5 ・ 21 30	10 9 晩 ・ 10 秋	6 3 ・ 28	秋 12 12 11 11 ・ 13 11
老母ツネ没す。(享年八十二歳)己卯印会主催の篆刻展「現代印人展」が三越本店美術部特選室にて開催される。正平は同人。	第三回「山田正平水墨画個人展」を東京銀座松坂屋美術部にて開催する。医大へ入院しヘルニヤ手術をする。第四回日展に「功在不舎」を依頼出品する。(山田家蔵・一二頁)	幸田露伴著『音幻論』(洗心書林)の表紙・内扉の題を刻す。(木二四四、二四五頁) 「八仙図」(掛幅・紙本)を画く。款記に「丁亥秋日一止製」とある。(山田家蔵) 芋銭翁旧居を訪ね、牛久沼附近のスケッチをする。(ス)	木額「随處楽」を刻す。木額裏面款記に「昭和二十一年晩秋山田正平作為白田画房随處楽一止廬」とある。 九州の彦山耶馬溪などに遊ぶ。(ス)	長男朗マカッサル港にて戦死。(享年二十四歳、自) 謙子、梅枝、潤平三人を長野県桐林に疎開させる。(自)	「八仙人」(條幅)を画く。款記に「甲申十一月正平写并泉」とある。②第二回正平作品展写真集③「十六羅漢」(掛幅・紙本淡彩)を画く。「神通妙用」と題し、款記に「甲申十一月一止敬写」とある。(山田家蔵・一七六頁) 第二回正平作品展を銀座鳩居堂にて開催する。 木額陰刻「用管窺天」を刻す。裏面に清水氏による款記「昭和十九年秋山田正平翁書并刀」がある。(清水真一蔵)
「雲光繞青峯」(高橋達郎年譜・木一六頁)	「中川一政」「萬年山房」「陀羅尼」二顆(木、中川一政蔵・七六、七七頁)	五月、朱文「恒」、朱文「祭鳥室」(井上恒也蔵)	三月十日、朱文「毒翁」(清水真一蔵) 「鳥有居」(一止道人丙戌一月(会津八一記念館蔵)	臘月、「会朔」(乙酉臘月正平製)	
十一月六日、呉昌碩二十三日忌記念展観が東京上野凌霄院で行われる。	八月、毎日新聞社主催全日本書道展。十月、第四回日展に書道が第五科として参加する。	三月九日、河井荃廬三回忌が東京芝増上寺で営まれる。	文部省美術展覧会を、日本美術展覧会と改称。十月二十四日、高田竹山没。	三月十日、河井荃廬没。八月十五日、太平洋戦争終結。	

一 昭 辛 53 五 卯 26 一	一 昭 庚 52 五 寅 25 〇				
10 夏 1	10 6 3 3 1 ・ 1 5 2 1	この年	この年	10	10
「篆刻の審査に当りて」を執筆する。③第三回毎日書道展に「白嶽世界」を出品する。(山田家蔵・木一九頁) 第七回日展に「忘牝牡驪黄」を審査員出品する。(木一一頁)	「鉄斎と篆刻」を執筆する。③「三彩」三八号) 越後五ヶ浜に遊ぶ。(ス) 「山田寒山・河井荃廬」を執筆する。④近代日本の教養人⑤第六回日展に「頂門上一眼」を審査員出品する。(木一七頁) 「水滴図」(紙本、墨画淡彩)を画く。款記に「一止道人庚寅試毫」とある。これには、蒼々亭と松下英磨による画賛がある。(山田家蔵) 会津八一より「寒山寺」の扁額を贈られる。(加藤諄「会津先生の書」『会津八一遺墨』東出版)	二月、「秋艸道人」(庚寅二月、正平製)(新潟市會津八一記念館蔵) 三月、小西幸寛に白文「流芳廬」を刻す。(山田家蔵) 「聴雪廬寿印譜」所取印(木二二五―二二七頁) 秋、藤田将文に白文「藤将文」朱文「将文」を刻す。(鈴印控) 赤羽雲庭に「靈芝草堂」を刻す。(木七八―八一九頁)	九月、藤田将文に朱文「将文」を刻す。(鈴印控) 十二月、小西幸寛依頼により「美意延年」を刻す。(山田家蔵・木一八頁) 七月、松井如流に「松井郁印」(如流)を刻す。(木八二頁) 津金鶴仙に「鶴湖鶴仙」を刻す。(木八二頁)	十二月一日、『書品』創刊。	
三月九日、河井荃廬七回忌が墓所京都寺町清浄華院で行われる。四月、「印奴」創刊。					

一九五二 昭和 壬辰 54 27	一九五三 昭和 癸巳 55 28	一九五四 昭和 甲午 56 29
1 春 10 10 11・15	2 4 5 7 10 この年 この年	この頃 10
日本書道美術院展に「和而不同」を出品する。(木二〇頁) 第四回毎日書道展に「觸處生涯」を出品する。(山田家蔵・木二二頁) 『聴雪廬寿印譜』成る。 第八回日展に「應無所住而生其心」を出品する。同印は文部省買上げとなる。(木二五頁) 木額「寿似山」を刻す。裏面款記に「正平製壬辰十月」とある。(山田家蔵写真による) 冬心会に参加する。(これは金冬心の詩を読む会で、この前後数年にわたり、中川一政宅で開かれた。池田古日、真田但馬、中川一政、山田正平、国安芳雄、嵯峨寛、保多孝三らが会員。(ス)	東京学芸大学に提出の履歴書を書く。(草稿) 東京学芸大学書道科講師となる。(昭和三十七年まで「篆書・篆刻」の講座を担当) 木額陽刻「清楽」を刻す。側面に清水氏による款記「山田正平先生所貽昭和廿八年癸巳五月」がある。(清水真一蔵) 「篆刻屑語」を執筆する。(『天地人』第五号) 第九回日展に「好古楽道」を審査員出品する。(山田家蔵・木二六頁) 木額陽刻「茫々大道」を刻す。(太田京子蔵) 鉄斎作「古仏龕図」を模写する。(ス)	大久保病院に入院し、頸部癌を手術する。(自) 第十回日展審査員、作品は病後のため出品せず。(自)
七月、白文 「花竹秀」(木二二〇頁) 九月、「田氏京子」「長春」	二月、白文 「田加禰印」(鈐印控) 五月、朱文 「游雲魚」(太田京子蔵)	
四月二十日、篆刻先賢合同慰霊祭が、日本印章協会主催により東京芝増上寺にて開かれる。	五月二三日、東山一心院で同風印社主催、高芙蓉百七十年忌が営まれる。 『芙蓉先生百七十年忌記念函菖居印譜』。 八月九日、日本印人協会創立。 八月二六日、三村竹清没。	

一九五五 昭和 己亥 34 61	一九五八 昭和 戊戌 33 60											
1・1 6・14	2・5 3・20 8・23 8・29 9 9 10											11・21
「壺柿図」を画く。「清楽」と題し、款記に「己亥歳旦一止試毫」とある。(山田家蔵作品写真による) 山田壽美恵の葬儀に神奈川県長井町へ赴く。(ス)	中川一政より武者小路実篤の篆刻催促のハガキ受け取る。 「画讀の書きかた」を執筆する。 (松井如流編『條幅・扁額の研究』) 喜美子夫人と共に二木島最明寺に墓参し、那智・白浜・和歌山・京都・奈良に遊ぶ。(ス) 京都東山一・心院にて高芙蓉の墓に展墓する。(ス) 「大雅堂と南画」を執筆する。 (『南画研究』一一七) 京都の園田湖城・亀屋良永を訪ねる。また、清浄院河井荃廬居士の墓参をする。(木) 新日展に「瓦礫放光」を評議員出品する。この印は、後、津金鶴仙に譲渡する。(木三三頁)	新潟市「瑞光寺」に建墓の会津八一の墓誌銘を揮毫する。碑側に「昭和三年十一月二一日嗣蘭子建之」とある。(宮川寅雄「印人山田正平」) 「壺、玉葱図」(掛幅、紙本墨画淡彩)を画く。「吉福」と題し、款記に「丁酉歳旦一止試毫」とある。(木一五九頁) オランダ駐日使節団政治顧問高羅佩(ヴァン・グーリック)夫妻を囲む会に出席する。(山田家蔵写真による) 「始めて篆刻を試みる人に」を二玄社によせる。これは昭和四十八年に『書道講座』第六巻『篆刻』に掲載される。	七月、白文「田正之印」(山田家蔵) 九月、朱文「淳子」(杉本淳子蔵)									
七月、久保田大卿に三顆組を刻す。(鈴印控・木八五頁)	三月、白文「一念一植」(山田家蔵) 三月、白文「行雲流水」二顆(山田家蔵) 六月、白文「吉福」(山田家蔵) 幸田文に朱文「文」二顆を刻す。(木一〇七頁) 日本銀行総裁「總裁之印」(木一三三頁) 「墨美社印」(木一三三頁) 「物新人舊」(高橋達郎年譜・木一一頁) 十二月、朱文「京」・太田京子蔵・木一一四頁)											
九月三十日、関野香雲没。 十二月二十一日、北大路魯山人没。	三月二十二日、日展社団法人として再発足。 五月十四日、中国人民対外文化協会の招待で、第一回訪中書道使節代表団出発。(団長豊道春海以下十四名・篆刻家松丸東魚) 六月十八日帰国。											

一 九六〇 昭和 庚子 35 62																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						
-------------------------------	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

一 九 六 一 ・ 1	昭 和 辛 丑 36	一 九 六 一 ・ 1
1 ・ 1	3 ・ 3	6 ・ 25
7 ・ 14	10 9 ・ 11	12 ・ 26
5 ・ 7	5 ・ 17	5 ・ 23
5 ・ 28	8 6 ・ 1620	8 ・ 22
<p>「柿・靈芝図」を画く。「美意延年」と題し、款記に「辛丑歲旦正平試毫」とある。(山田家蔵作品写真による) 東京学芸大学卒業謝恩会にて挨拶する。(『篆刻講義ノート』) 「青野末吉氏追憶」を執筆する。(山田家に草稿あり) 喜美子夫人と共に北海道に遊ぶ。(ス) 円空展を東横にて観る。(ス) 第四回日展に「春秋多佳日」を出品する。(山田家蔵・木四〇頁) 保多孝三、鈴木千秋、綿引千斎の訪問をうける。(鈴木千秋「解説」『保多孝三作品集』)</p>		
<p>二月、朱文「旭香」二顆蔵・木一六頁) 志賀直哉に「志賀直哉」を刻す。(木七四頁) 棟方志功に「棟方志功章」を刻す。(木一〇四頁) 広瀬保雄に「広瀬保雄」を刻す。(木一四一頁) 関健一に「鱗潜羽翔」寫我憂」を刻す。(木六二頁)</p>		
<p>明治大学に「明治大学図書館」を刻す。(木一四一頁)</p>		
<p>四月二十七日、第二回訪中書道使節代表団(团长西川寧以下九名、篆刻家梅舒適)出発。 五月三十日帰国。</p>		

一 昭 和 甲 子 59 四	一 九 八 四 ・ 7 ・ 20	一 昭 和 丙 辰 51 六	一 九 七 六 ・ 10 ・ 10	一 昭 和 癸 丑 48 三	一 九 七 三 ・ 11 ・ 21	一 昭 和 戊 申 43 八	一 九 六 八 ・ 8 ・ 11	一 昭 和 甲 辰 39 四	一 九 六 三 ・ 8 ・ 1510	一 昭 和 癸 卯 38	一 九 六 三 ・ 6 ・ 22	一 昭 和 3 ・ 15	一 九 六 三 ・ 10 ・ 25
増補版『山田正平作品集』(山田喜美子編、木耳社)が刊行される。東京学芸大学芸術館において、第三回「山田正平遺作展」が催される。	『山田正平作品集』(木耳社)が刊行される。 東京新宿区百人町のアメミヤ書廊において『山田正平作品集』(山田喜美子編、木耳社)作品集出版記念として、第二回「一止道人山田正平遺作展」(主催・木耳社)が開催される。	「始めて篆刻を試みる人に」掲載される。(『書道講座』第六巻『篆刻』)	「会津先生と篆刻」(『渾斎秋艸道人』渾斎同人編)掲載される。	「訪中団覚え書き」掲載される。 (『書道』九一三) 『山田正平先生篆刻講義ノート』が刊行される。(編集兼発行 東京学芸大学書道科同窓会硯心会) 追善供養のため「一止廬印存」五〇部を作成し、関係者に贈る(保多孝三題、山田潤平跋)	東京京橋の中央公論画廊において第一回「山田正平遺作展」が開催される。(主催・山田正平遺作展委員会・中央公論美術出版、図録『山田正平遺作展』(中央公論美術出版)が刊行される。 『新潟日報』に「東京で山田正平遺作展 篆刻など五十五点」掲載される。								墓地は、東京多摩霊園二二区一種九〇側三七番にあり、正平自刻印「俱會一處」を拡大模刻し墓碑銘となす(図6・図7)。(木) 第五回日展「慈航普渡」を遺作出品する。(木38頁) 「粥の味と中国」(病床メモより)掲載される。(『古酒』第八冊)

二〇一 平成 己亥 31九	二〇一 平成 壬辰 24二		二〇〇 平成 甲申 16四	二〇〇 平成 癸未 15三	二〇〇 平成 辛巳 13一	二〇〇 平成 庚申 12〇	一九九 平成 壬申 4二	一九八 昭和 丁卯 62七	一九八 昭和 乙丑 60五		
6 4 ・ 23 2	10 ・ 28 23	11 9 ・ 23 17	7 7 ・ 24 21	11 ・ 3	11 11 11 ・ 6 1 6	11 ・ 1	10 ・ 1	7	1 11 ・ 24 3	12 ・ 1	8 ・ 4
新潟市會津八一記念館において「不世出の文人篆刻家 天才山田正平の宇宙展」が開催される。	東京銀座鳩居堂画廊において「山田正平展」が開催される。	茨城県古河市の篆刻美術館において「山田正平展」が開催される。	七月二十一日～二十四日、銀座・洋協アートホールにおいて第二回硯心会書展の併設特別展示「山田正平展」教育者としての側面」が開催される。また、『回顧山田正平―東京学芸大学における教育者としての側面―付篆刻講義ノート』（東京学芸大学書道科硯心会）復刻される。	十一月三日、東京学芸大学において「山田正平先生を語る」シンポジウム開催される。（シンポジスト 小木太法、杉本艸香、塚本虚斎、益子素州、神野大光）	『墨』通巻一五二号において、特別企画山田正平の世界が特集される。（芸術新聞社） 『月刊絵手紙』第七一号において、山田正平文人画が特集される。（日本絵手紙協会） 東京銀座鳩居堂画廊において「山田正平文人画展」が開催される。 『正平文人画』（山田潤平編、日本習字普及協会）刊行される。	『一止道人印譜』五〇部（発行者 山田潤平、木版計良袖石）編まれる。	茨城県古河市の篆刻美術館において「山田寒山・正平展」が開催される。	正平夫人喜美子没す。享年九十一歳。戒名は、慈心院小雨貞美大姉である。	新宿野村ビル五〇階において「山田正平を語る会」が開催される。		

四 おわりに

本節では、山田正平の生涯を、旧稿に新知見を加え年譜として編み正平研究の一端を明らかにした。



図 5 山田正平葬儀

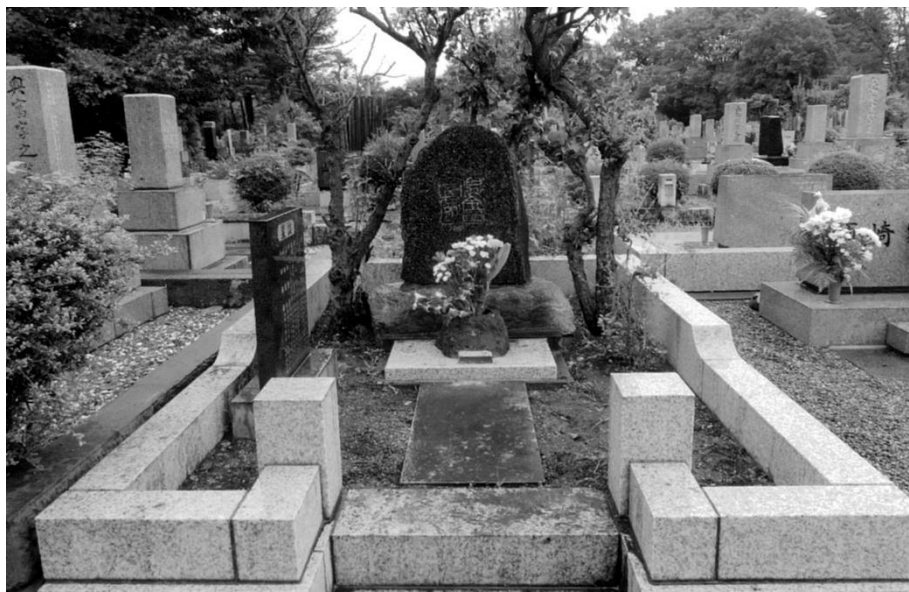
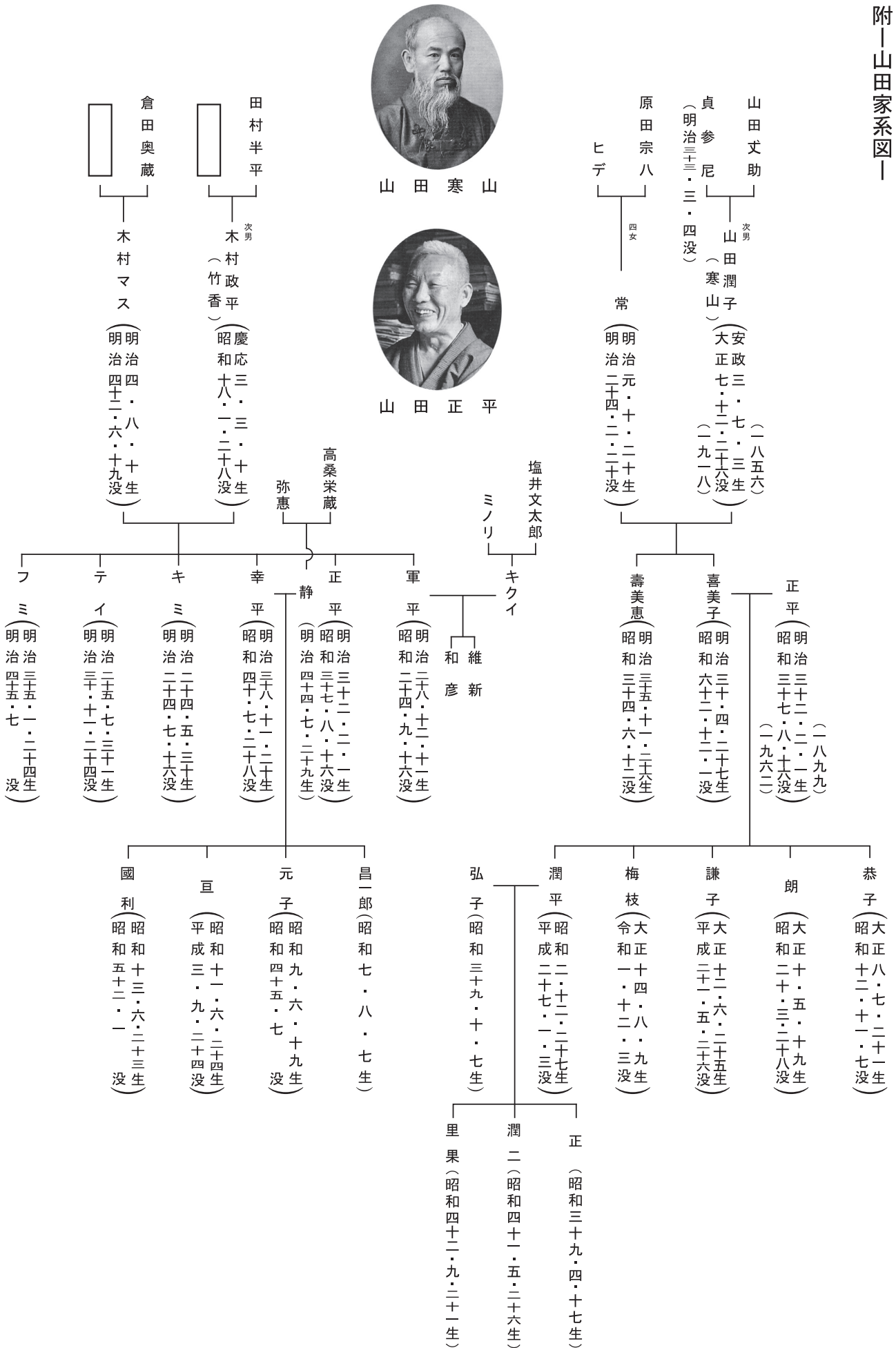


図6 山田正平墓（東京 多摩霊園）



図7 墓誌

附一山田家系図一



第四章 山田正平における教育面からの研究

第一節 山田正平における東京学芸大学での

「篆書・篆刻」の講義に関する一考察 (I)

一 はじめに

本章では、山田正平における教育面からの業績を明らかにした。第一節は、正平における東京学芸大学での講義を受講した学生へのアンケート調査の整理・考察を中心とした。第二節は、『山田正平生篆刻講義ノート』の原本を基に、教育者としての一面について述べた。

筆者は以前、東京学芸大学教育専攻科書道専攻修了論文において「晩年の山田正平」(一九七九年)を(1)、また筑波大学大学院修士課程芸術研究科美術専攻修了論文「山田正平―人と芸術―」(一九八三年)を執筆した(2)。前者は、正平が昭和二十八年から三十七年まで十年間にわたり、東京学芸大学書道科において「篆書・篆刻」の講義を担当したが、当時講義を受講した学生に、アンケートに答えていただき、その回答を整理考察したものであった(図1)。アンケートによる調査を行ったのは、晩年の山田正平のより詳しい事情を知るためであり、多くの正平に実際に接した学生の実感を聞き取るためであった。そして、それがとりもなおさず正平と面会することのできなかつた筆者にとり、彼の真実を知るために、意義のあることと思われたからである。また、正平が教壇に立って篆刻に関してどのように学生に講義したか、それを学生がどのように受け止めた

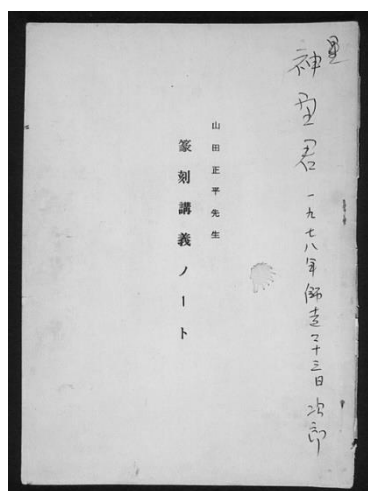


図2 『山田正平先生篆刻講義ノート』
(筆者蔵)



図1 アンケート回答封書(筆者蔵)

のかという点への関心からであった。正平の講義内容に関しては、昭和三十八年（一九六三年）六月『山田正平先生篆刻講義ノート』（以下『講義ノート』と略す）として硯心会⁽³⁾の人たちの手により纏められている（図2）。この『講義ノート』に関しては後ほど触れる。

また、私がこの調査を思い立ったのは、この『講義ノート』の序文にある田邊古邨（一九〇三—一九八〇、書家・東京学芸大学名誉教授）の次の一文によるところも大きい。

翁は秋草道人を敬愛し欽慕し、自分も道人のごとく教育者の道を扱えばよかったと言つてゐた。が、過去十年間、二五〇名の学生に与へた感化は真に偉大である。翁は遂に大教育者たることを得て、秋草道人の跡を追ふたのである。

確かに正平翁は芸術家であつて通常の教育者とは質を異にしている。しかし、当時講義を受講した学生のアンケートを熟読するにつけ、現在私たち教壇に立つ者が、忘れかけている教育者としての基本的な姿勢を教えらるような気がしてならない。一人の稀有なる芸術家が行つた教育現場での講義を通して、私たち教育者が心しなければならぬ「書道を通じて何を、どのように、そして何のために教育するのか」という課題を考える一助にしたい。

二 講義内容

1、東京学芸大学への出講の経緯とその講義内容の一端

かつて筆者は、山田正平令夫人に正平の事績に関して、伺つた⁽⁴⁾。ここで、東京学芸大学での出講の経緯とその講義内容等、大学に関

係する箇所を引用する。

宮 大学へ講義に行つて家に帰つてきた時、何か大学生のことなど話しませんでしたか。

喜 アルバイトして困るつて言つてました。アルバイトするのが一番気に入らない。

神 学生は勉強しなきゃいかんという感じでしたか。

梅 遊ぶためのお金を稼ぐのにアルバイトするのはけしからんと、昔の人の考えじゃないかしらね。

喜 伊東先生は大変弁解してらっしゃいました。アルバイトしなきゃ学生は生活できないつて。

アルバイトして首が足りなくなると、先生方が一緒に出てきて後に座つてらっしゃいました。

梅 先生稼業に慣れてないから全力投球で学校へ出かけていったから、生徒さんが少ないと、がっかりしちゃうんじゃないでしょうかね。

喜 参考書をもういっぱい持つて、よくあんなに持てたもんだと思います。いっぱい持つてお出かけしました。

神 準備なんかも時間かけて。

喜 時間かけました。

梅 そう準備が大変みたいでした。一日終わつて帰つてくるとくたびれちゃつて。その日は仕事にならない感じでね。

神 そうするとやっぱり一つのことに力が抜けない人でしたんでしようね、やり始めると。

梅 慣れてないからでしょうね。だんだんと年数が経つ間に楽しくなつてきたんでしようね、学生さんを教えることが。だから、死ぬ時も学校は辞めないぞつて言いました。続けたいつて。

神 学大に来られる時、田邊先生からお願いされたと聞きましたが。
梅 なんかそのようでしたね。

喜 長い間せつていらつしやいました。

神 田邊先生とは親しかったのでしょうか。

喜 さあ、めつたに伺ったことはなかったようですけど。

神 話をよくされていたような事を『篆刻講義ノート』に書かれていたようです。

吉田先生から伺ったんですけど、田辺先生みたいないい方がいらつしやるから学大へ行く事になったと聞きました。

喜 ああそうですか。

次に、正平と交流を持った大東文化大学教授伏見冲敬の、正平の講義に関わるインタビュー談話を引用する(5)。

伏見冲敬 大東文化大学教授

年月日 昭和五十七年九月

場所 伏見冲敬宅

正平先生は、大学で学生は分かっているのか、分かていないのか分からないと悩んでいました。『篆学叢書』の一冊の中に「ソウケイ」という一節がある。これはどういう意味なんだろうって言うんです。深みのある力強さをいつているんでしょうけれど。荘子かなんかの「天の：」澄みきつた空を「蒼」という。日本語の「青」というと黒馬のことを青という。陶器の場合は「翠」という言葉があります。「翠」とか「緑」というのはね、非常に難しい。

2、講義への下調べ

山田正平は、「週一度の講義をするために少なくとも三、四日はその準備に費やすよ」と東京学芸大学教授の伊東参州に冗談まじりに語られた(6)。これに関しては正平の令夫人からも話を伺い、講義までの準備に相当の時間を割かれていたことが事実であることを確認した。また、当時、某学生が講義の前日正平翁の家を訪れた時、部屋中に講義用のメモが散乱していたということも知らされた。事実篆刻の実技に入り、姓名印を刻す時、翁自身が文字調べをした印稿を書き持参されたが、実に丁寧なものであったという。

以上のことは、翁の講義に取り組む真摯な態度が窺える逸話といえよう。

3、『山田正平先生篆刻講義ノート』紹介

『山田正平先生篆刻講義ノート』は、山田正平が東京学芸大学で講じた講義の下調べのノートを、書道科同窓会「硯心会」の有志が纏めたものである。

『講義ノート』は、正平が自身の覚え書きとして書かれたメモと、受講生のノートを基として東京学芸大学書道科同窓会である硯心会の人達の手により出版されたものである。『講義ノート』の出版は、正平翁の令夫人の申し出により計画されたと伝えられるが、正平没後すぐ出版されたため、今となっては彼を知る上においてかけがえのない資料といえる。

『講義ノート』の序文は、田邊古邨が書いている。跋には、伊東寿「遺稿に学ぶ」、鈴木武夫「山田先生と吉福の雅印」、吉田繁「思ひ出の断片」として、在りし日の正平翁を偲んでいる。『講義ノート』の内容は実に多岐に亘っており含蓄に富む。これは、正平が書かれた文章として最も纏まっているものであり、正平研究にとっては欠かせないものといえる。

次に表題を拾ってみる。

○文字の発生と発展 ○孫海波 中国文字学 ○六書六義 ○漢字考 ○印字及び印について ○印の起源 ○唐以後の印 ○徽派 浙派 ○印人について ○日本の印と篆刻 ○印人について ○明治の篆刻 ○篆刻法(一)(二) ○篆刻用語解説 ○参考書 ○印譜について ○秦漢の印を最上とする理由(一)(二) ○印の本質(一)(二) ○篆刻・書道 ○篆刻と書道、書と美術についての考察 ○中国に遊ぶ ○学生に与へる言(一)(二) ○書論(一)(二) ○神奇 ○綢繆 ○筆のこと ○篆書の話 ○一点一劃 ○学生の篆刻感想に対する評 ○画法寸感 ○俳画の描き方 ○露の字 ○天と地 ○書画のこと ○氷炭道人 ○松方コレクション ○長嶋北彩 ○学芸大学に第七回の卒業生を送りて ○学芸大卒業謝恩会席上 ○日中文化交流

以上のように表題のみからも、正平の学識の深さ、広さがみてとれる。本節は『講義ノート』を参考にしたところが多い。

4、講義の展開

実際に正平の講義がどのように行われたかみてみたい(図3)。これに関しては、二十数年前のことに遡らねばならないために不明な点もあるが、アンケートを通し概略を次に述べてみる。

- (1) 篆書・篆刻の歴史についての講義
- (2) 印人についての講義
- (3) 篆書実技(権量銘などの臨書)

- (4) 模刻(漢印や清人の印などの模刻)
- (5) 姓名印制作(翁による範刻)
- (6) 学生の刻した印に対する補刀と批評
- (7) 作品提出(翁が講評を書かれ返却)

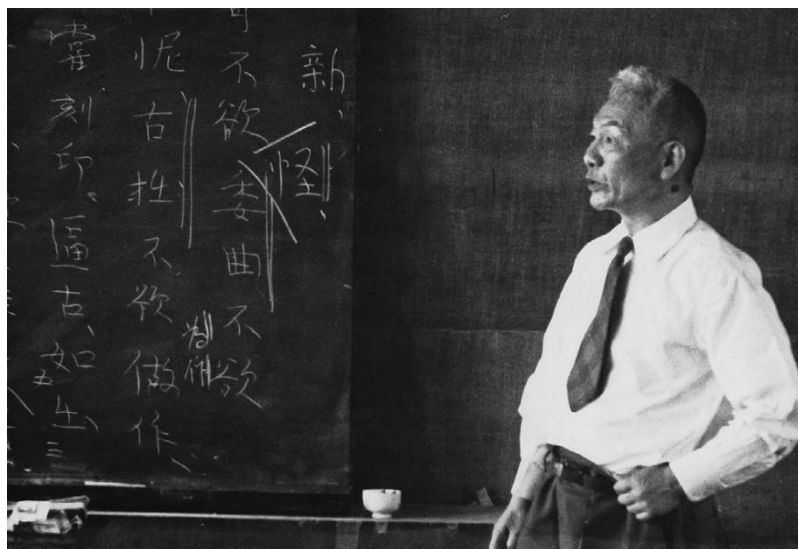


図3 講義中の山田正平

教材は、西川寧他の編集になる二玄社から出版された旧版『書道講座 5 篆書・篆刻』(一九五五年九月)が用いられた。

ここに述べた講義の展開は、あくまで概略であり、また毎年講義の展開が同じであったわけではない。ある年には、一時間目の最初

の講義の時に印を刻された事もあるらしい。添削や批評に対する時間配分もまちまちであり、ある学生に対しては、長時間にわたり印を眺めておられたこともあるらしい。翁の講義は、その時々状況により自由奔放なものであったようである。そして、理論的な講義よりも、むしろ実技に重点が置かれた。模刻印の原印の選択も、学生の自主性を重んじ特に指定される事はなかった。

もう一つ触れておかねばならない事は、正平は講義の時は必ず講義に関する資料を持参し学生に見せた事である。たとえば説文の話やをされる時は、説文に関する字書を、印について話をされる時は、著名な印人が刻した印や印譜を持参した。印材の話の際は、印材の欠片を持ってきて学生に刻させたこともあるらしい。ただ講義の上で話を終わらせるのではなく、実物に即しての講義、指導であった。そのため学生にとって印象深いものがあつた。

5、提出物に対する講評

正平は、学生が提出した印影とレポートに対して逐一講評を書いている。その一部が翁の覚え書のノートに残されている。まず評価をつけ、その後に講評をした。

○テニスを初めて試みた時に感じしを、篆刻を初めて習った時
と思ひ合わせての芸のむつかしさの感想はよろし。印の妙味
を一般の人にも理解させたい。そして篆刻はやはりその時代
時代に順応した芸でありたいとの希望を述べる。印もよし。

○篆刻三法について（重字）疑問点とのこと。「子々孫々」、「桂
林」を「桂」木、「春」易を「春易」とするを不可とする
人と可とする人とあり如何。刀法、篆刻三法について詳密の
省察と古人の言論を引證しその努力見るべし。

○起筆と終筆と潤所と密所、密所ウント密に、緊密と寛綽の照

応、辺に逼るところは充分に逼る、転折の所含蓄あるべし。

6、板書について

正平は黒板への板書が不得手であつたようである。それはチョークが折れてしまい文字にならなかつたからである。これはチョークが印刀のように堅いものでないにもかかわらず、印刀で印を刻すような調子で文字を書こうとしたからである。田邊古邨が、正平にチョークを使つての書き方のコツといったものを話し、その後あまり折れなくなつたという。ここに古邨が「篆刻家の板書」という一文を書いているので引用してみる。

板書として天下一品のものであるから、本紙に転載して、読者の鑑賞に供したいと思ふ。この板書のチョークの動きを見ると、直ちに篆刻家の筆跡だといふことが判るだろう。

第一の特徴として、起筆部でチョークを深く突きさしてある。刀なら石に喰込むだろうが、チョークを突き刺しても黒板に喰込むわけではない。しかるに突き刺してある。これがいかにもおもしろい。おもしろいだけではない。これがすべての用筆の基本なのである。

突き刺して引くから送筆部が浮かない。却て送筆が盛り上がつて力が充実してゐる。「圓」の第一畫や「方」の第二畫にその面目が躍如としている。

第二に、直線と曲線との調和がおもしろい。チョークのやうなものでは圓く書かうと思えば楽に書ける。しかるに楽に書いてゐない。「篆」の腰部や「方」の第三畫に見る直線的な屈折の妙味は、篆刻の刻法そのまゝである。

第三に真情を盡している。一點一畫にも翁の呼吸と神経を通

して、翁の人間が素直に現れてゐる。その風韻に至っては現代稀に見るものであらう。

書だけ習つてゐても書のよさは出ない。学識を高め、品性を養ひ、真実にして高雅な人間にならなければ、かかる書は書けないだらう。

『書友クラブ』日本書道教育学会、一九六三年一〇月

学生の中に翁の板書を臨書したという人がいた。確かに、ここに掲げた板書の写真を見ると納得させられる。事実、この写真も某学



図4 板書「権量銘」

生が板書の魅力にひかれるままに撮影したものである(7)(図4)。文字が実に生き生きとしており躍動感がある。ここには翁の文字に対する真摯な態度が見られ、たとえ黒板の板書の文字といえども安易に書くということを許さなかったであろう。

三 学生のみた山田正平

アンケートは、数項目の設問を課したが、本節では、最も重要な三項目に限り提示し紹介する。

- ① 大学で山田正平の講義を受けて印象に残っていること。
- ② 個人的に山田正平に接して印象深かったこと。
- ③ 山田正平から講義を受けたことを現在どのように考えているか。

① に対する回答

○先生の所に学生が自分の刻した印を持っていきますと、それはそれはじつくりと見られた。その目は厳しく怖かった。

○大人の風格の横溢している中、どこかに村夫子たるところもあった。

○マイペースのご授業で、ある程度の受け入れ体勢がないと理解出来なかった様に思う。しかし、教壇に立っておられるだけで、その篆刻の大家としての風貌が何とも力強く大きく感じられ、いつもその気魄に打たれた。

○正直な方で学生のエンピツを無意識にポケットへ入れられてしまつて帰られ、暫くして(一、二週間後)気がつかれ謝って返されたことがあった。

○視線はいつも遠い一点か、沈黙思考の状態でポツポツと内容を煮つめたエキスの部分だけを口にされた。

○講釈については、サボっていたため殆ど記憶にありません。只、強烈な印象として残っている事が一つだけあります。それは私達の前で実際に印を刻された時の事です。世田谷校舎の書道教室、七分位の印、二・三〇分も要したでしょうか。玉の汗をかきながら印面に対する集中力、気魄、最後にフツと一ふき、印をついた時のすばらしさ、今でもその時の様子が髣髴として現れます。

○チョークを持つ手は執刀と同じで、黒板にたたきつけるように書きましたから、チョークが折れてばかりであまり板書はしながらなかった。

○物事の真実をずばりと見ぬかれ、それを装飾なく単刀直入に言葉を選ばれて話される朴訥な人。

○先生のお人柄そのままの何の衒いもなく飾ることもなく、朴訥として越後人特有の、講義の流れで、自分の刻印を見せ、私達に何かを発見させる様な講義でした。例えば、「ここはどう刻みますか」。そうですね。うーん。良いでしょう。方寸の世界が分かれば……」という調子でした。

○一言一句に全身の力をふりしぼって言葉にしていた。先生が力をいれればいれるほど我々には分かりにくかった。訥々としたその話し方は不器用そのもので、先生の誠実さのみが強く心を打った。講義は程度が高く我々には分かりにくかった。

○実技指導の際の印象が鮮やか。息を止め、満身の力を込め（当時の私にはそのように思えたのだが）不器用窮まりないといった風情、刻された線の見事さに啞然とさせられた。

○ある人が不真面目な習作を差し出した時、烈火の如く怒った様は、すさまじい気迫と、芸術に対する信念を窺い知ることができた。

○講義には『書道講座』を使ったが、「この一冊の本を読みきることだって大変なことだ」とおっしゃられた。

○「女は力がないから一度で刻することはむずかしいけれど、人を殺すのにその方法はいろいろある。要は殺せばよい。メッタ切りにする方法だってある。而し一度で殺せれば一番よい」

○「印は宇宙ですよ」ともらされた。

○出講の日は大学の教官も揃って聴講しておられた。「石はいいものです。黙っているようだけど私に語りかけてきますよ」と、第一回の講義の日、寿山石を手にして誰にいうことなくぼつりと言いわれた。古武士のような風貌が私には忘れられない。

②に対する回答

○自宅を訪ね「彫った文字に毛筆書の個性が現われるものですね」と言ったところ、教室では出ない様な大声で、「馬鹿者！筆と刀とは同じだ」と言われた。

○「作家は、常に仕事が生命である。制作に対して、いつも感激をもって向かわねばならぬ、どだい、だんだんと年がいくと、感激がないのに仕事をする、技術だけが上達する。いわば、それもマッネリズムに陥り、やがては、作品も、形だけが残って魂が入っていない、ぬけがら同然の作品になってしまう。これには、ただ、自分のやっていることに全力を集中する。書なら書、画なら画というぐあいに、やりたいことに熱中する。これが実に大切なことで、二度と来ないこの今を生かすためにも、感興の湧いている時というものは、なかなか少ない。零度に冷えた水を、百度にするのは容易でないからね」これも制作に関する話だった。

○作品に押す印がなく先生の家におじやましてお願いしたが「良寛など印を押したものがいいではないか。要は作品がいいものであれば印など押さなくてもよい」といわれた。

○正平翁の家に伺った時、小川芋銭のカップの絵を見せて下さり「こ

れは女のカップか」と冗談を言われ、学校ではみせられないユーモラスな一面もあった。

③に対する回答

○先生のお話が苦しい時思い出され勇気を与えられている。

○最近篆刻を始めました。作品集等を眺めて只驚嘆するのみ。僅かな期間でしたが先生の教えを受けた事が心の支えとなり、又、誇りとなっている。

○好運だった。忘れ得ぬ人はそう多くはない。本物の人間は（ある一時の場面からでも）一人の人間（あるいは多くの他者）を決定的に動かす。

○みつめるだけの時間でした。お役に立たず申しわけありませんが、みつめる時間が私にとってすばらしい時間でした。形あるものは何も残っておりませんが、先生の生き方を垣間見ましたことは、私にとって「対象にどうたちむかうか」という姿勢を学んだことになるのです。

○山田先生という暖かな、そして謙遜で、ご自身には厳しい方で、いつも深いものを見つめている、そんな感じがしました。折り目正しく近よりがたいようでいて、ふっと面白いことをいってこちらの気持ちを解してくれるような、暖かい感じがしました。よくは覚えていませんがきっと子供のような清らかさのようなものを先生に感じていたかもしれません。

○初めて知る印の世界が、どこまでも深く広いものであるかをいささか思い知らされた。

○印の見方、美しさを通して、書・絵その他の芸術の共通した心を教えて頂いた。

○本道を歩む作家の真の姿に接し、また、身を以て示す教育者とし

ての先生を拝見できたことを光榮に思っている。

○芸術することを専門とする作家に直接触れることができたことは、その後の自分の芸術活動の大きな指針となっているように思え、幸せに思っている。

アンケートでは、さまざまなエピソードが寄せられ、正平の人物像を目の前に彷彿させられる。受講生たちは正平の人物を評するのにいろいろな形容を用いており、一言で言い表しきれない人間としてのスケールの大きさがあつたようである。彼の言葉は含蓄のある奥深いものであるが、これはすべて正平の体験を通しての言葉だったからであろう。芸術教育における一つの要諦といえよう。身を以て芸術への感性を高めることを指導し、豊かな情操を養う教育の大切さを示した実に得がたい教育だったといえる。

四 おわりに

これまで述べてきた、山田正平が行った東京学芸大学での講義と、現在の高校学校芸術科における教育とは、自ずから性格、目標、内容も相違している。しかし、教師における大切な条件として挙げられる、教育に傾ける熱意や、教科へのたゆまざる研鑽はなんら変わるところがないであろう。前にもことわったが、正平翁は芸術家であつて通常の教育者には当たらない。しかし、回答の中で多くの人達は、「翁の講義は実に分かりにくいものだった。しかし、翁の懸命な姿がみられ、芸術に対する情熱がひしひしと伝わり、翁には威厳があつた」と述べている。確かに、技術的には優れた講義をする教師は多くいるであろう。しかし、単なる技術偏重の形式的な講義よりも、全身を傾けて行う講義の方が、はるかに教育効果が上がるの

ではないだろうか。当時講義を受けた学生は、二十数年経ても今なお正平のことを思い出し、尊敬もし、講義を受けたことへの誇りさえ抱いている。これは形式的な講義でできることではあるまい。正平の豊かな人間性、篆刻に傾ける情熱、教育に対する真摯な態度、そういったものが学生に深い感銘を与えたに違いない。私たち教育に携わる者にとって、一人の芸術家が残した熱意あふれる教育の足跡は、学ぶべき点が多いのではないだろうか⁽⁸⁾。

尚、本節を執筆するにあたり参考にした文献・資料を紹介しておく。⁽⁹⁾

【注】

(1) 山田正平の講義を受講した学生に対して講義内容に関してアンケートを依頼し、集計・考察したものである。

(2) 山田正平に関して、実績をはじめ、その人と芸術に関して総合的に研究したものである。

(3) 東京学芸大学教育学部書道科の同窓会

(4) 第三章 山田正平研究 第七節1 「山田正平周辺の人々とその交友3 周辺の人々とその交友Ⅲ」 正平令夫人へのインタビュー談話による。

(5) 第三章 山田正平研究 第七節2 「山田正平周辺の人々とその交友1 周辺の人々とその交友Ⅰ」 伏見冲敬へのインタビュー談話による。

(6) 第三章 山田正平研究 第七節3 「山田正平周辺の人々とその交友2 周辺の人々とその交友Ⅱ」 伊東参州へのインタビュー談話による。

(7) 東京学芸大学書道科卒業第十一期生の益子明達氏は、山田正平の板書に感動し、写真におさめた。

(8) 拙著『書写書道教育論考』（創想舎、二〇一五年三月）

(9) 『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説』芸術編 文部科学省（教育図書株式会社、二〇一九年三月）

・『高等学校芸術科書道指導資料・鑑賞編』（文部省、一九八一年六月）

・『書写書道教育研究』創刊号〜第三五号（全国大学書写書道教育学会、一九八七〜続刊中）

・加藤達成監修『書写書道教育史資料』（東京法令出版株式会社、一九八四年）

・久米公著『書写書道教育要説』（萱原書房、一九八九年一月）

・富田富貴雄著『史的観点に基づく書写教育の研究』（大学教育出版、一九九六年六月）

・海後宗臣等編『日本教科書大系・近代編 第二七卷（習字）』（講談社、一九七八年十二月）

・井上敏夫編『国語教育史資料』「第二卷教科書史」（東京法令出版株式会社、一九八一年四月）

・『国語科教育学研究の成果と展望』（全国大学国語教育学会編著、明治図書、二〇〇二年六月）

・『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』（全国大学国語教育学会編著、学芸図書、二〇一三年三月）

・『明解書写教育』（全国大学書写書道教育学会編、萱原書房、二〇一七年四月）

・『美術館における古美術鑑賞の実践』（出光美術館、二〇〇六年三月）

・下田章平・齋木久美「高等学校芸術科書道における鑑賞指導とその展開」（茨城大学教育実践研究）第三二号、二〇一三年十一月）

第二節 山田正平における東京学芸大学での

「篆書・篆刻」の講義に関する一考察(Ⅱ)

一 はじめに

かつて筆者は、現代を代表する篆刻家である山田正平についての調査、研究の一環として「山田正平における教育者の側面―東京学芸大学における「篆書・篆刻」の講義を通して―」⁽¹⁾と題して執筆した。『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として―』熊日出版、二〇一七年)⁽²⁾。初出は「山田正平における教育者の側面―東京学芸大学における篆書・篆刻講義を通して―」(『第二三回全日本書写書道教育研究会―北海道大会研究集録―』全書研北海道大会事務局、一九八二年八月)である。正平の講義を受講した学生に、アンケートを依頼し、その結果を纏め考察を加えたものである。その中で「提出物に対する講評」について述べた。

正平は、学生が提出した印影とレポートに対して講評を書いている。その一部が翁の覚え書のノート⁽³⁾に残されている。学生によるレポートを書き写し、講評・評価をつけたものである。

正平が東京学芸大学で講じた講義用のノートやちらしなどに書かれたメモは、東京学芸大学書道科同窓会「硯心会」の有志が『山田正平先生篆刻講義ノート』として纏めている。これまでに二回に亘って刊行されている。

本節では、第四章第一節の考察を踏まえながら『篆刻講義ノート』

の、原本のノートを丁寧に見直すと共に、適宜関連の資料を併せて提示し、彼の教育者としての一面の再考を試みるものである。また、ノートの現物で重要と思われる個所を翻刻紹介し、若干の考察を加える。

二 『山田正平先生篆刻講義ノート』概観

ここで『篆刻講義ノート』について改めて触れておきたい。『篆刻講義ノート』は、東京学芸大学書道科同窓会硯心会の有志の手により、昭和三十八年(一九六三)六月二十二日刊行された。

まず「編輯後記」を引く。

草稿は文字どほり、山田先生が御自身の覚へとして書かれたメモであって、その読解、整理、清書には非常に多くの時間と眼とを必要としたが、なほ浅学の故を以て、山田先生の高邁なる意向には及ばず、本意ならずも先生の不朽の名を犯したる所少なからず。ここに山田先生天来の叱声を頂戴し、併せて諸兄の明察を請はんとするものである。

記

○先生の御遺稿と卒業生のノートを基に企画したものであるが、結局先生の御遺稿が主になったことは心残りである。

○篆刻と云ふ難解な分野であつた事と、至らない知識内の編輯である為に、充分なものが出来なかつたが、稀見の芸術家山田正平先生の追憶と、篆刻研究の一材料となれば幸甚である。

○先生の御遺稿には、無題のものがあつたが、読者の利便を思つて、かりに名を附したものである。

○先生が引用されたと思はれる漢文については、出来得る限り原本にあたり、及ばずながら読点を附したが、尚諸兄の識見により少補を要する所あらん。

○用字法の仮名遣ひは、原則として旧に由つたが、字体は已を得ず新旧併用す。

○文中、□の印は先生のノートの終に判読能はざりし箇所なり。

○篆体を以て書かれた字は、後で手写によつて入れたものである。

○山田先生の口述の風は、耳に咄なるものであつたが、今にしてその意の幽深なものであつた事を知る。諸賢その意旨を逸することなく、味読せられたし。

田邊古邨の「序」は同著出版の事情に触れているので掲げる(4)。

山田正平翁の一周忌が近づく。昨秋来、硯心会委員の手で編輯を続けてゐた翁の遺稿の整理がまとまり、いよいよ印行の運びになつた。一日、平賀・近藤の両君来り、草稿の下見をしてくれといふ。数箇所を拾ひ読みして、これは容易ならぬことだ

と思つた。遺稿といつても、大学書道科での講義ノートである。ノートを見ると、翁自身の心覚えに書き陳ねた短文が多く、中には項目だけのもの、術語だけのもの、古文獻だけのもの、引用文と翁の意見とが混線してゐるものがある。これを読者に理解してもらふためには余程手を加へねばならぬ。しかし、手を加へてしまつては、翁の体臭を失ひ、翁の語氣を損ずる。読者はこの遺稿の中から翁の論理を知らうとは思ふまい。在りし日の人間山田正平翁に直接触れることができれば、それでよいのではなからうか。さう考へて、極力原文を存しておいた。編輯委員の判断は正しいと思ふ。(後略)

昭和三十八年四月一日 桃李咲き満つる時 田辺萬平識

この中で、原稿の校訂に携わつた東京学芸大学名誉教授の伊東寿は「遺稿に学ぶ」と題して、次のように述べる。

(前略) 昭和三十一年であつたと記憶するが「僕は話が下手でね、あれで学生に判るだろうか」と漏らされたことがある。専門的で時には飛躍があるので、篆刻に関する一般教養が乏しい学生諸君のうちには了解に苦しむ点もあつたようだ。しかし大学における芸術教育はそれでも良いのだ。其の芸術の習得は悟道にも通ずるからである。流れる汗を拭きながら訥々と講義をされたあの真剣な温容が今も眼前に浮ぶ。私はこの珠玉の遺稿を手にして自己の無能と不勉強を恥ぢて長嘆息せざるを得なかつた。

その後『回顧山田正平―東京学芸大学における教育者としての側

面―付篆刻講義ノート（復刻）』（東京学芸大学書道科硯心会 平成十六年七月二十日）として再刊された。

また、平成十五年十一月三日、東京学芸大学において、東京学芸大学書道科同窓会の主催による「山田正平先生を語る」と題するシンポジウムが開催された。杉本淳子、益子明達、小木良一、塚本宏、神野雄二の五名がシンポジストとして発表した。

復刻版の編集にあたった岩切誠氏の「あとがき」に、

○山田正平先生の特別展示開催が議題に上ったのは平成十四年三月の硯心会理事会であった。そこで、そのための企画委員会の設置が提案され、承認された。第一回目の企画委員会の集まりは翌十五年三月。以後ほぼ毎月会合を重ね、今日に至った。

○特別展示の目的は東京学芸大学における教育を振り返ることにあり、教えを受けた卒業生の所蔵する添削等を調査・収集することにした。この冊子に収録のものはその一部である。小さな紙片の中にも、山田正平先生的情熱と生真面目さが見えてくる。

○冊子は三部仕立てとした。①特別展示品（の一部）、②シンポジウム、③『篆刻講義ノート』（復刻）の三部である。

○シンポジウムは、当日発表したものである。『篆刻講義ノート』は誤植等、訂正すべき点もあるが、あえてそのまま復刻することにした。

○この冊子が山田正平先生の今後の研究に寄与することを希うものである。

と、再刊の経緯について述べる。

続いて、硯心会会長藏元訓征氏（十二期）の「ごあいさつ 感化―山田正平展に寄せて―」を掲載する。

（前略）山田先生の権量銘のご講義で、今思うに、篆刻の道へ進むか否かという問題ではなく、感化ということで、「教育」というものの原点を見たような気がする。感化には長期的なものもあるが、瞬時に存在することもある。理念の模索、追求が大学のあると指導を受けた自分にとって、この僅か一度の授業参加が現在教職の立場にある身にとって実に重く、考えさせられることとなっている。（後略）

次に、東京学芸大学教授 加藤祐司氏の『山田正平展―教育者としての側面―』によせて」を載せる。

（前略）篆刻家としての山田正平先生はつとに知られているが、教育者としての姿を知る資料はほとんどないと言ってもよい。一般に教育者は、常に学生の“今ある姿”をいかして“あるべき姿”に変えていくか。あるべき姿へ導くための状況づくり、場（雰囲気）づくりをいかに支援していくかを視座に置いている。「不易流行」ということばがある。（中略）が、山田先生の白墨による板書は、今日なお多くの学生の琴線に触れ、“あるべき姿”へと導いてくれている。不易なるものとして書道科の貴重な財産である。（後略）

それに続き、当日開催されたシンポジウムの各発表者の発表骨子を掲載する。

杉本淳子氏（東京学芸大学書道科五期）「山田正平先生の思い出」先生は非常に言葉の少ない方で、心の中でよく考えた揚句の果に出てくる珠玉のような言葉を、ポツンポツンと話されます。しかも、学生に話しているのか、御自分に話しておられるのか、天井の方ばかり見て話されたように思います。内容が非常に難しく、私には理解できませんでした。しかし、お話を伺っているうちに、篆刻とは大変な世界なのだ、とんでもないところからこれは首を突っ込むんだと思いました。

益子明達氏（同十一期）「百分の中で」

また、会期中に西川寧氏、伏見冲敬氏、四、五人で会場に見えられ、会場を一廻りして帰られる際、保多先生が彼等を引き止められ、メーソンの裏側に展示してある写真の所に案内した。先生の指示で後に付いて行った。両氏は頭を上下左右にし、指先で筆跡をたどった後、「山田先生はこのような真摯な姿勢で学生に対応されていたのですね。」と、改めて、保多先生に深々と頭を下げられた。

小木良一（同四期）「文人 山田正平先生」

今日このように山田正平のシンポジウムが開かれるなんてことは、書道界にとっては夜明けがやってきたんじゃないかと思えます。真つ暗な書道界でそういうことができるのが学芸大の建学精神だと僕は思っています。

塚本宏氏（同十一期）「最初で最後の授業」

山田先生には、我々の最初で最後となった授業で、印とはこ

うやうや彫るのだと実際に見せて頂きました。

以上『山田正平先生篆刻講義ノート』と「シンポジウム」から、山田正平の講義の様子が具に窺える。正平が如何に真摯に講義したかが見て取れ、それゆえに学生への感化も大きかったかと思われる。

三 筆者におけるシンポジウムでの発表 「印鬼 山田正平先生の魅力」

筆者は「シンポジウム」において、シンポジストとして、以下の内容に関して発表した⁽⁵⁾。本研究に関連する内容を多く含むので、再刊された（『回顧』山田正平―東京学芸大学における教育者としての側面―前掲）より再掲する。幾らか加筆修正を施す。

まず始めに、ここにお見えになられている山田家の皆様には、私、東京学芸大学の学生時代から現在まで三十年に亘り、山田正平先生そして山田寒山についていろいろな調査研究をするに際し、ご配慮御指導頂きました事、心からお礼申し上げます。

私が正平先生について興味を抱く契機となったのは、昭和五十一年新宿にございましたアメミヤ書廊で「第二回一止道人山田正平遺作展」が開催されましたが、この時、担任であられた小木太法先生（書家・東京学芸大学名誉教授）のご紹介で山田家を訪れ、展覧会のお手伝いをさせて頂いた時です。その後、専攻科の修了論文として、正平先生が学芸大学でどのような講義をされたのか、それは先生にとっては多様な功績の一面かも

知れませんが、正平先生の人と芸術を知る上において、幾許かの真実があるのではないかということで、先生の教育者としての業績を調べました。東京学芸大学書道科の卒業生である二期から一期生の硯心会の先生方にアンケート調査をさせて頂きました。その時に、諸先輩にはさまざまな御指導を賜りました。本日その先輩方も多数お見えになられておられます。ここに伏してお礼申し上げます。有り難うございました。

この度岩切先生からシンポジストのお話を頂きまして、私、正平先生の警咳に接してはいませんが、研究者としての立場から自分の考えの一端をお話し申し上げたいと思い参加させて頂きました。時間が限られておりますので、四つの観点から、資料を準備致しましたので、それに基づいて説明をさせて頂きます。

まず第一は、正平先生の周辺の人々とその交友です。殆どの先生はお亡くなりになりましたが、西川寧先生、伏見冲敬先生、保多孝三先生、古川悟先生等へのインタビューをまとめさせて頂いたものです。これは『広島文教人間文化』第三号（広島文教人間文化学会、二〇〇三年三月）に発表致しました。

西川先生からは「初世中村蘭台と河井荃廬、そして二世中村蘭台と山田正平は見事な違いがある。以前この両者を比較して、どっちがより以上に芸術家なのかと考え巡らせたことがある。ただそれは冗談です」云々というお話を聞かせて頂きました。

伏見先生からは「篆刻は文人の仕事であり、正平先生は篆刻を芸術の世界まで引き上げた人でその功績を認める」そういうお話を伺いました。保多先生からは「山田先生の手はごつい手であった。土を掘っている手だ」と伺いました。古川先生からは「正平先生は五〇顆くらいの『模刻印譜』がある。私は漢銅印

譜と間違えたくらいのものであった」とお聞きしました。その他実に多くの方にお話を伺いましたが、これは改めて纏めたいと思います。

続いて、第二は、正平先生の教育者としての一面です。学芸大学の教官であられた田邊古邨先生、伊東参州先生は、正平先生を不世出の芸術家であり、教育者としても素晴らしいということで大賞賛しておられました。田邊先生は『山田正平先生篆刻講義ノート』の序文で「翁は秋草道人を敬愛し欽慕し、自分も道人のごとく教育者の道を択べばよかったと言ってゐた。が、過去十年間、二百五十名の学生に与へた感化は真に偉大である。翁は遂に大教育者たることを得て、秋草道人の蹤を追ふたのである」という一文を遺しておられます。伊東先生は「正平先生は週一回の講義のために何日も準備に費やされる」と話され「私はそれを思うと允に恥じ入るばかりである」とおっしゃっておられました。

また、先に述べましたアンケートは「山田正平における教育者の側面―東京学芸大学における篆書・篆刻講義を通して―」との題目で専攻科時代に修論として、更に全書研北海道大会で研究発表させて頂きました。当時受講した学生の皆様は、講義中印象に残った内容として「印は宇宙ですよ」「作家は常に仕事が生命である」などを記憶しておられました。

第三は、正平先生の篆刻制作の過程を載せました。その一例として、「無人華落」の校字、印稿、布字、印影、刻面です。これで正平先生がどういう手順で印を制作されたのか知れるのではないかと思います。次は「撥雲尋道」「游雲魚」の印稿と印影です。いかに正平先生は印の制作で工夫されていたかがわかります。次は久保田大卿先生の雅印で多分完成作前に磨り潰され

たと思われる印影、更に「行雲流水」と「清楽」朱白印二種です。これから、正平先生が日頃述べておられた、明の朱簡の印論「刀を使うに筆を使うが如くす」、明の何震の印論「小心落筆、大胆奏刀」、清の魏錫曾の印論「書は印より入り、印は書より出ず」を自ら実践されていた事が理解できます。

第四は、正平先生の篆刻芸術の魅力とその顕彰についてです。まず一つは表現の自由さということが挙げられるのではないかと思います。これは印面構成の妙、空間の特色ということがいえるのかもしれませんが。疎密の処理を究極まで突き詰めた、そんな感じがしております。

ここに拡大コピーを用意致しました。正平先生の「無人華落」と呉昌碩の「石人子室」です。この両印は日中の近現代篆刻史の代表的な作品になるのではないかと思います。私、これらをずっと壁にかけて見ていました。どちらが上位に置かれるのでしょうか。一言でいえば、正平先生の方が突き詰めた世界が、疎密の闘ぎ合いの行き着いたところがあるのではないかと思います。もちろん呉昌碩の大陸的な大胆さは素晴らしいのですが。何はともあれ一止道人、缶廬は並称されるべき大家だと思います。両者ともに、筆意と刀意が融合され、書の個性がそのまま印となつて表現されています。まさに鉄筆ということでしょうか。印はやはり書であると語っているようです。更に正平先生は陶印や刻書にも力作がございます。また詩作は少ないですが、東洋古来の四絶の妙境をめざしておられたのでしょうか。

山田正平先生の日本篆刻史上の位置付けになりますが、高芙蓉を祖とする芙蓉派の系譜に繋がる、昭和期を代表する不世出の印人ということでしょう。また一止精神ということですが、この事、私は生涯をかけて考えていくことになると思いますが、徹頭徹尾、正平先生は篆刻に命をかけた、つまり一止精神とは

一事に命を賭する志をいうのではないかと思います。

最後に、正平先生の顕彰ですが、山田家の皆様がお父様を大切にされてきたこと、それが正平先生を現在に生かしております。もう一つ、これまでどういった正平先生の顕彰がなされてきたかということですが、私かつて年表を数回編みましたが、小木先生他学芸大学関連の先生が中心になされてきています。

正平先生の真実の姿を伝えていくには、伝えてゆく人が大切だという感じがしております。来年硯心会が主催して、山田先生の教育者的な面に視点を当て、展覧会を開催致しますが、よい展覧会なることを祈ります。

日本の篆刻史で、高芙蓉を「印聖」、池大雅を「印仙」と呼んでいます。正平先生には何を冠したらよいかとずっと考えています。そこで「印鬼」はどうでしょうか。「鬼」というのは人間わざを超えたすぐれたものを形容します。

私、一止道人山田正平先生は邦人第一の印人と考えて調査研究をしてまいりました。三十年間今もって厭きることはありません。見れば見るほど魅力が増し、これからもずっとライフワークとして研究し続けていこうと思います。正平先生やその他多くの有縁の先生方との金石の縁に感謝致します。

本日は本当に有難うございました。

四 『山田正平先生篆刻講義ノート』現本について

篆刻講義ノートの基となった原本ノートについて紹介する。

1、書誌

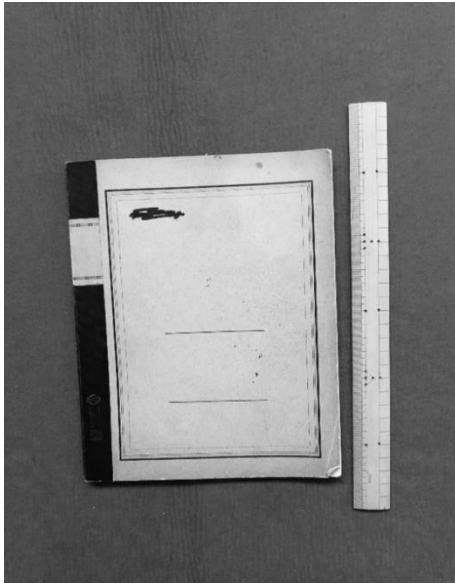


図2 原本ノート②（表紙表）

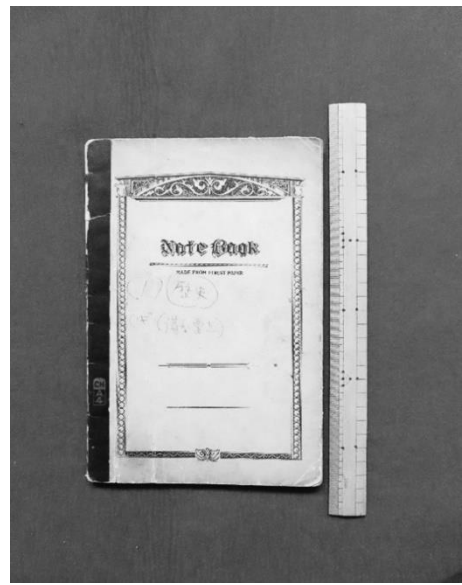


図1 原本ノート①（表紙表）

原本ノート①（図1）

- 〈書写年〉一九六三（昭和三八年頃）、一九五六（昭和三一年頃）
- 〈寸法〉 縦二五・〇×横一七・二糎
- 〈装丁〉 七四頁（白紙九頁）
- 〈表表紙〉（1）歴史（中）（講義要点）
- 〈裏表紙〉 学生答案写し

原本ノート②（図2）

- 〈書写年〉一九六二（昭和三七年頃）、一九五六（昭和三一年頃）
- 〈寸法〉 縦二四・〇×横一九・三糎
- 〈装丁〉 九八頁（白紙三四頁・見返し一頁）
- 〈表表紙〉 記載なし
- 〈裏表紙〉 記載なし

2、抄録・考察

ノート①と②の中で、学生のレポートを筆記した箇所を掲げたい。

ノート①の冒頭に「昭和二八年四月開講、七月終了の東京学芸大学に篆刻及び篆書講座を担当しその試験答案の一部也」と書かれており、学生の解答タイトルと氏名、をインクペン書きで書き、鉛筆で評価を付けている。

学生の授業に関わる箇所を抽出する。これにより、授業内容や展開が理解できる。

（1）黒田美枝子（図3）

先生のお人柄に接し得たことは大へん幸福なことでした。

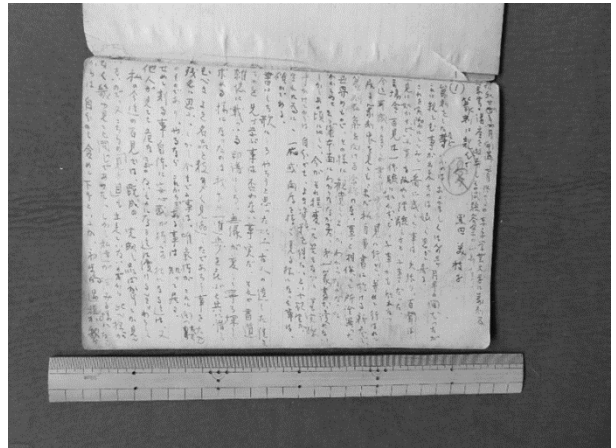


図3 原本ノート① (71頁)

(2) 府川次男

水曜日の二、三時間に渡る、篆刻の時間は私にとって特異な心暖まる授業であった、毎時間話される篆刻の歴史また実際に刻まれた印、印譜、等に依り私は今まで無関心であった篆刻の新しい、すばらしい、世界を知る事が出来たのを幸福に思っています。

(3) 太田保一

一日一日と楽しい授業となっていた、お別れとなると寂しいものだ、先生はおらなくても、印の中に先生は常に私のそばにおられるのである。

(4) 渡辺好雄

書道を学ぶものに、必要とせらるるもの 筈なのに、講義が始め

られ時、とけこめない空気が、自分の周囲に満ちていた、その石をすって平らにしてほりこみをする、只ただほる事にのみ重点と考えていた私は、その講義を毎回欠かさずに出席しているうちに、とてもない、遊び事と、芸の本質と、区別できないなど、自責の念にかりたてられた。

(5) 木内光雄

篆刻は本当に職人の技としか考へておりませんでした、しかし自刻にあたり友との比較により、又先生の御講義により、非常に個人的なものであり深淵極まる、蘊奥を有しているのに驚嘆した。

(6) 長坂吉和

本年四月まだ桜の散りかけた頃、例の書道教室で僕等は始めて山田正平先生に講義を受けました、級のものも別に用意もなし先生の御話しに全神経を傾聴していました、「石っていうものはいゝものですね、こうしていても何かを語って呉れますね」先づ御話されたのはこの言葉でした、僕はこの言葉を御聞きして何ともいえない微妙な世界に引づり込まれた様な一種いゝようなない気持ちになりました、何といふふ石か知りませんがきつと支那のいゝ石でせうかしきりに石をなでゝ居られた先生はほんとうに楽しんで居られるのです。そこには何のわだかまりもない先生と石といふ世界です。ね講義なんて堅苦しいものでなく道に生きられる楽しさをしみじみ味わえる様な境地です、(中略)ある日の講義の時に先生の画帳が風呂敷からのぞいていましたがその中には僕達をびつくりさせる様な、水彩の畫が描いてありました、小川芋銭先生から御指導を受けられたと後から聞きました。が先生の奥行き、の深い一面だと思いました、篆刻の学問の講義歴史的の御話毎週沢山の蔵書をお持ちになり意義深い御話が

續きました、その合間に實際刀をとって石に向われる先生の御姿は僕等学生に深い感鳴を与へました。刀を掘り、全力を注ぐ、一點一畫に精魂を打ち込まれています、藝の道の厳しさを感じます。

(7) 島田正治

この一学期を通じ、先生の授業は自分にとっては実に楽しいものでした、中略 私は先生刻される状態といふものはそれこそ実に尊い境地ではないかと窃に考へていましたが私の愚かな思索も全くその通りで作品製作の態度はあの楊でなければ本當でないと思つづく思いました。

(8) 中村直之

私に取つて篆刻は本當に新しい試みであつた、新しい物への憧れと次々二解つてくる篆刻の世界が極めて楽しく素晴しく思へた正氣印譜を見た時少驚いた私が印を刻して来る毎に良く見て章法字法について御注意して下された先生が終り頃には「澤山刻せば解ります」と云つて一々見て下さらなかったと言ふ事が、今の私には極めて嬉しく感じられる唯刻れば良い、刻れば自然に解る、これが私に与へられた今後の篆刻の道なのだ私は何も云ふ事も書くことも出来ないが、強くこの事を感じたので書いて見た。

(9) 大塚長榮

最初に授業を受けた時、先生が言はれた話の中に「私は殷の時代ニ遊んでいますよハハ」といわれた言葉がいまだに私の脳裏に残つていてさすが芸術家だと心を打たれた(中略)こゝに何時間かの篆刻の時間を通して顧るときいままでの篆刻観が恥すべきものであつたことを知る(中略)一つの貧弱の模刻のみを提出するに終つて

しまったがつたないながらまずしいながら篆刻を通して目に見えない収穫を得た事は嬉しい。

(10) 石井正治

先生の篆書と作品を直して頂いた事により一点一畫がたゞの線でない事が判つた。篆書をよくせねばならぬと覺つた。

(11) 谷 健

十程刻したか思ふ様ニ出来ぬ印影を出さなかつた。今度、先生に篆刻を習つて十近くほつて見たが實際に思つたよりはるかに面白く、その趣きの非常に高雅であることがわかり親しみを持つ様になつた。

(12) 手島光代

篆刻と一緒に篆書を学ぶことが出来たらと一層興味深かつたと思ひました。

(13) 高師仁

色々の参考品を見せて貰つて自分の模刻の貧弱をさとる。

(14) 川島喜美江

篆刻感したまゝ篆刻この言葉は今迄の私にとって遠い世界のもの単ニその存在をするだけの極めて影の薄い対象でしなかつた。しかし篆刻の講義を聞いて顧るとき今迄の篆刻観は恥すべきことであつたこと知る。

次に、『山田正平先生篆刻講義ノート』から、正平が受講生に指導

した内容を引く。

① 学生に与へる言(二)

○構を雅馴な筆致のもの、屈託のない暢びりしたもの、印にも同じく己に萌芽を見る。

そこで印の観方、作者として自分の想念の標置を古人の言をあげて見る。そしてそれを今の自分に当てはめて見る。

○飛躍

幽玄の位が蘭の位に高まる。或は単なる優美が洒脱といふことに高まる。

○ピカソ、鉄斎の例

疎より密に入り、正より奇に、奇変を尽して正に変へる。法の解釈、各自の特性教養によること。

○印刷印譜

書品に対して書物参考品の見解。

○上代芸術に対しての見解。

○秦代統一時代の変化様相が書道様相変化の縮図。

② 学生に与へる言(三)

篆書練習につき

○近代作家一家につき習ふことを得策とする意見。それより各作家に渉る。

○要は、如何に見るか、解釈するか、意興、いかに感興を生ずるか。

○或人は、手本は見るだけ、直線と曲線の練習、見て習ふこととあり。

○結局その人ならんか。

○説文の解釈に訂正すべき処を近代甲骨文の研究の結果により色々あるが、しかしそれは、百中の一、二と云ふことと考へ、説文の解を一応尊重すべきこと。

③ 学生の篆刻感想に対する評

興に乗つて刀を運んで居る処があり一脈爽やかな味があつてよい。これは大切なものです。君の言ふ天真爛漫に興味を集中出来ることは極めてよい。

更に望むことはよき古典に心を潜めて熟視し分間、布置、の智慧を習得すること

白黒朱の照応関係の考察はよい。これがすべて制作に必要な感覚で殊に絵画など直接この色の墨の適宜なる処置がなければ成立しない。

単に墨一色の絵でも遅速濃淡が適格なる物象心象を表現出来なければ画は成立しない。

白黒のうち五彩ありとも云ふ。

起筆と中辺と終筆そして字、照応しての転折への確かな配慮があつて餘白(この場合は朱の部分が芸となつて生きる。)つまり響きがないと云ふことは 餘白が単なる白で無意味で生きて居らないことならん。

あなたが峻厳奔放と見て若しそんなものが模して見たかつたら、更に運筆の使処と力点があり緊密と、どの辺り軽いかを見極めねばならぬ。真の峻厳があつて、真の奔放の妙味も生れやうもの。よき

緊密あつてころよい寛綽も生じて来るでせう。

書も怪であり篆刻も亦怪と云ふ意味ですか。これなれば結構すべて怪で無限の展開疑問があるでせう。そこに歓喜魅力があり、更に云へば君の夢が彼方に存在して居るのでせう。つまり怪壺の正体を掴むこと、これ即ち自己の正体を見ることが人間完成に近づくことである。古人の叡智を学び取り、努力することではせうか。

才能がないと自分で思ふのは結構でせう。それを裏返へすと大きな夢があつて、手が伴はないと云ふこと。それなれば才能のあることにもなります。眼高手低と云ふ言葉もあります。釋氣元気で体当りして見ることでせう。制作は努力です。

起筆、終筆に注意を喚び起した事は大収穫で、私は思ふ、起筆は一画一字の起りでもあり、また全局の起りであつて全局統合、変化の底を貫くものが存在して居るが如く感ずる。

印を刻すと云ひます。掘るは土の方でせう。印を彫るとも云ひますが、多く印判の方に用ひられる。数を多く手懸ける勉強も大切ですが、立派の意図を持つといふことも尤も大事でせう。一応形だけ似た様なものが出来るだけではつまらない。立派な意図それは高い教養を身につけることでせう。書や篆の難しさはそこにある。

骨格といった物は大切なものである。それがあります。芸術家になる為の条件の一項目として無器用をあげて居る。これを云ひ変へると骨格といふことにもなる。しつかりした骨格があつて始めて濃やか的情誼も出て来る。

天真爛漫も結構。素朴も結構。撃術は如何様な底の浅い情感も甘えることは許さない。更によろしい。

技術的の認識は常に大切で観方によれば、芸は表現であるからの確の技術、それに尽きて居るとも云ひうる。しかし表現は結局その人の心象とも云へる。されば心象書の方の品別に神品奇品とか能品とかある。能品的のものに安住せず広くよき参考品により識見を高めて行きたい。

運力のことややはり一番重要になると私は思ふ。構成の面白さは目につき易いが形を放れて神韻を感得することは運筆運力でせう。文質彬々と云ふ言葉あり。今仮に文を構成とし質を運筆運力と考へても面白い。質、文に勝てば野なりとも云ふ。構成の工夫は学び得らるゝ面。

書も篆刻も形を離れては成立しない芸ですが整つてゐても無味乾燥では芸術の域に入らない。そこで君の言はれる第一印象、これは大切に情感に響くものがある。これが尤も大切でせう。精彩よい言葉ですね。高い情操と広い経験、そして大きく育つのでせう。

完璧に自己の思ふ通りと云ふことは或ひは一生涯出来ぬものかも知れない。自己の意図を充分に貫くことに全力を尽す。それで宜しい。蘇東坡の清語に曰く「壁美なれば何ぞ妨隋」とあり。意図とは（形だけ整つた死物より）完璧でなくとも感興情趣の生彩を主張したのでせう。夢のまぼろしが大切
よき古典によれば自ら進境。

書も篆刻も学ぶ時は第一に形から入ること。表現が即ち芸である。運刀運筆の力 無限の魅力のある場合もあるが、これはある域に達した後である。先づ分間布置をよき古典により学ぶこと。つまり忠実に叮嚀に形のあり方を学ぶこと。

書の骨格が少し足りない。流暢に見へる篆書でも、やはり楷行草隷と同じく人体の如く、背と肩と両手足とがあつて、そして健康の姿体になり立つ。

正平が学生に指導した内容、また学生の講義を受講しての感想から、正平の授業内容・態度などが見て取れる。講義そのものは、オースドックスな方法であるが、授業に向かう姿勢に学生の興味・関心を起こさせる「教育の力」を感じる。これは、きわめて重要な視点を現在に提示していると思われる。

四 おわりに

山田正平が如何に学生を大切にしたか、以下の二種の、謝恩会でのスピーチと、「学生に与へる言（一）」から見て取れる。

①学芸大学に第七回の卒業生を送りて

昭和三十四年三月一日

新橋フードセンターに於いて

卒業記念展を銀座画廊に見た。諸氏の熱気をこめた制作を楽しく見た。一般書道展に見らるる意を忘れた徒らなる達者さに嫌悪を覚えるものがあるが、茲には遅拙さはあつても悪達者さ

はない。会場を二度三度とめぐり前年度の卒業生等と久しぶりに顔を合はせる懐しさもあつて楽しい一時を過した。いまこの席に立つて、諸子に何事か言つて聊かはなむけとしなければならぬが、先きに松本洪、藤原楚水、鈴木梅溪諸先生達の貴重の御話しあつて、更に何を贅せん。只ここに一言、初心忘るべからず、の一句、もち出しこれに更へようと思う。この言葉、相阿彌の花口伝にありとか。先頃何かに散見す。考へるに芸道も人世もすべてこの初心忘るべからずに始まり、またこれに終ると思ふ。

初心とは何か、素心なり。心地潔白なり。心地潔白、そこに美の女神みそなはず。惰性、習慣的、これは芸道への死滅であらう。人間社会もまたこれより汚染せらる。

我が芋銭翁かつて余に教へて曰く。薄氷を履むが如く、深淵に臨むが如しと、画法、芸道に対して心得を説かる。蓋し、初心忘るべからずとそれ軌を一にするものならんか。

いま諸氏、学窓を出て世に立つ。幾多の困難は山積せん。高き嶺に登る、その一步一步、忍耐と勇気を以てはじめて望みを達す。初心忘るべからずの裏にあるもの、叡智と精進とは一生の伴侶であらう。

我ことし六十才の誕辰を去るこの二月に迎へ、八十を逾ゆる老先生よりすれば、尚ほ亦小児に似たらんも聊か自らの過去をふりかへり、このことを信じて疑がはぬものがあります。ここに自らの慎言となすとともに、これを以て諸氏へのはなむけとなす所以である。健康に留意して大成せられんことを。

②学芸大卒業謝恩会席上（図4）

昭和三十六年三月三日

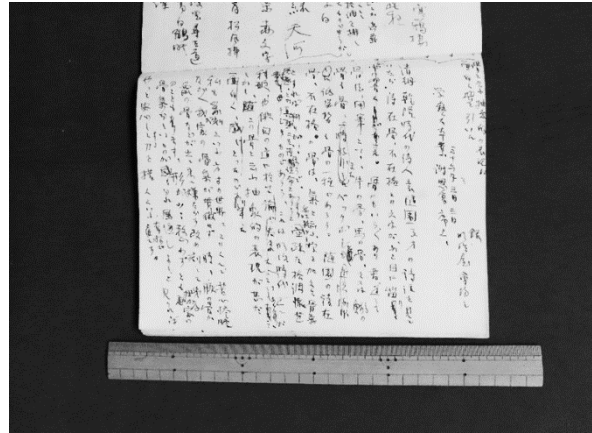


図 4 原本ノート①(72頁)、『篆刻講義ノート』86・87頁)
学芸大卒業謝恩会席上 昭和36年3月3日
銀座明治屋会場にて

清朝乾隆時代の詩人園随園子才の詩話を見ていたら、詩在骨、不在格との文字がふと目に留り、骨と云ふ抽象的の表現が面白く興を引いた。骨にもいろいろあり書道でも骨法、用筆といひ、牛の骨、馬の骨さては鰭の骨も骨、またバツクボーンも、低姿勢も骨の一種であらう。随園の詩在骨、不在格の骨は、氣と云ふ字を加へて骨氣とすれば判りがいいやうで、つまり無味乾燥の空疎な格調派を風趣とか真氣とかを尊ぶべくして空疎の格調を排しなجتたものでせうが、これは明治時代和歌や俳句の道に於て論じ尽されたことでもありませんが、しかしこの骨と云ふ抽象的の表現が甚だ面白く感じとつたのであります。

①

学生に与へる言(一)

諸君は、四ヶ年螢雪の功、空しからず、ここで芽出度く卒業せられ社会に出られる。まことによるこびに堪へない。いまここに我等、謝恩の宴を張り馳走せらる。諸子の酬ゆるの驚きに對し顧みて御つくしするの余りに薄きに非ずやと内心忸怩たるものあり。

私の担当の篆書篆刻なるもの諸君が書道教育家と云ふ立場からすればこの時間は或は書の歴史の一頁と考へられた人もあ

私も篆刻といふ方寸の世界にとりくんで苦心惨胆なかなか我が家の骨氣が貫徹せず、時々豚の骨か鼠の骨などが出て来て嫌でたまらず改め刻したことが幾度もあります。形が少々整はずとも我が家の骨氣らしいものが感じられ風通しよしと見られればやつと安心して刀を措くといふ有様です。

私、ことし二月で六十過ぎて、ふたとせ、その上に浅春やとつけて、浅春やわれ六十をすぎてふたとせ、と俳句の形とし笑はれたのですが、浅春やの語感に強く魅力を感じてのことでありました。鯉が龍門をはね上り龍となると云ふ語がありますが、私六十を越してなほ一転二転三転、天空を自在にかけ真龍飛龍の真隨を得んと念願して居ります。

さもあらばあれ、私自身この龍の真隨を得たりと信じてても、後世の探索家が地下何メートルかを、掘りかえし、これ龍骨ならず馬なり、牛なりと判断するかも知れぬがこれは関知せぬこと、人の馬牛と呼ぶに任すことです。恵ぐまれた資質を持ち、多くの青春に富む諸君、どうぞ豊富な夢と希望を以つて絢爛の業績をつんで下さい。

らう。さう云ふ見方もなりたつわけであり、しかし私は飽くまで一作家でありて見れば話したり、やつたりすること、篆書、篆刻を如何に見るか云ふ鑑賞或は創作態度に傾いたかと思ふ。それには知識、物識りと云ふことより、興を喚び起こすことこそ、真の理解となるのでないかと思ふ信念も有した次第であります。

真に物を知ると云ふこと、これは東洋でも或は西洋でも、これはむづかしいこと論議され操り返へされた問題であるらしい。今後の人生の大展開完成を祈る。この頃、私の少年時代知りあつて、壮年期何かと助力を得た春城老人の八十年の回顧と云ふ本を一寸見ましたが、壮年期の勤勉、壮年期の活躍、最晩期の天命の觀し悠々たる心境、実に八十老人よく蠅頭の細字で書いてあつた。

やれる時は大いに奮発と実行する、篆刻でも書でも教育でも、子供を産んで育てることも核心に触れてそれに向かつて努力してもらいたい。

教育がいかに有るべきか、を問う時、一人の偉大なる篆刻家の足跡から学ぶことは、あまりに多い。

本節では『山田正平先生篆刻講義ノート』の、原本そのものを丁寧に見直すと共に、周辺資料を併せて提示し、彼の教育者としての一面を考察した。

山田正平の講義は、講義科目の内容に囚われることなく、芸術・文化・教育などあらゆる方面に亘っており、実に含蓄に富み広範であった。

確かに、正平は篆刻家である。が、学者・教育者として多面的な顔を併せ持っていたと言えよう。中でも教育者として学生や子弟

に与えた影響は計り知れないものがある。そういった意味において、正平は教育者としても素晴らしい功績を遺したと言えるだろう。正平の述べた、「やれる時は大いに奮発と実行する、篆刻でも書でも教育でも、子供を産んで育てることも核心に触れてそれに向かつて努力してもらいたい」(『篆刻講義ノート』学生に与へる言(一))は、今後われわれ教育者が常に考え取り組んでいかねばならない指導者としての本質的な課題と言えよう。

正平の行つた教育は、わが国の書道教育の特色、また書道の独自性を考えることに繋がり、書道教育の教科内容の開拓と教科開発などの書道の基礎研究になりうるものと思われる。

【注】

(1)「山田正平における教育者の側面―東京学芸大学における「篆書・篆刻」の講義を通して―」と題して執筆した。東京学芸大学書道科の卒業生である二期から十一期生の硯心会の先生方にアンケートを依頼し、その結果を纏め考察を加えた。

(2)『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として―【改訂版】』(創想舎、二〇二〇年三月)。山田寒山・正平に関する実証的・総合的研究書である。

(3)山田家は、正平の講義ノートを含むノート類、講義のためのチラシ切れ端メモ類、散歩や旅行時のスケッチブックなど多くを保存する。同資料はその一つである。

(4)同内容は、シンポジウムで発表したものである。当日は、山田家親族や篆刻研究者、正平が指導した当時の学生など、正平有縁の方々が多数参集した。

第五章

山田寒山・正平に関わる篆刻家と文人・ 芸術家の篆刻と篆刻論

第一節 小曾根乾堂の篆刻と篆刻論

一 はじめに

本章では、山田寒山・正平の人と芸術を論じる上において重要と思われる、彼らに関わる篆刻の専家と文人・芸術家の篆刻と篆刻論について考察する。本節においては、小曾根乾堂を取り挙げる。

乾堂は(図1)、文政十一年より明治十八(一八二八—一八八五)年にかけて生きた、つまり幕末から明治維新という、時代が大きく変動する時に活躍している。乾堂といえば、明治四(一八七一)年勅令により「御璽・国璽」を刻したことは、つとに有名である。ただ、これも事実が正しく伝えられているとはいいがたく、むしろやや誤解されている。更にこの事以外の事績は埋没してしまっている。乾堂の時代を先取りした開明思想家としての思想と実行、文人としての各種の業績と作品(図2)、また社会・教育面での貢献など、正当な評価がなされていない。乾堂没後一一〇年に垂んとするに、まだ彼を俎上に載せて論じた人はいない。

長崎は、戦国時代末期から、三方を海に囲まれた天然の良港としての地理的な長所を生かし、貿易港として繁栄した。一五七〇年の開港以来四二〇有余年の歴史を誇っている。鎖国時代は、わが国で唯一の海外文化を取り入れることのできた窓口であり、ポルトガル・オランダ・中国などと交易した。つまり当時外国の最新の文化は、長崎を経由して日本全国に伝わっていった。長崎は、洋楽・医学・絵画などの文化水準が高く、多くの人が日本各地から、海外の新し

い知識を吸収するために訪れた。

また、長崎に縁のある印人も多い。一六四四年に明王朝は滅亡し、中国から日本へ亡命し帰化する人達がいた。それにもない、明人により篆刻が伝播された。その第一に挙げられるのが、日本篆刻の祖とされる独立(一五九六—一六七二)⁽¹⁾と心越(一六三九—一六九五)⁽²⁾である。

筆者は、平成六年以降数度に亘り、長崎の小曾根邸を訪問し、同家に遺されている作品や資料の整理調査にあたった。更に、安部井家、秦家に伝わる資料も併せて調査した。本節は、それらの資料を基として、乾堂の生涯を知る上において、主要な文献に多少の注解を施すとともに、彼の芸術面での業績、中でも篆刻と篆刻論に関して論述するものである。

尚、本節を草するにあたり、乾堂の生涯に関して「小曾根乾堂研



図1 小曾根乾堂肖像

究（一）」「『修美』五三号、平成八年一月、修美社）で概観したものを参照した。本節で使用した図版は小曾根家蔵である。



図2 乾堂山水図と画賛

二 伝記資料

小曾根乾堂の主な伝記資料として次のものが挙げられる。多少の注解を施しておく。

- ① 県令内海忠勝に提出した履歴書の草稿（明治十五年）（図3）
 - ② 小曾根晨太郎「乾堂居士墓誌」（明治二十年七月）
 - ③ 「竹影翁伝」（西琴石、明治三十七年）（図4）
 - ④ 西琴石「乾堂居士伝」（明治三十七年）
 - ⑤ 古賀十二郎講演筆記^③（「小曾根乾堂翁五十年祭、小曾根星海翁三十年祭記録」昭和九年十二月）
 - ⑥ 乾堂先生銅像建設趣意書
 - ⑦ 西琴石撰「小曾根晨太郎碑文」（明治三十八年）
 - ⑧ 「祖父・乾堂のこと——生誕百五十年記念展によせて」小曾根均治郎（『郷土文芸』）
 - ⑨ 「長崎開港三九九年港まつり協賛小曾根乾堂遺品展」パンフレット（昭和四十四年四月二十～二十九日、主催長崎市立博物館、協賛長崎史談会）
 - ⑩ 大庭輝「国璽を刻んだ小曾根乾堂」（『長崎談叢』第三輯、昭和三年十一月、藤木博英社）
 - ⑪ 氷見徳太郎「小曾根乾堂」（『明治文化研究』第二輯、昭和九年五月、書物展望社）
 - ⑫ 小曾根均治郎『乾堂翁遺墨展観目録』（昭和四年六月）以上掲げた乾堂に関わる資料の概略を簡単に紹介しておく。
 - ⑬ 小曾根吉郎監修・小曾根育代著『小曾根乾堂謎解きの旅 幕末明治を刻した長崎人』（平成二十七年八月、長崎新聞社）
- ①は、草稿にして簡略ではあるが、乾堂自筆によるものだけに、その資料的価値は高い。

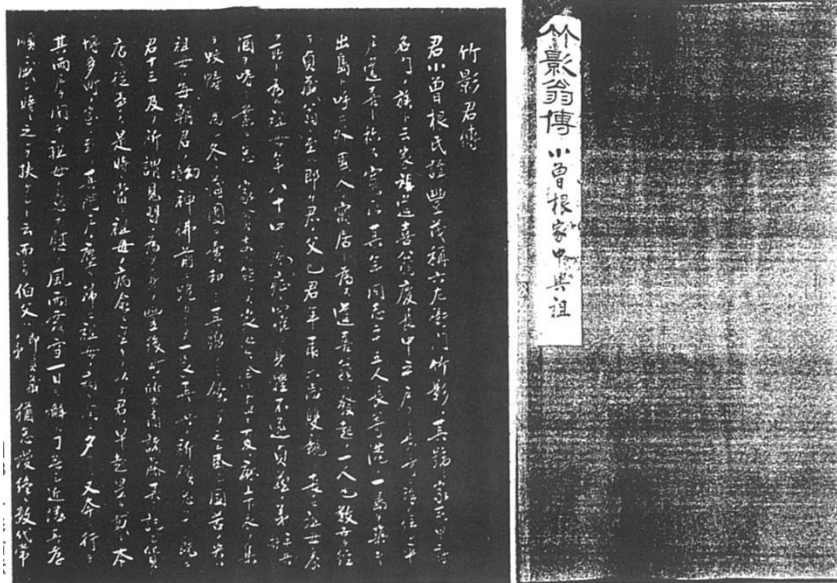


図4 竹影翁伝

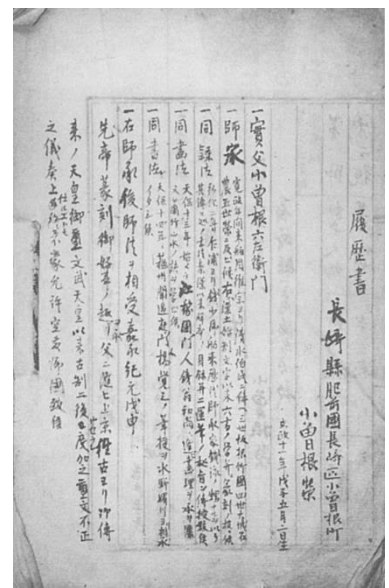


図3 履歴書の草稿

②は、西琴石が乾堂の嫡子星海（4）に請われて、明治三十七年三月上旬に、竹影の伝記として識したものである。琴石は長崎区長を務め、漢学に精しく、乾堂・星海と四十有余年にわたる交友を持った人物である。琴石は同伝記中に、伝記を識すに至った経緯について言及している。

道仙故乾堂翁、現主星海居士と、交を結ぶ四十有余年。頃者、居人臥病、一日其病を問ふ。乃ち竹影、乾堂二世の伝記を請わ。数句を経て、聞見する所の言行を叙し、各々一卷と為す。後裔能く遺訓を守り、之を實踐するときは、永遠其余慶を受け、家声を墜さざるに庶幾からん歟。

③は、家祖道喜の事績から始め、竹影の生い立ち、幼年時代の勤労の事、婚姻について、家業を成功させ家を再興したこと、そして、文事雅道に関することなど、竹影の生涯が、手ぎわよく紹介されている。

其他、文人墨客長崎に遊ぶ者、君を訪はざるはなし。家祖、経営の傍ら、情を風月に寄せらる。蓮池公の如きは、屢々招かれ、殿中に於て琴箏を弄し、囲碁を娛み、平生頗る優待せらる。（中略）君、為人強志力行広く、天下の士に交わり、常に本邦篆刻隸家に乏きを憂ひ、榮をして深く之を学ばしむ。晚年俳歌を好む。

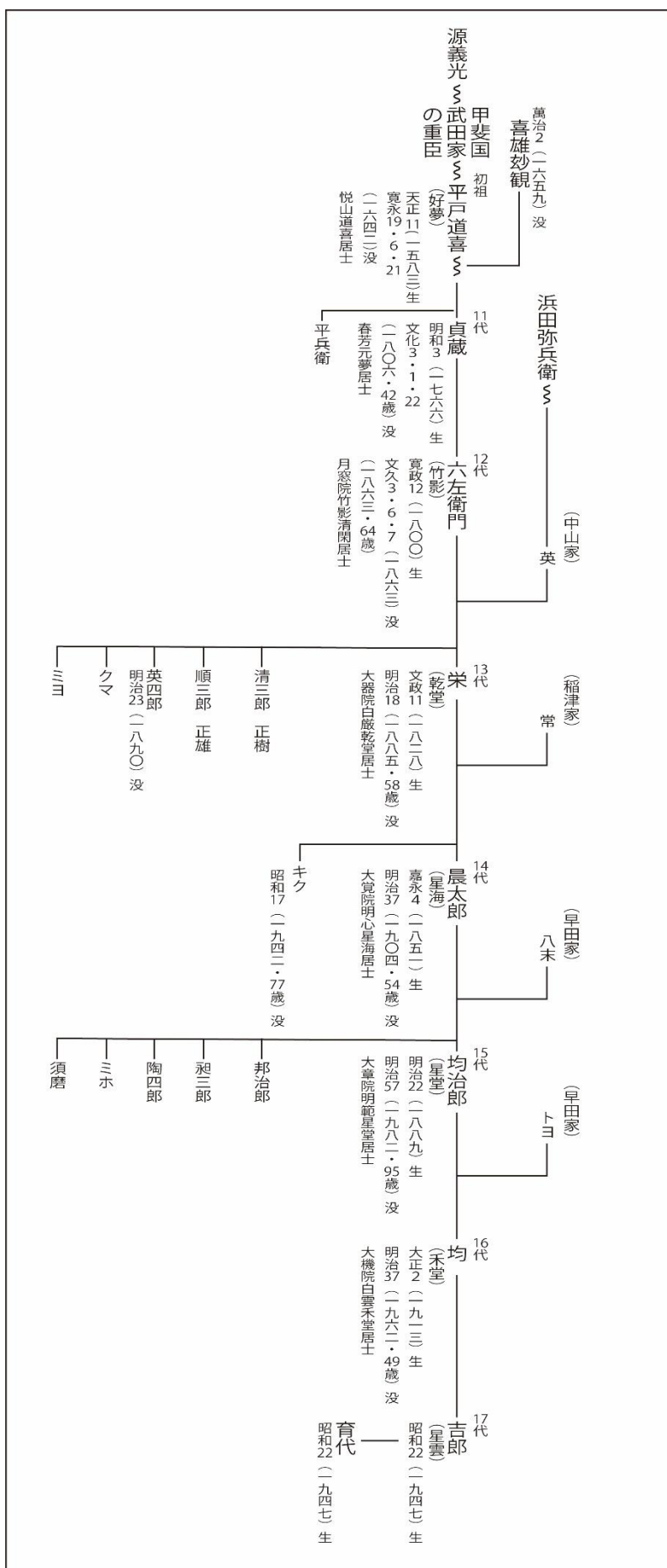
④は、やはり西琴石が、家祖道喜の事績から竹影に及び、乾堂の生涯を年代を追って記したもので、最も詳しく精彩に富むものである。

⑥は、乾堂が明治十一年一月十一日、教育の普及の必要を感じ、私費を投じて創設した私立小学校小曾根小学校（現在の長崎市立浪平小学校）が、創立五十周年を迎えるにあたり、乾堂の功績を顕彰

するため、銅像を琴平神社境内の景勝の地に建設した際の趣意書である(5)。

⑦は、星海の碑文であり、西琴石が明治三十八年に識したものである。星海生前の事蹟を略述するが、文事に関して「画法極妙、篆隸は其の長ずる所。蓋し、乃翁の衣鉢を伝ふる也。」と述べる。

小曽根家系図



三 乾堂と山田寒山

日本の篆刻史を考えると、日本の篆刻の祖として「印聖」と称される高芙蓉とその一派の業績に突き当たる。芙蓉の学徳は門弟により継承され発展する。山田寒山は、芙蓉の系譜に連なる明治・大正期を代表する印人として名高い。文人必須の条件として詩・書・画に篆刻を加えている。寒山は四絶に加え陶芸を善くした。実に多芸多才であった。寒山は本研究で取上げる小曾根乾堂に出会っている。当時の新聞『鉄筆閑話』（山田家蔵による。紙名、刊行年等不明）にその経緯が記されているので引用する。

記者一日山田寒山師を其室に訪ひ、談偶ま鉄筆乃事に及ぶ今其談話の梗概を掲げて、好古韻士の観に供ふ、私は元来曹洞宗の僧籍に在るのでありますが、小僧の頃から鉄筆の戯が好きで、雲水をして諸方を巡って居る内に、或る処で二三の有識者が、某禅師の血脈に押してある印の篆文に誤刻のあるのを批難して居るのを聞いて、ナル程戒師ともいふべきものの印文に、誤刻があつては不体裁の訳だ、幸に自分は雲水で、四方を巡るのだから、篆刻を研究して、国中各寺院の印章を改刻してやらうといふので、益々意を篆刻の研究に注いで居る内に、十七八才の頃と覚江ました、丁度長崎の暗臺寺に滞在中に、其当時有名の小曾根乾堂といふ篆刻家がありました、この人は近体家でありましたが、伝燈は支那で、其の時分では、ナカ／＼有名でありました、刺を通ずるや否や、篆刻を学ぶには少くとも十萬円の資力がなければダメだと喝破されたので、スゴ／＼逃み出しました、其後ち私が二十四才の時、伊勢の福井端隠といふ人に就

いて篆法を問ひましたが、端隠翁の申されますには、古今のあらゆる有名なる印譜を集め、且つ人のために刻するのでなく、自分で楽しみに刻して居るといふには、乾堂説の如く、十萬円もなくてはなるまいが、併し十萬円の金に代ふるに、ソレ丈けの根氣を以てすれば宜いから、先づやつて見るがよいといはれたので、それから遂に僧侶の職務を擲って彫刻三昧となりました、此福井端隠は有名なる高芙蓉の伝燈を継いであるので、純然たる古体家であります、芙蓉派と申しませば、高芙蓉―源惟良―小俣蟻庵―福井端隠と伝ひ、私まで、五世であります。

寒山は乾堂から直接篆刻を学んだわけではないと思われるものの、小曾根家に收藏されていた中国の書画名跡や印譜を観たことは想像に難くない。

四 刻風の変遷

乾堂の父竹影は、文事雅道に志が深く、印癖があつた。竹影は、わが国に篆刻、隸法家の乏しいことを嘆じ、乾堂にそれを学ばせた。

乾堂の学書の最も初期は、父竹影や、長崎に遊学し小曾根家に入りしていた武士、唐人の学者、画家、そして長崎の書画家などから指授された。彼は天保十五（一八四四）年、十七歳の頃には、すでに非凡な篆刻の技倆を有していたといわれている。

乾堂の刻印の側款や落款などから、刻年の判明した数少ない作例ではあるが、印譜に収載（図5）の印や小曾根家に遺された印（図6）を基に彼の篆刻の刻風の変遷をみてみたい。



図5 乾堂印譜四種

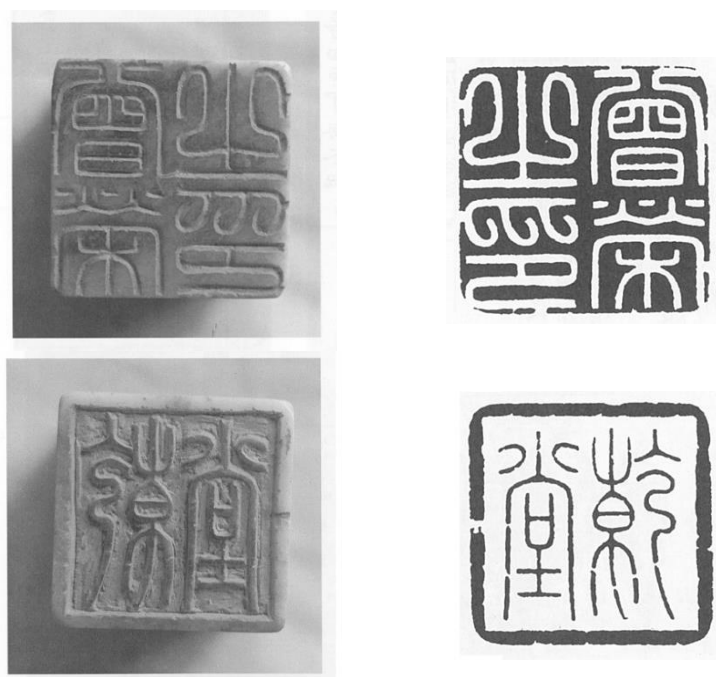


図6 乾堂刻印印影と刻面

まず、天保十五（一八四四）年、乾堂十七歳の時の五面印は、乾堂がその系譜に列なる、彼の師である大城石農が私淑した長崎派の印人源伯民（一七一二〜一七九三）の刻風に類似するものである。ただ、伯民より筆画がやや角ばっている。伯民は長崎に渡来した丁書崑や徐兆行に刀法を授かり、董三橋に教えを受けた。明末清初の今体派の刀風を学んだ人である。章法は、白文は刻面を埋めつくすが、朱文では空間を大きくあけるのを特徴としている。

次に、佐久間象山用印の二顆は、嘉永七（一八五四）年、二十七歳の刻である。「大星子明」白文方印の識語に、清の陳鍊（一七三〇〜一七七八）の『印説』の語を引き「何震の筆意に仿った」とある。

「五 印学」にて詳しく述べるが、乾堂の印学の基となったのが、陳鍊の『印説』である。同印は、文字を印面全体に配置し、何震の趣が出ている。

壮年から晩年にかけて制作された書画作品に使用された自刻自用印は、明治四（一八七一）年四十四歳、日清修好条規締結のため、伊達宗城の随員として清国にわたった以後のものである。乾堂は中国側全権李鴻章に、その才を認められ、鴻章のすすめにより、数多くの書画や印譜を購った。印譜に『甘氏集古印正』『訥菴集古印存』『寿巖印草』などがある。彼は帰国後、それらの蒐集品を糧として技両と見識をみがいた。その刻風は秦漢印に仿ったもので氣宇広大な趣がある。そして、あくまで謹嚴で遊戯に墮さない。これは、まさに彼の篆書作品と軌を一にしており、書の風韻がそのまま印となっている。

また、小曾根家に乾堂若年の刻と思われる刻印が多く遺されている。これを見ると、刻風もさまざまで、いかに彼が印に苦心したかわかる。印材は切り石が多く、むしろ粗末なものである。

次に、乾堂が布字をし、刻す以前の印が数顆遺されているが、墨

で印面に直接書かれており、朱と墨で訂正するといった方法とはっていない。刻法は、両刃のやや小振りの印刀を使用し、慎重に運刀している。彼の印は、奇抜さを求めるのではなく、秦漢印を宗とし、中庸をゆくものといえる。初期は源伯民や何震などの刻風を学び、その趣のある印を刻したが、けっしてその末流の弊風、安易な装飾趣味に墮することなく、晩年は秦漢印の古樸さをとらえたものとなった。

乾堂の篆刻は、源伯民、阪根竹石、大城石農の系譜に列なるものである。

五 印学

乾堂の印学を探るには、彼の印譜『乾堂印譜』に附された「附言」が、最も纏まったものである。他には、印箋に識された識語や書簡などから、いくらか補うことができる。

乾堂は「附言」において、まず印の歴史を概観し、続いて「印則」、つまり刻印の依頼に対する条項を決めるに至った経緯を記し、次のように述べる。

予垂髫より、已に此の僻有り。今に至るまで殆んど二十年なり。自ら彫虫の小技を以て性情を怡養し、独り幽人・韻士との楽しみを同じくす。（余が家は、世々崎奥に住み、素より成産有り。惟だ吟風弄月の余、聊か此の技に耽るのみ。亦、性天を養ふの一事たり。敢て世に求むる者有るに非ざるなり。）然れども頻年来、乞ふ者陸續として已まず。人をして人役たるの歎有らしむ。故に印則を述べて以て諸人に告ぐ。

乾堂が「印則」の中で、最も興味のある「七不刻」、つまり篆刻家としての態度を記した部分は、陳鍊の「八不刻、五不可刻」の説に基づいて展開されたものである。

陳鍊は、字を在専、西荃、また鍊玉道人と号す。福建省日安県の人で、後江蘇省華亭、今の松江県に流寓した。明の朱簡の印譜を得て、それに示された教えを師として学んだ。ある日汪啓淑を訪れ、秦漢銅印数千鈕を見るに及び、刀法・篆法ともに大いに会得した。印譜に『秋水園印譜』『超然樓印賞』、詩集に『西荃詩鈔』がある。また、印論に「印説」と「印言」があり、後世印学の規範とされた。

陳鍊は「印説」の中で次のように述べる。

琴に弾ぜざる有り、印にも亦た刻せざる有り。石、佳ならざれば刻さず、篆、配ならざれば刻さず、義、雅ならざれば刻さず、器、利ならざれば刻さず、興、到らざれば刻さず、疾雨暴風烈日祁寒には刻さず、対韻ならざれば刻さず、識者にあらざれば刻さず、これを八不刻と言う。又更に刻すべからざるもの五あり、精詣ならざれば刻すべからず、文義通ぜざれば刻すべからず、篆学に精ならざれば刻すべからず、筆、心に信ならざれば刻すべからず、刀、筆に信ならざれば刻すべからず、斯の道に志あるもの慎まざるべけんや。

乾堂は、これを基に次のように展開する。

琴に弾ぜざる有り、印にも亦刻せざる有り。興到らざれば則ち刻せず（興の物たる形無し。其の発するや、禦ぐ莫し。或ひは賓朋濃話に、物我俱に忘れ、倏爾として章を成す。或ひは、

半夜に夢廻り、躍り起さて筆を落とす。坡公曰はく、「詩は工を求めず、字は奇を求めず、天真爛漫是れ我が師なり。」と。材、佳ならざれば則ち刻せず（石品に数種有り。燈光、凍石、壽山、青田なり。古き者逾々佳しく、新しき者之に次ぐ。我が邦、近年佳石を産し、芸州・筑州を以て上品と為す。日光・備前も亦之に続く。其の余無数なり。印鈕は古雅を貴ぶ。古人云ふ所の「金玉優劣し難きなり」。書匠・画工の為には則ち刻せず（碌々の小技を以て名を銜ふの媒と為す者有り。是れ余の容れざる所なり）。王公・大人と雖も其の人に識趣有るに非ざれば則ち刻せず（方今、内は則ち応に国を富まし、兵を強くし、干戈を把りて社稷を守り、洋虜を視ること螻蟻のごとくなるべし。外は則ち海を航して五洲を横行し、男子の志を致すの秋なり。況んや、其の位に居り、其の職を躡む者をや。徒に、風流・浮華に沈溺して、国に執ゆるの大志を懷かざる者、往々之れ有り。豈に切齒ならずや）。文人・墨客、其の人韻無ければ、則ち刻せず（古人云ふ「人斯の世に生まれて、天下の秘書・靈笈を読み尽くすこと能はざれば、目有るも眯く、口有るも唾、耳有るも聾なり。而るに面上三斗の俗塵、何れの時か掃ひ去らん」と。則ち韻の一字は、其れ世人の対症の藥石か。然かと雖も、今世にして、且つ香を焚き、茗を啜り、清涼口に在るも、塵俗心に在りて、儼然自ら韻に附する者有り。亦、何ぞ三家村の老嫗の口を動かせば、阿彌を念じ、便ち天に昇り仏に成ると云ふものに異ならんや）。酷暑・祁寒、疾風・怒雨には、則ち刻せず（霽日光風倏ち変じて、迅雷震電と為り、狂風暴風忽ち転じて朗月晴天と為る。天機常無し。此の際に遭ふ毎に触発感動有り。平素の氣象に乃ち勃然として、雷を擺し雷を倒し、或ひは龍を画きて晴を点じ、或ひは單刀もて堅を衝き、万夫も披靡するの風致有り。

是れ謂ふ所の「一筆千鈞」なる者なり。印語人品に合はざれば、則ち刻せず（誠実・忠孝の行なひ有りて、之に風流雅尚を加へ、王佐の英才を懷きて、興を風月に寄せ、世に名あるの志を抱きて、耿介自ら分を守り、足るを知るもの。十室の邑と雖も、其の人無きに非ず。是れ余が平生、深く欽慕する所なり。然れども、短を覆ひ、拙を飾り、苗を乱し、朱を奪ふの輩、漫りに、聖賢・豪傑の套語を仮りて、矯り飾り人を欺く、疾むべきの甚だしきなり）。

以上のように、これは篆刻家としての心構えといえるものであるが、ここにも乾堂の篆刻家としての高い識見がみてとれよう。

彼の印論として遺された唯一のものといえる「附言」は、陳鍊の説に追うところが大きいことが分かる。ただ乾堂の印論は、「印説」を彼なりに解釈し、自己の思想を展開したものである。それは単なる刻技のみの解明に終始するのではなく、篆刻はより高い精神性が要求されるものであり、印人は印刻を職業としている印匠とは異なるのだという立場を固持している。この姿勢と思想は、中国古来の思想による「技」より「道」を重んじ、「芸」より「徳」を上位とする主張と軌を一にするものだろう。乾堂は、篆刻は刻者の人格が反映されるものであり、思想と一体化されたものである、という篆刻観を持っていた。

六 御璽および国璽について

御璽・国璽問題に関して（図7・図8）、本節において旧来の印制に触れ、乾堂に係する文献の紹介と年表の作成、そして若干の考察を行う。資料は主として、『明治天皇紀』（宮内庁、吉川弘文館）

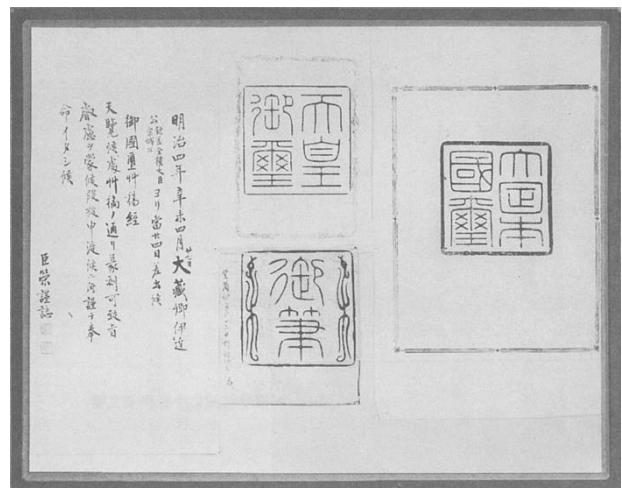


図7 乾堂刻御璽・国璽



図8 国璽草稿並びに小曾根家文書

小曾根家文書、安部井家文書⁽⁶⁾、秦家文書⁽⁷⁾、国立公文書館に蔵する文書⁽⁸⁾、並に『書道全集、別巻Ⅱ印譜日本編』の「年表」を基とした。

この件に関する文献に次のものがある。

- ① 大庭輝 「国璽を刻んだ小曾根乾堂」(前掲)
- ② 氷見徳太郎 「小曾根乾堂」(前掲)
- ③ 尾佐竹猛 「御璽国璽の彫刻」『明治文化』第七卷第八号、昭和九年八月、明治文化研究会
- ④ 石井研堂 「維新当初の国璽」『明治文化』第七卷第九号、昭和九年九月、明治文化研究会
- ⑤ 田山茂 「御璽および国璽の由来」『レファレンス』第一九卷第七号、通巻第二二二号、昭和四十四年七月、国立国会図書館調査立法考査局)
- ⑥ 『国史大辞典』第四卷、第一〇卷(国史大辞典編集委員会、吉川弘文館、一九八四年、八九年)
- ⑦ 『日本の官印』(木内武男著、東京美術、一九七四年十一月)

わが国の印章の制度が確立されたのは、大宝二年二月に施行された『大宝令』によってである。『大宝令』は伝存しないが『令義解』の「公式令」により条文の一部を知ることができる。これには四種の官印の規定が示されている。つまり内印、外印、諸司印、諸国印である。

内印は御印で、印文に「天皇御璽」の四字を、篆書体で二行に陽刻す。現行の御璽は、寸法は方三寸である。『令』に材質や印文などの規定はないが、官印の制作法に関して『延喜式』の「内匠寮式」に詳細に記載されている。内印は銅印で蠟型により鑄造された。

現在内印は、古文書などから六種類確認されている。最古の文書

は、天平感宝元(七四九)年の「聖武天皇墾田等施入勅願文」に捺されたものである。内印は、詔書・勅書をはじめ五位以上の位記、および諸国に下す公文書に用いられた御璽は、侍従職内記係が保管している。

国璽は、日本の国家の印で、明治元(一八六八)年、王政復古を諸外国に通告する文書にはじめて使用された。これは中村水竹が刻した方二寸四分の石印である。その後明治四年清国と日清修好条規を締結するため、全権大使伊達宗城が北京に遣わされた時、方三寸の石印材に乾堂が刻した。更に明治七年、安部井櫟堂と秦蔵六により金印に改められた。

国璽は天皇の大権で、条約書・国書・委任状・証任状や内外人に与える勅記などに用いられる。御璽同様、侍従職が保管し、その事務を掌どっている。

凡例

- 一、本年譜の対象期間は、小曾根乾堂が父竹影に随伴して上京し「天皇御璽」に関して、孝明天皇に奏上してから、現行の御璽完成までとする。
- 一、事蹟の引用文献は、出典をできうるかぎり明らかにしたが、表記は煩雑を避けて略記した。
- 一、事蹟で年代不明であるが、略ぼ推定されうるものは、「この年」又は「この頃」として、その年の項目として記載した。
- 一、年齢は数え年をもって示した。
- 一、字体は、原則として現行の字体を用いたが、原文書の字体を用いた場合がある。
- 一、必要に応じ、読点及び濁点を施し、改行は「／」を適宜施した。
- 一、判読し得ない文字は□で示した。
- 一、文書の形状、寸法などは略した。

御璽および国璽に関する年表

西記	干支	日本 年号	乾堂 年齢	事蹟
一八四八	戊申	嘉永元	21	<p>この年、嘉永紀元戊申／先帝篆刻御好事ノ趣ヲ承リ、父ニ随ヒ上京。往古ヨリ御伝来ノ天皇御璽、文武天皇以来古制ニ復セラレ度、加之、璽文不正之儀奏上仕候エトモ、終ニ不蒙允許、空敷帰国致候。（『自筆履歴書草稿』）</p> <p>五月、中村水竹、勅を奉じて「御府之印」を刻す。後、孝明天皇の御璽を刻す。（『維新当初の国璽』石井研堂、前掲）</p> <p>四月、中村水竹（文化四―明治五、一八〇七―一八七二）が明治天皇の勅令を拝して、天位永昌、御名の璽、永の三顆を刻す。（植谷元「中村水竹」『書道全集』別巻Ⅱ印譜日本、平凡社）</p> <p>十二月十九日、中村水竹「第日本国璽」を鑄刻する。（『維新当初の国璽』前掲）</p> <p>閏四月、この頃、中村水竹が印司に任ぜられ、諸官庁の印を刻す。（水田紀久編「年表」、『書道全集 別巻Ⅱ 印譜日本』平凡社、以下「年表」と略す）</p> <p>十一月十五日、安倍井櫨堂が印司に任ぜられる。（「年表」）</p> <p>五月、中村水竹が印司を辞す。（「年表」）</p> <p>この年、居士東京ニ赴ク時ニ、国璽御改刻ノ儀ヲ政府ニ建白ス。（西琴石「乾堂居士伝」）</p> <p>四月二十三日、コノ草稿、外務卿沢公ヨリ勅旨ヲ被伝候ニ付キ、書写シ奉候処、天覧ノ上、大藏卿伊達公ヨリ大蔵省ニオイテ、再応奏合草稿ノ御旨ヲ賜フ。（『小曾根家文書』）</p> <p>四月二十四日、乾堂国璽草稿を差し出す。（『小曾根家文書』）</p> <p>四月二十七日、明治四年辛未四月二十七日、大藏卿伊達公欽差全權大臣宗城公ヨリ、当二四日差出候御国璽草稿、経天覧候処、草稿ノ通り篆刻可致旨勸慮ヲ蒙候段、被申渡候ニ付、謹テ奉命イタシ候。（『小曾根家文書』）</p> <p>この月、以急使申し入り候、左通今日御沙汰之候間、明十日、第七字外務省へ御出頭可有之候。四月九日、助川成種、小曾根乾堂殿、御達、小曾根乾堂、右出仕差免候事、未四月、外務省。（『小曾根家文書』）</p> <p>五月三日、今度、御国璽彫刻之儀、当省出仕小曾根乾堂へ申付候処、御品柄之儀ニ付、桜之間上段ニ於テ彫刻為仕度、此段申進候也。辛未五月三日、大蔵省、辨官御中。</p> <p>尚、本文之場所若御差支有之候ハバ、清淨閑静之場所御撰、右御用中御渡有之候事。御別紙申出之趣、桜之間におゐて彫刻可為致事。辨官印。（『小曾根家文書』）（『公文録大蔵省之部』）</p> <p>五月十日、伊達公より従来の御璽印影を示される。（『小曾根家文書』）</p> <p>五月、宮中桜の間において大日本国璽を石刻する。更に天皇御璽を石刻する。（『太政類典』）</p> <p>五月、御璽由来を建白す。（『上書建白書目録』自慶応四年至明治十三年）（本文略）</p> <p>二月十二日、上京三拾区／富小路二條下ル／俵屋町／秦蔵六／勸業場用掛／申付勤中帯刀／差免然事／明治六年二月十二日／京都府知事長谷信篤／（『秦家文書』）</p> <p>二月十三日、上京三十一区／富小路吉町／勸業場用掛／秦蔵六／今般大日本国璽／天皇御璽御／鑄造御用被／仰付然間職具／所持至急東上／宮内省可罷／出然事／明治六年二月十三日／京都府知事長谷信篤／（『秦家文書』）</p> <p>三月二十五日、秦蔵六／御璽鑄造御用ニ付／出仕申付候事／但出仕中一ヶ月金式拾円被／下候事／明治六年三月二十五日宮内省／（『秦家文書』）</p>
一八七二	壬申	明治五	45	
一八七三	癸酉	明治六	46	
一八七〇	庚午	明治三	43	
一八七一	辛未	明治四	44	
一八六九	己巳	明治二	42	
一八六八	戊辰	明治元	41	
一八六七	丁卯	慶応三	40	
一八五六	丙辰	安政三	29	
一八四八	戊申	嘉永元	21	

一八七三	癸酉	明治六	46	<p>二月二十八日、是迄、天皇御印章御璽文字有之。外邦等ニ対シ候テハ、尊大ノ旧習ニモ相見、頗ル御失体ニ涉リ候ニ付、御新制ニモ可相成候間、御印面文字審考可有之。并各国帝王印章ノ舛裁取調、其陳可有之候也。第二月二十八日、正院、左院。(「天皇御印章印面之字ノ下議」、「公文録左院之部、明治六年起一月止四月」)</p> <p>三月十八日、今般、国璽等彫刻被仰付ニ付、右御用中宮内省エ出仕可致事。明治六年三月十八日、左院。(同左)</p> <p>四月十三日、癸酉四月十三日、国ノ字ヲ改メ舛稿可差出旨ヲ、古賀少丞ヨリ伝ヘラル。因テ即日再上候。(「小曾根家文書」)</p> <p>四月十三日、御国璽ト同シク、篆体如故簿フチニシテ再稿ノ旨ヲ賜フ。(「小曾根家文書」)</p> <p>四月二十三日、「国璽御璽ヲ鑄造ス」(『太政類典第二編』第四二卷)</p> <p>○二月四日、(宮内省伺)</p> <p>○二月二十八日、左院ヘ下問</p> <p>○三月二十四日、左院答議</p> <p>○四月二十三日、式部寮伺</p> <p>○四月二十二日、宮内省掛合</p> <p>○二月四日、宮内省伺、他の本文略</p> <p>大日本国璽、天皇御璽、右従前御伝来ノ御品ハ銅刻ニ候處、去ル辛未年、從二位伊達宗城清国ヘ被差遣候、□字面不宜趣ニテ、御改相成候ヘ共、出帆前早卒ニ際シ石刻相成、且刻面モ不且様ニ相見候、右ハ至重ノ御宝器ニ付、金材ヲ以テ鈕迄御鑄造相成、天下ノ良工相撰改刻可被、仰付儀ト内評及ヒ候可然御評議有之度候、此段相伺候也。</p> <p>四月二十三日「国璽御璽ヲ鑄造ス」(『太政類典第二編』第四二卷)(本文略)</p> <p>○二月四日、宮内省伺</p> <p>○二月二十八日、左院ヘ下問</p> <p>○三月二十四日、左院答議</p> <p>○四月二十三日、式部寮伺</p> <p>○四月二十二日、宮内省掛合</p> <p>七月十三日、御璽彫刻御用中、十三等相当月給金二十円被下候事。(「小曾根家文書」)</p> <p>九月六日、乾堂「口上書」を宮内省に建白す。(「諸建白書」明治六年自四月至十二月)(本文略)</p> <p>九月十九日、乾堂「不顧御叱奉再願書」を宮内省に建白す。(「諸建白書」(本文略))</p> <p>九月二十五日、乾堂「御璽之儀ニ付謹勿奉建白候」を左院に建白す。(「諸建白書」(本文は「結語」に掲載))</p> <p>九月、小曾根乾堂印司を退く。(「年表」)</p> <p>十月、左院事務総裁後藤象二郎、太政大臣三條実美に乾堂の建白書を上陳す。(「諸建白書」)</p> <p>十月三日、御璽彫刻御用被仰付候間、職具所持至急東山宮内省江可能出候事、知事長谷信篤代理、京都府七等出仕国重正文。(安部井家文書)</p> <p>十月四日、別紙左院上申、御璽篆刻之儀ニ付建白書供高覧候也。(「諸建白書」)</p> <p>十一月二日、御璽彫刻御用申附候事、宮内省。(「安部井家文書」)</p> <p>十一月九日、御璽彫刻御用滞在中、為御手当一箇月金三拾五円被下候事、宮内省。(「安部井家文書」)</p> <p>十一月九日、秦蔵六ノ同祝之助ノ御璽鑄造御用済ニ付ノ帰京申附候事ノ明治六年十一月九日ノ宮内省ノ「(秦家文書)」</p> <p>四月三日、御璽彫刻御用済ニ付帰京申付候事、宮内省。(「安部井家文書」)</p> <p>七月二十日、「院省使長官ヘ回達」(「三府開港場アル県ノ長官ヘ回達」(本文略))</p> <p>七月二日、宮内省上申</p> <p>七月四日、外務省ヘ掛合</p> <p>七月十三日、外務省回答</p> <p>七月十三日、宮内省ヘ通達</p> <p>七月、外史議按</p> <p>七月二十日、宮内省ヘ掛合</p> <p>七月二十日、宮内省上申</p> <p>七月七日、宮内省ヘ通知</p>
一八七四	甲戌	明治七	47	

乾堂が印司を退き、黄金を以て御璽・国璽を製作する事を断念した事実に対して、誤って伝聞されている。『明治天皇紀』第三、「明治六年二月四日」の条に次のようにある。

四日 古来銅刻の御璽一顆ありと雖も、年を経て其の印文明かならざるを以て、明治四年大藏卿伊達宗城を清国に差遣し條約を結ばしむるに当り、大藏省出仕小曾根栄をして之れを改刻せしめ、且始めて国璽を刻せしめしが、二顆共に石材なるのみならず、忽卒の作なるを以て字体典雅莊重を欠き、至重の宝器に適せず、栄、更に黄金を以て謹製せんことを欲し、去歲四月太政大臣に上書し、又十一月左院議長に陳ずる所あり（当時栄左院五等書記生たり）是の日、宮内卿徳大寺実則、黄金を以て御璽・国璽を製作せんとするの議を正院に提出す、廟議之れを聴納し、其の材料は神宮の旧樋代を用ゐることと為し、同月十三日京都府勸業場御用掛秦蔵六に鑄造の事を命じ、四月四日栄に彫刻を命ず、然るに九月二十八日に至りて栄を罷め、更に京都印司安部井音人に之れを命ず、蓋し御璽・国璽共に其の下彫を蔵六に命ずることとなれるを以て、栄、印文の典雅を捐する処ありと為し、九月之れを止められんことを宮内省に再請せしが、用ゐられざるを以て自ら進退を決せるものの如し。

この記載が略事実を伝えたものといえよう。乾堂は、京都府、勸業場御用掛の秦蔵六に印の下彫りをさせる事が、何としても納得できなかったようである。これは、乾堂の篆刻家としてのプライド、そして忠臣愛国の姿勢がそうさせたのであろう。乾堂が位階を求めたり、桜の間上段で刻す事を望んだために印司を解任された、といった経緯ではない。

また、金印改刻が、乾堂が明治四年に石刻した印が典雅でないから行われたのだ、といかにも乾堂の石刻が拙劣であった、と思わせる記述があるが、これも意味が違ふ。これは乾堂が、自分が刻した石刻の御璽・国璽を金印改刻したい旨を建白した時、その理由として申し述べた事である。

更に、現行安部井櫟堂と秦蔵六により完成された金印が、乾堂の布字に基づいたものである、とされているが、乾堂の印稿と櫟堂による金印とは字形は相違している。むしろ、乾堂が明治五年に建白書に付した古来の「天皇御璽」の璽様を参考にしたのではないかと推測される。

今後、御璽・国璽問題は、更に資料を整理し、史実を正確に遺したく考えている。

七 評価

乾堂は、天保十五（一八四四）年十七歳の頃、篆刻において、すでに非凡な技倆を有していた、といわれている。

嘉永元（一八四八）年二十一歳の時、自刻の印譜・印論を発売しており、当時一級の文化人に序を嘱している。彼らは、こぞつて乾堂の篆刻と人となりを称讃している。ここで二、三紹介してみたい。

まず篠崎小竹の序は、嘉永元（一八四八）年、乾堂二十一歳の時のものである。

曾乾堂、其の家君に従ひて長崎より来たり訪ふ。弱冠なれども隸書を善くし、最も篆刻に精し。聞く、清人の来舶に託して、其の姓名を刻するを請ふ者、続々として絶えず、と。其の印譜を閲すれば、則ち古今の諸体悉く備はり、人をして欣賞して手

を放つ能はざらしむ。其の居宅を問へば、則ち五十年前、予の崎に遊びし時に、寓宿せし所なり。当時の主人の貞蔵は、乃ち乾堂の祖父なり。而して家君猶ほ襁褓に在りしなり。因りて往事を語る。父子驚き喜ぶこと世を隔つるの人に遇ふがごとし。嗚呼、予の西游せしや、乾堂と年齒相如けり。而るに文芸もて人を驚かすこと乾堂の如くなる能はざりき。今や老いたり。乾堂今より駿々として止まらずして、予の孫を見るに及べば、則ち其の名を成す所、豈に特だに隸書と篆刻とのみならんや。乃ち其の譜の首に題して以て之を勉めしむ。

嘉永紀元戊申中元の前日、浪華の小竹散人篠崎弼

次に、草場佩川の序は、嘉永二（一八四九）年、乾堂二十二歳の時のものである。

近世技を抱きて漫游する者、劍槍と曰ひ、書画と曰ひ、篆刻と曰ひ、一に何ぞ粉々たるや。蓋し聞く、元和偃武の後も、猶ほ真劍を以て技を試みしと。而るに今は則ち竹刀もて相当たるのみ。槍も亦之に類す。画家のごときも刷毛の披拂、復た当時の筆力・骨法無し。書も亦然り。人の言に曰はく「戦血已に乾き、鉄氣漸く衰ふ」と。是に於いてか「天下は劍に氣無く、世間は錢に神有り」の一聯出づ。世情の浮薄に趨くこと、技芸に觀ても亦知るべし。顧みるに、劍槍や、書画や、篆刻や、固より以て概視すべからざるなり。但し今の漫游する者の書画・劍槍は、或ひは將に、名利の囿たるを免れざらんとす。篆刻に至りては則ち糊口の資と為さざる者甚だ罕れなり。然りと雖ども、其の鉄を以て筆と為し、字体極めて古へを仿ひ、以て不朽を金石に托するは、名は糊口に在るも其の実は俗ならず。書画・劍

槍は、名は文武に属すれども、其の実は慙づる有り。長崎の曾乾堂は、性に雅尚有りて、氣調高逸、篆・隸を善くし、最も鉄筆に妙なり。能く鉄氣を存して、以て文武を兼ねる者と謂ふべし。況んや、産業には素有り。家世々豪富にして、糊口に意無きをや。故に其の伎倆、自づから超凡技俗にして、遠邇争ひ求め、声名藉々、已に海外に暨ぶと云ふ。崎中には、古へより名手有りて、法を取るべし。且つ、舶載の佳譜の摹倣すべき者は、購ひ蔵すること寡無し。故に漫游して他に求むるに意無し。而れども、四方の同好、来たりて食客と為り、坐して劇切の益を受く。又、其の伝を広めて以て之を樂しむ。此れ謂ふ所の「甚だ罕なる」の中に於て、又「甚だ罕なる」者なり。余、斯の譜を閲し、嗟賞して已まず。以て人に語りて曰はく「乾堂は、春秋猶ほ富む。其の技の道に進むや、他日の成る所、未だ測るべからず」と。遂に並びに此の語を録して之を還す。時に嘉永二年仲夏、草場韓撰す。

広瀬淡窓の序は、嘉永四（一八五一）年、乾堂二十四歳の時のものである。

乾堂の来たるや、印譜を以て序を乞ふ。予曰はく「朝に門を叩く者は印工なり、暮に堂に登る者は鑄家なり。言を乞はざるもの無し。始めは則ち勉めて応ぜるも、後は則ち固く拒む。我は復た馮婦たらざるなり」と。乾堂曰はく「我豈に篆刻の人ならんや。迹を寓するのみ。君も亦た筆墨を弄ぶ。呼んで筆墨の師と為して可ならんか」と。予曰はく「然らば則ち何為れぞ言を迄ふ」と。乾堂曰はく「我の人を見るは、將に此れを以て刺に代へんとす。若し其の人と為りを明らかにすれば則ち足る」

と。乃ち数句を以て首に題す。我乾堂を觀るに風骨峻然、末技に専らなる者に非ず。具眼の人に在れば、自ら當に之を識る。辛亥の孟冬に、広建書す。

商・周邈たり、知るを得べからず。

秦・漢治を為し、用ひて公私を弁ず。

宋・元以降は、其の風寝く移る。

雅玩相尚び、正を守りて奇を出だす。

法として備へざる無く、鑽鑿鑪錘。

其の材維れ何ぞ、金石銅磁なり。

一刀もて万象し、翥鳳・蟠螭。

煌々として日のごとく、斯れが文詞を華にす。

我が国の良匠にして、名を得る者は誰ぞ。

高孟彪の後、源君頤を推す。

曾子守辱、奉じて以て師と為す。

鼎文玉符、取舎して遺さず。

沈深刻苦して、心手相ひ随ふ。

名士争ひ佩び、一時に噪然たり。

人を殺すの寸鉄、我が毛錐と異なれり。

之を邦国に用ふれば、其の鋭何ぞ。

道ふこと勿かれ篆刻は、壯夫は為さずと。

此れを書して贈と為す。播人越巖。

次に現代諸家の評価をみてみたい。

わが国にも江戸時代に行われた古体派の作風を守ってゆくものに対し、新しい碑学派の人たちの篆刻を追求する風潮が起ってきた。そして、それが従来の古体を守る保守派に対し新し

い勢力をもつてますます大きく発展していった。小曾根乾堂は長崎の人。若くして篆刻に精しく、清人の来航するものでその姓名をかれに刻することを続々として絶えなかったという。

（中田勇次郎「日本印章概説」『書道全集別巻Ⅱ印譜』前掲）

古体を宗とする雄渾な刀風を確立した。

（水田紀久「小曾根乾堂解説」『書道全集別巻Ⅱ印譜』前掲）

篆刻は最も得意とするところで、十代京阪の名流を歴訪した頃既に天才を称讃され、後長崎に来遊した多くの清国人とも交を訂して、内外に盛名を馳せた。明末清初の鄙俗の近体を拝して、秦漢の古体を学ぶべきことを唱え、高い見識と強い自信を以って斯界を睥睨した。

（小林斗盦「作家小伝」『定本書道全集、別巻』前掲）

長崎の印人小曾根乾堂は自慢我慢金慢で三まんと綽名されてゐた。隸書は近來の上手で、蘭竹なども仲々よく描いた。東京へ出て來た時、山本拝石が訪ねると、どうも忙しくてたまらない。華族方の印を頼まれるので、一つ宛刻つて上げるにしても一年はかゝるから、と吹いていた。日本国と外国との交渉があつて、是非急に大切な印が入用であつた。これが調製を乾堂に命じると介様な印は黄金か玉で調製する筈である。若し国帑の御都合があるならば、失礼ながら私から献上仕り度い。其代り一と間拝借して調製は潔斎して、そこに詰めて居たいなど、色々な面倒な事を申出でたが、とにかく石で出來た。後に此の印は乾堂の印稿に拠つて安部井櫟堂が拝刻し、秦蔵六が鑄成した。乾堂の駄々を静めるために大久保さんに随行させて支那へ

遣ったといふ噂を聞いている。

（三村竹清「二三の篆刻家の話」『三村竹清集』五、

前掲）

このように乾堂の篆刻の評価は生前より高く、現在まで引き継がれている。が、三村竹清は、乾堂の申出など、史実を誤って伝聞した箇所があり、更に乾堂の人となりを揶揄する記述が見られるが、これは乾堂のあまりに謹厳な面が誤解されたのであろう。

八 おわりに

本研究は、これまでほとんど知られることのなかった小曾根乾堂の事績を明らかにするとともに、彼の芸術面での業績、中でも篆刻家としての成果を提示することにある。

乾堂は、印学や御璽・国璽問題で触れたごとく、印人としての自尊心は並々ならぬものを持っていた。乾堂の最後の建白書に次のように述べているが、彼が篆刻にいかに関心したかがわかる。

御璽之儀ニ付謹テ奉建白候

今般黄金／

御璽御改替之儀ハ 皇土開闢以降之御盛典ニ之而／歴然史書御掲載之御事柄故尋常之御器物与／混同仕候而者不堪恐縮之至榮伏而惟ルニ／御国璽御璽共ニ 列聖孝繼恭翼萬国帝王江も／御威信ヲ被為布候御国宝ニ付乍恐卑賤輕輩之篆／文ニ之而鑄物師彫刻之 御器与者難奉存且又／篆刻与鑄工与者其道自ラ異リ若混同仕候ハ恐／くハ潔淨淳古之風致を捐し 御歴代之御重／器与者相成間敷奉存候即□御器

御鑄造奏功ニ付／御璽文ニ至テハ更ニ 朝廷ニおゐテ周□其技倆□然者／御採用被為遊恭く／宣示を賜り候儀公正之御朝議与奉存候聊彫／虫之小技と雖偏く／帝道興張之御盛典ニ付不憚忌諱謹而／奉建言候也／

明治六年九月廿五日

東京第一大区小一区／祝田町旧立花邸内／長崎県平民／小曾根栄

小曾根栄印

／四十五歳八カ月／左院御中／

彼の篆刻家としての業績は、まさに優れたもので、日本篆刻史の中にしかと記述されるべきである。

筆者は今後、乾堂の開明思想家としての思想と実行、そして彼は詩・書画・篆刻の四絶をよくしたが、篆刻以外の芸術面での業績を明らかにしたく考えている。彼の篆刻はもちろんの事、篆書作品（図9）や隸書作品（図10）は、明治書道史上特筆すべき内容を持っている。

本研究を執筆するにあたり、小曾根家十七代当主小曾根吉郎氏並びに御令室育代様、安部井昭、秦蔵六、石井道郎、長崎市立博物館、京都大学附属図書館、長崎県立図書館、長崎新聞社、長崎大学附属図書館経済学部分館、長崎県立美術館博物館、板橋区立郷土資料館、国立公文書館に多大なるご指導・ご配慮をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

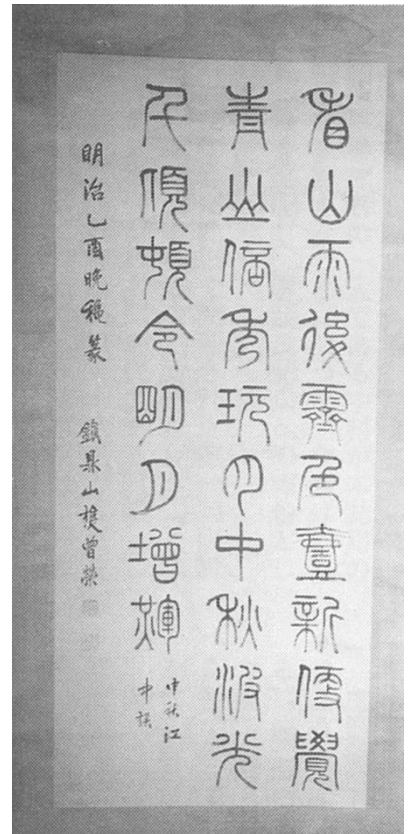


図9 乾堂書篆書

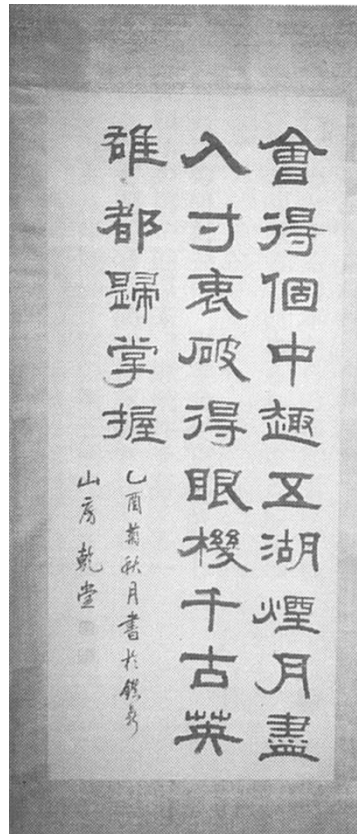


図10 乾堂書隸書

【注】

(1) 独立は、俗姓は戴、名は笠、幼名は観胤、字は曼公といった。荷鉏人と号し、明国浙江仁和の人である。一六五三年、長崎に渡来し、隠元に就いて得度した。そして名を性易、字を独立、号を天外一間人と改めた。中国にいた時から、書名はすこぶる高く、六書の学に精しく、篆刻に深い素養を持っていた。著述に『斯文大本』があり、書論が含まれている。篆刻で現在伝わるものは、彼が帰化する時携えてきた二顆十面が唯一のものである。中井敬所が『独立禅師印譜』として編んでいる。彼は長崎県聖寿山広

善庵において寂した。七十七歳であつた。宇治黄檗山万松岡に葬られている。埼玉県野火止の平林寺に戴溪堂があり、詩仏と本像、碑文が伝えられている。

(2) 心越は、名は興禱、初名兆隠、心越と字す。東皋・樵雲と号した。俗姓蔣氏、明国浙江省杭州の人。寿昌無明禅師の法嗣。杭州の永福寺に住していたが、一六八一年澄一禅士の招聘を受けて、わが国に来朝し、興福寺に住した。ついで江戸に出て、水戸光圀に聘せられ、水戸の大徳寺に住した。公は寺名を寿昌山祇園寺と改めて、開山第一世となした。詩文書画をよくし、弹琴に長じており、『琴譜』が存している。篆刻に優れ、刻風は明末清初の今体派に属している。同寺の宝物に『開山自刻印鑑二冊』がある。心越は陳策の『韻府古篆彙選』を将来した。浅野斧山は『東皋全集』二冊を編し、祇園寺所蔵印の印影を載せている。

(3) 古賀十二郎は、明治十二年、長崎市五島町に生まれた。長崎史研究の第一人者であり、現代長崎学の祖といわれる。著書に、生前刊行された『長崎市史』風俗編、『西洋医学伝来史』『長崎絵画全史』があり、歿後『丸山遊女と唐紅毛人』(上・下)、『長崎開港史』『長崎洋学史』(上・下)などが刊行された。

(4) 星海(嘉永四く明治三十七年「一八五一く一九〇四」)は、乾堂の長子。名は晨太郎、星海はその号である。小曾根家第十四代当主。

(5) 乾堂や小曾根家代々当主に関わる顕彰は、これまで数回なされた。まず昭和四年六月、乾堂の銅像が琴平神社境内に建設された。その折小曾根邸において遺墨展覧会が開催された。続いて、昭和九年十二月、小曾根乾堂翁五十年祭が銅像前にて執行され、遺墨展が皓臺寺において行はれた。更に昭和五十三年十一月、小曾根乾堂生誕百五十年記念展が、長崎市立博物館において開催された。その後、小曾根家より、書画類一六九点が、長崎市立博物館に寄贈されたが、その書画名品展が、平成六年、七年、九年に三回開催された。

(6) 安部井家文書は、安部井櫟堂を曾祖父とする安部井家に伝わる文書をいう。

(7) 秦家文書は、秦家に伝わる文書で、当代は五代目である。秦氏の源流は古く、中国や朝鮮から帰化し、特殊技能をもつて時の朝廷や諸大名に仕えたといわれている。

(8) 国立公文書館に所蔵される「諸建白書」(明治六年自四月至十二月)に、乾堂の建白書の実際の原本が含まれている。

第二節 富岡鉄斎の篆刻と篆刻論

一 はじめに

わが国の印人伝における唯一の専著と言える中井敬所の『日本印人伝』⁽¹⁾をさまざまな文献・資料より拾遺し補訂することを課題としている。篆刻の専家はもちろん、篆刻に関わる傍系の文人・芸術家の研究も併せて進めている。

山田正平は、富岡鉄斎(天保七〜大正十三、一八三六〜一九二四)に関して、次のように述べる。

印を沢山聚める趣味の人、所謂印癖家と云う人達があつて、何千鈕にも及ぶ、これは観て楽しむ側で、翁のは沢山の印を使用するので使用する側の印癖家と云いたい。(略)儒仏、神仙絵に依つて用印も工夫されて居り、赤い印が色彩家の鉄斎にとつて重要な絵の一部分でもある。

(「鉄斎と篆刻」『三彩』第三八号、美術出版社、一九五〇年一月)

また、正平は鉄斎展を参観するために、片道の列車の切符を持って出かけたらしいとの逸話が残されている「父を語る」(山田梅枝談『正平文人画』)。

この一事からいかに正平が鉄斎に私淑していたかが分かる。一人の篆刻家を惹きつけてやまぬ鉄斎は、多彩で魅力に富んでいる。

彼の篆刻面での功績は、彼の芸術における全体像を探る上で欠くことはできない。同テーマの研究に野中吟雪氏の論考がある⁽²⁾。本節では、近代文人画の巨匠富岡鉄斎における篆刻面での業績と篆刻論を探る。過去に本テーマで執筆したが、新知見を加え、改めて考察するものである⁽³⁾。

一一 富岡鉄斎の篆刻と篆刻論

1、金石との出会い

富岡鉄斎が金石趣味を持つことになったのは、文久元年(一八六〇)の長崎への旅が、その端初とされている。鉄斎二十六歳の時で、彼は小曽根乾堂・木下逸雲・祖門鉄翁をはじめ、清国の文人と交際した。小曽根乾堂は篆刻に妙腕を振った人で、「御璽」「国璽」を刻した。鉄斎は乾堂の許に身を寄せており、当然印や当時中国から舶載された明清の書画を目にしたであろう。本田成行(蔭軒)が『富岡鉄斎と南画』湯川弘文社、一九四三年一月)において「鉄斎翁が或は篆刻で身を立てようと考へたことも多分此の乾堂の感化であつたらしい」と述べる。また注目すべき事は、長崎遊学中、骨董店で見つけた「千人万人中一人半人知」の印を購入していることである。この事は、鉄斎がこれ以前に、相当印に興味を抱いていたことの証左となろう。

鉄斎の金石趣味の始まりは、ここに述べた長崎遊学の時であろうか。むしろこれ以前大田垣蓮月との出会いに、それが求められない

だろうか。蓮月は歌をよくした尼僧であり、繊細優美な書とともに、自詠を彫り込んだ蓮月焼で有名である。蓮月焼は、煎茶用の急須に和歌を釘彫りで刻みつけたものが多い。鉄斎は、蓮月の埴細工の仕事の手伝いをしており、この時、鉄斎は焼き物、そして文字を土に刻み込むという、金石の世界を目の当たりにしたと考えられる。鉄斎が蓮月と同居したのが十五歳頃とされている。後年鉄斎は、土を捏り、陶器を製し、陶印を手がけている。彼の金名趣味の端緒といえる。

2、所蔵印

鉄斎の所蔵した印は、彼の晩年には一千顆に達していたという。若年期使用した印は大半失われており、晩年使用した印にも現存しないものがある。

二〇一〇年十月『鉄斎研究』（第七三号）において「富岡鉄斎用印大成」が鉄斎美術館の編集により刊行された⁽⁴⁾。鉄斎が没した時に手許に遺されていた三八五顆の印すべてを収載したものである。

鉄斎の所蔵印の特色は、数点挙げられる。まず彼自身刻した印を含むことである。次に日本・中国の古今の名家の印、そして古印、また同時代の篆刻家や文化人の印があり、それぞれ由来がある。これは鉄斎の鉄斎たる所以といえようが、来歴ある印の摹刻印があることである。豊臣秀吉の太閤印・岳飛の印・狩野探幽の印・関羽の印などである。

鉄斎の所蔵印は多様で、彼の古書の蒐集とも通じており、彼の多面性を示しているといえる。

また、成語印を多く含んでいる。印の性格上、語句は二〜十字と短い。鉄斎の画業での姿勢や、人生哲学が端的に表現されたものが多い。主として次の数点に分類できそうである。

一、読書と旅行

「読万卷書行万里路」（万卷の書を読み、万里の路を行く）「山水為侶」（山水を侶と為す）「山水友」

一、古典を現在に生かす

「従古」（古に従ふ）「今人古心」「師古品」（古品を師となす）

一、金石の愛玩

「金石癖」

一、画家としての姿勢

「以画說法」（画を以て法を説く）

一、蘇東坡への敬慕

「東坡癖」「聚蘇書寮」「東坡同日生」

一、天子への忠誠心

「天賜清福」（天、清福を賜う）「賜楓書樓」「天子知名」（天子、名を知る）

一、人生哲学

「老而益壯」（老いて益ます壮なり）「老而益学」（老いて益ます学ぶ）「曼陀羅窟」「都門狂生」

一、思想

「学好三教志答四恩」（学は三教を好み、志は四恩に答う）

3、自刻印

鉄斎は生涯にどのくらいの篆刻を試みたのであろうか。富岡益太郎は、明治以前に使用した印は、その殆どが喪失したと考えられると述べており、明治以前の印の確認は、現在では難しい。喪失した印の中には、鉄斎の自刻印も含まれていたであろうことは、想像に難くない。

鉄斎自刻として『無量寿仏堂印譜』(全五冊・原鈴本、富岡益太郎編、寸紅堂、一九二六年一月)に五〇顆載せている。この中に、鉄斎が図柄を考え専門家に刻させた印、布字迄した印、印材のみ制作した印などを含んでいる。

『無量寿仏堂印譜』所載の自刻印以外で、鉄斎の刻印として確認された印を掲げる。

- 一、「赤松連城」「風月道場」「天心」(『鉄斎研究』(二〇一七)(上記番号は掲載号数、下記番号は図版番号、以下同様)
- 一、「無事小神遷」「无念尔祖聿修厥德」(『魁星閣印譜』全五冊・影印本、芸艸堂、一九八三年一〇月)
- 一、「笑矣乎」「鼓缶而歌」「雅邦」「勝園」「克己斎」(『鉄斎』文人書譜一一、青木勝三著、淡交社、一九七九年十月)
- 一、「富岡百鍊字無倦之章」(掲載番号九)「鉄斎一八」「老而益壯二三」「鉄斎二四」(『鉄斎大成』続巻、鉄斎美術館、便利堂、一九八二年六月)⁽⁵⁾
- 一、「今人古心」(『墨』一〇号、芸術新聞社、一九七八年一月)

鉄斎自刻印の特徴について考えてみたい。まず第一点は、現存の篆刻を見ると、「鉄史」「受孔子戒」を刻した三十歳代から、「臺道人」「今人古心」を刻した八十歳代迄、生涯にわたって篆刻を試みている点である。第二点は、材質、文字、印形などの多彩さである。鉄斎は印にできるものなら、どのような素材でも用い、自由な発想で刻した。一つの型式に墮することがなかった。第三点は、布字の自由さと、刀法の自在さである。決して器用といえない刻し方により、専門家のような巧緻な技法はないが、素朴な一刀刻りの雅味あふれるものである。布字も、画と文字を組み合わせたものが多く見られ、

画家の眼でもってなされていると思われる。第四点は、側款の刻の妙、鋭さである。柔らかな筆では表現しえない、刀の厳しさがある。

4、愛蔵印

鉄斎は所蔵印の多くを書画作品に押している。どの印も、それ相応の愛着を持っていたであろうが、彼が特に愛玩した印がある。

一八九一年、二十六歳、長崎へ遊学した時、骨董店で見つけた「千人万人中一人半人知」そして某人から贈られた「鍊道人」が挙げられよう。次に、唐代の懷素が愛蔵していたという漢印「軍司馬印」、彼が尊敬した呉昌碩の刻した「東坡同日生」、そして辰馬家の家宝ともいえる「山碧水明」である。

ここでは「山碧水明」印を取り挙げて、彼の印への執心をみてみたい。

「山碧水明」印は、頼春水が布字をし、山陽が刻した父子合作になる、扶桑木の雅趣に富んだ名印である。頼氏と交際の深かった西宮の辰馬悦叟は、山陽の子三樹三郎に、しばしば醸造した美酒を贈っていた。そこで謝礼として、同印が悦叟に贈られた。

鉄斎は、悦叟や三樹三郎と交遊があったばかりでなく、明治五年から七年末迄、山陽の旧居山紫水明処に寓居し、そこで一子謙蔵が生まれた。後年には、頼家が人手に渡っていた山紫水明処を買い戻すことになり、鉄斎が幹旋をした。このような因縁もあり、彼は同印を手に入れることを望んだが、悦叟は没し、この話を持ち出すことができなかった。後年悦叟の墓銘を撰書し終えた時、鉄斎は、この時をはずしては機会はないと考え、悦蔵にその旨を書き綴った手紙をおくった。手紙を受け取った辰馬家では困惑したが、鉄斎との長年にわたる交友を考えれば、無下に断るわけにもいかず、鉄斎には内緒で彼の存命中のみ貸すことになった。鉄斎は、印を手に入れ

た喜びで、山紫水明処図を描いた時は、この印を押し得意になっていた。『鉄斎研究』に取り挙げられた山紫水明処図「二六—二〇」「三九—二二」「四七—一九」「四一—三〇」等には、この印を押し、印の由来が書き込まれている。

このように鉄斎の印への執心は、決して単なる骨董好きから発したものでなく、印の内容や来歴に関心を抱いたからである。

5、偽印

鉄斎の作品は、偽作や贋作が多く、真作に対して数倍にのぼるとさえいわれている。「鉄斎の絵を見たら偽物と思え」とか「鉄斎に保証なし」と口伝えされるのも宜なるかなである。戦前に開かれた『鉄斎名作展』の出陳作品は、すべてが贋作で、用いられていた印もすべて偽印だったといわれている。『鉄斎』正宗得三郎、平凡社、一九六一年十二月）

『富岡鉄斎』（『近代の美術』第四号、一九七一年五月）において、青木勝三は「偽印さまざま」で三〇顆の偽印を取り挙げ、真印との比較を試みている。中に精巧に作られた印があり、真偽に苦しむものがある。

鉄斎の書画を鑑定する時、印が一つのポイントとなることは確かである。しかし富岡益太郎は「鉄斎の書画の真偽を見究めるのは非常にむずかしく、印章だけを根拠に真贋を論ずることは、かえって人を誤る恐れがある」（『魁星閣印譜』序）と警告している。

印は長年使用すれば、印面の消耗もあり、破損もある。また印泥のつけ具合、押し方により印影が全く違ってくるのである。

6、印譜

鉄斎の印譜に、生前のものとして、正宗得三郎の『鉄斎』（平凡社、

一九六一年十二月）によると、題字に「印何疊々」と書かれた、数百顆の印を押したものがあつたという。また、『瓶史』（一九三四年新春特別号）によると、題簽に「文人多癖」と墨書された、蔵印三〇顆を押した、上下二冊本が存したようである。また、鉄斎は、よく画帖に印を押して、人に贈ることがあつたが、その一冊が、東京国立博物館資料館の所蔵となっている。同譜は、跋文から一子謙蔵が押印し、鉄斎が刻者と印材を墨書したものであることがわかる。鉄斎蔵印三十六顆を折り帖に押している。桐箱題簽に「附之一咲」、また帙題簽に「鉄叟一癖」、折り帖題簽に「不值一錢」と墨書している。同譜に自刻印五顆を収めているが、『魁星閣印譜』に未収録の朱文印「桃華仙館」が押されている。

鉄斎没後、代表的な印譜三種が編まれている。その第一は、大正十五年一月九日、寸紅堂が三百部限定発行した『無量寿仏堂印譜』（一帙四冊）である。原鈐本の大冊である。第二は、昭和四十一年文華堂より刊行された『魁星閣印譜』（一帙二冊本）である。第三は、昭和五十八年、芸艸堂より刊行された『魁星閣印譜』（二帙四冊本）で、これは印刷本である。鉄斎用印三五八顆が収められており、鉄斎印譜の決定版ともいえるものである。

これら以外では、『鉄斎印譜』が、昭和三十五年五月五日、美術倶楽部出版部より刊行されている。また、昭和四十二年五月に、京都の東福寺山内東光院で、園田湖城を中心とする東山印社主催の「日本印人篆刻・遺墨・著書展観」が催された。その目録によると、同展に、小笹燕安居の蔵本『鉄斎自刻自用印譜』一卷が出陳されている。

その他、『鉄斎大成』等作品図録に、鉄斎の印を取り挙げている。中でも『富岡鉄斎』（『文人画粹編』第二〇巻 中央公論社 一九七四年十月）は、『魁星閣印譜』四冊本に未収録の印影を、原書画作品

より五〇顆収録している。

7、用印法

鉄斎は「儂は意味のない絵は描かない。儂の絵を見るなら、まず賛を読んでくれなされ」と終始口にしていた。この事は鉄斎の画業を正しく理解する上で、極めて重要なポイントである。つまり鉄斎は単なる職業画家を目指したのではなく、画は深い教養の表出で、人格の表現である、と考えていたのである。

また鉄斎の書画を見る時、印を仔細に見る必要がある。鉄斎自身「無意味な印は捺さない」と語っており、押印に細心の注意をはらっていた事がわかる。

画題や、描いた経緯により印を使いわけると。たとえば、蘇東坡に関するものであれば「東坡同日生」を、友人の長寿を願うものには「如南山之寿」といった具合である。印を贈られた時は、刻者に敬意を表し、その刻印を押している。

用印の方法は、むしろ古式にのっとったものが多い。ただ、意表を衝いた場所に押されたものや、賛の上や、画の大きさに不釣り合いとも思える大印を用いたり、創意を盛りこんでいる。それらが実に画面にピツタリとおさまっており、効果的である。それはとくに画帖『睡余墨戲帖』・『静観楽声帖』・『東坡談』など、小品にいえる。鉄斎の書画作品から印を取り外したら、実に寂しいものとなる。そこに「押し魔」鉄斎の本領が見られるからである。

8、篆刻への評価

鉄斎は、明治二十八年の第四回内国勸業博覧会で、篆刻部の審査を務めている。当時から篆刻に対し、相当の評価を得ていたのである。

鉄斎の篆刻に対して、これまでどのような評価がなされてきたか、諸家の評語を抽出してみたい。その評価の高さが見て取れよう。

一、先生の篆刻は唯単に篆刻と言う所に止らず、あの方の芸術観、人生観といった鉄斎先生の一部分が入って来る、そういったものだと思われます。

（園田湖城「鉄斎先生のこと」『三彩』第三八号、美術出版社、一九五〇年一月）

一、印を沢山聚める趣味の人、所謂印癖家と云う人達があつて、何千鈕にも及ぶ、これは観て楽しむ側で、翁のは沢山の印を使用するので使用する側の印癖家と云いたい。（略）儒仏、神仙絵に依つて用印も工夫されて居り、赤い印が色彩家の鉄斎にとつて重要な絵の一部分でもある。

（山田正平「鉄斎と篆刻」前掲）

一、鉄斎は若年、篆刻に目をつけてゐる。（略）鉄斎がどこから知ったか知らない。しかし篆刻の精神は金石に通ずる。これは大変重要なことだ。今までの日本文人画家の誰をもつてきても、鉄斎は違ふのである。鉄斎の画は立体的だが、他のものは平面的である。

（中川一政「富岡鉄斎に思う」『画聖富岡鉄斎と高島屋展図録』、高島屋、一九八〇年一月）

9、業績

富岡鉄斎の篆刻と篆刻論は、彼が終生述べていたように「その根本は学問にある」との言に尽きていよう。印や、印の由来は画賛や

識語の題材として取り上げられている。筆録にも印の所感が記されている。

富岡鉄斎の篆刻面での業績は、次の諸点に要約できそうである。

- 一、詩・書・画・篆刻の四絶による、東洋文人の理想世界を現出した。
- 一、日本で本格の金石派として、金石の気の横溢した作品を制作した。
- 一、多種多様な素材を用い、技巧を弄さない、一刀刻りによる、日本的な印を刻した。
- 一、「押し魔」と称していいほど、印をあらゆる機会に使用した。
- 一、中国・日本における古今の印を蒐集し、それを作品に用いた。
- 一、日本・中国の多くの印人と交流し、逸話を残した。

三 富岡鉄斎と印人との交友

富岡鉄斎は、篆刻を通して多くの印人達と交流した。書簡のやりとりや、人を介して交わった人もいるが、直接交際したのは、中国人では、羅振玉、日本人では、桑名鉄城・園田湖城⁽⁶⁾などである。鉄斎はこれらの印人との交流の中で、若年の頃より、興味を持ち続けていた、篆刻への思いを高揚させていった。それは、単なる趣味といった類のものではなく、「印奴」「印鬼」といった言葉さえ適するほどであった。篆刻が、彼の書画の実作面に、大きい影響を及ぼしていることはいまでもない。先に掲げた、中川一政や山田正平の言葉からも理解できよう。事実鉄斎は、画賛に印の内容や由来を書き、印そのものを画題としたものさえある。

さて、鉄斎は確かに清介孤獨の人ではあったが、決して偏狭固陋

といったタイプではなく、人との交わりを、むしろ大切にした。その事は富岡家に残されている膨大な筆録から窺い知れる。筆録は二六一件存しており、鶴田武良の編により『鉄斎筆録集成』（便利堂、一九九一年十一月）第一刊が刊行されている。筆録の内容は、鉄斎が過眼した書画の写しやその印象、京都の文人の逸話や動勢を書き留めたもの、和漢の図書からの抜書に感想を交えたもの、先人の本を書写したものなど、鉄斎研究の基礎資料として、最も貴重なものといえる。これまで筆録の一部は、小高根太郎が『美術研究』（便利堂）で翻刻されたものがあり、また『瓶史』（去風洞発行）においても、そのいくつかが翻刻された。小高根のお話によると、筆録の中に、印影や印稿、篆書の校字、印人の事績などが墨書されており、更には往復書簡が貼付されているという。これらは今後『筆録集成』の続刊により、明らかにされていくだろう。本節では、金石学者羅振玉、並に鉄斎の用印の多くを刻した桑名鉄城と園田湖城を取り挙げる⁽⁷⁾。

1、羅振玉

羅振玉（一八六六―一九四〇）は、上虞の人で字は叔言、また叔蘊・雪堂と号した。はじめ清朝に仕えていたが、民国の建国とともに、明治四十二年七月、日本に亡命し、大正八年六月迄京都に住んだ。そして満州国の建国に参画した。彼は考古学や金石学の学問に精通しており、甲骨文字解説の先駆者となった。中国上代文化の研究における功績はすこぶる大きい。

富岡益太郎は「羅振玉日本交遊抄」〔『近代日本の書』墨臨時増刊、芸術新聞社、一九八四年一月〕において、羅振玉と鉄斎との交友について述べている。

羅先生の京都移住を、革命の動乱を避けて亡命したというように表現した記事もあるが、無一物で乱を逃れてきたというようなことではなく、蒐集の古美術品も多数携行し、京都の邸宅には私も父に連れられて二、三度訪れたが、田圃のなかに四百坪の敷地があり決して貧弱なものではなく、従者もいて悠々と暮らしておられたようである。その古画や典籍を見せて貰うために謙蔵は鉄斎を羅先生の宅に同行し、以来二人は互いに訪問して親交を重ね、先生は鉄斎の為に印を鑄り、また貴重な中国の文物をたびたび贈与された。

これから羅振玉と鉄斎は、かなり頻繁に交流していたことがわかる。

小高根太郎著『富岡鉄斎の研究』（藝文書院、一九四四年二月）の「クルト・グラーゼルと羅振玉」では、鉄斎と羅振玉との交友関係に言及している。筆録『鉄斎所見』を挙げる。

明治四十五年二月二十六日は、羅振玉の寓居を、洛東田中村に訪ねる。夏仲昭の墨竹巻を観るに、尤だ妙なり。詩経を見る。

金粟山経紙を贈らるに、我邦の鳥子に似たり。

三月三十一日、再訪す。数十幅の画山水を観る。皆似るも信ずべからず。相拉きて詩仙堂に遊ぶ。与に酒飯を喫し徜徉す。既に出門するに午後三時。

また、羅振玉の書簡を七、八通貼りこんでいる。この中に、羅振玉が鉄斎のために刻した、「富岡百鍊」と「鉄如意斎」に触れたものがある。書簡によると、前者は撥蠟法に仿って、後者は切玉法に仿って刻されたものであることがわかる。鉄斎は、筆録『銅鼓堂筆記』

の中に、この二顆の印影を貼りこみ、その傍に「羅振玉の印は、雅味があり、彼の篆刻は余技ではあるが、甚だ妙味がある」と記している。鉄斎は晩年まで、たびたび両印を使用している。

次に、鉄斎、謙蔵と羅振玉の交誼を知る恰好の画がある。それは「插花鼎図」である。この画は、謙蔵が江蘇省丹徒県にある焦山に遊んだ折手に入れた、周代の古器「無恵鼎」の拓本に、鉄斎が明代の陳道復の「八百一十有齡図」に学び、画を描き入れたものである。それに、謙蔵が羅振玉に器名を書いてくれるよう属し、振玉はそれに応え篆書で「無恵鼎」と書いた。大正元年正月の事である。

また、羅振玉は鉄斎八十歳を祝して、殷虚亀甲三六枚と、篆書の詩聯を贈った。「徳を樹て言を立つ。光明正大。緑に綏んじ福を受く。康楽雍和」羅振玉が得意とした、甲骨文を用いた八言句である。識語に「殷商の文字を集め、敬しく鉄斎先生の八十を祝す。後学上虞の羅振玉篆す」とある。

大正八年六月二十日、京都円山の左阿弥楼で羅振玉の送別会が開かれた。鉄斎はすでに八十四歳と高齢であったが参加している。その時、羅振玉を囲んで、長尾雨山、犬養木堂、富岡鉄斎、内藤湖南が椅子に腰かけて撮影した、一葉の印象深い写真がある。富岡家には、送別会でかわした二人の筆談が残されている。鉄斎は「今回羅振玉と別れるのは、自分の父母と別れるのと同じくらい悲しいことである」と哀別の気持ちを記している。

中国と日本を代表する二人の文化人の交友は、日中人物交流史の中で特筆すべき出来事といえる。

2、桑名鉄城

桑名鉄城（一八六四～一九三八）は、富山の出身で、名は箕、字は星精、鉄城・大雄山民と号した。居室を九華印室・天香閣と称し

ている。はじめ北方心泉より篆法や金石学を学んだ。明治二十五年京都に移り、三十年中国へ渡った。中国では、趙之謙・徐三庚・吳昌碩などの刻法を学び帰国した。彼は円山大迂とともに、京都における大御所的な新派の大家となった。印譜に『天香閣印譜』（一帙八冊、一九一四年）、『九華室印存』（一帙四冊、一九〇四年）などがある。

鉄斎は桑名鉄城の印を好み、鉄城の刻した鉄斎用印は頗る多く、七五顆に及んでいる。鉄斎は、印が完成すると、その謝意として画を描き、印を押して贈った。

大正五年、鉄城は、鉄斎のために刻した印四六顆と、鉄斎の書画三〇点を併せて『無価宝』を出版した。これは二人の合作集ともいえるものである。

『無価宝』に収蔵された作品は、鉄斎作品中傑作といえるものが多い。中に一点書が含まれるが、これは鉄城が、明治三十年二月、清国に遊学する際、鉄斎より贈られたものである。「既に是れ壯夫子、却て篆刻を將て彫蟲を弄し、秦漢図書の妙を窮めんと欲す、一等遙に万里の風を凌がんとす」と、書かれたものである。

鉄城の代表的な印譜『天香閣印譜』に、鉄斎は序文を寄せている。刊記に「明治歳開辛亥四月、鉄斎外史、時年七袞有六」とあり、明治四十四年、鉄斎七十六歳の時である。同譜には、副島種臣・日下部鳴鶴・内藤湖南・楊守敬などの序文や題字を収めており、鉄城の交友の広さが偲ばれるものとなっている。

また、小高根太郎著『富岡鉄斎の研究』（芸文書院）の「資料詩文集」に「鉄城印譜引」を載せている。「柴栗山、當て高芙蓉を称して、印聖と為す。蓋し我邦、秦漢の刀法を発揮する者、芙蓉の力なり。芙蓉没後將に百年、龍翥鳳翔の篆、得て復た覩るなし。桑名鉄城鉄筆を好み、大いに其の技を開かんと欲す。其の志喜ぶべきなり。余

印聖の再び世に出ずるを期し、喜びて一言を題す」鉄斎は鉄城を、日本篆刻史上傑出した高芙蓉に与えられた「印聖」の称号をもつて称え、彼に期待を寄せている。

鉄城は「篆刻と人」（『瓶史』新春特別号、一九三四年一月）で鉄斎について述べている。

富岡さんについて思い出します事は、印が出来るごとに捺し初めだと云ふて画を呉れました。自身の画についてはそれが如何程の価になつてゐるかは少しも知らない人でしたが、ひとに対しては別に色々の思ひやりがありました。それは篆刻の方は貧乏して居ると思つておゐでだからです。

又鉄斎翁は私の家内がなくなりました時にも「死んでしまつたものは香奠もいらんから」と云ふて家内の肖像に、観音の画を書いたから子供どもにまつらしくてくれと云ふて呉れました。又娘をなくしました時も又観音を書いて夫を肖像にしてくれと云ふて呉れました。その時は鉄斎翁の画が千金もして居る時ですから、さうした画料などは全く知らなんだ証拠であります。死んだものは何もいらんと云ひ乍ら風流人の家内は骨が折れるものだから御苦労だったと云ふ御志だったのだと思ひます。私は富岡さんには京都に出る時から世話をして貰ひました。

尚ほ鉄斎翁について面白いことは夏の山水の景を書かれたものを「これは非常によく出来てる。頼んだのは江州の人だけれどもこれは俗物で画がわからん。俗物のところよりここにおいてもらはふ」と云ふて持つて来られた事がありました。その画は鉄斎の傑作として今度東方書院からも出て居る日本画大成に出て居るものです。

更に私の感心しましたのは、私が京都に出て来ましたのは二

十九の時でありました。本年は七十一歳になりますが、その時二年程病気をしまして窮したのであります。鉄斎翁はその時平野と云ふ宿家を持つている人に、ただで家をかしてくる人はないかと云ふて交渉して呉れました。親切な人でした。

鉄城が最後に述べた「親切な人でした」の一言は、鉄城が鉄斎から受けた恩情のすべてを物語っているのだらう。鉄斎のような篆刻の理解者を持ちえたことは、鉄城にとり幸せな事だったと言わねばなるまい。

3、園田湖城

鉄斎用印の中で、桑名鉄城について、多くの印を刻しているのが園田湖城（一八八六～一九六八）である。『魁星閣印譜』に三四顆収められている。湖城が鉄斎と交遊を持ったのは、鉄斎の最晩年にあたる十年間で、鉄斎芸術が開花し、数多くの傑作が生みだされた時期と重なっている。そのためか、鉄斎晩年の書画作品や箱書きに、湖城の印が相当数みられる。湖城の印も優品が多く、彼が鉄斎のため、力を盡して印を刻したことが理解できる。

さて、湖城は、明治十九年十二月二十一日、滋賀県に生まれた。父耕三、母きぬ、長男であった。父は藩士であったが、明治維新で禄をはなれ、明治八年頃、京都で印判屋清湖堂を開いた。湖城は幼名を耕作といったが、晩年はこの名を好まず、穆と名のつた。字は清卿、湖城・平盒と号した。斎号は、江左窟・背山居・穆如清風室・九石山房・黄龍研斎等と称した。

湖城は中京の開智小学校を出ると、家業の印判の修業に励みながら篆刻に志した。大正三年、高芙蓉の百三十年忌が催された頃、京都方面の印人や文人と広く親交を結んだ。平安印会で世話役をして

いたのが、湖城三十代のことである。

大正十年頃、藤井善助（静堂）が中国の蒐集品を基に有鄰館を開くにあたり、湖城を同館の主事に迎えた。昭和八年有鄰館の事業が軌道にのりはじめると、彼は清湖堂を閉鎖し、京都岡崎へ引っ越した。その後昭和十年、同館を退職し、篆刻家として歩みはじめる。

大正十三年、湖城門下の集まりである同風印社を正式に成立し、活発に活動を始める。同風印社の成立の目的や方向が、昭和十二年十二月の「清規」に述べられている。重要と思われる項目を引いてみる。

一、同風印社は、園田湖城先生門下、同人を以て正社友とし、専ら篆学及び印学の研究、並に其の興隆を図り傍ら是等斯道に聯係ある金石、其他の研鑽鑑識等広く翰墨趣味の向上に資せんことを期す。

一、本社は、毎月一回集会を開催し、社友其の研究作品を展示せしめ、湖城先生指導下に各自相互の品評批判を成し、以て斯道の研鑽進修を助長せしむるものとす。

一、本社は、時々社友に題を課して作印せしめ、湖城先生の批判添削を乞ふものとす。

一、本社は毎年数回、古今の名印、及社友作品中の、優秀なるものを輯め、印譜『印々』を刊行し之を社友に頒つ。

次に同風印社の催した主な活動を挙げてみる。

- 一、「篆刻展」開催。『篆府』を発行。（京都大毎会館、昭和六年）
- 一、「古印・印譜展」（東方文化研究所、昭和二十年）
- 一、「同風印社同人展」（京都大丸、昭和二十二年）

一、「吳昌碩回顧展」、『缶翁』を発行。（陽明文庫、昭和二十七年）
一、「高芙蓉百七十年忌年展」、『芙蓉先生百七十年忌記念冊』を発行。（一心院、昭和二十八年）

また湖城は印譜の刊行も手がけた。わが国では、明治初年まで、秦漢の古印はほとんど知られていなかった。ただわずかに明人の作った印譜から、その面影を窺っていたにすぎなかった。しかし辛亥革命が一九一二年に勃発し、日本に古印が多量に舶載されるようになった。当時中国の古文物を蒐集購得する人々が輩出した。京都の大谷瑩誠（禿菴）、藤井善助（静堂）、園田穆（湖城）、盛岡の太田孝太郎（夢庵）、東京の中村鉦太郎（不折）、大坂の上野理一（有竹）、讃岐の大西行礼（見山）、神戸の中村準策（依水）などである。古銅印譜は、園田湖城と太田夢庵が最も系統的に蒐集した。

湖城は多くの印譜を刊行した。これらの印譜を大別すると①蒐集印②自作印③平安印会・同風印社関係諸印譜となる。①は、湖城蒐蔵になる六〇〇余方の古印を基として刊行された十数種の印譜である。②は自作の刻印による印譜。③は、平安印会関係印譜と湖城の主宰した同風印社の研究誌『印々』である。

『印々』は、大正十五年九月に発行され、昭和二十六年十一月に至るまで、八三集を世におくり出した。年三〜四冊の発行で、発行月日は一定していない。内容は、まず日中名家による詩書画をコロタイプで一〜三葉載せ、次に日中古印の逸品を一〇〜二〇方鈴印、更に社友による近業作品を一〇〜三〇方掲載している。同風印社は、園田湖城を中心に、篆学・印学の研究を目的とする結社であったが、『印々』の発行は、篆刻の興隆に大きく寄与した。

湖城は長年関西印壇の第一人者として活躍するが、昭和三十年頃胸を患い、右腕の神経を病み、その後は寡作となった。昭和四十三

年八月二十五日、八十三歳で没した。

湖城の果たした功績は多岐にわたっているが、ほぼ次の三点に集約できよう。

一、中国文物の鑑識に精しく、高い学識でもって中国古印の蒐集研究、印譜の刊行に従事し、斯界の啓蒙に成果を上げた。
一、同風印社を主催し、印譜『印々』を刊行し、門弟の育成に努めた。
一、秦漢印を基調とした古典主義を標榜し、印学に対する高邁な識見と相俟って、新鮮にして渾朴な作品を創造するとともに、関西印壇の第一人者として活躍した。

現在、湖城と鉄斎の交友を探る資料として、湖城が鉄斎に刻した印、園田家に所蔵されている湖城宛鉄斎書簡（図1）、「三彩」（第三八号、美術出版社）に掲載された湖城の談話「鉄斎先生のこと」（美術出版社、一九五〇年一月）に取り挙げられた鉄斎が湖城に贈った作品などが挙げられる。富岡家に所蔵される「筆録」にも記録があるが、未見である。ただそのいくつかを小高根が「鉄斎の人格・学問・芸術」（『富岡鉄斎の研究』芸文書院、前掲）で引用している。それによると、筆録「無価珍宝」に「余、嘗て東坡戴笠小図を画きて園田湖城に贈る。大正九年六月十六日、裝潢落成す。便ち余函面に題す。此小印を將て潤筆と為す。其意喜ぶべきなり。鉄斎老人記す」とある。



図1 園田湖城宛 鉄斎書簡

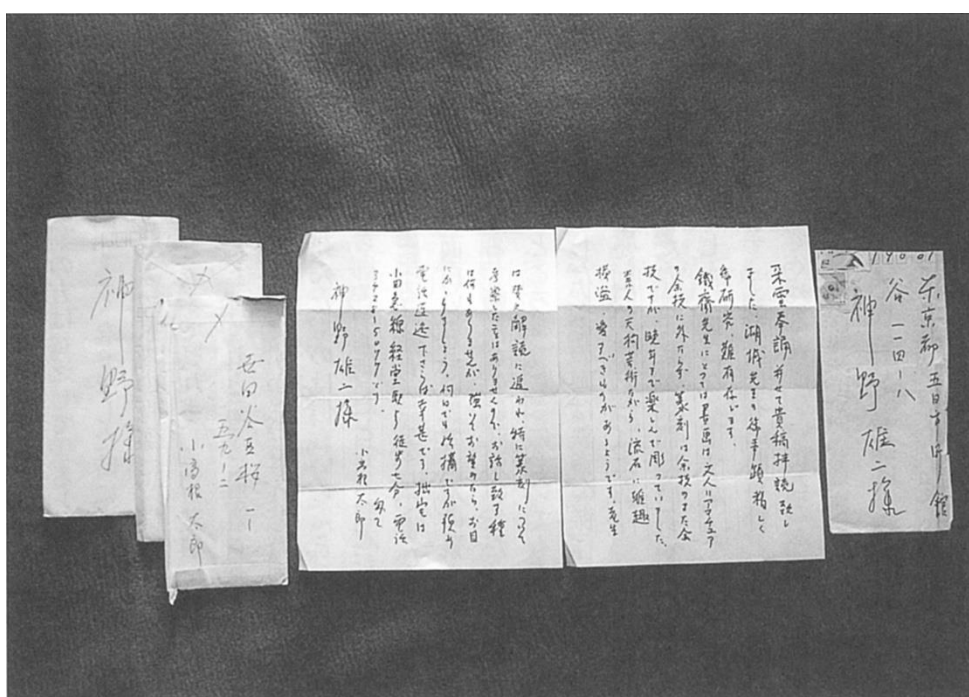


図2 小高根太郎 筆者宛書簡

湖城宛書簡は、四八通残されており、四六通が封書、二通が葉書である。小高根のご教導のもと、同書簡の解説を行い註釈を施して発表した(図2)。内容は、湖城への印の依頼状、印やその他物品を贈られた御礼状、東坡墨の事等である。書簡は、鉄斎の印や印人に對する思いが読みとれ、書簡芸術としての筆跡の美しさとも相俟って興味が尽きない。

これらの資料をもとに、鉄斎と湖城の交流の跡を追ってみる。湖城が初めて鉄斎の聲咳に接したのが、大正三、四年の頃で、鉄斎八十歳、湖城三十歳頃の時である。東山の一心院で高芙蓉の碑を建立した記念会の席上であった。鉄斎にも御来場を願ったが「若い諸君がこう云うことをやるのは感心である」と話された。その後鉄斎は、寺町に出る度に湖城の家に立ち寄り、湖城もまた鉄斎宅を訪れた。湖城が鉄斎を尋ねると必ず「篆刻に努力するよう」と説かれ、印譜などの貴重書を見せながら激励されるのが常であった。手紙で「篆刻の方も段々人がなくなり、篆刻だけでは衣食して行かないが、そうした苦しい時には故人を思い、故人の為に遂げた仕事を思いおこして大いに励むがよい」と元気づけられた事もあるらしい。また湖城の所持していた、高芙蓉の手写になる『梵印考』や『靈印篆符』などを持ち帰り、きちんと手写されたり、湖城の所蔵する古銅印を懇願され、差上げたこともあるらしい。

以上述べたように、鉄斎と湖城の交誼は深く、二人の心あたたまる交友は、京都文化人の一佳話として語り継がれることであろう。

近代文人画の巨匠富岡鉄斎の芸術は、国内はもとより、国際的にも高い評価を得ている。彼の九十年に近い生涯を通じて描かれた作品は、優に一万点を越すと言われている。彼の本領は絵にあるが、鉄斎は画家と呼ばれることを嫌い、あくまで儒者、そして学者として「自ら清娛して性情を淘汰するの遊戯」として絵を描いた。彼は

「儂は意味のない絵は描かない」と言い、「儂の絵を見るなら、まず賛を読んでくれなされ」と終始話した。彼にとり絵は余技にすぎないものであった。ただ余技といっても『山水画談』では「南画の根本は学問にあり、人格を研かなければ、畫いた絵は三文の価値もない」と述べ、絵は深い教養の表出で、人格の表現である、と考えていた。

鉄斎は天保七(一八三六)年十二月十九日、京都三条衣棚の法衣商十一屋伝兵衛富岡維叙の次男として生れた。富岡家は石門心学家学としており、鉄斎も幼児からその薫化を受けた。

少年時代、山本味園に句読を学び、野之口隆正に国学を、岩垣月洲に漢学を受け、青年期に春日潜庵に陽明学を、梅田雲浜に勤王思想を、天台僧羅溪慈本に詩文と仏教を、太田垣蓮月には人間としての生き方を学んだ。

鉄斎は、東洋の文人が理想とした「万巻の書を読み万里の路を行く」という文人生活に徹した。これは明代の書画家董其昌の画論「万里の路を行かず、万巻の書を読まずして、画祖とならんと欲すも、其れ得べけんや、此れ吾が曹に在りて之を勉めん、庸史に望むことなし」(『容臺集』國立中央圖書館、一九六八年六月)による。彼の画題が多様で一作ごとに趣を異にしているのは、和漢の学問を根幹に、長年にわたる思想的遍歴と蘊蓄があったればこそである。

鉄斎は書家としても、近代書道史上傑出している。彼は幼年期山本味園の私塾に通っていた頃は、御家流の書を学んだ。仮名は彼の親代わりともなった大田垣蓮月の影響が見られる。青年期は、明清調の唐様の書風を、そして四、五十代頃には鄭燮や金農の書を学んだ。彼は一流一派に固守することなく、多くの古法帖を蒐め、歴代の書を学びつくした。

さて鉄斎は、二十代の頃から晩年に至るまで篆刻に興味を持ち続

けており、自身で刻すとともに、多くの印人に印を属した。若年期は画よりむしろ篆刻に志したと伝えられている。彼は文久元年長崎を旅した。同地では文雅のたしなみの深い篆刻に長じた小曾根乾堂の下に寄寓した。旅行中、彼は偶然「鉄道人」と「千人万人中一人半人知」の印を骨董屋で見つけ生涯愛用した。明治二十八年に開催された第四回内国勸業博覧会では、篆刻部の審査員をつとめた。

鉄斎の印は『無量寿仏堂印譜』（全五冊）と『魁星閣印譜』（全四冊）に収められている。『魁星閣印譜』の初集は、昭和四十一年に文華堂より刊行された。同譜は、昭和五十八年芸艸堂から全二冊として再刊された。これには鉄斎用印三五八顆が掲載されており、鉄斎自刻になる印も五一顆ある。刻者は三二名にわたっており、中国人に、何雪漁・文三橋・丁敬身・呉昌碩・陳曼生・羅振玉がいる。日本人は、池大雅・高芙蓉・頼山陽・篠田芥津・益田勤斎・桑名鉄城・西園寺陶庵公・山田寒山・園田湖城・長尾雨山等の文人墨客が名を連ねている。中でも刻印数の最も多いのが桑名鉄城の七四顆、次いで園田湖城の三四顆である。

さて、湖城が鉄斎用印の多くを刻していることは、既に述べたが、二人の交際は相当頻繁に行なわれていたようである。

今、湖城と鉄斎の交友を探る資料として、湖城が鉄斎に刻した印、園田家に残された湖城宛鉄斎書簡、『三彩』（三八号）に掲載された湖城の談話「鉄斎先生のこと」（昭和二十五年）の三種が挙げられる。

鉄斎は人格的にも情けが厚かった。初対面の折、湖城が不慮の怪我をしてしまったが、深く心配され、翌日早速見舞の訪問をされ、二日おきに使者をよこし見舞われた。また湖城の住んでいる所は蚊が多くて困るだろうと、蚊取線香を一夏分おくられたこともある。

湖城宛鉄斎書簡は、印の注文書を主とするが、彼の篆刻観のよくあらわれた個所を引いておく。これは『三彩』による。

一、呉缶翁ノ篆籀書ハ妙処甚ダシキモノアリ。能ク石鼓ノ法ヲ学ベルノ書ナリ。故ニ篆鑄又又見ル可シ。我邦人未ダ能ク篆籀ヲ学ブ能ズシテ呉氏ノ刀ヲ擬セントスル者アリ。其ノ篆鑄ニ於テ未ダ其ノ妙技ヲ得ル能ハザルハ洵ニ故アルナリ。鉄斎妄批。

一、何雪漁ノ印ニ仿ヒテ、閣字ノ部ノ閣字ニ他ノ二字ハ取合セ、古式ニ願ヒ、呉缶廬ノ糟粕ノ流ハ大嫌ヒ、総テ漢ノ古刀ヲ希望ナリ、鉄叟。

鉄斎の印は篆刻家のように巧緻な作風でなく、稚拙に見えるが、雅味に富んでいる。それでは湖城は鉄斎の印をどのように見ていたのであろうか。

一、先生の篆刻は唯単に篆刻と言う所に止らず、あの方の芸術観、人生観といった鉄斎先生の一部が入って来る、そういったものだと思われます。

一、先生は常に秦漢の印に習え、秦漢の印は例えば信号の標識のようなもので、そこから自分を出せ、模倣するのではない。そこに根底を置いて自己の道を進めろ、と言うのが一言で云えば真に――荒っぽい粗末な云い方で、之は理屈ではありません。感じて申すのですが、まず鉄斎先生の篆刻観の根本ではないかと存じます。

園田湖城と富岡鉄斎の交友は、篆刻を通じてではあったが、人間的な暖かみのある文人としての交流であった。

近年没した中川一政は、鉄斎の画の秘密に篆刻精神を挙げている。また印人山田正平は、鉄斎を多くの印を使用した、使用する側の印癖家と述べている。今後鉄斎の書画は、幾度となく繰り返し論じられてゆくものと思われるが、彼の篆刻面での業績や、金石之気の横溢した作風を見逃してはなるまい。湖城の印は、鉄斎画に鈴され、

まるで二人の楽しそうな会話が聞こえてきそうである。京都という文化的な風土を背景として湖城と鉄斎の交友は佳話として語り継がれることであろう。

辰夫氏から、湖城の事を伺うとともに、その折、湖城宛の鉄斎書簡四七通を示された。
(7) 宮沢昇著『園田湖城論印人追慕』(静観堂、二〇一六年九月)

【注】

(1) 中井敬所の『日本印人伝』は、わが国の印人伝における唯一の専著と言えるもので、好著である。敬所の『印人伝』に関して「日本印人研究―中井敬所の高芙蓉研究―」(『大学書道研究』第一号、全国大学書道学会、二〇〇八年三月)で考察した。

(2) 野中吟雪著『鐵齋の書』(新潟大学野中吟雪教授退任記念事業実行委員会、二〇〇七年三月)

(3)

○「富岡鉄斎の篆刻」「富岡鉄斎と印人との交友」、「インタビュー富岡鉄斎を語る、」中田勇次郎 富岡鉄斎の芸術と学問(一九九四・三・十八) 〃

〃小高根太郎富岡鉄斎の芸術と鉄斎研究(一九九四・四・八) 〃、「富岡鉄斎文献目録」(『季刊書道ジャーナル』季刊三八号通巻第二〇一号、書道ジャーナル研究所、一九九四年八月)

○「富岡鉄斎研究―園田湖城宛書簡―」(『修美』第一三巻通巻四八号、修美社、一九九四年十月)

(4) 『鉄斎研究』(第一号〜第六五号、鉄斎研究所、便利堂、一九八九年十二月〜一九八九年四月)(第六六号〜第七〇号、鉄斎美術館、便利堂、一九八九年四月〜一九九一年四月)

(5) 『鉄斎大成』(第一巻〜第四巻・続巻)富岡益太郎、小高根太郎、坂本光聰編(講談社、一九七六年九月〜一九八二年六月)

(6) 筆者は一九九二年から数度に亘り、京都の園田家を訪問し、園田湖城息

第三節 会津八一の篆刻と篆刻論

一 はじめに

私が本研究を論ずるに至った一つの要因に、日本人による書学、なかでも印学面における現在までの成果にどのようなものがあるのか明らかにしたい、と考えた点が挙げられる⁽¹⁾。

篆刻の専門家ではないが、本節で取り上げる会津八一（一八八一～一九五六）は、印学や篆刻に精しい。（以下、道人と称する）（図1）本節では、道人の篆刻と篆刻論、そして八一と正平の交友に関して述べる。これに関して、別稿「会津八一の印学（上）」『修美』第十二巻通巻四三号、修美社刊、平成五年七月）においても論じた⁽²⁾。

これまで会津八一研究は、三回にわたる全集の刊行とともに、多くの道人研究家により、伝記・学術・文学・書道と多方面から微細にすすめられている。ただ、ほとんど触れられることのなかったのが、篆刻に関する問題である。これは、このテーマがやや特殊で専門的な分野に属していることと、道人の篆刻論のまとまったものがなかったことが主な要因と思われる。筆者は今回拙稿を草するにあたり、道人の印に対する深い学識を探り、道人研究の一端に資したく考えている。また、いずれ道人が生前はたしえなかった『会津八一の篆刻論』（仮称）なる書物を編んでみたい。尚、本節中の図版の所蔵者は、本節執筆当時の所蔵者が含まれており、本文中に明記した。

二 問題点

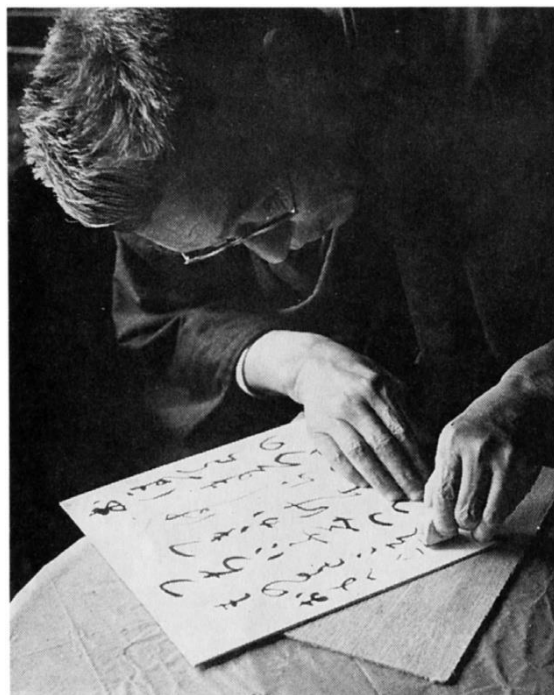


図1 会津八一押印照影
（安藤更生著『書豪会津八一』二玄社）

会津八一の印学に関して論ずるにあたり、どのような問題点が考えられるであろうか。次にその項目を列挙してみたい。

- 1、篆刻論刊行への思い
- 2、篆刻との出会い
- 3、自書印と自刻印
- 4、自用印と自用印譜
- 5、東洋文物のコレクションと蔵書
- 6、道人をめぐる印人と後進の育成

- ① 呉昌碩
- ② 銭瘦鉄
- ③ 石川蘭八
- ④ 山田正平

⑤三世北川蝠亭

7、道人をめぐる文人との交友

①市島春城 ②坂口五峰 ③坪内逍遙 ④淡島寒月

⑤伊達俊光

8、作品に見られる落款方法

9、篆書作品と篆書論

10、印学

①印史（中国 日本） ②印人（中国 日本） ③技法

④自用印の印文に見える思想 ⑤篆刻観

11、功績

三 道人の印学に対する文献資料

それでは、会津八一の印学を考えるにあたり、どのような文献があり、また道人研究家は、道人の業績において、印学面での問題点をどのようにとらえているのであろうか。以下の文献がその主なるものである。

1、「全集」他単行本

①『会津八一全集』全一二巻、中央公論社、昭和五十七年六月—五十九年五月（以後『全集』と略記する）^{（3）}

②『会津八一書論集』長島健編、二玄社、昭和四十二年一月（以後『書論』と略記する）

③『秋艸堂印譜』宮川寅雄編著、二玄社、昭和五十四年十二月（以後『印譜』と略記する）

④『坪内逍遙会津八一往復書簡』柳田泉・長島健編著、中央公論美術出版、昭和四十三年十二月（以後『往復』と略記する）

⑤『新資料付注会津八一書簡集—式場益平宛書簡』和泉久子著、笠間書院、昭和四十三年二月（以後『和泉』と略記する）

⑥『秋艸道人会津八一書簡集』植田重雄編著、恒文社、平成三年一月（以後『植田』と略記する）

2、道人の印学に関して論究した文献（含篆学）

①山田正平「会津先生と私」（『書品』第七九号、東洋書道協会、昭和三十二年四月）

②山田正平「会津先生と篆刻」（『渾斎秋艸道人』渾斎道人編、昭和四十三年十一月）

③宮川寅雄「秋艸道人の用印について」（『印譜』）

④長島健「会津八一自用印の集大成—秋艸堂印譜」（『出版ダイジエスト』第九五七号、梓会、昭和五十五年三月）

⑤長島健「会津先生のこと—会津先生の号と“秋艸堂印譜”」（『銅鑼』第二二号、銅鑼の会編、昭和四十四年十二月）

⑥長坂吉和「秋艸道人・最古の印譜」（『会津八一をめぐる人々』新潟日報事業社出版部、昭和六十一年十一月）

⑦料治熊太「自署の印章」（『会津八一の墨戯』アポロン社、昭和四十四年十二月）

⑧渡辺秀英「書道人として」（『会津八一の郷像』新潟日報事業社、昭和五十二年四月）

⑨長坂吉和「やさしい人」（『会津八一人と書』新潟日報事業社、昭和五十二年二月）

⑩長坂吉和「書家たる自覚」（『続会津八一人と書』新潟日報事業社、昭和五十二年三月）

⑪渡辺秀英・川村佐武郎著『会津八一書の指導』（考古堂、昭和五十六年八月）

- ⑫ 小林正樹「先生と篆刻と私」(『会津八一全集』第八卷附録、月報八、昭和四十四年五月)
- ⑬ 坂口守二「市島春城と青年期の八一」「文墨の人・坂口五峰と八一」(『会津八一と越後の文人』新津郷土誌料研究会、昭和五十六年十二月)
- ⑭ 小木太法「山田正平論」(『増補山田正平作品集』木耳社、昭和五十九年七月)
- ⑮ 梅舒適「会津八一の篆刻趣味」(『会津八一』季刊墨スペシャル第四号、芸術新聞社、平成二年七月)
- ⑯ 杉村邦彦「秋艸道人の人と書について」(『書苑彷徨』二玄社、昭和五十六年十月)
- ⑰ 疋田寛吉「落款三人三様」(『書人外書伝』読売新聞社、昭和五十八年二月)
- ⑱ 植田重雄「書境の開拓」(『秋艸道人会津八一の生涯』恒文社、昭和六十三年一月)
- ⑲ 石黒富久美「秋艸道人の書道観―時代観を中心に―」(『書叢』第五号、平成三年五月、新潟大学書道研究会)
- ⑳ 安藤更生『書豪会津八一』(二玄社、昭和四十年十月)
- ㉑ 中田瑞穂「余白」(『会津八一と私』新潟日報事業社、平成元年五月)
- ㉒ 江川蒼竹「会津先生の雅印について」(『秋艸』創刊号、会津八一記念館、昭和六十二年八月)
- ㉓ 横山蒼風「遺品の雅印を押して」(『秋艸』創刊号、前掲)
- ㉔ 鶴田一雄「錢瘦鐵と秋艸道人」(『秋艸』第六号、平成四年八月)
- ㉕ 渡辺秀英「先生のかたみ」悠哉「二字印」(『秋艸』第二号、昭和六十三年八月)
- ㉖ 大橋泰山、大橋成行『匋印北川蝠亭とその交友』(泰山書道院、

- 昭和六十二年八月)
- ㉗ 吉池進「会津先生と篆刻」(『会津八一伝』会津八一伝刊行会、昭和三十八年八月一日)
- ㉘ 伏見冲敬「『印人画像』と『印人伝』」(『書道史点描』二玄社、昭和五十四年十二月)
- ㉙ 西川寧「秋艸道人の個展」(『書品』第一六号、昭和二十六年五月)
- ㉚ 加藤淳「会津先生の書」(『会津八一遺墨』東出版、昭和四十八年七月)
- ㉛ 岡村浩「新潟の印人・富山天池について」(『書叢』第六号、新潟大学書道研究会、平成四年五月)

四 篆刻論刊行への思い

秋艸道人は、式場益平宛書簡において、「続本はよろしく候へども、絹は印肉のつきもあしく、篆刻癖の拙者としてはことに好まず候」(『会津八一全集』第八卷、中央公論社、書簡番号三四一、以後『全集』八一三四一と略す。大正九年、道人四十歳)この書簡より道人は、自身篆刻癖のあることを自認していたことが分かる。

道人は、その生涯を通じて篆刻に異常と思えるほど固執し続けている。そして彼は将来、篆刻論を世に問うことを心に期していた。それも、三十歳頃には既に思索を深めており、四十歳頃には略アウトラインはでき上がっていたようである。

近来、篆刻の革新といふことを考へ居り候。考へることは実に十年もまへから考へぬいたことなれども、これからは主として實際問題を考ふべき順序と相成り候。此の事業を以て、老生

が今生に於ける記念にもせばやと思ふばかりに候。

(小泉清宛書簡、植田重雄編著『会津八一書簡集』恒文社、書簡番号二九〇、以後『植田』二九〇と略す、大正十年、道人四十一歳)

篆刻論はこれこそ何か一冊の書物にかきて、諸家の御批正を仰ぐやうに致したきものと存じ居候。

(『全集』八一五五一、大正十一年、四十二歳)

拙筆の墨蹟一、二巻とり敢えず出版のつもりにて候。その後にて書道の理論に関するもの、篆刻に関するもの、各一冊相まゝとめ申す可しと存じ候。

(『植田』二九〇、大正十三年、四十四歳)

このように、道人の篆刻論発行への思いは、さまざまな書簡において述べられている。

五 過眼した資料

私は、道人の印学における業績を調査するに際し、多くの資料を過眼しえたが、中でも特に重要と思われるものについて概説してみる。寸法の単位はすべて糎で表し、縦×横を示す。

1、市島春城蔵印

① 新潟県立図書館蔵

新潟県立図書館に、早稲田大学、並びに日本図書館協会の創立功労者市島春城(一八六〇～一九四四)⁽⁴⁾の自用印が収蔵されている(図2)。同コレクションの全貌は『修美』(第四四号・

四五号、修美社刊)に紹介した。これは嗣市島光子の寄贈によるもので「春城文庫」として同館に収められた春城遺品の一つである。春城は市島角市家の出であるが、同家は岱海や節斎等すぐれた学者を輩出しており、篆刻趣味の人が多かった。同コレクションは、岱海用印一〇顆、節斎用印一九顆、春城用印一二〇顆よりなっている。また印譜が四冊附されている(図3)。会津八一は、同コレクションの整理にあたっている。この墨書しおりは、その際のものであろう。



図2 市島春城用印印箱



図3 春城用印附印譜

② 富岡美術館蔵

東京大田区にある「富岡美術館」に、市島春城が蒐集した印章七〇〇顆が収蔵されている⁽⁵⁾(図4)。同コレクションは、日本における近現代の著名な書画家や文化人の私印を中心とする。同館より「資料集市島春城の印章コレクション」がNo.3までまとめられている。同コレクションには一帙八冊からなる『紅霞山房印賞』(二一・二×一三・一)が附されている(図5)。

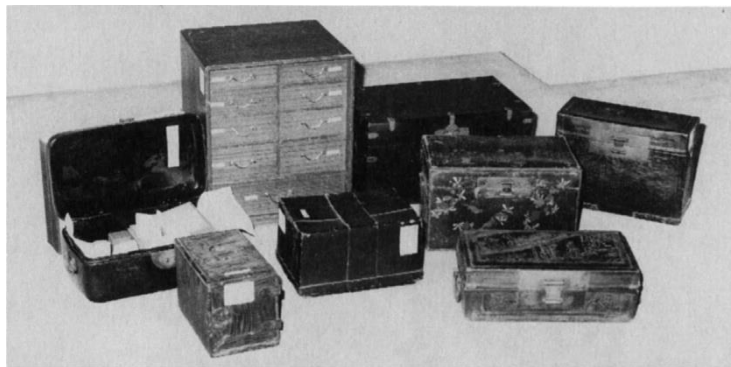


図4 市島春城蔵印

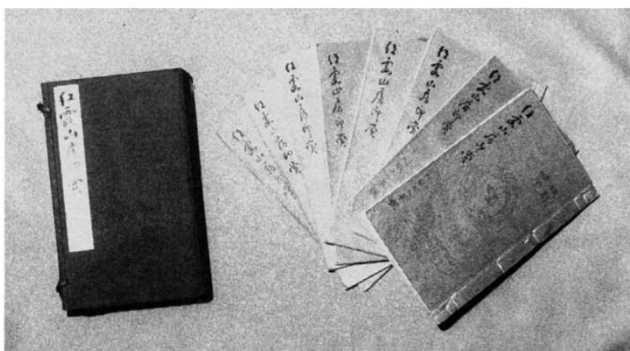


図5 春城蔵印附印譜『紅霞山房印賞』

同譜の内容を記すが、同譜には通し番号がないので便宜上附す。
第五、六、八冊に春城用印が含まれている。同譜には、新潟県立図書館蔵春城用印にないものが数顆押印されている。

- 第一冊 一一三顆——八四顆
- 第二冊 一一七顆——一〇七顆
- 第三冊 一一一顆——九五顆
- 第四冊 六四顆——六〇顆
- 第五冊 八九顆——五五顆
- 第六冊 九〇顆——五顆

- 第七冊 九三顆——五九顆
- 第八冊 八七顆——二八顆

上記数字は『紅霞山房印賞』所蔵印数であり、下記数字は富岡美術館所蔵印数である。合計七六四顆——四九三顆である。また道人が市川芳雄より贈られた、麒麟鈕銅印、印文師古を春城に移贈したものが同コレクション中に含まれている(図8)。道人は同郷の先輩であり、道人の庇護者ともなった春城を生涯敬慕した。

春城は印癖家であつたが、『市島春城古書談叢』(青裳堂書店、一九七八年八月)に、印に関する文章が集成されている。

2、坪内逍遙用印と印譜二種(早稲田大学演劇博物館蔵)

- ①『逍遙先生印譜』(二一・〇×一三・一)

刊記、昭和十年七月、受業会津八一手捺

- ②『逍遙印譜』(二九・六×一三・五)

刊記、昭和十年乙亥十一月十五日作譜、十五部之一、三村清三郎

3、坂口五峰蔵印(東京某氏蔵)

坂口献吉編『五峰餘影』(新潟新聞社、一九二九年)に坂口五峰が用印譜を作るべく準備していた稿本八葉を収載している。印影とともに五峰自筆になる評釈が加えられている。

4、道人用印初期印譜二種

- ①『秋艸堂印譜』(渡辺浩太郎蔵、一八・一×七・八五)(図6・

図7) 刊記、大正二年十月十九日朔、謹呈渡辺秀人雅兄梧下併
博一 粲

②『秋艸堂印譜』（川村徳助蔵、一八・二×七・八）
刊記、大正癸丑初秋吉日、八朔郎

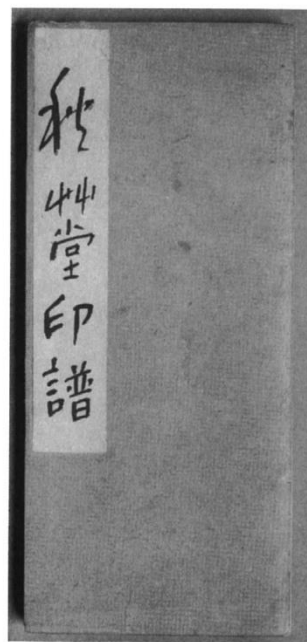


図6 『秋艸堂印譜』

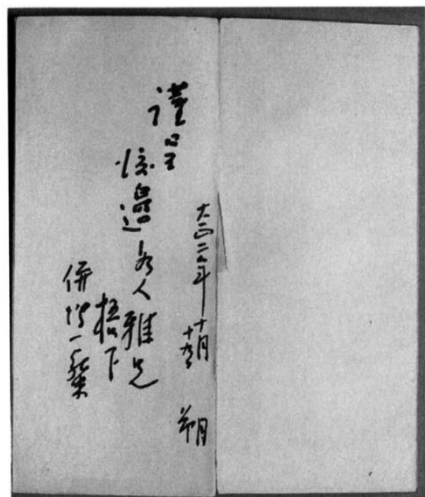


図7 『秋艸堂印譜』刊記

5、自用印

①会津八一記念館蔵

昭和六十年四月二十八日、一一七顆一二八面の用印と九顆の古印が収納され、その後数顆の印が追加収納されている。

②糸魚川市民俗資料館蔵

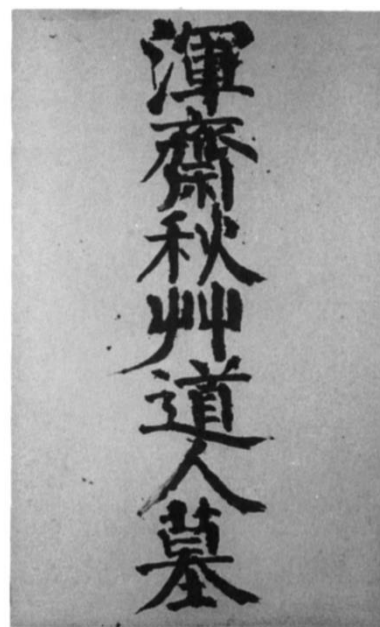


図8 山田正平揮毫
「道人墓碑銘」

昭和五十七年、木村秋雨が収集した資料が同館に寄贈された。平成四年糸魚川市歴史民俗資料館は目録を作成した。同資料中に会津八一用印が四顆含まれている。「八朔郎」「朔」「秋艸堂」「印文不明」の四顆である。

③渡辺秀英氏蔵

道人が生前渡辺氏に譲渡した白文方印「悠哉」。銭瘦鉄の刻になるもので、側款に「瘦鉄為素庵先生治石」とある。

6、山田正平との交流

①道人が正平に宛た書簡

すべて「交流年譜」中に記したが、封書一六通。葉書二三通である。

②山田家に蔵す道人作品

7、会津八一墓碑銘（図8）

新潟瑞光寺に道人の墓が建てられているが、碑銘「渾齋秋艸道人墓」を山田正平が揮毫し、原本が会津八一記念館に所蔵されて

いる。寸法は四八・〇×二九・〇。

8、會津文庫

道人が生前私財を投じて蒐集した東洋文物に関するコレクションは、「會津博士記念東洋美術陳列室」として早稲田大学に収蔵されている。また蔵書は、道人没後、遺族により全てが早稲田大学に寄贈され「會津文庫」となっている。昭和三十七年『會津文庫目録』が発刊されている。同文庫には印譜・印籍が約四〇冊含まれている。

9、道人篆書体作品

①「無」(會津八一記念館蔵、三四・〇×四〇・五)

刊記、昭和丙戌十一月(一九四六)

②「空」(新潟某氏蔵、記念館寄託、三二・八×四六・〇)

③「清如玉壺氷」(新潟こば平旅館蔵、一二三・〇×一五・〇)

刊記、大正十三年正月(一九二四)

10、『童真印会印集』

(大橋泰山蔵、二八・一×一二・〇)⁽⁶⁾ (図9)

道人は篆刻家三世北川蝠亭と親交を結んだ。蝠亭の甥と姪の四人、大橋誠一(泰山)、梅子・光・法玉が會津八一などを發起人として印会を催すこととなった。道人は「蝠亭山房童真印会」の趣意書を作成した。また印会を記念して印譜が編まれたが一帙四冊本で、その内題を道人が墨書した。

11、市島春城宛會津八一書簡(早稲田大学図書館蔵)

道人が春城に宛た絵葉書一九二枚が収蔵されている。



図9 『童真印会印集』

12、『春城翁印存』(山田家蔵、二六・〇×一二・三)

13、『市島節斎増補鐘鼎字源』(新潟県立美術館蔵)⁽⁷⁾

同字源を収めた箱の蓋の裏に道人の識語が記されている。「節斎の精写に係る、されと諸書に参考して増益するところ甚た多し、その用意の周到、該博なること真に驚くに堪へたり、辛卯十月會津八一識」(昭和二十六年)

14、『瘦鉄印存』(山田家蔵、袖珍一帙四冊、八・一〇×六・五〇)

六 道人をめぐる印人と後進の育成

——会津八一・山田正平交流年譜——

道人は、当時衰退の一途をたどっていた篆刻に心を傷め、その復興と発展に力を盡した。彼はその一つの方策として、彼の印に対する学識や趣味の反影した篆刻を、信頼する印人に依頼した。このことが道人の印学面での後継者を育成することとなった。道人の用印は、彼の印学の集大成ともなっており、印人や、印に関係する交友の広さを語っている。

一九七九年、二玄社より刊行された『秋艸堂印譜』は、道人用印の全貌を窺うに充分なものである。同印譜には二九六顆の印影が収められており、刻者の判明している人は三五名である。刻印数の多い印人は、中国人としては、錢瘦鉄・徐星州であり、日本人では石川蘭八・山田正平である。中でも道人は書画作品に山田正平の印を多く用いており、道人と正平の交流を語ることは、道人の印についての傾向を説明することになると思われる。本節では、道人と正平の交友を交流年譜として細述する。⁽⁸⁾その前に、道人が正平をどれほど尊重し、また正平は道人を敬慕していたか、そのことを窺い知る言論を抽出しておきたい。

1、道人による正平観

○篆刻毎字一円とは法外のこととて御迷惑は察し候へども、我等四周の青年はいづれも将来の大家巨匠たるべき有望の一粒選なれば、某人々と親交を結びおかるゝことは貴下一個のためのみならず斯道の趣味を天下に鼓吹するには必要と存じ候。幸に御快諾を得て満足に存じ候。篆刻をして社会的に孤立せしむるときはこれを高尚なるものとなせし如き外見を呈しつゝも、実は之を死物と

して葬り去りつゝあるに等し。少数にして高尚を気取りつゝ、実は割合に無知無感覚なる所謂風流人や趣味家を棄てゝ普ねく天下に新撰なる篆刻趣味を喚起することは現下最大の急務なり。希望者を募り次第に御手もとへ御紹介いたすべく候。余者後鴻を期し候。

（「山田正平宛書簡」昭和十年九月三十日）

○旧臘古稀記念委員会より示し来りし印箋を見るに「渾斎古稀」は豊潤にしてしかも高古、真に傑作と存じ大に喜び居り候。

（「山田正平宛書簡」昭和二十五年一月四日）

○ところが其の正平君からのハガキも、今日受取った郵便のうちの一枚でした。此青年ほど私に某未来を嘱望させるものはありません。新潟から今まで出た篆刻家としても、東京で生きて働いて居る新日本の印人としても、勿論もう尋常以上ではあるが私は此人の天分と覇氣から、もっと大きい未来が齎されねばならぬと信じて居ます。（大正十一年十月二十七日）（「秋艸堂消息」『和泉』）

○正平は御存じであらうが、もと蟬の浮いた印なんか彫り、古への通り綺麗なのを彫ってゐた、処がこの正平の印といふものは行儀が悪かったので河井荃廬は、あいつのものは玄人離れをしてしまつて困る、と嘆いてゐた。私は幾らか責任はあるので、よく指導するといつてゐたうちに河井君は亡くなった。処が河井荃廬が嘆いてはをつたが、どうも正平は一等になるかも知れません、といつてゐました。確かに正平の印の進歩は認められるのであります。

（「篆刻について」前掲）

2、正平による道人観

○私が新潟から上京して寒山寺裏に入つたのは十六才の初夏の候である。一日、玄関に居ると洋服を着た大きな人が不在の和尚を訪

ねて来た。来意を聞くと、会津だがまた来ると云はれて、そのとき去年の夏、新潟の実父の許で御逢いした会津さんかと気付き、正平ですと云い出せば、ここに来て居るのかと奇遇の様な二度目の対面となり、それから小石川豊川町の御宅を訪問することになったのである。応接間で色々と当時名のあつた篆刻家に刻させた印を丁寧に保存してある印箋と共に見せられ何かと批評も加へて居られた。その時の様子からして此人はホントに印が好きなのだなど深く印象づけられたのであつた。壁に自筆の学規が掲げてあつて、学芸を尊ぶべしとか、この生を愛すべしとか、日々新たなるべしとか個条書きにしてあつて、学芸を尊ぶべしと云ふ文字が特に目に映じて今日以て先生を想うごとに結びついて考へられるのである。

〔会津先生と私〕前掲

○会津先生がなくなられてから新作展とも遺作展とも云へる展観が中央公論で催されたが、すっかり美しく澄んで全く晩年の心境がうかがへて難有い極みであつた。少年の時に心に、目に映じた学芸を尊び、この生を愛せの先生の学規も思い合され、すべて独創的に見事に一生を生き抜かれた姿を、偉いなあと感嘆したのである。

〔会津先生と私〕前掲

○そうは云つても作者に対しての礼は常に立派で、率先して奮発した前潤で数顆申し込んで来られる。芸に対して尊嚴の態度は全くあつたであつた。

篆刻が大正から昭和にかけて衰微した時代に敢然として世に唱導せられたその熱意愛情は、われわれ長く銘記すべきであろう。篆刻とは全く世間的でなく、平たく云つて凝つたものである、先生のような識見のある愛印家を失つて淋しく思うのは私一人ではあるまい。

私が早い頃、日展に出した、忘牝牡驪黄の印、ひそかに意を得

たものと思つていたが別して世評にのぼらず、先生没後、新潟で山文さんに逢つて聞くに、当時非常にほめて居られ出典を示しながら話された由、心下るおもいしたのであつた。

〔会津先生と篆刻〕前掲

凡例

- 一、本年譜の対象期間は、会津八一がはじめて、山田寒山を下谷の宅に訪れた明治三十五年から、正平没年までとする。
- 一、会津八一の氏名は道人、山田正平は正平と略記した。
- 一、交流事蹟の引用文献に関しては、出典をできうる限り明らかにしたが、表記は煩雑を避けて略記した。
- 一、事蹟で年代不明であるが、略推定されうるものは、「この年」又は「この頃」として、その年の項目として記載した。
- 一、道人から正平に宛た書簡中、新版『会津八一全集』に収録されていないものは『全集』未収とし、重要なものに関しては、その要旨を記した。
- 一、年齢は数え年をもつて示した。
- 一、書簡中、封書によるものは「書簡」とし、葉書によるものは「葉書」とした。
- 一、山田正平の事蹟は、本研究第三章第八節「山田正平年譜考」を参照して頂きたい。
- 一、必要に応じ、句読点、濁点及び行がえ「／」を適宜施した。

会津八一・山田正平交流年譜

西暦	干支暦	道人年齢	正平年齢	事蹟
一九〇二	明治三十五 壬寅	22	4	この年、篆刻家山田寒山を下谷の宅に訪う。『全集』一二一五〇五)
一九〇六	明治三十九 丙午	26	8	十二月六日、「伊達俊光宛葉書」『全集』八一三六) 予が新刻の図書之章御高評被下度候。刻者木村竹香新潟之人、山田寒山と友としよし。 この年、木村竹香の奏刀による「会津文庫」を作る。(長島健「会津先生習字のこと」『書論』第七号)
一九〇九	明治四十二 己酉	29	11	五月二日、木村竹香の需めに応じて俳句を詠む。篆友木村竹香この頃其居をうつして新居の句を需むるに応ず。「机据て新居の春も暮れにけり」、「春光や碼瑙を刻む刀のさき」、「鉄筆を握れば遠し鳴くて鳥」、「店さきや印ほる耳に飛ぶ燕」(『高田新聞』『和泉』参考資料八一十二))
一九一三	大正二 癸丑	33	15	三月十八日、「式場益平宛葉書」『全集』八一一五六) 新に山田寒山の刻する所御高覧を乞ふ。 夏、新潟古町通四番町にある正平自宅竹香居を訪れる。この時、正平に、白文方印「秋艸堂」と朱文方印「獅子宮人」の二顆の印刻を囑す。(正平「会津先生と私」) 初秋、『秋艸堂印譜』(川村徳助氏蔵)成る。刊記に「大正癸丑初秋吉日／秋草堂印譜／八朔郎」とある。(完成は翌年か不明) 十月十九日、『秋艸堂印譜』(渡辺浩太郎氏蔵)成る。刊記に「謹呈／渡辺秀人雅兄／梧下／併博一粲／大正二年十月十九日／朔」とある。 この年、山田寒山と俳句を詠む。道人句、一日寒山寺をよぎり、七八年越しに和尚と相見る、「木枯や吹き残されて鐘の疣」。寒山句、和尚がわがために書したる句は旧作と見ゆ、曰く「月落ちて鴉啼くなり寒山寺」(『和泉』参考資料一五一)
一九一四	大正三 甲寅	34	16	二月、正平、道人より属された印を刻す。「獅子宮人」(側款、甲寅如月／於羅漢窟十六童／正平刻)
一九一六	大正五 丙辰	36	18	この頃、「蛙相撲図」を描き、正平におくる。画讀「君不見古人句／瘦がへるまけるな一茶是に在／八朔郎」(山田家蔵)
一九一七	大正六 丁巳	37	19	二月十九日、「山田正平宛葉書」『全集』未収) 十一月十七日、「伊達俊光宛葉書」正平刻白文方印「間處遊俠」が押される。(新潟市會津八一記念館蔵)
一九一八	大正七 戊午	38	20	春、「坪内逍遙宛書簡」正平、坪内逍遙印「逍遙游人」を刻す。『全集』八一二九二) 八月十六日、「山田正平宛書簡」『全集』八一二八二) 正平、白文変形印「逍遙一世」(木印、同印は、東京国立博物館資料館所蔵『中井敬所蔵印譜』中にある同文印の模刻である)「逍遙人」・「秋艸堂」・「融会無礙」(同印ははじめ坪内逍遙より「遊戯無礙」として依頼されたが、後に同文に変更された)・「碼瑙印」以上四顆の刻料として金拾円を支払う。 十二月二十六日、下谷区下谷町にて山田寒山没。

一九一九	大正八 己未	39	21	一月七日、「式場益平宛葉書」(『全集』八一・二九六) 正平、一月六日夜、道人宅にて印四顆を刻す。 二月十九日、「式場益平宛葉書」(『全集』八一・三〇二) 三月三日、「坪内逍遙宛書簡」(『全集』八一・三〇三) 正平を山田寒山の後継者として山田家に養子縁組をする。呉昌碩の教えを受けさせるため上海へ行かせる。正平の将来のために名前を記憶願いたい。 九月二十日、「伊達俊光宛書簡」(『植田』一一七) 九月十九日、寒山寺にて陶製の菓子皿数枚を揮毫す。 この頃、正平に『争座位帖』の拓本をおくる。
一九二〇	大正九 庚申	40	22	四月十二日、「坪内逍遙宛書簡」(『全集』八一・三八二) 道人書、北川蝠亭焼、正平刻になる印、書も刻も焼あしく逍遙に呈するに至らず、その後市島春城に進上する。 十月二十七日、日光中禅寺からの正平の葉書を受け取る。(『秋艸堂消息』新潟新聞掲載、『和泉』二二三) 十二月二十二日、「坪内逍遙宛書簡」(『全集』八一・三九九) 正平刻なる漢代古瓦当を使用する。 十二月、奈良の歌数首を寒山寺にて書き、正平に与える。
一九二二	大正十 辛酉	41	23	一月十一日、「坪内逍遙宛書簡」(『全集』八一・四〇七) 寒山寺にて歌一首を詠み残す。 三月一日、「山田正平宛書簡」(『全集』八一・四一一) 白文方印「不知其名」・白文方印「不知晦朔」・白文長方印「全真」三顆の刻を正平に嘱す。同印の潤刀料として、龍門二〇品原拓二冊を正平に呈す。龍門二〇品刊記「大正十年三月四日／秋艸道人／呈山田正平君」(二冊とも同じ刊記) 七月十二日、「伊達俊光宛書簡」(『植田』一一八) 俊光画を正平に二枚与える。 七月、「山中白雲」歌巻一卷を正平に贈る。刊記に「大正辛酉七月／秋艸道人書于翠蓮亭中／呈山田正平君併乞正／朔」とある。 八月、安藤更生 山田正平、吉武正紀らを伴い、奈良へ行く。(『全集』一一一・五一) 十月二日、正平に『高青邱詩醇』(豊住書舗)を呈す。刊記に辛酉十月二日／朔／呈山田正平雅兄」とある。 この頃、呉昌碩詩「臨撫石鼓瑯琊筆」を書いて正平に贈る。刊記に「書老缶之詩博／正平君一笑、秋艸道人朔」とある。
一九二二	大正十一 壬戌	42	24	三月二十三日、「阪口仁一郎宛書簡」(『全集』八一・五四八) 正平に与えた「更生」の号について。
一九二三	大正十二 癸亥	43	25	十月二十七日、道人、相馬御風から書簡を受け取る。文書中、艾年山田寒山が越後で某人より良寛遺愛のたがやさんの笏を貰い受けたが、それを正平から出雲崎の良寛堂へ寄進させたい旨あり。 十月二十七日、道人、日光中禅寺よりの正平葉書きを受け取る。(『和泉』二二三) 道人、正平の将来の大成を囑望する。
一九二四	大正十三 甲子	44	26	三月十二日、「横山有策宛書簡」(『植田』二六二) 横山有策より林癸未夫の住所印をたのまれ正平に属したこと。 六月十四日、「今村安太郎宛書簡」(『全集』八一・六五三) 今後石川蘭八と交遊をやめ、正平を加庇すること。
一九二七	昭和二 丁卯	47	29	十二月一日、河井寛次郎・富本憲吉に正平を紹介する。名刺に紹介文あり。
一九三三	昭和八 癸酉	53	35	二月五日、「山田正平宛葉書」(『全集』未収) 墨竹図と画讃。 十一月二十日、『南京餘唱』を正平におくる。刊記に「山田正平君／十二月十一日／朔」とある。

一九三五	昭和十 乙亥	55	37	五月二十三日、「山田正平宛書簡」(『全集』九一九四三) 実印会津八一印の寸法変更に関して。 九月三十日、「山田正平宛書簡」(『全集』九一九五〇) 道人の篆刻観、現代における篆刻のあり方。
一九三六	昭和十一 丙子	56	38	二月二十六日、正平に写真一葉をおくる。裏面に識語墨書あり。「これ大正十一年正月初旬、奈良滝阪に遊び、俗に春日の穴佛と称する石窟中にて撮影せしむるところ也、二月廿六日、秋艸道人、呈山田正平君」 三月十一日、「山田正平宛書簡」(『全集』九一九六二) 十月十四日、「関塚惣吉宛書簡」(『全集』九一九六八)
一九三七	昭和十二 丁丑	57	39	この年、七言二句を扇面に書き、正平におくる。(山田家蔵)
一九三九	昭和十四 己卯	59	41	四月十九日、「山田正平宛書簡」(昭和四十三年版『全集』八一五七〇) 正平の鳩居堂個展に関して、並びに道人病氣慰問への御礼。
一九四〇	昭和十五 庚辰	60	42	春日、秋艸道人私家版『村莊雜事』を正平におくる。刊記に「正平法家正之／庚辰春日／朔」とある。 四月八日、「吉野秀雄宛書簡」(『全集』九一〇九六) 昨日、篆刻家山田正平く。七、和歌一首を料紙に書き正平におくる。刊記に「庚辰七月於渾／斎秋艸道人」とある。(山田家蔵) 十一月二十六日、「山田きみ子宛書簡」(昭和四十三年版『全集』八一五九三)
一九四一	昭和十六 辛巳	61	43	一月二十二日、「山田正平宛書簡」(『全集』九一一六四) 四月三十日、五月二、三日銀座鳩居堂にて開催される書画俳小品展に関して。
一九四二	昭和十七 壬午	62	44	この年、「秋艸道人歌碑建立記念、昭和十七年四月二十六日、奈良新薬師寺」の写真葉書二葉を正平におくる。その封筒に朱書きにて刊記あり「山田君正字／壬午八朔」
一九四三	昭和十八 癸未	63	45	二月十五日、木村竹香のために「般若心経」を書き墓前にささぐ。刊記に「癸未二月十五日為／釋竹香欣證佛果／秋艸道人」とある。 この年、三浦寅吉の撮影になる「秋艸道人小照、昭和十八年正月二十三日撮」を正平におくる。写真上に「朔」字墨書。写真裏面に「これ大正十一年正月初旬／奈良滝阪に遊び俗に□／日の穴佛と称する石窟中／にて撮影せしむるところ也／二月廿六日／秋艸道人／呈山田正平君」と墨書あり。
一九四四	昭和十九 甲申	64	46	十二月二十二日、「山田正平宛書簡」(『全集』九一一三七八)
一九四五	昭和二十 乙酉	65	47	一月二十一日、「山田正平宛書簡」(『全集』未収) 二月九日、「山田正平宛書簡」(『全集』未収) 開催予定の展覧会に関して。 三月十八日、「山田正平宛書簡」(『全集』九一一三九二) 四月二十二日、正平、道人を尋ねるも不在(「日記」『全集』第一卷) 五月十七日(消印二十日)、「山田正平宛書簡」(『全集』九一一四一一) 芸術観を述べる。

一九四六	昭和二十一 丙戌	66	48	五月二十日、正平へ七〇円為替をおくる。(「日記」) 十一月二十三日、「山田正平宛書簡」(『全集』未収) 印刻の依頼。 十二月、正平、白文方印「会朔」を刻す。側款に「乙酉臘月正平製」とある。
一九四七	昭和二十二 丁亥	67	49	二月十三日、「山田正平宛書簡」(『全集』未収) 新潟文化講話で正平の芸術を喧伝するとともに、新潟への帰郷をすすめる。 早春、道人新潟の史談会において「篆刻について」講演する。
一九四八	昭和二十三 戊子	68	50	四月二十六日、「吉野秀雄宛書簡」(『全集』一〇一―一七一) 一月九日、「山田正平宛書簡」(『全集』未収)
一九四九	昭和二十四 己丑	69	51	一月三日、富士野において、酒井義三郎と、主として木村竹香の事を話す。(「日記」) 六月十五日、「山田正平宛書簡」(『全集』未収) 新潟在住小林茂の刻印の依頼。 十一月十日、「会津八一先生古稀祝賀会趣意書」が出される。正平は発記人の一人として、東京地区実行委員となる。
一九五〇	昭和二十五 庚寅	70	52	一月四日、「山田正平宛書簡」(『全集』一〇一―一八四一) 正平に、白文方印「八一長寿」、朱文方印「北冥老漁」、朱文方印「秋 艸道人」、白文方印「癡頑古稀」、白文楮円印「渾斎」の刻を依頼する。この潤刀料は六千円とする。 一月五日、「日記」 一月七日、「山田正平宛書簡」(『全集』未収) 前回委嘱印の内容変更「北冥老漁」を「蕩滌幽門」に変更する。 一月九日、「日記」 一月十一日、「日記」 一月十九日、「松下英麿宛書簡」(『全集』一〇一―一八四五) 一月二十一日、「日記」

一九五一	昭和二十六 辛卯	71	53	<p>四月十九日、「山田正平宛葉書」(『全集』未収) 刻書篆額と刻印依頼。 七月十一日、「山田正平宛葉書」(『全集』未収) 朱文方印「渾齋」の刻を再度依頼。 七月二十九日、「山田正平宛葉書」(『全集』未収) 八月六日、「山田正平宛葉書」(『全集』一〇一―一九四六) 朱文方印「渾齋」と、二顆の印刻の御礼、潤刀料千円。 八月十九日、「山田正平宛葉書」(『全集』未収) 正平よりおくれし朱肉の御礼。 十月二十六日、「山田正平宛葉書」(『全集』一〇一―一九五四) 市島春城の日誌、随筆その他一族に関する記録等すべてを新潟県立図書館へ寄贈するため整理す。一族の遺印二〇〇顆あるが、春城用印の中に正平刻の印が含まれており興味深い。来月初旬、同図書館内にて小展観を催す。 この頃、道人『会津八一全歌集』(中央公論社、昭和二十六年三月)を正平に呈す。内扉に「山田正平君／秋艸道人」と墨書あり。</p>	
一九五二	昭和二十七 壬辰	72	54	<p>五月二十七日、「吉野秀雄宛葉書」(『全集』一〇一―一九九六) 六月九日、「山田正平宛葉書」(『全集』未収) 六月十二日早朝会いたい旨の通知。 八月十九日、「山田正平宛葉書」(『全集』未収) 新潟での小展覧会開催の延期。</p>	
一九五三	昭和二十八 癸巳	73	55	<p>二月十二日、「山田正平宛葉書」(『全集』未収) 二月二十五日、「小林正樹宛葉書」(『全集』一〇一―二〇四四)</p>	
一九五五	昭和三十 乙未	75	57	<p>一月六日、「山田正平宛葉書」(『全集』未収) 五月初旬、正平三女梅枝、新潟の道人を訪ねる。(「秋艸おじいさま」『書品』七九号) 十月三日、「山田正平宛葉書」(『全集』未収) 十一月十四日、「山田正平宛葉書」(『全集』未収) 正平刻「鑑花照魚目」をほめる。</p>	
一九五六	昭和三十 一 丙申	76	58	<p>一月一日、「山田正平宛葉書」(『全集』未収) 十一月二十日、道人危篤の電報を受け馳せつける。(「会津先生と私」) 十一月二十一日、道人、新潟大学付属病院にて没す。正平、道人の葬儀に際し、追悼長聯を揮毫する。(寒林空見日斜時／秋草獨尋 人遠去)</p>	

一九五七	昭和三十二 丁酉		59	四月一日に出版された『秋艸道人遺作』『書品』七九号)に正平「会津先生と私」、梅枝「秋艸おじいさま」を執筆する。 十一月二十一日、蘭子が新潟瑞光寺に建てた道人墓の銘を正平が揮毫。墓銘は「渾斎秋艸道人」。同墓銘の直筆は、新潟市會津八一 記念館に収蔵されている。
一九六二	昭和三十七 壬寅		64	八月十六日、山田正平東京警察病院にて没す。戒名は、萬象院永樂一止居士。

七 功績

秋艸道人会津八一の印学面における功績はさまざまな点が指摘できるが、主たるものを挙げてみる。

- 1、独自の書学を大系化するとともに、その中において印学の重要性をといた。
- 2、用印の充実、並に書画作品において、文学と書画、そして印との一体美を創出。それにおける印使用の妙。愛印家としての豊富な印使用。
- 3、当時衰退していた篆刻の啓蒙に尽くすとともに、優れた印人の育成を行なった。中でも山田正平はその第一である。
- 4、当時一級の文化人と学芸面での交流、中でも印を通じての交友を結んだ。

おわりに

秋艸道人会津八一は、その生涯に印をほとんど刻していない。また篆書体による作品も数少ない。しかし、道人の書学の中に占る印学の位置は大きい。彼の全集をひもとくと、いかに彼が書や印に注意をはらっていたかが理解できる。事実道人罹災後の晩年十年間に

多量の書作品が書かれたが、その書画作品に、彼は篆刻や篆書の結構や筆意を応用したのである。それは、道人自身が語った言葉からもわかる(9)。

日本人の手になる、印学の論著はそれほど多くない。が、日本には伝存の中国古印や印譜の膨大な収蔵があり、また、江戸末期に出た印聖高芙蓉以後数多くの優れた印人を輩出している。今後、この方面における体系的な研究が進められねばならないであろう。

さて、清朝の汪啓淑(一七二八—一七九九)は、その生涯に数万鈕の古印を搜羅し『飛鴻堂印譜』他数多の印譜を刊行した。彼が清朝印学の興隆にはたした貢献ははかりしれない。彼は自ら印癖先生と称していた。秋艸道人用印に「印奴」という印が含まれているが、道人の印に対する深い学識や印使用の豊富さを考え併すならば、彼もまた日本における印癖先生足る人ではないだろうか。将来、中井敬所が編んだ名著『日本印人伝』に継ぐ印人伝が編まれるとすれば、そこには、しかと秋艸道人会津八一の名は記されるべきであろう。

【注】

- (1)これまで日本における印学面において考究された論考、著述は多くない。
三村竹清、神田喜一郎、中田勇次郎、水田紀久の諸先碩による研究がある。
一九六六年に二玄社より刊行された、中田勇次郎編『日本の篆刻』は内容の充実したものである。

(2) 『修美』通巻四三号（修美社刊、一九九三年七月）における拙稿にて、「会津八一の印学（上）」を草した。早稲田大学の会津文庫に収蔵する会津八一関連の印譜に関して述べた。

(3) これまで『会津八一全集』は、中央公論社から三度刊行されている。第一回『全九巻本』昭和三十三年、第二回『全一〇巻本』昭和四十三年、第三回『全十二巻本』（昭和五十七年～五十九年）である。

(4) ○筆者「市島春城の印章（上）」『修美』第十二巻通巻四四号、修美社、一九九三年十月

○筆者「市島春城の印章（下）」『修美』第十二巻通巻四五号、修美社、一九九四年一月

(5) 富岡美術館に収蔵されていた市島春城に関わる印章は、二〇〇四年春、会津八一記念博物館に寄贈された。また、市島春城印章コレクション七四九顆の内七二〇顆を掲載した目録『旧富岡美術館所蔵市島春城印章コレクション総目録』（早稲田大学會津八一記念博物館）が二〇〇八年五月に発行された。

(6) 一九八七年「公募展第四十六回泰山書道院展」において、三世北川蝠亭に関する特別展示が開催されるとともに『旬印・北川蝠亭とその交友』が発刊された。

(7) 清朝の汪立名の著作を市島節斎が精写増補した字源である。新潟県立図書館には、市島岱海と節斎の遺作が数点所蔵されている。

(8) 『雁魚来往』（二）（雁魚来往研究会編、新潟市會津八一記念館発行、二〇一四年三月）において、新潟市會津八一記念館に収蔵保管されている八と正平との往復書簡が翻刻し紹介されている。

(9) 大正九年一月三日、式場益平宛書簡に「小生の書は、全くの我流なれども、若し何か影響を与えたるものとすれば、三代の鐘鼎文の筆意にて候。即ち古籀文の筆意を以て行草をつくるものにて候」とある。また、大正十一年三月十七日、坪内逍遙宛書簡に「古篆の結構落筆を草行の間に

すと言ふことは小生先年来しきりに相唱へ候ことにて…」と述べている。道人の書や書学を解明するには、彼の篆書理解を探る必要がある。

第四節 中川一政の篆刻と篆刻論

一 はじめに

中川一政（一八九三～一九九一）は、東京生まれの画家、書家、歌人、作家である。書画・篆刻・詩歌・随筆・陶芸とその芸域は頗る多岐に亘っている。絵画は言うに及ばず、書や篆刻の制作も多く、本節では、彼の篆刻と篆刻論に関して論究する。

一政の本領は画家にあるが、単なる画家に留まらない。これまで、彼の書画に関して言及した論考は見られるが、篆刻に関して考察した先行研究は殆ど見ない。この度、東京の中川家・山田家、舞鶴町の中川一政美術館において資料・文献を調査・研究した。また関係諸家に一政の事跡と篆刻に関して質問し回答を依頼した⁽¹⁾。本節では、新資料、特に中川家に収蔵する文献・資料を提示するとともに、『中川一政全文集』全一〇巻（中央公論社、一九八六～一九八七年）などから、彼の篆刻論を検討する。

以上、一政の篆刻面での業績を実証的に精査し、新資料を提示するとともに、その日本篆刻史上での位置付けを試みる。

二 篆刻について

1、篆刻の収蔵

中川一政の篆刻は、主として次の二か所に収蔵される。この度、

具に閲覧・調査しえたので、概略述べておきたい。

(1) 真鶴町立中川一政美術館の収蔵印

中川一政の篆刻は、四段の引き出しを持つ木製の印箱に収納されている。真鶴町の一政の画室が解体された時美術館に収蔵されたものである。総数約四〇顆、石・陶・木製の印である。同館において、二〇一二年（平成二十四）八月「一政の書と印譜の世界」（前期七月五日～八月十四日 後期八月十六日～十月二日）が開催され、篆刻が展示された。前期は、陶印一一顆、印箱に収蔵されていたのは、陶印二〇顆、石印三顆、木印一顆、印譜パネル五点である。併せて印泥が展示されていたが、中国の美麗系統である。後期は、書五点、陶印五〇顆、印譜パネル三点。

(2) 中川家の収蔵印

中川家の収蔵印は、アクリル製の箱に収められている。すべて陶印である。それぞれ二〇～三〇顆の収納で、総数は約一二〇〇顆である。一政の嫡孫にあたる達郎氏が、書画作品等の鑑定のため、篆刻印材と印影が比較できるように通し番号が記されたものとなっている。印影はアルバムに貼り付け整理されている。印材は、素焼きしたもの、釉薬をつけ本焼きしたものがある。

また別の木製印箱に、一政の刻になる石・木印や、篆刻家の手になる篆刻を収める。これは調査しえたので一覽に供する（表1）。

2、印譜

さて、中川一政の篆刻を収載した印譜は数種あるが、公刊された原鈐本としては、『中川印譜』（寒山会、一九七二年）と『一政印譜』（求龍堂、一九七四年）が挙げられる。この印譜に掲載の篆刻を選定されたのは、清水義光氏⁽²⁾である。中川家には、他に数種の印譜を収蔵する。これは、一政の篆刻研究において最も重要な資料といえる。許可を得て、すべての印譜の序跋を撮影した。実見に及んだのは一三冊である。内容から分類すると、一政による手控え本、中川達郎氏による手控え本、そして公刊本となる。その序跋や作品名目録の多くは自筆であり、それが書の真筆として貴重である。印譜を代表するものを掲げ略解する。

（1）『中川印譜』（寒山会、一九七二年）

限定五〇部番号入 和綴 布装 上下二冊帙入 装釘著者 帙焦茶色本染木綿装 題簽 自刻印捺貼込表紙 帙と共布装 著者墨書題簽貼込 見返 上下とも自刻陶板画署名入 上巻 はしがき直筆コロタイプ版 印影 上巻「八十童子」他三九顆 下巻「日本人」他三九顆 全顆手捺 あとがき 直筆コロタイプ版 第一番―第二〇番 特装版三五・〇糎×二五・〇糎 第二一番―第五〇番 普通版三一・〇×糎二四・〇糎 非売 昭和四十七年二月十四日発行

（2）『一政印譜』（求龍堂、一九七四年）

限定八〇部番号入 三二・〇糎×二五・五糎 和綴 和紙装 上下二巻帙入 装釘著者 外函 装画「鴛鴦図」陶板画オフセット版 中函 洪染 題簽コロタイプ版 帙 鳥取粗目木綿本藍染 題簽コロタイプ版 表紙 装画拓本 題簽コロタイプ

表 1 中川家収蔵印一覧（木製印箱）

作品番号	印文	朱・白	形状	材質	側款	一政による印箱への墨書	備考
I	山田正平刻印						
1	永福一政	白	方形	石	正平製 丁亥 5月	昭和22年 5月20日 山田正平刻	
2	陀羅尼	白	長方形	石	正平製	陀羅尼 白文 昭和23年12月 2日 山田正平刻	
3	陀羅尼	朱	長方形	石	一止道人 戊子臘月	朱文 陀羅尼 山田正平刻 永福山房	
4	中川一政	白	方形	石	正平製	中川一政 白文 萬年山房 朱文 昭和23年12月 2日 山田正平刻	作品番号の4・5は同箱
5	萬年山房	朱	方形	石	一止道人 戊子臘月	中川一政 白文 萬年山房 朱文 昭和23年12月 2日 山田正平刻	
6	中川一政	朱	方形	石	正平製 丁亥 5月	昭和22年 5月20日 山田正平刻也	作品番号の6・7は同箱
7	我思古人	白	方形	石	一止	昭和22年 5月20日 山田正平刻也	
8	中川式政	白	方形	銅	正平作		連環鈕
9	弧鶴	朱	方形	石	正平製 壬辰 5月		
10	永福	白	長方形	石	一止道人 戊子臘月		
II	齊白石刻印						
11	萬年山房	白	方形	石	白石	永福	
12	永福	白	方形	石	白石	永福	
III	篆刻家刻印						
13	大朴	白	方形	石	孤往作		
14	永福	朱	方形	石	瘦鐵 為中川兄 鑿石		
15	中川一政	朱	方形	石	中川先生 辛未 7月 叔厓		
16	永福翁	白	長方形	石	寧 為永福先生 刻		
17	□	白	方形	石			作風から保多孝三と推定
18	中川一政	白	方形	石	孝		
19	一政	朱	方形	石	孝		
20	一政	白	方形	石	孝		
IV	中川一政刻印(石材)						
21	目足居士	朱	方形	石	中川道兄 正之 叔厓 一政改刻		
22	馬車馬	朱	方形	石	二五年 一政		
23	馬車馬	白	方形	石			側款・浪華笛洲
24	萬年山房	白	方形	石	一政		
25	麦	白	方形	石	自刻 文日麦		
26	福	朱	円形	木	一政刻 文日福		
27	散	朱	方形	石			

版 はしがき 鉛筆直筆コロタイプ版 印譜 手捺 上巻「顔如渥丹」他三五顆 下巻「中川一政DHARANI」他三八顆 画仙紙 印泥中国製 料紙梓木版刷 奥付自刻印 頒価一二〇〇〇円 昭和四十九年二月十四日発行

(3) 中川家收藏印譜(代表する五冊に関して提示する(図1))。

- ① 『一政印譜』上下二冊、一九七五年十二月
- ② 『陀羅尼印譜』上下二冊、一九七五年十二月
- ③ 『中川印譜』上下二冊、一九七五年十二月
- ④ 『中川印存』一九七〇年
- ⑤ 『一政印存』一九六九年



図1 中川家收藏印譜

3、篆刻三法

中川一政の篆刻の実際に関して論述する。字法・章法・刀法の篆刻三法について一政の作品に添って述べたい。

(1) 字法

字法とは検字のことで、正しい文字を考察することである。

一政の篆刻の多くは篆書体である。どのような字典を使用したか不明であるが、検字はしたと推測できる。金文体の書体の使用頻度が多く、まま小篆や印篆体を見る。ローマ字による篆刻も散見できる。字法に関して、一政は自在な考えを持っていた。それは次の一文からも分かる。

しかし関心はあったからパリの東洋美術館ギメへ行った時メソポタミヤの印章に興味をもち、篆刻ももっと自由でよいのではないか。後向きでなくもっと前向きになったら領分がもっと広くなる。帰ったら山田正平に話そうなどと思った。「篆」にこだわってかへって篆刻を殺してしまふ。篆刻の骨格は矢張残るだろう。

(「後記」、『一政印譜』、中川家蔵印譜)

一政の学書は、概して金石家の系譜に属する。金農を好み、篆刻の世界に遊んだ。篆体を用いながらも、古来の法に縛られることはなかった。

(2) 章法

章法とは、文字の布置、構成のことである。

一政の篆刻の最も顕著な特徴はここにある。印面全体を使用しての布置は、彼の絵画の空間とも相俟って緊張感に満ちている。秦漢

印よりはむしろ古璽や古陶文⁽³⁾に近いといえる。風趣は日本の大和古印にも類似する。文字の大小が入り混じっており、複雑に絡み合う。ここで、彼の代表作の一つといえる「夜眠日走」を取り上げ、その章法の独自性を諸家の言とともにみてみたい。

「夜眠日走」の印文による篆刻は、管見に及んだものに三種ある(図2)⁽⁴⁾。それぞれ印文の文字の構成を異にしている。西川寧「中川さんの篆刻」(『西川寧著作集』第八巻、二玄社、一九九二年七月)で、この篆刻を取り上げ論評している。

次にあらわれたのは「夜眠日走」白文。これは普通の順に刻つてある。少し下広がり、梯形の印面、上の段の「夜」と「日」の二字はまわりが空いていて安心だが、下の段の「眠走」の二字が三字のように、または「目」が「走」にくっついて、「民」と相対して二字のように見える。字入れのとき、これは読む順に「夜眠」から、印面の位置は左行でなくやろうというので、向って左側に「夜眠」とかいた。民の上のかこいの下を、ぶるツと段をつける。これは篆書によくやる手だが、そうしなくてもいいのに、そういう形をとって、こまかくひねったところ、多分ニヤットしながら、気取った顔つきで、その字を書きでもしたかと、その瞬間を想像する。「眠」の一字は、左の端から「民目」とかいたが、「民」がちと大きかったので、しぜん「目」が右による。残りの空地が少しせまくなったが、入らないかな、いや入るだろうと、何となくその狭い空地につられて最後の「走」を入れてしまう。こんな次第でこの印が出来たのかなと勝手に考えて、おもしろくてたまらない。この印、刀がさわったかさわらぬかで、ふらつとした風態がなかなかいい。「走」の一字、これは小さいのでむずかしいよとばかり、戦々兢兢と刻っているの

のがいい。

一政の篆刻の特色は、形と線にあるが、点画の粗密が工夫され、変化と統一をうまく調和させている。文字が一字一字が実に複雑に絡み合っている。印面に配分された一字一字の調整でなく、印面全体による処理である。



図2 中川一政刻「夜眠日走」
『一政印譜』(求龍堂、1974年)

(3) 刀法

刀法は運刀・彫り方のことで、古来「刀法は伝え難し」と言われているように、作家独自のものである。

この度、白山市立松任中川一政記念美術館から一政の篆刻してい

る写真を提示された⁽⁵⁾。これと、一政の文章、関係者の談話から彼の制作課程を追ってみたい。まず粘土を成形し、一日乾かして生渴きの時に刻す。刀は両刃の印刀が用られた。左手に陶印材を持ち、右手に印刀を持って刻す。左手が自在に動いていたものと思う。篆刻は陰刻が多い。線質は温雅で抑揚にとみ、筆で書かれた書と刀で刻された篆刻とが極めて近い。

4、篆刻論

中川一政の篆刻論に関して『中川一政全文集』(前掲)と、新資料である中川家に収蔵する文献・資料などから述べる。彼の篆刻論は、篆刻実作の経験や書画の制作の経験が裏打ちされており納得させられる。全般的に作品論・鑑賞論ともなっており、実作者としての姿勢が如実に生かされている。彼はいわゆる専門家の芸術を嫌ったが、篆刻においても素人の立場に徹した。篆刻を多作する中で、彼独自の篆刻の美を発見するとともに、理論構築がなされた。

まず、篆刻に対する姿勢としては、

私は門前小僧といふ本を出している。それは門の中にはいつて専門家にならないといふことだ。

専門家は技術を勉強する。それはよいことだけれども技術を勉強するのが勉強だと思ってしまう。私は技術はついてくるものだと思う。感動をうければ技術は頭を刺激する。それが本当の技術である。物も云へない乳児も腹がへり氣持がわるければ訴へるすべを知っている

感動を離れた技術があるとすればそれは死んだ技術である。更に銘記しなければならないのは他人の技術は自分の役にならないといふことだ。ゴッホはゴッホ、セザンヌはセザンヌみな

自分に役にたつ技術である。自分の技術はたとへ幼稚でも生きた技術である。そして成長する技術である。死んだ技術がどうして成長出来るようか。

私は印を彫ったり画をかいいたり書もかくし時に文章もかく。しかし私は専門に何をしているといふことはない。みな私から出ている手足のやうなもので手ばかりが私ではなく足ばかりが私ではない。西洋へ行くとかへって日本がわかるといふ。門の中にいると細部はわかる。門の外にいますと大局がわかる。部分に首を突込んで大局を失ったらつまらない。

(「後記」、『一政印譜』一九七四年十月記 中川家蔵)

私は時々陶土を遊ぶ茶碗を作ったり印を作ったりしている。それを見た若い人達が印譜を出さうと云う事になりかういふのが出来た。私が書をかくと餘技だと人が云ふが。かういふものを見たらまた餘技といはれるだろう。云はれるついでに画の方も餘技だと云って貰ひたい。ただ画の方は多少年期がかかっているだけである。君子は器ならずといふ印がこの中にある。器は何か入れると他のものはいらぬ。君子とはそんなゆう通のきかないものではない。専門家といふものは器である器が一ぱいになって他のものはいらぬ。一ぱいになる程ものはいっていることはけっこうである。それで動きがとれなくなつてはけっこうではない。

私は印を彫っているが画をかく事と別のことをやっているとは思わない思へないのである。

篆刻は方寸の画面であるムーヴマンとフォルムの業である。画面より端的なるに興味をもつのである。

(『一政印譜』中川家蔵、前掲)

私の印も誰に習ったわけでない。私は錢瘦鉄、斉白石、山田正平の印を使っていた。画が少しずつ変ってゆくと印も変えなくては。山田正平が亡くなってから或日偶然、信州の山奥の窯場へ案内された時、その人の印を頼まれた。それがきっかけで陶印を彫ることになった。それまでも旅の夜長に木印石印を一二度彫ったことがあるが、手を怪我するので止めていた。

堅い石の方が厳しいが、陶印はそういうわけにはいかない。鉄斎は蓋印と云っているが、これは陶印の乾かして固くなったものを云うのであろうか。

鉄斎は若い時篆刻で身を立てようと思ったときいたことがある。私は鉄斎の扇面集を編集して、鉄斎の扇面の構図に感心した。描いた処と描かないところの増減に過不足がない。扇面という特殊の画面の生かし方、変化の面白さは、およそこの右に出る人はいないだろう。

これは篆刻の気があるからであろう。

篆刻は方寸の世界である。白黒虚実の世界である。その訓練が鉄斎芸術の下地になっている。

大雅も篆刻を作っている。

「画は一物もなきところ最もなし難し」という言葉は、白黒虚実をふまえてはじめて出る言葉であろう。

私の陶印は近頃はじまったが、仕事の間、気分転換には極めて役に立っている。どの引出しも一杯になっている。

さて、この沢山の印をどうする。

そこで近頃習字がはじまった。般若心経などをかいて、閑防にどれを使おう、白文にしようか、朱文にしようかなどと考える。

そして、印を探すのだが、どの引出しにあるのかわからない。整理したいと思う暇がない。

（『門前小僧』後記、『中川一政全文集』第八巻）

と述べ、「門前小僧」、つまり素人としての立場を強調する。

次に篆刻家や画家との印を通しての交流やその評価については、以下のように語る。

まず、小杉放庵（一八八二―一九六四）に関して、

私がやがて水墨画をかき出したのを小杉放庵が喜んで「散」といふ印を老眼をかけて而も細い朱字を彫ってくれた。『莊子』の「散木」である。何の役にもたない故に大きく成長をした話による。私は戦争中、旅行先で紛失した。

（『中川印譜』あとがき、『中川一政全文集』第八巻、前掲）

放庵は「散」といふ一字を彫ってくれた。外光で眼鏡をかけて彫ったのださうだが、骨が折れたやうだ。私は暫くそれを使ってゐたが、そのうち来朝した錢瘦鉄君に五つばかり篆刻を頼んだ。その時「永福」と云うのも彫って貰った。それ以来放庵の「散」は遊印に使ふことにした。

支那では仙人にいろいろ種類があつて地につく仙人、天につく仙人、いろいろ仙人に所属があるさうだが、「散仙」いふのはどこにも所属がないさうだ。「散」といふ字が気に入ったと云ふので、それを引用したと云ふことだ。しかし散仙はどこに所属しても役に立たないらしい。『莊子』に依れば「散木」と云へば舟を作れば沈んでしまひ、棺槨を作れば速やかに腐るから大工も顧みなかったとある。

〔「永福寺雜記」、『中川一政文集』第二卷、筑摩書房、一九七五—一九七六年〕

続いて、富本憲吉（一八八七—一九六三）に関して、

富本憲吉のほってくれた陶印をもつてゐる。陶印を見たはじめてである。

〔「中川印譜」あとがき、『中川一政全文集』第八卷、前掲〕

また、錢瘦鉄（一八九六—一九六七）に関して、

その頃、錢瘦鉄が亡命して来、橋本関雪などの印を彫った。小杉宅でこの瘦鉄にあつていくつか彫つて貰うことになった。其後齊白石に三つばかり頼んだ。瘦鉄の印はこなれていて優しく、放庵の画にはよくあつていた。

〔「中川印譜」あとがき、『中川一政全文集』第八卷、前掲〕

そして、齊白石（一八六三—一九五七）に関して、

印はよくてもその作者の画に呼応しなければならない。私の画がだんだんあばれ出して瘦鉄の印があわなくなつて齊白石の印の方が好ましくなつた。

〔「中川印譜」あとがき、『中川一政全文集』第八卷、前掲〕

以上のように、一政の作品の作風の変遷により、その使用印が変化していったことが分かる。

篆刻の今後の展望については、以下のような記述が見られる。

将来、石に彫る事もあるかと思ふが、手を怪我するのをおそれてしばらく陶印を弄するのである。我は門前小僧である。人の篆刻といふものも遠くから見ただけで習練したといふものではない。しかし関心はあつたからパリの東洋美術館へ行つた時メソポタミヤの印章に興味をもち、篆刻ももっと自由でよいのではないか。後向きでなくもっと前向きになったら領分がもっと広くなる。帰つたら山田正平に話そうなど思つた。「篆」にこだわつてかへつて篆刻を殺してしまふ。篆刻の骨格は矢張残るだろう。

〔「一政印譜」後記、中川家蔵印譜、前掲〕

一政はそれほど多くの篆刻家や画家と交つたわけではない。が、むしろこのことが、彼独自の篆刻を制作させる結果となつた。

彼は、篆刻の自由さを訴えているが、これは一政の芸術全般の姿勢でもあつた。

一政の篆刻論は、実作を通した論述で確信に満ちている。彼は実際に多くの陶印を制作することにより、独自の表現を獲得するとともに、それを基に篆刻論を著わした。その内容は実に明解である。彼は書画の作品制作において「篆刻精神」・「篆刻の氣」を大切に考へており、篆刻が他の芸術の根幹となつてゐることを示唆する。

また、彼は「芸術」を「生術」と言い換えており⁽⁶⁾、芸術そのものが生きているかどうか、彼の芸術作品の良否の根本の視点となつてゐることが理解できる。

5、篆刻美

一政の篆刻の美の特色に関して述べる。一政はムーブマンとフォルムに関して何度となく言及しており、彼の篆刻美を探る際も根幹

となる。

篆刻とは皿に料理を盛ることである。ぼた餅を重箱に入れることである。

また猛獣を檻に入れることである。猛獣は生きていてあばれる。檻に入れられることを好まない。それを檻に入れるのだ。猛獣というムーヴマンと檻というフォルムとこれが篆刻のおもしろさである。

「守黒知白」だけでは平穩無事にすぎる。静中の動という言葉をつけ加えたい。

（「一政印譜」はしがき、『中川一政全文集』第八巻、前掲）

また、

篆刻の技は、方寸の天地のうちの勝負である。

ムーヴマンとフォルムの対決である。

ムーヴマンというものは、際限なく伸びていこうという勢いであり、フォルムとは、それを如何に美しく制限しようかという働きである。

篆刻は、一番純粋なその虚実の戦いである。

（「富岡鉄斎」、『遠くの顔』中央公論美術出版、一九六七年二月）

と述べ、

ムーヴマンとかフォルムと云つても、これは見えるものではない。心眼で感じるものだ。昔の人は心眼といふ言葉を使った。

私もこの言葉を使って仕事に居直りたいと思ふ。

（「香爐峰の雪」、『中川一政・書の世界図録』真鶴町立中川一政美術館、一九九六年八月）

と言う。

次に、彼の篆刻は、いわゆる通常の篆刻家の刻風とは大きく異なっており、特色が顕著である。次の諸点に集約できる。

（1）生き生きとした表情の豊かさ

（2）大胆な印面処理

（3）粗密のバランスの妙

（4）大らかで温雅な線質

（1）は、抑揚を加味した躍動の氣象を演出しており、（2）は、配字がこれまでに見られない多彩な印形を駆使した彼独自の形式を考案しており、（3）は、文字の大胆な融合が見られ、（4）は、温かい豊かさを示し、印象深い。

総じていえば、一政は陶印という素材による効果を最大限生かし、これまでになかった篆刻美を創り上げた。また彼の印形の多様さが印風の自在さとなっており、独自の風格ある美を創出したと言える。

三 落成款識

中川一政は「印がよくてもその作者の画に呼応しなければならぬ」（『中川印譜』あとがき）、『中川一政全文集』第八巻、中央公論社、一九八六年十一月）と述べる。それでは一政の書画の作品にどのように篆刻が使用されているのだろうか。ここでは『裸の字』（中央公論社、一九八八年四月）に用いられた、篆刻の使用方法を実証的に研究する。

押印の位置・内容から大きく三種に分類される。

(1) 一般的・形式的な押印 (四八例)

(2) 独創的な押印 (四六例)

(3) 奇抜な押印 (一二例)

(3) に関して言えば、作品の中央・天地などいはゆる通常の位置と異なる押印であるが、印が作品の一部と化している。まさに一政の真骨頂といえる。

押印する印の内容・形式からは四種に分類できる。

(1) 姓名印 (一三六例)

(2) 成語印 (一〇例)

(3) 雅号印 (二三例)

(4) 洋文印 (四例)

一政の押印の形式は多くは、作品により相違しており、一作一押といえる。形式に囚われるのではなく、どの内容の印を作品のどこに押印するかは、その作品により決定されたと考えられる。これは、書画両面に言える。つまり一政の押印は、印文の内容よりはむしろ作品としての表現効果に力点が置かれる。一政孫達郎氏の談話によると「一政は油彩画においても、制作中に落款を何度ともなく書き換えており、落款そのものが、作品の一部であった」ということである。書作における、押印においても同様の事が言える。

四 中川一政と印人との交流

中川一政と印人との交流を知るに、昭和四十二年(一九六七)に発行された『中川一政書蹟』(中央公論美術出版、一九六七年十二月)の巻末に掲げられた「印譜」の概要を見てみると、篆刻の刻者と数量は次の通りである。西川寧一顆、銭瘦鉄三顆、斉白石四顆、山田

正平一〇顆、中川一政三顆(自刻印)となっている。現在中川家に遺された篆刻の調査を行い一覧にした。

ここでは、一政と山田正平と西川寧との交流を見てみたい。

1、山田正平との交流

中川一政は正平の令嬢梅枝によると、(二〇一三年八月十一日の談による)二、三度山田家に来訪している。正平は、冬心会で中川邸を訪問しスケッチを残している。これらからそれほど頻繁ではないにしても、互いの往来が確認できる。

山田家に残された、一政の書簡は全部で四通ある(内一通は正平息山田潤平宛)。また中川家に正平の書簡が一通残されている(図3)。以下の通りである。書誌的情報とともに内容を紹介する。

(1) 正平から一政宛書簡

①葉書一通・ペン書き・日付(三六年七月二十五日)・宛先(東京都杉並永福町 中川一政先生)・表書き(北海道川湯温泉ニテ 山田正平拝)

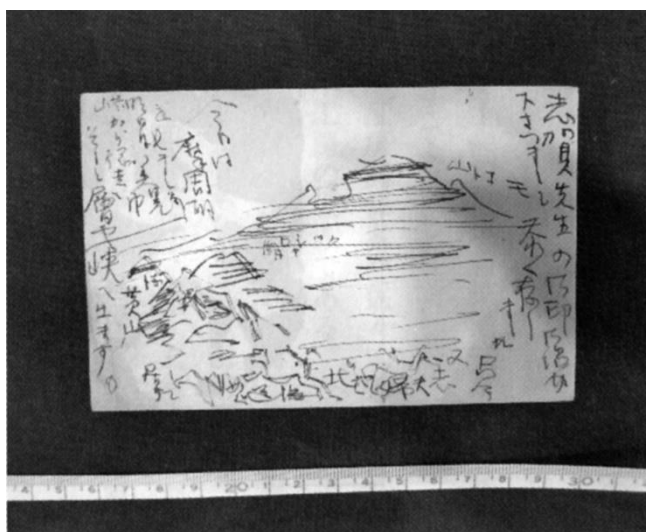


図3 中川一政宛山田正平書簡（中川家蔵）

志賀先生の御印御紹介下さいまして忝く存しました
只今又老夫婦で北海道めぐりて居り
今日は摩周湖を見ました
明日は美幌峠から網走へ
そして層雲峡へ出ます

(2) 一政から正平宛書簡

①葉書一通 即日速達・ペン書き・日付（二月四日夜）・宛先（杉並区上荻窪二ノ一二五 山田正平様）

此間は突然失礼しました 然し楽しい半日でした 武者さんから催促がありましたが大まだ出来ませんか 催促してはすみませんがあまり力をいれて遅くなつてゐるのかと思ひます どうか気楽にして下さい 小生真鶴から一昨日帰り十日頃までならをります 昨日久しぶりに小西さん見えました

杉並永福町 中川一政 二月四日夜

②封書・便箋二枚・毛筆書き・日付（十二月十六日）・宛先（杉並区上荻窪二ノ一二五 山田正平様）

過日はわさ／＼御届け下されありがたく あれより作品に愛用致し居ります 丁度来年度よりの作品にまにあひ喜んで居ます なほ御心かけおき下されたく 又過日小生宅へ来られし三浦氏より依頼ありました 三水草堂の（蔵書印）もの大きさ等御まかせするよし 名刺同封致しおきます出来たらしらせて下さい

山田正平様

永福 12・16

なほ椿君のところ
舟橋市本町三ノ一三 三七なれば
刻る印文等意向をきいて下さい

③封書二枚と小片二枚・毛筆書き・日付（十一月十六日）・宛先（杉並区上荻窪二ノ一二五 山田正平様）（図4）

其後御元気で御暮しの事と存じます

此間中富山へ行つてをりましたが 少し神経痛の気味で帰京し

ました 大したことはありません 決心を新にして勉強にかゝるつもりです 就ては左記「陀羅尼」といふ印大体此位の大きさのもの 何卒何卒御願申上たく 一日も早い方がよいのです 形等この形で彫りにくければ 他の形でも貴意のおもむくやうでけっこうであります

たいてい宅在しますゆゑ御あそびにおいで下さい

十一月十六日 中川一政

山田正平先生
此前お願いしたるものも 御心かけ下されたく願上ます

小片①オツトリシテイテ大イニヨロシ

近頃愛用セリ コレ貴兄旧作銅印ナリ(7)

小片②白字 陀羅尼 朱字 陀羅尼

一政は正平に関して数種の文章を草している。作品集出版の時や三回忌の時などである。略内容は同様である。つまり、正平との出会いと交流、篆刻について、画についての所感などで、正平の早世を悼む。一政は正平の天賦の才を認めており、援助を惜しまなかった。また正平も一政をこよなく尊敬していたことを窺い知ることができる。

2、西川寧との交流

中川一政と西川寧との交流は、非常に友好的で互いの信頼が厚かった。両者の関係資料から、交流の足跡を探る。

中川家に西川からの書簡が残されている。一九八五年十一月の文化勲章受与の際、祝詞への礼状である。中に同封された、西川から

一政宛添え状書簡を紹介する。便箋一枚、ペン書きである。

拝啓

御手紙拝手、うれしく拝読致しました

—自分のしたいことだけする—これは私の仲人の野上やへ子夫人がいつてくれたことです—

この一段まことに以て一種の怪気をおびて来ます
まことにありがとうございます

永福先生尊前

十二月二十九日

西川寧 頓首

西川が一政について述べたもので、篆刻に関わる箇所を中心に見てみたい。

前の『中川一政書蹟』と今度の『書の本』とをくらべると大変おもしろいのだが、今はこんどの展覧会だけにして、書がこもって来た。そして、そのこもりくのたましいがはじけ出すことがよくある。あるいはこの二種類に分けられるといってもいいか。そしてそれは通じて、すごみになっている。ごく簡単にしぼってしまえばこの三つになるかと思う。前の展覧会の作品におしてある印には自作もすこしあるが、多くは山田正平さんの刻であった。正平さんの印は中川さんの作によく似合うようだ。今度のはみな自刻である。

〔永福先生の書展〕、『西川寧著作集』第八巻、二玄社、一九

九二年七月)

この仲間の遊印がたくさんある。その印文の遊び方がなかなかおもしろいが、もうやめよう。山田君がいった。印譜を八十枚とか捺したら印面が変ってしまったと。素焼きではそうだろう。だが八十部でおしまいとして、またこの書作品に捺しただけで中川さんもう使わないとしても、これだけでも印の役目は終わったといえる。リトグラフとかスクリーンとか、どれほどの寿命か知らないが、もうこれだけプリントが出来たら、印がおしまいになっても惜しくはない。この印はただの印とはちがう。印は、この書作品なり印譜なりにおいて、版画の原版のような役目をはたしたというものだから。それにこの印は、はじめから、印にして印ではない。別の一つの存在なのだから。私はこの印を臨書して、額かなにかにしてみたいなと考えている。中川さんのまねなら私は恥としない。

〔中川さんの篆刻〕、『西川寧著作集』第八巻、前掲

以下は、書に対する所感であるが、そのまま篆刻にあてはまりそうである。

画家の字でもよきあり、まずきあり、中川さんのでもよきあり、まずきあり。だが総じて第一形がおもしろい、造形的におもしろい。それに筆がいい。というより線がいい。といった方がわかり易いか。どんよりして見えたり、ピリリとしていたり、なかなかいい。第三に空間のおさえ方がおもしろい。こんなことは下司の見方だという人があるかもしれないが、こういうことがなければ私は落ちつかない。そして最後に何だといえ、そうした筆にのって、うぶのままのところが見え、その鋭いひらめき、高いひびきがある。それで感心してしまう。生地のま

まのところがそのまま伝わって来る。ちといかめしいが、やはり渾金璞玉という所である。

〔永福先生の書〕、『西川寧著作集』第八巻、前掲

西川寧と一政の関係は、互いに相認め合う仲であった。西川は一政のために自用印を刻している。西川は、一政の書画と篆刻に対する一文を草している。中で、造形・線・空間・骨法について述べ、「渾金璞玉」と評し、金石派として位置づけ高く評価する。西川に「中川さんのまねなら私は恥としない」とまで言わしめた一政の書や篆刻の魅力は、もっと注目されてよいだろう。

四 おわりに

中川一政を語る時、これまでは書画が中心に据えられてきた。幾度となく開催されてきた展覧も、多くはそこに視点が置かれていた。はたして、このことが一政芸術の全容を余すところなく、捉えることになっていくであろうか。彼が遺した篆刻は、その数量の多きことは驚嘆に値する。それが、それぞれ変化窮まりない美が宿されている。同じ語句によるものが、その文字構成を大きく異にし、彼のその時々感情が色濃く表現されている。書や篆刻は本来、一回性の瞬時の芸術と言える。一政の篆刻は、陶印が多数を示すが、生な作品で、素材の力、土と火の力が加勢した。一政は、篆刻は用に徹する時、その美が最も美しく輝くことを知り抜いていた。「用」とは人に使われることを意味し、一政特有の個性溢れる美は、まさにそこから生まれたといえよう。

また彼の篆刻の大きい特色は、篆刻と書の表現が極めて近いということである。清の魏錫曾の鄧石如の篆刻に対する評「書は印より

入り、印は書より出ず」(『呉讓之印譜』跋)、また清の趙之謙の言う如く「古印筆有り尤も墨有り。今人は但に刀と石と有るのみ」(趙之謙「鉅鹿魏氏」印跋)である。陶土に刻された書といつてよいだろう。一政の篆刻の特色は、印形の多彩さ、印面構成の自在さ、線質の温雅な妙味、ローマ字印の制作、などにある。彼の篆刻は、いわゆる中国的、つまり中国の秦漢印と異なる彼独自のものである。わずかに風趣に近いものが、古陶器文や大和古印であろう。それは一政という稀有な芸術家が創り上げた篆刻芸術である。彼の芸術に対する姿勢は専家としてではなく、むしろ門前小僧に徹したが、篆刻においても同様であった。

さて、一政を日本篆刻史で位置づけるとすれば、新しい世界を切り開いており、現代の印人の一人に加えてもよいのではなからうか。確かに傍系の作家ではあるが、専門家が及びもしない美が宿されている。最も日本人らしい温雅で洒脱な刻風や、その多様性は、古今独歩といえる。なかでも陶印⁽⁸⁾の制作は、日本の篆刻史上、田辺玄々や山田寒山に比肩する篆刻芸術と称してよいだろう。彼の『中川印譜』(寒山会)、『一政印譜』(求龍堂)は、玄々の『玄々斎印譜』や寒山の『羅漢印譜』と並んで、陶磁印による邦人印譜の三大名譜といえようか。今後中井敬所の『日本印人伝』の続編が編まれるとすれば、一政の名はしかと記されるべきであろう。

また彼の篆刻論は、篆刻実作の経験、書画の制作の経験が裏打ちされており納得させられる。彼の書画論は多いが、それが篆刻論ともいえるものである。ムーブマンとフォルムに対する考え方や「氣韻生動」は、キーポイントで、生きた篆刻を指している。『一政印譜』の「はしがき」など彼の印譜の序跋はその端的なものである。

この度中川家のご厚意で、実際に陶印を三顆押印させて頂く機会を得た。その経験から、印にどの程度印泥をつけ、どれほどの力で

捺すか、最も重要なことであることが理解できた。

【注】

(1) 中川一政を廻る人たちに、車木工房関係者や佐々木惣助がいる。工房の林安貴子氏は、奈良の車木工房の職人である。一政が生前に作陶や版画などを制作するために車木工房を訪れた時、工房の職人の一人として対応した。「車木工房の画家たち」(原田裕著『文士たちの散歩道』角川学芸出版、二〇一四年六月)、佐々木惣助著『晩年の中川一政先生』(中央公論社、一九九三年七月)は、一政を活写する。

(2) 一九四四年山口県防府市に生まれる。一九六八年東京学芸大学芸術・書専攻科卒業。在学中、画家中川一政と邂逅。以後、勧められて油絵に方向転換。個展にて油絵、銅版レリーフ画、ろう染、陶芸、篆刻、書などを次々と発表。著書に『生命の王者 油絵を描いた禅坊主・中川一政』(河出書房新社、一九九二年二月)がある。

(3) 古陶文とは、西周から秦漢にかけて陶器上に押印または刻劃された文字のことを指す。素材は陶製で、印形は自由で文字は変化に富む。

(4) 「夜眠日走」の印文による篆刻は、管見に及んだものに、西川寧「中川賛の篆刻」(『西川寧著作集』第八巻、前掲)、中川家収蔵印・中川達郎氏による『手控え印譜』に収載されたものがある。

(5) 白山市立松任中川一政記念美術館と中川一政美術館から一政が篆刻している写真を提示された。

(6) 一政は、美術という語より芸術には、「生術」の方がピッタリとすると考えていた。彼の芸術観の表れといえよう。

(7) 正平の旧作銅印(印文「中川尅政」陰刻)は、現在中川家に伝えられている。筆者家蔵の書幅に押印されている。

(8) 陶印の歴史は古く、印章の起源とも関わるが、京都の藤井有鄰館に収蔵される戦国期の陶印「郇氏」は著名である。線が柔らかく、一政の篆刻はこれに近い趣が感じられる。素材のなせる業であろう。

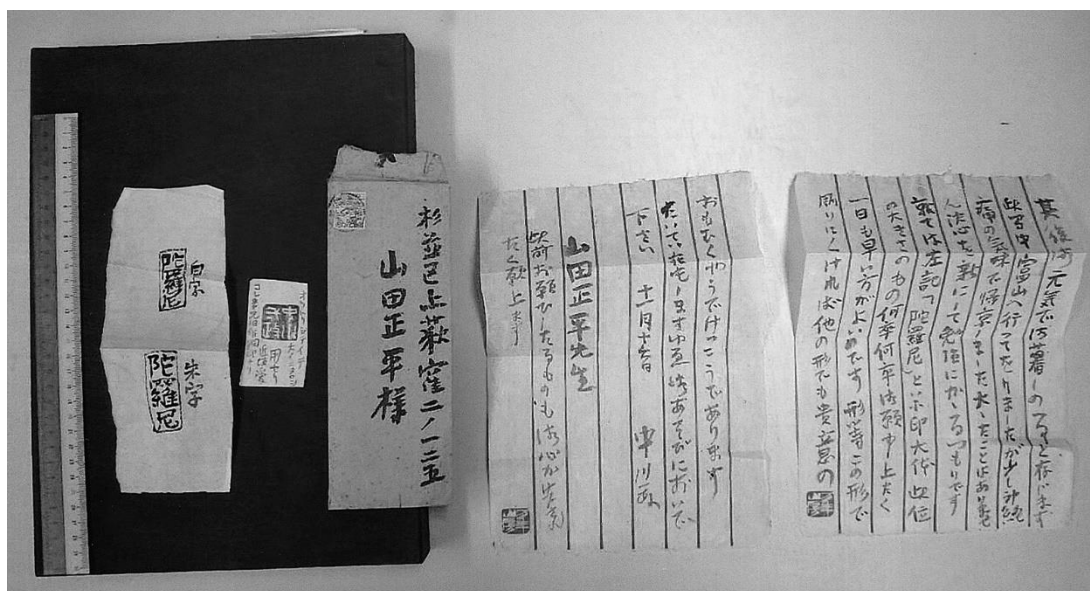


図4 山田正平宛中川一政書簡

第五節 西川寧の篆刻と篆刻論

一 はじめに

平成十四年は昭和の書の巨匠西川寧（一九〇二～一九八九）生誕百周年にあたり、東京国立博物館表慶館において七月三十日から八月二十五日まで、東京国立博物館と読売新聞社の主催による特別展「書の巨人西川寧」が開催され代表作が展示された。これは東京国立博物館と謙慎書道会委員会の共同協議により、展覧会の企画構成と作品選定が成されたもので、図録が刊行された。挨拶文に次のように述べる。

西川寧氏は、明治から昭和にかけて活躍した著名な書家・西川春洞の三男として生まれ、幼少より書に親しみ、中国清代の書家・趙之謙に傾倒、造形的表現を追究する独自の創作活動を続けました。昭和三十年に芸術院賞、昭和四十四年に芸術院会員、昭和六十年には文化勲章を受章するなど、昭和の書壇を代表する書家として活躍されました。

一方、中国文学・金石学、中国書跡の調査研究に取り組み、昭和三十五年には「西域出土晋代墨跡の書道史的研究」で文学博士となるほか、多くの著作もあり、書道史と書の理論の両面にわたる実証的研究をされました。また、慶應義塾大学・東京教育大学（現筑波大学）で教鞭をとるなど、現代書壇の発展にも大きく貢献しています。

本節では、西川の書学、中でも篆刻と篆刻論に関して彼の論考を基に、関連する書簡やインタビュー内容を交え論述する。

二 西川寧と六月雪

ここに取り上げる「六月雪」は「趙墓と六月雪」として、西川が、『書道』第六卷第一〇号（泰東書道院、一九三七年十月）に随想を執筆したのが初出である。その後この一文は名著『支那の書道』（興文社、一九四一年八月）に収録され、『猗園雜纂』（二玄社、一九八五年十月）に再録された。

「六月雪」は、あかね科に属する灌木で、高さ三、四尺、葉は楕円形で小さく、春夏の頃白色又は紫色の花をつける。

西川は、書学なかでも碑学の道統を鄧石如―包世臣―吳讓之―趙之謙―西川寧とし、「趙家之狗」の遊印を刻そうとしたほど趙之謙に傾倒した。その思いがこの一文に遺憾なく述べられているので、ここに全文を掲出してみる。

継述堂先生が西湖の西、丁家山のふところに趙撫叔の墓を尋ねられた時は、随分あちこちと探しあぐねて苦心をされたという事です。たしか葉品三氏^①を伴うて行かれたと伺いました。荒れはてた叢に、どうやら墓道を指し示す石標があつて、それから長い石畳を渡って、たどりついた墓は、これも荒れてはいませんが、その昔はかなり立派に築いたものに違いない姿をとどめ

ていたとの事。その当時、墓は、古い趙家の僕であった男が守っていたそうです。先生はその時墓のほとりに生い茂っていた名のわからぬ灌木のミシヨウを一芽摘んで帰られました。この木は彼の地では「六月雪」と呼んでいるものです。六月雪とはどこか民謡的な詠歎に似た可憐な名ではありませんか。初めてこの名をした時、何か戯曲の中にでも出て来そうなど考えたのですが、果して古く「何とか六月雪」と題する戯曲があるようです。今もなお戯台に上る「金鎖記」も一に六月雪といっています。これが中々丈夫な樹で東京へ持ち帰られてから年々繁茂し、今は私もその一株を頂戴して敝斎の南園に植え下し、日々愛玩しています。俗にハクチョウキと呼ぶものに似た葉と花で、枝はコゴメ桜ほどでもないが、しだれ延びていきます。丁度七月頃から白い可憐な花を枝一ぱいにつけ出して、今に及んでなお咲きつづけます。六月雪の名はここから出たのでしょうか。今年の冬の大寒で一時枯れたかと思っただけ、幸に芽をふき、今では三株程に殖えて繁茂しています。私はこの趙子墓上の花をこよなく愛玩しています。

杭州地図を展げると、丁家山の名は、裏湖の中央西方にのっています。色々の墓をかき入れたかなり明細な地図にさえ、趙墓の名は見あたりません。ただ一つ、杭州への火車の中で呼び売りをしていた、五彩の石版刷で「杭州西湖全図」と題する、恐ろしく旧式な青緑山水風の絵図の上に、丁家山の西方の森の後に、はっきりと「趙之謙墓」の四字が記されているのを発見したのは、限らない喜びでした。再び西湖を訪う時は、是非趙墓を尋ねて見たいと思っています。

この六月雪は、その後篆刻家の山田正平に分けられ、それが更に

独立書人団参与、横浜国立大学講師の太田京子に分けられ、今も花をつけ続けていると聞く(図1)。

正平に分けられたものは、多摩霊園にある一止道人山田正平の墓碑の側に植えられている(図2)。

浙江美術学院教授・西泠印社副社長である劉江氏は、「白い可憐な花(六月雪)よ、永遠に咲け―西川寧先生の杭州訪問時を回想して」『西川寧著作集』第九卷「月報」九、二玄社、一九九二年九月)において、西川と六月雪のことに触れる。

続けて先生はしみじみと話された。「約三十年程前に、私がまだ青年だった頃、丁度あなたの年齢と同じぐらいの時に、私は私の先生(河井荃廬)と一緒に杭州に来たことがあります。そのとき先生は、かつて趙之謙の墓を参拝した思い出を話してくれました。先生は墓のかたわらに咲いていた満開の小さな白い花「六月雪」の実生を採って日本へ持ち帰り、庭に植えられました。その花は幸い育って繁茂するようになり、私も一株わけていただき庭の一隅に植えてあります。今も毎年夏になると不断に可憐な白い花を点々と咲かせてくれます。私たちはこの小さな白い花を見ると杭州を想い、趙之謙の墓と彼の芸術の成就と、さらにまた我々に与えた影響を想うのです」と。(中略)

先生の庭「猗園」で育った「六月雪」の小さな白い花が、これからは先生の冥福のために、永遠に咲き続けることを願ってやまない(一九九二年八月八日 岐阜市北郊三田洞にて)。(前田秀雄訳)

次に、太田に宛てられた一九九〇年二月二日消印の西川寧ご令室ふぢの氏(と)の六月雪に関する書簡を紹介したい。

御寒さきびしき折柄ごきげんよう入らせられ御慶び申し上げます。



図2 山田正平に分けられた六月雪



図1 太田京子に分けられた六月雪（太田京子撮影）

昨日はお手紙ならびに御作品集を賜わりましてありがとうございます。拝受致しました。早速佛前に供えさせて頂きました。太田先生には長年の御配慮を頂いて居りましたのに、何のお役に立つこともなしにすごしてまいりまして申しわけなく存じて居ります。御作品集の目次を拝見致しまして、まず目につきましたのが「六月雪」でございます。それを先ず第一に読ませて頂きました。

六月雪は河井荃廬先生が趙之謙の墓からお持ち帰りになられ、それをどなた様かを通じて私共で頂きまして庭に根づき、皆さまに差上げたようにおぼえて居ります。

昭和十七年に「趙之謙逝世六十年展」を美術倶楽部で致しました折りに「趙撫叔四十二才肖像」という絵の前に、河井先生がお庭の六月雪の小枝を一輪さしにされて飾られた事を思い出しました。その肖像を主人が大変気に入りまして、展覧会終了後河井先生にお願いして幾日か拝借して模写いたしました。

河井先生は廿年三月十日の空襲で亡くなられた事は皆様御承知の事でございますが、疎開のために書画をすっかり荷作りして持ち出すばかりになって居りましたが、それもすっかりなくされてしまいました。いまだに残念な事と思つて居ります。肖像画以外も何点か模写させて頂きました。

その後昭和六十年に趙之謙展を致しました時に、模写の肖像も出陳いたしました。模写の出来上りました時、実物とくらべますと、趙之謙の顔の色が模写の方が少々赤みをおびて居りましたので、「一パイきこしめした趙先生ね」と私が申したのを覚えております。

その他曾宮一念先生の文章の中に菅沼貞三氏のお名も拝見致しました。この方は主人の慶応の学生時代御一緒にすごした方で、

只今もご健在で、もうこの方お一人になつてしまいました。

会津先生、山田正平先生、如流先生等おなつかしいお名前を拝見して嬉しゅうございました。会津先生は筆まめなお方で、お葉書が沢山頂いてございます。木耳社の田中様も二玄社時代からいろいろお世話になつて居ります。

御作品集はこれからゆつくり拝見させて頂きます。私はとうとう筆を持ちませんでしたので、ボールペンのおはづかしい字でございますがお許し下さいませ。それから六月雪の事を、主人が常に「リ्यूシエ」と申して居りましたので、さきほど長女の所へ電話して聞きましたら、それは略して云つたのでしようとの事でございました。大笑いされました。「リ्यू、ユエ、シユエ」が本当だとの事でございます。

中国の花「茉莉花」も四月半すぎますと良い香りで咲きはじめます。嬉しさのあまりいろいろつまらぬ事を長々と申し上げました、御許し下さいませ。明治生れの私には昔話を致しますお方が亡くなられて淋しいかぎりでございます。

昨夜来の雪が今日一日降りつゞきまして、庭の小きな木はうづもれてしまいました。お寒さの折、何卒御自愛遊ばされますようお祈り申し上げます。

お礼まで：

太田京子先生

かしこ

西川ふちの

二月一日

西川寧の類稀なる学識と高い見識は、周知のことではあるが、この度述べた「六月雪」の一文からもわかる。西川の書学そして書作

に大きい影響を及ぼしたのが趙之謙と河井荃廬であることも見て取れる。その傾倒は単に書風や技術のみでなかったことは、この愛らしい花への追慕や一文から窺える。

三 西川寧の印学

西川が如何に印や篆刻を好んだか、また河井荃廬を尊敬していたかは、小林斗盦の次の「荃廬先生と靖盦先生」（『西川寧著作集』第九卷「月報」九、前掲）の一文から読み取れる。

西川先生はよく「私の終生の師と仰ぐのは河井荃廬先生と田中豊蔵先生のお二人だけだ」と仰せられました。その後、荃廬先生顕彰の行事の一つ（荃廬先生印存）の編集の時でしたか、河井先生に対して「よく東洋芸術の精神を把握した、高い意味での伝統の護持者としての偉容」と讃ええられました。私は今そのお言葉をそのまま西川先生に捧げたいと思っております。（中略）「僕は書より篆刻の方がずっと好きなのだよ」と、よく伺いました。書の展覧会の時はまずお出ましがなかったのです。が、篆刻の会という、相当に無理を押して御来臨下さいました。

西川の御子息にトキワ松学園横浜美術短期大学の学長を勤められた西川杏太郎氏がいらつしやる⁽³⁾。杏太郎氏は、「父と私」と題し『西川寧著作集』第一〇巻の「月報」一〇（一九九三年二月）に一文を書かれています。また『墨』一〇六号（芸術新聞社、一九九四年二月）にて「父の思い出」としてインタビューに答えている。西

川について、書作にあたる姿勢として、

親父が書作にあたる態度は、大変に真剣でした。今回の展覧会には、その前の研究の跡を示す双鉤、模本、臨書、攷字の例なども展示されました。攷字というのは文字の検討のことですが、一つの古典の中からずらっと文章を書き出して、その字画や形について、他の例と比較検討を加えたり、出典をこまかく調べるのです。また、自分でグラフを作って、こういう書の表現はこんなところから出てくる、同じ字をこの人はこういうふうに扱っているというところまで検討を加えます。自分のめざす造型を構築するために、いろんな資料を探って本当にすごい勉強の仕方でした。ですから字引だけをたよりにしたり、お習字の先生用にできている『墨場必携』のようなものからかっこのいい言葉だけを借りるなどということは一切ありませんでしたね。

これは、西川が一九五八年に作成した「河井荃廬印臨模年表」(『西川寧著作集』第八巻、二玄社、一九九二年七月)、『西川寧展』(読売新聞社、一九九三年)の傍証ともなる。西川自身『荃廬先生印存』の完成(『西川寧著作集』第八巻)において次のように語っている。

こんな考えから、私は刻年のはっきりしているものを、粗略ながらペンで臨模して、年代順にならべて見た。いわば臨模による年表である。そして、次に、細部の技法と、様式の変化をたどって、刻年のないものをその間に配置するのである。これは日頃やっている書道史資料の整理のときに用いる方法で、慣

れているといえはいえるし、楽しいことではある。しかしこの印譜の場合、数は七百面にあまり、大小とりどりのことだけに、その煩瑣なこととは大変なもので、これは楽しいどころか、むしろ苦しいものがある。私は何度か年表を改め、またなやんでは抛棄する。またしばらくしては勇を鼓して取り上げるといふことを繰り返した。

これは、西川の篆刻における厳正な実証主義を指し示しており興味深い。

筆者は、一九九九年五月二十四日、杏太郎氏をトキワ松学園横浜美術短期大学に訪ねインタビューを試みた。氏は、在りし日の父寧の事を、感慨深げに語って下さった。杏太郎氏から生前におけるご尊父のお姿の一端を伺えた事は幸いであつた。ここでその幾つかを紹介する。

- 一、生井子華先生は、私の妹が生まれた時も家におり、セメント上で印材を磨り減らせていた。
- 一、筆など文房は特に選ばなかった。作品とは関係ないとの姿勢であつた。
- 一、年期の入った筆があつたが、筆は擦り切れるまで、同じ銘柄のものを使用していた。
- 一、作品が完成すると、家族で人気投票していた。時に作品の入れ替えをしたが、上手いかなかった。
- 一、母や私は、半日墨を磨らされたが嫌であつた。
- 一、売書家ではない。作品を売る事はしなかった。
- 一、心の豊かな人間性であつた。世界は自分のために在るが如く我侭であつた。天下の変わり者と言えるかもしれない。
- 一、東京国立博物館を辞める時、守衛の方が家宝にしたいので作

品を書いて欲しいと云ってきたが、喜んで書いてあげた。

一、お稽古では、最初は作品批評をしたが、後は書学の講義となつた。

一、「天国と地獄」のタイトルを書いたが、意気に感じてのことであつた。

一、話好きで、三八度の熱があつた時など、一〇分話すると言いながら八時間喋つた事がある。

一、自分の流派に拘らない人であつた。

その後渴を癒す論考が大東文化大学の河野隆により「蜚倉先生印譜」(『大東書道研究』第一〇号、大東文化大学書道研究所、二〇〇二年六月)として発表された。西川の篆刻の制作期が特定できた印を編年し注釈が施されている。刻印は、現鈐自選印譜『碑倉近況』⁽⁴⁾と『蜚倉先生印譜』の二種から採用している。更に関連資料を紹介し西川寧の篆刻家としての業績が精緻に論述されている。

これ以前には、香川大学の小西憲一氏が「西川寧先生の篆刻―自刻自用を中心に―」(『筑波大学芸術年報一九九〇』、筑波大学芸術学系、一九九〇年十二月)として、西川の篆刻を紹介している。

次に、やはり生誕百年を記念し、本年九月古河の篆刻美術館において西川の篆刻を中心とした回顧展が開催され、図録『西川寧篆刻展』(篆刻美術館編、二〇〇二年九月)が出版された。河野隆による『西川寧篆刻略年譜』―刻印及び篆刻関連の論考・記事等を中心に―は、克明に西川の印学・篆刻方面への資料・文献が調査されており価値が高い。

西川の篆刻論は、彼の全集のいたる所に散見できる。古印から現代篆刻家の評まで、その範囲は頗る広範である。ここでは、彼の篆刻観を探るべく、明治から大正・昭和を生きた篆刻家四名(初世中村蘭台・河井荃廬・二世中村蘭台・山田正平)を論じ比較分

析した評論を取上げてみたい。ここに西川の篆刻観が如実に表れていると思う。『西川寧全集』から、この四家に関する項目を拾い出すと次の通りである。

第五卷

- ・ 第五回日展の書と印
- ・ 河井荃廬先生のこと
- ・ 中村蘭台作品集
- ・ くもの巣がかかっている
- ・ 山田正平遺作展
- ・ 雑抄「蘭台」

第六卷

- ・ 一六翁の尺牘・二印人の書

第八卷

- ・ 初世中村蘭台の刻印
- ・ 中村蘭台氏・篆刻工藝展
- ・ 二世蘭台のおもかげ
- ・ 『荃廬先生印存』の完成
- ・ 『荃廬先生印存』跋
- ・ 『河井荃廬の篆刻』序
- ・ 『一止道人の印譜』序

正平と西川の関係のいくらかは見聞きしていたものの、木耳社から出版された『山田正平作品集』(木耳社、一九七六年十月)の序文に書かれた西川の一文が何時も何故か気になっていた。それは、「一止道人の印譜・序」の次の箇所である。

同時に昭和期の印人に中村蘭台がある。この人の印はデザイン性の強いもので、その風姿はハイカラである。この二人の対

照はまことにおもしろい双壁であった。もう一つ遡って明治の末から大正にかけて、また印人の双壁があった。初世蘭台と河井荃廬である。初世蘭台は徹頭徹尾のちを印にかけた人であるが、荃廬は神気をさぐって止まなかった。蘭台を生活の人といえ、荃廬は唯美主義といわざるを得ぬ。そう考えるとおもしろいことに、二世蘭台は探美の人、一止道人はむしろ生活の人であるのか。この対照観は、私自身の立場に引きかえて妙に私の胸にゆらめき続けている。私は嘗て子供のように、この二人のどつちがより以上に芸術家なのかと考えめぐらしたことがある。この空想は、前代において初世蘭台が、今において一止道人が「右」の座に据えられるという所におちてゆくのである。これは全くたわいの無さすぎる一時の空想に過ぎない。

篆刻家四家を比較し、「右」の座に据える観点はどのようなことか。このあたりに西川の篆刻観の根本がありそうだ。それは、どうも「生活の人」という評語がポイントのようである。ここでは、関連する西川の文章の中から四家への評語を抽出しいくらか考察を加えてみたい。

1、初世中村蘭台

- ・ 傑れた芸術家、文人趣味的な工芸家
 - ・ 日本的明麗
 - ・ 生活の人
 - ・ ロマンティック
 - ・ 徹頭徹尾印にいのちをかけた人
- #### 2、河井荃廬

- ・ 日本の印学史上の観止
- ・ 中国と日本を通じて近世の印学の別幟

- ・ 唯美主義
- ・ 神気をさぐって止まない

3、二世中村蘭台

- ・ ハイカラな風格
- ・ 雄毅にして瑰麗の姿
- ・ 探美の人
- ・ 渾摯明麗
- ・ デザイン性の強いもので、その風姿はハイカラ

4、山田正平

- ・ 間淡の風格
- ・ 隠者芸術の系譜におけるたった一人の存在
- ・ 特別の土俵
- ・ 動かすべからざる風格

西川は、篆刻にデザイン性や唯美主義的な要素を認めつつも、畢竟その根幹は「生活の人」つまり、生活に根ざした「生命の躍動」を見ていたのだろう。これは、西川の作品の根本でもあり、篆刻においてもこの視点は変わらない。

最後に、これへの質問ができるまたとない機会を得た。昭和五十五年（一九八〇）に新宿アートセンターギャラリーで「印人展」が開催された。その際の即席の西川へのインタビューである。彼は微笑まれながら「今日は珍しく私一人です。まあ腰掛けて話しましょう。」との有難い御言葉を頂き、貴重なお話を伺った。日本の近現代の篆刻の歴史を知る上で興味ある内容を含んでいるので、次に西川の話された事柄を要約しておきたい（5）。

- 一、正平さんは実に謹直な人であった。
- 一、私と懇意だったが、少し離れていた。正平さんに遠慮があつ

たと思う。

一、作家としては好かれた人だったし、極端な崇拜者がいた。これは保多孝三さんも同じであろう。

一、中井敬所は篆刻家としてはまずしい。印の研究は深いが、印版屋の親爺といっている。

一、山田寒山はおもしろい。私は西川春洞の所へ来たことを記憶している。

一、正平さんは河井荃廬の所へ行ったが、直接習ったわけではない。

一、河井荃廬は権威を嫌った、真の文人であった。神聖化するがそうではない、文人だ。

一、初世中村蘭台と河井荃廬、そして二世中村蘭台と山田正平は見事な違いがある。以前この両者を比較して、どっちがより以上に芸術家なのかと考え回らせたことがある。二人はみごとに違う。そして初世中村蘭台と山田正平が右の座に据えられる、と述べたことがあるが、これは冗談です。

一、二世中村蘭台に、あなたの作品は装飾に過ぎるのではないかと聞いたことがある。が、蘭台も正平も文人である。

一、画と書における両者の違いが、蘭台と正平の違いである。

一、日本人はすぐ俳諧趣味という、この定義にゆくがどうだろう。ここで西川が述べた、「冗談」は、むだ話ではなく、西川流話術であり、むしろ彼が思索して止まなかった根本の問題であったと思う。それは次の一文からもわかる。

この比較はどうも子供じみたものになる。漱石と鷗外とどっちが芸術家かという問題と同じである。だが私にとって、この両者は全く異質のもので、比較するのが間違っているなどとい

っていられないのは自分のことにひきかえる私にとって逃れ得ぬ命題となるからである。

(『荃廬先生印存』の完成『西川寧全集』第八巻)

この比較とは、ここでは初世中村蘭台と河井荃廬を指しているが、二世中村蘭台と山田正平に置き換えることもできよう。西川は、これら四家の印人を取上げながら、芸術の本質、また自身の書家としての姿を探っておられたのだと思う。

四 側款の妙

西川の書作の妙を語る時、落款の内容と布置の妙が語られる。この点は、篆刻にも当てはまる。側款の内容とともに刻の厳しく美しい刻風は感嘆させられる。ここでその幾つかを取り上げ訓読を施す。

一、自刻の蜉蝣に題す。昭和丁丑作篆し、甲申八月刻す。

比の印、丁丑の年布字するも、未だ刻するに及ばず。後七年、甲申八月に至り、鑄成す。余、印を刻さざること、既に七八年。今日此に出し、把玩すること竟日。懐旧の情惺惺たり。

丁酉一月。寧。

二、自刻の無鬚寧印に題す。

六一年四月、余広州の街頭に到り、迎接の人の中に、余の名を呼び握手を求むる者有り。其の姓を問はば容と曰ふ。蓋し昔日の希白先生なり。余、驚き且つ詫びて曰く。先生昔鬚無けれども今之れ有

り。是を以て看錯る。容翁曰く。君昔鬚無し、今も亦た之れ無し。所を以て、錯たず。一座絶倒す。六五年、又た広州に到る。馬君国権、余に諒げて云ふ。尔、容翁の廬に來りて比の事を以て、談柄となす。戯に比の三文を刻して以て解嘲とす。寧。七四・五〇。

三、自刻の蟬龕に題す。昭和丁丑作す。

四十年 前事 模糊として儘き

丁丑の款題 一隅を明らかにす

足を舒べ頭を譲る 君咲ふこと莫れ

当時の俊発 即ち今無し

比の印、是れ丁丑に刻する所なり。今戊午に及び、正に四十一年なり。謙慎印会第七屆展將に開かんとす。病より起きて此を拓し、戯に二十八字を繋ねて以て同人の一噓に博す。

六月十七日。安叔。

四、自刻の碑戡侍者に題す。

早歳 氈裘を嗜む

老ひ來りて 医する所なし

龕を祭り 侍者と為す

金石氣 壻に盈つ

己未六月、比の四文を刻す。老眼模糊として、霧中に花を看るが如し。鼓努奏刀するも、纔に此に到るのみ。拓訖りて、曼ろに廿字を繋ぬる。安叔。

五、自刻の寧印に題す。

我に古銅印有り。先嚴の嘗て予する所なり。楸菱翩翩に形づくる。双辺は囿むこと紆紆たり。上を象りて哈哈と笑ふ。下を開きて花扶疏たり。伝へて云ふ。波羅門鈴額、戒を受く。初めて画に点じ、奇古なる風姿を喜びて、余を諧諷す。我れ其の諸色を采り、綜輯して野狐に学ぶ。宛も我が名寧に似て、印上以て撫すべし。秦漢に類するを知らず、宋元に体を比ぶるものなし。篆に非ず、復た画に非ず、応に即ち我が書に配すべし。

野狐印歌。己未嘉平。安叔。

六、自刻の岡弥逸印・龍溪に題す。昭和甲申刻す。

比の印甲申に刻す。蓋し昭和十九年なり。刻するに後、未だ龍溪に見ゆるに及ばずして、乙酉の災有り。其の家の遂に劫灰に帰す。其の人復び見ゆるべからず。印独り留りて我が手に在り。已に三十余年を経るなり。今茲に庚申第九屆謙慎印会、戯に鈐して以て同人の一噓に供す。亦た以て龍溪を懷しむなり。

六月十二日。安叔。

七、自刻の寧に題す。昭和己未、刻する所の第二印。

己未の年、戯に我が名印二顆を刻して、以て其の一を謙慎印会に出展し野狐印歌を作りて詠嘆す。今茲に第十回展に第二印を出す。又同人の一笑を得んと欲す。安叔。辛酉六月。

今、側款に漢文でもって即座に内容を刻すことのできる印人は多

くない。寧は漢文を自由に操り側款を刻した。そこには、彼の篆刻への心情が綴られており興味深い。たとえば、「蟬龜」の印の「把玩すること竟日、懷旧の情悰悰たり」など、彼がいかに印を好んだかが見て取れる。彼は、類稀なる文人であり、篆刻における業績は今後長く伝えられるべきだと思われる。

五 おわりに

本節では、西川寧の書字、中でも印学における博識の一端を種々の文献・資料また、書簡やインタビュー内容等を踏まえつつ述べた。現存の関係者や同時代人へのインタビューは貴重である。それは賛辞を差し引いたとしても、その作家の真実の幾分かを語っているからである。後の作家研究においてかけがえのない資料となる。西川が語った山田正平に関する言説は、正平の事績・印学を研究する上でかけがえのないものである。

西川の芸術や学問の根本に印学があることは、かねてより熟知していたが、本研究によりその幾らかを明らかにした。西川の書に見られる「金石の氣」は、古印そして、趙之謙、河井荃廬の世界、なにかなく篆刻の世界に拠るところ大であろう。荃廬の印の編年譜の緻密さや、有鄰館の古印や穆如清風室蔵印の鑑賞文の達意さは西川の考証家としての真骨頂であろう。また中川一政から古印まで趣向は頗る広い。更に、書画作品研究、作品の真偽や編年に、それに押印された印の価値を大きく認め、作品の年代決定に生かしている。逆に刻印の制作の刻年の決定に、書画作品の描かれた年代を根拠として取り扱っている。これなども、西川の篆刻への造詣の深さがなせる研究の方法論と言えよう。

西川は篆刻でもって身を立てることはなかったが、彼の芸術や学

術は、篆刻や金石趣味で裏打ちされていたと思える。西川寧こそ、本当の意味での印人、日本の中で数少ない「印癖家」である。篆刻の中に西川芸術の本領を見る思いさえする。彼が、編集刊行した篆刻に関する書籍、また印人の育成は、日本の印学や篆刻学の水準を高めるとともに、篆刻芸術の大きい成果を上げたといえよう⁽⁶⁾。

【注】

(1) 葉葉舟(一八六七―一九四八) 原名は為銘、後銘と称す。字は盤新、品三、葉舟と号す。浙江杭州の生れ。篆刻に秀でた。『広印人伝』『金石家伝略』『葉氏印譜存目』などの著作がある。

(2) 西川ふちの夫人が西川について述べた一文が『私家版猗園雜纂』(西川ふちの、一九八九年七月)に「あいさつ」として載せられている。

(3) 筆者は直接西川寧に指導を賜ったことはない。しかし筑波大学の大学院に在籍していた時、教官の伊藤伸氏からよく西川のお話を伺った。伊藤氏(一九三八―一九八九)は「方寸の世界―西川寧・生井子華往復印稿を見る―」(『書道講座 第六巻、篆刻』)において、西川と生井子華の印稿の遣り取りを紹介している。その後、工藤愚盒、小林斗盒、今井凌雪の三生からも幾度となく西川が話題に出その存在の大きさに驚いた。また私は第四回国際書学研究大会に、「西川寧の印学」とのテーマで研究発表をすべく準備をすすめていた。ただ資料が不足で一九九九年五月二十四日、西川の御子息である西川杏太郎氏をトキワ松学園横浜美術短期大学に訪ねた。杏太郎氏は同大学にて学長の要職につかれていた。

(4) 『書品』三〇〇号(東洋書道協会、一九八九年九月)に現鈐自選印譜『碑盒近況』は紹介された。後、「第三〇回猗園書展」(一九九五年四月)の図録に改めて掲載された。

(5) 筆者「山田正平研究―周辺の人々とその交友(Ⅰ)」(『広島文教人間文化』第三号、広島文教女子大学人間文化学会、二〇〇三年三月)

(6) 西川寧の篆刻に関して次の文献が参考となる。

- ・『西川寧篆刻展』（篆刻美術館、二〇〇二年九月）
- ・河野隆「西川寧先生の印癖」『書法漢学研究』第六号、書法漢学研究会、二〇一〇年一月）

第六節 保多孝三の篆刻と篆刻論

一 はじめに

保多孝三（一九〇八～一九八五）は、既成の型にはまらない独自の刻風で知られる篆刻家である。山田正平に私淑した。本節では、保多の篆刻と篆刻論を述べ、談話録として、筆者が直接氏からお聞きした芸術に対する談話を掲載する。

二 略 伝

保多は、東京麻布で誕生した。字は子老、子考、無違、号は二羊、雙羊、居室は柞廬、無違室、石為身齋と称した。父は易学研究家の保多守太郎、母はたみ、二兄二姉の末弟である。大正十二年（一九二三）頃から篆刻を始めた。国学院大学予科時代に羽田春埜の勧めで朱文印「喫茶去」の印を東方展に出品し、新鮮な感覚が好評を博した。同印は、西川寧の賞讃するところとなったが、西川は「何年か前、どこかの展覧会で「喫茶去」の朱文印を見たのが僕の氏を知った最初である。それは線は粗だったが、篆刻家らしい習気のない、単純素樸、うれしいものだった。それから作振会時分に出品物を取りに来た国学院の正帽を冠った人が氏である事を発見して私かに氏への興味を深めた事がある」（第五回東方展の篆刻）^{（1）}と述べている。

国学院大学国文科時代、金澤庄三郎博士の国語学、折口信夫博士

の国文学史を受講し益を受ける。保多の卒業論文は「古代農業に関する言語の研究」である。これは、近藤信義氏の「且座喫茶去―保多孝三先生を偲ぶ」^{（2）}によると、「古代日本語と漢字との比較検討を通して、彼我両国を文化史的に眺め、ひいては、それを体系化しようというスケールの大きな意図のある論文である」と述べる。

保多は、折口学の根底とも言える、文学の信仰起源説を用いて、文字発生の起源を説くことを考えていた。国学院大学教授時代「文字構造論」の講義において、それを実行した。保多家にこの講義の原稿が残されている。漢字の字義解釈を許慎の『説文解字』を引きつつ独自の解釈を付加したものである。実に精査なもので、先生の学問の根底が窺えるものとなっており、公刊が待たれる。印を刻す時、篆形の索搜、つまり校字の問題がある。保多が執筆した「篆刻周辺」^{（3）}に、保多の文字学に対する見識の一端が見て取れる。

戦後は、日本書道院、毎日展、日展へ出品するとともに、銀座松屋、文芸春秋画廊などで個展を開催し、書画、篆刻を発表した。見る者をして、保多の境地に引き込む感興に富んだ独自の世界を堪能させてくれた（図1～図6）。

さて、私が保多に初めてお会いしたのは、昭和五十年のことである。保多は、東京学芸大学において、篆書法（篆書・篆刻）の講座を、昭和三十七年（一九六二）から四十九年（一九七四）まで担当された。本来同講座は、三年生向けに開講されていたものだったが、保多のお許しを乞い受講させていただいた。その後大学での篆刻同好会、国学院大学、多摩市の自宅や教室で様々な教えを頂いた。保



図1 丁一卓二（昭和36年日展・53歳）



図3 坐断十方（昭和34年毎日展・51歳）



図2 大千（昭和47年日展・64歳）

（図1～3は保多家蔵『保多孝三展』篆刻美術館、図4～6は筆者蔵）

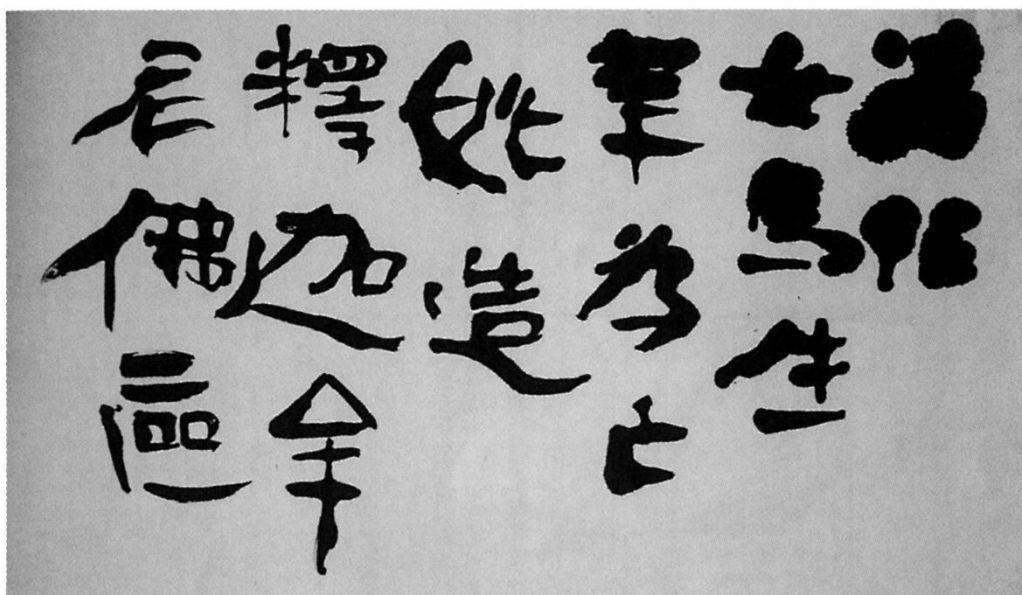


图4 臨書「釈迦牟尼仙一區」

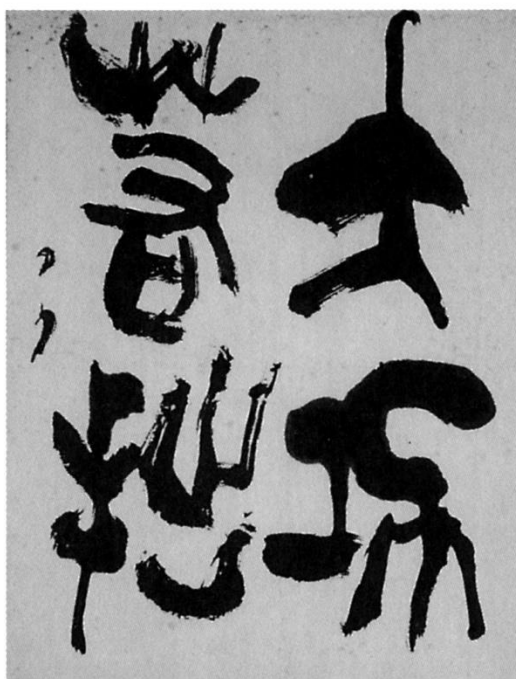


图6 習作「大巧若拙」



图5 習作「長樂無極」

多から賜った学恩の深さは筆舌に尽くしがたい。珠玉のような片言雙語を「保多孝三談話録」として後世に遺したくおもう。これらは滋味掬すべきもので、保多の芸術観が見られる。

本節は「保多孝三論」序章(『広島文教女子大学人間文化』創刊号、広島文教女子大学人間文化学会、二〇〇一年三月)を加筆修正したものである。

三 保多孝三談話録

1、篆刻・刻字

○明清作家にしても、秦漢印など古いものを学んで出てきた。古いものを学ぶべきだ。現代の書家の書を学んだとしても、その人の上にはなれない。

○現代の篆刻家の作品には人間性や躍動感が少ない。どうも、コンコンとくだいていくようなことをしているからだ。へんに技術っぽくなり形式化している。しかしこういったものを突き詰めたものが出てもいいだろう。

○現代篆刻の作品寸法は、今使用している印刀と手との事を考える
と無理である。

○選文により作品の良し悪しが大いに左右する。繁簡相伴ったものを選ぶこと。

○篆刻も刻字も同じである。

○書が良くないのに刻していいはずがない。とにかく書を書け。

○作品展示で印影と印材両方大切だが、印影を見て印面がわからないようではだめだ。また両方の展示は大変だろう。

○印材は、鑑石で刻ろうが、何で刻ろうが、作品が良ければいいのだ。

○印稿作りが篆刻の基だ。だからいつも少しづつ作っておくのだ。

○篆刻は方寸の世界であり、刻字はもつとのんびりしたものだろう。

○篆刻をやれば刻字だってなんだってやれる。

○古璽・秦漢印を見、拡大して臨書しなさい。そこから構成法も解ってくる。

○篆刻とは、方寸の中に生き、はりつめた寸分ゆるぎのない世界である。

○篆刻とは手の中の宇宙、この手の中の世界のものである。(手を合わせて印を持つ姿を取られつつ)

○松丸東魚の印は年が入っている。

○古典をそのまま布字してもだめである。そこには規則がある。それを古印から学ぶのである。

○刻字は深く刻ればいいというものではない。

○毎日展の刻字を見て良いものだと思っ
てはいけない。書の古典をやれ。

○「刻字」は部門が作られた動機が悪い。またネーミングもよくない。

2、書・執筆法

○もとある漢字を大切にしなければいけない。たとえば、撫子の花を摘んできて写生をしても、撫子の花に変わりはない。文字だって、もともと面白い形をしているのだ。それを壊す必要はない。

○小篆などは形式化に走っており面白くない。それより甲骨文や金文を学び、形を学び、それが作られた精神まで見通せたらすごい。(小篆と金文と両方を出され、どちらがおもしろい、と聞かれながら)

○篆書を学ぶ場合、新しい時代のものより、古い方からいく方が歴

史的にみても自然である。

○文字をどう取り扱うかが書の根本義である。

○書はそんなに深く考えこまなくてよい。楽しいからやる。確かに生みの苦しみはあるが、それが出来た時楽しいから、やはり楽しみを求めているのだ。

○元ある形を大切にして、あと保多孝三を加えるとしたら線質か。

○正方形の形の作品は制限が多い。昔からのゴールデンカットを利用したらよい。

○何ともない文字を書きたい。

○中林梧竹の篆書いいが、少しひねりすぎ。

○副島蒼海の字は強くていい。また落款はみんな違う。篆書は良くない。

○中国人は文字を大切に扱う。土着的な強さか。

○篆書にどっぷりとつかって多く書くこと。

○書を漢字・仮名・篆刻・刻字などとジャンルに分けるのはおかしい。

○書には確かにデザインの要素があり、空間を大きく作ったりあけたりすることもあるが、その字の持っている性質による。

○篆書・隸書・楷書・行書など書体の違いをみる。

○書における潤渇などあまり重要ではない。付随的なものである。根本的なものを忘れてはいけない。根本とは何か。それは、書を書いて楽しい、苦しい、面白い、とそういったところにある。

○とにかく見て書くことである。考えることなどいらない。

○古典を勉強すれば現代人のものは解る。その後で現代人の良いところを取ってあげばいいのである。

○臨書する時の古典は、時代は古いものから新しいものへと下っていく方がいい。

○田邊古邨先生は羊毛など使ってはいない、伊東参州先生は使っているが。最も使いやすい筆を使えばよい。

○篆書を書け。特に甲骨や金文など古いものを書け。

○大きい筆で書け。

○臨書は小さい部分まで見て書け。

○文字は、とにかくにも誰かが書いたものである。そこからすべてが発している。

○王貞治のフォームを見たり聞いたりするとよい。書も同じだから。

「ひっかけ」などもよく似ている。

○「足大地を的とす」書を書く姿勢大切なり。

○用筆法は、指先を筆に軽く三本あてて、薬指の爪のつけねを内側にあて、そして親指をそえる。

○手首は上げるな。肘ははるな。

○手の上げ方は「ふりこ」と同じ、垂直に上げてびたつと止める。

○体が動いても筆が動かないとだめだ。

3、芸術観

○若者は展覧会や世間に染まっていけないし、離れすぎもいけない。もっと堂々とやれ。

○展覧会に出品してもよいがなめてはいけない。

○書道界の裏を探るような事だけはやめろ。

○弟子に雅号を与えて金を取るような事はするな。

○雅号は自分でつけければよい。師承につけられるはずがない。それほど文字の遊びのできる人はいない。

○中川一政さんは「自分はこうだ」という生き方をしているからいい。

○花を生ける時、花を切ってくるが、花はやはり花である。

4、保多孝三令夫人の談話

- 結婚当初から、朝五時頃には起きて臨書していた。
- 暇を見つけては、古書漁りに出かけた。
- 授業の時は怖かったようだが、根は優しい人だった。
- 若い頃、絵を描きたかったそうだが、父親から絵描きでは食えないと言われやめた。
- 保多には先生はいなかった。全て自分で発見し掴んでいった。芸術とは厳しいものですね。
- 旅行に行くときと字と絵を書いていた。
- 展覧会への出品作は、前日ぎりぎりに刻して出していた。
- 絵の展覧会を見に週一回は出かけた。
- 保多の家系は、画や書に関わりがあった。
- 私のことを「女らしくなくていい」と言って結婚した。その後、三指をつくような人がよいと言っていた。
- 画の話をよくしていた。
- 実に素直な人だった。
- 犬をかわいがった。
- 女学校で、武部先生的美術クラブで裸婦のデッサンや油絵を描いた。
- 植物をよく描いた。
- 関東大震災の時、学校が休みとなり、印を刻し始めた。
- 作品についての話は聞いた事がない。
- 毎晩印を刻していた。
- お金には淡々とした人でした。
- 暇あれば字を書き、本を読んでいた。
- 「師につくなら古典を学べ」と考えており、「かえってそれがよか

った」と言っていた。

○「弟子は取らない」と言っていた。

○「文字講話論」を纏めたかったようだ。

○画を描いている時が一番楽しそうだった。

四 おわりに

保多は、山田正平について次のように語る。

○山田正平先生に、「自分は鄧完白から習ったが、甲骨、金文から入っていたら印がもっと早く良くなったと思う」と申し上げると「今、その事を気づいただけでも宜しいではないですか」とお答えになられた。

○山田先生は実に神経の細かい人であった。そして誰とも朋友という付き合いをしなかった。

○山田先生の印面を拝見すると、周りを凹まし真ん中を高くしておられた。なぜなら押印の時、周囲に印泥が付きすぎるからである。

○山田先生の手はごつい手であった。土を掘っている手だ。

○「印を刻す時は、左手を生かさなければいけない。両方の手で切り込むのだ。印床は使わない方が左手が生きるよ。どうかな」と正平先生から教わった。

○山田先生の個展を見に行った時声を掛けられ感激した。

○私は、現代篆刻家の中で山田正平先生にのみ頭を下げる。山田正平先生に益を受けたということです。

○山田正平先生と現代の篆刻家は精神性が大いに違う。

○正平先生の印や書を真似てもしかたがない。山田先生は山田先生でよい。山田先生あり、保多あり、それでよいではないか。

以上の言説から、いかに保多が正平に私淑していたかが見て取れよう。

保多は、篆刻の作品制作が活動の中心であることは、作家である以上当然の事として、国学院大学、東京学芸大学等において多くの後進を教導育成した。また、作品集⁽⁴⁾、著作⁽⁵⁾、論文、随想、評論も多く業績は多岐に亘っている。篆刻面における保多の特異点は大別すると次の点が挙げられよう。

- ① 空間処理の特色―力のベクトルが左上方から右下方に働く動感。
- ② 輪郭概念の拡大―文字と辺縁との融合、不即不離の微妙な構成。
- ③ 刻印と書法との近似―筆・墨・紙による効果である線の太細や潤渾の極限応用。

- ④ 用具・用材の工夫―印刀にタガネ、柔らかい蠟石の使用。

- ⑤ 刻書の開拓―ブロンズや石膏等の新素材での刻書。

また、保多は折りに触れ芸術論を展開しているが、「印・篆刻」⁽⁶⁾での「結語」は印や篆刻の本質で、考えさせられる内容を含んでおり示唆に富む。ここに引用する。

印は信なりの昔の定義は通用しなくなった。篆書を石に刻つたのが篆刻であるのなら石碑の篆額も篆刻になる。篆刻の本質はどこにあるか。本質だと思っていたものが動いてくる。浮いてくる。浮動する条件をすべて切り捨ててさて最後に残るものが本質でなければならぬ。篆刻の歴史を追求すると同時に、実作をもって裏づけてゆく。ここに本当の答が与えられるのではないであろうか。

保多の篆刻論の実質が述べられた内容で、氏の篆刻論の結論ともいえる。

【注】

(1) 『支那之書道』(興文社、一九四一年八月) 改題『猗園雜纂』(二玄社、一九八五年九月)

(2) 『保多孝三展作品集』(文芸春秋画廊、一九八七年六月)

(3) 『書道講座』第六卷、篆刻(二玄社、一九七三年二月)

(4) 『現代篆刻刻字代表作作家作品集 保多孝三作品集』(谷川商事株式会社、一九七九年十二月)、『柞廬印存』八冊(東京堂出版、一九七八年六月)

(5) 『篆書』I、II、III、IV(木耳社、一九六七―一九七一年)

(6) 「印・篆刻」(『今日の書道』二玄社、一九五五年四月)

第六章 高芙蓉研究

第一節 高芙蓉の顕彰と墓碑について

一 はじめに

本章では日本の印聖と目され、寒山・正平と関連のある高芙蓉の研究を行う。

わが国の印聖と仰がれる高芙蓉は、没後門人や彼を慕う人々により、さまざまな顕彰や出版が行われてきた。これは芙蓉の遺徳を長く伝えたいとの思いからであろう。本節ではこれまでの芙蓉の顕彰の経過を探るとともに、筆者がかつて上梓した『高芙蓉の篆刻』（木耳社、一九八八年六月）⁽¹⁾以降に過眼、蒐集した芙蓉の刻印、印籍、書画作品を紹介したい。

また芙蓉は、天明四年（一七八四）四月二十四日江戸において没した。墓碑は天明六年（一七八六）に完成したものの、理由あつて建立することができず、長らく土中に埋められていた。後、東京都文京区小石川無量院、茨城県下妻市の雲充寺に建立され、工藤愚庵師⁽²⁾、西川寧や二世中村蘭台の尽力で、東京都港区虎ノ門にある浄土宗光明山和合院天徳寺に再建された。その後、同寺に河井荃廬墓が、西川寧の題字を得て完成し、墓域を造成し芙蓉墓と並列して建立された。そして両墓の建立完成記念法会が同寺にて平成元年（一九八九）十月一日に催された。

別に芙蓉ははじめて東帰するに及び、寿蔵碑を京都東山一心院に建立した。これを発見したのが学識高く帝室技芸

員に選ばれた明治印学界の泰斗中井敬所で、芙蓉派の系譜に列なる山田寒山正平父子も一心院を詣でている⁽³⁾。碑銘は芙蓉自ら書したものといわれ「芙蓉居士墓」と格調高い楷書体で題署されている。

本節では、芙蓉墓の流転に関して、工藤師に伺った事柄や、拝借した資料を基に考察する。

筆者は、日本における印章や印人の研究、中でも『高芙蓉とその門流の研究』、その一系譜である源惟良、小俣蠖庵、福井端隠、山田寒山、山田正平への印学の継承とその発展並びに作品研究を課題としている。本節は、その研究の一端を担うものである。

二 高芙蓉の顕彰

これまで高芙蓉の顕彰がどのように執り行われてきたか見てみたい。表Ⅰにこれまでの顕彰一覧を作成した（表Ⅰ）。中でも特に重要な事蹟に関していくらか概説する。

小林斗盦は、「高芙蓉逝世二百年記念展観に当って」（『逝世二百年高芙蓉記念展図録』日展篆刻作家展事務局、一九八五年昭和六十年四月）で、次のように述べる。

我国の印聖と仰がれる高芙蓉は、天明四年（一七九四）四月二十四日江戸において歿した。昨年は逝世後二百年に當るので、記念の行事を志しながら期が熟せず、今日

にいたってしまった。今春久々に日展篆刻作家展が企画され、全国から印人が参集する好機をとらえて、芙蓉の書画・篆刻・印譜、芙蓉系の作家の刻印・印譜・著述など、関係資料を一堂に展覧し、いささかその偉業を顕彰することにした。

芙蓉の記念祭は、私の知る限り過去四回行われた。第一回は大正二年東京における百三十年祭、第二回は翌年の京都、第三回は昭和八年東京における百五十年祭、第四回は昭和二十八年京都における百七十年祭である。

私は昭和八年の清水谷公園（現在のホテルニューオータニ前）における記念祭に参列したが、河井荃廬先生をはじめ当時の名流が綺羅星の如く参会し、記念の祭事を執行了後、書畫印譜を見、席刻を試み、一日の清遊を楽んだものであった。第一回の時覆製された「芙蓉軒私印譜」はもとより、その時の記念品すら殆ど眼にすることが出来なくなったので、今回の二百年記念展覧の主要な作品を小冊にまとめ、印聖敬仰の微意を表わすことにした。

この文中において触れられた京都での第四回の百七十年忌について、須羽水雅（明治四十三年〜昭和四十九年）は、「高芙蓉百七十年忌について」の「追悼会の模様」（『書品』第十八号、昭和二十六年七月）で、

本年四月廿日は印聖、高芙蓉先生の百七十年忌日に相致すので、追悼会開催の計画が進められたのであったが、当日が京展の審査日に当たったので、止むを得ず、一

ヶ月後の五月廿三日に開かれた。主催者は、園田湖城先生、神田喜一郎先生及び同風印社で、会場は芙蓉先生の墓地がある京都東山山腹の一心院で行われた。

一心院は東山知恩院の東、東山の中腹に位し、京都の市中を一望し得られる勝地である。当日は折悪しく一日中雨天であつたが、洛中の印人は云うに及ばず、大阪神戸よりも風流文雅な士が参集し、誠に盛大なものであつた。

午後二時半より本堂で、寺院の読経あり、各人の焼香で終り、また、墓前で回向が行われた。客殿には芙蓉先生の木像を始め、数々の遺作、遺品などが陳列され、先生の遺徳を偲ぶに充分なものばかりであつた。午後四時よりは、園田、神田両先生の芙蓉を偲ぶ講演があつた。また別室には内藤基士氏により、煎茶席が設けられ、雨中の京洛の眺望、一段風情を添えた。なお参加者には記念印譜が配布された。

と述べる。先人によるこれまでの芙蓉顕彰の軌跡や内容の一端が見て取れる。記念祭における展覧は、印譜・刻印・印籍・書画作品・関係資料と多岐に亘っている。

また芙蓉の門流は全国各地に広がりをもっており、芙蓉の影響力の絶大さを物がたつているといえよう。そして顕彰一覧表からも明らかのように、芙蓉の顕彰は現在まで引き続いて執り行われている。一例を挙げれば、明治三十年に、芙蓉先生紀念印会が企画された折に、全国から二九九名もの賛同者が集まっている^{（4）}。芙蓉の古体派は、幕末まで流

行するが、その末流になると、古体の風をそのまま受け承ぐのではなく、新しい要素をつけ加えて、別の一派を形成する者も現れた。しかし明治に入っても、なおその風を受け承ぐ者があり、明治の保守派と呼ばれた。芙蓉派は、時代の移り変わりとともに、様々に変容しながら現在まで受け承がれてきた。

三 高芙蓉の刻印、印籍、書画作品所蔵状況

筆者がこれまで調査しえた資料は高芙蓉の遺作の一部であらうが、これらを通覧すれば、充分彼の刻技の高さや翰墨趣味を窺うことはできる。そして和漢の学に通じた文人墨客としての生き様を読み取る事ができる。ここで、現在における芙蓉の刻印、印籍、書画作品の遺存、所蔵状況を纏めておく(表Ⅱ)。芙蓉に関係する刻印、印籍、書画作品の所蔵者の変遷は、書き込みや所蔵印から明らかだが、芙蓉派の伝播の跡が見え興味深い。

芙蓉の顕彰に力を尽した先人の代表は中井敬所をその第一とする。東京国立博物館に所蔵される彼の旧蔵品である、『高芙蓉印譜』(折り帖)、『高芙蓉印譜』上・中・下(一帙三冊)、『高芙蓉印譜』(一帙五冊)、『高芙蓉印譜』(一帙二冊)、『芙蓉印譜』、『芙蓉山房私印譜』、『芙蓉先生遺篆』(二冊本)、『芙蓉先生遺芳録』(全四冊、附属)、『補刻摺印補遺』(六冊)、『皇朝印人伝』(全五冊)は、芙蓉の最も纏った資料といえる。筆者は東京国立博物館において、かつて数日にわたり調査した。

敬所は、高芙蓉顕彰に尽した功労者である。『芙蓉先生遺

芳録』(全四冊、附属)は、芙蓉の事績を調査した資料集といえるもので、表紙に「芙蓉先生遺芳録一 明治辛卯一月起筆」とある。その第三巻に、明治三十三年六月九日・十三日・十四日・十七日・二十七日・三十日、七月一日・六日・七日・十五日、八月一日・二日・三日・十日・十一日付けの「峡中日報」(峡中日報社)に、一五回に亘って掲載された、「高芙蓉伝」の新聞切り抜きが収められている。これは明治二十四年(一八九一)当時の芙蓉研究の水準を示したものだといえる。次に中野三敏氏は、『西日本新聞』(二〇〇〇年四月二日)において、金印に関して憶説を述べているので紹介しておきたい。

金印についての憶説を一つ。現に国宝になっているものを一寸気になるなどと言え、とんでもない不屈者ともいわれようが、そこは素人考え、御気に障ったらご勘弁。

何が気になるかといえば、要するにその出現の時期であり、当時の日本の印学、或いは篆刻界の情勢の如何という所にある。

享保以来、篆刻の技芸は最新の中華趣味として学芸界に熱狂的に迎えられていた。それも初めは極く装飾的な明風の篆体が喜ばれたものの、徂徠学に基づく古風憧憬の気運にうながされて、印聖と仰がれた高芙蓉が登場すると、中国古代の官印の模刻を盛んに試みる機運が生じたのが、宝暦以降、明和、安永という時期であった事は、いはゞ斯界の常識の筈である。

その絶頂期に、これほどの物がひよっこり現れるとい

うのは、余りに出来過ぎた話と思うのは無理だろうか。当時の印人の知識や技術では及びもつかぬという説があるのも承知してはいるが、決してそう見くびったものでもなさそうに思える。因みに芙蓉の没年月は天明四年四月廿五日、金印の出現は天明四年二月廿三日、僅か二カ月の違いというのも何とも思わせぶりなこと。

さて高芙蓉の刻印を調査するにつけ、彼の刻技の高さ、当時の鑄造技術の精巧さが見てとれる。中でも東京国立博物館の所藏品や、藤山鳴堂藏品等を具に検討するに、その高度な鈕の技術にも驚かされる。

金印と、山梨県立図書館所蔵『高芙蓉印譜』（二の九丁右）に捺された金印の印影との関連は再度検討することが必要だろう⁽⁴⁾。つまり、その印影の流転・伝来である。文化年間に、甲府勤番支配を務めた松平伊予守定能（宝暦八・天保二）の印譜であるだけに注目される。

四 高芙蓉墓二基概観

1、一心院の高芙蓉墓

高芙蓉は、天明四年（一七八四）はじめて東帰するに及び、寿藏碑を京都東山一心院に建立した（図Ⅰ）。「一心院沿革」（第五八代隆寛記による）によると、一心院は、華頂山の麓、知恩院の勢至堂、法然廟堂の南、釣鐘堂の北に位置する。京都市東山区林下町四五七番地にある。浄土宗捨世流本寺一心院と言う。天文十六年（一五四七）に三蓮社縁誉称念上人により開創された。

高芙蓉墓は、一心院の境内にある本堂の南側に位置する。小川義明著『京都名墓探訪②』（ナカニシヤ出版、平成八年九月）に載せる一心院境内・墓地図の（6）の場所にある。碑表は芙蓉自ら書したものといわれ「芙蓉居士墓」と格調高い楷書体で陰刻されている。同碑表の書者は、芙蓉の他の書蹟と比較して芙蓉の自筆と認められる。同年に書かれた『高芙蓉刻永田観鵝印影』（二帙一冊）の識語と比較すると、横画の抑揚、右払いの形が類似している。

その文字の寸法は、横八糎、縦十二糎内外である。文字は円彫りと葉研彫を組み合わせている。碑は二段の台石に載せられており、形状は圭首で、碑の総高一二五・四糎、最大幅三十・三糎、碑厚十九・八糎である。

高芙蓉墓を発見した人物は、山田寒山であるとも伝えられているが、寒山はその折の感慨を詩に詠んでいる。『大朝』明治三十五年十二月二日の記事として取上げられている。

西游小吟

禮圓光大師墓 入一心院 同游曰 此寺有高芙蓉墓

大悦 問寺主 一基断碑 苔蝕不可讀 愴然有感

圓光大師の墓に禮し、一心院に入る。同に遊びて曰く、此の寺に高芙蓉の墓有りと。大いに悦び、寺主に問へば、一基の断碑、苔蝕んで讀む可からず。愴然として感有り。

華頂山深處 青苔三尺碑

清風明月外 不許世人知

華頂の山深き處 青苔三尺の碑

清風明月の外 世人の知るを許さず

ただ、中井敬所編『続印譜考略』附録『日本纂述印譜』によると、『芙蓉山房私印譜』一卷に、

余もと此の譜を蔵す。明治辛卯（二十四年）秋、平城の宝庫を拝観し、帰途京師に過り、一心院に詣で、その寿碣を尋ねれども、得ず。翌歲壬辰（二十五年）秋、再び京師に遊び、また一心院に詣で、寺僧三浦大俊師に謁し、示すに此の譜をもつてす。師乃ち余を拉し、墓地に就きて搜索すれども得ず。余乃ち意えらく、墓製必ずや当時の式ならん。これを審らかにするにしかず。と。また一周す。たまたま無文の碑一片を認めたり。即ち天明の式なり。その背を視れば則ち芙蓉居士墓の五字を刻せり。楷法嚴正、筆力遒勁。これ翁の自ら題する所なるを知る。乃ち石工に命じてこれを修し、僧を請じて誦經せしめ、香花を供えて去りぬ。ああ源惟良昔この譜を作るにあらざれば、則ち余今日いずくんぞ此の碣有るを知ることを得んや。惟良の功また偉ならずや。

と記すことから、芙蓉の寿蔵碑は山田寒山が一心院を訪れる以前に敬所が探索し発見、その後寒山も知る所となったとするのが妥当だろう。敬所の芙蓉墓の発見の経緯は、明治三十三年七月六日の峽中日報社『峽中日報』に掲載された「高芙蓉（八）」に詳しい。

一心院の寿蔵碑 次手に墓の事に付て、も一ツ申しましよう、先生の記録に寿蔵碑を京都の一心院に建てたと

云ふことがあるから、是非これを調べてみたいと思ふて京都へ参る度毎に尋ねてみたが、知れぬ、それで京都の知人へは誰れにも彼れにも頼んでゐたが、一向に知れぬ、それでも記録にあるのだから間違もなかうと云ふ考で、たしか廿八年かと思ひますが、出京した時、此度は幾日かゝつても其調べを附けなけりや置かんと云ふ大勇氣を鼓して手を着けてみた、この一心院と云ふは知恩院から向ふに當りて高燥の地がある、これを上り詰めた處が圓光廟である、それを右の方に折れて行つた所が其一心院である、寺の住職に面会して尋ねても矢張りいつもの通りである、過去帳を調べてみましようかと云はれたが、遺骨を埋めた處でないから過去帳にあるわけはないと云ふに、住職は取調べてくれたが、分ろう筈がないのだ、寺には何にも取調の手掛りがないと云ふから、然らば墓を一ツく調べようとて墓所に這りて天明年代のこゝとだから、何でも天明風の墓を見付けるのが肝要だと考へて、彼れか此れか捜し始めて、が更らにこれと思ふものさえ見出すことが出来ぬ、もう殆んど見當が付かなくなつた、それでも知れぬ、所詮ダメかと落胆した、い江くどうしてもこゝになくはならぬと、強情にも又捜し掛けた處、唯其中に無銘の墓が一基ある、元の墓道とも思はれる處は絶塞がりて其墓の一方は、高く立派な石垣が積み立てられた壯大の墓地に圧倒されて居て、此方は殆んど見るべくもない姿だ、これは誰れの墓かと問へば、糸屋の鈴木と申す人の墓だと云ふ、兎にも角にも、無銘とは不思議だ、一方には何んとか誌があるかしらんと考へ、首を突込んで見た、が文字があつた、「芙蓉居士墓」

と刻んである、しかも、先生の自筆らしい、アゝ嬉しやと飛立た、今思ふても其時の嬉しさは別であつた、すぐ引取りて鳩居堂に咄した、鳩居堂はそれなら鉄斎に咄して悦ばせようとて同道して知らせに行つた、これも狂奔の姿で貳人を率連れて発見の墓地へ行つて見た、直様石工を呼んで其墓碑を後前と振換江させた、そうすれば立派の墓道に面するのだ、これ等の人々も十数年来捜しに捜した揚句、どうせ分らぬ事に定め居つた連中だものだし、それを今突然発見したのだから、其時久々逢はなかつた父母にでも面会した心持だ、と覚江ず異口同音に発した、住職にも懇々保護のことを頼んで一同立戻つた事がありました、この寿蔵碑は先生が京都から江戸に出てくる時に建てたものらしい、それで先生が歿した時、遺言せられて所持の印だの衣服だのは、此碑下に埋めさせたとのことである、

先生の病氣、京都から江戸へ歸られた時道中で不幸にも病氣に取付かれたそうだが、其病名は当時駕籠風と云はれたそうだが、今のインフルエンザのようなものであつたろうよ。(むざん生)

いずれにしても、芙蓉の寿蔵碑は貴重な文化遺産であり、碑亭を造るなどして、その由来を記し保護されんことを願う。これも芙蓉の顕彰となるであらう。

2、天徳寺の高芙蓉墓

高芙蓉墓碑は港区虎ノ門三―一三―六光明山和合院天徳寺にある。天徳寺は、浄土宗江戸四力寺の一つで光明山和合

院と号する。天文二年(一五三三)増上寺七世親譽周仰上人の弟子縁譽称念上人の開創になる。

高芙蓉墓は彼の伝を最もよく伝えている。墓碑は、橘茂喬、つまり初世浜村蔵六が刻し建てたものである。初世蔵六は、名は茂喬、字は君樹、蔵六と号した。本姓は橘、伊勢の度会の出身である。高芙蓉を欽慕し、京都に至つて師事した。芙蓉が没するに、追慕の念あつく、大典顕常に天明六年(一七八六)四月に銘文を請い、三岳道者の一人韓天寿が書し、自ら石に刻したのである。碑表題字は「芙蓉大島先生墓」で、芙蓉門の稲毛屋山が池大雅の書から集字したものである。戦前は東京市の指定文化財であつた。

碑は総高一八・二糎、最大幅三十・三糎、碑厚二三・三糎の角柱の碑身で、碑頂が丸形であり、ほぼ五一・五糎×六六・七糎cmの丸形の台石に載せられている。現在は十五糎の基壇が付く。銘文は円彫・葉研彫を組み合わせた刻で、碑の上部と下部は破損した箇所がある。碑文は向つて左側の碑側から碑陰、右側の碑側へと三面にわたつて行二十六字、二十行刻されており罫入りである。また台石は前面が稲毛直道の識語で、楷書八字詰十四行である。左側面がやはり稲毛直道の再識で、八字詰十一行である。右側面が羽倉潮の識語で、八字詰八行となっている。

因みに芙蓉の生涯は高芙蓉碑の墓碑銘、並びに中井敬所の遺稿『日本印人伝』に収める「高芙蓉伝」が最も真に足るものである。『日本印人伝』は大正四年(一九一五)九月、敬所の七回忌に女婿新家孝正が上梓した。校正に石川文莊・岡村梅軒・竹内佐顧・岡本椿所・郡司梅所・河田文所六人があつた。本書は未完の稿本であるが、日本印人の事績を知

りうる著述として重んぜられている。

五 天徳寺の高芙蓉墓の流転

天徳寺の高芙蓉墓の流転に関して、工藤愚庵師にお聞きしたことを中心に纏めておきたい。内容は「仏縁」（『仏教書道』六月号、仏教書道社、昭和四十年六月）に述べられている事柄と略符合する。

芙蓉は、天明四年（一七八四）四月二十四日江戸において没した。墓碑は天明六年（一七八六）に完成したものの、故あって建立することができず、火災を避けて長らく土中に埋められていた。芙蓉没後二八年目の文化九年（一八一二）に稲毛屋山・二世浜村蔵六・羽倉太冲らが周旋して東京都文京区三丁目付近に有った小石川無量院に建立された。昭和十九年三月の空襲で無量院は罹災し、高芙蓉碑は墓石が倒壊した。

後、功德林寺住職、無量院主管者の新谷寛應上人から工藤氏が願行寺の住職代理をしていた時に、「君は書道をしており、君に縁ある墓だから差し上げよう。大事にして頂きたい」ということで拝領された。墓は、無量院の本堂の側、ブロック塀の近くに建てられていた。昭和八年（一九三三）清水谷公園で百五十年祭が行なわれた折「芙蓉先生百五十年祭記念」の写真葉書中に芙蓉碑の戦前の碑、大正三年（一九一四）に撮影されたものが含まれている。その位置とは相違し、工藤師によれば、新谷上人が、いつの時点かは不明だが、移動させたのであろうとの見解であった。同院は昭和十九年三月罹災したが、墓碑は本堂から離れた所に在ったため、僅か

の損傷ですんだ。これらの記述から、碑は数度移動していることが分かる。

墓碑は当時工藤師が止宿していた（昭和十年～二十六年頃）茨城県下妻町（現在の下妻市大字下妻戊二三七―二）の雲充寺に移された。運搬手段は、乗合バスを利用し、五、六年の間雲充寺に保管されていた。

昭和三十年頃、西川寧、二世中村蘭台の二人が茨城県書道連盟主催の講演並びに篆刻の頒布会のため呼ばれた。その折、西川が早朝散歩をしていて偶然芙蓉墓に遭遇した。これをきっかけに墓は西川等の需めにより、二世中村蘭台そして愚庵師の尽力で、天徳寺に再建された。同墓は無量院に建てられていた時すでに下方に亀裂が入っていたが、天徳寺にトラック輸送で移動する時、倒壊し下方と上部の一部を破損した。西川は、後日「今であれば、欠片を貼り付けられるのにと悔やまれた」という。平成元年（一九八九）十月一日、同寺に河井荃廬墓が、西川の題字を得て完成し、墓域を造成し芙蓉墓と並列して建立され法要が営まれた（図Ⅱ）。河井荃廬の建墓の儀は、尚友会により昭和三十三年に提案された。三十二年の後、懸案であった事業の完成は、西川寧、工藤愚庵、小林斗盒、平尾俊、そして天徳寺現住藤本泰弘師の先師を慕う熱意、顕彰への執念の結実以外の何物でもない。

「仏縁」（『仏教書道』）には誤植があり、工藤師からお聞きしたので、次に誤りを修正しておきたい。

三二頁二段二四行 「一周忌」を「三周忌」に修正
三二頁三段六行 「昭和二十年一月か二月頃」を「昭

三二頁四段三行

和二十一年秋頃か」に修正

「昭和二十年三月九日」を「昭和二十二年三月九日」に修正

三三頁一段一五行

「大空院殉譽無涯居士」を「無涯院空譽殉國荃廬居士」に修正

また中西慶爾は「書人国散策」(四七)さまよう高芙蓉碑」(『墨』四七号、一九八四年三月)において、芙蓉碑の流転について記している。いくらか記述の誤りがあるが、本節で訂正したので一々述べない。ただ韓大年の書に対し「書丹は変わりものの韓大年のことだから、さぞ性格的の奇妙な書かと思っていたが、何の変哲もない平凡な俗書であるのがっかりした。」と述べるのは、いささか性急な発言と見える。碑銘という性格上から考えても、端正な書風で書かれたのは至極当然のこと、むしろ同碑と京都浄光寺にある池大雅の碑銘は大年書の代表作と思われる。両碑は、近世墓碑中の名碑に数えられる。

六 おわりに

本節では、工藤愚庵師にお聞きした事柄や、拝借した資料や、筆者が実際に管見に及んだ資料、さらに近年蒐集した文献や資料を基に、高芙蓉の顕彰と芙蓉墓に係する事績や資料について提示・考察した。願わくば、高芙蓉墓は、文化財指定され、末長く保存して頂きたいと思う。

邦人の篆刻資料や文献は完備されてなく、諸機関に散在しているのが現状である。芙蓉の関係資料や印譜にしても、

目録は完備されていない。芙蓉の作品も分散して存し、基礎資料の集成を急がねばならない。そして芙蓉の顕彰活動の一層の推進を願う。京都での第四回の百七十年忌の折、須羽水雅は梅舒適氏に「私がもしも寿あつて二百年忌に当る歳迄生き得られるなれば二百年忌を今より一層盛大にし、今より一層芙蓉に関した色々な事を補足、新らしい事の研究をも発表出来得るだろう。」と語ったと言う。

唯一、後藤憲二氏編になる『邦人印譜目録』(『日本書誌学体系』八七、青裳堂書店、平成十四年五月)が刊行された事は特筆したい。

芙蓉の深い学殖とすぐれた芸術は、今後も尊敬を集めて行く事であろう。筆者は、順次調査を進め、高芙蓉並びにその系譜の実証的研究を纏めたく念願している。芙蓉をめぐる交友関係、池大雅や韓天寿など文人墨客との文雅の交わりは、興味が尽きない。

まさに江戸の文芸は文人研究の宝庫である。筆者は、儒学の教養を背景に、旅を好み、詩を詠み、書や絵を嗜んだ彼等の文人趣味に、江戸の風流に、限らない興趣を覚える。ただ江戸から明治時代の資料の早急なる保存の手を講じないと、大切な文化遺産が散逸してしまう恐れがある。先人の文化を次世に受け継ぐ企てを切に願うものである。

本稿執筆にあたり、工藤愚庵師と令夫人並びに御家族の皆様、中込龢氏、山梨県立図書館にはご教示、ご便宜頂いた。記して謝意を申し上げる。

【注】

(1) 拙著は高芙蓉の代表的な印譜を影印し、彼の基礎的・総合的な研究を目指したものである。

(2) 工藤愚庵師(一九一三～一九九八)は、浄土宗の僧侶であり、西川寧の門下として、謙慎書道会等において要職を歴任された。本年七回忌を迎える。

(3) 山田寒山は、詩情を醸した感興豊かな作風による篆刻家、書画家として近年とみにその名が喧伝されている。

また山田正平の画日記が山田家に数十冊存するが、昭和三十三年八月二十九日の箇所、一心院を訪れ芙蓉墓を展墓したことが、寿蔵碑のスケッチとともに描き遺されている。

(4) 山梨県立図書館の甲州文庫に所蔵される小型の冊子本で、賛同者の氏名と住所を載せる。

表Ⅰ 高芙蓉顕彰一覽

注 1 本表は、先行研究・文献を基に作成した。その出典は煩瑣を避け逐一記していない。

西暦	年号	干支	事蹟
一七八四	天明四	甲辰	四月二六日未明、高芙蓉没し、小石川無量院に葬られる。
一七八六	天明六	丙午	四月、大典顕常が高芙蓉墓碣銘を撰ぶ。 同月、三回忌に『芙蓉軒私印譜』が親戚故旧に頒たれる。
一七九六	寛政八	丙辰	三月、源惟良等が高芙蓉の十三回忌を京都東山にて修し、『高芙蓉追善印譜』が成る。
一七九七	寛政九	丁巳	稲毛屋山が東下し、閏七月既望、浪華での送別印会の作『江霞印影』が成る。
一八一二	文化九	壬申	高芙蓉の墓碣銘が小石川無量院に建立される。
一八五二	嘉永五	壬子	大島秋琴は浪華に芙蓉碑を建立することを計画し、芙蓉自筆本二種を埋め建碑を企てる。これは実現しなかったが、『袖珍本印譜成鑑印叢』が編まれる。
一八八三	明治十六	癸未	四月二四日、中井敬所は無量院に於いて、高芙蓉先生百年忌を催す。臨席者二七名。『芙蓉先生遺篆』二冊編まれる。
一九一三	大正二	癸丑	十一月十六日、東都の篆刻家が相謀り、清水谷皆香園で、芙蓉百二十年祭を修典する。記念に、『芙蓉軒私印譜』を二百部復刻する。この譜に、京都一心の寿蔵碑の拓本と、東京小石川無量院の墓碣銘拓本写真が添えられている。
一九一四	大正三	甲寅	六月七日、京都東山一寺院で、芙蓉百三十年祭が、平安印会の人々を中心として修典される。『芙蓉先生百三十年忌辰薦事記念印会々記』が頒たれる。
一九三三	昭和八	癸酉	十一月、清水谷公園において、芙蓉百五十年祭が修典される。『芙蓉先生百五十年祭展観品目録』が頒たれる。
一九五三	昭和二八	癸巳	五月二三日、京都東山一寺院において、芙蓉百七十年祭が修典される。主催者は、園田湖城、神田喜一郎及び同風印社同人である。『高芙蓉先生百七十年忌記念印譜』が百部刊行される。また「高芙蓉略伝」（百七十年祭修忌、於一寺院 同風印社）が刊行される。

西暦	年号	干支	事蹟
一九六七	昭和四二	丁未	五月二八日、東山印社主催による日本印人篆刻・遺墨・著書が東福寺山内の東光寺において展観され、「日本印人篆刻・遺墨・著書展観目録」が刊行される。
一九八五	昭和六十	乙丑	四月九日〜十四日、朝日生命ギャラリー（新宿センタービル五一階）において、高芙蓉逝世二百年記念展観が開催される。また『逝世二百年高芙蓉記念展図録』（小林斗倉編）が刊行される。
一九八九	平成元	己巳	十月一日、東京虎ノ門天徳寺において、高芙蓉・河井荃廬の墓所が完成し、高芙蓉・河井荃廬両先生瑩域完成記念法要が執り行われる。また『高芙蓉河井荃廬両先生瑩域完成記念冊』を刊行される。
一九九一	平成三	辛未	八月十日〜九月二九日、新津市石油の世界館において「日本の篆刻展―市島春城コレクションを中心に」が開催される。 十月二二日〜平成四年一月十九日、茨城県古河市の篆刻美術館において「高芙蓉展」が開催される。また図録『高芙蓉展』が刊行される。

表Ⅱ 高芙蓉の刻印、印籍、書画作品所蔵状況一覧 注2 本表は、高芙蓉の作品、資料・文献の主要なものを列挙し、関連する資料・文献は煩瑣を避け最小限に留めた。

所蔵機関・所蔵者	所蔵品	参考資料・文献
東京国立博物館	高芙蓉刻印十五顆（石印十一顆、水晶印一顆、銅印三顆） 中井敬所旧蔵品一六五点 『高芙蓉印譜』（折り帖）、『高芙蓉印譜』上・中・下（一帙三冊）、『高芙蓉印譜』（一帙五冊）、『高芙蓉印譜』（一帙二冊）、『芙蓉印譜』、『芙蓉山房私印譜』、『芙蓉先生遺篆』（二冊本）、『芙蓉先生遺芳録』（全四冊、附屬）、『補刻摺印補遺』（六冊）、『皇朝印人伝』（全五冊） 『趙凡夫先生印譜』（高芙蓉旧蔵）	『東京国立博物館収蔵品目録』（東京国立博物館 昭和五十一年三月） 『日本・中国の印譜』（東京国立博物館 昭和五十二年十二月）
山梨県立図書館	『漢篆千字文』、『高濂皮先醒印稿』（折帖）、『高芙蓉印譜』（四冊 冊子）、『大島芙蓉詠草』、『来禽梨花画（高孟彪賛）』	『山梨県立図書館所蔵 甲州文庫目録上』（山梨県立図書館 昭和三十九年十二月） 『山梨県立図書館所蔵 甲州文庫目録下』（山梨県立図書館 昭和四十六年十二月）
大東急記念文庫	『高芙蓉追善印譜』（折り帖二冊本）	『大東急記念文庫』（大東急記念文庫昭和三十年八月発行 昭和五十一年一月覆刻）
東京都立日比谷図書館	『印譜諸名家刻 高芙蓉等篆』	『加賀文庫目録』（東京都立日比谷図書館 昭和三十六年四月）
大谷大学	『高芙蓉印譜』（一帙二冊）、『高芙蓉刻永田観鶴印影』（一帙一冊）、『安氏古銅印彙』（一帙一冊）、『芙蓉軒私印譜』（一帙一冊、印影十四枚と拓本一枚を含む）、『高芙蓉印譜』（一帙三冊）、『□□居印譜』（二冊）、『古今公私印記』（一帙一冊）、『芙蓉忌薦事記念印会々記』（折り帖）、『芙蓉先生百二十年忌薦事并二記念印会』（二冊 出品仮臺帖）	『第二大谷大学和漢圖書分類目録』（大谷大学図書館 昭和十年三月） 『大谷大学図書館第三和漢書分類目録』（大谷大学図書館 昭和四十四年四月） 『大谷大学図書館蔵禿庵文庫（大谷瑩誠氏蔵本）目録』（大谷大学図書館、昭和二十五年四月）
二松学舎大学附属図書館	『芙蓉軒私印譜』（一巻一冊）、『高芙蓉印譜』（写本）、『稲毛屋山贈印記』（写本）	『二松学舎大学附属図書館和書目録』（二松学舎大学附属図書館 昭和六十三年三月）

新潟県立図書館	市島岱海・節斎・春城自用印（高芙蓉刻印） 「（丙）印章」（一）岱海堂及節斎用印、（二）春城用印附『散餘印譜』（『紅華山房印章』『春城印譜補遺 乾』『春城印譜補遺 坤』『心経印譜』）	『郷土誌料春城文庫目録』新潟県立図書館 市島春城『市島春城古書談叢』（青裳堂書店、昭和五十三年八月） 神野雄二『市島春城の印章（上）』『修美』第十二卷通巻第四四号 修美社、平成五年十月 神野雄二『市島春城の印章（下）』『修美』第十三卷通巻四五号、修美社、平成六年一月 『謎の糸印』（富岡美術館、平成五年九月） 『春城蔵印』（『日本書誌学大系八八』青裳堂書店、平成十四年十月） 『紅華山房印賞』（二帙八冊） 神野雄二『会津八一の印字』（『書学書道史研究』第三号、書学書道史学会、平成五年六月）
早稲田大学会津八一記念博物館 （富岡美術館旧蔵）	市島春城印章コレクション（高芙蓉刻印）	
和泉市久保惣記念美術館 （園田湖城旧蔵）	『高芙蓉印譜』（一帙三冊）、『□□居印譜』（二冊）、『古今公私印記』（一帙一冊）、『芙蓉忌薦事記念印会々々記』（折り帖）、『芙蓉先生百三十年忌薦事并二記念印会』（二冊 出品仮臺帖）	『富岡鐵斎の篆刻』（『季刊書道ジャーナル』三八号、書道ジャーナル研究所、平成六年八月） 『富岡鐵斎』（会津八一の印字）（『書学書道史研究』第三号、書学書道史学会、平成五年六月）
藤山末吉（鳴堂）、藤山輝夫	高芙蓉刻印（「胡不萬年」「敬之」「左近衛權少将章」） 高芙蓉画（「柳汀釣舟図」、水墨淡彩、高芙蓉画「山水図」 設色立軸、高芙蓉書「婆娑婆演底」行書立軸）	
園田辰夫	『芙蓉印譜』（一帙一冊）、『芙蓉軒私印譜』（一帙一冊）	
個人	<p>新津市石油の世界館 財団法人 新津市石油文化振興財団 「日本の篆刻展」 市島春城コレクションを中心に 出品</p> <p>「高芙蓉遺印」（水木家旧蔵）一幅 紙本 三一・六×四六・二、谷聰泉 「高芙蓉肖像」（一幅 紙本 一二六・〇×二二・七）、高芙蓉 「桜閣山水図」（一幅 紙本淡彩 一〇七・〇×二七・四）、池大雅・高芙蓉 合作書幅「寒林茅屋」「雲林詩」（一幅 紙本 三一・五×五〇・〇）</p> <p>『芙蓉軒私印譜』、『芙蓉軒私印譜』、『芙蓉山房私印譜』、『芙蓉先生印藪』、『芙蓉考氏印譜』（不明）、 『高芙蓉印譜』、『芙蓉復公私古印記』（不明）</p> <p>〈市島春城所蔵印、富岡美術館蔵〉伝高芙蓉刻「式川平野教稼茅屋・・・」、「鶴鳴于九皋」、「西澗釣叟」、「獨醒樓圖書記」、「徳柄之印」「大謙」（両面印）、伝高芙蓉刻「滄浪」、伝高芙蓉刻「讀画似看山」</p>	<p>鶴田一雄「近代篆刻史を俯瞰した日本の篆刻展」『墨』第九三号、芸術新聞社、平成三年十一月）</p>

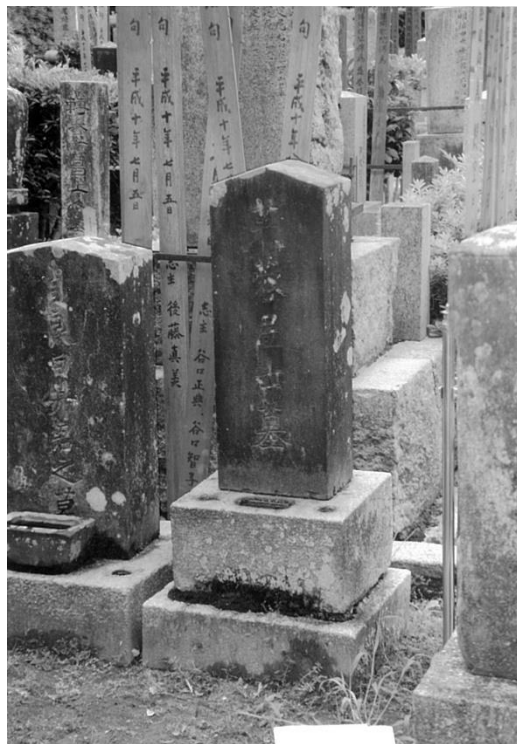


图1 京都一心院寿藏碑



图2 東京天徳寺墓碑（右側高芙蓉墓碑）

第二節 中井敬所の高芙蓉研究

一 はじめに

高芙蓉（享保七年～天明四年、一七二二～一八四）に関する研究や顕彰は、これまで遺作や遺徳を伝えたいと願う多くの先達により取り行われてきた。篆刻において初めて帝室技芸員⁽¹⁾に命ぜられた中井敬所（天保二年～明治四十二年、一八三一～一九〇九）は、芙蓉の資料蒐集と研究に努めた。現在、東京国立博物館には、芙蓉の刻印十五顆を含む敬所旧蔵の印章・印譜・拓本・稿本・写本など多数が収蔵されている。その中でも特に『皇朝印人伝原稿』、『芙蓉先生遺芳録』は、名著『日本印人伝』の基となった貴重な資料である。また、同館所蔵の横田実印譜コレクションには、中井敬所の印譜も含まれている⁽²⁾。

敬所自身を対象とした研究は、樋口秀雄の「中井敬所の篆刻について『菡萏居印粹』と『印譜考略』」（『東京国立博物館紀要』第十七号、一九八二年）、「明治の篆刻界における中井敬所の事蹟」（『日本の篆刻』、二玄社、昭和一九六六年十一月）が詳しい。本節では、これらの資料を踏まえつつ芙蓉の篆刻、そして芙蓉に対する敬所の研究に焦点をあてて論じてみたい。

二 中井敬所の生涯

まず、中井敬所の生涯を略述する。その生涯については、印譜『菡萏居印粹』・『菡萏居遺影』に掲載されている田口乾三著の「敬所中井先生行録」⁽³⁾が詳しい。これによると、敬所の生卒年は、天保二年～明治四十二年（一八三一～一九〇九）である。江戸本所台所町出身で、名は兼之、字は資同、敬所と号している。本姓は森江氏、幼名を資三郎といった。父は森江徳右衛門兼行、母は照の三男として誕生した。幼時から篆刻に親しみ、外叔父にあたる三世浜村蔵六に師事した。天保十四年（一八四三）八月、三世蔵六が没すると門人らに推され、先師の跡を継いだ。敬所は十三歳と若かったため、篆刻の技術を補うために益田遇所に師事した。更に嘉永二年（一八四九）十九歳で、復斎林大学頭に入門すると、同年將軍家の花押銅印三面を刻した。二十二歳、幕府御飾師棟梁中井肥後守由路の養子となり、鑄金を職業とした。三十七歳の時、明治維新に遭遇してからは幕府の公職を離れ、他の幕臣とともに静岡に移った。この頃、清人程周卜から「菡萏居」の額を贈られ室号に用いた。廃藩後帰京し、下谷茅町不忍池畔の旧宅に移り住んだ。明治十三年、宮内省から御璽三顆の彫鑄を命ぜられ進上する。明治二十三年、第三回内国勸業博覧会審査官を務める。明治三十九年（一九〇六）七十六歳、篆刻家として帝室技芸員を命ぜられる。明治四十二年（一九〇九）九月三十日、病気のため七十九歳で没した。当

時の東京朝日新聞の明治四十二年十月二日版では「明治の高芙蓉逝く」との見出しで報道がなされた。その内容は以下の通りである。

温乎たる風丰其徳と稱ひ、之に就けば嚴冬猶春風和氣の裡に坐するが如く、門人に厚く交友に厚く併せて古人に厚かりし篆刻界の耆宿、帝室技芸員兼臨時宝物取調掛中井敬所翁は、春來慢性腸胃加答兒に罹りて病褥に在る日多かりしが、遂に一昨三十日午前九時、下谷茅町二丁目自宅に永眠せり、享年七十有九。

敬所は本所妙源寺に葬られたが、関東大震災の後、妙源寺が堀切に移った際、改葬された。門人知己により苑内に敬所の銅像が建立されたが、現在像は存在しない。銅像記の拓本を残すのみである。現ご住職の談話では、特に銅像について伝聞したことはなく、戦災で焼失したのではということであった。

敬所は帝室技芸員としての刻技における高名とともに、高芙蓉研究や『日本印人伝』などの著述があり、学問の方面においても顕著な業績を残した篆刻家である。

三 中井敬所の篆刻

中井敬所は幼年、銅・玉・水晶印を刻すことに巧みであった三世浜村蔵六に師事したが、十三歳の時蔵六が逝去したため、益田遇所の下で篆刻の修行を続けることとなった。敬所は、初め明代の蘇宣の刻風を学び『蘇氏印略』四巻を模写

したが、その刻風が、漢印の法から出ていることを知ると、今度は漢印を模刻することに没頭した。更に明・清諸家の印法を涉猟する一方で、金石書画の鑑定にも努め、わが国の篆刻学に関する文献・資料の集成に尽力した。現在、敬所の遺品は東京国立博物館に収蔵されている。敬所の門人には、岡村梅軒・一世岡本椿所・田口逸所・郡司樸所・河田文所など多くの俊才が輩出し、菡萏印社の勢力は一世を風靡した。岡本椿所は、敬所の業績に関して、次のように記している。

敬所は獨立が明国より所持した印章を珍藏し、印聖と仰がれた高芙蓉を疎かにせず、濱村、益田両家の篆刻を世に伝え、古体派あるいは正派の篆刻家として徽派（偏鋒Ⅱ片刃）⁽⁴⁾を堅持した。同時代の篆刻家に福井端隱、中村水竹、山本竹雲、安部井樸堂、四世蔵六、益田香遠、山本拝石等がいた。

敬所門下には岡村梅軒、一世岡本椿所、田口逸所、郡司樸所、竹内左顧等がいたが、敬所の衣鉢を継いだのは一世岡本椿所（一八六七～一九一七マ）であった。後の飯田秀處、日本文様史の小場幽處、山田正平等は椿所の薫陶を経て、篆刻界に足跡を残した。

（岡本椿所『私の篆刻道』一莖書房、一九七九年十月）

このように後進を育成する一方で、変わる事のなかった考証学的姿勢は、敬所自身の刻風にも影響を及ぼしている。つまり先人の篆刻や印譜を限なく博渉し、古格ある刻風に結実させているのである。

さて敬所の印譜に、古稀を祝して編まれ、生前公刊された

唯一の印譜『菡萏居印粹』上・下（一九〇〇年六月）がある。また『菡萏居遺影』（非売品、一九二五年九月）がある（5）。また東京国立博物館に収蔵されている中井敬所に係する印譜や資料に次のものがあるが、内容を簡潔に紹介する。

①『印譜集』（同資料は、木箱に敬所の手控えの小型の印譜などが収められたもので、押された印影数が多く、彼の篆刻の刻風を探る上で貴重である。木箱に「中井兼之篆刻集」と書かれた紙片が貼り付けられている。）

②『菡萏居印粹』（博物館には、同名の印譜が四種類収蔵されているが、それぞれ略ぼ内容は同様である。ただ一本には、所蔵者によるものと思われる書き入れがある。）
③『中井兼之印稿』（彼の印稿や、手控え印影や覚書、手紙などによりなり、敬所の篆刻制作の過程を見る上で又とない資料といえる。例えば、「大正天皇御印文」「徳川家御印章」「前田公爵同夫人御印章」「皇族方印稿」「敬所先生集古帖」「対鷗荘印章稿本」「益田香遠墓碑銘」などである。

研究業績としては、稿本ながら、『印譜考略正統』『日本印人伝』『皇朝印典』『鑑古集影』『皇朝鑄匠録』などがある（6）。その他に、新潟県立図書館には市島春城の収蔵印がある（7）。中に、芙蓉の刻印を含むが、袴の部分に敬所鑑定 of 識語が墨書されている。また早稲田大学にも市島春城の収蔵印がある（8）。春城は、「紅霞山房印話」で敬所の改刻に関して触れており興味深い。敬所の鑑識眼を養った要因を窺うことができる箇所を挙げる。

自分の知ってゐる範囲では、中井敬所翁は尤も印の鑑定を能くする人であった。或は唯一の鑑定家であったかも知れない。芙蓉とか虚舟とか大雅などいふ高級作家の作は、どんな印人でも鑑定をするが、敬所は極めて広汎に渉って、一見直ちに誰の作と判じた。あの人は長寿で大抵の作家とも交つてもゐたであらうから、鑑定出来るのであらう。自分は敬所の没後、その遺愛の雑印が帝室博物館に委託されてあるのを一覽したが、其多くの印は諸家の作を改刻の際磨り遺さず、印面の処を薄くノコギリで断つて他の石に貼りつけたものであった。敬所は流石に鑑識があるので、諸方から改刻を托された時、惜んでそれを保存したのであらう。此心掛はすべての印人にあらまほしと自分は感じたが、敬所は斯ることに由つて鑑定力を養つたのでもあらう。自分はしばく不明の印を携へて敬所の教を請ひ、意外の掘り出しものもあつた。殊に敬所は印筐に題署し且つ識語を録することが上手で、貴重の印に箱を作つた場合、其題署を煩したことも数回あるが、敬所が没して後は鑑定を請ふ印人は全然無くなつて不便を感じることが多く、今なほ不明の印が累々として架中に存してゐる。

（『市島春城古書談叢』青裳堂書店、一九七八年八月）

敬所に印の鑑識依頼が多かつたのは、当時から篆刻の權威であり、その名が高名であつたこともあらうが、春城の述べるように鑑識眼の高さによるう。

敬所の刻風に関して、本節で多く触れないが、精緻な刻風

は正統の道を歩んだ篆刻家といえよう。

四 中井敬所の高芙蓉顕彰

江戸時代中期になると、印聖と称される高芙蓉が出現したことにより、当時の卑俗な弊風は一掃され、古体派が打ち立てられた。芙蓉の復古的刻風は門下の印人によって広く流布された。更に地方にも彼の印風は波及し、明治の初めに至るまで芙蓉派が栄え、日本篆刻史上に、高峰をなしている。没後にも、門人や彼を慕う人々により、さまざまな顕彰や出版が行われてきた。なかでも中井敬所の研究は特筆できよう。敬所がいかに芙蓉に私淑敬慕していたかは、明治三十三年七月一日の『峽中日報』に掲載された「高芙蓉」(七)からも見て取れる(図1)。

先生との関係 それからわしと先生との関係に付てお咄しをしよう、蔵六家は初代からチャンと今も現に引続て居りますが、わしの叔父が篆刻の上から蔵六伝を襲だことになったものだから、その叔父の遺言に依りて先生の祭は絶江ずわしが遣つて居ります、維新の際に、大阪へ参りたり、静岡へ参りたりしましたが、これ丈けは欠したことはないのです、既に申上げた通り、百年祭も盛に行ひましたが、それを先年御国の鴨江とか申す人が発起して先生の碑を建てると云ふて一時騒ぎましたが、その建碑費募集帳に大阪の人で、玉江とか云ふ人が先生が死して百年の後最早誰れも祭りをするものがないと書かれましたが、わしが今日に至る叔父の遺命でチャン

とかくも祭をつめて居るのを知らぬ、見聞の狭にも困る、其時に先生の印譜をも出版して配りました程で、この時の印譜の序文をご覧下さればそれでわしと先生の関係はよく分ります

文中にいうところの「百年祭」とは、明治十六年四月二十二日に小石川の無量院で催されたものを指す。この折『芙蓉先生遺篆』(上・下)が編集刊行されている(9)。以下に『芙蓉先生遺篆』の中に見られる中井敬所による序文を訳出する。

印学がわが国に伝えられて長い期間がたった。そして印学を大成した者は高芙蓉先生である。先生は印学を橘君樹に伝え、君樹はこれを秉徳に伝え、秉徳はこれを養子の子収に伝えた。私の叔父である。私は幼い時から叔父に篆刻を学んだが、叔父はかつて一冊の印譜を取り出して言った。これはわずかな小冊子であるけれども、芙蓉先生が得心して表現したものの妙味がすべて備わっている。そなたは、これを基として学び自ら勉励するのであれば、必ず得るものがある。毎年の春と秋、私を連れて先生の墓を詣でた。ある日、墓碣を指さして私に語るに、これは祖父の君樹が手刻したものであるが、事情があつて建てることできなかった。凡そ三十年たつたが、終に志を遂げることのできないまま没した。亡父の時になつて、羽倉太沖の尽力を得て初めて祖父の遺志を遂げることができた。顧みるに、芙蓉先生の壮年時代は、京都に住んでいたので、従学した人達の多くは、畿

内、関西方面に住んでいた。そこで祖父一人がこの事業を任されたのである。芙蓉先生がなくなつて後、東都の人で芙蓉の刀法を得て、その遺篆を取りあつめた者がいるということ聞いたことがない。実に高芙蓉先生のために心残りに思う。私はこれらを集めて世に伝えようと思ふが、まだ果していいない。そなたは私の志を継いで、慎しんで忘れてはいけない、といわれた遺言は、いまだに耳に残っている。しかし叔父が亡くなつてから長い年月が経てしまつた。今、癸未四月二十四日、芙蓉先生の百年の忌日にあたつてゐる。そこで諸々の同好の者に呼びかけて遺篆を蒐輯し、また私の收藏しているものを併せて、この印譜を作つた。思うに叔父の志を成就して、芙蓉先生の地下の霊もまた慰められることをこい願つてゐる。

明治癸未（一八三三） 三月上浣

敬所 中井兼之謹識

さらに重要な文献として、明治三十三年六月九日から八月十一日まで、十五回に亘つて『峡中日報』に掲載された「高芙蓉」について述べる。これは、関蕉雨や敬所の資料提供に基づく芙蓉の伝記、敬所の談話記事等からなっており、敬所の高芙蓉研究の一端を表している。さらに敬所自身の事績にも触れるなど、本研究にとつてかけがえのない資料といえる。一例として、「高芙蓉」（十）『峡中日報』（明治三十三年七月十五日）を挙げる。

先生の本領に付て少しく於咄しをいたそうか、前も申

した如く、先哲叢談続篇には随分先生のことを書いてありますが、板本で沢山と世に行はれてあるものだからご覧でしょうか、これにもこうありましよう、

芙蓉刻意説文、傍通六書、尤精音韻、又有篆刻之嗜、疾以鉄筆技、喧噪一時、其経術文章、為末技所掩、知其為人者極衆矣、

この説は至極の同感である、わしが、取調べた結果もこの通りである、世には此類の事が多いもので、独り先生ばかりでもない、まゝ、其本領とする所が余技の為め名声を剥奪されてトンだ評判を取り終るものがある、小野湖山翁なども元来詩人で名を博する積りではないのだ、それがとうく詩人の湖山で終つて仕舞ふた、先生も事体は儒者を以て世に立ことが其大本望であつたが然るを意外のことで名家となつて仕舞た、甚だ残念の事であつたろうと思ふ。

他にも、幾らかのの文献を挙げる。中井敬所「篆刻今昔一話」（『集古会誌』明治四十二年三月）には以下のように述べる。

高芙蓉翁は京都で一家を成した、甲斐の人で壮年読書を好み博く六書に通し篆刻の妙は古今に絶し元禄享保の間には篆刻家継で起りたれとも明末清初の弊習を脱することは出来ない、翁が起りてから斯道の淵源あるを論し稍や篆法を講じ善く刀法を究め直に秦漢に遡り世習を一洗し印学の一道は此に備はりました、因て業を学ふものも数名ありました、旁ら詩画を善くし鑑識にも精

しくありました、

次に、すでに述べた田口乾三著「敬所中井先生行録」の中で、敬所と高芙蓉に関する箇所を抄録しておく。

先生、性は謹敎、最も師友に厚し、大島芙蓉の墓、小石川無量院に在り。先生其の印学の祖たるを以てや、歳時必ず展拝し、僧に請ひて経を誦せしめ、老に至るも廢せず。

このように、敬所や門人が行つた芙蓉に対する調査や研究、そして顕彰が、芙蓉を日本の篆刻史に確実に位置付ける役割を果たしたといえよう。

五 東京国立博物館収蔵高芙蓉関連資料概観

これまで中井敬所の高芙蓉顕彰について述べてきたが、その際に欠くことのできない関係資料を挙げて概説したい。東京国立博物館には、芙蓉の刻印十五顆を含む敬所旧蔵の印章・印譜・拓本・稿本・写本など多数が収蔵されている。その中でも『日本印人伝』の稿本である『皇朝印人伝原稿』と、芙蓉の伝記資料を纏めた『芙蓉先生遺芳録』は貴重である。まずこの二つの資料を簡潔に紹介する。

1、『皇朝印人伝原稿』

これは博物館整理用の封筒に収められており「12 皇朝

印人伝資料 二三六〇附属」と墨書されている。封筒の中には、広げると十字型をした包みがあり、表に「最重要品 要注意 皇朝印人伝資料」と墨書されている。敬所が非常に大切に考えていたかが分かる。この中に、以下の五種類の資料が内包されている。寸法は五種類ともに、縦二五・〇糎×横十七・〇糎である（図2）。

①『皇朝印人伝原稿巻一』（明治三十七年甲辰十一月十九日装）

②『皇朝印人伝原稿巻二』（明治三十七年甲辰十一月十九日装）

③『皇朝印人伝原稿巻三』（明治三十七年甲辰十一月十九日装）

④『皇朝印人伝参考書四』（明治三十七年甲辰十一月十九日装）

⑤『名家略伝篆―篆余漫録―』（山崎美成編）

①から③は、刊行本『日本印人伝』の基となった資料である。伝記・印譜の序跋・墓碑銘・書簡などを纏めた敬所の覚書で、後に刊行されたものと比べて体裁が整ったものではない。④は①③の補足の資料であり、「十松堂印藪序」、「乃祖賜紫日潮尊者年譜」等がある。⑤は敬所の著ではないが、板坂卜斎、木村兼葭堂、大島芙蓉、池永一峰等の伝記を含む資料である。『皇朝印人伝原稿』は、敬所の没後に『日本印人伝』として刊行されたが、その経緯について、編者の一人である岡村梅軒は次のように述べている。

我邦には独立心越の法を伝へてより以来印人甚だ多し、然も印人伝の著録なきを以て先師は之れを遺憾として余暇を以て印人の伝を蒐集し殆んど冊を成した、然し余暇見聞の随録であつて専門の編纂でない故に遺漏も多いことであらうが独立以来大体は蒐集してある、只文章が未だ精鍊してないのと順序が整はぬ為め開板せぬであつた、之れを余と先師の姪の石川文莊と共に先師の旧廬なる菡萏居に於て五閱月を要して校訂整頓し、七周忌辰なる大正四年九月を以て女婿新家工学博士が印行した、部数が少なき故広く世間に頒布することの出来なものは遺憾ではあるが、兎に角く日本印人伝の著は之れが始めで、之れに依り増補して完全のものゝ出来る端緒であると思ふ、然れば此の著は篆刻界に裨益することの尠からざるを思ふと同時に、又全等二人も多少世に益する所ありたることを喜ぶ、今此の書に依りて観るも我邦に於ける印人も亦皆な読書の人なることを知るを得べし、

（「篆刻と印人伝」、『書道及画道』第一卷第三号、書道及画道社、大正五年十二月）

敬所による稿本と、大正四年九月に上梓された『日本印人伝』との相違は、印人数の違いである。『日本印人伝』は、独立以下一五一名の印人を列挙した正編と補遺からなり、稿本では八十余名に留まる。列挙数が、略ぼ倍増した理由は、稿本の整理にあつた石川文莊・岡村梅軒等の功績と推測される。

2、『芙蓉先生遺芳録』

これらの資料が収められている封筒の形式は『皇朝印人伝原稿』で述べた内容と略ぼ同じである。

- ①『芙蓉先生遺芳録一』（明治辛卯一月起草）（四八丁、縦二四・八糎×横十六・七糎）
- ②『芙蓉先生遺芳録二』（明治三十七年甲辰十一十九日装）（二六丁、縦二四・八糎×横十六・七糎）
- ③『芙蓉先生遺芳録三』（明治三十三年六月峡中日報乙黒直方贈）（十九丁、縦二四・五糎×横十六・七糎）
- ④『芙蓉先生百歳忌雜記 未定稿 中井敬所』（十九丁、縦二四・八糎×横十六・五糎）
- ⑤『芙蓉先生遺芳録附屬』

①は、歴代の諸家が芙蓉について述べたものである。これは高芙蓉の伝記資料であり、敬所の記した目次を挙げると次の通りである。

「石仲敬細篆千文跋」（芙蓉先生 天明二年壬寅）、「古銅印彙跋」（芙蓉先生 明和三年丙戌）、「采真堂印譜序」（釈間中 安永七年戊戌）、「芙蓉軒私印譜序」（柴栗山先生 天明五年乙巳）、「同」（源惟良序 同年）、「漢篆千字文序」（栗山先生 寛政九年丁巳）、「同」（曾之唯序 寛政八年丙辰）、「屋山飲中八仙歌印譜序」（皆川淇園先生 天明七年丁未）、「同」（栗山先生序 同年）、「同」（菅周監跋 同年）、「楚辞断文飛鴻堂臨模」（端隱跋）、「高山彦九郎日記断文」、「高山真正

神号願書来由」、「柴栗山先生答源孟彪尺牘」、「印籍考序」(岩倉具選公 享和二年壬戌)、「同卷末小言」(曾之唯 享和紀元辛酉)、「玉島精舍印集叙」(市河寛斎先生)、「良山堂茶話」(錢穎伝来)、「在津紀事」(頼春水先生)、「十二刀法詳説序」(頼山陽撰)、「二邨梅山十二刀詳説」(節録)、「甲斐徳本小伝節録」、「墓碣銘」(竺常大典禅師撰文)、「墓碣台石之記」、「像讃」(源元凱撰)。

目次には挙げていないが、同資料に、「高芙蓉」「蘿井氏」(先哲叢談続篇)、「故芙蓉先生大島君墓誌銘」、「題南涯印譜」、「高芙蓉先生百年忌展観目録」が掲載されている。

②は、敬所が諸家に依頼した芙蓉調査への回答書簡や資料からなる。「写本君義先生坐臥記摘抄」、「芙蓉先生尺牘写」、「西河翁墓碑写」、「芙蓉先生尺牘写」(松江藩儒の蒔田暢斎宛書簡二通)、「芙蓉先生尺牘写」(富岡鉄斎藏写)等である。

同資料中に、高芙蓉の正確な出生地の地名を窺わせる書簡がある。この書簡は、「高芙蓉」(九)(『峡中日報』)に掲載されているが、内容を補足しておきたい。資料の提供者は、島根県出雲国島根郡の中邨潤一郎である。宛名の桃子深は、松江の藩儒桃源蔵で、字は子深、号白鹿である。

(前略)僕姓名変候事元来大島源姓に御座候、祖父水戸西山侯之時大島宇左衛門と申者にて当府に相務罷在候、此者累世甲斐高梨と申す所に居住仕候、依之僕高を称用罷在候、然る所旧年鳥丸侍従殿へ招かれ出勤仕候、僕廣橋大納言殿へ立入仕候、依之本氏に復し姓は源に御座候得共、本国居所高梨にて富岳峰直に簷に見へ申候、故僕書記仕候は、依舊高を称し名孟彪字繻

皮号菡萏居申、皆々如旧にタダ孟字を用迄違申候、通呼大島と変候迄に御座候三月十一日、大島逸記、孟彪、桃子深先生

この芙蓉自筆書簡により、彼が甲斐の高梨の出身であることが確認された。しかし敬所が苦心惨憺して探索したにもかかわらず、今もって不明であるのは、芙蓉の出生地の「高梨」という地名が現在地のどこであるかの問題である。この問題は現在も判明していない。

③は、新聞記事の切抜き集である。内容は先に挙げた『峡中日報』に掲載された「高芙蓉」である。

④は、小石川の無量院で明治十六年四月二十二日に催された芙蓉百年忌関連資料である。「百年忌展観目録控」、「臨席者姓名」、「印譜献本者姓名」、「四月二十七日報知新聞記事」等がある。

同資料の中、『神代之名残卷五、第九帳』の「願書来由」に「東坊城家御門人大島逸紀源孟彪」と記されている箇所があり、芙蓉の学問方面での師弟関係がわかる。また、芙蓉没後無量院で執り行われた法事における導師の名前が記されている。天明四年芙蓉先生導師は無量院十一世光誉千如大和尚、文化九年芙蓉先生導師は無量院十二世境誉勝縁大和尚、明治十六年芙蓉先生百回忌導師は無量院十七世篤誉便周大和尚である。

さらに芙蓉先生百歳忌に出品された列品に興味を引くものがある。たとえば、「芙蓉翁印譜(橘君樹手拓)」、「芙蓉大島先生墓碑摺(初拓)」、「芙蓉先生肖像(泰山臨模)」、「芙蓉翁踞獅文鎮(寿山石)」、「芙蓉先生大雅堂道中日記」等であ

る。

⑤は『芙蓉先生遺芳録二』に貼りこまれなかった書簡、その他新聞の切り抜きなどである。書簡は、封書やハガキ等十一種収められている。

これ以外に、同館には高芙蓉関連の印譜や資料が收藏されている。まず中井敬所旧藏品一六五点の中に、高芙蓉に關係する以下の印譜を含んでいる。

- ①『芙蓉印譜』（折り帖、縦十一・五糎×横二一・六糎）
（表紙に「芙蓉印譜全艸」と墨書される。十三丁）
- ②『芙蓉印聖遺刀』（二冊）
- ③『芙蓉山房私印譜』（一帙一冊）
- ④『采真堂印譜』（一帙一冊）

また、同館が收藏している横田漠南旧蔵印譜のコレクションに、芙蓉關係の印譜が含まれる。

- ①『高芙蓉印譜』（上・中・下、一帙三冊）（縦二四・一糎×横一五・四糎）
- ②『高芙蓉印譜』（一帙五冊）（縦二三・〇糎×横四四・一糎）
- ③『高芙蓉印譜』（乾・坤、一帙二冊）（縦二五・六糎×横一五・三糎）
- ④『芙蓉先生遺篆』（二冊）
- ⑤『補刻摺印補遺』（六冊）（縦九・一糎×横一八・二糎）
- ⑥『江霞印影』（稻毛屋山輯、二冊）
- ⑦『芙蓉刻印譜』（模刻古今印選、玉置陶斎蔵板）（三冊）

⑧『趙凡夫先生印譜』（高芙蓉旧蔵）

以上述べたように、東京国立博物館收藏高芙蓉関連資料から、先行研究に触れられていなかった高芙蓉の事績を補うことができた。これら資料や文献は、芙蓉研究にとってかけがえのないものといえよう。

六 おわりに

高芙蓉は生前から高名であったことは今更言うまでもないが、彼の名が日本篆刻史上に刻み込まれる事になった要因には、敬所の功績が大きいと言えよう。たとえば、敬所は芙蓉の作品や資料を蒐集・研究した。また芙蓉百年忌を催すとともに『芙蓉先生遺篆』を刊行し、その業績を後世に伝えた。敬所は芙蓉を単なる篆刻家としてだけでなく、儒者として、また書画を得意とする文人として高く評価した。

敬所が芙蓉から学んだ事柄で特筆すべき事は多いが、学芸全般に亘る学問や、復古精神に基づいた古格ある篆刻の刻風はその第一である。当時わずかに舶載された印譜でしか知ることができなかった秦漢印に着目し、類稀なる識見と技量のもと古印の研究を押しすすめ発展させた。

東京国立博物館に收藏される中井敬所旧蔵品は、その品質が高く、数量も膨大なものである。中でも芙蓉に関連する收藏品は質・量からいっても優れている。これは敬所が芙蓉にいかに関心を払っていたかが分かる証左となっている。敬所の遺した膨大な旧蔵品は貴重であり、彼により日本の

篆刻学の基礎研究の端緒が開かれたと言わざるをえない。
日本篆刻史の研究を進めていく時、敬所の業績は欠くことはできない。

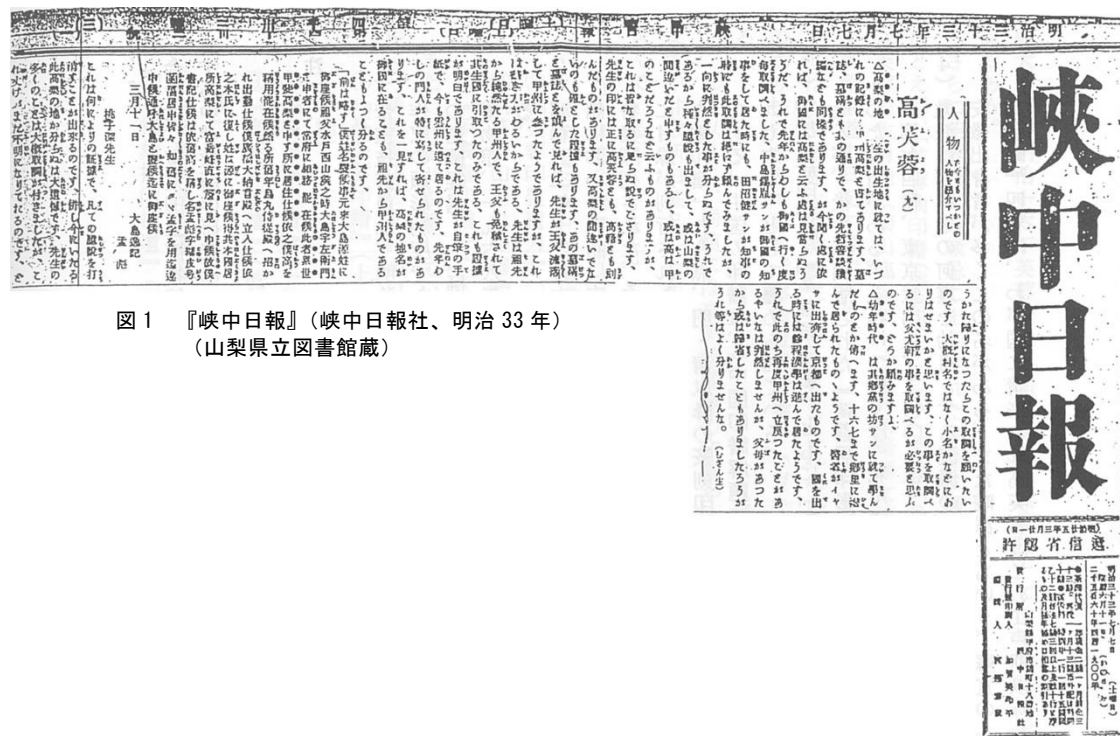


図1 『峡中日報』(峡中日報社、明治33年)
(山梨県立図書館蔵)



図2 『皇朝印人伝資料』と『芙蓉先生遺芳録』
(東京国立博物館蔵)

【注】

(1) 帝室技芸員は、明治二十三年（一八九〇）に開始された美術・工芸作家の顕彰制度である。「帝室技芸員制度―帝室技芸員の設置とその選衡経過―」（樋口秀雄、『ミュージアム』二〇二号、東京国立博物館、一九六八年一月）に、その制度に関して詳しく述べられている。

(2) 昭和五十二年十二月六日から五十三年二月十二日まで、東京国立博物館において同館に寄贈された横田漠南旧蔵の印譜コレクションが特集陳列された。その折『日本・中国の印譜』として一月二十四日に目録が刊行された。コレクションは、邦人印譜六四九点、中国古銅印譜一九八点、明・清以降の篆刻印譜二四七点の歴大なものである。中国の印譜は『中国印譜解題』（横田実著、二玄社、一九七六年一月）として纏められている。

(3) 『菡萏居印粹』と『菡萏居遺影』は、ともに「敬所中井先生行録」を載せるが、後、出版された『菡萏居印影』には、後半部を書き改めた箇所がある。これについては、北川博邦氏が、雑誌『篆刻』（第七四輯、東京堂出版、二〇〇一年七月）に指摘している。

(4) 徽派は、明末の何震を始祖とする流派のことで、蘇宣・朱簡など安徽出身者が多くこの名がある。また皖派ともいう。蘇宣の『蘇氏印略』四巻は、わが国に請来され高芙蓉はじめ江戸期以降わが国の篆刻家に大きい影響を及ぼした。

(5) 『菡萏居印粹』は、明治三十三年六月竹内亀吉（左顧）を代表編輯兼発行者として刊行された。『菡萏居印粹余話』は、田口乾三（逸所）により明治三十六年十月に編輯発行された。

(6) 『印譜考略』は、郷純造の手により明治三十年（一八九七）に、また『皇朝印典』・『続印譜考略』は、石川兼六と岡村梅軒により明治四十四年（一九一一）に、さらに『日本印人伝』は、大正四

年（一九一五）に石川兼六や門人岡村梅軒等により校閲刊行された。なお、発行者は、敬所女婿の新家孝正である。

(7) 新潟県立図書館は、市島春城の自用印百二十顆、岱海用印十顆、節齋用印十九顆を収蔵する。筆者はかつてこれを調査し『修美』（通巻第四四、四五号、修美社、一九九三年十月、一九九四年一月）で紹介した。

(8) 市島春城が蒐集した一千顆の印章コレクションの約七百顆は、富岡美術館を経て現在早稲田大学会津八一記念博物館に収められている。『春城蔵印』（青裳堂書店、二〇〇二年十月）に、その内の二三〇顆を収録する。

(9) 筆者は、かつて『高芙蓉の篆刻』（木耳社、一九八八年六月）において『芙蓉先生遺篆』（上・下）を収載した。

第七章 中国・日本の印史とその特色

第一節 中国の印史とその特色

一 はじめに

本章は、中国と日本の印史とその特色について述べる。第一節は、中国の印史とその特色について、第二節は、日本の印史とその特色に関して概観する。

さて篆刻学とは、印章や篆刻を対象として、これを科学的・総合的に研究する学問のことである。中でも印史は最も中心となるテーマといえる。

印章は、古代メソポタミア文明に端を発し、東西文化圏に伝播し、欧亜大陸のほぼ全域に広まった。印章は七千年の歴史を有しており、他の文化・芸術との関連も深い。近年、この分野の研究はようやく盛んになりつつあるが、まだ系統的・総合的に論じられた専著は少ない。わずかに、古璽印における体系的・総合的研究に、羅福頤（一九〇五～一九八一）による『古璽印概論』（文物出版社、一九八一年）と『近百年來対古璽印研究之發展』（西泠印社、一九八二年）がある。

ただ、これも新出土の発掘品によって追加されるべき箇所がある。

わが国では、新関欽哉著『東西印章史』（東京堂出版、一九九五年）が、古代オリエントの印章の系譜を詳しく論じるとともに、中国の印章との関わりに言及しており、この分野での先駆的な価値を持つものといえる。古代オリエント印章や東西印章史の研究は、比較文化論として重要なテーマである。参考書にドミニク・クロン著 *First Impressions: Cylinder Seals in the Ancient Near East*, British

Museum Press, 1987（邦訳）『円筒印章—古代西アジアの生活と文明—』（久我行子訳、東京美術、一九九六年）⁽¹⁾、同じくドミニク・クロン著 *NEAR EASTERN SEALS, The Trustees of the British Museum Published by British Museum Press, 1990*（邦訳）『オリエントの印章』（池田潤訳、学芸書林、一九九八年）、石田恵子編著『印章の世界—古代オリエント美術と歴史の語り部—』（古代オリエント博物館、一九九一年）などがある。

また、「篆刻学」という名称も、中国から刊行された同類の書物でも「印学」、「印学史」、「篆刻学」、「印論史」、「印章史」、「金石篆刻研究」などと定まらない。本章では、便宜上、印章や篆刻を研究する学問を総称して「篆刻学」という名称を用いる。ただし、本研究の性格上、中国の印章や篆刻を中心とするものであることは論を俟たない。厳一萍著『増補 篆刻入門上・下』（芸文印書館、一九七六年）、鄧散木著『篆刻学』（人民美術出版社、一九七九年）、（邦訳）沙孟海著『印学史』（西泠印社、一九八七年）等は、その概説書として最も体系的なものといえる。

また中国において、近年科学的な発掘が行われ、新出土の印章が多く発見、報告されている。西安郊外から大量に出土した秦代の封泥は、中国印章史上非常に興味深いものといえよう⁽²⁾。その内容は『西北大学学报』第一期第二七卷（西北大学学报編輯部、一九九七年）に報告されている。さらに、山東省泗水尹家城において、春秋時代頃と思われる封泥が発見されたことが『考古』（一九九七年第三期）に掲載されたのは、印の起源を考える上で注目される（図1）。

このように、新出土の印章関係の資料は、ぜひとも目を通す必要がある。本節は、中国の印史を論述し、その特色に関して多少考察するものである。資料・文献の出版社・刊行年は煩を避け、すべては記していない。第七章第一節・第二節は、第二章以降本研究の導入として位置づけるものである。資料・文献の収載は、二〇〇二年九月までを主としている。



図1 山東省泗水尹家城出土封泥
（『考古』1997年第三期）

二 研究史の概要

1、印 史

中国印章の歴史は、神田喜一郎が『中国の古印―その鑑賞の歴史―』（二玄社、一九七六年）において「中国の印の歴史は、おのずから銅印の時代と石印の時代と、この二つに分けることができるのであります。それでは、銅印時代と石印時代とは何時ごろから分かれるのかと申しますと、元末明初の交であります」と述べ、さらに、銅印の時代を大きく四期に断代し、第一期を東周時代、第二期を秦漢時代、第三期を魏晉時代、それ以後を第四期とする。

これに対し、古印研究家の太田孝太郎（一八八一―一九六七）は⁽²⁾、

「中国古印通説」(『岩手史学研究』第五一号、岩手史学会、一九七〇年)において、印を印文と形態から三期に大別する。その一は、殷より東周戦国までの一時期、二は戦国をうけた秦より兩漢・三国六朝末までの二時期、三は南北朝を統一した隋以後清末に至る三時期とする。

また小林斗盒は「漢代官印私見」(『東洋学報』第五〇巻第三号、一九六七年)において、中国の古印を、戦国の古璽の盛行期、秦漢の官印制度の確立期、三国・南北朝の踏襲期の三期に大別している。

中国篆刻史における時代区分は、古印の時代と篆刻の時代とに大きく二分され、古印の時代は、小林斗盒の三期説が妥当とされる。

中国の古印の歴史は、曹錦炎著『古璽通論』(上海書画出版社、一九九六年)がよくまとまっている。通史としては、王延洽著『中国印章史』(華東師範大学出版社、一九九六年)や、小鹿編著『古代璽印』(中国書店、一九九八年)は簡潔に述べられている。葉其峰著『古璽印与古璽印監定』は、印章史とその鑑定にまで及んでおり興味深い。さらに、銭君匋・葉潞淵著『中国鈐印源流』(上海書局有限公司、一九七四年)、邦訳『中国鈐印源流』梅舒適訳、木耳社、一九八四年)は、古印の歴史や発展と各派・各家を分類して述べており、好著といえる。また、古典的名著といえるものに、那志良著『鈐印通釋』(台湾商務印書館、一九七〇年)があり、印章に関して体系的に概説されている。

日本人のものとしては『書道全集 別巻I印譜 中國』(平凡社、一九六八年)に載せられた中田勇次郎(一九〇五―一九九八)の「中国印章概説」は、平明にまとめられている。また『新装版書道講座 第六巻篆刻』(二玄社、二〇一〇年)に載せられた小林斗盒の「印の歴史」は、簡潔にして要を得たものである。

中国における印章の起源は、東周時代の戦国期である。それ以前



図2 伝殷墟出土璽印三方
（『書道全集 別巻Ⅰ 印譜 中国』）

に北京の古美術商、尊古斎黄濬が『鄴中片羽』初集（一九三五年）に、安陽の殷墟から出土したと伝えられる銅印を載せている。いわゆる「殷璽」といわれているものであるが（図2）、これは学術的・科学的発掘によって出土したものではない。

「殷璽」に関して、張光遠に「商代晚期兩枚銅印考」（『故宮歷代銅印特展図録』、一九八七年）があり、「亞禽印」と「奇字印」は殷代後期の銅印であると述べる。また金洋東は「伝殷墟出土璽印の亞字形について」（『書学書道史研究』第二号、書学書道史学会、一九九二年）において、この亞字形印は、分封のとき、王より賜る族遡が表示された領賜物で、殷代よりさらに古いものの可能性があると述べる。これに対し、新関欽哉は「中国印章に関する一考察」（『東西印章史』前掲）で、同印の殷代説に疑問を呈するとともに、肖形印を例にとつて、中国の印章はその起源は西アジア方面にあり、戦国時代に出現したとする。また羅福頤や王人聰は、印章というよりは、銅器の銘文を鑄造した際に用いられた「女型」（文字の鑄型）ではないかという。

中国印章の起源は、山東省泗水尹家城出土の封泥なども考慮する

とともに、今後のさらなる考古学的発掘が待たれる。

次に、石印の時代の篆刻は、良質の印材が産出される浙江省や福建省などの地域を中心に興った。元代の士大夫たちによって行われた篆刻趣味に先鞭をつけたのが、初めて花乳石を用いて印を刻したといわれる王冕（？～一三五九）である。その後、文徵明の長子文彭や何震は、篆刻を書画と相並ぶ一大芸術に高めた。この二人を「文・何」と称して近世篆刻の祖と仰いでいる。

明・清時代になると、篆刻の名家が輩出し、さまざまな流派が生まれた。馬国権の「明清印派述詳」（『芸林叢録』第五編、香港商務印書館、一九六四年）や、鄧散木著『篆刻学』の「別派」に詳しい。鄧は七種の派、すなわち、皖派、歙派、浙派、鄧派、黟山派、呉派、趙派に分類する。

浙派に関しては、葉一葦に「論浙派」（『中国印学年鑑』、西泠印社出版社、一九九三年）が見られる。

印人の伝記をまとめた専著に『印人伝集成』（伏見冲敬編、汲古書院、一九七六年）がある。これは、中国や日本で編まれた印人伝、つまり篆刻家や、印を把玩した人々の事績の記録を集成したものである。これには、これまで刊行された、周亮工の『印人伝』（一六七三年）、汪啓淑の『続印人伝』（一七八九年）、中井敬所の『日本印人伝』（一九一五年）等の日中の六種の印人伝が取り上げられており、姓名・字号索引が付されているので便利である。

2、新出土の印

一九四九年に新中国が成立して以来、新たに出土した印は『考古』、『文物』、『文物参考資料』、『考古与文物』、『考古学報』、『文物資料叢刊』などに随時報告されている。これらの各種の資料により、新出土品の中から、主として一九四九年から一九八〇年に発表された

印を拾遺したものに、香港中文大学より刊行された『新出歴代璽印集録』（香港中文大学文物館専刊之二、一九八二年）と、その考釈本に『新出歴代璽印集釋』（王人聰編著、香港中文大学文物館専刊之三、一九八七年）がある。また、一九八五年に中華五千年文物集刊編輯委員会より刊行された『中華五千年文物集刊璽印篇』がある。同著は近三十五年に出土した璽印を整理編集したもので、出土や採集地点別に分類されている。また西林昭一氏による「新出土の古鉢」（『不手非止』第一〇号、不手非止刊行会、一九八四年）は、印章の歴史とともに、文革以後の前掲雑誌に収載された印を排列している。

古印研究の権威羅福頤は、羅振玉の子息で新中国成立後、故宮博物院考古組に入り、主に古璽印の整理研究に従事した³。その成果をもとに、さらに全国の博物館の蔵印や個人を探訪し、伝世の古印と新出土の古印の用途や類別に新知見を指摘した。古印の專著に『印章概述』（羅福頤・王人聰著、中華書局、一九六一年）（邦訳『中国の印章』安藤更生訳、二玄社、一九六五年）、『古璽印概論』（文物出版社、一九八一年）（邦訳 高畑常信監修 神野雄二・重田明彦共訳『中国古印の歴史と鑑賞』人と文化社、一九八六年）（邦訳『図説 中国の古印—古璽印概論—』北川博邦訳、雄山閣出版、一九八三年）が刊行された。その後順次増補改訂され『古璽印攷略』（一九八七年）として出版された。羅は同書において、伝世の漢魏の印章中、墳墓から出土するものの中に、在世中に佩帶したものではなく、殉葬用に死後製作されたものと述べている。さらに、近百年間の古印研究の成果を総称して『近百年來対古璽印研究之發展』（西泠印社、一九八二年）が出版された。邦訳『図説 中国古印研究史』北川博邦訳、雄山閣出版、一九八五年）が刊行された。これらの著録において、地名の過誤、官制の欠落、姓氏の考証等、新たな見解を示している。また『古璽文字徵』（文物出版社、一九三〇年）、『漢印文字

徵』（同、一九七八年再版）、『漢印文字徵補遺』（同、一九八二年）、『古璽文編』（同、一九八一年）、『古璽彙編』（同、一九八一年）、『秦漢南北朝官印徵存』（同、一九八七年）などの字書の編輯は、古印研究や篆刻家の必携書といえよう。羅の古印の解説や断代考証における功績はすこぶる大きい。

3、封泥

封泥は、紙が発明される以前、竹や木が書写材料とされたが、これらを封緘するため、封じ目に泥土を加え、印を押入したものである。封泥の用途は、文書を封じる「封検」と、物品を封じる「封物」とがある。封泥から朱泥への過渡期は、六朝時代の末頃といわれている。封泥の称は、晋の司馬彪の『続漢書』百官志に初めて見える。

封泥の著録の嚆矢は、劉鶚の『鉄雲藏陶』で、封泥一六五種を掲載する。封泥は、王献唐が輯した『臨淄封泥文字』（一九三六年）の叙によると、清の道光二年（一八二二）に四川省から初めて出土したと述べる。同書は、民国二十三年から二十四年の間に、山東省臨淄から出土した封泥の精品を選び、鄒県出土の六枚を加えて墨拓出版したものである。その序文ならびに目録の解説は、出土の状況、封泥の方式、時代考証が詳細で、封泥研究上重要な論考である。

封泥研究に最も早く着目したのは呉式芬（二七九六～一八五六）と陳介祺（一八一三～一八八四）で、光緒三〇年（一九〇四）に彼らによつて編輯された『封泥攷略』一〇巻は、封泥研究の基本文献となるものである。古璽封泥三顆、漢代官印五九五顆、新莽官印一四顆、私印五九顆、合計七七一顆の封泥を一〇種類に分類し、考証を加えている。このうち、陳介祺旧蔵五五六点が東京国立博物館に保管されており、先年、それらを含む六三四点の封泥を集録した『中国の封泥』（東京国立博物館編、二玄社、一九九八年）が刊行さ

れた。

江村治樹は「東京国立博物館保管陳介祺旧蔵の封泥——とくにその形式と使用法について——（東京国立博物館編『MUSEUM』第三六四号、ミュージアム出版、一九八一年）において、封泥の用途を六種に分類した。そのほか、封泥の著録には、羅振玉・王国維の『齊魯封泥集存』（一九一三年）、周明泰の『続・再続封泥攷略』（京華書局、一九二八年）などがある。嚴一萍編『封泥考略彙編』（台湾・芸文印書館、一九八二年）は、正・続・再続『封泥攷略』三書をまとめて覆刻したものである。

最近、中国西安市郊外の阿房宮遺跡付近から大量の封泥が出土した（図3）。これは、中国初の私立博物館である古陶文明博物館に常時展示されている。新出の封泥については『考古与文物』（陝西人民出版社、一九九七年第一期）や『西北大学学报』第一期第二七卷（前掲）に詳しく報告されるとともに、李学勤ほか八名の研究論文が掲載されている。さらにこれは、周曉陸・路東之編著『秦封泥集』（三秦出版社、二〇〇〇年）に集成された。篆刻美術館において、一九九八年十月「封じる」との企画展が催され、新出の封泥が出陳され図録が刊行された。

4、古印研究史（印学発展史）

古印の研究や鑑賞は宋代に、まず古印を蒐集し「譜」を編むことから始まった。遼宗皇帝の編した『宣和印譜』四巻はその第一で、中国最古の印譜である。これは今では佚して伝わらない。ただ、これを契機に古印の研究が始まる。

米芾は、その著『書史』の中で用印、治印の法を論じており、自ら奏刀したといわれている。王俅や王厚之も著録に古印を収録したが、この時代は鐘鼎彝器と同様、考古の資料として著録された。

元代になると、古印鑑賞、篆刻の先覚者ともいえる趙孟頫（一二五四〜一三二二）と吾丘衍（？〜一三二一）が現れ⁽⁴⁾、印学が大いに発展した。この時代、印譜は古印の鑑賞と刻印の模範として製作されるようになった。『松雪斎文集』に収録される『印史』の序によると、趙は、古印三四〇顆を摹刻して『印史』を作り、漢魏の典型に復することを説いたとされる。吾も『古印式』を作り古印を推賞したが、両書ともに今は見ることができない。吾丘衍は、吾衍とも呼ばれ、字は子行、貞白処士、竹房と号す。浙江錢塘の人である。経子百家の言、声韻律呂の学に通じており、古学をたしなんだ。書は篆籀に巧みであった。吾丘衍の伝記は数種編まれているが、王禕の「吾邱子行伝」の福本雅一による訳注が『書論』第六号（書論研究会、一九七五年）に掲載されている。さらに福本による「吾丘衍」（『類筆集——書の周辺——』（二玄社、一九八一年））は示唆に富む。篆書篆刻の法を説いた『学古編』は、印学の理論書で、篆体の移り変わりや篆刻の技法について要綱を列叙した「三十五挙」と、文字に関する書や金石についての短評「合用文集」からなる⁽⁵⁾。古印研究や実技の最初の指針書といえる。

次いで、明の何震に『続学古編』、清の桂馥に『続三十五挙』、『再続三十五挙』、黄子高と呉咨に『続三十五挙』、姚晏に『三十五挙』があり、吾丘衍の印学の継承のさまが見て取れる。

清朝に入ると、考証学の影響を受けて古印が学問的に研究されるようになる。乾隆末年の朱楓の『印徵』（一七八一年）や、黄錫蕃の『続古印式』（二七九五年）はその先駆といえる。道光十一年（一八三一）瞿中溶が秦漢印の記載から『集古官印考證』一七巻を著し、職官の制度を研究した。また呉式芬や陳介祺は、封泥や古印の譜を作り、陳は『十鐘山房印挙』の大著を完成した。

このあと、新出土の資料によって実証的な印章学が行われるよう

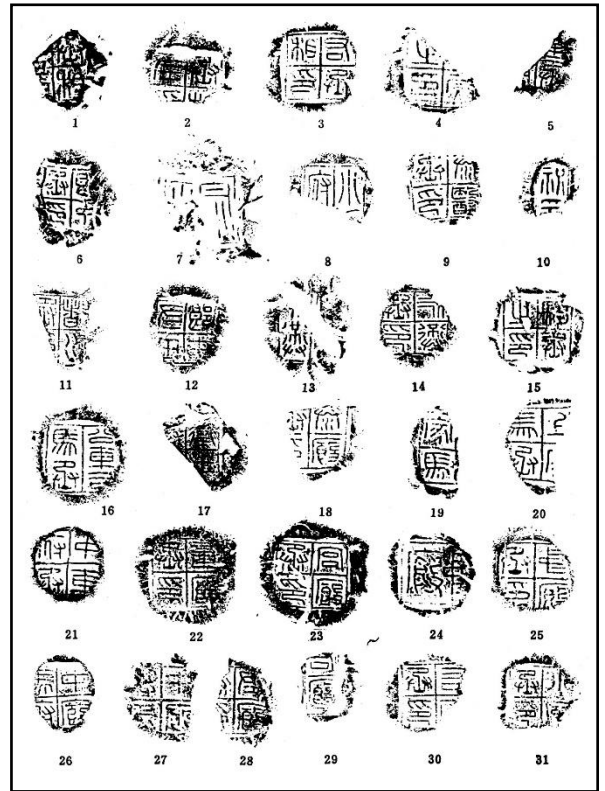


図3 封泥『考古与文物』1997年第1期

になり、呉雲、呉大澂、郭裕之、黄濬、羅福頤などのすぐれた学者が輩出した。羅による研究書については、前掲「2、新出土の印」において述べた。

黄悼著『中国古代印論史』（上海書画出版社、一九九四年）は、元代、明代、清代における印論史を実に明快にまとめ上げている。また陳振濂著『篆刻芸術縦横談』中の「印学」も、簡潔に論述されている。

日本人による中国古印の研究は、太田孝太郎著『漢魏六朝官印考』（一九六六年）、『同譜録』（一九六七年）が優れており、漢代以後六朝末に及ぶ古印の時代を弁別・考証している（6）。また加藤慈雨樓編著『漢魏六朝蕃夷印譜』『漢魏六朝蕃夷印彙例』（丹波屋、一九八六年）は、太田の前著を補ったものである。

太田は印学の泰斗であり、古印に関する著書や論考が多数ある。なかでも「漢印私考」（『書品』第三六〇三九号）、「漢委奴国王印文

考」（『書品』第二八号）は、古印研究に画期的な寄与をした。「漢委奴国王」の金印研究は、日本古代史を語る上で欠くことのできないテーマであるが、ここでは次の資料を紹介するにとどめる。大谷光男編『金印研究論文集成』（新人物往来社、一九九四年）は、過去のコ印研究論考を集成しており、資料も充実したものとなっている。また『定本書道全集別巻・印譜篇』（河出書房、一九五六年）は、太田孝太郎、小林斗盦の労作である。

また石井雙石も古印研究に成果を上げた。篆刻誌『雕蟲』に連載された「古印の時代別」（『雕蟲』第三〇九—三四〇集、一九四一—一九四三年）は、古印が時代順に掲載されているが、中断されたのが惜しまれる。

神田喜一郎著『中国の古印—その鑑賞の歴史—』（前掲）は、文化史に立脚した確かな方法論により、中国文人による古印鑑賞の歴史が時代を追って論述されている。

小林斗盦は印学に精しく、「漢代官印私見」（前掲）、「隋唐印について」（『MUSEUM』第一四九号、一九六三年）などの論考がある。また、『中国篆刻叢刊』全四〇巻（二玄社、一九八一—一九八四年）、『篆刻全集』全一〇巻（二玄社、二〇〇一年）、『漢南書庫中国印譜解題』（同、一九七六年）、『荃廬先生印存』（二玄社、一九七六年）の刊行をはじめとして『印史』（名著普及会、一九七九年）の復刻や、羅福頤の『古璽印攷略』（中華書店、一九八七年）の刊行、また一七世紀以降の各種印譜に収録された古璽と秦印に新出の資料を加え、集大成して字典化した『中国璽印類編』（二玄社、一九九五年）の編集など、印学に裨益すること絶大で、斯学の振興に果たした功績は計り知れない。

西川寧も印学に造詣が深く、園田湖城の蔵印を解説した「穆如清風室蔵印」（『西川寧著作集』第七巻、二玄社、一九九二年）は白眉

である。

5、印 譜

印譜は、印集、印存、印録などとも称し、歴代の印章を押捺し収録したものである。印譜は鑑賞用と鑑定用に大別できる。前者は篆刻学習の規範となり、古印を集めた「古銅印譜」と、明代以降の篆刻家の印を集めた「近人印譜」がある。後者は歴史的研究、書画の真贋鑑定に寄与する。

印譜は、原印に印泥をつけて押捺した「原鈐本」と、印影をもとに亜鉛凸版を作り、これに印泥をつけて押捺した「凸版押し」と、印刷した「印刷本」とがある。最も珍重される印譜が「原鈐本」、つまり「実押本」である。

① 鑑定用印譜について

書画の真偽を判定する際、印が重要な役割を果たす。歴代書画家の印鑑に『明清書画家印鑑』（王季遷・孔達合編、香港中文大学、一九六六年）、『中国書画家印鑑款識』上・下冊（上海博物館編、文物出版社、一九八七年）などがある。後者は、唐代から現代に至る物故著名書画家と收藏家計一二二〇人の印鑑と款識計二三〇〇〇余を収録しており、特に明清時代が充実している。

② 観賞用印譜について

鑑賞用印譜の中で「古銅印譜」について述べる。

春秋時代の古璽から秦・漢・南北朝の官私印を収録したものを「古銅印譜」あるいは「古印譜」という。

宋代に遼宗が作らせた『宣和印譜』四巻がその嚆矢であるが、現存しない。続いて王俅の『嘯堂集古録』、王厚之の『漢晋印章図譜』、晁克一の『印格』、顔叔夜の『古印式』、姜夔の『姜氏集古印譜』など数種の印譜の名が伝えられているが、このうち王俅と王厚之の譜

は影印で見ることが出来る。

元代になると、趙孟頫や吾丘衍が古印への復古を提唱し、趙が『印史』を、吾が『古印式』を作ったが、今は佚して伝わらない。これにより印学再興の機運が醸成された。現存する最古の原鈐印譜は、明の顧從徳が隆慶六年（一五七二）に印行した『集古印譜』六巻で、成譜わずかに二〇部であった（図4）。その後、古印を集成した印譜

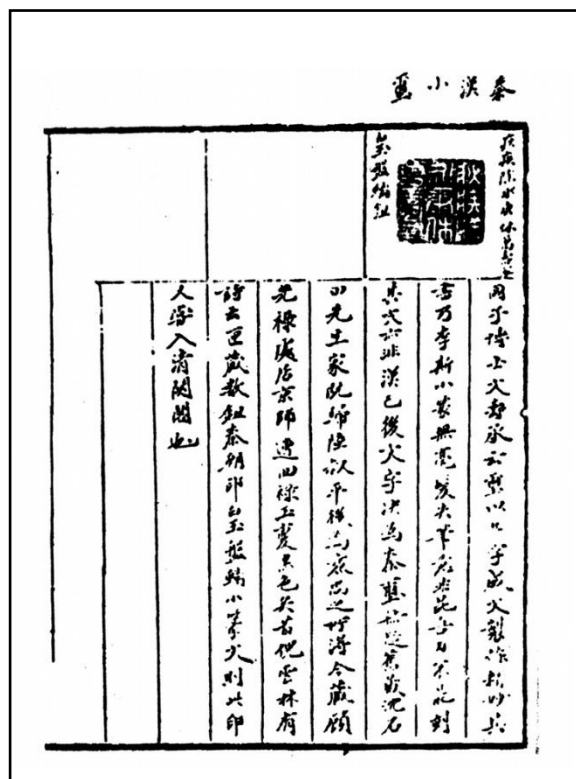


図4 顧氏集古印譜
（横田実『中国印譜解題』二玄社 1976年）

が数多く出される。范大澈の『范氏集古印譜』（一六〇〇年）、汪閔の『宝印齋印式』（一六一四年）、郭胤伯・王季安・趙之函の『松談閣印史』（一六一八年）などが著名である。

清朝に入ると、乾隆の頃、印癖先生汪啓淑が『漢銅印叢』、『訊庵集古印譜』を作った。道光になると、考証学の影響を受けつつ、古印学が大いに発展した。古印を歴史学の考証の資として官制の研究にあてた瞿中溶の『集古官印考證』（一八三二年）は重要である。

また古印を蒐集著録する者が多く出た。陳介祺による『簠齋印集』（一八五二年）、『十鐘山房印舉』（一八八三年）、吳雲による『二百蘭亭齋古銅印存』（一八七六年）、吳大澂による『十六金符齋古銅印存』（一八八五年）、高慶齡による『齊魯古印攷』（一八八五年）、『統齊魯古印攷』（一八九二年）などが刊行された。

民国になると、羅振玉が『磬室所藏璽印』（一九一一年）、『同統集』（一九一五年）、『赫連泉館古印存』（一九一五年）、『隋唐以来官印集存』（一九一六年）、『貞松堂唐宋以来官印集存』（一九二三年）などを印行した。羅福頤の撰になる『印譜考』四卷（墨緣堂、一九三三年）は、宋代から清末に至る著名な印譜を解説したもので、価値が高い。『中国璽印篆刻全集』全四卷（『中国美術分類全集』、莊新興・茅子良編輯、上海書画出版社、一九九九年十一月）、『中国歴代印風系列』二十一卷（黃惇総主編、重慶出版社出版、一九九九年十二月）は、印刷も美しく充実している。

次に、肖形印つまり図形印を集めた印譜に、康殷輯『古図形璽印彙』初集（河北美術出版社、一九八三年）、『古図形璽印彙続集』（河北美術出版社、一九九一年）、溫延寛編『中国肖形印大全』（山西古籍出版社、一九九五年）などがある。

また王伯敏著『古肖形印臆釈』（上海書画出版社、一九八三年。邦訳『中国古代の肖形印』、北川博邦校閲、中野遵訳、東方書店、一九八五年）は、肖形印六〇種について考証したものである。

日本に古印が舶載されたのは、楊守敬が来朝した明治十三年（一八八〇）頃だといわれているが、精品が多くもたらされたのは辛亥革命（一九一一年）以後である。

わが国の蔵印家に、夢庵太田孝太郎（岩手県立博物館蔵）、湖城園田穆（久保惣美術館蔵）、静堂藤井善助（藤井斉成会有鄰館蔵）、禿盒大谷瑩誠（大谷大学蔵）、石廩中村準一（寧楽美術館蔵）、不折中

村鉅太郎（書道博物館蔵）、見山大西行礼（加藤達雄氏蔵）がいる。また、菅原石廬が、最近十年間に蒐集した古銅印一五〇五方を収載した印譜『中国璽印集粹』（二玄社、一九九七年）を刊行した。このように、わが国には、個人収蔵分と各機関に分蔵されたものを合わせると、一〇〇〇〇方近い収蔵がある。

日本で刊行された古銅印譜の原鈐本に、太田孝太郎『夢庵蔵印』（一九二〇年）、大谷瑩誠『梅華堂印章』（一九二四年）、『楓園集古印譜』（一九二九年）、『楓園集古印譜続集』（一九三二年）、藤井静堂『靄々莊藏古璽印』（一九三一年）、林熊光『磊齋璽印選存』（一九三四年）、園田湖城『平盒攷藏古璽印選』（一九六九年）、菅原石廬『鴨雄緑齋古璽印選』（一九九六年）などがある。湖城は、大正十五年（一九二六）に印章研究誌『印印』を発行し、昭和二十六年（一九五二）まで八三集を世に送り出した。同誌の中で、古印の逸品を鈐印紹介した。また影印本に『中国古印図録』（大谷大学、一九六四年）がある。近年、寧楽美術館に所蔵される「中国の印章」二〇九〇顆から精選された二一九顆の図録が『寧楽美術館の印章 方寸にあふれる美』（久米雅雄監修、公益財団法人 名勝依水園・寧楽美術館、二〇一七年）として刊行された。

日本で出版された印譜の概説書としては、小林斗盒による「印譜の話」（『書道講座 第六卷 篆刻』二玄社、一九七三年）が簡にして要を得たものとなっている。同じく小林による「中国古印概説」（『書道研究』通卷三五号、萱原書房、一九九〇年）は、中国古印譜の著名なものを挙げ、簡明な解説がなされている。また高山節也「印譜の分類と明代古銅印譜」（『論集中国古代の文字と文化』汲古書院、一九九九年）は、明代古銅印譜の変遷や成立の趣旨、特質が概観されている。

次に、漠南横田実著『中国印譜解題』（二玄社、一九七六年）は、

漠南旧蔵にかかる古銅印譜約二〇〇種、近人印譜約二八〇種について解題しており、印学に益すること大なるものがある。同印譜は一括して東京国立博物館に寄贈されている。これに先だつものに、太田孝太郎撰『古銅印譜挙隅』一〇巻（文求堂、一九三四年）、『同補遺』八巻（小林庸浩発行、一九六九年）があり、前著は古銅印譜一〇五種、後著は一四九種について内容・印数・伝来を調査し記している。

また、日本における現存の中国古印や古銅印譜の収蔵・舶載・蒐集については、同じく小林が「日本現存の中国古印と古印譜」（『書品』第二七七号、一九八四年）に述べている。

鑑賞用印譜の中で「近人印譜」について述べる。

明代以後、すぐれた印人が輩出し、石印材を使用して篆刻が刻された。これらの印人たちの名印を収録したものが「近人印譜」であり、「名人印譜」ともいわれる。近人印譜には、印人各個人の専集、数人の印人の合輯本、ある流派の印人の合輯など、さまざまな種類がある。近百年の作になる近人印譜は百花繚乱、膨大な数にのぼる。

まず明代に文彭・何震が出現すると、篆刻は書画と並ぶ芸術の一分野として確立され、幾多の名手を輩出した。そして古印の鑑賞とともに、近人の刻印が蒐集著録された。明末清初にかけて「三堂の印譜」と称される、張灝の『学山堂印譜』（一六三三年頃）、汪啓淑の『飛鴻堂印譜』（一七五五年頃）、周亮工的『賴古堂印譜』（一六六七年限）が著された。

また個人の専集も刊行され、蘇宣の『蘇氏印略』（一六一七年）や何震の『何雪漁印海・印証』（一六二二年）は日本にも舶載された。

近現代名家の印譜は内外のさまざまな出版社から刊行されているが、上海書画出版社、西泠印社、香港博雅齋などが著名である。また、『中国歴代印風系列』全二一冊（重慶出版社、一九九九年）は、

古印から近人の印を印風別に配列している。日本で出版され手軽に入手できるものに『中国篆刻叢刊』全四〇巻（前掲）がある。本叢刊は、明清兩代五百年間に輩出した篆刻の名家三百十余家の作品一万余顆を、作家ごとに編年収録したものである。また、近代の篆刻家の印譜に『近代印譜叢書』第一期・第二期（東京堂出版、一九八九・九二年）があり、鄧散木、王福庵、趙時櫚、童大年、趙古泥、来楚生、徐星州、黄牧甫、趙中穆、趙林を取り上げている。また、馬国権著『近代印人伝』（上海書画出版社、一九九八年）は、二〇世紀の篆刻家一二五人を取り上げて、伝記・作品・肖像を掲載している。

6、印 材

印材は、印章に用いられる素材を指し、材質に石、玉、金、銀、銅、陶、木、竹、琥珀、瑪瑙、骨角などがある。最古のオリエントのスタンプリ印章は、粘土や滑石のような軟質の石材が用いられた。またメソポタミア文明の円筒印章は、石灰石や大理石などが使用されている。その後、金属による銀や銅が用いられるようになった。中国最古の殷璽は銅印で、元末の頃までは銅印が主であり、その他各種の材質が用いられた。

印材に軟質の石材が使用されるようになったのは元末明初の頃とされている。墨梅の名手王冕が初めて花乳石を用いてからである。花乳石は青田石の一種である。続いて文彭や何震などの文人が凍石を用いて印を刻するようになり、石印全盛の時代を迎える。石印材は、古来「掌中の珠」として、印人や好事家を魅了し続けている。これまで良質の石印材を多く産出したのは、福建省と浙江省である。なかでも福建省福州市北郊の寿山郷、浙江省の青田県と昌化県は代表的な産地である。

石印材の研究文献を数種挙げておくと、張俊勛著『寿山石攷』（雅

荷堂、一九一四年）、高兆著『觀石錄』（『美術叢書』初集第一輯、上

海神州国光社、一九三六年）、毛奇齡著『後觀石錄』（『美術叢書』初

集第三輯、前掲）、陳子奮撰・陳清狂修訂『寿山印石小志』（福州書

画社、一九八〇年）、石巢著『印石辨』（中華書局、一九八二年）、方

宗珪著『寿山石誌』（福建人民出版社、一九八二年）、同『寿山石全

書』（香港八龍書屋、一九八九年）、方宗珪・吳金泉・門国礼編『巴

林石譜』（印材雜誌社、一九九四年）、葉偉著『中国印石』（遼寧人民

出版社、一九九三年）、童辰翊著『中国印石図譜』（上海遼東出版社、

一九九六年）などがある。方宗珪著『中国寿山石』（福建美術出版社、

二〇〇二年）の邦訳に、井垣清明『寿山石印材を極める』（金石癖、

二〇一二年）がある。日本人のものとしては、河西笛洲著『印石劄

記』（一九三〇年）、村木鬼空著『桃紅艾緑』（台湾経世新報社、一九

三一年）、楠瀬日年著『印材話説』（翰墨同好会南有書院、一九三五

年）のほか、山内秀夫著『石印材』（木耳社、一九六七年）があり、

これには真田但馬による『寿山石攷』、『觀石錄』、『後觀石錄』の邦

訳を載せている。また小林徳太郎著『増補 図説石印材』（木耳社、

一九八八年）は『寿山石攷』、『桃紅艾緑』、『印材話説』の原文が影

印収載されている。

最も簡便で内容の豊富なものに『石印材の楽しみ』（『季刊 墨ス

ペシャル』第二号、芸術新聞社、一九九五年）があり、印材に関す

る歴史や種類などの基礎知識、近年石坑が発見された巴林石の発掘

事情など、最新の情報が掲載されている。橋本文吉著『印石攷』（藝

文書院、二〇一〇年）は、石印材の総合的研究書である。

石印材には精緻な鈕が刻されているものも多い。これは彫鈕の名

手が刻しており、清代には楊璇、周彬、潘玉茂・玉進・玉泉兄弟、

林清卿などが現れた。印鈕については、尤共展著『印鈕漫話』（上海

書店、一九九四年）が詳しい。

7、日本と韓国の印章

日本における印章・篆刻の歴史は、奈良時代から平安時代に至る

隋唐文化の影響のもとに制作された大和古印と、中世以降の印章、

そして一七世紀中葉以降、長崎に渡来した独立・心越を篆刻の祖と

仰ぐ篆刻に分けて考えると理解しやすい。日本の古印の専著として、

木内武男編著『日本の古印』（二玄社、一九六五年）や、国立歴史民

俗博物館編『日本古代印の基礎的研究』（一九九九年）等がある。

日本の印章や篆刻の概説は、中田勇次郎による『日本篆刻史』（『日

本の篆刻』二玄社、一九六六年）、『日本印章概説』（『書道全集別巻

II・印譜 日本』、平凡社、一九六八年）が詳しい。印章の専著に、

荻野三七彦著『印章』（吉川弘文館、一九六六年）や木内武男著『印

章』（柏書房、一九八三年）がある。

また、日本の篆刻家の研究書に、三村清三郎著『三村竹清集5』

（青裳堂書店、一九八三年）、水田紀久著『日本篆刻史論考』（青裳

堂書店、一九八五年）、筆者編著『高芙蓉の篆刻』（木耳社、一九八

八年）、『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として』（熊日出

版、二〇一七年三月、〔改訂版〕創想舎、二〇二〇年三月）があり、

篆刻家の事績や印学が詳述されている。また、平成三年（一九九一）、

茨城県古河市に日本で初めての篆刻専門の篆刻美術館が開館した。

同館では、篆刻に関する資料の蒐集・保管とともに、企画展により

篆刻の啓蒙にあたっている。

韓国の印章の歴史も、日本と同様、中国の影響により、楽浪時代

以後のものがある。国立民俗博物館に収蔵される印章が『韓国の印

章』（三和書籍、一九八七年）として刊行されている。

三 資料解説

篆刻研究のための基礎的な資料として刊行された書物は、近年比較的多くなった。それらは「技法」、「理論」、「鑑賞」に分けられようが、本章では、篆刻を研究する上で有用と思われる「理論」に限り、そのいくつかについて簡単に内容を紹介する。また、篆刻の研究において、文字学（小学）の研究を欠かすことができない。本章では主として篆刻そのものを論じたが、より高度な理解に進むには、この方面へも深い関心を寄せるべきだろう。さらに今後は、篆刻の専門分野の研究とともに、学際的な、つまり周辺領域の研究成果をも取り入れる必要があるだろう。

篆刻の基礎知識を得るための最適の書は、佐野光一の『篆刻入門―その基礎知識―』（東京堂出版、一九九〇年）である。篆刻に関する専門書や、研究論文の検出のための専著はまだ編まれていない。そこで次の書物が有用である。

- ①『東洋史研究文献目録』『東洋学研究文献目録』（東方文化研究所、一九三四―一九六〇年、一九六一―一九六二年）
- ②『東洋学文献目録』（京都大学人文科学研究所附属東洋学文献センター、一九六三年）
- ③『東洋美術文献目録』（東京国立文化財研究所編、柏林社書店、一九四一年）
- ④『日本東洋古美術文献目録』（東京国立文化財研究所美術部編、中央公論美術出版、一九六九年）
- ⑤『書道全集 別巻Ⅰ印譜 中国』（平凡社、一九六八年）
- ⑥『中国印学年鑑』（西泠印社出版社、一九九三年）

⑦『中国篆刻大辞典』（河南美術出版社、一九九七年）
⑤には日本における一九六七年までの文献が掲げられており、⑥は近年五年間における中国を中心とする研究文献・論文を広く収載し、内容を紹介している。⑦は篆刻の総合辞典であるが、四七〇〇項目の篆刻用語の解説がなされており、利用価値が高い。その他、次のような篆刻専門の雑誌があり、最近の成果を示す論考や稀観書を影印・掲載している。

- ①『季刊篆刻』（第一―七五号）、『臨時増刊篆刻』（第一―二六号、北川博邦主幹、東京堂出版）
- ②『印林』（第一―四九号、王北岳編、印林雜誌社）
- ③『西泠芸叢』（西泠印社編集部編、西泠印社）
- ④『中国篆刻』（第一―一三三号、荣宝斋出版社編輯、一九九四―一九九七年）

印や篆刻に関する研究書を収録した叢書として、次のものがある。

- ①顧湘輯『篆学瑣著』（顧氏校刊本、道光二十年（一八四〇年）洋装二冊本、北京中国書店、一九八三年）
- ②吳隱輯『遜齋印学叢書』（西泠印社木活字排印本、一九二一年）
- ③黄賓虹・鄧実編『美術叢書』（江蘇古籍出版社、一九八六年）
- ④楊家駱主編『芸術叢編』第二七冊『篆刻学』（世界書局、一九七三年）
- ⑤韓天衡編著『歷代印学論文選』上・下（西泠印社、一九八五年）
- ①は、唐から宋の間に著録された篆学や篆刻に関する文献三〇

種・付録三種を収め、②は、明清の印学に関する著録一七種を収録している。③は、篆刻に関する文献一八種を取り上げており、これには嚴一萍の続集がある。⑤は、篆刻学の論著を四種に分類し、これまでの主要な論考はほぼ網羅している。

近年発行された資料・文献に、西泠印社創設八〇周年記念大会開催のときに出版された『印学論叢』（西泠印社、一九八七年）、九〇周年記念論文集『印学論談』（同、一九九三年）、九五周年『西泠印社国際印学研討会論文集』（同、一九九九年）、王献唐遺書『五鐙精舍印話』（斎魯書社、一九八五年）などがある。王献唐は印学に詳しく、同書は、一七二条の印話と八篇の璽印の考証からなる。

韓天衡編著『中国印学年表』（上海書画出版社、一九八七年）は、宋より現代までの印人二〇〇〇人の生卒、印譜一七〇〇種の刊行年を収めており、印学の全体を通覧するのに便利である。また、孫洵著『民国篆刻芸術』（江蘇美術出版社、一九九四年）は、民国期の篆刻を概述した好著である。陳振濂著『篆刻形式美学的展開 大学篆刻芸術形式与技巧的专业訓練系統』（西泠印社出版社、二〇〇五年）は、印章・篆刻の総合的研究書である。

四 おわりに

篆刻学の研究の範囲は、印章と篆刻に関するあらゆる事柄を網羅し、美学、美術史、文字学、金石学、歴史学、考古学、法制史などと重複する部分も多く、きわめて広い領域にわたっている。

篆刻学は、まことに広い分野を包含する興味あるテーマである。中でも、中国の印史は、昨今新たな印章資料が多く発掘されており、文字学研究を進展させた。

【注】

(1) 円筒印章 (Cylinder seal) は、古代メソポタミアにおいて所有者などを示すために使用された印章のことをいう。図や文章が書かれており、初期においては書簡や容器を封じるための紐を粘土で覆い、その粘土(封泥)に円筒印章を押し付けて転がすという方法で用いられた。

(2) 封泥とは古代の西アジアや中国において、重要物品を入れた容器や公的内容を記した木簡・竹簡の束を封緘するとともに、責任の所在を示す証明書として用いられた粘土の塊のことをいう。封緘、保管、輸送などを担当する責任者を記す記号や文字が刻まれたり、印が押捺されているのが普通である。

中国のものは印章と同様に蒐集・鑑賞、篆刻の参考資料として研究されている。中国でも封泥は印章とともに広く使用された。また封泥は、物品輸送の際の封緘や証明だけでなく公文書の封緘にも用いられた。紙が発明される以前、文書はすべて木簡・竹簡に書かれ、それを紐でつなぎ合わせて巻物状にして保存しており「簡冊」という。通常は紐などでくくっていたが、公文書の場合は封泥が封緘に用いられた。木簡・竹簡は紙と違って削るだけで改竄が可能なため、嚴重に封をかける必要があったのである。

(3) 古印研究の権威と目される羅福颐は、羅振玉の子息で新中国成立後、故宫博物院考古組に入り、主として古璽印の整理研究に従事した。その功績は頗る大きい。

(4) 吾丘衍は、吾衍とも呼ばれ、字は子行、貞白処士、竹房と号した。浙江錢塘の人である。書は篆籀に巧み。篆書篆刻の法を説いた『学古編』は、印学の理論書であり、古印研究や実技の最初の指針書といえるものである。

(5) 筆者訳「学古編（三十五挙）」（高畑常信訳『篆刻の歴史と鑑賞』、秋山書店、一九八二年十月）

(6) 太田孝太郎（一八八一―一九六七）は、夢庵と号す。岩手県盛岡の生まれ。実業家、郷土史家。中国古印の収蔵家・研究者として活躍した。二〇一九年三月、岩手県立博物館において、太田の業績を紹介する展覧会が開催され『風雅好古―太田夢庵の金石収蔵・研究と文人の世界』が太田夢庵顕彰会により発行された。

第二節 日本の印史とその特色

一 はじめに

日本における印学の研究、印章や篆刻そして印人や印譜の、広い視野に立った体系的な研究はまだ十分なされていない。本研究は、日本の印章や篆刻の歴史的、文化史的な解明を目的としており、総括的には日本の印学の体系化を目指したい。これは書学・書道史の対象としてだけではなく、美学・美術史、歴史考古学、文化史等その裨益するところは甚だ大きいと思われる。

これまで、日本や中国における印章や印人に興味を持ち、それへの史的考察や作品研究をテーマに据え論考を発表してきた。日本の印人の研究、主として高芙蓉（一七二二―一七八四）研究、並びに彼を祖とする芙蓉派の一系譜と目される、源惟良、小俣螭庵、福井端隠、山田寒山、山田正平等の事績の提示と作品分析、そして印学の継承とその発展を探ることを課題としてきた。また、わが国の印人伝における唯一の専著と言える中井敬所（一八三一―一九〇九）の『日本印人伝』をさまざまな文献・資料より拾遺し補訂することを課題としている。文人・士大夫そして、篆刻の専家はもちろん、篆刻に関わる傍系の文人・芸術家の研究も併せて進めている。

日本の最も初期の印章は、隋唐時代印制の影響のもと所成された。時代が下るに従い、その形姿・印風に別趣の風格がみられるようになった。十七世紀以後、明朝崩壊後、中国から黄檗禅僧がわが国に渡来し篆刻を移植した。その後印学の学問の隆盛と相俟って多くの

印人が活躍するようになる。十八世紀中ごろ、印聖と称される高芙蓉が出現し、秦漢の古印への復古が提唱され、彼の門流一派により全国各地に伝播しゆくこととなった。明治期になると、芙蓉派による古体派とともに、小曾根乾堂や篠田芥津らの新傾向の篆刻家が出現する。また山田寒山や河井荃廬などが渡支・遊学し彼の地の篆刻を学んで帰国、新味溢れる作品を制作、大正・昭和の印壇が形成されることとなる。

本節は拙著『高芙蓉の篆刻』（木耳社、一九八八年六月）で取り上げた「日本篆刻史」を基に、その後の新知見を追補し纏めたものである。本研究を執筆するにあたり、先賢の多くの業績、中でも、太田夢庵、荻野三七彦、神田喜一郎、小林斗盦、中田勇次郎、新関欽哉、西川寧、三村竹清、水田紀久、中野三敏などの諸先碩による業績は示唆に富むもので学恩を蒙った¹⁾。通史といった内容の關係上、逐一出典を記していないが深く感謝の意を表する。

本節は、日本の印史について論述し、その特色に関して概観するものである。資料・文献の収載は、二〇〇二年九月までを中心としている。

二 印史

1、はじめに

日本の文化を考えるにあたり、印章の占める位置は極めて高いといえる。印章の研究は、単に歴史考古学の対象というにとどまらず、

書誌学との関連も深く、さらに文字学、書道史、美術史の資料として裨益するところが大である。

また、私たちの公私に渉る生活全般に係わりを持つ。

わが国の印章は書と同様に、中国の印章の影響を色濃く受けている。ただ時代の降下とともに、中国の印章に見られないわが国独自の雅趣のあるものへと変化していく。これは日本人の性情が雅醇で平易なものを求める傾向があり、そのために、より寛雅な美が好まれるからであろう。印章においてもそのことがいえそうである。日本の印章に関しては、木内武男著『印章』（柏書房株式会社、一九八三年六月）が簡にして要を得たものである。

2、金印の発見

現在、わが国に伝えられている最古の印章は「漢委奴国王」印である（図1）。金印蛇鈕、白文方印、法量は二・三兩である。これは天明四年（一七八四）二月二十三日、筑前国那珂郡志賀島叶崎（現、福岡県粕屋郡志賀島）の石槨の巨石の下から、その土地の農民により発見されたものである。材質・鈕式・印式・印文・刀法に関して、漢印としての諸条件を具備しており、漢印とみて異論はない。さらに『後漢書』東夷伝の倭の条に「建武中元二年、倭奴国貢を奉じて朝賀す。人をして自ら大夫と称せしむ。倭国の極南の界なり。光武賜わるに印綬を以てす」とある。このことから、後漢の光武帝の中元二年（五七）倭の奴国が、漢の都洛陽に朝貢して印綬を賜わったことがわかり、遺物と文献とが一致している。この金印は、日本印章史上貴重な発見であり、日中古代交流史を識る上においても大切なものである。

また『魏書』東夷伝（『魏志倭人伝』）によれば、魏の景初三年（二三九）邪馬臺国の女王卑弥呼が魏都洛陽に遣使している。翌年、正

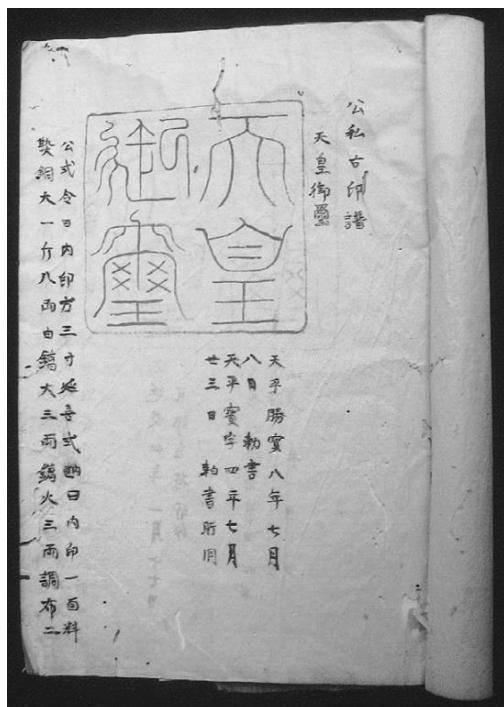


図2 日本古印写本
（図2、4、5、7～10は筆者蔵）

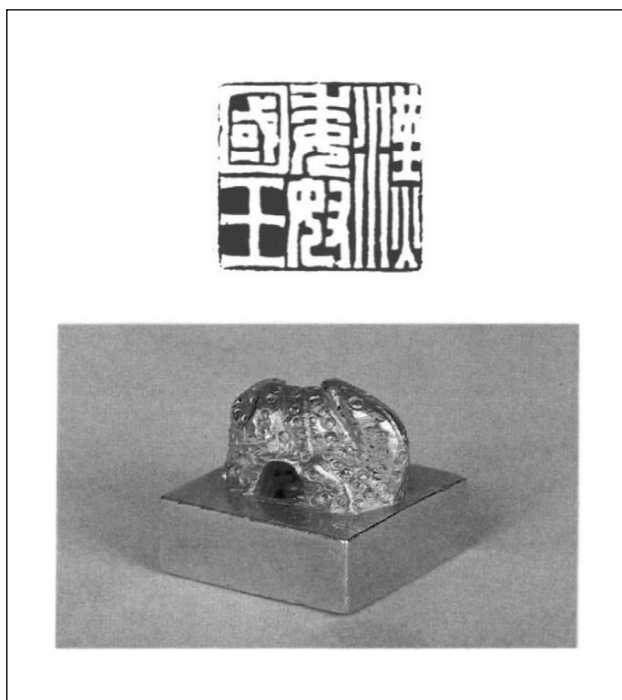


図1 国宝金印「漢委奴国王」
（久米雅雄著『日本印章史の研究』雄山閣）

始元年、齊王の答使が来朝し、卑弥呼に「親魏倭王」の称号と金印・紫綬とを賜わっている。ただこの印章は現在まだ発見されていない。

3、古代（平安中期）

わが国において、印章が文献に記載された最も古い例は『日本書記』崇神天皇の条である。ただ「印綬を授く」とあるが、これは中国の史書の潤色と考えられる。また、『日本書記』持統天皇の条に「六年九月丙午、神祇官奏して神宝書四卷・鑰九箇・木印一箇を上る」とある。木印は木製の印と考えられることから、大宝律令施行前に、すでに印章が行われていたことが考えられる。

わが国において、印章の制度が確立したのは、大宝二年（七〇一）施行された『大宝令』による。今日『大宝令』は伝存していないが、『養老令』の注釈書である『令義解』『令集解』により、その条文の一部がわかる。『令義解』の『公式令』に四種の印の規定がある。それは内印・外印・諸司印・諸国印の官印で、官司の公文書などに使用された。官印の実物で遺存するものはないが、古文書にその印影が捺印されており、大要を知ることができる。

官印の製作法に関しては『延喜式』（九二七年）に編集された「内匠寮式」に、資材・用量・工程などが詳しく記載されている。鑄印のことはすべて中務省の内匠寮が担当した。官公印は蠟型左彫りによる鑄印が多い。

内印は御印のことをいい、印文に「天皇御璽」と二行に配している。書体は特異な篆書体である。寸法は方三寸（約八・八糎）の大印で陽刻である。内印は、詔書・勅旨・そして五位以上の位記、および諸国に下す公文書に用いられた。天平勝宝八歳七月八日の『法隆寺献物帳』（東京国立博物館）に、紙面全面三段、合計一六顆の内

印が押捺されている。

外印とは、太政官印のことをいい、印文に「太政官印」と二行に配している。書体は小篆体である。寸法は方二寸半（七・八糎）の大印の陽刻である。外印は、六位以下の位記と太政官発行文書・保管の文案に用いられた。外印の印影に、延暦二年（七八三）六月十七日の『太政官牒』（東南院文書）、延暦十三年（七九四）四月廿五日の『太政官牒』（東南院文書）に押捺された二種のものが確認されている。

諸司印とは、政府各省、諸部局の印をいい、八省・弾正台および八省管下である寮・司などの印のことをいう。八省は中務・式部・治部・民部・兵部・刑部・大蔵・宮内であり、印影はすべて見られている。四字を二行に配している。文字はわが国独自の書風となっており、寸法は方二寸二分の陽刻である。諸司印は、官に上る公文すなわち太政官に提出する解および文案、移・牒などの文書に用いられた。この印影は、天平十七年（七四五）の『右大舍人寮解』（正倉院文書）に見える。

諸国印とは、地方諸国から上る解、およびその保管すべき文案・調物などに押捺するものをいう。現在五一顆の国印の印影が認められている。

官印に準ずる公印に国倉印・郡印・郷印・軍団印・僧綱印・国師印などがみられる。さらに神社・寺院においても官司に倣い印章を用いるものがあつた。

国倉印として「隠伎倉印」・「駿河倉印」・「但馬倉印」が現存している。郡印として「山邊郡印」・「児湯郡印」が存在する。郷印として「次田郷印」・「伊保郷印」がある。軍団印として「遠賀団印」・「御笠団印」がある。

私印としては、古くは『続日本紀』の天平宝字二年（七五八）の

条に「紫微内相藤原仲麻呂、太保に任じ惠美押勝の名を賜わった」とあり、「惠美家印」の家印の使用例が見られる。私印は奈良時代にはすでに、上層階級から下層階級の一部に及んでいたのである。私印には、家印と個人印とがある。これには四字印のほか二字印・一字印のものもあり、印式・書体・書風は自由で純真素朴さがある。後の印人や好事家に賞美される所以である。

わが国の古銅印は、中国隋唐文化の影響の下作られたもので、隋唐印の印制・形制を模倣したものである。書体・書風においても六朝から隋・唐代の碑誌の篆書に近い。しかし時代が下るに従い、わが国独自の様式に定着し、隋唐印に見られない特有の風趣が窺える。これらは「大和古印」と称されて愛玩されている。

日本の古代印の印譜の製作は(図2)、江戸中期の考証学者藤貞幹(一七三二〜一七九七)が一七七三年に刊行した『公私古印譜』が先駆的な業績といえる。後、松平定信編『集古十種・印章部』(一八〇〇年)、穂井田忠友『埋麝発香』(印章部)(一八四〇年)などが刊行された。日本古代印の研究報告書として「非文献資料の基礎的研究―古印―」報告書が、国立歴史民俗博物館から『日本古代印集成』の書名で編集・発行されている。

4、中世(平安後期〜安土桃山時代)

平安時代後期に入ると、律令制度は衰微し国家機構も急激に崩壊した。それにより印制がくずれ、文書に印章が使用されることが少なくなった。しかし、重要で儀礼的な詔書・勅書・位記及び官符・官牒などは伝統的な令制による規範が存続していた。また現存する「興福寺印」や、木印による東大寺の「華嚴供印」などはやはり前代の伝統のものと考えられる。中世以降の印章は、寺印や蔵書印など広義の私印全盛の時代といえる。

中世になると印章に代わり花押が使用されることが多くなった。花押は自署の代りに用いられる符号であり、その起源は草書体にある。草書体を用いて自署したものを草名と呼び、筆順や字形が判読できなくなったものを花押という。花押は草書体の自署から変化した草名体の花押、のち二合体・一字体・別用体・明朝体花押など様式化された美しいものとなった。

鎌倉時代に入ると、大陸との交渉がしだいに活発となり、禅宗の興隆とともに、渡来の禅宗僧により、宋元時代の印章の様式がもたらされたために再び私印が勃興した。惠暁白雲(仏照禅師)の「惠暁」・「白雲」・「隠谷」印、慧広天岸(仏乗禅師)の「慧広」・「天岸」印、無学祖元(仏光国師)の「無学」印などが見られる。形式は多様で装飾化されたものが多い。

室町時代以降、詩書画に捺された落款印・引首印・鑑蔵印がある。水墨画家雪舟の「雪舟」・「等楊」、また狩野山楽の「修理」・「光頼」などが見られる。

戦国時代に武将の間で行われた印章のことを武将印と呼ぶ⁽²⁾。相田二郎著『戦国大名の印章―印判状の研究―』(相田二郎著作集2、名著出版、一九七六年四月)は、諸大名の印章や印判状に詳しい。家印と呼ぶべきものが多く、公印としての性質を持っている。多くは方印・円印であり、寸法は相当大きいものである。印文は、姓名を刻したもの以外、その武将の理想・信條・家風の主義主張を現しているものがある。印文には篆書体を用いているものの、装飾的である。

今川義元の「如律令」は「急々如律令」からとられた語句であり、呪文として悪鬼を払う効験を持つとの信仰による。武田氏の龍の印や北条氏の虎の印「禄寿應穩」がある。また上杉謙信の獅子の印は、印文に「地帝妙」とあり、上部に獅子を意匠化して刻している。「地

帝妙」は地藏菩薩・帝釈天・妙見菩薩の頭字を取ったものであり、上杉家の印は信仰する神仏の番号を用いることが多い。織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の印章も興味あるものである。中でも豊臣秀吉の「豊臣」(金印)は、方八・九糧あり、天皇御璽をも凌ぐものであった。

天文十八年(一五四九)フランシスコ・ザヴィエルが九州に来航して耶蘇教が伝えられた。その影響を受けて切支丹印・ローマ字印(南蛮字印)があらわれた。これは主に西国大名により使用された。

天正七年(一五七九)四月三日付で差出名に「備慈多道留」とある書状(相良家文書)の墨印は楕円形で、寸法四・六糧×三・四糧のものである。周囲に「茨の冠」がめぐらされており、印文に「IHS」(Iesus Hominum Salvator)とある。これは「ヤソ人類救世者」の意味である。

他に、大友宗麟の印「FRCO」があり、彼のクリスチャンネーム(Francisco)の略である。黒田孝高はシメオンと称し「Simeon Josui」の印がある。黒田長政の印「CURO NGMS」、細川忠興の印「tada noqui」などがある⁽³⁾。

5、近世(江戸時代)

江戸初期、慶長八年(一六〇三)から正保・慶安にかけての約五十年間は、室町時代の遺風が引き続き行われていた。徳川家康が用いた「福德」・「源家弘忠怒」や伝馬印は、戦国武将印の様式に則ったものである。

また儒者藤原惺窩の「惺窩之印」・「北肉山人」や、林羅山の「羅山」・「白雪斎印」などの私印も、前代の形式を踏襲したものである。ただ石川丈山の「石凹」・「六六山洞凹凸窠夫」・「頑仙子」は、明末の装飾趣味を示しており、新生面を切り開いたものといえる。

書画印においては、桃山から江戸初期に出現した寛永の三筆の人である本阿弥光悦(一五五八―一六三七)は、天才的な工芸家であり、刀剣・蒔絵・陶器に一家をなした。その方印「光悦」は斬新な風趣を備えている。同じく画家俵屋宗達の円印「対青軒」・「伊年」や、尾形光琳の円印「光琳」・「方祝」・「潤色」は、日本的で意匠の豊かなものである。この様式は後の琳派の画人達の好むところとなった。

わが国において、印章を鑑賞するようになったのは、江戸初期に古書画の落款印章が図譜の形式で刊行されてからである。最も初期のものとして寛永二十年(一六四三)に『君台観左右帳記事』(墨書外題、唐あんつくし)が刊行されている。更に正保四年(一六四七)に『和漢歴代画師名印瀉図』が、承応元年(一六五二)に『君台官印』が刊行された。これらの図譜は書画の鑑定に用いられたものであり、書画の落款印章を作る参考にされた。ただ木版刷りの粗悪なものであり、鑑賞に耐えうるものでない。

明王朝が一六四四年に滅亡するに及び、中国から日本に亡命して帰化する人々が多かった。長崎を門戸として中国の新しい文化がわが国にもたらされ、それにとまって明人により篆刻が伝えられた。戴笠(一五九六―一六七二)は、承応二年(一六五三)に日本に来航し、翌年渡来した隠元につき得度した。名を性易と改め、字を独立といい、天外一閑人と号した。六書の学に通し、篆刻に深い素養を持っていた。その他渡来した禅僧に黙子如定・蘭谷・心越がいる。心越(一六三九―一六九五)は、延宝五年(一六七七)に渡来した(図3)。杉村英治の『望郷の詩僧 東臯心越』(三樹書房、一九八九年三月)は、心越の生涯について詳しい。はじめ長崎の興福寺に住み、その後江戸に出て、徳川光圀の招きにより水戸の壽昌山祇園寺に入り、開山第一世となった。篆刻に優れたが、その刻風は



図4 陳策『韻府古篆彙選』



図3 東阜心越墓碑
(壽昌山祇園寺・茨城県水戸市)

明末清初の今体派に属するものである。祇園寺にその遺作が伝えられている。彼は陳策の『韻府古篆彙選』(図4)を将来した。独立・心越は、近代日本の篆刻における開祖と見なされている。

元禄から享保にかけて心越に刀法を受けたとされる榊原篁洲(一六五五〜一七〇六)が現れた。わが国最初の鈴印自刻印譜『印纂』を作ったといわれている。また篆刻に関する先覚的な著述である『正統印章備考』がある。篁洲と親交のあった今井順斎も篆刻を嗜んだ。

また細井広沢(一六五八〜一七三五)は、学問を好み、江戸時代を風靡した唐様の基礎を確立した。榊原篁洲・今井順斎・池永一峯らと交遊し、ともに篆字を講述し、篆刻の刻技に優れ、江戸を中心として一派を形成し、わが国の篆刻が勃興する機運を作った。池永一峰(一六六五〜一七三七)は篁洲の門に入り篆刻を善くした。正徳三年(一七一三)のころ『一刀万象』三巻を著し、一世に喧伝された(図5)。篁洲・順斎・広沢・一峯等は、長崎からもたらされた明末清初の今体の刻風である。江戸を中心として大きい勢力を形成したこれらの印人を「初期江戸派」と呼ぶ。

初期江戸派の名家たちにより広められた篆刻趣味は、門弟たちにより世の中に伝えられ栄えた。広沢の門下である三井親和や永井昌玄らは初期江戸派に属する印人である。

また初期江戸派にややおくれ、浪華の方面にも明末清初に流行した方篆雑体を特色とする篆刻の風が行われた。新興蒙所(一六八七〜一七五五)が浪華に出現し、この地の刻風は一変する。俣山・里東白・都賀庭鐘は蒙所の門下であり、これらの印人を「初期浪華派」と呼ぶ。

江戸時代の長崎は、中国文化移入の門戸として重要な地である。この時代の印人は長崎と何らかの関係をもっている。その第一に挙げられるのが、源伯民である。長崎の唐人から刀法を受けた藤永孚、

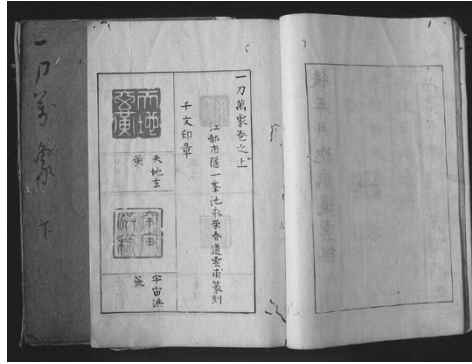


図5 池永一峯『一刀万象』写本

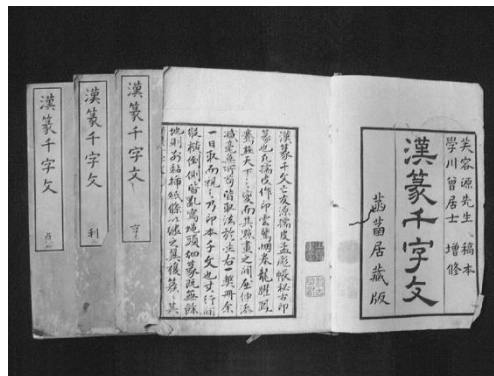


図6 高芙蓉『漢篆千字文』

彼に学んだ田中良庵、そして趙陶斎も長崎出身である。これらの印人を「長崎派」と呼ぶ。

江戸・浪華で今体派の篆刻が流行したように、京都においても広く行われた。殿亞岱・僧悟心・終南・林煥章・柳里恭等が活躍した。京都に現れた印人は、古体派と交流を持った者もいるが、多くは今体派に属するものである。日本の篆刻を考えるにあたり、これまであまり高く評価されることのなかった「近体派」の研究は重要である。「近体派」は、装飾的で俗悪な刻風であるというのが従来の評価だが、華麗な刻風の中に日本的な「雅」の美を見出せる。

江戸中期になると、印聖と称された高芙蓉が出る。芙蓉は学識に優れ、書画篆刻を善くし、画は山水を巧みに描いた。篆刻は彼の最も得意とするところであり、当時流行していた明末清初の低俗な方篆雑体を退けて、秦漢時代の古印を尊び復古を提唱した。ただ、当時は秦漢印の実物が見られることは少なく『顧氏集古印譜』などを鑑賞していたにすぎない。しかし芙蓉は、限られた古鋼印から韻致をくみとり、高雅な刻風を創出した。これにより今体の卑俗な余臭は一掃され、古体派が打ち立てられた。さらに芙蓉は鑑識に精しく、著述に『漢篆千字文』や(図6)、『古今公私印記』の模刻がある。彼は当時著名であった文人や学者と交際したが、中でも柴野栗山・韓大年・池大雅・木村異斎等とは特に親密であった。

高芙蓉の復古的な刻風は、その門下の印人により広く流布された⁽⁴⁾。逸材は京都・大阪・江戸の方面に出た。さらに地方にも彼の印風は波及し、明治の初めに至るまで芙蓉派は栄えた。曾之唯(一七三五―一七九七)は「芙蓉の影子」と称され、師の風韻をよく伝えた。また印学に精しく『印籍考』・『印譜纂』を著した。芙蓉の代表的な

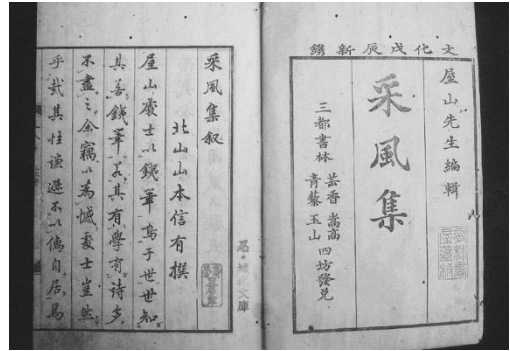


図7 稲毛屋山編輯『采風集』



図8 小俣螭庵関『偏類六書通』

門人を掲げてみる。葛子琴・前川虚舟・紀止・源惟良・初世浜村蔵六・稲毛屋山(図7)・杜俊民・小俣螭庵(図8)・余延年など一々枚挙するに遑のないほどである。

篆刻家において重要な事といえば、篆文に対する知識があるかどうかということであろう。初期江戸派以後、明末清初の卑俗な装飾趣味に陥った篆刻の風は、篆文の字典や篆刻の専門書が刊行されたことにより、正しい方向づけがなされた。高芙蓉一派の尚古主義により、秦漢の古印を宗とする古体の風がおこるのである。古体派の理論は、かれの門下である杜澂の著した『徵古印要』に論じられている。それは秦漢魏晋の印を古体とし印の正制とする。そして唐宋以下を今体とし印の偽制とする。さらに明代の変制を承けた初期江戸派以来の弊風を是正すべきことを説き古体派の理論づけをした⁽³⁾。水戸は心越以来、篆刻に縁の深い土地柄であり、文化・文政年間に立原杏所が現れた。また林十江は画を善くし篆刻に優れた。彼らの刻風は漢印の風致をうまく取り入れている。

文学者の間においても、文化・文政のころから頻繁に書画会が催され、篆刻は彼らにとって教養そして趣味の一つとなった。頼春水・頼山陽・篠崎小竹・青木木米・田辺玄々・貫名海屋などは文人趣味の横溢した風雅な刻風の作を残している。

江戸末期になると、芙蓉派の末流が、単に古体派の風を承け継ぐばかりでなく、新しい要素をつけ加えた独得な一派を形成するものが現れた。細川林谷(一七八二―一八四二)は華美な刻風で知られ、江戸を中心として各地に広がった。また浜村蔵六(二世)は深く古印の法を探り、妙味を尽した。また益田勤斎(一七六四―一八三三)は、初期江戸派の流れを汲みつつ新意を出し近代性を加えた。その養嗣子遇所も家業を継ぎ、益田一家の一派を「浄碧居派」と呼ぶ。

6、近現代(明治時代以降)

江戸時代の後半、篆刻界を風靡していた高芙蓉門流の古体派も、明治になると次第に衰微してきたが、その作風は依然として受け継がれていた。京都の中村水竹は、安政三年勅命を承けて「御府之印」を刻し、慶応三年明治天皇の御璽を刻し、ついで「大日本国璽」を刻した。かれは明治元年印司に任ぜられ、明治政府は官印の制度を復興した。また京都に安部井櫟堂があり、やはり同年印司を拝命した。明治七年小曾根乾堂の後を継ぎ、御璽・国璽の金印を完成した。細川林谷の門から羽倉可亭が出、官家の印を多く刻している。以上の人達を明治の保守派と呼ぶ。

浜村蔵六(三世)・益田遇所に学んで中井敬所が現れた。篆刻は初め明代の蘇嘯民に仿い、次いで上は漢魏六朝に遡ると共に、下は明清諸家の篆法の長所を取り入れ、整齊な刻風で一家をなした。また高適な学識により、印学全般、金石書画の鑑定に従い『印譜考略正統』・『日本印人伝』・『皇朝印典』・『日本古印大成』などの稿本を纏

め上げた。敬所は精緻な刻技による篆刻とともに、近代の印学の基礎を作ったところに功績がある。彼は明治三十九年（一九〇六）、篆刻家として初めて帝室技芸員に選ばれている。門人に田口逸所・岡村梅軒・一世岡本椿所・郡司樸所・河田文所らがいる。

明治元年（一八六八）五月十五日、印章制度が復活されたが『太政類典』にその規定がある。これは『公式令』の規定に基づいたものである。これにより御璽・国璽・府藩県の各印鑑・各省印が製作された。私印については、明治六年（一八七三）七月五日の布告により、同年十月一日以後は人民相互の証書に実印を用いることが課せられることとなった。ここで公私の別なく日常生活において一般に自署捺印が必要となった。

明治から大正にかけての篆刻界は、先に述べた旧来の刻風を墨守する保守派と、中国の新風を取り入れ革新的な印を刻す新派に二分される。保守派に属す人に安部井櫟堂・羽倉可亭・四世浜村蔵六・中井敬所・山田寒山がいる。山田寒山（一八五六―一九一八）は、芙蓉の古体の特色をよく守り、朴訥とした刻風を示している。寒山は多芸多才で、詩・書・画・篆刻・陶芸すべてを善くした。詩は寒山詩の遺響とも言うべきものであり、書は雅味があふれ、画は墨竹が有名である。蘇州寒山寺の住職となり、その復興と夜半鐘の新鑄に献身した。また荃廬・五世蔵六・初世蘭台・椿所と丁未印社を結成し『印章備正』を刊行、豊富な話題を残し、明治・大正の印界における特異な存在であった。

新派は、先駆的な業績を残した人として精緻な刀風を確立した小曾根乾堂、浙派の刻風を慕い、わが国にそれを移入した篠田芥津がいる。また初め高田緑雲に修学したが、中年徐三庚の流麗な作風を追求し⁽⁵⁾、ついで秦漢古印から浙派の技法を取り入れ、華麗多彩な刻風で知られる初世中村蘭台（一八五六―一九一五）が存在する。

彼は木印を得意とし鈕や木額、諸器物などの工芸的な作品を創作し、篆刻工芸に功績を残した。河井荃廬（一八七一―一九四五）は、篠田芥津に篆刻を学んだが、後渡清し呉昌碩に傾倒した。その後、幾度も渡清して中国文物の舶載につとめ、わが国の篆刻界に新風を注入した。また金石学・文字学・中国書画の鑑識に精しく、林泰輔の『亀甲獸骨文字』に多くの資料提供を行った。『書苑』・『支那南画大成』・『支那墨蹟大成』などは彼の監修になる。

他に桑名鉄城・五世浜村蔵六らがあり、中国に渡航し新しい篆刻の風を取り入れ、当時の中国印人の洗礼を受けた。大正から昭和にかけてはさらに、多くの印人が輩出した。古印の蒐集研究に従事し、諸家の長をとり入れて堅実な刻風の園田湖城がいる。山田正平（一八九九―一九六二）は、弱年山田寒山に従って篆刻を学び、後その養嗣子となった。中国に遊学し呉昌碩・徐星州から画と篆刻を学んだ。同郷の会津八一を欽慕し、小川芋銭の影響を受けた。感興を重んじ豪放雄偉な芸境を開いた。二世中村蘭台（一八九二―一九六九）は木印を得意としたが、刻風は装飾的で流媚である。石井雙石は東方書道会に属し、長思印会を主宰し『雕蟲』を発行し後進の指導に尽くした。刻風は奔放で自在である。松丸東魚は独学で秦漢古璽印を研究し、古格ある表現に徹した。保多孝三は洒脱な刻風で知られ、書画にも感性豊かな妙味を示した。この時代は日本篆刻史上一つの黄金期ともいえる時代である。

わが国における明治以降の中国古印の鑑蔵は特筆できる。明治の初年までは秦漢の古印は殆ど知られていなかった。ただ僅かに明人の作った印譜から、その面影を窺っていたにすぎなかった。明治十三年楊守敬が来朝した折、古印を伝えたのが、わが国に伝わった最初である。その頃の鑑賞家・蒐集家に男爵郷純造がいる（図9）。



図9 郷純造画

日本に古印が多く舶載されるようになったのは、辛亥革命（一九一二年）以後である。当時中国の古文物を蒐集購得する人々が輩出し、中でも京都の大谷瑩誠（禿菴）、藤井善助（静堂）、園田穆（湖城）、盛岡の太田孝太郎（夢庵）、東京の中村鉦太郎（不折）、大阪の上野理一（有竹）、讃岐の大西行禮（見山）、神戸の中村準策（依水）などは古印の蒐集とともに印譜も刊行した。

古銅印譜は太田夢庵、園田湖城が最も系統的に蒐集して、太田夢庵の膨大な蒐集の三分の二は横田実（漠南）が襲蔵した。また園田湖城のコレクションの大半も横田実が入手し、その後、太田・園田コレクションのほぼ三分の一は小林斗盒が譲り受けた。また漠南書庫・横田実の収蔵印譜は昭和五十一年に、小林斗盒の収蔵印譜は平成十四・五年に東京国立博物館に寄贈された。

太田夢庵は『漢魏六朝官印考』『同譜録』（一九六七年）を刊行し、大谷瑩誠は『梅華堂印賞』（一九四二年）、また『中国古印図録』（一九六四年）などを刊行した。大西行禮は羅振玉が日本で刊行した『磬室所蔵鉅印』（正統十二本）の古印七二四方を得て、現在は加藤達雄氏が収蔵しており、中村不折のコレクションは書道博物館に収蔵されている。

わが国には一万近い中国古印が収蔵されており、また印譜も豊富に伝えられた。今後古印文字史学の研究がなされ、印学が大成され

ることが期待される。加藤慈雨楼の研究は、封泥に着目し、古印研究に一方向指し示したものといえよう（6）。

印章・篆刻史研究において、刻印と印譜は大切な資料となるが、市島春城や（7）、藤山末吉（鳴堂）などが篆刻に造詣が深く、その価値を見出し、蒐集・保存に努めたことは、特筆しておきたい。単なる数寄者の嗜好ではない。

三 日本の印章・篆刻における特色

筆者はかねてより「日本の印の文字造形に現われた時代性と特色」に関して興味を抱いて来た。その試論の一端を述べておきたい。この問題を考えるにあたり、「文字造形に現われた時代性」（杉村邦彦著『書苑彷徨』二玄社、一九八一年十二月）は、その先駆的業績であり参考になる。文字の造形を規定する要因として、素材・寸法・書体・用途・様式美などが挙げられる。特に様式美に関しては、形・線・空間などが問題点となる。我が国の印は歴代の印章・篆刻を見ても、中国のそれと比較すると、形は不均衡で、線は揺らぎを持ち、空間を大きく開けるのがその特質である。そしてそれは日本の他の芸術美と符合する。次に造形は、印の枠、外縁との関係が指摘できよう。中国の印は、旧来のものは印の縁の制約をそれほど大きく受けてはいない。むしろ一字の形の工夫によるものが多いといえる。日本の印は外縁の制限が強く、文字どうしの引力関係が強い。つまり中国の印は一字の造形美を主とするが、日本の印は外縁が意識された文字群による造形美を主としている。日本の印の特質は大筋においてこのように考える事ができる。

次に朝鮮の文化は、日本の文化と類似点を見出せる。それは中国文化を摂取受容し、独自の変容をもたらす点である。中国の美は堅

固、朝鮮の美は簡素、日本の美は幽美である。中国、日本、朝鮮の美術における様式美は、印にも同様に色濃く見られ、美術は地域性、時代性から逃れられないことの証左となっていると言えよう。

尚、韓国の印章の研究文献に『韓国の印章』（韓国立民俗博物館編著、三和書籍株式会社、一九八七年七月）、『盤龍軒珍藏印譜』（張遇聖編著、弘一文化社、一九八七年六月）がある。韓国の印章の歴史は、金洋東の「韓国印章の歴史」、『韓国の印章』国立民俗博物館、一九八七年七月）に詳しい。

朝鮮時代（一三九二～一九一〇）の官印は明・清の影響で九疊篆（文字の画を幾重にも屈折させて装飾的文字にした篆書）になっており、印材を金・銀・玉・銅・木などに区分して身分や階級の差を表わした。

朝鮮時代の私印は壬辰倭乱（一五九二～一九九）以前の物は芸術的価値は微々たるものであったが、乱後に頻繁な朝・日両国間の交流により、清代の考証学や金石学の学風が導入されるや新しい印風が樹立された。特に韓国書芸の名家である秋史・金正喜（一七八六～一八五六）は、韓国の篆刻を書法や芸術性を持つ次元にまで発展、転換させるのに決定的な役割を果たした（図10）。彼の啓蒙によって十九世紀から二十世紀に入るや文士達が印芸を研究、関心を持つようになり、韓国の篆刻ははじめて書・画と同格の芸術として認識されるようになった。この時代の有名な篆刻家としては、秋史の門人であった小山・吳圭一が最も秀でており、彼の後を継いで葦滄・吳世昌（図11）や愴齋・金台錫などが独創的な刻風を樹立した。このように韓国の篆刻は中国の影響が強く作用して発展しており、芸術的な造形美や価値又は独創性において比肩するものが見られる。

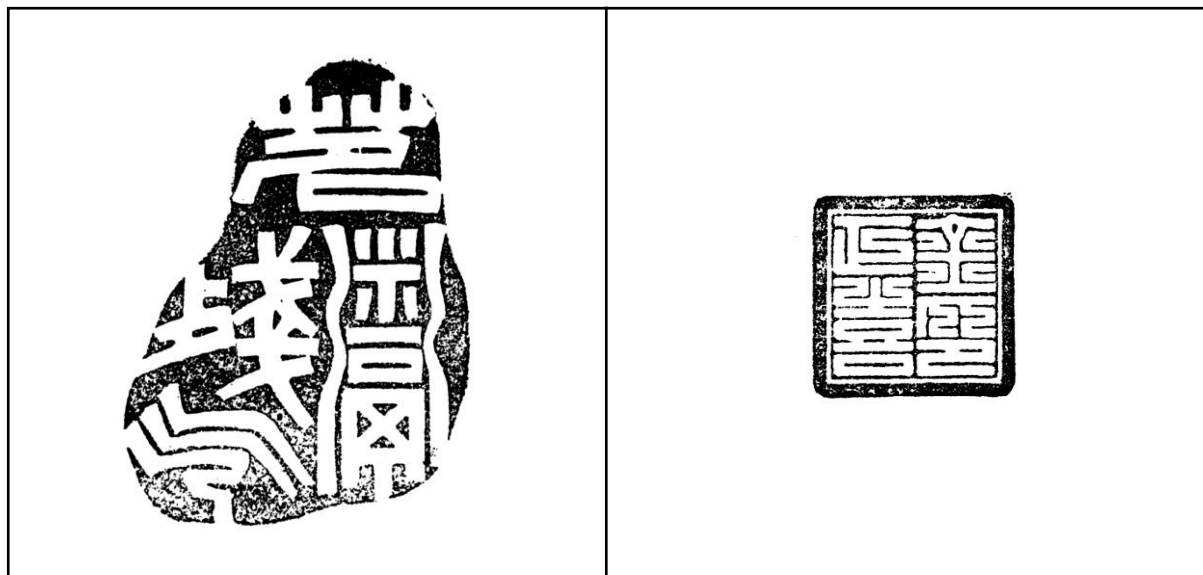


図11 吳世昌刻「茗霽殘氣」
『韓国の印章』（韓国立民俗博物館編）

図10 金正喜刻「金正喜印」
『韓国の印章』（韓国立民俗博物館編）

なお二十世紀後半に入って韓国の固有文字である「ハングル」の使用が普遍化されるや、独特な文字と相俟って造形的な美感は新しい篆刻の世界を開く重要な要素を提供しているといえる。

四 おわりに

印章・篆刻の歴史を通覧して思うことは、これらは歴史、文化の一翼を担っているということである。

そして印章・篆刻の文字造形に現れた時代性は、中国、朝鮮、日本の美術の様式と乖離するものでないことが改めて認識された。朝鮮、日本の印章・篆刻は、中国が主導的役割を果たしているが、それを模倣しつつ、咀嚼しそれぞれの国の独自性を打ち出している。中国の印章は堅固、朝鮮の印章は簡素、日本の印章は幽美である。時代や風土に大きく影響されながら変遷している。また、印章・篆刻は用の美であり、用途に応じてその形が変遷してきていることも注意を要する。日本のハンコ社会事情を考え合わせても、今一度印章や篆刻に目を向けなければなるまい。

印章・篆刻の文字造形に現れた時代性に関する諸問題は、興味あるものといえる。近年、日本の印章・篆刻に関する次の資料・文献が出版されている。

・後藤憲二編『邦人印譜目録』（日本書誌学大系87、青裳堂書店、二〇〇二年五月）

・国立国会図書館著『人と蔵書と蔵書印―国立国会図書館所蔵本から』（雄松堂、二〇〇二年十月）

・高山節也著『松丸東魚蒐集印譜解題』（二玄社、二〇〇九年一月）

・湯浅邦弘著『墨の道 印の宇宙―懷徳堂の美と学問―』（阪大リール9 懷徳堂、大阪大学出版会、二〇〇八年十二月）

・久米雅雄著『はんこ』（ものと人間の文化史178、法政大学出版局、二〇一六年十二月）

【注】

(1) 小林斗盦、西川寧、荻野三七彦、中田勇次郎、神田喜一郎、三村竹清、水田紀久、新関欽哉などの諸先賢は、日本の印章や篆刻、またそれに関する著作がある。ここでは、それを代表する数種を掲げる。

河出孝雄『定本書道全集』別巻印譜篇（河出書房、一九五六年）、西川寧

『書道講座』第六巻篆刻（二玄社、一九七三年）

荻野三七彦『印章』（吉川弘文館、一九六六年）

中田勇次郎『日本の篆刻』（二玄社、一九六六年）

神田喜一郎『中国の古印―その鑑賞の歴史―』（二玄社、一九七六年）

三村竹清『三村竹清集』全一〇巻（青裳堂、一九八五年）

水田紀久『日本篆刻史論考』（青裳堂、一九八五年）

新関欽哉『東西印章史』（東京堂出版、一九九五年）

(2) 肥後細川家は、初代藤孝公から十八代護熙氏と続くが、代々当主の印が、永青文庫に収蔵されている。筆者は、十七代当主護貞氏の依頼により、印章の調査にあたった。

(3) 第七回熊本大学附属図書館特殊資料展 細川家のローマ字印出品目録（熊本大学附属図書館、一九九〇年十一月）

(4) 「明清印学の東瀛伝播―江戸時代、高芙蓉一門の印学研究―」（李中華著・大野修作訳『書法漢学研究』第十三号、二〇一二年七月、書法漢学研究會）

(5) 篠田桃紅「ゆかりのおひと篠田芥津」で芥津のひとと芸術に触れている。

(6) 加藤慈雨楼は、篆刻家園田湖城の高足で、古印の研究に従事した。著に『平盒攷蔵古璽印選』四卷（臨川書店、一九八〇年五月）、『漢魏晋蕃夷印彙例』・『漢魏六朝蕃夷印譜』（丹波屋、一九八六年九月）等がある。

(7) 現早稲田大学会津八一記念博物館所蔵、旧富岡美術館所蔵市島春城印章、筆者は、かつて富岡美術館の依頼で、すべてを押印し、印材を写真に収め以下の論考に纏めた。

・「市島春城の印章(上)」『修美』第一二巻通巻四四号、修美社、一九九三年十月)

・「市島春城の印章(下)」『修美』第一二巻通巻四五号、修美社、一九九四年一月)

その後、青裳堂書店から『春城蔵印』(白取幸子編集、二〇〇二年十月)、早稲田大学会津八一記念博物館から、北川博邦氏監修・浅井京子氏編集『旧富岡美術館所蔵市島春城印章コレクション総目録』(二〇〇八年五月)が刊行された。

結 論

第一節 本研究の成果とその意義

本研究の成果とその意義について各章に添って述べる。

本研究は、日本における篆刻や印章の研究、篆刻家や印譜の、広い視野に立った体系的な研究を目指したものである。その中において重要な研究といえる、山田寒山、山田正平等の事績の調査・研究と作品分析、そして印学の継承とその発展を探るものである。実証的・総合的に考究された本研究は、今後の篆刻研究、篆刻教育研究に一石を投じる成果を挙げていると言える。同テーマの研究は、これまで概説的な紹介や研究に留まっており、資料・文献を駆使した実証的研究は十分といえなかった。本研究は、実証的・総合的研究と述べたように、現在管見に入る限りの資料・文献を取り扱って詳細に論じた。

山田寒山・山田正平は篆刻家で、篆刻の方面からの概説的な研究は多少見られるが、篆刻の美と表現に関する実証的研究、詩・書・画、そして教育面からの研究としては殆ど解明されてこなかった。本研究では、新資料を数多く提示している。また同時代人へのインタビューは価値が高く、筆者の長年に亘る研究の成果といえる。

以上のように、新たな知見を得た点で、また広い観点から論じた点において、その意義が認められる。今後の篆刻・印章研究に貴重な示唆を与えるものだろう。

具体的に本研究の成果とその意義について述べてみたい。

序論は、第一節本研究の目的と意義について、第二節本研究の方法と構成を記述しており、本論文集の主題を述べ、本研究の意義づけを提示したものである。論文の本題への導入といえる。

第一章は、山田寒山・正平の作品の具体例に添って、彼らの篆刻の美と表現に関して、作品例を挙げつつ作品分析を行ったものである。印影の精緻な研究、印面と印影両者の関係性に論及した獨創性は、成果と言える。また作風の変遷に関して触れ、彼の芸術の発展と生成を明らかにした。先人からどういった影響を受け、それを後世にどのように伝えたかに関して言及している。同章は彼らの、篆刻の美と表現、またその価値について新たな知見を提示しており、篆刻芸術の表現史に的確に位置づけるものといえる。

第二章は、山田寒山の实証的・総合的研究である。年譜は現在最も詳しいもので、基礎研究として内容あるものである。数多くの資料・文献を駆使しての、中でも当時の新聞記事を取り扱い、綿密に調査したもので、充実した内容となっている。寒山の芸術における総合的研究であり、篆刻の面からのみでなく、事績は言うに及ばず、詩・書・画を取り扱ったことは、研究に幅を持たせた。印学面においては『印章備正』に関して考究したことは、今後高芙蓉派の印学について研究していく礎を築いている。

第三章は、山田正平の实証的・総合的研究である。正平の实証的・総合的研究は地道な積み重ねの結晶といえよう。

年譜は現在最も詳しいもので、基礎研究として充実したものである。

第四章は、山田正平の教育面における業績について述べている。正平の東京学芸大学で行なわれた「篆書・篆刻」講義に関する研究は、これまで殆ど触れられなかった課題であり、その意義は大きい。

今後の大学書道教育における篆刻教育の在り方、高等学校芸術科書道の篆刻教育を考える上で意義がある。東京学芸大学における「篆書・篆刻」の講義を通して、当時の学生へのアンケート調査やインタビューが行われ、それを精査したものとなっており、教育の本来の在り方を考えるのに役立つ。正平の教育者としての実像の解明といえる内容である。

第五章は、わが国の印人伝における嚆矢と言える中井敬所の『日本印人伝』をさまざまな文献・資料により拾遺し補訂した研究である。篆刻の専家に係わらず、篆刻に関わる傍系の文人・芸術家を取り扱ったことは成果である。第一節小曾根乾堂の篆刻と篆刻論、第二節富岡鉄斎の篆刻と篆刻論、第三節会津八一の篆刻と篆刻論、第四節中川一政の篆刻と篆刻論、第五節西川寧の篆刻と篆刻論、第六節保多孝三の篆刻と篆刻論で構成された本章は、本研究をより幅広いものとしている。

第六章は、日本篆刻史の中で最も重要な篆刻家であり、日本の印聖と目される高芙蓉の研究として、以下の節に分け、実証的・総合的研究を行った。第一節高芙蓉の顕彰と墓碑について、第二節中井敬所の高芙蓉研究であり、これまでの高芙蓉研究を前進させている。

第七章は、中国・日本の印史とその特色に関して述べている。中国と日本に分け、各々の印章史および篆刻史を概観し、その特色に関して考察を加えた。また本研究を進めるために必要な基礎資料・文献、印譜や図録類、先学の研究業績を述べている。基礎研究として価値がある。

結論は、第一節本研究の成果とその意義について述べ、第二節本研究に残された課題と展望について明示しており、本論文集の総括である。

附章は、山田寒山・正平に係る貴重な研究資料の紹介である。

第一節 明治・大正期新聞資料における山田寒山関連記事見出し一覧稿、第二節 園田湖城宛富岡鉄斎書簡翻刻並びにインタビュー「富岡鉄斎を語る①中田勇次郎・②小高根太郎」。第三節 桜井定市宛山田正平書簡翻刻、第四節 山田家蔵画日記翻刻三種である。桜井定市宛書簡、山田家蔵画日記翻刻は、山田家に残された画帖日記や、正平と交友を持った諸家との関係による書簡の翻刻は『山田正平先生篆刻講義ノート』やインタビューとともに、寒山・正平の人と芸術を語る上で得難い資料といえる。これらの研究資料は、寒山・正平の研究を、より実証的・総合的な研究を進めるにあたり貴重なものといえる。

最後に、「初出一覧」と「引用・参考文献一覧」を呈し、本論文集を執筆するにあたっての基礎資料・文献を明らかにした。

本研究の意義は、篆刻は、歴史、文化、芸術の一翼を担っており、篆刻家が日中の書道史において果たした役割は少なくなく、そこに真っ向から取り組んだところにある。書道史を語る上で、篆刻や篆刻家の存在と功績は欠かせないものである。中国に比し、十分とは言えない本邦の篆刻家の研究は、学問的意義を有している。

本研究では、適切な研究資料やデータの蒐集と分析がなされており、今後の篆刻や篆刻家の研究に寄与する点は大い。

また、繰り返しになるが、本研究は、日本の印学の体系化を目指しており、その書学・書道史の範疇をこえて、美学・美術史、歴史考古学、文化史等に裨益する内容となっている。

本研究は、これまで研究が十分とは言えなかった日本の近現代篆刻に焦点を当てたもので、その実証的かつ総合的な研究は、これまでにない水準に達している。精細な文献研究を基にフィールドワークを重ね、近現代日本の篆刻家や篆刻研究の深化と発展、またこ

れからの芸術科書道の教員養成における篆刻教育を遠望する上で、
大きな示唆を与える成果を示したものと考える。

第二節 本研究に残された課題と展望

本研究に残された課題と展望について各章に添って述べる。

第一章は、山田寒山・正平の作品の具体例に添って、彼らの篆刻の美と表現に関して、作品例を挙げつつ作品分析を行ったものである。印影の精査な研究、印面と印影両者の関係性など、今後更に他の篆刻作品を取り上げ、同様の研究を検討していくことを課題としたい。

また正平の作風の変遷に関して触れ、彼の芸術の発展と生成を明らかにし、そして先人からどういった影響を受け、それを後世にどのように伝えたかに関しても更に言及する。

第二章は、山田寒山の実証的・総合的研究である。

年譜は今後も更に基礎資料の蒐集・整理を進めるとともに、実証的な考察を加えてゆきたい。新たな資料を加えて、より詳しい年譜を作成すべく編集したく思う。

印学面においては、今後は、『印章備正』と杜澂の『徵古印要』七巻との関係をより精査するとともに、甘暘の『印正附説』との関連を調査し、これに根本があると指摘される高芙蓉派の印学について考究したい。

第三章は、山田正平の実証的・総合的研究である。

正平は、詩・書・画・篆刻四絶を並列して研鑽を積んでおり、正平の芸術について考えるにあたり、詩・書・画・篆刻とすべてにわたり考察することが重要である。本来この四種は切り離して考えるべきものではない。今後四絶の関連に目を向けながら研究したい。

正平周辺の人々との交友を探ることにより得られた知見は、今となつては鬼籍に入られた方も多く、得難い資料と評価できるものである。筆者が四〇数年に亘り調査・研究してきた賜といえよう。正平と同時代人の書家で評論家の安藤掲石は「優れた芸術が生まれる要因は必ずしも一様ではないだろう。しかしその環境や人との繋がりは大きい意味を持つ。彼の逸格の書境も稀有の人格も、おそらくは人間関係に拠る所が多い」と述べる。正平の人的環境は豊かで、この方面から本研究を組み立て得たことは、より内容に具体性を持たせられたと言えよう。今後も、周辺の人々とその交友に関して、正平と交流した同時代人にインタビューや書簡にて質問した資料を精査し、彼らの交友からみられる実像を探ってみたい。

第四章は、山田正平の教育面における業績について考究したものである。東京学芸大学における「篆書・篆刻」の講義を通して、当時の学生へのアンケートやインタビューをより精査し、教育の本来の在り方を考えてみたい。また『山田正平先生篆刻講義ノート』を読み込み、正平の教育と印学・篆刻学について考察することを課題としたい。

第五章は、彼らが注目した篆刻家や芸術家の篆刻と篆刻論について研究した。本章で取り上げた小曾根乾堂・富岡鉄斎・会津八一などの諸家を、再度篆刻面とともに、より広く芸術の面から探求したい。

第六章は、高芙蓉の研究である。今後印譜や印材、書画作品など

を精査してまいりたい。

第七章は、印章・篆刻の歴史を概観しており、これらは歴史、文化の一翼を確実に担っているということを改めて想起させる。中でも、印章・篆刻の文字造形に現れた時代性は、中国、朝鮮、日本の美術の様式と乖離するものでないことを認識させるもので、今後多くの具体例でもって解明したい。日本のハンコ社会事情を考え合わせても、今一度印章や篆刻に目を向けなければなるまい。篆刻学は、まことに広い分野を包含する興味あるテーマであり、今後、実証的・総合的な研究を進めたい。

附章は、山田家に残された他の『画日記』、『山田正平先生篆刻講義ノート』、諸家からの書簡を精査し、正平の事績や篆刻観、諸賢との交友を明らかにしていきたい。

総論として、日本における印学の研究、印章や篆刻そして印人や印譜の、広い視野に立った体系的な研究はまだ充分なされているとは言えない。本研究は、日本の印章や篆刻の歴史的、文化史的な解明を目的としており、総括的には日本の印学の体系化を目指している。これは書学・書道史の対象としてだけではなく、美学・美術史、歴史考古学、文化史等その裨益するところは甚だ大きいと思われる。このように、印学・篆刻学は、まことに広い分野を包含する興味あるテーマであり、今後、さらに実証的・総合的な研究に取り組んでいくことを課題としたい。

附章 山田寒山・正平に関わる研究資料

第二節 明治・大正期新聞資料における山田寒山関連記事見出し一覧稿

明治・大正期新聞資料における山田寒山関連記事見出し一覧を作成した。本一覧は「日本印人研究―明治・大正期新聞資料における山田寒山関連記事見出し一覧稿―（『国語国文研究と教育』第四十三号、熊本大学教育学部国文学会、平成十八年二月）を大幅に加筆・修正したものである。

凡例

- 一、劣化などで不鮮明な見出しや日付は、可能な限り前後の記事から判読した。
- 一、見出しは、内容により加筆・修正した項目がある。
- 一、表記は、新字体と旧字体を併用した。
- 一、配列は原則として年月日順としたが、スクラップブック資料掲載に拠った項目がある。

新聞見出し	新聞名	発行年月日
皆香園茗集聯句	京華日報	M33・6・9
廣島家の新婚披露宴	東京日日新聞	M33・6・10
寒山寺の開帳式	東京朝日新聞	M33・6・19
よみうり抄 寒山寺開帳	讀賣新聞	M33・6・19
寒山寺の開帳	国民新聞	M33・6・19
姑蘇寒山寺	日本	M33・6・19
すゞみ台寒山寺の副住職が…	二六新報	M33・6・19
寒山寺	報知新聞	M33・6・19
銀座の寒山寺	京華日報	M33・6・19
見るま、聞くま、	やまと新聞	M33・6・19
寒山寺の開帳	新日本	M33・6・19
寒山寺の開帳	富士新聞	M33・6・19
よろづ見聞録 寒山寺の開帳	萬新報	M33・6・19
寒山寺の開帳式	電光	M33・6・19
寒山寺の開帳	毎夕新聞	M33・6・19
寒山寺開帳余聞	毎日新聞	M33・6・20
東京の寒山寺	東京日日新聞	M33・6・20
陶友会の庵開き 寒山寺開帳陶友会	人民	M33・6・20
寒山寺の開帳 陶友会聯句	国民新聞	M33・6・20
見るま、聞くま、	やまと新聞	M33・6・20
風流の茶	報知新聞	M33・6・20
寒山寺開帳	京華日報	M33・6・20
寒山寺開帳と陶友会聯句	東京朝日新聞	M33・6・21
寒山寺開帳	日本	M33
山田寒山姑蘇城外寒山寺…	信濃毎日新聞	M33・6・21
雜報 銀座街頭の寒山寺	奥羽日日新聞	M33・6・21
寒山寺	讀賣新聞	M33・6・24
文芸雜俎 山田寒山氏	太平洋新聞	M33・6・25
東京銀座裏なる寒山寺にては…	若越新聞	M33・6・23

新聞見出し	新聞名	発行年月日
寒山寺の開帳式	東北日報	M33・6・21
行雲流水 山田寒山新たに庵を…	信濃毎日新聞	M33・6・22
黄梅雨 寒山寺開帳式の詩俳	東北日報	M33・6・22
森三溪氏…	讀賣新聞	M33
森猿男氏…	讀賣新聞	M33・7・2
寒山寺開帳と陶友会聯句	陶器新報85	M33・7・1
俳句	時事新報	M33・7・3
陶印及陶器扁額傳猷	徳嶋毎日新聞	M33・6・30
会稽之夢 西村酔処	讀賣新聞	M33・7・3
会稽之夢	讀賣新聞	M33・7・4
会稽之夢	讀賣新聞	M33
会稽之夢	大阪毎日新聞	M33・7・2
会稽之夢	大阪毎日新聞	M33・7・3
会稽之夢	大阪毎日新聞	M33・7・5
会稽之夢	讀賣新聞	M33・7・7
会稽之夢	讀賣新聞	M33
会稽之夢	大阪毎日新聞	M33・7・6
七月七日皆香園茗集聯句	京華日報	M33・7・10
よみうり抄 寒山寺の碧巖提唱	讀賣新聞	M33・7・12
寒山寺の碧巖提唱	中央新聞	M33・7・12
見き記 銀座1丁目…	憲政新聞	M33・7・13
清溪茗集聯句十四律	京華日報	M33・7・10
詩国 野口寧斎撰	新日本	M33・7・17
詩国 野口寧斎撰	新日本	M33・7・17
寒山寺の碧巖提唱	通佛	M33・7・18
聯珠冠句抄	新日本	M33・7・18
俳句	時事新報	M33・7・19
俳句	時事新報	M33・7・25

陶友会	人民	M33・10・31
寒山寺の秋季陶友会	東京日日新聞	M33・10・31
寒山寺の席上焼	東京朝日新聞	M33・10・31
秋季陶友会	報知新聞	M33・10・31
そのをり、、秋季陶友会	建国新報	M33・10・31
秋季陶友会	都新聞	M33・10・31
秋季陶友会	中央新聞	M33・10・31
よみうり抄 土俗談話会	讀賣新聞	M33・10・31
懸賞俳句当選披露		M33
名士小兒に似たり（かなめ屋の祝宴）	讀賣新聞	M33・10・24
かなめ屋の祝宴	中央新聞	M33・10・24
大橋乙羽氏の園遊会	中央新聞	M33・9・24
井上伯の陶器改良談	平等新報	M33・9・5
一半兒会	萬朝報	M33・9・18
酣雪亭聯句	人民	M33・9・15
井上伯の陶器改良談	平等新報	M33・9・5
軍事俳句披露(1)	二六新聞	M33・8・17
庚子八月十一日長蛇亭印会席上聯句	人民	M33・8・11
よみうり抄横浜の陶友会	讀賣新聞	M33・8・10
俳句	時事新報	M33・8・10
鉄筆陶印風火仙窯寒山寺の開帳	團圓珍聞1273号	
皆香園茗集聯句	京華日報	M33・8・7
皆香園茗集聯句 八月四日	国民新聞	M33・8・7
陶製大看板	讀賣新聞	M33・8・5
聯珠冠句抄	新日本	M33・8・3
聯珠冠句抄	新日本	M33・8・1
詩国 野口寧斎撰	新日本	
寒山子の鐘ではない陶製	團圓珍聞1268号	
京橋茶話会	日本	
新聞見出し	新聞名	発行年月日

新聲 玩球狂仙 陶友会	東京日日新聞	M34・1・29
陶友小集	東京朝日新聞	M34・1・27
陶友会小集	国民新聞	M34・1・27
新年陶友会	毎日新聞	M34・1・27
新年陶友会小集会	日出国新聞	M34・1・27
新年陶友会	富士新聞	M34・1・27
寒山寺の新年陶友会	中央新聞	M34・1・27
をちこち 陶友会	二六新報	M34・1・27
寒山寺の新年陶友会	讀賣新聞	M33・1・27
陶友会	日本	M33・1・27
うしの春	東京朝日新聞	M33・1・12
小題大做	二六新報	M33・1・9
庚子除夕祭詩龕祭詩席上聯句	国民新聞	M33・1・5
山田寒山氏帰京	福島新聞	M33・12・26
山田寒山師 茶巡錫		M33
山田寒山氏招待会		M33
白河の寒山寺文墨会	東京朝日新聞	M33・12・25
よみうり抄 白河に於ける寒山寺勸化	讀賣新聞	M33・12・24
寒山寺文墨会	福島新聞	M33・12・9
よみうり抄 寒山曳錫	讀賣新聞	M33・12・9
井上伯の陶器改良談	陶器商報	M33・11・1
白河の寒山化縁	中央新聞	M33・11・17
秋季陶友会	千代田日報	M33・11・1
寒山寺の陶友会	実業新聞	M33・11・1
千草の花 陶友会	毎日新聞	M33・11
秋季陶友会	日本	M33・11
寒山寺の秋季陶友会	東京日日新聞	M33・10・31
時事新報	時事新報	M33・10・31
京華日報	京華日報	M33・10・31
新聞見出し	新聞名	発行年月日

	新聞見出し	新聞名	発行年月日
寒山寺		日本	M 34・1
寒山寺の移転	東京朝日新聞		M 34・1・28
寒山寺	毎夕新聞		M 33・2・
寒山和尚小梅に籠る	実業新聞		M 34・2
寒山寺の移転	読賣新聞		M 34・2・1
向島の寒山寺	民聲		M 34・2・1
寒山寺の移転	国民新聞		M 34・2・2
向島の寒山寺	都新聞		M 34・2・3
墨田堤外寒山寺	東京日日新聞		M 33・2・3
筆の雫	東京朝日新聞		M 34・2・17
濱街花邸：	国民新聞		M 34・2・9
山田寒山寺和尚を：	信濃毎日新聞		M 34
百花園に梅を見る 眠石主人	櫻新聞		M 34
東上日記抄	信濃毎日新聞		M 34・3・17
百花園に梅を見る 眠石主人	下野日日新聞		M 34・3・19
東上日記抄 露香	信濃毎日新聞		M 34・3・19
集会 談泊会	日本		M 34・3・24
東上日記抄	信濃毎日新聞		M 34・3
寒山寺の春期陶友会	中央新聞		M 34・4・4
春期陶友会	東京朝日新聞		M 34・4・5
例の山田寒山氏は：	富士新聞		M 34・4・5
陶友会	国民新聞		M 34・4・5
陶友会	毎夕新聞		M 34・4・5
よろづ見聞録 春期陶友会	萬朝報		M 34・4・4
春期陶友会	社会新報		M 34・4・5
春期陶友会	東京日日新聞		M 34・4・6
春季陶友会	人民		M 34・4・7
三圍湖畔の陶友会	讀賣新聞		M 34・4・8
陶友会の楽焼	日出国新聞		M 34・4・8

	新聞見出し	新聞名	発行年月日
春季陶友会		都新聞	M 34・4
春期陶友会	日本		M 34・4・9
新聲 凝風雅 飲仙：	東京日日新聞		M 34・4・9
三圍湖畔の陶友会	讀賣新聞		M 34・4・9
寒山楽焼の釘彫	東京朝日新聞		M 34・4・22
永井禾原詩 寒山翁：	東京朝日新聞		M 34・4・22
風の向島	讀賣新聞		M 34・4・13
寒山寺の移転	東京朝日新聞		M 34・1・28
陶友会	国民新聞		M 34・4・5
文苑 寄題寒山寺依寧斎君韻	太平洋		M 34・6・24
山田寒山の行脚	東京朝日新聞		M 34・9・8
山田寒山翁	信濃毎日新聞		M 34・9・12
小庵雜記 山田寒山和尚と対す	信濃毎日新聞		M 34・9・13
山田寒山翁の来高	高田新聞		M 34・9・15
日本青年会再び大会について	日本		M 34・9・14
山田寒山翁	信濃毎日新聞		M 34・9・14
山田寒山翁	高田新聞		M 34・9・19
山田寒山翁	高田新聞		M 34・9・17
山田寒山翁	新潟日報		M 34・9・18
陶窯家山田寒山	東北日報		M 34・9・18
鎌倉の左佛菴	東北日報		M 34・9・22
山田寒山	東北日報		M 34・9・24
鉄筆家山田寒山氏来港	新潟日報		M 34・9・24
新潟通信猩々亭主人	山梨民報		M 34・9・26
天籟詩屋主人批 小澤幸民ぬし：	東北日報		M 34・9・28
山田寒山翁	信濃毎日新聞		M 34・9・29
鉄筆家山田寒山氏来港	新潟日報		M 34・9・22
文苑 諏訪に入りて阿心庵に草鞋を解：	信濃毎日新聞		M 34・10・12
山田寒山翁	信濃毎日新聞		M 34・10・1

新聞見出し	新聞名	発行年月日
山田寒山翁の帰京	中央新聞	M 34・10・31
雅会	信濃日報	M 34・10・22
秋季陶友会	團圓珍聞	M 34・11・16
陶友会	都新聞	M 34・11・4
秋季陶友会	讀賣新聞	M 34・11・14
陶遊会	讀賣新聞	M 34・10・14
今日の樂事…	日本	M 34・10・17
よろづ見聞録 陶友会	萬朝報	M 34・11・15
秋季陶友会	毎夕新聞	M 34・11・15
秋季陶友会	中央新聞	M 34・11・15
山田寒山の秋季陶友会	日本	M 34・11・16
美術雑誌 陶友会	報知新聞	M 34・11・16
をちこち 二六山人へ篆刻寄贈	二六新報	M 34・11・17
秋季陶友会	讀賣新聞	M 34・11・14
秋季陶友会	実業新聞	M 34・11・19
秋季陶友会	実業新聞	M 34・11・15
向島の陶友会	東京朝日新聞	M 34・11・14
文苑	信濃毎日新聞	M 34
寒山鉄筆	高田新聞	M 35・2・7
4月8日誕生会香語		
愛宕山の陶友会	中央新聞	M 35・2・15
四月八日誕生会香語 寒山山田潤		
陶器学会	毎日新聞	M 35・4・5
静湖居士大練忘香語	東北	M 35・4・10
毎日譚海 山田寒山 (一)	毎日新聞	M 35・3・2
毎日譚海 山田寒山 (二)	毎日新聞	M 35・3・3
毎日譚海 山田寒山 (三)	毎日新聞	M 35・3・4
毎日譚海 山田寒山 (四)	毎日新聞	M 35・3・5

新聞見出し	新聞名	発行年月日
夫婦持 同行四人	宇都宮下野日日新聞	M 35・3・15
文壇雑誌 宙外		
よみうり抄 秋季陶友会	讀賣新聞	M 35
陶友会	萬朝報	M 35・4・3
陶友会	時事新報	M 35・4
をちこち 花下の陶友会	二六新報	M 35・4・3
寒山寺の春期陶友会	東京日日新聞	M 35・4・3
寒山寺の陶友会	東京朝日新聞	M 35・4・3
寒山寺の春期陶友会	中央新聞	M 35・4・3
日本聯合医学会	時事新報	M 35・4・4
三圍の陶友会	実業新聞	M 35・4・6
中外倶楽部 花の命	中外商業新報	M 35・4・3
日本聯合医学会	中外商業新報	M 35・4・5
陶器学会の春季大会	中央新聞	M 35・4・29
花の波	毎日新聞	M 35・4・8
陶器の染付 (一) (陶器学会に於ける今泉雄作氏講話)	国民新聞	M 35・5・9
陶器の染付 (二) (陶器学会に於ける今泉雄作氏講話)	国民新聞	M 35・5・10
杏林餘影	日本医事週報	M 35・1・1
皆香園茗集聯句	京華日報	
香道の話 (三二) 香木の事	讀賣新聞	M 35・6・27
香道の話 (三四) 香木の事《続》	讀賣新聞	M 35・7・13
香道の話 (三五) 香木の事《続》	讀賣新聞	M 35・7・16
香道の話 (三六) 香木の事《続》	讀賣新聞	M 35・7・18
香道の話 (三七) 香木の事《続》	讀賣新聞	M 35・7・22
香道の話 (二九) 香枕の事	讀賣新聞	M 35・6・17
香道の話 (三一) 香を聞くといふ詞の事	讀賣新聞	M 35・6・26
香道の話 (三七) 香木の事《続》	讀賣新聞	M 35・6・27
香道の話 (一)	讀賣新聞	M 35・3・25
香道の話 (二)	讀賣新聞	M 35・3・26

	新聞見出し	新聞名	発行年月日
	香道の話(三) 供香の事	讀賣新聞	M 35・3・27
	香道の話(四) 空香の事	讀賣新聞	M 35・3・28
	香道の話(五) 空香故実の事	讀賣新聞	M 35・3・29
	香道の話(六) 衣香の事	讀賣新聞	M 35・3・30
	香道の話(七) 衣香の事	讀賣新聞	M 35・3・31
	香道の話(八) 翫香の事	讀賣新聞	M 35
	香道の話(九) 翫香の事《続》	讀賣新聞	M 35
	香道の話(十) 翫香の事《続》	讀賣新聞	M 35
	香道の話(十一) 翫香の事《続》	讀賣新聞	M 35
	香道の話(十二) 翫香の事《続》	讀賣新聞	M 35
	香道の話(十三) 翫香の事《続》	讀賣新聞	M 35
	香道の話(十四) 翫香の事《続》	讀賣新聞	M 35
	香道の話(十五) 香道諸流の事	讀賣新聞	M 35
	香道の話(十六) 香道諸流の事(補遺)	讀賣新聞	M 35
	香道の話(十七) 名香の事	讀賣新聞	M 35
	香道の話(十九) 組香道具の事	讀賣新聞	M 35
	香道の話(二十) 組香道具の事《続》	讀賣新聞	M 35
	香道の話(二十一) 組香道具の事《続》	讀賣新聞	M 35
	香道の話(二十二) 組香道具の事《続》	讀賣新聞	M 35
	香道の話(二十三) 組香道具の事《続》	讀賣新聞	M 35
	香道の話(二十四) 灰押方の事	讀賣新聞	M 35
	香道の話(二六) 香拵へ寸法の事	讀賣新聞	M 35
	山田寒山翁の開店	都新聞	M 40・3・17
	寒山寺の記念品	東京日日新聞	M 40・3・17
	寒山寺の博覧会土産	東京毎日新聞	M 40・3・17
	よもやま 博覧会記念土産品	萬朝報	M 40・3・18
	寒山翁と博覧会	二六新聞	M 40・3・18
	寒山寺の趣向	日本新聞	M 40・3・18
	博覧会記念の帙形小箱	東京朝日新聞	M 40・3・18

	新聞見出し	新聞名	発行年月日
	博覧会記念土産	時事新聞	M 40・3・18
	山田寒山和尚の新商法	中央新聞	M 40・3・18
	博覧会記念の帙形小箱	報知新聞	M 40・3・19
	博覧会の記念土産	やまと新聞	M 40・3・18
	博覧会記念の小箱	国民新聞	M 40・3・21
	無声無煙の祝砲	二六新聞	M 40・3・23
	三橋の六阿弥陀常楽院の…	都新聞	M 40・3・28
	鉄筆 山田寒山篆柳緑花紅	国民新聞	M 40・4・7
	寒山寺の鐘 大狂生	国民新聞	M 40・4・8
	寒山詩 後塵生	国民新聞	M 40・3・31
	随鷗吟社第三次大会聯句	国民新聞	M 40・4・13
	鉄筆 阿波廣山古山 雲無心 寒山老納云…	国民新聞	M 40・4・14
	漢詩壇 随鷗吟社第三次大会聯句	讀賣新聞	M 40・4・15
	随鷗吟社第三次大会聯句	萬朝報	M 40・4・16
	閑題休話 鉄筆界の奇人…	国民新聞	M 40
	山田寒山和尚ハ…	萬朝報	M 40・4・21
	寒山一夕話(一)	北越日報	M 40・4・19
	山田寒山氏 一昨日…		
	寒山一夕話(二)	北越日報	M 40・4・20
	鉄筆 寒山田潤作 吉福仿漢印 寒山自注…		
	寒山一夕話(三)	北越日報	M 40・4・21
	寒山一夕話(五)	北越日報	M 40・4・23
	釋釋松樓の一夕 木舌		M 40・4・25
	鉄琴遺韻(一) 山田寒山氏談		M 40・4・27
	鉄琴遺韻(三) 山田寒山氏談		M 40・4・28
	鉄琴遺韻(四) 山田寒山氏談		M 40・4・29
	鉄琴遺韻(五) 山田寒山氏談		M 40・4・30
	鉄琴遺韻(六) 山田寒山氏談		M 40・5・1
	鉄琴遺韻(七) 山田寒山氏談		M 40・5・2

	新聞見出し	新聞名	発行年月日
鉄琴遺韻（八）	山田寒山氏談		M 40・5・3
鉄琴遺韻（九）	山田寒山氏談		M 40・5・4
鉄筆 紀伊北條己山 一山 一水 寒山老納云…	国民新聞		M 40・5・5
文苑 余曾游清国…			
津軽家の結婚披露	東京日日新聞		M 40・5・5
伊豆及伊東（一）	国民新聞		M 40・5・6
伊豆及伊東（二）	国民新聞		M 40・5・8
現今書家篆刻家歌人番付	国民新聞		M 40・5・12
文苑随鵬吟社第二十九次例集聯句	東京日日新聞		M 40・5・20
閑題休話 又少し定規に…	国民新聞		M 40
姑蘇城外寒山寺の…			
百人一話（一記者）	山田寒山氏の篆刻流派談（上）	東京日日新聞	M 40
百人一話（二記者）	山田寒山氏の篆刻流派談（中）	東京日日新聞	M 40・10・25
百人一話（三記者）	山田寒山氏の篆刻流派談（下）	東京日日新聞	M 40
寒山寺鐘再鑄	やまと新聞		M 43・3・19
寒山寺梵鐘鑄造	東京日日新聞		M 43・3・20
楓橋夜泊詩の梵鐘	東京朝日新聞		M 43・3・20
寒山寺の夜半鐘	国民新聞		M 43・3・21
寒山寺の鐘	時事新聞		M 43・3・21
寒山寺の夜半鐘	国民新聞		M 43・3・21
寒山寺鑄鐘計画	大阪朝日新聞		M 43・3・22
寒山寺の夜半鐘	長野新聞		M 43・3・21
寒山寺夜半鐘再建	中外新聞		M 43・3・24
寒山寺の鐘	日本新聞		M 43・3・24
清国蘇州の寒山寺	山形新聞		M 43・3・23
寒山寺夜半鐘の再建	峡中新報		M 43・3・24
寒山寺の夜半鐘	信濃毎日新聞		M 43・3・24
寒山寺の梵鐘	秋田魁新聞		M 43・3・24
再び寒山寺の鐘に就て	長野新聞		

	新聞見出し	新聞名	発行年月日
寒山寺の夜半鐘		報知新聞	M 43・3・25
寒山寺夜半鐘の再建		峡中新聞	M 43・3・28
寒山寺梵鐘再鑄		北越新報	M 43・3・27
姑蘇城外の鐘		中央新聞	M 43・3・27
姑蘇寒山寺		二六新聞	M 43・3・27
夜半鐘分身の頒布		東京朝日新聞	M 43・3・28
寒山寺の夜半鐘		長野新報	M 43・3・28
夜半鐘の再鑄		讀賣新聞	M 43・3・27
又聞き		東京毎日新聞	M 43・3・29
寒山寺の分身鐘		都新聞	M 43・3・30
寒山寺の夜半鐘		新潟新聞	M 43・3・23
寒山寺夜半鐘の再建		河北新聞	
故伊藤公の書		北越新報	M 43・3・29
紙のしづく 寒山寺鐘再鑄のこと…		北越新報	M 43・3・29
寒山寺梵鐘の再建		福岡民友新聞	M 43・3・25
寒山寺の鐘再建		大阪朝日新聞	M 43・3・30
山田寒山氏は…		讀賣新聞	M 43・3・31
寒山寺鐘の再鑄		松陽新聞	M 43・3・23
寒山寺夜半鐘の再建「千古の風流」		東京二六新報	M 43・3・31
寒山寺の鐘		北越新報	M 43・3・25
寒山寺の夜半鐘		鹿兒嶋新聞	M 43・3・26
寒山寺梵鐘再建		濱松新聞	M 43・4・1
寒山寺梵鐘の分身		日本新聞	M 43・4・2
寒山寺夜半鐘の再建「千古の風流」		三重毎日新聞	M 43・3・31
寒山寺梵鐘再建		濱松新聞	M 43・4・1
いろいろ草(4) 姑蘇寒山寺…		福島民報新聞	M 43・4・1
寒山寺夜半鐘の再建		弘前新聞	M 43・4・2
寒山化縁		福島新聞	M 43・4・1
姑蘇城外の鐘		海南新聞	M 43・3・31

新聞見出し		新聞名	発行年月日
寒山寺鐘の建立		横浜貿易新聞	M 43・4・5
寒山寺梵鐘の鑄造		上州新報	M 43・4・1
寒山寺の鐘		上野日日新聞	M 43・4・7
寒山梵鐘分身の配附		能代新聞	M 43・4・4
千古の風流 寒山寺夜半鐘の再建		讃岐日日新聞	M 43・4・2
故伊藤公と寒山化縁		毎日新聞	M 43・4・8
梵鐘再建の事を…			
寒山寺夜半鐘		信濃日報	M 43・4
いろいろ草(4)蘇堂		福岡民報	M 43・4・1
寒山寺の梵鐘		小樽新聞	M 43・4・2
陶友会は…		萬朝新聞	M 43・4・9
寒山寺鐘に就て		教海新聞	M 43・4・5
寒山寺梵鐘の再建		南勢新報社	M 43・4・6
寒山寺の夜半鐘		佛都新報社	M 43・4・11
寒山寺の夜半鐘		扶桑新聞	M 43・4・6
寒山寺梵鐘再建		徳嶋日日新聞	M 43・4・9
寒山寺山の夜半鐘		伊勢新聞	M 43・4・8
清国蘇州寒山寺の梵鐘再建		北海タイムス	M 43・4・6
寒山寺の梵鐘		馬関毎日新聞	M 43・4・13
風聞録 上野公園に…		国民新聞	M 43・4・16
蘇州寒山寺再興		京城日報	M 43・4・8
滞京の観光団 電信や電話に驚倒す		国民新聞	M 43・4・18
寒山夜半鐘		新□時事	M 43・4・20
満州観光団の来観		東京朝日新聞	M 43・4・20
山田寒山翁を訪ふ 在京一記者		海南新聞	M 43・4・10
這入って行く通路は…		報国新聞	M 43・4・8
小野湖山翁逝く			M 43・4・13
寒山寺梵鐘再建		大連満州日日新聞	M 43・4・28
寒山寺夜半鐘		信濃佐久新聞	M 43・4・21

新聞見出し		新聞名	発行年月日
寒山の陶友会		中外商業新報	M 43・4・22
応接室 山田寒山師		東京毎日新聞	M 43・4・22
一昨日の観光団		東京朝日新聞	M 43・4・26
奉天観光団の一行		東京日日新聞	M 43・4・26
美人軍の活動 同文会の満州観光団		国民新聞	M 43・4・26
当選鉄筆 丁美印社選 村田蔚堂 時中		国民新聞	M 43・4・26
ハガキだより 此間質問が…		国民新聞	M 43・4・27
寒山作「藤公の鐘」		中外商業新報	M 43・5・12
風聞録 正宗徳三郎氏は…		国民新聞	M 43・5・12
東宮上野行啓		二六新聞	M 43・5・19
東宮上野行啓		やまと新聞	M 43・5・19
東宮上野行啓 美術工芸品の台覧		中央新聞	M 43・5・19
東宮殿下の展覧会行啓		国民新聞	M 43・5・19
青葉の上野 東宮行啓と展覧会		東京朝日新聞	M 43・5・19
東宮上野行啓		時事新報	M 43・5・19
東宮上野行啓		東京日日新聞	M 43・5・19
宮廷録事 東宮殿下上野行啓		讀賣新聞	M 43・5・19
新緑の上野ヶ丘（東宮の美術展覧会行啓）		報知新聞	M 43・5・19
山田寒山氏の楽焼場にては…		讀賣新聞	M 43・5・22
浅草仲見世のひさご庵		東京日日新聞	M 43・5・2
寒山寺梵鐘再建		樺太日日新聞	M 43・5・24
細川男の壽筵		東京朝日新聞	M 43・5・30
細川潤次郎の壽筵		毎日電報	M 43・5・30
細川潤次郎男の壽筵		中外商業新報	M 43・5・30
細川男爵の壽筵		東京日日新聞	M 43・5・30
はなし草 寒山寺梵鐘の…		やまと新聞	M 43・6・20
美術界風聞録 二四日中川で…		報知新聞	M 43・7・6
美術界風聞録 文部省美術展覧会…		報知新聞	M 43・6・8
日本に寒山寺			

新聞見出し		新聞名	発行年月日
寒山寺の夜半鐘の再建	佛都新報	M 43・8・8	
感化院より 如意庵主人			
寒山寺の鐘	萬朝報	M 43・10・1	
寒山寺梵鐘分身	東京朝日新聞	M 43・10・1	
寒山寺梵鐘の分身	国民新聞	M 43・10・1	
寒山寺の鐘	萬朝新聞	M 43・10・1	
寒山寺梵鐘分身	朝日新聞	M 43・10・1	
寒山寺梵鐘成る	報知新聞		
寒山寺梵鐘成る	やまと新聞	M 43・10・1	
寒山寺夜半鐘成る	二六新聞	M 43・10・2	
寒山寺の分鍾	毎日電報	M 43・10・2	
姑蘇寒山寺と梵鐘	讀賣新聞	M 43・10・2	
寒山寺梵鐘成る	中外新聞	M 43・10・2	
寒山寺梵鐘の分身	横浜貿易新聞	M 43・10・2	
寒山寺の鐘	都新聞	M 43・10・3	
寒山寺梵鐘成る	中外商業新報	M 43・10・2	
山田寒山子苦心の…	東京日日新聞	M 43・10・2	
寒山寺の梵鐘	報知新聞	M 43・10・2	
寒山寺の分鍾	毎日電報	M 43・10・2	
寒山寺の鐘	都新聞	M 43・10・3	
夜半鐘の分身鑄造	東京日日新聞	M 43・10・2	
寒山寺梵鐘の分身	国民新聞	M 43・10・2	
姑蘇寒山寺と梵鐘	讀賣新聞	M 43・10・2	
寒山寺梵鐘成る	やまと新聞	M 43・10・2	
寒山寺の鐘	中央新聞	M 43・10・4	
寒山寺住職山田寒山和尚が…	長野新聞	M 43・10・5	
寒山寺の分鍾	長野新聞	M 43・10・5	
寒山寺の鐘の鑄造	大阪朝日新聞	M 43・10・4	
寒山寺鐘分身頒布	信濃日報	M 43・10・3	

	新聞見出し	新聞名	発行年月日
	寒山寺の鐘	讃岐日日新聞	M 43・10・4
	寒山寺名鐘分身三千個	京都新聞	M 43・10・2
	寒山寺の梵鐘	北国新聞	M 43・10・5
	寒山寺梵鐘分身	名古屋新聞	M 43・10・5
	寒山寺の梵鐘	扶桑新聞	M 43・10・3
	寒山寺梵鐘の分身	濱松新聞	M 43・10・6
	寒山寺梵鐘成る	神戸又新日報	M 43・10・4
	寒山寺の鐘	新総房	M 43・10・4
	寒山寺梵鐘の分身	京都新聞	M 43・10・4
	寒山寺の梵鐘	佐久新聞	M 43・10
	美術界寒山寺梵鐘の分身	時事新聞	M 43・10・9
	蘇州寒山寺の梵鐘	九州日日新聞	M 43・10・6
	寒山寺夜半鐘の分身	松江市山陰新聞	M 43・10・6
	寒山寺梵鐘分身の配付	河北新報	M 43・10・6
	山田寒山翁は…	東奥日報	M 43・10・6
	美術界風聞録 同好印会は…		M 43・10
	寒山寺梵鐘撞初式延期	夕刊やま登新聞	M 43・10・22
	よもやま梵鐘成る	萬朝報	M 43・10・22
	寒山寺撞初式延期	毎電新聞	M 43・10・22
	寒山寺の鐘撞初式	都新聞	M 43・10・23
	寒山寺の夜半鐘	佛都新報	M 43・10・20
	寒山寺大梵鐘	日本新聞	M 43・10・23
	寒山寺の鐘撞初式	都新聞	M 43・10・23
	梵鐘撞初式延期	中央新聞	M 43・10・23
	寒山寺鐘の聲	横浜貿易新聞	M 43・10・26
	夜半鐘撞初式延期	中外商業新報	M 43・10・26
	寒山寺梵鐘撞初め延期	東京二六新報	M 43・10・26
	美術界消息 此間夜半鐘…	萬朝報	M 43・10・26
うめ岬 山田畢山が…	岩手日報		M 43・10・26

新聞見出し		新聞名		発行年月日
美術界風聞録		報知新聞		M 43・10・27
美術界風聞録		報知新聞		M 43・10・28
過般本欄に記報の寒山寺梵鐘は：		東奥日報		M 43・10・29
大供養は来春：		秋田魁新聞		M 43・10・25
大吉おほがね 下谷寒山寺から：				
山田寒山の計画	やまと新聞			M 43・12・22
寒山寺建立	中央新聞			M 43・12・1
寒山寺梵鐘鑄造	因伯時報			M 43・11・28
雑報 寒山寺梵鐘の竣工	佛都新報			M 43・12・1
寒山寺梵鐘の撞初	毎日電報			M 43・12・21
よみうり抄 山田寒山氏の梵鐘竣工	讀賣新聞			M 43・12・22
寒山寺梵鐘撞初	時事新報			M 43・12・22
寒山寺梵鐘成る	日本			M 43・12・22
美術界寒山寺の梵鐘成る	東京朝日新聞			M 43・12・23
寒山寺梵鐘成る	河北新報			M 43・12・22
風聞録 山田寒山氏が：	国民新聞			M 43・12・23
美術界風聞録	報知新聞			M 43・12
寒山寺の梵鐘 寒山寺梵鐘成る	日本			M 43・12・28
清国寒山寺に懸くべき新鑄の大梵鐘と山田寒山師	東京二六新報			M 43・12・26
寒山寺鐘の撞初				M 43・12
寒山寺梵鐘撞初式	日本			M 43・12・27
美術界風聞録 例の姑蘇寒山寺の：				
寒山寺の鐘供養	東京朝日新聞			M 43・12・27
寒山寺梵鐘撞初式	日本新聞			M 43・12・26
寒山寺の鐘供養	東京朝日新聞			M 43・12・26
夜半の鐘撞初式	東京日日新聞			M 43・12・25
寒山寺鐘供養	東京二六新報			M 43・12・26
美術界寒山寺の鐘成る	中央新聞			M 43・12・26
寒山寺梵鐘撞初	やまと新聞			M 43・12・26

新聞見出し		新聞名	発行年月日
本日撞初をなす清国蘇州寒山寺の新梵鐘		横浜貿易新報	M 43・12・24
寒山寺梵鐘と寒山和尚		中外商業新報	M 43・12・26
大梵鐘と山田寒山師		九州日日新聞	M 43・12・29
賀章に見はれたる詩（四） 古蓑農長 山田寒山和南		柏崎日報	M 43・1・11
新年のことばき 下谷寒山寺にて 山田寒山		北越新聞	M 44・1・8
寒山寺梵鐘		東北公論	M 44・1・12
寒山寺梵鐘分身配付		秋田時事	M 44・1・12
隣の噂 山田寒山は		讀賣新聞	M 44・1・18
寒山寺梵鐘の分身		毎夕新聞	M 44・1・17
寒山寺鐘の聲		巖手日報	M 44・1・18
寒山和尚墨竹揮毫		巖手日報	M 44・1・24
見聞雜記、奥原晴翠山水三百幅、寒山師墨竹揮毫		山形新聞	M 44・1・24
姑蘇城外寒山寺		山形日報	M 44・1・24
美術界消息 山田寒山和尚は…		萬朝報	M 44・2・4
寒山寺の新景		国民新聞	M 44・2・7
寒山、晴翠の揮毫		報知新聞	M 44・2・8
寒山和尚の揮毫		国民新聞	M 44・2・9
創立三十年記念揮毫 清国蘇州寒山寺住職山田寒山師筆		山陰新聞	M 44・2・7
山田寒山和尚来峽		甲斐新聞	M 44・2・18
山田寒山師の来往			
寒山寺和尚来る		山梨民報	M 44・2・18
耳と目		M 44	
寒山寺夜半鐘 小学校の報鐘に用ゐたい			
此程入峽した山田寒山師は…			
筆の志づく		中央新聞	M 44・2・18
古今印叢 神武明達 椿所岡本義邦刻			
古今印叢 關中紅侯印 荃蘆			
古今印叢 福祿自在 蘭台			
寒山寺梵鐘の再建		京都新聞	M 44・2・21

	新聞見出し	新聞名	発行年月日
	夜半鐘分身好評	山梨毎日新聞	M44・2・25
	寒山寺鐘の学校寄附	国民新聞	M44・2・28
	古今印叢 黄秋盦刻 蘇香生		
	寒山寺の鐘来る	朝日新聞名古屋附録	M44・3・10
	千古風流寒山寺の鐘 與太郎	信濃新聞	M44・3・20
	葬列十数町会葬者二千余名 栗原本社理事の葬儀	国民新聞	M44・3・31
	弔詞 清浦奎吾	国民新聞	M44・4・1
	寒山寺の鐘聲	満州日日新聞	M44・6・3
	寒山寺の梵鐘	遼東新報	M44・6・3
	鐘の聲から 彌二郎	信濃新聞	M44・4・3
	鐘の聲から	信濃新聞	M44・4・4
	古今印叢 桂未谷刻 従吾所好 蘇香	国民新聞	M44・4・16
	中村不折画	信濃新聞	M44・4・5
	中村不折画伯篤志揮毫寒山拾得三十三張分配	巖手日報	M44・4・26
	姑蘇寒山寺鐘銘	国民新聞	M44・4・16
	美術界風聞録	横浜貿易新聞	M44・4・26
	有名なる清国寒山寺… 墨竹画	朝日名古屋附録	M44・4・15
	当世髯比べ（其25）	やまと新聞	M44・5・4
	古今印叢 趙仲穆刻 醫俗（椿所）		
	随鵬日録（二）蕉雨生 四月二四日香港より賀茂丸に於て	時事新報	M44・4・6
	創立三十年紀念揮毫 清国蘇州寒山寺住職 山田寒山筆		
	古今印叢「売神祝印」（寒山）		
	寒山寺梵鐘竣工	国民新聞	
	色紙百種（其3）山田寒山筆	新愛知新聞	
	寒山和尚墨竹画会	新愛知新聞	
	絵画展覧会	遼東新報	M44・5・19
	絵画展覧会―空前の規模―	遼東新報	M44・5・20
	名流揮毫展覧会	満州日日新聞	M44・5・19
	寒山墨竹画会	扶桑新聞	M44・6・2

	新聞見出し	新聞名	発行年月日
	来往消息 山田寒山氏	国民新聞	M44・5・28
	美術界風聞録	報知新聞	M44・5・28
	美術界風聞録	報知新聞	M44・6・4
	寒山寺の鐘聲	満州日日新聞	M44・6・3
	寒山寺の梵鐘	遼東新報	M44・6・3
	縦横無尽 無我夢中生 寒山寺の梵鐘と銘・扇面書画	新愛知新聞	M44・6・6
	寒山和尚の懷舊談（一）	新愛知新聞	M44・6・6
	寒山和尚の懷舊談（二）	新愛知新聞	M44・6・7
	寒山和尚の懷舊談（三）	新愛知新聞	M44・6・8
	覺王山裡の画筵	新愛知新聞	M44・6・7
	山形公誕辰祝賀	朝刊やまと新聞	M44・6・15
	寒山和尚の懷舊談（五）	新愛知新聞	M44・6・11
	色紙百種（其十三）山田寒山筆	新愛知新聞	M44・6・12
	寒山和尚の懷舊談（六）	新愛知新聞	M44・6・12
	一日一人寒山山田潤氏文曰不折	萬朝報	M44・6・16
	山田寒山、奥田抱生氏合作	新愛知新聞	M44・6・16
	碧巖会	国民新聞	M44・6・19
	古今印叢 貫名海屋 清玩翰墨（寒山）	国民新聞	M44・6・25
	古今印叢 奚鐵生 不翁（椿所）	国民新聞	M44・7・16
	美術界便り 寒山墨竹百幅会	横浜貿易新聞	M44・7・15
	美術界風聞録	報知新聞	M44・7・20
	寒山和尚墨竹会	国民新聞	M44・7・20
	古今印叢 蘭台作 亨寿星	国民新聞	M44・7・16
	古今印叢 金冬心刻 五日一水十日一石（荃蘆）	国民新聞	M44・7・23
	古今印叢 寒山 陶印 創意仙品 辛亥秋日作	国民新聞	M44・10・20
	寒山寺梵鐘撞初・蘇州寒山寺の鐘・寒山寺梵鐘供養	時事・万朝新聞	M44・10・20
	寒山寺鐘撞初式	扶桑新聞	M44
	蘇州寒山寺の鐘	時事新報	M44・7・21
	美術界 寒山寺の梵鐘	やまと新聞	M44・10・21

寒山寺梵鐘撞初式	新聞見出し	新聞名	発行年月日
寒山寺梵鐘撞初式	東京日々新聞	M 44・10・19	
寒山寺梵鐘撞初式	萬朝報	M 44・10・23	
寒山寺の鐘撞初式	国民新聞	M 44・10・23	
寒山寺の鐘撞初式	讀賣新聞	M 44・10・23	
寒山寺梵鐘撞初式	やまと新聞	M 44・10・23	
寒山寺梵鐘撞初式	時事新報	M 44・10・23	
寒山寺梵鐘撞初式	報知新聞	M 44・10・22	
寒山寺梵鐘撞初式	東京二六新報	M 44・10・23	
寒山寺梵鐘撞初式	東京朝日新聞	M 44・10・23	
寒山寺梵鐘撞初式	東京日々新聞	M 44・	
寒山寺梵鐘撞初式	中央新聞	M 44・10・23	
寒山寺梵鐘	新総房	M 40・10・19	
梵鐘供養並撞初式	九州毎日新聞	M 40・10・21	
寒山寺梵鐘撞初式	上毛新聞	M 40・10・19	
近事片々 寒山寺の鐘工終る：	東京日日新聞	M 44・10・24	
寒山寺梵鐘撞初式	名古屋新聞	M 40・10・20	
寒山寺の夜半の鐘	中外日報	M 40・10	
夜半鐘の撞初	弘前新聞	M 40・10・20	
蘇州寒山寺梵鐘供養	讃岐日日新聞	M 40・10・20	
寒山梵鐘の撞初	中外日報		
寒山寺の鐘（増上寺にて撞初め）	都新聞	M 44・10・23	
寒山寺梵鐘撞初	東海新聞	M 40・10・22	
寒山寺梵鐘撞初式			
寒山寺梵鐘の落成	門司新報	M 40・10・20	
梵鐘供養並撞初式	岩手日報	M 40・10・19	
梵鐘撞初式	山梨民報	M 40・10・19	
寒山寺の鐘撞初式	新潟新聞	M 40・10・25	
寒山寺梵鐘撞初式	土陽新聞	M 40・10・22	
寒山寺梵鐘撞初式	中外日報	M 40・10・25	

寒山寺の鐘撞初式	新聞見出し	新聞名	発行年月日
寒山寺の鐘撞初式	二豊新聞	M 40・10・28	
寒山寺の鐘撞初式	門司新報	M 40・10・26	
寒山寺の鐘撞初式	佛都新報	M 44・11・1	
寒山寺の鐘撞初式	中外日報	M 44・11・21	
寒山寺留別雅会	報知新聞	M 44・11・21	
寒山寺留別雅会	日々新聞	M 44・11・21	
寒山寺留別雅会	やまと新聞	M 44・11・22	
寒山寺留別雅会	やまと新聞	M 44・11・27	
寒山寺留別雅会	中外日報	M 44・11・28	
寒山寺留別雅会	中外日報	M 44・12・25	
寒山寺留別雅会	国民新聞	M 44・12・14	
寒山寺留別雅会	萬朝報	M 44・10・12	
寒山寺留別雅会	岩手日報	M 40・12・20	
寒山寺留別雅会	中外新聞	M 40・10・7	
寒山寺留別雅会	讀賣新聞	M 40・10・11	
寒山寺留別雅会	万朝新聞	M 40・10・11	
寒山寺留別雅会	やまと新聞	M 40・10・10	
寒山寺留別雅会	国民新聞	M 40	
寒山寺留別雅会	下野新聞	M 40・10・12	
寒山寺留別雅会	常総新聞	M 40・10・12	
寒山寺留別雅会	下野日日新聞	M 40・10・12	
寒山寺留別雅会	新愛知新聞	M 40	
寒山寺留別雅会	両雨実業新聞	M 40	
寒山寺留別雅会	仙台日日新聞	M 40	
寒山寺留別雅会	横浜貿易新聞	M 40	
寒山寺留別雅会	名古屋新聞	M 40	
寒山寺留別雅会	信濃民報	M 40	
寒山寺留別雅会	信濃毎日新聞	M 40	

	新聞見出し	新聞名	発行年月日
	寒山の墨竹百幅	函館新聞	M40・10・14
	寒山墨竹百画会	国民長野新聞	M40・10・14
	寒山墨竹百幅会	北羽新聞	M40・10・16
	第二回寒山墨竹百幅会	羽後新聞	M40・10・16
	いろいろ寒山墨竹百幅会	報知新聞	M40・10・16
	寒山墨竹百幅会	信濃日報	M40・10・12
	寒山墨竹画会	中央新聞	T1・22
	寒山墨竹百幅会（東京特信）		
	天下の墨客一同に会す	報知新聞	M44・12・5
	山田寒山墨竹 辛亥十月	岩手公論	M44・11・1
	鶏助	山梨毎日新聞	2・15
	山田寒山和尚	峡中日報	2・15
	耳と目 寒山和尚が…	峡中日報	2・17
	古今印叢 鵲寺倉印（寒山）	国民新聞	3・16
	山田寒山師筆	巖手日報	1・1
	古今印叢 池大雅 満身華影		
	古今印叢 高芙蓉 孟彪		
	古今印叢 河井荃廬 咸休無窮		
	耕冲画伯逝く	国民新聞	M44・1・25
	山田寒山墨竹 辛亥元旦		
	東京 山田寒山 銅章 恭賀新年	巖手日報	M44・1・1
	古今印叢 椿所岡本義邦刻 奏萬年春	国民新聞	M44・1・1
	古今印叢 椿所岡本義邦刻 奏萬年春	国民新聞	M44・1・3
	古今印叢 皇帝萬歳（椿所）	国民新聞	M44
	古今印叢 中宣王餐（蘭台）	国民新聞	M44
	古今印叢 山田寒山刻 五祀六宗	国民新聞	M44・1・30
	山田寒山氏筆 三点	巖手日報	M44・1・1
	随鵬吟社聯句（九月十一日於上野三宜亭）	萬朝報	M43・9・16
	同好印会出品物	東京日日新聞	M43

	新聞見出し	新聞名	発行年月日
	蘇州の勝を探る留園、寒山寺、虎邱	中外商業新報	M43・7・8
	杏林餘影 同題 寒山 山田潤	日本医事週報	
	健筆会を評す（九） 靈山	やまと新聞	M43・6・25
	健筆会展覧会	萬朝報	M43・6・21
	美術界健筆会の閉会と揮毫	東京日日新聞	M43・6・26
	女優九女八の席画	やまと新聞	M43・6・19
	みだれ箱 健筆会の揮毫	東京二六新報	M43・6・20
	当選鉄筆 丁未印社選（寒山） 信濃山田逸亭 青山白雲	国民新聞	M43・6・19
	第二回健筆会（二） 瑞穂	東京日日新聞	M43・6・18
	健筆会を評す（一） 靈山	やまと新聞	M43・6・12
	健筆会を評す（二） 靈山	やまと新聞	M43・6・13
	健筆会を評す（三） 靈山	やまと新聞	M43・6・14
	健筆会を評す（四） 靈山	やまと新聞	M43・6・15
	健筆会を評す（五） 靈山	やまと新聞	M43・6・17
	健筆会を評す（六） 靈山	やまと新聞	M43
	よもやま 健筆会	萬潮新聞	M43・6・9
	美術界風聞録	報知新聞	M43・6・8
	美術界	中央新聞	M43・6・8
	藤公詩存 柏軒生		M43・8・1
	健筆会の余興	国民新聞	M43・6・8
	健筆会の余興	中外商業新報	M43・6・8
	細川男喜の賀延	東京日日新聞	M43・6・6
	細川男喜寿賀延	やまと新聞	M43・6・6
	寒山の陶友会	中外商業新報	4・22
	四方八方 山田寒山和尚は…	国民新聞	M43・5・31
	細川男の壽延	東京毎日新聞	M43・5・31
	貿易新報紀念号祝詞 寒山田潤	貿易新報	4・3
	安静斯世を謝す 小野湖山翁の遺言	報知新聞	4・17
	肅然かな追弔式	貿易新報	4・19

新聞見出し		新聞名	発行年月日
伊藤公の官暦（一）		中央新聞	
夫人また偉傑 山田寒山氏の訪問談		中央新聞	
藤公の撰べる鐘銘		中央新聞	
七番日記 一茶研究の好資料		長野毎日新聞	
公の詩才		讀賣新聞	
印譜の由来「山田寒山氏談」	やまと新聞		
滄浪閣印譜 自己亥歳晩至庚子仲春間製 寒山田潤			
変物画伝（一）（伊藤公に愛せらる） 楽焼の寒山師			
閑話休題 陶友会の席上…	国民新聞		
春畝公の俳句 思出多き後の月 束松露香	信濃毎日新聞		
当選鉄筆 丁未印社選相模土橋香雲（寒山、椿所） 嘉福成基			
伊藤公の印章三類「山田寒山刻」	東京朝日新聞		
追悼の詩歌二、三 山田寒山	中外商業新報		
山田寒山墨竹百幅之一	中外新聞		
寒山百幅会好況	国民新聞		
山田寒山墨竹百幅之一			
墨竹百幅会	秋田魁新聞		
寒山和尚の年賀状	新愛知新聞	M 45・1・6	
古今印叢 山田寒山刻 福壽無量	国民新聞	M 45・1・7	
扇づくし 竹石	扶桑新聞	M 45・1・29	
鐵筆 樸華福 辛亥十二月 玉池老人		M 45	
古今印叢 静嘉 壬子一月 岡本椿所篆		M 45	
日本書道会	報知新聞	M 45・1・3	
日本書道会新年発会	東京日日新聞	M 45・2・4	
古今印叢 江佐馬生 完白山人刻 九節丈人	国民新聞	M 45・2・7	
豆州仁科より 釈宗演	報知新聞	M 45・2・7	
奇人横川無角逝く	中外新聞	M 45・2・9	
横川無角氏逝く	朝日新聞	M 45・2・9	
横川無角が死んだ…	萬朝報	M 45・2・9	

新聞見出し		新聞名	発行年月日
畸人竹庵先生 寒山の引導で大往生		国民新聞	M 45・2・9
酒仙横川無角 熱燗一杯で大往生		報知新聞	M 45・2・9
皇帝萬歳 寒山山田潤 明治四十五年紀元節拝刻		国民新聞	M 45・2・11
滑稽二人画会		報知新聞	M 45・2・16
文芸界 素人書画会		やまと新聞	M 45・2・17
問答無聲 山田寒山氏筆		やまと新聞	M 45・2・17
鳥迹釵形 山内敬斎刻 隠几亦無心		やまと新聞	M 45・2・17
勸業展覧会の書道		報知新聞	M 45・2・17
扇づくし 山田寒山氏筆 松溪雲泉		新愛知新聞	M 45・2・23
古今印叢 蘭台篆 水流任…		国民新聞	M 45・3・10
焼くが楽みの楽焼		東京毎日新聞	M 45・3・12
東京勸業展覧会 来る廿日開会式			M 45・3・18
東京勸業展覧会開会式		時事新聞	M 45・3・20
勸展開場式		報知新聞	M 45・3・20
土人形が大評判		国民新聞	M 45・3・20
閑話休題 黄檗宗…		国民新聞	M 45・4・3
古今印叢 寒山田潤 高僧日日入山門 壬子四月上浣製		国民新聞	M 45・4・3
東郷大将の酔筆		大阪時事新聞	M 45・4・13
古今印叢 寒山田潤 湘水忠臣 壬子端午製			M 45
勸業展覧会の書幅（下） ○△生		時事新聞	M 45・5・6
画伯跣足の会		報知新聞	M 45・5・9
第四回健筆会		東京朝日新聞	M 45・5・10
東京勸業展覧会授賞式		国民新聞	M 45・5・11
若葉の不忍池畔		やまと新聞	M 45・5・11
古今印叢 椿所岡本義邦 晴日暖風生麥気 壬子初夏		国民新聞	M 45・5・14
古今印叢 寒山田潤 無事看山 壬子初夏		国民新聞	M 45・5・19
故清水氏追悼大法会		馬關毎日新聞	M 45・5・12
健筆会		国民新聞	M 45・5・20
新刊批評 健筆帖		国民新聞	M 45・5・21

新聞見出し	新聞名	発行年月日
健筆会を観る	東京朝日新聞	M45・5・25
碧巖会提唱	国民新聞	M45・5・27
健筆会を観る	国民新聞	M45・5・29
健筆会を観る	讀實新聞	M45・5・31
乾山忌	報知新聞	M45・6・3
乾山忌と遺作展観	時事新報	M45・6・4
趣味深き乾山忌	東京朝日新聞	M45・6・4
乾山忌修行	東京二六新聞	M45・6・4
日本書道会展覧会	報知新聞	M45・6・14
随鷗吟社例会聯句	時事新聞	M45・6・11
寒山墨竹十萬講	国民新聞	T1・12・18
寒山寺墨竹十萬講	やまと新聞	T1・12・18
寒山和尚の年賀状墨竹十萬講	報知新聞	T1・12・18
山田寒山は：	萬朝報	T1・12・19
寒山詩墨竹画会	時事新聞	T1・12・19
混つ返しの寄せ書き	報知新聞	T1・12・
寒山寺墨竹十萬講	東京朝日新聞	T1・12・20
墨竹十萬講	浜松新聞	T1・12・22
美術界だより 寒山の墨竹十萬講	横浜貿易新聞	T1・12・21
寒山寺と十萬講	函館新聞	T1・12・21
日本寒山寺建立	扶桑新聞	T1・12・21
日本寒山寺建立化縁墨竹十萬講主意書	新愛知新聞	T1・12・23
寒山墨竹十萬講	中外新聞	T1・12・23
日本寒山寺建立化縁墨竹十萬講主意書	新愛知新聞	T1・12・26
日本寒山寺建立化縁墨竹十萬講主意書	新愛知新聞	T1・12・29
寒山寺墨竹十萬講	上毛新聞	T1・12・25
寒山寺と十萬講	東京二六新報	T1・12・22
日本寒山寺建立計画	山形日報	T2・1・7
記念書画大展覧会		T2・1・7

新聞見出し	新聞名	発行年月日
山田寒山師の：	東奥日報	T2・1
日本寒山寺建立	西肥日報	T2・1・9
寒山寺墨竹十萬講	呉公報	T2・1・9
日本寒山寺建立	西羽寒業新聞	T2・1・9
寒山師の墨竹十萬講	伊勢朝報	T2・1・9
寒山寺十萬講	山陰新聞	T2・1・9
墨竹十萬講	北羽新報	T2・1・10
日本寒山寺十萬講	函館毎日新聞	T2・1・7
閑文字	岩手日報	T2・1・8
日本寒山寺建立化縁墨竹十萬講主意書	新愛知新聞	T2・1・12
寒山寺建立十萬講	高田日報	T2・1・7
寒山黒筑十萬講	信濃日報	T2・1・6
山田寒山師十牛の一つ柳につなぎけり		T2
日本寒山寺建立計画	山形日報	T2
日本寒山寺建立計画	馬關毎日新聞	T2・1・7
日本寒山寺の建立	東海新聞	T2・1・10
日本寒山寺建立化縁墨竹十萬講	羽後新聞	T2・1・12
本社主催書画展覧会寄贈諸家	富山日報	T2・1・13
出版界印章備正	東京朝日新聞	T2・1・28
日本寒山寺建立	西肥日報	T2・1・9
日本寒山寺建立化縁	土陽新聞	T2・1・12
日本寒山寺と十萬講	大連遼東新報	T2・1・24
寒山和尚墨竹画講	北海タイムス	T2・1・31
亀谷省軒翁葬儀	中央新聞	T2・2・4
山田寒山筆 墨竹画	富山日報	T2・2・1
亀谷省軒翁の葬儀	やまと新聞	T2・2・5
寒山の竹	京橋新聞	T2・2・1
日本寒山墨竹十萬講	新愛知新聞	T2・3・9
山田寒山居士墨竹	北海タイムス	T2・3・12

新聞見出し	新聞名	発行年月日
山田寒山 漢詩聯句	国民新聞	T2・3・7
虎も蝦蟇も目高も眼玉は共通	報知新聞	T2・3・8
日本寒山寺墨竹十萬講	新愛知新聞	T2・4・3
蘭亭修楔記念会	時事新報	T2・4・5
茂木家の襲名披露	横浜貿易新報	T2・4・4
蘭亭修楔記念会	中外商業新報	T2・4・5
素人画会	報知新聞	T2・4・17
蘭亭修楔記念会	やまと新聞	T2・4・5
山田寒山 随陽吟社第八十七回例会七言絶句聯句	国民新聞	
天龍厚き選書会	国民新聞	T2・4・29
山田寒山 随陽吟社第八十七回例会七言絶句聯句	新愛知新聞	T2・4・19
北越名流遺芳 富益齋	北越日報	T2・5・30
中村蘭臺 印章備正	北越日報	T2・5・30
中央舞台の愛知県人(四十八) 山田寒山	新愛知新聞	T2・5・30
寒山和尚絶命の祈禱	浜松新聞	T2・5・31
二奇人の来演	浜松新聞	T2・5・31
美術界の笑話	新愛知新聞	T2・5・31
蘭亭修楔記念会	東京朝日新聞	T2・4・4
健筆会	東京朝日新聞	T2
第五回健筆会	国民新聞	T2
美術界 健筆会の前景季気	日本	T2・6・11
健筆会の余興	国民新聞	T2
新刊紹介 白真弓	日本	T2
山田寒山 漢詩 題健筆会出品画竹似山田寒山	甲州新聞	
健筆会を見る(中)	国民新聞	
美術界	国民新聞	T2
朝日柳壇 健筆会所見	東京朝日新聞	T2
健筆会展覧会	萬朝報	T2・6・28
文芸美術 健筆会会場揮毫会	やまと新聞	T2・6・29

新聞見出し	新聞名	発行年月日
健筆会場揮毫会	報知新聞	T2・6・28
健筆会場の揮毫会	国民新聞	T2・6・28
はがきだより	国民新聞	T2・7・2
寒山墨竹十萬講	国民新聞	T2・7・5
寒山墨竹十萬講	北越日報	T2・7・9
支那勝地歴遊	門司新報	T2・11・18
法書会揮毫会		
高芙蓉百三十年祭	報知新聞	T2・11・18
鉄網珊瑚 山田寒山 漢詩	やまと新聞	T2・3・9
山田寒山 翁筆	やまと新聞	T3・3・24
大正博入選篆刻	国民新聞	T3・3・28
大正博覧会 大正博の「篆刻」	都新聞	T3・4・21
寒山書画屏風分配	やまと新聞	T3・4・24
大正博の美術(十八) 篆刻	国民新聞	T3・5・5
風流梵鐘物語	大阪日日新聞	T3・6・16
寒山寺の新梵鐘	大阪朝日新聞	T3・6・23
大正博の「篆刻」	都新聞	T3・4・21
寒山書画屏風分配	やまと新聞	T3・4・24
墨竹を以て鳴つた山田寒山和尚	国民新聞	T3・4・26
寒山屏風画会	横濱貿易新報	T3・4・29
中央舞台の愛知県人協僧侶 山田寒山	新愛知新聞	T3・5・1
寒山屏風百双会	新愛知新聞	T3・5・1
山田寒山氏	時事新報	T3・5・1
大正博の美術(十五) 書(下)	国民新聞	T3・5・2
寒山氏書画分配	都新聞	T3・5・6
大正博の美術(十六) 篆刻	国民新聞	T3・5・5
大正博の篆刻	東京日日新聞	T3・6・20
「皇謨恢宏」「国運開展」寒山田潤製		T3・1・1
鉄筆「古稀鳴鶴」河井遷	北越新聞	T3・1・13

新聞見出し		新聞名	発行年月日
鉄筆「澹焉守幽香」香遠寒山老納云…	北越新聞	T3・1・20	
鉄筆「今朝無事役睡足亦君恩」岡本椿處	北越新聞	T3・2・3	
鉄筆「露」濱村蔵六刻	北越新聞	T3・2・10	
天祐新聞発行	天祐新聞	T3・2・14	
鉄筆「南山老衲」山田潤	北越新聞	T3・2・17	
鉄筆「寒香吹返十三春」江東散人寒山老納云…	北越新聞	T3・2・24	
鉄筆「南湖漁長」山本雨石篆	北越新聞	T3・3・3	
鉄筆「舊知山川」太田夢庵寒山老納云…	北越新聞	T3・3・24	
鉄筆「觀自在」池無名篆	北越新聞	T3・3・17	
鉄筆「人道我則噫」香遠刻寒山老納云…	北越新聞	T3・3・31	
鉄筆「柳緑花紅」山田寒山篆	北越新聞	T3・4・7	
鉄筆「雲無心」阿波廣山古山 寒山老納云…	北越新聞	T3・3・14	
鉄筆「鶴鳴于九皐」高芙蓉刻	北越新聞	T3・4・21	
鉄筆「神州男子雄如許」高畑翠石	北越新聞	T3・4・28	
鉄筆「一山一水」紀伊北條巳山寒山老納云…	北越新聞	T3・5・5	
鉄筆「難與俗論」中村蘭臺	北越新聞	T3・5・12	
鉄筆「窓下清風」東京久志本梅荘	北越新聞	T3・5・19	
鉄筆「醉世」山陽寒山老納云…	北越新聞	T3・7・14	
鉄筆「心安身自安身安室自」高畑翠石寒山老納云…	北越新聞	T3・6・30	
鉄筆「松吹說法度生聲」寒山山田潤篆	北越新聞	T3・5・21	
鉄筆「混而知處」中村蘭臺	北越新聞	T3・5・26	
鉄筆「以雲爲水」東京星石道人	北越新聞	T3	
鉄筆「雨艸烟苔」東京伊藤古屋	北越新聞	T3・6・2	
鉄筆「天真獨朗」東京郡司梅所	北越新聞	T3	
鉄筆「永永萬年」下総八木春雲寒山老納云…	北越新聞	T3・6・16	
鉄筆「翠玉壺之水爛遙臺之月」澤安親篆	北越新聞	T3・6・23	
鉄筆「江風引雨入船涼」東京村田蔚堂	北越新聞	T3	
鉄筆「忘◆」巖谷一六寒山老納云…	北越新聞	T3	
鉄筆「行雲流水」敬所陳人	北越新聞	T3	

新聞見出し		新聞名	発行年月日
鉄筆「蔵六居」橘茂喬	北越新聞	T3	
鉄筆「爲守道貧」寒山老納云：	北越新聞	T3	
鉄筆「空山華開水流」遇所居士	北越新聞	T3	
鉄筆「游方之外」寒山老納云：	北越新聞	T3	
鉄筆「胡人入漢」宗星石	北越新聞	T3	
改春鉄筆「春敬所風寒山致筌廬和香遠」	北越新聞	T3	
鉄筆「新年佛法如何間依舊今朝日」寒山田潤	北越新聞	M41・1・1	
丁未印社	中央新聞	M41・1・8	
文芸界丁未印社	日本	M41・1・8	
古今印叢 暗香浮動岡本椿所篆		T1・2	
明治天皇 山田潤謹製	国民新聞	T1・9・13	
聖壽無疆 寒山田潤謹篆	国民新聞	T2・10・31	
大正博の篆刻	東京日日新聞		
長寿者実話（一）	報知新聞		
長寿者実話（二）長寿者萬平の記録に就て	報知新聞		
長寿者実話（三）白幽仙人の秘伝	報知新聞		
長寿者実話（四）些字と長寿（上）	報知新聞		
長寿者実話（五）些字と長寿（中）	報知新聞		
長寿者実話（六）些字と長寿（下）	報知新聞		
長寿者実話（十三）衛生呼吸法数則（中）	報知新聞		
当選第三等 日清学生病医院長 森山麟次郎	報知新聞	5・7	
当選第三等（続）日清学生病医院長 森山麟次郎	報知新聞	5・8	
当選第三等（続）日清学生病医院長 森山麟次郎	報知新聞	5・9	
当選第二等 北海道小野篁村	報知新聞	5・10	
当選第二等（続）北海道小野篁村	報知新聞		
当選第二等（続）北海道小野篁村	報知新聞		
当選第一等（一）東京三刀谷扶綱	報知新聞	5・14	
当選第一等（続）東京三刀谷扶綱	報知新聞		
当選第一等（三）東京三刀谷扶綱	報知新聞		

	新聞見出し	新聞名	発行年月日
新聞見出し	当選第一等（四） 東京三刀谷扶綱	報知新聞	
	当選第一等（五） 東京三刀谷扶綱	報知新聞	
	当選第一等（六） 東京三刀谷扶綱	報知新聞	
	美術界	国民新聞	T 4・2・28
	長山寒山寺行	国民新聞	T 4・3・6
	日本寒山寺建立	中外商業新報	T 4・3・9
	寒山寺建立	新愛知新聞	T 4・3・10
	日本寒山寺建立	新総房	T 4・3・10
	日本寒山寺	新潟新聞	T 4・3・15
	日本に寒山寺が出来る	実業報知新聞	T 4・3・15
日本寒山寺建立	新潟毎日新聞	T 4・3	
九官鳥 芸妓家主人の発心	中外商業新報	T 4・3・18	
美術界	国民新聞	T 4・3・30	
美術消息	報知新聞	T 4・4・17	
寒山和尚の女弟子	中外商業新報	T 4・4・18	
女将の逸話（一）	中外商業新報	T 4・4・18	
女将の逸話（二）	中外商業新報	T 4・4・19	
開通せる武蔵野鉄道	中外商業新報	T 4・4・22	
文芸消息	時事新報	T 4	
寒山氏の墨竹画	世界	T 4・5・9	
三十三間竇塔建立	萬朝報	T 4・5・9	
墨竹十萬講	東京毎日新聞	T 4・5・9	
文芸美術 寒山の墨竹十萬講	やまと新聞	T 4・5・9	
寒山翁墨竹十萬講	時事新報	T 4・5・9	
寒山和尚の墨竹	国民新聞	T 4・5・7	
寒山寺建立墨竹十萬講	東京朝日新聞	T 4・5・10	
寒山和尚の墨竹十萬講	都新聞	T 4・5・10	
寒山寺建立十萬講	中央新聞	T 4・5・10	
斯華会大会	中央新聞	T 4・5・10	

新聞見出し		新聞名		発行年月日	
芸術 墨竹十萬講		東京日日新聞		T 4	5・11
寒山墨竹十萬講		中外商業新報		T 4	5・12
寒山寺の墨竹		讀賣新聞		T 4	5・12
寒山寺建立化縁揮毫		浜松新聞		T 4	5・12
山田寒山師：		千葉毎日新聞		T 4	5・12
寒山寺の設立		武相新報		T 4	5・11
寒山の墨竹画		柏崎日報		T 4	5・12
日本寒山寺建立 地を下総長山に相す		長野新聞		T 4	5・12
日本寒山寺建立化縁墨竹十萬講主意書		甲斐新聞		T 4	5・12
墨竹十萬講		鷺城新聞		T 4	5・13
寒山墨竹十萬講		呉公論		T 4	5・13
墨竹十萬講		北羽新報		T 4	5・13
寒山寺建立十萬講		三重新聞		T 4	5・14
日本寒山寺の建立		湖南日報		T 4	5・14
日本寒山寺設立		群馬新聞		T 4	5・12
寒山寺墨竹十萬講		商業新報		T 4	5・15
寒山寺十萬講		馬關毎日新聞		T 4	5・13
寒山寺建立十萬講		名古屋新聞		T 4	5・13
寒山墨竹十萬講		新総房		T 4	5・13
日本寒山寺建立		上毛新聞		T 4	5・13
寒山寺の建立		秋田魁新報		T 4	5・15
日本寒山寺建立		長野新聞		T 4	5・12
寒山寺建立墨竹十萬講		仙台日日新聞		T 4	5・16
寒山寺の建立		北海タイムス		T 4	5・27
寒山寺建立と揮毫頒布		横浜新聞		T 4	6・1
第六回健筆会		東京朝日新聞		T 4	6・6
寒山寺建立と揮毫頒布墨竹		北海めぐまし		T 4	6・12
書道群馬支部発会		群馬新聞		T 4	6・23
墨竹十萬講		北海旭新聞		T 4	5・19

	新聞見出し	新聞名	発行年月日
寒山と俳句会	高田日報	T 4・7・21	
第七回健筆会	讀賣新聞	T 4・6・10	
寒山翁歓迎会	新潟毎日新聞	T 4・8・2	
寒山氏招待句会	高田日報	T 4・7・22	
墨竹十萬講	北越新聞	T 4・8・5	
山田寒山氏来る	新潟毎日新聞	T 4・8・7	
山田寒山翁来る	新潟新聞	T 4・8・7	
山田寒山氏近作	新潟新聞	T 4・8・8	
寒山和尚招待会	新潟毎日新聞	T 4・8・10	
来越中の山田寒山氏筆	北越新聞	T 4・8・18	
寒山翁歓迎会	新潟新聞	T 4・8・2	
花香竹色 竹香(男木村正平篆(十七歳))	新潟新聞	T 4・9・3	
山田寒山翁談	北越新聞	T 4・9・3	
寒山化縁(上)	北越新聞	T 4・9・7	
和答猗々軒主人	北越新聞	T 4・9・20	
日本寒山寺別院墨竹十万講申込所 表具師丸山龍朔	北越新報	T 4・9・19	
日本寒山寺別院墨竹十万講申込所 印師木村竹香	新潟新聞	T 4・10・12	
良寛遺愛の笏に就て	北越新聞	T 4・10・9	
日本寒山寺別院墨竹十万講申込所 印師木村竹香	新潟新聞	T 4・10・11	
墨竹漫◆	北越新聞	T 4・9・30	
御大禮記念幅 寒山翁の篆刻揮毫	北越新聞	T 4・10・11	
文展選外品展覧会	報知新聞	T 4・10・22	
山田寒山来津	新潟毎日新聞	T 4・10・23	
寒山和尚画会	信濃毎日新聞	T 4・10・27	
芸術	東京日日新聞	T 4・10・28	
山田寒山氏…	北越新聞	T 4・11・5	
寒山和尚の画会	信濃毎日新聞	T 4・11・15	
寒山和尚の墨竹	佛教新聞	T 4・11	
寒山和尚の墨竹	長野新聞	T 4・11・15	

	新聞見出し	新聞名	発行年月日
山田寒山筆	北越新報	T 4・11・16	
寒山和尚の口占	信濃毎日新聞	T 4・11・21	
寒山翁加茂に滞杖	新潟毎日新聞	T 4・12・9	
寒山翁の加茂滞杖	新潟新聞	T 4・12・7	
会合 寒山翁茶話会	新潟新聞	T 4・12・9	
加茂に於る寒山翁	北越新報	T 4・12・22	
鐵刀木の笏	北越新報	T 4・10・8	
乙卯晚秋北越客中值伊藤公七回忌辰賦奠寒山山田潤	北越新報	T 4・10・24	
寒山和尚画会	信濃毎日新聞	T 4・10・27	
贈寒山老師歩其近作韻 西郡能江	北越新報	T 4・11・2	
乙卯十一月念七夜。観菊於舟江中村医博仙露園寒山山田潤	北越新報	T 4・12・8	
寒山師面識会	越佐新報	T 4・1・4	
小須戸の寒山師面識会	北越新報	T 5・1・5	
寒山師面識会	新潟新聞	T 5・1・5	
北越道中遷新年	新潟新聞	T 5・1・1	
新潟詩壇 寄題聞水園 寒山山田潤	新潟新聞	T 5・7・1	
寒山和尚加茂に滞杖	越佐新報	T 4・12・6	
山田寒山氏来らむ	新発田新聞	T 4・12・18	
寒山翁の加茂滞杖	新潟新聞	T 4・12・7	
拝良寛禅师墓 寒山山田潤		T 4・10・15	
寒山山田潤漢詩	北越新聞	T 5・1・8	
素岳梨岡壽 永受嘉福 木村正平 梅花経一雪	国民新聞	T 5・1・1	
明治三十年の春…	北越新聞	T 5・1・8	
寒山詩頒布	大阪新報	T 4・12・31	
小須戸春秋会	新潟毎日新聞	T 5・1・13	
小須戸春秋会	北越新報	T 5・1・12	
山横澤記念事業	北越新報	T 5・10・12	
小須戸春秋会設置	新潟新聞	T 5・1・13	
墨竹十萬講会員募集	伊予日日新聞	T 5・1・7	

新聞見出し	新聞名	発行年月日
北越巡錫の寒山氏	中外	T5・2・1
古み、山田寒山和尚の…	毎夕新聞	T5
てびき	新潟毎日新聞	T5・10・12
特別広告	新潟毎日新聞	T5・10・12
加茂に於る寒山翁	北越新聞	T5
山田寒山師の消息	新潟新聞	T5・2
宿猗々軒憶鉄琴居士寒山山田潤	北越新報	T5・2・18
寒山氏講話会	北越新報	T5・2・24
森羅万象	北越新聞	T5・2・8
漫語録	鶴岡日報	T5・1・13
漢詩寒山山田潤次孝純譚韵却寄	鶴岡日報	T5・1・15
漢詩寒山山田潤	北越新報	T5・3・4
漢詩寒山山田潤	北越新報	T5・3・5
漢詩寒山山田潤	北越新報	T5・3・7
山馬の珍筆と相撲瓢	北越新報	T5・3・8
毎日詞壇	新潟毎日新聞	T5・2・28
漢詩寒山山田潤	北越新報	T5・3・15
寒山翁三條へ赴く	北越新報	T5・3
寒山和尚来遊	三條時報	T5・3・17
詩壇	新潟新聞	T5・3・24
漢詩猗々軒主人批	北越新報	T5・3・26
寒山寺譚り		
有恒学舎創立二十年祝典賦贈		
寒山翁と滑川澹如		T5・4・11
寒山翁歓迎会		T5・4・13
風聞ろく		T5・4・13
漢詩寒山山田潤		T5・4・12
地藏堂の寒山翁		T5・春
独立の報ある蘇州	報知新聞	T5・春

新聞見出し	新聞名	発行年月日
彩霞十里の仙郷	北越新報	T5・春
富益斎と寒山	北越新聞	T5・5・19
隣の噂	讀賣新聞	
健筆会場の千枚書	毎夕新聞	T5・5・13
吉田の寒山墨竹会	北越新聞	T5・5・19
片貝の寒山会	北越新報	T5・5・16
寒山墨竹画会	北越新報	T5・6・9
いろいろ吉田の寒山墨竹画会	新潟新聞	T5・6・7
漢詩玉川堂邂逅于寒山老禪賦贈醉古赤川祥	北越新報	T5・6・13
卷町寒山会	北越新聞	T5・6・14
山田寒山師来柏	新潟毎日新聞	T5・6・15
吸とり紙	萬朝報	T5・6・17
編集日誌	柏崎日報	T5・6・21
山田寒山師画会	柏崎日報	T5・6・22
柏崎寒山会	北越新報	T5・6・23
卷町の寒山画会	新潟毎日新聞	T5・6・25
寒山氏の墨竹	北越新報	T5・6・25
寒山式の気焔	柏崎日報	T5・6・23
山田寒山翁令嬢墨江女史(当時十四歳)の筆	北越新報	T5・2・27
漢詩寒山山田潤	北越新報	T5・7・1
寒山和尚艶聞	北越新報	T5・7・2
遜軒氏画寒山氏賛	北越新報	T5・7・3
寒山雅会	北越新報	T5・7・9
小千谷と寒山師	北越新聞	T5・7・14
漢詩寒山山田潤	北越新聞	T5・7・31
小千谷寒山和尚翁歓迎会	北越新報	T5・7・28
漢詩渡邊燕生寒山来漢詩寒山老衲	北越新報	T5・7・28
山田寒山氏筆		T5・8・2
漢詩渡邊燕生	北越新報	T5・8・2

		新聞見出し	新聞名	発行年月日
漢詩	寒山老衲	北越新報	T5・8・3	
山田寒山氏	北越新報	T5・8・4		
小波山人の俳句 印は寒山氏が刻して山人に贈れるもの	北越新報	T5・8・5		
漢詩 岡部東雲 寒山老衲	北越新報	T5・8・9		
漢詩 岡部東雲	北越新報	T5・8・11		
山田寒山篆刻3顆	北越新報	T5・8・10		
寒山師の寄贈	北越新聞			
閑話休題	国民新聞	T5・8・14		
木村正平篆 谿雲初起日沈閣	新潟新聞	T5・8・16		
啓々新緑の候 愈々御清祥奉慶賀候				
寒山墨竹画会		T5・5		
漢詩 岡部東雲 呈山田寒山和尚	北越新報	T5・7・4		
漢詩 寒山山田潤 島崎君峻哉惠高什	北越新報	T5・7・3		
漢詩 寒山山田潤 岡部東雲翁辱寄一絶	北越新報	T5・7・12		
羅漢松の笏	北越新聞	T5・7・10		
書画贈答	国民新聞	T5・8・9		
風聞録 山田寒山和尚…	国民新聞	T5・8・14		
漢詩 寒山老衲 春畝公滄浪杯小記	北越新報	T5・8・22		
閑話休題	国民新聞	T5・8・24		
風聞録 山田寒山和尚…	国民新聞	T5・8・24		
山田寒山の秘蔵弟子…	越後タイムス	T5・8・27		
涼を趁ふて	東京中外	T5・9・3		
涼を趁ふて	東京中外	T5・9・4		
坂田の大幟と寒山翁	北越新報	T5・9・3		
滑川澹如氏筆	北越新報	T5・9・2		
漢詩 小村有恒 次山田寒山翁宿北湯雲居詩韻	北越新報	T5・9・8		
山田寒山師	北越新報	T5・9・15		
寺泊と寒山和尚		T5・9・24		
多賀家の寒山会	北越新報	T5・10・2		

	新聞見出し	新聞名	発行年月日
多賀家の寒山会	北越新聞		
漢詩 寒山山田潤	北越新報	T 5・10・11	
寒山師と糸魚川	北越新報	T 5・10・29	
糸魚川の山田寒山	高田日報	T 5・10・28	
漢詩 寒山山田潤		T 5・11・1	
漢詩 寒山山田潤	北越新報	T 5・11・27	
新年所見	三条時報	1・1	
當町の良寛会	三条時報	1・3	
如雲会の募集	三条時報	1・15	
寒山師の屏風講	柏崎日報	1・15	
良寛忌と展観	北越新報	1・8	
寒山師翁の屏風講	北越新報	1・15	
漢詩 寒山山田潤	北越新報	1・21	
漢詩 寒山山田潤	北越新報	1・24	
日本寒山寺建立の計画	北海タイムス	2・2	
木村正平氏篆 四海皇風治	新潟新報	2・11	
漢詩 山田寒山	北越新報	3・20	
一日一人	北越新報	2・11	
默鳳寒山法要 大慈寺に於て	巖手日報	T 9・12・2	
良寛禪師法会	国民新聞	2・20	
元旦の聖			
篆刻の名匠逝く			
古今一の印学者 中井敬所翁の事 益田香遠老人の談話			
中井敬所翁の徳富社長に宛たる書簡の一節			
伊藤公の決別 公爵令息伊藤文吉談			
滄浪閣印譜			
鴻雪爪先生逝く			
野口寧斎氏逝く			
鉄筆閑話 山田寒山			

	新聞見出し	新聞名	発行年月日
鉄筆閑話（山田寒山氏談話）			
鉄筆閑話《四》《山田寒山師談話》			
鉄筆閑話《五》《山田寒山師談話》			
小集の記五世蔵六氏記念合作			
閑話休題			
鴻雪爪翁（二）			
鴻雪爪翁（三）			
鴻雪爪翁（四）			
篆刻談（濱村蔵六氏談）			
濱村蔵六氏篆刻談（二）			
濱村蔵六氏篆刻談（三）			
濱村蔵六氏篆刻談（四）			
濱村蔵六氏篆刻談（五）			
濱村蔵六氏篆刻談（六）			
濱村蔵六氏篆刻談（七）			
閑話休題			M44・8・18
孝子貧家の門より出づ			
孝子良雄の表彰式			
孝子に寄贈金			
天下一品の交換手			
向山中将の薨去			
松島鑑上の勇士			
槐南博士逝く			
天下に及ぶ者無し江木冷灰博士の談			
林田翰長の愛嬢に與へたる嫁の心得			
娘問題の総評 田所普通学務局長談			
三千年前の人形興味ある比較研究			
古今印叢金冬心刻			
小野湖山翁逝く			M43・4・13

	新聞見出し	新聞名	発行年月日
漢詩人の大関三島中洲博士の談			
一刀刻の鉄筆名家 菱刈雲仙氏の滞在			
楽焼の名人上京す代々水戸家に信任厚き人			
国民文学 支那の土偶 中村不折氏談	国民文学		M43・8・4

追加項目			
寒山寺建立墨竹十万講	北海タイムス		
山田寒山葬儀	山梨日日新聞	T	
日本寒山寺建立			1・19
山田寒山師葬儀	北越新聞	T	
糸魚川の良寛：			
寒山和尚の消息	夕刊北越新報	T8・3・28	
寒山師追悼会	紀伊新報	T8・1・22	
山田寒山師逝く 二木嶋で式修行	国民新聞	M41・7・5	
寒山の状袋入	文芸美術	T6・1・16	
寒山寺建立化縁画会	国民新報	T8・1・19	
山田寒山師葬儀	中央新聞	T8・2・27	
山田寒山翁逝く	国民新聞	T8・1・19	
山田寒山師葬儀	秋田魁新聞		
山田寒山翁逝く	やまと新聞	T1・・27	
山田寒山翁逝く		T5	
乙川大愚篆 寒山批評	北越新聞	T・2・4	
寒山和尚の消息	中外商業新報	M43・1・8	
庚戌元旦試筆	北海タイムス	10・31	
天長節祝日（日の出）		T6・・13	
姑蘇城(5)寒山寺（上）落翠城	大阪毎日新聞	T5・3・12	
禪門の秘曲を吹く 寒山寺の大法要	大阪朝日新聞	T5・3・12	
十一日の寒山寺遠忌Ⅱ尺八虚鈴の局Ⅱ			
寒山寺鐘披露			

	新聞見出し	新聞名	発行年月日
悼山田寒山 川柳久良岐			M44・7・29
蓮池を抱く大不夜城に歓語談笑の影		世界新聞	T6・2・5
東亜美術会起る		山陰新聞	T5・1・9
日本で寒山寺建立			T6・1・21
寒山寺墨竹十万講		横浜貿易新報	T6・1・16
文芸美術 日本寒山寺建立屏風講		都新聞	T6
墨竹十万講		新潟毎日新聞	4
寒山師講演会		新潟日報	T・4・28
寒山師の村松巡錫		新潟毎日新聞	T・・24
新發田の寒山画会		北越新聞	T・7・12
山田寒山翁近況		新潟新聞	T・6・22
山田寒山師		北越新聞	T・7・23
篆刻家画会		北越新聞	T・6・14
村杉鉦泉と寒山翁		新潟新聞	T・6・3
水原の講演会		新潟毎日新聞	T・1・15
三條如雲会		新發田新聞	T・6・22
寒山翁来芝		北越新聞	T・1・12
三條の如雲会		中外商業新報	T5
涼を趁ふて		新潟新聞	T・7・25
芝田の柴焼雅会		北越新聞	T・1・15
寒山翁の加茂滞杖屏風講		山梨日日新聞	T・1・15
日本寒山寺建立		北越新聞	T・7・17
新發田寒山雅会		新潟新聞	T・7・12
山田寒山翁		新潟毎日新聞	T・5・29
水原の寒山翁		新潟新聞	T・1・30
寒山翁の屏風講		北越新聞	T・7・30
寒山と恩賜芋		新發田新聞	T・・21
笹岡の寒山翁			
山馬の珍筆と相撲瓢	都新聞		T6・・13



山田寒山肖像写真の謹呈
蘇州寒山寺において（筆者1番左）1987年

	新聞見出し	新聞名	発行年月日
姑蘇城（五）寒山寺（上）		都新聞	
姑蘇城（九）霧の夜			

第二節 園田湖城宛富岡鉄斎書簡翻刻

インタビュー「富岡鉄斎を語る」①中田勇次郎 ②小高根太郎

近代日本美術史上、燦然と輝く書画家富岡鉄斎は、文人画最後の巨匠といわれている。

鉄斎を語るに、人は常に絵画を中心にとらえてきた。当然、幾度となく開催されてきた展覧も、画業に視点が置かれてきた。はたして、このことが鉄斎芸術の全容を余すところなく、とらえることになったかどうか。更に、画集は膨大な数のものが刊行されている。しかし、書や篆刻に本格的にメスを入れたものは少ない。

園田家に湖城宛鉄斎書簡が所蔵されている。湖城宛の書簡は内容から大きく五種に分類できる。一は刻印の依頼状、二は刻印の御礼状、三は墨に関するもの、四はさまざまな物品を贈られた御礼状、五は、湖城の質問に対する解答や、書画の揮毫に関する事などである。

湖城宛鉄斎書簡の価値は、鉄斎芸術が開花した最晩年にあたる十年間のものであることが、その第一に挙げられる。行間をとらない彼独自の章法は、そしてその鬼気迫る文字群は、彼の生命の表出と言えるものである。実に文雅の香りの高い、雅趣溢れるものとなっている。また、鉄斎は自ら下絵を描いて、版におこし、木版刷りにした巻紙や信箋を使用しており、非常に美しいものである。

その第二は、篆刻家園田湖城との交情の深さである。鉄斎は多くの文人と文雅の交わりを持ったが、中でも鉄城や湖城など篆刻家との交友は心暖まるものがある。鉄斎自身、若年篆刻家を志したと言われており、彼の印譜『無量寿仏堂印譜』に、自刻印が五〇顆載せ

られている。鉄斎は「印奴」、「押し魔」と称していいほど、膨大な数の印を蒐集し、使用した。彼の印好きは尋常ではなかった。鉄斎の篆刻に関しては、前掲の第五章第二節「富岡鉄斎の篆刻と篆刻論」の中で取り挙げた。その書簡の端々から彼の人間味の溢れた心情を汲み取ることができる。鉄斎の書簡は、市井の生活者としての肉声の聞けるものといえよう。

解説凡例

一、字体は通行字体を主として採用したが、書名、人名及び異体字等に関しては、原文を尊重した。

一、仮名遣いは原文のままとし、通読の便を考慮し、句読点と返り点を適宜施した。

一、誤字、脱字と思われるものは、原文の通りに翻印し、適宜その傍に（ママ）とした。

一、行移り及び信箋がえは、原本に従わず、適宜改行した。

一、判読し難い箇所は、字数を推定できる場合は□で示し、判読推定した場合は□内に記した。

一、書簡は、年月日が不明なものが多いため、内容から分類し配列、一連の書簡番号を付した。主として、書簡番号1～5は刻印の依頼状。6～22は刻印の御礼状。23～25は墨に関するもの。26～34はさまざまな文物品を贈られた御礼状。35～47は湖城の質問

に對する返答や、書面の揮毫に關するもの、その他である。

一、冒頭の数字は書簡番号を表わす。

①②⑤については以下の事柄を記載した。

①判明できる年月日

②書簡表書き ③書簡裏書き

④封書、はがきの區別 用筆の別

⑤備考

1 ①三月八日

②園田湖城様 富鋈

③封書 墨書

過日之印影、今不レ知二其所在一也。例之日暮者書院、書籍整理ニ付、御尋之古印譜、貞幹之著、文庫之二階有レ之筈。其中探し、見當之際、御報知可申也。御役ニハ不レ立之粗印譜、集古十集之部、代リニ御覽ニ入れ可レ申。猶愚拙之魁星圖之(、)、御一鏤煩ハシ候。但し古篆古刀法、希望致候。愚拙老衰、百事抛擲致し居、省畧之儀、御海恕是祈。

三月八日

鋈叟

園田湖城様

2 ①三月十三日

②園田湖城様 鋈叟 唐紙添

③三月十三日

④封書 墨書

尊書拜閱、弊藏集古印請正ニ領収致候。印石壹顆御惠贈、望外之歡喜也。別紙ニ印文認、何卒御奏刀願入。又本朝古印、不二探當一。僅ニ尚友圖録、見當候。但し貴家ニモ御所蔵否、菟も角も供ニ貴覽

一候。只今揮寫、當用而已御答、且ツ願入候。

三月十三日

富岡鉄叟

園田湖城様

3 ①六月七日

②園田湖城様 富鋈 侍員

③六月七日

④封書 墨書

昨日、林谷山人鏤印譜、御丁寧之御謝、慚愧致候。今日摹印述御惠贈、多謝々々。愚息支那漫遊之日、為二兒女一、瑪瑙印材、為二土産一、是ニハ煩二貴刻一茂、些御迷惑、御察し申上候。猶亦、他日可レ申。今夕、書院閉鎖後ニ付、畧筆御海恕。

湖城篆士

鋈叟

六月七日夕

4 ①六月五日

②園田湖城様 富岡鉄斎

③六月五日

④封書 墨書

舊菖蒲節句ニ令息之為ニ御祝慶一、登龍門鯉魚壹尾、粽數本御惠投、御配慮之厚、是大歡致し候。幾重茂御禮申述候。序ニ願度、蘇山造二此瓷印一、被レ惠。即、拙筆一揮致候。右、高野山座主ニ可レ貽と考候居柄ニ付、何卒煩二貴鏤一度、委細今難レ盡、懇々希望也。

六月五日

富岡鉄齋

園田湖城様

5 ①七月三十日

②園田湖城様 富岡百鍊

③七月卅日

④封書 墨書

⑤案山子図の稿の紙片あり

昨今暑熱、不接人事、嬾臥之際、得尊書、及支那泥盃箋數枚御惠贈、忝拜掌致候。□而、審詳致候。雅契不撓此炎熱、御壯健之趣、是可羨也。御書牘中之件々、承知致候。但、涼氣颯々之頃、適意の節、拭筆。此段緩慢ニ願入候。猶復、琥珀小印材、且別紙之形狀之案山子圖、御奏刀願入候。昨今援筆大ニ懶情、御海函可レ被レ下候。

七月卅日

富岡鉄齋

園田湖城様

有合、不レ知二其可否一、呈進致候

案山子圖 尤朱形也

引首用ニ充

案山子図の稿の紙片

6 ①一月二三日

②園田湖城様 富岡鉄齋

③封書 墨書

先達、新禧之御祝慶ニ御貴臨之處、折柄風邪ニ而、醫戒ニ付、不レ能ニ客接一、遺憾々々。今尚、籠ニ于一室一、謝二絶來人一、攝生中也。今日御尋問、忝存。又拙名之新規御鐫刻御惠贈、多謝候。他日暖天、氣分快勝之節、御藏印拜觀、希望致候。今日ハ當用御答迄。

早々

一月廿三日

富鉄叟

園田湖城様

7 ①十月十日

②園田湖城様 富鉄斎

③十月十日

④封書 墨書

洗兒詩畫扇、爲二一咲一、呈上候。御丁寧之品々、御惠贈ニ預、痛入候。但々家族輩、喜悦可レ致候。石冊之題字、塗抹惡戯致候處、今日百鍊老鉄、鄙人可二愛用一石印一顆御惠贈、殊ニ篆文鐫法、共ニ奇古、最可レ喜。其中、墨戲一揮之節、試用可レ致候。愚拙多忙之爲、不二取敢一、即刻之御受迄。早々。

十月十日

富岡鉄齋

園田湖城様

8 ①八月十七日

②園田湖城様 潤資雜物返上

③八月十七日 富岡鉄齋

④封書 墨書

過日者、御邪魔致、恐肅致候。本日、爲レ僕、筆墨道場之大石印、御惠贈、大可レ喜。刻亦、大ニ妙也、槩僧之遺筆二管、是亦、必用、可レ喜也。岩倉家之舊藏印譜、是者、有三其所二由來一。最可レ珍。又、芙蓉製銅印壹顆、印譜共、御預り置候。外ニ他日御依頼之書雅扇、并金箔壹枚、他之以頼、可レ断之處、貴家ニ對し、今姑御預置、潤筆ハ、先御返上。芙蓉眞跡山水、但し簡齋賛、未レ詳二其人一、是ハ返上、他(日)ママ考ヘ置可レ申。即今、來客并依頼謝断嬾臥、當用早々御受申、餘ハ他日相期候。

八月十七日

富岡鉄齋

園田湖城様

9 ①十一月十一日(封書十一月十六日)

②園田湖城様 富岡

③十一月十六日

④封書 墨書

拜讀尊書。頃日、觀楓雜遯之際、爲二篆學一、輟耕錄之璽印部、御手寫之趣、是二ハ愚蒙感服致候。篆學熱心家ニハ、如レ此ニ有度候。近世藝術ハ一般、近世之流行ニ走而、不レ究ニ其水源一、遺憾之至リ也。尊著之小印譜ニモ、題字能ク御取調致候。今日御惠投竹根印、尤雅品、可レ愛。多謝々々。座右ニ有合、竹雲追薦之粗扇、爲二御咲草一進(上)ママ致候。猶亦、輟耕錄、寛ク御留置相成度。御禮旁ク申入候。

十一月十一日

富岡鉄齋

園田湖城様

大原重徳卿之小傳ハ贈位名賢傳ニ出タリ。其書探スモ不レ知。跡ヨリ可(力)申。

10 ①六月二十四日

②園田湖城様

③六月二十四日 富鉄

④封書 墨書

蘇東坡洗兒詩、此詩ニ付、先輩言、甚蘇子之境界感服之説多シ。故ニ明詩話及呂晚村大家之和詩ヲ録出。其旨趣ヲ能御了解。是此圖呈上之本意也。又家族之希望之瑪瑙小印、御迷惑、御勉強、大ニ喜悅之上、兒輩必用之文房具御惠贈、彼等喜而御禮申居候。愚老疝通ニテ嬾臥、畧筆請恕。

11 ①十二月二十三日

②園田湖城様 富岡百鍊

③十二月廿三日

④封書 墨書

御多務之際、金婚式之爲、御祝賀紅白眞綿御惠投、多謝候。殊ニ可レ樂者、妙鏤之奇石、八十九叟之賜、重ク感謝致候。折角之御高配、御受如レ斯候。

十二月念三日

富岡鉄齋

園田湖城様

12 ①三月十五日

②園田湖城様 富岡鉄叟

③三月十五日

④封書 墨書

如貴諭、昨夜來、飛雪粉々、御尋之(如)ママ、擁二手爐一、僅無為ニ相凌居候。御省慮可レ被レ下候。

却説、魁星閣、致二拜觀一候。是亦、御惠刻之印章數顆中、如レ比妙鏤無レ之、驚喜不レ能レ置、感謝々々。且自謂、如此印章者、先得二我志一二付、他日拙筆一揮之落款ニ致し可レ誇也。例之早卒御受迄、如レ斯申上候。

三月十五日

富岡鉄齋

園田湖城様

13 ①十二月十六日

②園田湖城様

③十二月十六日 富岡

④封書 墨書

領収

一 東京大倉氏幅并壹封添
一 賤庚八十七章、尤御注意可レ喜。
一 獨立法書。 一 朱肉、々池器。
右、入掌致候。昨今、援筆忙劇之際、畧而受書差上、落成之日御通知可二申述一。

園田湖城様

十二月十六日

鉄齋

14 ① 二月十九日

② 園田湖城様 富岡百鍊

③ 四月十六日

④ 封書 墨書

昨日、大雲院へ拙筆座筆塚建築之爲ニ出車之際、拜堂、御芳志之拙用印拜受、歡喜致候。就テハ幸ひ拙筆認有レ之候。進上、御咲置幸甚。餘ハ後日可二申述一。右ハ揮毫中、省畧。有恕是祈。

鉄齋

園田様

鍊

乾漆小印御惠贈、多謝候。前年延暦寺政所印、捺し貰ひ有候。進(上)ママ。外ニ記事とて無レ之。週日寒氣、心氣不快ニ付、閣筆。

二月十九日

鉄齋

湖城様

15 ① 五月一日

② 園田湖城様 富岡鉄叟

③ 五月一日

④ 封書 墨書

尊翰拜閱。益御健康、是可二大賀一也。過般、菖蒲節句之故事畫、御嘆留幸甚。支那古銅魁星圖印、又拙氏之富印、御惠投、多謝。外、詩箋一包、必用品、右孰れ母喜而拜受致し置候。過般、榊原篁洲之著書印譜、此ノ分見當り候間、御覽ニ可レ被レ成。昨今、非常之多忙ニ付、畧筆至レ此。頓首。

五月一日

富岡鉄齋

園田湖城様

16 ① 三月五日

② 園田湖城様 富鉄叟

③ 三月五日

④ 封書 墨書

過日御邪魔之義、願入候。早速御承諾之義、是可レ喜也。但し蔵書印之事ニ付、印材粗惡ニ而宜敷、貴手之御都合次第、可レ然也。猶、時日共、御勝手之義。乍レ併、早方喜入。今日、肉池ニ精肉、必用品、感謝。但今揮毫之際、當用御答、餘ハ他日相期候。

三月五日

富岡鉄齋

園田湖城様

17 ① 十一月十一日

② 園田湖城様 富岡鉄叟

③ 十一月十一日

④ 封書 墨書

過般、支那新刊、知白齋墨譜式冊、大ニ悦レ目娛レ心、重々御禮申上候。

家蔵印譜、小冊四卷、是ハ二十四品、唐詩評題目共、篆字鏤法評論、最可レ參考一二付、進呈致候。尚又、高野山之鼈印、御骨折、御察

申入候。右御禮之微意ニ、拙畫魁星圖一揮、高庇貴鏤、或御惠投之魁印使用、雅用相弁、決御咲草ニ進上。

園田湖城様

富岡鉄齋

18 ①六月十六日

②園田湖城様 富岡鉄叟

④封書 墨書

梅雨霏々、無聊、御同情と存。拙陋東坡戴笠圖、美觀裝潢、御配慮之厚、可レ喜。而又、慚愧致候。題箋之後、御報知可申候。鐵齋奇想之刻、感謝々々。猶、他日相期、可二申上一也。

園田湖城様

鉄叟

六月十六日

19 ①三月十二日

②園田湖城様 富岡鉄叟 副茶鐘

③三月十六日

④封書 墨書

過般御邪魔申入之處、御快諾、且早速ニ御鏤刻之大石章、拜觀致候處、御熟練之妙、可レ驚也。孫婿之願主人、醫院出席中ニ付、歸宅後、大喜可レ致候。不二取敢一、御受申上候。
從二支那一歸朝、爲二土產一、茶鐘贈來候處、雖レ不レ知二其清味否一、遠方御持参之御禮迄進上申上候。

三月十二日

富鉄叟

園田湖城様

20 ①九月三日

②園田湖城様 富岡鉄齋 不及御回答

③九月三日

④封書 墨書

過日、御使ニ預リ候處、不在中ニ付、御謝書延引致候。家藏米芾硯搨圖譜二冊、尤珍賞致候。外ニ御熟技石印章一顆御惠貽、御配慮之厚、重々感謝申述候。有合高野山煎餅壹罐、御子達ニ進上。餘ハ他日御禮可二申述一候。

九月三日

鉄齋

園田湖城様

21 ①昭和十年十二月二十日

②市内寺町綾小路下ル東カハ

印匠家 園田湖城様 十二月廿日

住所印 京室町中立賣北 富岡百鍊

④葉書 墨書

東京大倉氏之拙筆、聖覽讀書會圖、匣書致し置候。但し潤筆料、添置有リ候之處、貴家紹介、又骨董商之外ハ、是ニ不レ及、先方へ返上可レ被レ下候。石印八十七叟、并ニ精製朱肉御惠贈、多謝々々。持せ上可レ申之處、歳晚多事、人手不自由ニ付、御報知申上候。差當リ急要迄。早々。

22 ②寺町綾小路南東カハ 園田湖城様

富岡 返上又添物

④封書 墨書

過日者、精良印肉、並來年一日來、可二要用一之妙刻石印、感謝々々。大倉氏と違ひ、骨董商ニ非、其人篤志ニ對シ、匣題無料ニテ可レ題也。故ニ潤筆料返上、匣内ニ収メ置候。拙筆壽老扇、刻成。印

章ハ貴刻ニ付、呈上。

園田湖城様

鐵齋

23 ① 二月十五日

② 園田湖城様 富岡鉄叟 御書冊相添

③ 二月十五日

④ 封書 墨書

過般、東坡墨之御高話之處、前年右之墨型之品、一覽致候。尤不審之品鳩居堂鑑定南都摹造品、今回小山林堂文房中之品云々ニ付、一覽希望之愚書差上候。今日御持ニ預リ、熟覽可レ致ニ付、姑ク留置候。其上ニ而、御返答致、又都合ニテ御面倒申入候。今日ハ先ツ留置候。其段御含願上候。

二月十五日

富岡鉄齋

園田湖城様

24 ① 昭和十年二月十六日

② 市内寺町綾小路下東方ハ

印刻家 園田湖城様

③ 二月十六日

住所印「京室町中立賣北富岡百鍊」

④ 封書 墨書

東坡墨、早速御持參ニ預リ、夕景ハ例之電燈下ニ痴坐、其儘ニ致し置候。今朝閑緩一覽致せしニ、小林堂之文房圖録ニ所レ載ハ相違ス。彼ハ眞古墨、七百七八十年之品、形狀重量詳記ス。而、此墨者、形狀是ニ及全備、且新型之體也。全、昨日申入候和製贗造、昭々然焉。米庵と東坡之記載スル所、其眞品可レ證也。此墨ヲ贗造偽作セシハ、前年一覽ス。全ク此墨ニ同類タリ。東坡墨ノ眞物、禹域ニテモ希有

タリ。僕、程君房、方于魯始、諸墨譜并明墨少々藏弁ス。故ニ此東坡墨、君房墨等、一覽希望致せし也。仍テ何時ニテモ返上、都合之人有レハ持せ上可レ申。先ツ有の儘、鄙意陳述致候。

二月十二日

富岡鉄叟

園田湖城様

若、賣品ト有レハ、明眼人ノ公論ニ任スベシ。僕ハ十圓迄ナラ買取可レ申。蓋、爲二他日参考一、決而掘出モノ野心ハ有セズ。契以爲二如何一。

25 ① 昭和十年二月十四日

② 市内寺町綾小路下ル東側

印刻家 園田湖城様

③ 二月十四日

住所印「京室町中立賣北富岡百鍊」

④ 封書 墨書

昨日、預ニ貴价一折節、寒氣以來、腰痛之爲、安臥致居、回答勿々、且省略致し置候。今朝、貴書再閱致候。右ニ付、一事御窺申度候。御示し之古墨、右ハ米庵之小山林堂文房圖中癸部載有、重目十三錢五分云々、果して其品ニ該當スル品乎、又君房作、是亦載有リ。右二丸、彌眞物ナリ哉。余、未見ニ付、何共難レ判。就テハ右之品、賣與ニ相成否、承度。果讓與ニ相成ルニ於テハ、眞價何程ナリヤ、且ツ一覽之上、一訣可レ致、其段御周旋ニ相成哉、御尋申入候。尤、愚蒙之氣適スレバ、其價、如何様ニモ致候。但シ曖昧之義ハ、是亦不レ取。捻テ正實之段、希望萬々也。尤、不賣之品ナラ、不レ及ニ此周旋一也。

二月十四日

富岡鉄叟

園田湖城様

昨日御惠投洗兒圖扇、雅趣可愛感謝々々。

26 ②園田湖城様 富岡 臥筆乞恕

④封書 墨書

愚臺、冷氣之爲、腰痛閑臥之處、強而爲貴囑ニ、蕪筆一揮。取ニ御遺し可被下候。御使ニ御渡し可申。拙筆補之者、裁縫之巧、御承知可被下也。歷朝印譜御惠投。多謝々々。 鉄老人

園田湖城様

27 ①八月二十六日

②園田湖城様 富岡鉄叟 御預品返上

③八月廿六日

④封書 墨書

尊翰拜受。如ニ貴諭一、殘暑不レ易レ凌候處、御健康、是可レ賀也。過般高命、不レ顧ニ拙陋一一揮、或題跋相認、亦額字、何れも暑中、別而拙惡、御用捨可レ被下候。夫ニ付、不二思寄一、大硯、筆筒、華箋御惠贈、乍過分之品、折角之御寄贈、先御受置候。愚臺も此頃、百事抛棄中ニ付、畧而御禮申上候。

八月廿六日

富岡百鍊

園田湖城様

28 ①七月四日

②園田湖城様 富岡鉄齋

④封書 墨書

⑤「評山品水」朱之印影の紙片あり

賣書扇圖贊之引首引（印）、不明ニ付、別紙捺影致候。彼絹本ハ、捺印大ニ困リ而、不レ得レ止之不鮮。且ツ此印影ニテ如何。

拙筆御丁寧之謝辭、赧顏之至也。龜鈕子母印御惠贈、猶亦文字御懇刻之言、喜悅致。閑暇之日、考可レ申候。但今揮毫勉強ニ、畧筆御寛恕是祈。

七月四日

富岡鉄叟

園田湖城様

和氣公社務所之祭事、小紙差上候。

29 ①二月十七日

②園田湖城様 富百鍊

④封書 墨書

過般、手捏泥塊印、進上之處、無文云々。愚老懇意人、西園（寺）ママ侯爵、桑名鎮城子等ニ贈り可レ申之爲、手瓷印窑造、故ニ無レ字、素。其所レ見篆鏤ハ、各自手鐫可レ有筈也。此辺ハ惊察有度。元來、無能無藝ニ付、如レ斯。又今日ハ御祕藏之古銅印、御惠贈之無レ故、拜受痛心如何、御辭退可レ申之處、折角ニ付、此儘留置候。即今揮毫中、畧謝。餘ハ他日重而申述候。

二月十七日

富岡鉄齋

園田湖城様

30 ①昭和十年四月十一日

②市内寺町綾小路南東側

印匠 園田湖城様

③四月十一日

住所印「京室町中立賣北 富岡百鍊」

④封書 墨書

先般、五條御影堂境内、宜阿彌家御依頼之由、當家扇估之名望家、且御丁寧、萬年湖、小倉山乾楓插扇類、御惠贈ニ付、勉強、名所圖

一揮到候。此扇ハ俗品ニ付、實ハ大嫌ヒ、今回不レ得レ止、塗抹致候。是ニ而御免可レ被レ下。猶亦、潤筆一包御添有レ之候處、是ハ御辞退申入候間、同家へ御返却可レ被レ下候。但し不ニ相濟一と有レハ、代リニ拙筆製之扇を賜まわれハ、大ニ好也。亦曰く、愚老々衰、筆墨蕪穢ニ流れ候間、慚愧致候ニ付、此後筆墨避去候間、其義御紹介御断、就テハ貴契母其義御含可レ被レ下候。右、宣阿彌家へ御達し願入。

湖城雅契

鉄齋

31 ①十一月二日

②園田湖城様 富岡鉄齋

③十一月二日

④封書 墨書

今日御手書御丁寧之義、慚愧致候。且ツ懇々之御説論、不ニ敢當一也。牧溪自賛中、財ヲ賤ニ悞リ、御意添辱ク、仍老耄之過、如レ斯。貴輯之小銅印、題字考案中也。其印譜、貴書ニ、璽字ハ印典ニ據ルト、秦始皇ノ印璽ニ用ヒテ他ニ不レ用ノ説、能御取謂(調)ママ有り度候。但ノ粗陋讀否。

今日御惠贈ノ古墨、古朱錠、最可レ愛。又董潤卿名筆、尤可レ喜也。過日不可避ノ舊債之拙筆、忙劇相極居候ニ付、僅ニ御受迄申上候。

十一月

富岡鉄叟

園田湖城様

32 ①十月十四日

②園田様 富岡

③封書 墨書

時候適人意之際、來人之為、迷惑不レ少。只今來談ニ付、畧答致候。

篁洲印章、今不レ知ニ其所在一、探出し差上候。支那古錠御惠贈、喜而御受申入候。芙蓉印聖時代人名、是ハ参考ニ必用と相考候。

十月十四日

富鉄叟

園田湖城様

33 ①六月五日

②園田湖城様 富岡鉄齋

③六月五日

④封書 墨書

貴書拜讀。雨天鬱陶敷日、無聊之至。先、可レ賀者、御令闈、男子御分婉、他日菖蒲之御祝、可ニ申述一候。拙筆ニ付、御配慮、決而不レ可レ然。御放棄可レ被レ下候。代リニ希望之品、願試可レ申。捻、有の儘ハ得意也。印文輯畧其一、菟も角も留置、他日御商量可レ致也。唐筆唐紙御惠贈、支那賀青蓮製、平生愛用ニ付、殊喜入候。當方より可レ呈者、林谷小印譜、御一咲。餘ハ他日當御答迄、如レ此。早々

六月五日 霏雨蕭々

富岡鉄叟

園田湖城様

34 ①十二月二十九日

②園田様 富岡 別小冊

③二十九日

④封書 墨書

如ニ貴論一、歲暮無ニ餘日一、多事之折柄、為ニ御見舞一、支那小箋二個、御惠投、多謝々々。何方茂忙劇之際、省畧、來陽可レ申也。有合、杏所印譜進上。時、大寒大到。御自重千萬々。

十二月念九日

富岡鉄叟

園田湖城様

尚、洋冊、愚孫ニ御遺し。代而御禮申上候。

35 ①十一月六日

②園田湖城様 富岡鉄叟 輟耕録一冊相添

④封書 墨書

昨今非常之多忙、且ツ記憶薄弱ニ付、頓と忘れ事ニ付、大原重徳卿之近世之事、何ニ詳ナルヤ、今不レ覺也。此卿秀歌ハ記憶致候。

眞白にも からくれなゐニ 咲花の

名ニ（ハ）ママもとりて 桃色そよき

璽印之説、後人粉耘、其原ハ輟耕録之最初と覺候。幸ヒ手元ニ有リ、御考可ニ相成一候。愚蒙只今揮洒ニ付、他日可申述一候。君當レ恕二耄人一。

十一月六日

富岡鉄叟

園田湖城様

憚壽平竹石圖

是ハ不レ免二疑惑一。先愚眼不服也。弊家憚南田法帖全集祕藏致し居。題詩果有レ之否、他日可レ查。惠印肉、尤喜入候。

鍊齋

36 ①昭和十年九月二十二日

②市内寺町綾小路下ル東側

園田湖城様

住所印「京室町中立賣北 富岡百鍊」

③九月廿二日

④封書 墨書

愚老近時忙劇之崇、衰老之弱り、事々疎嬾ニ陥り、何も歟母延遲致し、遺忘致し、不都合之義、自覺之爲、事々省畧致候間、御紹介之事、其段推察可レ被レ下候。宣阿彌扇、其中ニ御通知。

魁星圖匣、明日ニテモ一揮致候。過日、支那羅氏、此詞箋お送り、他日御目につけ候。

園田湖城様

富鉄齋

37 ①二月二十五日

②園田湖城様 富岡鉄 返却品相添

③二月廿五日

④封書 墨書

鍊印一、珍賞致候。更ニ感謝申候。

餘寒難レ堪、殊ニ老嬾龜手、把筆ニ困却、畧文御宥恕可レ被レ下候。御示し之梵印考、是ハ芥津之處ニテ一覽、謄寫致し置候。

○璽印篆符、是ハ緩々拜見、都合ニよれハ謄寫可レ致。

○芙蓉印譜、弊藏致し候品ニ同し。返却。

○芙蓉畫、五老ハ如何と存候。返却。

○田邊某氏之小箋之文意、無二間違一、可レ信。且足下之御紹介ニ付、箱書可レ致ハ承知致候。

○近刊東坡全集一本進上。御精讀可レ被レ下候。僕ハ要用之外ハ畧答可レ致、此義御惊察有度。

二月念五日

高岡鉄齋

園田湖城様

38 ①十二月二十三日

④封筒欠 墨書

拜吊可レ致之筈、老衰、乍畧禮、以レ使御悔詞申述、且薦二薄典一

候。

十二月廿三日

高岡鐵齋

園田様

39 ①三月二十日

②園田湖城様 富鉄 御預り品返品

④封書 墨書

過日高嶺古名家之篆印譜冊、并芙蓉之梵字考、此書只今何方へ混入致し候か、不二見當一、他日搜し返上可レ致、鳥渡御断。愚之書室、數千卷座右ニ雜亂致し、此失措有レ之候。

光緒年間之黃肉、珍物也。今朝鉄城來顧、爲ニ土産一、自製之朱肉見レ惠。又同日同様、一奇也。

御預り之品、返上。愚老、來人面會謝絶致候。然し他日操（繰）マ合、委細可レ申、即今ハ不明也。

三月廿日

鉄齋

園田湖城様

日暮之前後、此後ハ御尋可被下候。

40 ①十月廿

②園田湖城様 富鉄 預り物返却

④封書 墨書

羅振玉高士之贈者、得ニ我意一。故、捺影寄ニ示足下一、被レ察ニ此意一、幸甚千萬千萬。

○ニ幅之拙畫、五十年前之眞蹟也。是、眞蹟ト雖、題匣、拙鑑類、堪忍々々。小印譜ハ御断リ申度候。當分ハ、嫌之事ハ見合居候。

園田湖城様

富岡鉄叟

41 ①七月三日

②園田様 富岡

④封書 墨書

尊翰拜誦。如貴論、俄然暑熱可レ厭也。拓本類補筆、考置。他合作類ハ、不レ好事ニ付、先御預リ置候。印譜并石譜、緩々拜觀仕度候。猶、其中にも幸便相期、御返答可申候。早々。

七月初三

富鉄齋

園田湖城様

42 ①八月三日

②園田湖城様 富岡

③八月三日

④封書 墨書

此頃、炎暑不レ易レ凌、弥御健康と御察し候。愚蒙嬾臥、謝ニ絶來人一致居。先達御遺し之石譜ニ、二圖補ひ置候。外ニも印譜一部、可ニ参考一之品、暑中爲ニ問訊一、進上致候。十日頃ニ、南隣聖光寺之墓參之節ハ、御門外通行之筈、其節相期、御伺可レ申考。

八月三日

富岡鉄齋

園田湖城様

43 ①五月十日

②寺町綾小路 園田湖城様 富生

③五月十日 家僕持参

④封書 墨書

拜啓。過日、拙筆匣題落成ニ付、返却致候。其節御惠投、慈容即觀音冊、原本愚叟所藏致候。御惠投之冊、圖同而贊同、位置變更、相見候。先、可レ喜ニ付、御受、感謝致候。此詩箋、上海ニテ調製致

來。御咲草ニ進上致候。愚老之嬾惰眠、百事放棄、疎遠御海恕願上候。

五月十日

富岡鉄齋

園田湖城様

44 ⑤封筒欠

過般依頼之品々、不レ得レ止、勉強、塗抹致候。

但し爾後、拙手之題字類、堅御断。足下斗リニ非。何れへも一般、大概謝絶致居。輕易杜撰ニ陥ルハ老矇之所レ憂。此義御惊察。牧溪之補字、能惊解之人有否、發二一嘆一也。

45 ①昭和十一年一月十三日

②市内寺町綾小路下ル東方ハ

印刻匠 園田湖城様

住所印「京室町中立賣北 富岡百鍊」

④葉書 墨書

愚臺、新年以來、疝氣腰痛之爲、閑臥休息致、外出勿論、來人面會
謝絶ママ中之處、貴家御親父忌明、賦り物之袱御遺し候之處、世間
塩瀬之品、貴家繪絹御遺しニ付、御答申置候處、定而時日追可レ申
ニ付、強而羅漢圖一揮致置候。是ニテ認物、御免可レ被レ下也。何
時ニテモ取ニ御遺し、又傭人之都合ニ依り、持参可レ致か、先ッ御
報知申入候。

46 ①昭和九年六月三日

②市内寺町綾小路南東側 園田湖城様

③六月三日

住所印「京室町中立賣北 富岡百鍊」

④封書 墨書

過日御持参之拙筆匣題、一揮致置候間、何時にても御勝手ニ取ニ御
遺し。外ニ返上ハ、林谷山人捺印集。拙家、山人鏤、歸去來印譜小
帙、進上可レ致。印文輯畧、是者御譲リ不レ爲哉、但し強而者不レ
言ニ試也。當用御一方致候迄也。余ハ他日相期、可二申述一候。

六月三日

富岡鉄叟

園田湖城様

47 ②園田湖城様 富 鉄齋

④封書 墨書

御喪中、意外之要務相煩し、御氣毒也。猶、御手數費之義、此一封、
御影堂御達し煩候。猶又、御除服之日、御禮申入候。

除夕

鉄齋

園田湖城様

①中田勇次郎「富岡鉄斎の芸術と学問」(図3)

篆刻について

——本日は日本の生んだ世界的な画家、富岡鉄斎の芸術と学問についてお話をうかがいたいと思います。まず鉄斎の篆刻についてお聞かせ下さい。

中田 私は、あまり詳しく知りませんが。もつとやつとかんといかんかったんですが。まず、鉄斎の印譜からチェックするよりしかた

ないでしょう。『無量寿仏堂印

譜』などありますね。いわゆる篆刻家の印じゃないです。字法にしても刻法にしても。しかし、自分のものとして物を生かしていますね。

学問と芸術

——次に、「鉄斎は自分は学者であって画家ではない」と自信していました。鉄斎の学問と、芸術に与えた影響についてお聞かせ下さい。

中田 鉄斎の学問は、われわれの支那学の分類の学問とは違います。経学とか、書誌学とかね。鉄斎を大学者だといいますけど、いわゆる学問的な、たとえば京大の先生のようなタイ



図3 中田勇次郎氏御夫妻

プでは全然ないですね。もつと街の、つまり京都の街の雰囲気を知らないと、鉄斎は分からないでしょう。ご存知の通り、厩大な図書を持っていた。二回売り立てがありました。鉄斎がどういう蔵書を好んで持っていたか分かります。これが一応学問のつながりになるんですね。鉄斎はどこまでも粋といえますか、粋という言葉がありますね。粋の学問ですわ。清朝の考證学派みたいな学者ではありません。全部自分のイデオロギーの中から出てきた、書画観の中から生み出した、一つの人間体系があるんですよ。その人間体系がすばらしいもの、あの人は。それが生命なんです、あの人の。鉄斎は、中国の四王呉惲や本式の面を摹倣して、それにより自分の書画の世界を築いている人達とは違う。また、鉄斎は歴史に基礎がある。人物論に非常に長けている。人物の肖像画を全部持っている。私は以前、仲間と陽明文庫で鉄斎肖像の肖像画展「富岡鉄斎模写人物肖像展」をやったことがある。普通の人と違います。人間というものをしている。一つのテーマが人間にある。そのテーマが、あの人の道徳的精神も加えて、道義的な一つの道に結びついて、それが画にあらわれていく。それがただ単に、歴史的な道義でなく、人と人との関係でできってくるんですわ。一例あげますと、私の近い人に岡本橘仙という人がいる。宿屋の主人ですが、商売やらないで遊びや学問をやつてね。鉄斎と親しかった。俳句、歌、詩を作り、漢文も読めた。列氏の天瑞篇の研究という論文もある。世に出てませんが、鉄斎みたいなタイプの人がいるんですわ。この人は、京の街の気分というものをよく知っている人です。園田湖城さんもそうです。体系的な学問ではない。伝統的なものは尊びますけれど、自分でやるべきものは、自分の道いものをこの街の中で見つけ出す。鉄斎の作品ももう相手は、街の人です。鉄斎のコレクションについて考える時、この作品は商売として扱う性質のものでないから街へは出ない。

皆、家にしまつて大切に持つている。それから、学校やお寺に額があります。まあ、街の中にある芸術みたいなものですね。しかも価値は低くない。とても、すばらしい字を書いているし、お寺と結びついている。鉄斎の学問の性格は、大学でやる学問は、支那学やつて、中国語学やつて、正統な道だけを話しますよね。鉄斎は、そんなややこしい話はないですね。本当の学問はそうじゃないんです。街の学問というものはね、いろいろおもしろいことやっているんですね。まあ、商売人が鉄斎の画探すのと、鉄斎が街の人のために、子供が生まれたからお祝いのために描いたとか、そういう結びついた画とは違いますし、そのような画は、まだ無数にあります。――鉄斎の芸術は人格の表現されたものといわれますが、彼の人格や学問との結びつきは、本当に強いのですね。

中田 そうですね。学問、人間と結びついていますね。京大の先生の本の売り立てがありますね。これはいわゆる大学で講義できるようなオースドックスなものです。鉄斎の本はそうではないです。おもしろい本がたくさんあります。また画では二四孝とか、何かの八大家、十大家とか描いている。それから、故事や、お祭りの画もあります。京都には、鉄斎の書いた石碑がずいぶんあります。頼山陽のお墓の傍らにある石の鉄鉢形の手洗いの側面に、鉄斎特有の六朝のような字が刻つてある。また、車折神社や嵯峨の宝篋院の小楠公首塚の献燈などです。

鉄斎らしさというものは、いわゆる我々が考える画家というものがありますよね、今でも。それは美大出て、画の何やらに入選してとか、ああいうコースで画家になる人いるでしょう。あれは本当の画家の道とは違うね。教えてはいますよ、本当のいいことを。ただ画家の歩む道というものは、ああいうものであっていいはずないよね。だからそこらへん鉄斎に学んでいい所ありますよね。人間とし

て画はいかに描くべきかということを考えているんだ。そこらへん鉄斎のいいところで価値がある。鉄斎を認める特徴だと思いますね。だから学問というものは、あまり形式にとらわれてやると学問の型にはまっちゃうんですね。はまらないというのは、学問の本質をとらえて、本質の中から学問がこう結びついてくるという、まあ、鉄斎はそれやったんですね。そこがええところですね、まねができないところね。

書について

――次に、鉄斎は画業に本領がありますが、書にも独自の優れた作品を残しております。書についてお聞かせ下さい。

中田 書は、いろいろと批評がありますけどね。近よれないでしょう。つかまらないでしょう。やっぱり自分の字を書いていきますね。鄭板橋いつても似てません。ただ、そういうものはいっぱい見えます。自分で、自分のもの大切にして、そして学ばないでまあ個性というようない方するとキザになるけどね、本当の自分の生命というものを出している字だと思えますね。そういう考え方は、明治頃いくらかあります。結局人間でしょうね。人間を表現した字を書く人は。西郷南洲だってそうでしょう。

――犬養木堂とか副島蒼海、三輪田米山などもそうですね。

中田 そうですね。明治の人は、学問とか芸術とか、非常に幅が広い。明治四〇年頃、京大ができて大学教育が一変するんですね。そこから明治が。だからそういう点で明治の文化というものは、今もちろんやる人いますけどね、専門に。鉄斎の記念号で新聞があります。大きな新聞で、狩野君山（直喜）先生とか青木迷陽（正児）先生とか皆鉄斎の批評してます。画家は鉄斎の生き方賛成しないですね。日本の一流の画家の中にも。日本の美大の出身の人は、だいた

い大和絵の人が多い。鉄斎みたいな字を書く人、ああいう古字のわかる人はいない。純粋な日本画の、しっかり伝統守っている人達は鉄斎きらいですよ。心の中で、鉄斎は素人やと。

——でも、どちらがすぐれているか、人間というものに焦点をあてたという点では、鉄斎の方がうってくるものがありますね。

中田 そうです。そしてテーマがすべて、人と人との結びつきから出ている。大きい掛け物で、橘仙人の図というものがある。橘仙人というのは、中国の故事ですわ。それをテーマにしている。こんな画だれも描かないでしょう。日本画の人で上村松園さんいますね。美人画、鳥など描きます。松園さんの日本画いうたら日本一ですよ。

ただ、あの人、家に本一冊も持っていない。鉄斎みたいな学問と正反對です。学問なんて全然いらん、とこういう。今は、そんなことないでしょう。もつと理論勉強するでしょう。芸大の学生さんだって。

理論は大切ですよ。中国の書画論に、いい内容のものがずいぶんあるでしょう。まあ、日本画の純粋な人と、中国の画とは全くあわないですね。日本画の大和絵系の人は、ぜんぜん降参しないでしょう。そして、いいと言わないです。鉄斎なんてボロカスにいますよ。

最近、中国の人で李庚という人がいますけれど、鉄斎見つけて一生懸命描いています。そっくりですわ。鉄斎の本は、京大の先生なんかと全然違い、専門的というものではないが、そのかわりおもしろいですね。とってもおもしろい本がある。おもしろいものは必要なんです。それで皆喜ぶんです。中国の場合でも、そういった人は特別な評価で残っていく。金冬心なんかもいますね。ああいう人は、経学者なんかは一生懸命読んだりしないでしょう。そういう人を、鉄斎は高く評価しているでしょう。鉄斎と似ているんだと思います。鉄斎は、中国の逸話とか、人物だとか、そういったものに目をつけて、それを題材として、その人物を描いていた。また、日本の

風土の特徴もよくとらえていますしね。お祭りもとらえてる。それは天才ですね。京都のお祭りを、かたっぱしにあの人が復活している。

——次に鉄斎は、神官でもあったわけですが、宗教をどのように考えていたのでしょうか。

中田 宗教心はあると思います。もちろん仏教でしょうね。お寺の額も相当書いていますし。信仰がないと、お寺の額など書かないでしょう。

——やはり、学問とか人格形成においても、宗教は相当影響していますでしょうか。

中田 あると思います。ただし、計画的にやる学問のね。つまり経学史とか宗教史に書いてあるような、表向きの流れとね、鉄斎が実際学問いう、体験している学問と違うね。そこらへんが鉄斎のおもしろいところですね。生きているところがね。物の生命とらえて、それを芸術に結びつけている。普通の人は、生命ぬけてしまうんですわ。学問の形式だけで、学問の結果出すでしょう。そうすると、芸術が表現されてないですよ。外国人は、相当証明して鉄斎とらえているでしょう。また、鉄斎は民芸品や、お祝いに持っていく袱紗や、日常使用するものをさかんに書いています。ある意味で通俗すぎるものを。鉄斎は本気でやっていますね。やすものと言っていることを本気でやって、ほんまものにしてしまう。そこがいいところでしょう。だから、民間の生活に結びついた真実さというものが、鉄斎の中では、画となったり、書となったりして、みな生きている。篆刻もそうですね。

——どうも、長時間にわたり貴重なお話ありがとうございました。

②小高根太郎「富岡鉄斎の芸術と鉄斎研究」(図4)

篆刻について

——本日は、近代日本美術の中で傑出した芸術家富岡鉄斎の芸術と、長く鉄斎研究に携わってこられた先生の御苦心談、また今後の鉄斎研究のあり方などについてお聞かせ願えたいと思います。それではまず、鉄斎の篆刻についてお聞きしたいと思います。鉄斎は青年時代、篆刻家を志したといわれていますが、若い時に刻した印は残っていますか。

小高根 若い時のものは、今はもうないですね。これは多分自分で刻っただろうと思うものはね。ただ画の中に、いくつか鉄斎が若い時に刻したもののだろうと思われるものがあります。どこか稚拙な趣があります。若い時から晩



図4 小高根太郎氏と筆者

年まで使用したのが「鉄史」です。三十代頃から使っています。その他は、なくなっていますから。益太郎さんの話だと、鉄斎は何度も何度も印を後から刻り直すんだそうですね。だから若い時に押した印と、後年押した印が少し形が違っている。同じ印をいじくるんですわ、そういうことはあったらしい。どの印だかわかりませんけどね。——ということは、印で鉄

斎の作品の真贋をみわけるのは困難ですね。

小高根 そうですね。だから益太郎さんは、印を頼りにするのは間違いだと言っていましたね。真贋の鑑定にはね。

——鉄斎の印は現在富岡家に所蔵されているのですね。

小高根 そうですね。富岡家では大切に保存されています。将来も分散しないよう願っています。できれば京博あたりで保管してくれるとよいのですが。名印が多いです。昔は、その人が死ぬと、印は壊したようです。

——鉄斎自身の言葉で、篆刻について語ったり、記録された資料は残されていますか。

小高根 膨大な資料の中には少しはあるかもしれませんがね。筆録の中に、園田さんや桑名さんの印影を貼りつけて、注釈書きつてあります。

——これまで、鉄斎の篆刻について言及した文章はありますか。

小高根 中川一政さんが書いています。中川さんのはね、鉄斎の画は篆刻だ、というような言い方ですね。

——金石の気があるという事ですね。

小高根 そうですね。

——鉄斎の印譜についてお聞かせ下さい。生前印譜がいくつか作られているようですが。

小高根 鉄斎は自分で印譜を、何度か作っていますわ。数は少ないですけどね。それは自刻印譜というよりは、それもありますが、自分の好きな印ですね。確か「文人多癖」という題がついていました。上下二冊本で、未完成です。印を押して注釈をつけたものです。鉄斎は画帖に印を押して、人にあげたものがあります。

——鉄斎と交流した印人との関係を探る資料はありますか。

小高根 あればやたらに手紙があるらしいですけどね。

——実は園田家には鉄斎が湖城に宛た手紙が五〇通ほど残されています。

小高根 読んでみるとおもしろい事が書いてあるかもしれませんね。

——『魁星閣印譜』には、鉄斎蔵印が三五〇顆くらい収められています。これ以外にも相当多く所蔵していたのでしょうか。

小高根 一〇〇や一五〇はあるでしょう。いやもつとあったかもしれませんね。

——一人の画家が使用した印としては途方もなく多いですね。

小高根 そうですね。残されている印は晩年のものが多いですけれど、使用した年代は、だいたいわかります。たとえば「臣百鍊」の印は、臣は明治の初年しか使っていません。

——鉄斎にとり篆刻は、彼の芸術の中で、どのような位置を示しているのでしょうか。

小高根 あの人のね、焼き物と同じですよ。要するに、元来あの人は画とか書が余技ですからね。だから特にうまいという事はないですね。

——篆刻の専門家とは全く違いますね。

小高根 広く感じますね。みんな素人くさいですね。

——先生から頂いたお手紙の中に書かれてあった、鉄斎の篆刻は余技のまた余技といったものでしょうかと、そんなものでしょうか。

小高根 そうですね。

画について

——次に鉄斎の学問や画についてお聞かせ下さい。

小高根 鉄斎は本当に漢文読めたのかなと思うことがあります。お茶の本で『鉄莊茶譜』を出版していますが、誤訳が多いですわ。私もずいぶんそっかしいですが、鉄斎もそっかしいですわ。まあ、

画賛も長いものもよく書きますが、字の抜けていないものは珍しいですね。生まれつき、どこかそっかしいですね。ただし幅は広いですね。あらゆる書物からとつてますね。その賛が、今まで見たことがないようなものばかり。それを調べるのがえらい骨がおれるんですね。というのは、字が抜けていますからね。ちゃんと読もうと思うと、原本捜さないといけない。それでずいぶん苦労しました。鉄斎は本当にわがままな人です。

——そのわがままという事、もう少し詳しくお話し下さい。

小高根 まあわがままですね。画でも、書でも、あの書なんていうものは、実にわがままです。ただ、いろいろ勉強した上でのわがままです。鉄斎がそのようになったのは、八十代になってからです。う。それまでは勉強に追われてますわ。わがままじゃなかったら価値ないですわ。

——京都画壇の人の画などと全然違いますね。わがままということ、非常に自由だったということでしょうか。

小高根 日本画というのは、小奇麗にするでしょう。それが日本画の、まあ懷石料理ですね。奇麗は奇麗ですけどね。フランスの後期印象派の画と近代のもの比べてごらん下さい。僕らやっぱり印象派の方にひかれますよ。ルノアールだって、セザンヌだって、その方がおもしろいもの、大観だとか栖鳳だとかいったって。鉄斎はね、画法そのものは古くさいですね。古くさをわがままで乗り越えたんですね。日本画の小奇麗なものを打ち破って、自分の個性を発揮しているわけですね。篆刻だってそうですよ。ヘタだといえどヘタですよ。ヘタだけどもおもしろい。こんなわがままな印を刻る人はいないでしょう。

——今後鉄斎を乗り越える芸術家はあらわれるでしょうか。

小高根 ピカソぐらいでしょうか。ただ僕は鉄斎しかできなかった

けど、世界にはえらい人がたくさんいます。いや日本にもいます。たとえば、池大雅、白隠和尚。大雅は鉄斎が及ばないところがあるね。人間が、もつと底がぬけている。鉄斎はまだ底がある。大雅は底がないですわ。ミケランジェロやレンブラントは深いね。晩年の人物画は、ちよつと東洋にはないね。あれだけ深いものは。

——鉄斎の作品は贋作が多いですね。

小高根 ある意味では、鉄斎自身がにせもの屋なんだ。つまりあらゆる東洋の古典を学んで、にせものを一生懸命作っているようなものだ。そういう皮肉な見方もできますよ。素人っぽからね。これなら俺もいけるという感じを人におこさせる。あの人の画は、励ましになる。これなら俺もいけそうだと。

書について

——鉄斎の書についてお聞かせ下さい。

小高根 画と同じで非常にわがままな書ですよ。あの人楷書書くと欠点が見える時があるね。それはどういうことかというとな、縦の線が下の方にいくとスツと力がぬけている。西宮の辰馬家のお墓の字がそうですね。専門家なら、そういうことはないでしょう。画でもあるね。樹木の幹を描くと根がない。中国では無根樹といって非常にきらい。鉄斎には無根樹がある。このことは、まだあまり話したことはありません。

鉄斎研究について

——先生は鉄斎研究をはじめて何年になりますか。

小高根 そうですね、五十年になるかな。

——今後まだ研究することございますか。

小高根 私はだいたい見当ついたけどね。

——鉄斎研究をはじめられた動機は何ですか。

小高根 文化財研究所にいた時、明治・大正の美術を研究してからですね。

——一番うれしかった事は。

小高根 いい作品見た時ですね。辰馬にあった「三尾聚芳図」は、焼けてしまいましたが、美しい画でした。それと、鉄斎が内藤湖南に贈った「山莊風雨図」ですね。

——一番苦しかった事は。

小高根 やはりにせものにだまされた事です。布施美術館の晩年の作品と称する、きれいな色を使ったものでした。鉄斎研究はじめて一、二年の頃ですね。それが一番苦い経験ですね。それから賛の読みちがい。これは僕だけでなくみんなありますが。鉄斎がペダンティックで、へんな書物からひっぱり出したもの書きますから。

——今後、鉄斎研究をする人へアドバイスを。

小高根 まあ、別にないですけど、鉄斎の本物をたくさん見ることでしょうか。それからできれば賛が読める。ただ、これは今後可能ではないかしら。まあ読んだところで、それほど深い思想はないと思う。鉄斎は、東洋の文化が減じる時に再会しているんだ。それでペダンティックになったんだと思う。そしてわがままだ。学問的にやる場合と、一般的にやる場合は違うでしょう。根気でしょうね。——長時間にわたりありがとうございました。

四 おわりに

富岡鉄斎の篆刻は、決して巧みといえないが、金石の気が横溢した鉄斎独自の美が宿されている。篆刻家の印は、伝統を踏まえ、確かに技術の優れたものが多い。しかし、ともすれば生気の乏しいも

のになりがちである。鉄斎の印を見てみると、彼の生命の鼓動が伝わってくる。また篆刻論は片言隻語といえども、含蓄に富むものである。鉄斎の篆刻は、日本篆刻史の中に、しかと書き記されるべきであろう。

また鉄斎と篆刻家との交友は、日本の印壇の佳話として伝えてゆかれるべきである。

最後に、湖城宛鉄斎書簡の解説発表をお許し下さった園田辰夫氏、並に解説に懇切なるご指導を賜わった、鉄斎研究家小高根太郎氏に感謝の意を表する。本節を執筆するにあたり、遠藤玄遠、加藤慈雨楼、土屋雲廬、富岡清子、中田勇次郎、水田紀久、小木太法、清水義光、野中吟雪、鉄斎美術館、国立東京博物館資料館に、ご指導ご配慮頂いた。甚深の謝意を表する。

第三節 桜井定市宛山田正平書簡翻刻

山田寒山・正平を研究するにおいて基礎資料・文献として、同時代人の書簡は貴重である。

正平の研究にとりかかり、すでに長い歳月が経とうとしている。この間、私は多くの正平有縁の方にお会いした。筆墨の縁とは有難いものである。

本節で取り挙げた桜井定市もその一人である。桜井は、新潟在住の市井の文化人である。桜井は、正平と胸襟を開いた心暖まる交流を持たれた。今もって正平の最晩年に接し得たことを感謝し、正平を追慕すること実に厚く、私はその姿勢に強く感動させられた。

桜井が正平を知ったのは、一人書の勉強に励んでいた終戦後もない頃である。正平に心酔する契機は、ある骨董店から、正平の陶印の名譜『八遷印譜』が出た時の事であり、正平に印刻を念願した。

その後、昭和三十五年、桜井は正平に長文の書簡を送り、印を刻して頂けることになったという。桜井は数度正平に会ったが、その印象は強烈であった。桜井が正平に「篆刻の名人は、やや鈍い刀を使うと、何か書物で読みましたが」との問いに「それは心の問題でしょう」と答えられたという。また正平が、昭和三十七年五月、第三次訪中日本書道代表団の団長として、中国へ訪問する四、五カ月前、正平宅に泊まった翌朝、正平から篆刻の講義を受けた。「印は小技と雖も、須らく是れ静坐読書すべし」との沈野の語を引いての、含蓄に富んだ忘れがたい話であったという。

桜井は、正平と取り交わした書簡、そして直接刻して頂いた篆刻の他、骨董店などから出た印や刻書、画冊などを保存されている。

○画冊「無尽蔵」(款記「丁丑八月六日」)(図1)

○茶托

○刻書(邵平の落款)

○古代木魚(竹香居清玩)

私は、昭和五十二年、新潟における正平の足跡を探るべく、桜井邸を訪れた。桜井は、数々の正平の作品や書簡を示されながら、正平との出会いや、エピソードを語られた。正平から受けた学恩は計り知れないものがあるという。そして写真撮影のため、貴重な書簡をお貸し下さった。これらの資料は、いずれ紹介させて頂きたいと思いつながら、十数年の歳月が過ぎた。この度桜井のご好意により、正平の貴重な作品や書簡を掲載させて頂くことができた。当初桜井は「私は書壇などとは無縁の市井の平凡な人間で、正平先生の事は、私の心の中に静かにしまっておきたい」と訥々と語られた。私は御無理を承知で、正平の人と芸術を後世に正しく伝え残すために、あえて桜井に再度懇請し、本研究執筆をご承諾頂いた。

正平の書簡は、含蓄に富んだ内容とともに、斬新にして雅味のあふ筆跡の美しさに驚かされる。まさに鉄筆で刻み込むといった切れ味のよい筆触は、金石家として面目躍如たるもので、息を飲むほど美しい。田邊古邨は『山田正平先生篆刻講義ノート』(前掲)において、「私は翁の篆刻について評する資格をもたぬ。ただ翁の書に現はれた風韻の高さに対しては無条件に頭を下げてゐる。講義ノートのペン字や板書の字に見る刀痕の妙味は、世に謂ふ芸術書などとは全く次元を殊にし、森然たる中に生命の閃光を放つてゐる。翁の履歴

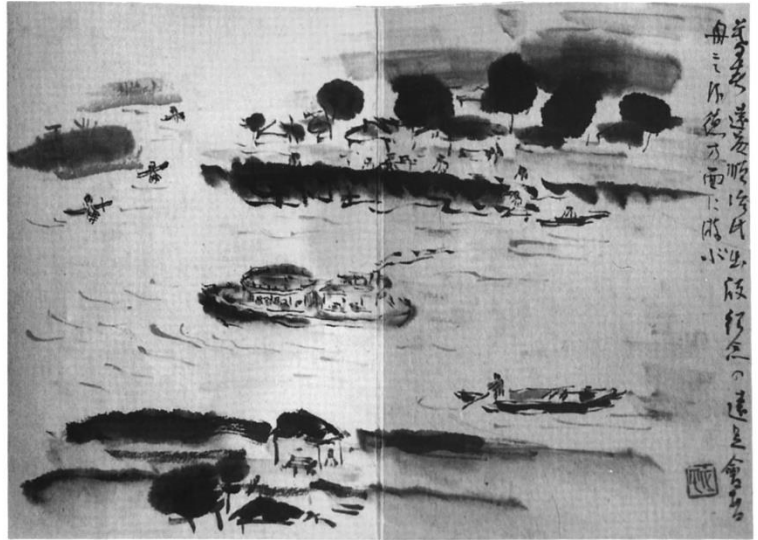


図1 画冊「無尽蔵」

書に至っては、感極まって歎声を漏すのみである」と述べ、正平のペン字を称讃している。書簡は筆者の人間性が端的に現われるものであり、桜井宛の正平書簡は興趣が尽きない。

別に正平の纏まった書簡は、正平から篆刻、書画について教えを受けた佐藤耐雪が、昭和五十四年『一止道人山田正平先生の書簡』（前掲）として刊行している。六六通の書簡を基に、正平との作品を随所にもりこみながら、二人の交流を綴ったものとなっている。桜井宛正平書簡は、正平研究にとり無上の価値を持っている。

桜井定市宛書簡

凡例

- 一、字体は通行字体を主として採用した。
- 一、仮名遣いは原文を尊重したが、通読の便を考慮し、句読点を適宜施した。
- 一、誤字、脱字と思われるものは、原文の通りに翻印し、適宜その傍に（ママ）とした。
- 一、行移り及び信箋がえは、原本に従わず、適宜改行した。
- 一、判読し難い箇所は、字数を推定できる場合は□で示し、判読推定した場合は□内に記した。
- 一、書簡の配列は年代順としたが、年月日の不明なものは、内容から推定した。
- 一、冒頭のコシツク体の数字は、書簡番号を表わす。①～⑤については、以下の事柄を記載した。
 - ① 差し出し年月日、（ ）内は消印による
 - ② 宛名、住所
 - ③ 差出人（筆者）、住所、日付
 - ④ 形態（封書・葉書）の別、筆記具の別
 - ⑤ 備考

1 昭和三十五年三月三十一日

- ② 新潟市関屋本村一、七〇 桜井定市様 拝酬
- ③ 東京杉並区上荻窪二の一二七 山田正平 三月卅一日
- ④ 封書・ペン書

拝復 御懇書拝誦致しました。先年は、己二会津先生の時ニ御縁ありしに、勿々甚残念ニも存じました。五台山の風光ニも親しまれ

種々多趣味の御趣きなれば、秋艸道人の御長逝は、御淋しき極りも拝察致します。

さて、拙刻御所望のこと、此処大分停滞して居ますが、三月程も猶予願れば、御清覧ニ供し得るかとも存じます。潤刀ニ就き痛み入る程の御配慮、適宜と申上げてもと存じますが、それも如何か。鶏血材は、概して刻し易からず。大きさも相当なれば、奮発致しても三顆壺万円程はと存じます。しかしそれとも、分納ニても過不及。これ亦御自由困しからずとも申上げて置きます。甚勝手御許し願上げます。佐久間書房御主人、此処御疎音失礼して居りますが、何卒よろしく御鳳声願上げます。

三月卅一日

山田正平

桜井様

侍史

2 ①昭和三十五年四月十一日

②新潟市関屋本村一の七〇 桜井定市様

③東京杉並区上荻窪二の一二五 山田正平 四月十一日

④封書・ペン書

御心に懸けられ、なつかしい良寛毬つきもなかなか御遣し忝く存じました。大層重宝致しまして、来客共ニ、賞味致しました。貴簡并ニ潤刀一万円を正に接掌、大層御費心前潤の御配慮少しく痛み入る次第です。御欣賞の鶏血材、大二顆は、美材にて甚眼を楽しませるに堪へる品、堂々たる材質、心おくれせぬ横逸の感興などと、今より懸念ニ御座候。(図2・図3)いま一つの方、これは一寸硬質の奏刀には不適のもの如何ニすべきや。印文五台山御承知致し候も、

何か別の手持ちの材にて試むことも有しと、此分自由御許し置き願上候。

桜井様 侍史

四月十一日
山田正平



図2 桜井定市用印「桜井定印」

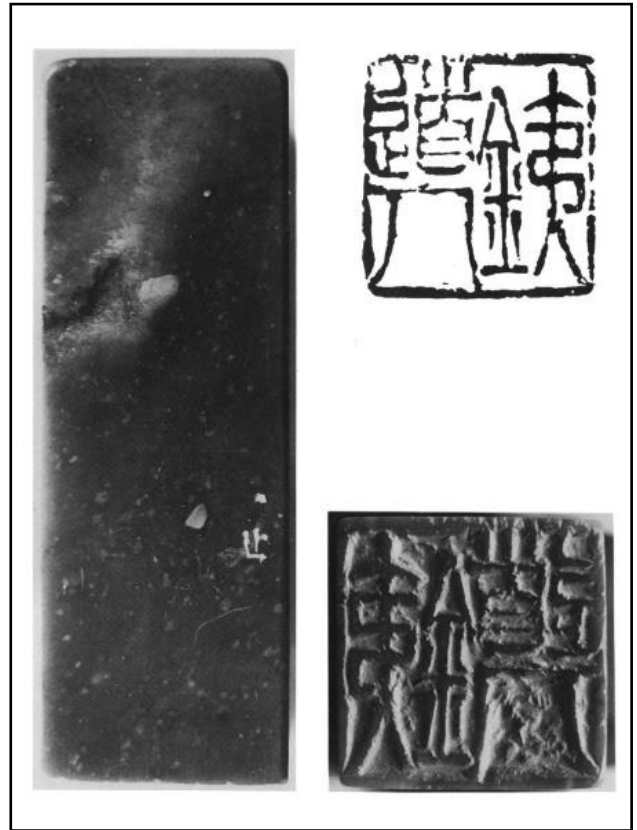


図3 桜井定市用印「鏡道人」

3

- ① 昭和三十五年六月十六日
- ② 新潟市関屋本村町 桜井定市様
- ③ 東京杉並区上荻窪 山田正平
- ④ 葉書・ペン書

拝啓、暑中御障りもなくと拝察。御請属の印々大層おそくなりましたが、只今別送。大鶏血印ニ、私手持ちの材にて五台山人、それに御返し材一ツ。合計四顆書留便と致しました。拙刻如何か。よろしく御叱正賜度願います。拙生、これよりハヤブサ号に乗って鹿児島まで直行、桜島、宮崎、青嶋を経て別府へ、此處ニ四五泊の予定ニ有し。都合ニより阿蘇へもと考居り。十日位ニ帰京致します。五台山人は呈上。

4

- ① 昭和三十五年七月二十日
- ② 新潟市関屋本村町 桜井定市様
- ③ 宮崎市にて 山田正平
- ④ 葉書・ペン書
- ⑤ 阿蘇山のペン画あり

十七日、鹿児島、それから直ぐ指宿温泉へ。長崎鼻の展生ひき返し桜島へ。昨日は、宮崎へ。快晴に乘じ青島へ一遊。本日これより別府へ、そしてアソ。耶馬溪などと思つて居ります。やはり暑いです。

5

- ① 昭和三十五年七月三十一日
- ② 新潟市関屋本村一〇七〇 桜井定市様
- ③ 東京杉並区上荻窪二の一二五 山田正平
- ④ 葉書き・ペン書
- ⑤ 宮崎県国定公園日南海岸絵葉書、表下半に文章あり

深耶馬溪、阿蘇の高原など、一寸涼しかったが、大凡暑い道中でありました。最後は宮島、弥山ニ登り、一直線帰京致しました。不在中、御手紙並ニ御懇切のもの拝受奉謝。

七月卅日。

6

- ① 昭和三十五年十月二十八日
- ② 新潟市関屋本町一、七〇 桜井定市様
- ③ 東京杉並区上荻窪二の一二五 山田正平 十月廿八日
- ④ 封書・ペン書

先般は、印材と御手紙を受けながら、つい取紛れ失礼してしまいました。印材、たしかに、二ツの方ですか、あれはよろしいか。三ツ緑色の分は、新玉の質一寸鍔筆には適し難く、折角の御入手の品、惑は特に紀念的の物でもあれば、何とかし出来ぬこともなし。只運刀にさわやかとは参らず。御承知願度。

日展の作も一昨日納め来り。御申越の分も、年内ニは御清覧ニ供し度と存じます。

山田正平

十月二十八日

桜井様

侍史

7 ①昭和三十五年十二月十四日

②新潟市関屋本村 桜井定市様

③東京杉並区上荻窪二の一二五 山田正平 十二月十四日

④封書・ペン書

御手紙拝誦 御示し鍔齋翁の手簡ニ就など色々面白く存じました。唐墨御入手の由、次々と名品聚積欣羨の至ニ存じます。先般御示しの初代蘭台作、滄浪が若い時代と存せられます。御預の石印只今箱制作中、出来上り次第送ります。本日箱入印材三種、別便御送りしました。潤刀のこと、お氣ニかけられ忝く、東京の店などから、やむを得ず引受ける時、面倒なれば、一ツ五千元。大きければ、また材など自分の時は、一万位と申し置きます。あなたから色々御預り致してありまして、あとは来春適宜の時にゆる／＼と致し度、此度の分は如何でせうか。黄色。軟玉。

これは何か色々頂戴物の御返礼として呈上。二ツ揃の石印と鶏血

とで一萬五千元としてはどうですか。万里一條鍔は、印箋を石川県美術館にて、正月五日□二十九日まで、開館記念代表書家展へ出品致しました。書家は二十余名、篆刻の方は、小生と蘭台、双石など四人。黄色玉質の材、先般も一寸御話し申した如く、奏刀ニは、稍不適ニて如何かと存じましたが、何とかと存じ、御試みましたのです。刀を磨す幾度、ヤットあれだけ。鶏血材、先般のより佳良、凡そ運刀には難渋のものです。御愛執の語、聊か意を致したるが如何候。潤刀のこと決して御無理ニ及び申さず。

十二月十四日

五台山人

掲下

正平再拝

8 ①昭和三十五年十二月二十二日（消印十二月二十四日）

②新潟市関屋本村 桜井定市様

③東京杉並区上荻窪二の一二五 山田正平 十二月廿二日

④封書・ペン書

本日は、御鄭重の潤資忝く拝受、厚く御礼申し上げます。殊の外御悦び下され、満足此上ありません。一両日中ニ、拙生陶印と、初代蘭台翁の石印、そして鶏血材三ツ箱出来して御送り申します。同時ニ、二三御預りの分、箱を作らずして、一応御返しゝて。これは袴立派ニ出来てあり。適当に保存方を講じ給いてはと存ぜられますので、尤も是非ともなれば、貴念して応じますが如何せうやら。尊書御申越の藤井氏とは、新潟古七の昔年紙舗たりし、或は質家もせしか、大家の藤井さんでせうか。古語印、或は拙者見覚えの品かと存じますが、珍しいよ／＼加り疊々、一大印龕を御製作ニなりては、トニカク印々を、その材を、文を刻を、楽しいこととせう。どうぞ

御体を御大切に願います。大屑御疲れに二なる御仕事、御清康を切二念じ上げます。印褥は先般御送り少印材入の壊れた箱の蓋に応用せし由、家内よりもくれぐれよろしく申出しました。

師走念二

山田正平

桜井様

侍者

9 ①昭和三十五年十二月三十日（消印十二月三十一目）

②新潟市関屋本町 桜井定市様

③東京杉並区上荻窪二の一二五 山田正平 十二月卅日

④封書・ペン書

御手紙拝誦。印影忝く、寿脩館、発羊、天歴も等しく、熟知の作、いづれも名刻、殊に寿脩館蔵印材よろしき由、如斯精刻は、材佳良ならざれば、得られぬ作、初代蘭台作中ニても優作と存じます。三顆橘解（タチバチ）とあるは、四世蔵六、つまり天歴を刻せし人の養父ニて新潟へも久しく客游、晩悔堂印識譜を作れる人ニて、詩書篆刻、共ニ秀で居り。新潟ニての遊びは余程楽しかるしか。幾度か留別の宴を設けながらも、まだ／＼、留滞とか。柳色濃やかに、当時の舟江の里の情趣可想。大瀧蔵六の新潟客游中の作、左ニ、己学呉歌和越唯。八街（ガイ）田辺万平講結吾心。請君休折一枝選。七十二橘秋色深。新付客中留別諸君倉子二首一、□□山人渾。□家蔵扇面です。いづれ御請覧にも可□候。師走卅日

五台山人 搦下 山田正平

10 ①昭和三十六年一月三日

②新潟市関屋本町 桜井定市様
③東京都杉並区上荻窪二の一二五番地 寒山寺 山田正平
④年賀葉書 毛筆

謹賀新年 昭和三十六年元旦 蔵六名作甚眼福に御座候。

11 ①昭和三十六年三月十四日

②新潟市関屋本村一の七〇 桜井定市様

③東京杉並区上荻窪二の一二五 山田正平 三月十四日

④封書・ペン書

おいしいあられ御恵投贈り家内中のよろこびでした。厚く御礼申上げます。御依囑の分、御送りせねばと存じ乍ら、取紛れ延引御許下さい。只今別便拝送拙刻四枚、緑石二顆揃、迁定 定御清覧ニ供す。同封蘭台石印、小生の陶印、一簾云、懷古など箱入として七ツ。迁定の石印は、蘭台印の箱中に納めあり。なほ石印一二、朱柴壇印などあり。これは後日と致します。箱製作費のこと、先般御配慮でしたが、大分手間のかゝるらしく、若し貴意あらば、一ツ三百円位は別ニ支払ってやって下さい。箱もこう沢山あると、もうタンノウでせう。私の潤刀の方は適宜でよろしいです。若しまた大金でかきみましたら、御不用の印材などでも代償とされては如何。これはまた甚失礼大家に申上ぐることで御座いせんが、御寛恕下さい。新潟は今年殊のほか降雪多く、御困りになりし御由、こちら余りに雪なくて、雪国生れとしては、幾分物足りなく、しかし寒さは欲しからず。小庭の桜も咲き出でこの處春の目を楽しん（で）居ります。

三月十四日

山田正平

五台山人

堀下

12 ①昭和三十六年三月二十三日

②新潟市関屋本村一の七〇 桜井定市様 拝酬

③東京杉並区上荻窪二の一二五 山田正平 二月廿三日

④封書・ペン書

御障りもなく御慶び申上ます。尊書速達便、只今は御ハガキ、拙刻受取りのこと拝誦。殷周の古印などと、御過褒喜び不堪えません。

潤刀のこと御心に懸けられ反って恐縮して居ります。決して富者でない私、御恵み下さるなら忝く頂戴致します。遠慮なく一万円位にて如何。さてしかし、御愛蔵の石材など沢山ニ御遣しの御趣、アトニなりて愛撫して居らる々御品をぶしつけに御ねだりなど致し、甚失礼と慚愧して居ります。此度御何卒御許し賜り度、先ハ急に挨拶耳。勿々。

山田正平

三月廿三日

桜井様

13 ①昭和三十六年三月二十六日（消印三月二十七日）

②新潟市関屋本村一の七〇 桜井定市様

③杉並区上荻窪二の一二五 山田正平

④葉書・ペン書

只今現金書留にて、潤資、箱代並ニ御志一封、御鄭重忝く拝受。印材も先刻接掌。御尽し難有、丁度他より大小色々来り。また、田

黄甚形は小さいが、五つ購入。この處御遣しの分と共二種々色々山を築きました。御送りのうち、白磁は竹泉の銘あり。初代は有名人、これは何世か不明であります。が、一寸品格よろしく、愛玩に堪ゆ□。これより上野ニ日展評議員会へ出席。勿々失礼。

14 ①昭和三十六年五月三十一日

②新潟市関屋本村一の七〇 桜井定市様

③東京杉並区上荻窪二の一二五 山田正平

④封書・ペン書

スツカリ夏となりました。御障りありませんで、御慶び申上げます。先般は、石材色々御恵み下さって、何かと御挨拶申上げねばと存じ乍ら失礼となりました、申訳ありませんでした。然る處、昨日懐しい笹団子沢山ニ御遣し忝く拝受。出来たて、まだ柔かく、早速鍊ニ成りまして、床の間に供し、家族老弱相聚り、一ツまた一ツとつい手が出まして頂戴、豊かの風味に満悦致しました。この度は、余りに味がヨ過ぎて、近隣への福分けもせぬ由、呵々。此頃如何、何かと珍品も随時御入手か□。しかし結局金も入ることだしなど、人のことを余計の考慮もして居ります。世に生まれた幸福でもあり、因果でもあり、余計のこと御叱り下さい。私もやらねばならぬ事山積、しかし甚だ漫々遅々、慚愧至極です。先日は、武者さんの紹介で、志賀さんの印の請属に使者来る。此頃なまけて名家達とも没交渉ニ近くなって聊か淋しくなっていました、どうぞまたぶらりと御来話、御国に残る先賢達の佳話いろ／＼御聞かせ下さい。私達老夫妻七月半頃から、廿日間位の予定で、こんどは北の方へ、山の石や水を観に出かけるつもりです。

五月晦日

桜井定市様 侍史

山田正平

15 ①昭和三十六年七月二十日（消印七月二十一日）

②新潟市関屋本村 桜井定市様

③登別温泉にて 山田正平

④葉書・ペン書

⑤裏に洞爺湖景色のペン画あり

十四日東京を出て、老夫婦で北海道めぐり中です。昨日は洞爺湖泊り。廿三日頃ヨリ阿寒、層雲峡□□へ。鉄斎の北游记を持参してあり、興多し。洞爺湖景色。（図4）（図5）

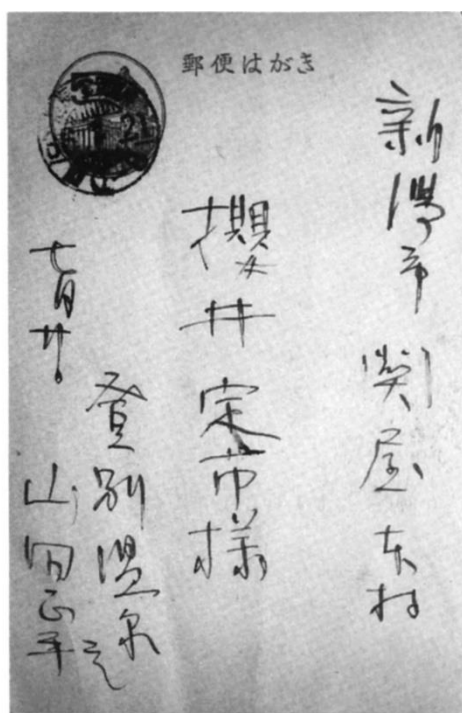


図4 山田正平葉書（書簡15）表



図5 山田正平葉書（書簡15）裏

16 ①昭和三十六年八月三日（消印八月五日）

②新潟市関屋本村一の七〇 桜井定市様

③東京都杉並区上荻二の一二五 山田正平

④葉書・ペン書

⑤裏に層雲峡の画と阿寒国立公園美幌峠の印あり

層雲峡、御手紙忝く、一昨日無事帰京。摩周湖は、晴れてよろしく、折しも層雲峡は雲霧ふかく、最終の日は、大雪山麓の天人峡二在り。函館本線混乱して、稍難渋。しかし石狩上流地、稀有の景観

に接し感□。

山田正平

鉄道人 堀下

17 ①昭和三十六年十月三十日

②新潟市関屋本村一の七〇 桜井定市様

③東京杉並区上荻窪二の一二五 山田正平 十月卅日

④封書・ペン書

久しく御無音失礼致しました。御障りなくと拝察。何かと取紛れて居りましたが、日展もどうやら開催の運びと相成りました。若しまた御□手でも御座いましたら御一見下さい。先般新潟北越の郷土学者小林存氏の御逝去紀忌号を頂き、また渡辺氏より御鄭重の御手紙を寄せられながら、追憶多少小生にも有って、何か御返信致し度く想い乍らの失礼して居ります。何卒よろしく御伝声願ひ上げます。拙生実家の父木村竹香愛蔵なりし五世蔵六、丹青をこめて描き贈られ□着色十六羅漢堅幅紙本。幼時私も髣髴として眼底に在る品。存さん例ノ調子自他同一視の厄に罹り、其儘行衛不明。先日蔵六関係の話出て其際せめて現在蔵者を知りたくなど、ふと思出して居りました。しかし、これ等すべて浮世の出来事、仙去せられ給わ粲楼学人、郷土民族学の業績ハ定めし不朽のこと。讃仰の人々も多く人柄も俗世間、利名の徒とは、自ら選を異にせん。御瞑福を祈る次第です。今年の日展、書の方、主任の改選人事一新のことありて、内容嚮向も新一步か。或は幾分きりかえの機ニ当り、少しくマゴツキたる（小生としては）方面もあり。一時疲労して居りましたが、此頃とり戻し、元気となりました。何分怠慢迂闊の責は自ら負より詮なきこと御晒し下され度。何かと古印人の印影などに示めし下され、楽しかりしも、別に御返しもせず、御許し願上、いづれ後鴻万□。

十月卅日

18 ①昭和三十六年十一月二十五日（消印十一月二十四日）

②新潟市関屋本村一の七〇 桜井定市様 拝酬

③東京都杉並区上荻窪二の一二五 山田正平

④封書・ペン書

先日は御判りにくい處を、よく御尋ね下さいました。御構いもせず、何卒御寛恕下さい。色々承り度いことありましたが、お時間もなく心残ることでした。都塵紛擾、定めし御疲れもと拝察。日展態御苦勞さまと云ふ處です。会津先生も、御生前一度見て甚御不満のこと、何か雑誌二書いて居りました筈。やはり東洋の書、それはなか／＼標準高く、高か過ぎます。一寸今の書道家達には無理なのでせう。いづれ御意見も承り度く、国宝展の絵巻類なか／＼よい物あり。私もいま一度と思ひ乍らでした。めぐり逢いもむづかしい。御話の一、学人の屏風のこと面白く拝聴。我身もその境ニ在る思いで□した。物と渾一となる。人生その他何もなし。鉄斎翁の手簡、并ニ茶譜、本田氏の著書、又芋銭翁の追頌集と、色々珍重ニ存じました。鉄斎翁の手簡は、画論あり、叙景あり、当時の翁の気構も充分表はれていて、真に貴重の品、忝く永宝可致。この年代のこと、年譜にもあり。或は書中の古聖賢屏風も現存してあるや二覚えます。芋銭先生の追頌集も初見之珍重に存じます。同包の貴書一行、甚楽しくいづれ書の同好者とも共、心賞致し度く存じます。又、拙刻が用いありし、色々参考二もなりました。印材三つも正二落掌。印文のこと拝承、材型上、万里一條鉄もよく。迂定。鉄廬。なども面白いと存じます。年内ニは、御清覧ニ供じ度く甚延引の御返事となり

まして申訳ありませんでした。

十一月廿五日

山田正平

五台山人

座下

19 ①昭和三十六年十二月十七日

②新潟市関屋本村 桜井定市様

③東京都杉並区上荻窪二の一二五 山田正平

④葉書・ペン書

⑤年賀欠礼状、印刷

長男朗（大正十年五月生）儀旧東京高等工芸図案科卒業後飛行将校として昭和十九年十一月三日ジャワ方面へ派遣され その後不明のところマカッサル海峡において戦死の公報と遺骨を今年七月受取りました 簡単ながら御報告申し上げ生前の御交誼を深謝いたします 尚年月も経過しましたこと故御弔問など勝手ながら御辞退申し上げます

昭和三十六年十二月

20 ①昭和三十七年一月一日

②新潟市関屋本村一―七〇 桜井定市様

③東京杉並区上荻窪二―一二五 山田正平

④葉書・ペン書

⑤裏に第四回日展出品作朱文「春秋多佳日」の印影印刷、表下半分文章あり。

御無音の處、益々御清祥□□。亡児二つき殊更ニ御同情深き御悔み忝く再誦拝読。大兄と□と同じ年頃、何やら痛切ニも、感懷を催したことでありました。すっかり御配慮を煩し、御鄭重の御弔慰金、まことニ恐れ入りました。家内よりも呉々よろしく申出て居ります。よき新年を、御多幸を。大晦日、匆々。

21 ①昭和三十七年二月二十八日

②新潟市関屋本村一の七〇 桜井定市様

③東京杉並区上荻窪二の一二五 山田正平

④葉書・ペン書

先日は、いつも怎らの無風清、御寛恕下さい。御心籠めての御懇書并ニ御布施忝く奉謝。思いつきの儘申上げしに、ことの他御悦び甚嬉しきこと々相成りました。風邪の疲労も其後ずっとよろしく、家内も元氣となりました。「帰一」は、鎌倉市山の内円覚寺黄桜院内へ御申込みになれば、一部八〇円、送料二〇、一ヶ年二三回発行か。

22 ①昭和三十七年三月十一日（消印三月十二日）

②新潟市関屋本村一―七〇 桜井定市様

③東京杉並区上荻 山田正平

④葉書・ペン書

風をひき返して、すっかり弱りまして失礼。只今鬼二角御申出の本送る。小冊子の方は、皆余分あり、誰かニ御遣り下さって結構です。

第四節 山田家蔵画日記翻刻三種

山田正平は、篆刻が本業であることは論を俟たない。しかし単に篆刻家というレッテルをはり、その枠内でとらえるのは、いささか性急すぎよう。彼は東洋文人の伝統を正しく受け継いだ最後の人であろう。彼には確かに詩作は多くは遺されていない。が、彼の東洋哲学や漢学の造詣は深い。この事は、彼が遺した珠玉の名文を読めば、自ずと理解できよう。また正平と交流を待った松下英麿が、晩年筆者の質問に答えた書簡に、次のように記された事からも分かる。

正平の詩作は、山田家の遺稿について調査しなければ分らない。しかし、この国の高芙蓉一門、葛子琴らを見ても篆刻人は詩人である。又詩の心得のない刻者は技外の余韻が浅い如くである。正平は東洋的な詩の理解は完璧に近かったと思われる、同時にその詩作も、文人としての究極境を打ち出したと（作品は少くとも）私は思います。

正平の平生を見ると、一介の布衣としての道を歩もうと努力しており、脱俗した耿介の気質は、彼の芸術を支えている。彼は文徳の人であり、学問徳行を修め、学芸を最も尊んだ。

また正平は印を刻すより、むしろ古典の手習いをしたり、自然に親しみ、旅行や散歩でのスケッチに時間を費したという（図1）。現在山田家には、数十冊のスケッチブックと、画用紙に写生された書画が遺されている（図2）。昭和五十九年『増補山田正平作品集』（前



図1 スケッチをする山田正平

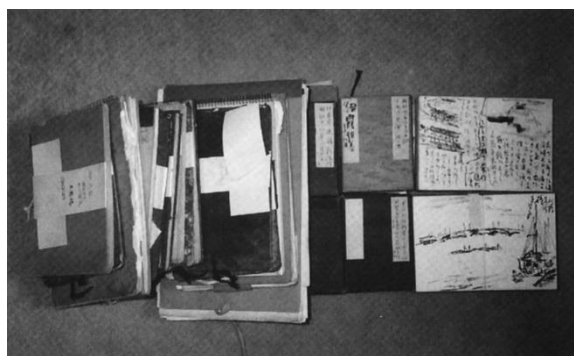


図2 山田家に遺るスケッチブック

掲）が刊行された折、年譜を編んだが、スケッチブックの中の年代の明らかな事績は、略すべてを書き入れた。「ス」と附したものがそれである。

さて本節では、山田家に蔵するスケッチブックの中から、彼の事績を知る上で重要な三種を翻刻する⁽¹⁾。

凡例

- 一、字体は通行字体を主として採用した。
- 一、仮名遣いは原文を尊重したが、通読の便を考慮し、句読点を適宜施した。
- 一、誤字、脱字、衍字と思われるものは、原文の通りに翻印し、適宜その傍に（ママ）とした。
- 一、行移りは原本に従わず、適宜改行、丁移りは一行あけを設けた。ただし『釈竹香終焉記』は、二丁ごとに一行あけを設けた。
- 一、判読し難い箇所は、字数を推定できる場合は□で示し、判読推定した場合は、□内に記した。
- 一、各画日記の表題は、山田正平が原本に記した表題に拠ったが、記載されていないものは、便宜上表題を附した。これは、原本表紙に貼付された紙片表題を採用した。

山田正平面日記翻刻

(1) 『釈竹香終焉記』

表紙	縦一五・七糎×横八・六糎
本紙	折り帖、表裏両面に書写
丁数	両面併せて四二丁
外題	表紙左上題簽に「釈竹香終焉記」と自筆墨書あり (図3)
筆記年	昭和十八年
内容	実父本村竹香が昭和十八年一月二十八日に没したため、二十八日夕方函館へ葬儀のため向う。葬儀、遺品の整理をすませ、納骨のため新潟へ行く日記である。写生図が多い。後半は、昭和二十年三月、天龍峽などを訪れた日記である。

昭和十八年一月廿八日

実父本村政平、竹香、午前八時四十分逝去。法名釋竹香、生前自ら定む。行年七十七才、廿八日五時半、杉並町の実兄より電報あり。チ、キウビョウケサシス。電報事故の為遅着。(午前中の発信なり) この夜十時、上野発函館へ向ふ。

廿九日午後四時半函館着。この夜通夜。堤清治郎様夫妻、柳谷様、吉田屋(吉田勘左エ門氏)(図4)

油や(末松貞二郎氏)、山田繁造様など、大勢御来会弔慰あり。

廿九日、午後〇時半自宅にて告別式、この日快晴、途もよく来弔する人達満室。式終了、兄弟三人、家族一同揃ひて火葬場二行く。五時半骨上げを了り奉じて帰へる。

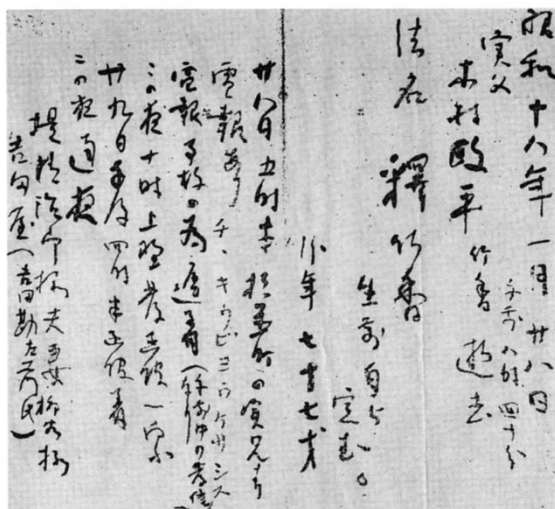


図4『釈竹香終焉記』巻首

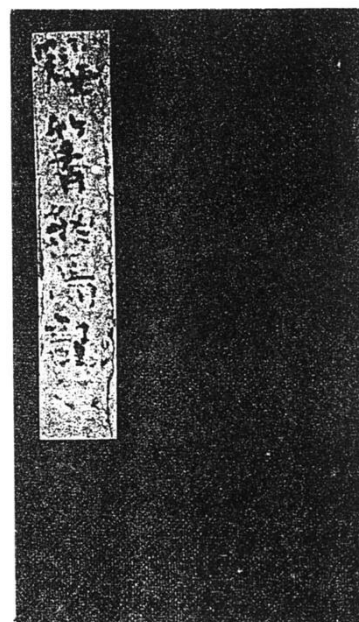


図3『釈竹香終焉記』題簽

廿日夜分、雪降りて降り続く。兄弟三人会して、故人の残せし書簡などの整理を話す。末松貞二郎、夷比寿町六。吉田屋、吉田勘右エ門、末広町三十二。

函館より直ち二通知せしと云ふ人達、竹本、阿部清治、島崎敬二、酒井議三郎。長野県更級郡八幡本町、飯島よし。新潟西堀六、山本与一郎。入山白翁、岩崎彦一郎、阿部沢右エ門、西堀前七。今井庄平、高野菊口郎。坂田、本間善一。堤清一郎。電報は、田村喜代平。星園平。大関菊太郎、田村二十一。山田。新潟行形亭裏、佐藤平太郎。

斎藤菊麿。堤清治郎様の秘書。八十六翁道本。印(无口得印)印(憲寿) 忍辱護真心。徳人寺寰海

廿一日、遺品整理。

二月一日、朝三人にて、堤様、古田や、油や、柳谷様、山田様へ廻礼をす。元氣よろし。

納骨二就いて挨拶すべき人達。2星、6佐藤、9今庄、1高野、6高助、4坂田、3回向院、8山本、山文、7阿部、5医者。新11湯駅局、佐藤平太郎氏息。佐藤松栄。倉田いちさんの息。倉田いさみ。幸生、倉田いくさんの子供。

二日、畑新泊り。廻礼の家々。佐藤平太郎氏、星周平氏、坂田源吉、今井庄平、高野菊口郎、阿部沢右エ門氏。酒井儀三郎。浄仙寺にて午後三時納骨式。五時より十人ニテ生粹旗亭にて招宴。乙川瑛映、西堀通七

六日、廻礼。宗現寺。回向院、高助さん、山本与一郎。夜、浦島へ招かる。今庄老主人同席。

七日、新潟氷雨、大野あたりより雪となる。白根へ。市場で打ち豆を買ふ。一升一円四十銭。

銜岑居 □製 患柿 乾芋

読何□曉去何肩留視牛如我視我如牛嗚呼這漢与風雲遊 発己孟夏

平洲紀読氏

五へイ餅。信州名物五平餅、胡桃の味の味噌大盤を数々更へて、大いに食ふ。五平五合と土地の人云ふ。

八ヶ岳。残雪。

七日帰途、松下氏、我等の荷を馬二つて駄迄送らる。平芋ニ、併米コンニャクなどの土産を貰へて帰へる。

午後一、一五、五急。

夜ハ、三五分□善六二一。

九、三〇急、六、五七。

三穂村 下伊那郡 松下

長田 松下 厄野 スワ スワ湖 甲府塩山 赤石

南アルプス 木曾御嶽山駒ヶ岳 中央□□ □坂 浪合 飯田 天

龍川 天竜峡

昭和廿年三月一日夜十時、新宿を発し、天龍橋畔の齊藤氏の実家へ。

中央線を辰野で、乗り更へて飯田線へ。龍丘村 桐井 保氏へよる昼食を。耕雲亭。

銜岑居 庭前之春雪 老梅 穉松 趣繞 昭和廿年弥生三日霽。

三穂村、耕雲亭ヨリ、赤石山を望む。

三穂村にて 赤石山の夕照

赤石連峯 南アルプスタ照 二〇、三、三。

赤石山 甲斐駒ヶ岳 甲斐駒ヶ岳雪峯を左方ニ、赤石連峯の雪峯を右方ニ、夕照ニ耀き前方の連山紫紺色ニ莊嚴心□為ニ清澄、松下氏宅前の木連已ニ舊壘々たり。三日、この日松下氏の息女達の□印を刻す。昌子、更ニ斎藤氏女節子なる印も刻す。正宗氏、疎聞し来る。松下力三氏宅為増築中也。

松下氏邸

天龍峡

天龍峡上流

七日朝、立石寺へ詣づ。この日早昼をすまし、帰途ニ就く。立石寺仁王門、クフ湖、中央□ほか□□を見る。八ッ岳

(2) 『竹香居追福』

表紙 縦一二・〇糎×横八・九糎 茶色の布表紙
本紙 折り帖、表裏両面に書写

丁数 表二五丁、裏二四丁

外題 表紙左上題簽に「竹香居追福癸未八月」と自筆墨書あり(図5・図6)

筆記年 昭和十八年

内容 昭和十八年七月、亡父木村竹香に関わる人達の梅木印を刻し、八月朗と新潟へ墓参のため帰省。その後佐渡に

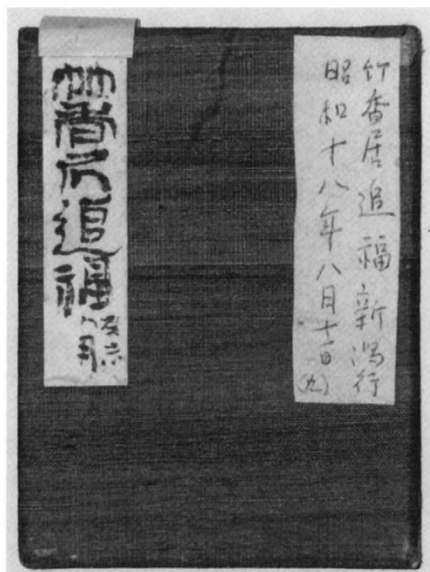


図5 『竹香居追福』題簽



図6 『竹香居追福』巻首

渡り、新潟へ再び帰り、二十二日に東京の自宅へ帰着するまでの日記である。写生図が多い。

竹香居追福

竹香居追福、癸未盆祭、正平造。

昭和十八年七月、この月末頃より『竹香居追福』の梅木印を刻し始む。

印側(側款)、漢吉語印の句を刻し、胡粉を入れる。

堤氏分は函館二ツ、新潟清一郎氏一ツ。

牙印、梅木、梅木。

田村、川又両氏より、佛前二と□□□送らる。

八月九日、朗、指定券を求めに神田駅二至る。十一日夜行、九時半、上野出発ときまる。自分は、礼装をカバンに入れて、朗は新潟墓参をすませ、仙台の千葉子を尋ねて、絵を作るべく、リュック二道具を入れて、握めし二食分持来す。

上野駅は指定□□あり。さほど混雑せず。

早朝(十二日)新潟駅着。バスに乗り、十字路迄来て降車、白山行き二乗り換へて、白山駅より角田浜二向ふ。明晩墓参迄、一日の余裕を利用して角田村の厚生道場古川金一郎氏を訪ふべくなり。白山鉄道車中角田浜の便を訊ぬ。従業員、余を木村さんですかと云はれ、驚き見れば、往年小学校時代の同級生藤田君なり。邂逅御互に驚く。不相逢実二指を屈して数ふるに三十年なり。当時紅顔の少年、現在のは関の貨物係長の由、鬱然たる係長らしき風豊なり。余亦白髪漸□げく、彼も感懐一時なるべし。

藤田氏関谷にて下車。審さに停車駅を調べて、巻下車と、途中□電話をよこす、多謝。巻駅よりバスに乗り（角田行）焼山厚生道場前二下車。砂地の松山を五六丁歩く。途中農夫の甜瓜。マクハウリを擔ぎて通る。コトシハヒデリデコマッタ。今頃は芋の葉で砂地カ見エネエヨウニナラズバ、コンヂヤウチデクウノモネエナア。ウリヤツテモイ、ケド、高ケエヨ。瓜三ツ、壹円で売って貰ふ。

角田山麓小高き処厚生道場あり。

遠く見る、鑑潟水将二涸れんとす。遠く見る浜二鷺群れ飛ぶ。養殖の魚類を食ふ奈りし□。道場二着いた直ぐ西瓜の馳走二なる。炎天下苦難二時二救はる。見渡す限り畑地。蔬菜氣息奄々なり。

午後より角田岬の奇勝を見て朗と水泳す。中原蒼園氏所植釋桜随処二見受く。

厚生道場主人古川金一郎氏病臥中。老母夫人よく応待す。義経船隠し。昔年巍々莊主人と遊びし時、イルカ游詠せり。

この翌日十三日午前、朗、日本海を遙二見て油絵一枚描く。バス混雑、午前中二巻駅二至る。新潟へ出る。山内君の處へ荷物を預け、この処二て着物を着換へ墓参する。この夜、山内君の処で泊る。翌十四日、朗と山内君と一緒に高野、今井、難波諸氏を巡る。新潟毎日新聞坂口氏を訪ぬ。難波先生より、印材多数貰い受く。良寛上人の天上大風の複製も貰ひ受く。今晩は星方へ泊るべく、昼食後朗と二人二て星を訪ね、坂田氏を訪ふ。坂田氏二引きとめられ、つひにこの処二腰を下し、四五日大厄介二なる。

十六日、坂田さんと松ヶ崎に遊ぶ。朗を伴ふ。松浜館二一泊。十五

年前曾游の地、当時の人変れども、独り山川人家、旧態依然なり。□書当時二十一。今は七人と総て一夢。朗、この夜新潟へ帰へり、翌十七、仙台へ出発。米一升五合を貰って行く。

阿賀の川支流、朝靄よろし。松ヶ崎夕照。

十七日佐渡へ来る。おけさ丸二て両津着、バスを待つこと二時間、炎天下閉口なり。昔の遊覧バス度して尚この混雑

弥彦、角田。

両津より阿原田迄来て、ここでバス乗換へ小港へ向ふ。五時頃小木着。土地の漁師二誘はれ、山本氏別邸二遊ぶ。

小木氏別邸途中、辨天島など眺望よろし。日朗逢難の処、山本別邸。

矢島矢竹を出す。

小木は吉沢屋二泊る。三層二て眺望よろし。朝日を層楼より見る。

十七日晚、名物おけさ踊り、今晚を最終として、町はづれ二催すと。九時頃より十一時、月正二よく、踊り何時果てるとも知れず。月を戴きて帰へる。

小木の朝は大層よかった。

十八日、朝食をすませてから、紅葉句碑建設者、前町長塚原徹氏へ電話する。在宅来訪を待つとあり。塚原氏、此町の旧家醤油醸造業なり。八時頃往訪一見、如旧知。塚原氏早稲田出身、青年頃俳人と

して越佐の文壇ニ相当名を知られたる由、佐渡の話、佐渡学者、書道家の話尽きもせず。つひニ昼食の馳走ニなる。午後より渡部次郎氏を尋ね、共ニ小比叡ニ国宝の寺院ニ詣で、和尚青柳秀雄に面語す。

塚原氏、代々身代り地藏不動尊など、佐渡ミカゲ石彫を販売す。先日、河井寛次郎、棟方志功氏来り。これを東京銀座にて展覧、一日にて売切れの盛況と。その地藏不動各一体を贈らる。農夫の副業、作者已ニ寥々七十八十の老翁のみと。この地藏、良寛遺愛中ニ、黒ズミ座る物一体ありと。余、コゝに想起スルの一事あり。対君ニ不語不語意悠哉の対君はこの地藏なるべしと。

小比叡ニ至る道、展望よろしく、規模略比叡山ニ似たるにより起因す。遠く弥彦、角田、海上ニ浮び、眼下山巒重々凹みたる処に蓮華峯寺あり。建造物は国宝なり。幽邃閑寂の境 蓮華峯寺碑。境内ニ、亀田鵬斎選書の方形の石碑あり。

小木町近くの小高き処、日蓮宗の寺あり。元禅宗なりしも、日朗上人に帰依し、宗旨を法華宗ニ改むる寺なりと。展望ヨし。城山を俯瞰す。

十八日夜、渡部氏を自宅ニ訪ふ。電燈暗く、盆提灯をともして語る。書話と富本氏陶器二つきてなり。黒釉壺。白磁壺。黒釉と白磁の憲吉所作の陶壺を所蔵せるる渡部氏假寓□かも、花柳街中ニあり。遠くおけさの弦歌を聞く。

翌朝十九日、小木を発し、新潟へ向ふ。渡部氏見送らる。船中昼を過ぎて食なく、宿で買ひ求めたる生するめをかぢる。へボ梨を食べべ飢渴を医す。

海草を焼く。船窓囑目。岬。佐渡大石附近。魚釣り

十九日午後、新潟着。坂田氏宅へ。坂田氏山内君へ電話□。今夕金寿旗亭にて会食を催さる。涼風颯として至り、美酒佳肴、飲を盡す。陶々然郷音溺々興趣頓ニ饒かなり。

書き忘れたれども、坂田氏十五日の晩、朗をつれ三人にて、同じく金寿にて会燕せり。この日驟雨あり、朗大いに酒をくらい、肴を平らぐ。廿日、終日坂田氏ニあり。色々蔵書を展読。仏教、美術書は興味多し。廿一日夜、新潟出発。夜八時半なり。坂田氏送らる。この夕晚餐珍時多し、優なるもの。醤油一升ビンを持って坂田さんニ送らる。キスのアラヒ。折から防空演習として市中真暗闇なり。新潟駅にて米倉氏ニ偶然邂逅す。廿二日朝、自宅へ着。

(3) 『寒山和尚納骨十三回忌』(図7・図8)

表題	縦一二・〇糎×横八・九糎 茶色の布表紙
本紙	折り帖、表裏両面に書写
丁数	表二七丁、裏二七丁
外題	なし
筆記年	昭和五年
内容	正平の養父寒山の十三回忌に当たる、昭和五年十月四日夜、分骨をするために、養母と、二木嶋にある最明寺に向かう。八日納骨式を終える。後、熊野、鳥羽などを回る。写生図が多い。

最明寺十七世 三洋潤子大和尚 寒山禅師分骨
大正七年午十二月廿六日逝去 俗名寒山居士山田潤子

大正七年十二月廿六日、殉茶毘納遺骨於 鎌倉円覚寺納骨堂分其
一半納最明寺 裏面箱書

昭和五年、庚午、正に当ル十三回忌、十月四日夜、十時十五分、東
京駅発汽車にて養母ト共二分骨を奉持シテ紀伊ノ国ナル最明寺ニ向
フ。発スルニ先キ立チ、巢鴨ノ宅ニテ小集アリ。会スル人々、山本

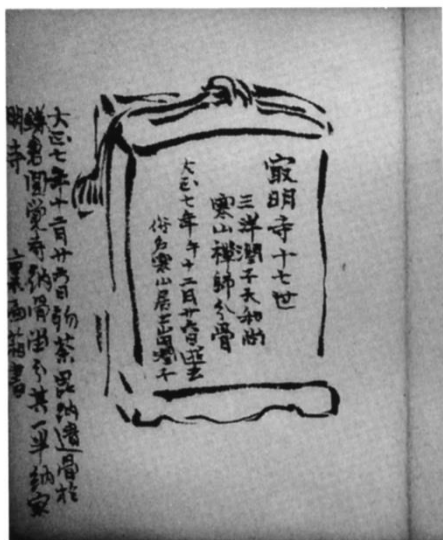


図 8 『寒山和尚納骨十三回忌』
巻首



図 7 『寒山和尚納骨十三回忌』
表紙

寸艸老、酒井支山氏、吹原金文氏、原田豊富叔父サン、寸艸老古
稀、支山氏六四、金文五六。

(スケッチ) 九月四日、小集図、金文氏、原田叔父サン、寸艸老、
支山氏、スミエ女、老母、正平。

秋の空 奈可むれ者 又一葉可な 昭和仲秋 寸艸 (花押)

(書) 身安即福 (画) 支山 金文 右会せる諸氏の揮ひた
る筆の跡 発前一時間半

寸艸老、支山、金文両氏、東京駅迄見送らる。車中、幸と混雑せ
ず。老母よく眠る。国府津辺り火事を見る。車中の睡眠を覚す。
岡崎の辺、夜明け。今日も五日、快晴拭ふが如し。長嶋ニ、午後
〇時何分ニか到着。相可□ニ乗り換へてより、風致景色頓ニ佳な
り。大小趣種々ノ山ニ応接と暇まなし。小さき苗本の如きニも、
柿累々と実づき、松杉路。端ニハ曼珠沙華叢り咲く。

山き割きて流る、水、紺碧。目眩せんとす。湛こと或ハ、岩ニ激
して雪の如く、水底の石明々歴々。長嶋の停車場より、十丁程ニ
て長嶋港ニ着く。名ニ聞く景勝の海入海山々島々、折から快晴、
海色明浄、筆ニ竭し難し。

長嶋ハ漁場なり。鰹五、六十釣りて帰へる舟三尺程の鯛など見る
も珍らし。いまハシケニ乗りて、沖に在る浮橋丸にて、二木嶋ニ
向ふなり。(母のスケッチ)

(スケッチ) 浮橋丸五百噸。名古屋、大阪間往復定期船。長嶋、

二木嶋間。二人、貳円七十銭。

(スケッチ) 長島港外

(スケッチ) 小嶋、長嶋沖、大石、神武帝ニ因縁アリ。

(スケッチ) 最明寺、十月六日。

(スケッチ) 二木嶋の湾の入口。

(スケッチ) 二木嶋湾、最明寺裏山ヨリ。

(スケッチ) 十七世潤子墓、コレハ代々の和尚ノ墓。寒山潤子翁ノ墓石ハ天然石。地面ニ突出セル自然石ニ自ら刻セルナリ。墓ノ側手植ノ植樹アリ。墓石を蔽ルハシユロ竹ナリ(図9)。

(スケッチ) 十月七日、最明寺左方岬。

(スケッチ) 逢川、二木嶋湾の上口、上流へ上れば碧潭樂しむべし。この川口にて、神武帝の遺跡アリ。コレ碧潭海老香魚な数ふべし。

郵便局竹内伊作、村長竹内長太夫。竹内四郎吉、内田清一、倉谷莊五郎、多聞善吉、磯崎氏、齊藤、右ハ八日、納骨式ニ参列せられし人達。右ハ万山氏納骨式の香口なり。読経焼香了り分骨を、十七世潤子の刻ある天然石墓口へ埋む。一同膳ニ向ひ、温どん、松茸などの馳走を受けて散す。夜叉、寺に泊り。翌九日、倉谷氏の招きニより

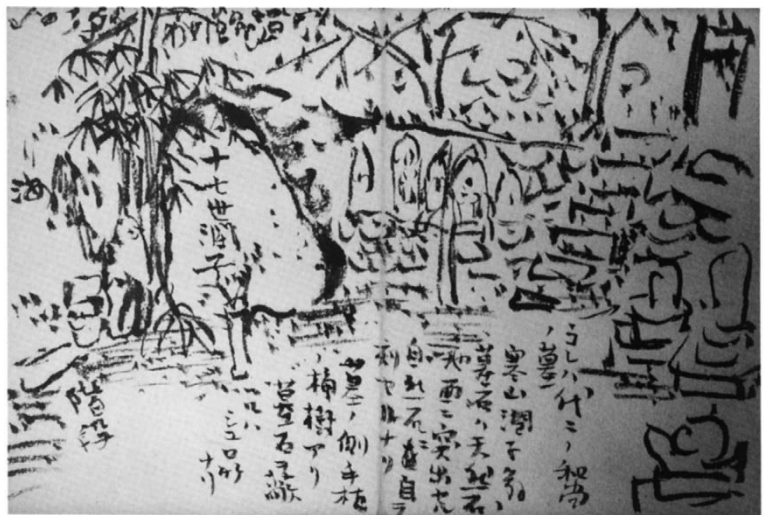


図9 『寒山和尚納骨十三回忌』(山田寒山墓石)

(スケッチ) 舟を仕立て、湾ニ魚釣りす。投げ釣りとて、糸をたくりて釣りなり。折もよく、曇天、金太、コチ、クチビな、廿余も釣る。鯛はかゝらず。沖より帰り来る漁舟より、かつをなど取りて作りして食し、浅酌、大いに楽しむ。舟中、老母、倉谷翁、百合子嬢。揖人、私、五人なり。九日夜は、倉谷氏ニ泊る。夜より雨なり。相阿弥左門相、東坡居士など見せて貰ふ。倉谷氏方にて、コンニャク搗き。コンニャク芋。

ふち能花、姉女か帯乃とけそめし、十千万、十千万と署名。紅葉の

こと。とけそめし、ふち能花、姉女。寒山燒楽の抹茶茶碗、形も美事、倉谷氏所蔵。

(押印) 十日午前、コンニャク製造を見る。午後、和尚同判此地の加田重兵衛氏を訪れる。後、船にて魚釣り二行く。湾の入口迄行き景色よし。夜、倉谷氏を辞し寺へ来る。明日ハ熊野行きなり。寺より土産なりとて鰹節沢山貰ふ。加田氏よりもかめぶしを十本程贈らる。十一日三時半、起床。亘山和尚ニ送られ。船二乗る。倉谷氏女中二人ニ弁当を持たせ来る。七時、木ノ本着。船賃二十五錢。沿岸岩石奇峭。興趣旺然、木ノ本より自働車にて、七里ヶ浜を通り、社宅へ着。熊野権現ニ参拝。それより汽車にて那智ニ到、自働車にて那智の瀧へ行き西国第一番の那智観音、那智山の那智神社へ参内。下山、勝浦へ船にて二木嶋ニ向ふ。最明寺の正江さん同行す。十月十一日、午後四時半、高知丸船中にて

喚為真別多少過、呼做假猶是南辺、休道故人図裏像、青山緑水自鮮妍。亘山旧作。

十二日、快晴、午前薪を積みて寺ニ来た舟ニ乗りて向ふ岸ニ渡る。歩いて帰る途中、倉谷氏宅へ立寄り馳走ニなる。又、舟を出して魚釣りす。夜八時、和尚、正江サン、泰岳、岳苗などに送られ寺を出る。十時出航の姫川丸ニ乗り鳥羽ニ向ふ。倉谷氏使二人送り来る。

(スケッチ) 十二日、折からの明月、海上波静。二木嶋湾ハシケにて、姫川丸ニ来るトコロ。コノ辺口波。提燈ヲ持テルハ和尚。

(スケッチ) 十三日朝六時、志摩の沖、小島。

(スケッチ) 大王崎ハ難処ナるも、極めて平静。波切村、紺碧の海、赤い色の土か岩か、岸壁に松の并ぶ面白し。海中ニ点在する岩ニ白浪の碎くるもよし。大王崎燈台、波切村、十三日七時。

(スケッチ) 十三日午前九時、鳥羽着。鳥羽駅より眺望。

【注】

(1) 画日記の翻刻に、研究ノートとして柿木原くみ氏の「文人山田寒山・山田正平(資料編・1)」(『書学書道史研究』第十三号、書学書道史学会、二〇〇三年九月)がある。

初出一覧

序論

第一節 本研究の目的と意義（書き下ろし）

第二節 本研究の方法と構成（書き下ろし）

本論

第一章 山田寒山・正平における篆刻の美と表現に関する研究

第一節 山田正平における篆刻の美と表現に関する研究（『全九州大学書写書道教育研究』第四号、一一一二頁

全九州大学書写書道教育学会、二〇二〇年三月三十一日）

第二節 山田正平における篆刻の美と表現に関する研究（Ⅱ）（書き下ろし）

第二章 山田寒山研究

第一節 「山田寒山研究（上）―篆刻について―」（『修美』第二二巻通巻四一号、四八―五七頁、修美社、一九九三年一月十五日）

「山田寒山研究②―篆刻について（下）―」（『修美』第一二巻通巻四二号、一九〇―一九九頁、修美社、一九九三年四月十五日）

第二節

「日本印人研究―山田寒山の印学と『印章備正』―」（『熊本大学教育学部紀要』第五十九号、一一一二頁、熊本大学教育学部、二〇一〇年十二月三日）

第三節

「山田寒山論―新聞資料と篆刻について―」（『全国大学書道学会紀要』（二〇〇三年度）六七―七六頁、全国大学書道学会、二〇〇三年十一月二十日）

第四節

「日本篆刻家の研究―山田寒山年譜稿―」（『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』第四巻第一・二合併号 N 〇一八 九州地区国立大学間連携教育系・文系論文集編集委員会 二〇一七年三月）

第三章 山田正平研究

第一節

「山田正平の篆刻について」（『第九回全日本高等学校書道教育研究会徳島大会研究集録』（八二―八七頁、全高書研徳島大会運営委員会、一九八三年十月二十六日）

第二節

「日本印人研究―山田正平の詩―」（『広島文教人間文化』第二号、一一―二〇頁、広島文教人間文化学会、二〇〇二年三月三十一日）

第三節

「日本印人研究―山田正平の書と書論―」（『文教国文学』第四十七号、三九―五六頁、広島文教女子大学国文学会、二〇〇二年九月二十日）

第四節

「日本印人研究―山田正平の画と画論―」(『熊本大学教育学部紀要』第六十一号、一一―一三頁、熊本大学教育学部、二〇一二年十二月三日)

第五節

「日本篆刻家の研究―山田正平の用具・用材について―」(『熊本大学教育学部紀要』第六十五号、一一―八頁、熊本大学教育学部、二〇一六年十二月十九日)

第六節

「日本篆刻家の研究―山田正平の実父木村竹香について―」(『熊本大学研究紀要』第六十七号、二七五―二八四頁、熊本大学教育学部、二〇一八年十二月十七日)

第七節

- 1 「山田正平研究―周辺の人々とその交友(Ⅰ)―」(『広島文教人間文化』第三号、一一―一五頁、広島文教人間文化学会、二〇〇三年三月三十一日)
- 2 「日本印人研究―山田正平をめぐる人々とその交友(続)―」(『書法漢学研究』第一〇号、四七―五七頁、書法漢学研究會、二〇一二年一月二十五日)
- 3 「山田正平研究―周辺の人々とその交友(Ⅲ)―」(『国語国文研究と教育』第五〇号、二〇四―二一九頁、熊本大学教育学部国文学会、二〇一二年二月八日)

第八節

「山田正平年譜」「山田家系図」(『増補山田正平作品集』二九二―三一五頁、三二〇頁、木耳社、一九八四年七月二十日)

第四章 山田正平における教育面からの研究

第一節

「山田正平における教育者の側面―東京学芸大学における篆書・篆刻講義を通して―」(『第二十三回全日本書写書道教育研究会北海道大会研究集録』一六〇―一六五頁、全書研北海道大会事務局、一九八二年八月二十一日)

第二節

「山田正平における東京学芸大学での「篆書・篆刻」の講義に関する一考察」(『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として―【改訂版】』二六四―二七七頁、創想舎出版、二〇二〇年三月三十一日)

第五章 山田寒山・正平に関わる篆刻家と文人・芸術家の篆刻と篆刻論

第一節

「小曾根乾堂論―篆刻を中心として―」(『小曾根乾堂論―篆刻を中心として―』『書学書道史研究』第七号、八五―一〇七頁、一九九七年九月三十日)

第二節

「日本篆刻家の研究―富岡鉄斎の篆刻と篆刻論―」(『熊本大学教育学部紀要』第六十六号、一一―八頁、熊本大学教育学部、二〇一七年十二月十九日)

第三節 会津八一の篆刻と篆刻論

「会津八一の篆刻と篆刻論」(『書学書道史研究』第三号、六五―八六頁、書学書道史学会、一九九三年六月三十日)

第四節 「中川一政の篆刻と篆刻論」(『書学書道史研究』第二十六号、五九―七二頁、二〇一六年十月三十日)

第五節 「西川寧の印学」(『広島文教人間文化』終刊号(第七号)、一―一五頁、広島文教人間文化学会、二〇〇七年三月三十一日)

第六節 「保多孝三小考―附保多孝三談話録―」(『楽篆』第四六号、二四―二六頁、三圭社、二〇〇九年二月十五日)

第六章 高芙蓉研究

第一節 「高芙蓉の顕彰と墓碑について」(『全国大学書道学会紀要』平成十六年度、五三―六三頁、全国大学書道学会、二〇〇四年三月三十一日)

第二節 「日本印人研究―中井敬所の高芙蓉研究」(『大学書道研究』平成十九年度、九一―九九頁、全国大学書道学会、二〇〇八年三月三十一日)

第七章 中国・日本の印史とその特色

第一節 「篆刻学」(杉村邦彦編『中国書法史を学ぶ人のために』三〇九―三二九頁、世界思想社、二〇〇二年九月十日)

第二節 「日本印人研究―日本印史とその特色―」(『国語国文研究』と教育』第四十八号、一五一―一六七頁、熊本大学教育学部国文学会、二〇一〇年二月二十六日)

結論

第一節 本研究の成果とその意義(書き下ろし)

第二節 本研究に残された課題と展望(書き下ろし)

附章 山田寒山・正平に関わる研究資料

第一節

「日本印人研究―明治・大正期新聞資料における山田寒山関連記事見出し一覧稿―」(『国語国文研究と教育』第四十三号、一二六―一四一頁、熊本大学教育学部国文学会、二〇〇六年二月二十日)

第二節

「富岡鉄斎研究―園田湖城宛書簡―」(『修美』第一三巻通巻四十八号、二三〇―二四一頁、修美社、一九九四年十月十五日)

第三節

「山田正平研究(一)―桜井定市宛書簡―」(『修美』第一四巻通巻四十九号、五七―六七頁、修美社、一九九五年一月十五日)

第四節 「山田正平研究（二）——山田家蔵画日記翻刻——」『修美』

第一四卷通卷五十号、一八九——一九七頁、修美社、一九九五年四月十五日）

初出一覧（書き下ろし）

引用・参考文献一覧

あとがき（書き下ろし）

引用・参考文献一覧

山田寒山・正平に関する研究文献目録は、増補版『山田正平作品集』（前掲）に掲載した拙稿「山田正平研究文献目録」が最も詳細なものといえる。本一覧は、それに追加・修正を加えたものである。

本研究文献目録は、平成十六年九月に篆刻美術館で開催された山田正平展での図録『山田正平展』までとした。それ以降は、重要なものに限った。

関連図書は相当数あるが、参考程度に留めた。

山田正平研究文献目録は、他に、宮澤昇氏による『印人・山田正平の人と芸術―画人・磯部草丘との交流と新資料を含めて』（靈泉堂、平成十六年六月）に「工具書（参考文献）」がある。

まだ遺漏もあるうかと思われるが、今後さらに補訂していく所存である。

一 山田正平執筆文献・資料

- 『寒山新聞』（山田寒山関係新聞資料、山田家蔵）
- 山田正平画日記（山田家蔵）
- 山田家蔵書目録（『筆者ノート』）
- 山田正平「呉昌碩先生と先人寒山翁と私」（『書道』第五卷第一〇号 泰東書道院出版部 昭和十一年十月）
- 山田正平「呉熙載の篆刻私見」（『書道』第六卷第五号 泰東書道院出版部 昭和十二年五月）

- 山田正平「垣の外から―篆刻部批評―」（『書壇新報』昭和十二年五月）
- 山田正平「金冬心と丁鈍丁」（『書道』第六卷第七号 泰東書道院出版部 昭和十二年七月）
- 山田正平「中村蘭台翁に就いて」（『書壇新報』第五一号 昭和十二年八月）
- 山田正平「胡澍篆書学習法」（二）―（五）―（『書道』第七卷第二号 第七卷第四号 第七卷第五号 第七卷第六号 泰東書道院出版部 昭和十三年二月、四月、五月、六月）
- 山田正平「趙之謙篆書学習法」（一）―（三）―（『書道』第七卷第七号 第七卷第九号、第七卷第十号 泰東書道院出版部 昭和十三年七月、九月、十月）
- 山田正平「篆刻の再興期」（『日本』昭和十三年八月）
- 山田正平「呉昌碩を訪ねる」（『好古』昭和十四年十一月）
- 山田正平「印の知識」（『書道』第九卷第一〇号 泰東書道院出版部 昭和十五年十月）
- 山田正平「鉄斎と篆刻」（『三彩』第三八号 美術出版社 昭和二十五年一月）
- 山田正平「山田寒山・河井荃廬」（辰野隆編『近代日本の教養人』日夏耿之介博士華甲記念文集 実業之日本社 昭和二十五年六月）
- 山田正平「篆刻の審査に当りて」（『書品』第一二号 東洋書道協会 昭和二十六年一月）
- 山田正平「篆刻屑語」（『天地人』第五号 昭和二十八年）
- 山田正平（山寺孤猿）「新加鬼山君の落選」山寺孤猿のペンネームで執筆する。（『書品』第五六号 東洋書道協会 昭和三十年一月）

○山田正平「一點一劃」(『研』第二号 東京学芸大学書道研究部誌 昭和三十年七月)

○山田正平「感興・古典・刀法」(『書道講座』5『篆書篆刻篇』 二 玄社 昭和三十一年二月)

○山田正平「会津先生と私」(『書品』七九号 東洋書道協会 昭和 三十二年四月)

○山田正平「序」(磯部草丘著 句集『氷炭』 渋柿図書刊行会 昭和 三十二年四月)

○山田正平「大雅堂と南画」(『南画研究』第一卷第七号 中央公論 美術出版 昭和三十三年九月)

○山田正平「画讃の書きかた」(松井如流編『條幅・扁額の研究』 二 玄社 昭和三十三年三月)

○山田正平「粥の味と中国」(病床メモより)(『古酒』第八冊 昭和 三十七年十月)

○山田正平「訪中覚え書き」(『書道』第九卷第三号 泰東書道院出版部 昭和三十八年三月)

○「山田正平先生篆刻講義ノート」(東京学芸大学書道科同窓会硯心会 昭和三十八年六月)

・田辺萬平「序」

・伊東寿「遺稿に学ぶ」

・鈴木武夫「山田先生と吉福の雅印」

・吉田繁「思ひ出の断片」

○山田正平「会津先生と篆刻」(渾斎同人編『渾斎 秋艸道人』 川村徳助発行 求龍堂 昭和四十三年十一月)

○山田正平「始めて篆刻を試みる人に」(昭和三十三年二玄社によせられた遺稿)(『書道講座』第六卷『篆刻』二玄社 昭和四十八年 二月)

○『回顧山田正平―東京学芸大学における教育者としての側面―付 篆刻講義ノート(復刻)』(東京学芸大学書道科硯心会 平成十六 年七月)

(十一月三日、東京学芸大学において、「山田正平先生を語る」シンポジウム開催される(シンポジスト 小木太法、杉本霖香、塚本虚斎、益子素州、神野大光))

・藏元訓征「ごあいさつ 感化―山田正平展に寄せて―」

・山田正平展览展示資料

・「山田正平先生を語る」シンポジウム

・「篆刻講義ノート(復刻)」

・山田正平展年譜

・岩切誠「あとがき」

二 作品集・図録・雑誌特集号(印譜は除く)

○第三回『山田正平水墨画同人展図録』(松坂屋美術館、昭和二十三年一月)

○「山田正平先生遺作展特集号」(『書品』第一三五号 東洋書道協会 昭和三十七年十一月)

・磯部草丘「一止道人を偲ぶ」

・松井如流「山田正平さん」

・伏見冲敬「山田正平先生略年譜」

・山田梅枝「父を憶う」

○『山田正平遺作展図録』(山田正平遺作展委員会 昭和三十九年八月 中央公論美術出版)

・中川一政「生きている文人趣味」

・堀口大学「巖々清峙の人」

・武者小路実篤「逢えなかった人」

・西川寧「くもの巢がかかっている」

○「山田正平」(西川寧編『書道講座』第六卷『篆刻』 二玄社 昭和四十八年二月)

○『山田正平作品集』(山田喜美子編 木耳社 昭和五十一年十月)

・中川一政「山田正平印譜」

・西川寧「一止道人の印譜・序」

・堀口大学「巖々清崎の人(昭和三十九年「山田正平遺作展図録」より再録)

・山田喜美子「あとがき」

○『磯部草丘印譜』(図録『磯部草丘・大沢雅休展』群馬県立近代美術館 昭和五十七年八月)

○増補版『山田正平作品集』(山田喜美子編、木耳社、昭和五十九年七月)

・小木太法「山田正平論」

・神野雄二「山田正平年譜」「山田正平研究文献目録」「山田家系図」

○図録『山田寒山・正平展』(篆刻美術館 平成四年十一月)

・神野雄二「山田寒山年譜」「山田正平年譜」「山田家系図」

○特別企画「山田正平の世界」(『墨』第一五二号 芸術新聞社 平成十三年十月)

・小木太法 評伝「正平交印録」

・小池邦夫 作品論「正平のひとり遊び」

・真鍋井蛙 作品論「篆刻と書とその時間」

・小木太法 コラム「芸術は教わるものではない」

・神野雄二「山田正平の刻字」

・神野雄二 資料室「山田正平略年譜」

○『絵手紙』特集山田正平文人画「第七一号(平成十三年十一月 日本絵手紙協会)」

・小池邦夫「山田正平の書画について」

・島田正治「正平先生の思い出」

・小池邦夫の課外授業、桜井定市さんの書簡より、山田正平の思い出

○『正平文人画』(山田潤平編、日本習字普及協会 平成十三年十一月)

・中川一政「生きている文人趣味」

・小木太法「名印二顆」

・山田梅枝「父を語る」「あとがき」

○山田正平(小林斗盞編『篆刻全集』十 二玄社 平成十四年一月)

○図録『山田正平展―寡作な文人篆刻家―』(篆刻美術館 平成十六年九月)

・神野雄二「山田正平年譜」「山田正平研究文献目録」「山田家系図」

○『没後五十年山田正平展』(山田梅枝 平成二十四年十月)

三 『全集』・単行書

○加藤諄「会津先生の書」(『会津八一遺墨』 東出版 昭和二十五年七月)

○岸田劉生「十一月二十五日の欄」(『劉生絵日記』第一巻 龍星閣 昭和二十七年九月)

○吉池進「会津先生と篆刻」(『会津八一伝』会津八一先生伝刊行会 昭和三十八年八月)

○吉池進『会津八一伝』(会津八一先生伝刊行会 昭和三十八年八月)

- 安藤榻石「戦後八」(『書壇百年』木耳社 昭和三十九年八月)
- 安藤更生「初期の作品」(『書豪会津八一』 二玄社 昭和四十年十月)
- 長島健『会津八一書論集』(二玄社 昭和四十二年一月)
- 『新資料付注会津八一書簡集―式場益平宛書簡―』(和泉久子著 笠間書院 昭和四十三年二月)
- 『坪内逍遙会津八一往復書簡』(柳田泉・長島健編 中央公論美術出版昭和四十三年十二月)
- 保多孝三「篆刻周辺」(『書道講座第六卷篆刻』二玄社 昭和四十八年七月)
- 伊東参州「私蔵の名家作品 山田正平」(『書道漫歩』日本習字普及協会 昭和四十九年三月)
- 安藤更生「初期の作品」「昭和四年といふ歳」(『書豪 会津八一』 二玄社 昭和四十九年十月)
- 長坂吉和「やさしい人」(『会津八一・人と書』 新潟日報事業社 昭和五十年二月)
- 長坂吉和「書家たる自覚」(『続・会津八一と書』 新潟日報事業社 昭和五十二年三月)
- 渡辺秀英「山田正平」(『会津八一の郷像』新潟日報事業社 昭和五十二年四月十日、増補改訂『会津八一逸話集』平成十一年二月)
- 宮川寅雄「印人・山田正平」(『会津八一の世界』 文一総合出版 昭和五十三年九月)
- 佐藤耐雪(『一止道人山田正平先生の書簡』 佐藤耐雪後援会 昭和五十四年一月)
- 岡本椿處「山田正平作品集」(『私の篆刻道』 一莖書房 昭和五十四年十月)
- 鈴木知秋「解説」(『保多孝三作品集』 谷川商事株式会社 昭和五十四年十二月)
- 宮川寅雄「秋艸道人の用印について」(『秋艸堂印譜』 二玄社 昭和五十四年十二月)
- 宮川寅雄『秋艸堂印譜』(二玄社 昭和五十四年十二月)
- 大久保翠洞「作家略歴『山田正平』」(『現代書道を築いた人々展』アポロ企画、昭和五十五年四月)
- 平野雅章「座談会『魯山人の書と人』瀧波善雅・小木良一」(『魯山人書論』 五月書房 昭和五十五年五月)
- 小木太法「私の一止道人『無人華落』のこと」(『山田正平作品展』『筆とエンピツ』 飯島書店 昭和五十六年八月)
- 大久保翠洞「山田正平」(『近代日本の書 現代書の源流をたずねて』墨十月臨時増刊 芸術新聞社 昭和五十六年十月)
- 坂口守二「市島春城と青年期の八一」(『文墨の人・坂口五峰と八一』『会津八一と越後の文人』新津郷土誌料研究会 昭和五十六年十二月)
- 『会津八一全集』全一二巻(中央公論社 昭和五十七年六月〜五十九年)
- 宮川寅雄「秋艸道人の用印について」(『秋艸道人随聞』 中央公論社 昭和五十七年九月)
- 島田正治「山田正平先生」(『島田正治墨画集』(日貿出版社 昭和六十一年三月)
- 長坂吉和「秋艸道人・最古の印譜」(『会津八一をめぐる人々』新潟日報事業社 昭和六十一年十一月)
- 小木太法「山田正平論」(『続 筆とエンピツ』飯島書店 平成元年四月)
- 植田重雄『秋艸道人会津八一書簡集』(恒文社 平成三年一月)

○小西斗虹「山田正平」(関正人編『毎日書道講座』九『篆刻』 毎日新聞社 平成三年七月)

○山田幸男「山田正平と岸田麗子の死」(『追想 中川一政』沖積舎 平成七年十月)

○臼井雅観「惚れ込んだ山田正平の絵」(『絵手紙を創った男 小池邦夫』 あすか書房 平成十年四月)

○小木太法「遠くの人 近くの人 山田正平」(『続続続 筆とエンピツ』飯島書店 平成十三年四月)

○『阿賀野市誕生記念五頭山麓ゆかりの文人山田寒山集』(山田寒山 展実行委員会、平成十六年九月)

○宮澤昇『印人・山田正平の人と芸術』(靈泉堂 平成十六年六月)

四 雑誌・新聞その他

○徳富蘇峰「羅漢印譜、山田寒山翁を懷う」(『夕刊国民新聞』 大正十三年十二月二十八日)

○「趣味銅印の会しるべ」(『書道』第二卷第二号 泰東書道院出版部 昭和八年二月)

○今川魚心子「印人正平、大愚画人靈山の思い出(下)」(『いしぶみ』第四号 新潟拓本研究會、昭和十一年一月)

○大井川一史「旅中片々——七」(『夕刊磐城新聞』 昭和十一年九月三日—九月十一日)

○横野春松「名人木村竹香老人」(『北溟』第二〇号 昭和十一年十月十日)

○「寒山寺山田正平鑄印頒布会」(『書道』第三卷第九号—第四卷第二号 昭和九年九月・十月一日・十一月・十二月・一月・二月 泰東書道院出版部 昭和十四年五月一日)

○古川北華「鉄筆家山田正平」(『日本』昭和十二年五月二十九日)

○『堤清六の生涯』(内藤民治編著、曙光会、昭和十二年八月)

○「詩都、蘇州の寒山寺から響け東亜へ除夜の鐘」(『都新聞』昭和十二年十二月)

○小野賢一郎「名家印譜と由緒五」(『東京日日新聞』昭和十四年一月十二日)

○鹿兒島二橋「香草居閑話」(『東亜書道新聞』第八五号)

○「山田正平氏個展」(『書道』第八卷第五号 泰東書道院出版部 昭和十四年五月)

○中川一政「山田正平遺作展」(『中川一政作品展図録』 昭和十五年四月)

○「東西画壇・訪問アルバム(6)竹林に風も明るく 山田正平氏」(『詩と美術』二卷九号 昭和十五年九月)

○小野賢一郎「漫談(一四) 鉄禅老師清飲」(『茶わん』昭和十五年十月)

○保多孝三「村娘お松後日ものがたり」(『書品』第二〇号 東洋書道協會 昭和十六年九月)

○栗野大允「山田正平先生を悼む」(昭和十七年九月十日)

○平尾孤往「現代印人展を観る」(『書芸新報』 書芸新報社 昭和二十四年九月一日)

○今関天彭「現代印人展素通りの記」(『印の畑』 昭和二十四年九月)

○西川 寧「日展の書と印」(『書品』第二号 東洋書道協會 昭和二十五年一月)

○赤羽雲庭「我家の劉生 麗子草堂の壁間(1)」(『書品』第七号 東洋書道協會 昭和二十五年七月)

- 流生「奇人」(『書品』第一二号 東洋書道協会 昭和二十六年一月)
- 「越佐人物風土記」新潟市の巻(B) (『新潟日報』 昭和二十六年二月十一日)
- 保多孝三「毎日展四五部評」(『墨美』 墨美社 昭和二十六年十月)
- 保多孝三「村娘お松」(『書品』第一四号 東洋書道協会 昭和二十六年三月)
- 保多孝三「篆刻周辺」(『書品』第三一号 東洋書道協会 昭和二十七年八月)
- 清水真一「名家書翰紙上展、日展審査員篆刻家山田正平先生」(『志太ニュース』第四六号 島出版 昭和二十七年十月)
- 「書壇七人の侍」(『書壇展望』 昭和三十年七月)
- 殿村藍田「篆刻めぐらへび」(『書品』第七二号 東洋書道協会 昭和三十一年九月)
- 山田梅枝「秋草おじいさま」(『書品』第七九号 東洋書道協会 昭和三十二年)
- 鎌田良穂「総裁之印」うら話(『にちぎん七』四三 日本銀行 昭和三十三年七月)
- 万華狂人「篆刻のぞき」(『造型新報』 造型新報社 昭和三十三年十二月)
- 安藤揚石「歴訪・山田正平」(『書品』第九八号 東洋書道協会 昭和三十四年四月)
- 「書斎を尋ねて」(『書道』第五卷九号 泰東書道院出版部 昭和三十四年九月)
- 酒井康堂「日展篆刻部をのぞく」(『造型新報』 造型新報社 昭和三十四年十二月)
- 桑山太市「山田正平さんの事」(『越後タイムス』 昭和三十七年八月)
- 青陵生「正平先生を惜む」(『造型新報』二九〇号 造型新報社 昭和三十七年九月)
- 伏見冲敬「山田正平先生の想い出」(『東洋の美』秋季合併号 昭和三十七年十月)
- 松下秀麿「一止道人追懷」(『古酒』第八冊 昭和三十七年十月)
- 栗野大允「山田正平先生を悼む」(『書海』第四五七号 財団法人書海社発行 昭和三十七年十月)
- 「著名人筆蹟鑑賞山田正平」(『書友クラブ』 日本書道教育学会 昭和三十八年二月)
- 佐藤祐豪「中国旅行記」(『書品』第一三八号 東洋書道協会 昭和三十八年三月)
- 山田梅枝「買物三題―父の思い出・続―」(『書品』第一四〇号 東洋書道協会 昭和三十八年五月)
- 久保田大卿「津金・山田両先生を偲びて」(『書芸大観』第一二六号 昭和三十八年五月)
- 田邊古村「篆刻家の板書」(『書友クラブ』 日本書道教育学会 昭和三十八年十月)
- 伊東参州「小川芋銭」(『書宗』 昭和三十八年)
- 佐藤耐雪「山田正平先生の書簡より」(『書品』第一三九号 東洋書道協会 昭和三十八年四月)
- 西川寧「山田正平遺作展」(『書品』第一五五号 東洋書道協会 昭和三十九年十一月)
- 伊東参州「山田正平先生の書・画・篆刻」(『書宗』 昭和四十六年四月)

○高橋達郎『山田正平論』（東京学芸大学卒業論文 魅丹古美書道出版会 昭和四十六年十二月）

○堀江知彦「秋艸道人の想い出」『書論』第七号 特集 会津八一書論研究会 昭和五十年十一月）

○高原哲「篆刻家木村竹香小伝」『はくぼく』刊行年等不詳）

○今川魚心子「印人正平、大愚画人靈山の思ひ出（上）」『いしぶみ』

第三号 新潟拓本研究会 昭和五十年五月）

○今東光「わが交遊録⑱山田正平の巻、友鏡」『週間読売』読売新聞社 昭和五十二年四月）

○中西慶爾「清狂の人・一止道人」『墨』五号 特集・会津八一芸術新聞社 昭和五十二年）

○長嶋健「会津八一自用印の集大成『秋艸堂印譜』（出版ダイジェスト）梓会出版ダイジェスト社 昭和五十五年三月）

○大久保翠洞「山田正平」（青山杉雨監修図録『現代書道を築いた人々展』アポロ企画 昭和五十五年四月）

○大久保翠洞「山田正平」（『近代日本の書 現代書の源流をたずねて』墨十月臨時増刊 芸術新聞社 昭和五十六年十月）

○北畠建「新資料による芋銭考」（『常陽新聞』昭和五十七年五月十六日―八月一日）

○「鑑賞のひろば十二 山田正平の刻字」（『季刊書道ジャーナル』二〇号 昭和五十七年）

○今井凌雪「山田正平・篆刻鑑賞と第一一五回課題」（『新書鑑』通巻第一一四号 新書鑑編集部 昭和六十年一月）

○今井凌雪「山田正平・篆刻鑑賞と第一一八回課題」（『新書鑑』通巻第一一四号 新書鑑編集部 昭和六十年四月）

○小木太法 書学論壇「山田正平論―印は無定形から始まる―」（『書道研究』第一巻第四号（通巻四号）美術新聞社 昭和六十二年）

○小木太法「山田正平の交流と印」（『季刊墨スペシャル』第八号『篆刻入門』芸術新聞社、平成三年七月）

○岡村浩「印人富山天池と鷗鷺会」（『蒲原』第八二号 継志会 平成四年四月）

○岡村浩「新潟の印人・富山天池について」（『書叢』第六号 平成四年五月）

○岡村浩「会津八一と越後の印人」（『秋艸』第六号 会津八一記念館 平成四年八月）

○桜井定市「学書のための尊い結縁―会津先生にお会いできました―」（『秋艸』第九号 会津八一記念館 平成四年八月）

○鶴田一雄「錢瘦鐵と秋艸道人」（『秋艸』第六号 会津八一記念館 平成四年八月）

○「山田寒山・正平展」（『書道界』第四卷十二月号 通巻三七号 平成四年十二月号 藤樹社 平成四年十二月）

○小木太法 特別講演「山田寒山・正平展」（『山田正平を語る』（『書道界』通巻三九号―通巻四三号（四二号除く）平成五年二月号―平成五年六月号（五月号除く）平成四年〜平成五年）

○柴田光彦「山田寒山と寒山寺鐘を巡って」（『書道研究』通巻五四号 萱原書房 平成五年八月）

○松浦雅俊「山田正平」（『墨』四月臨時増刊 篆刻の鑑賞と実践 芸術新聞社 平成七年四月）

○太田京子「現代書の先駆（二）山田正平の世界」（『ふで』第四六巻第三号 葵図書 平成八年）

○岡村浩「越後路の篆刻家・山田寒山（Ⅰ）―（Ⅴ）」（『新潟大学教育学部紀要』新潟大学教育学部、平成八年―平成十年）

○野中穎僊「近代日本の印人たち 十 山田正平」（『書のアフォーラム』第二巻第八号通巻一〇号 翠書房 平成九年）

○岡村浩「越後路の篆刻家・山田寒山〔6〕」(『新潟大学教育人間科学部紀要』 新潟大学教育人間科学部 平成十年九月)

○岡村浩「会津八一と木村竹香・山田正平」他(『西水居自娛』 平成十年十二月)

○柿木原くみ「山田寒山―二木島・最明寺時代を中心に―」(『相模国文』第二十七号、相模女子大学国文研究会 平成十二年三月)

○図録『保多孝三展』(篆刻美術館 平成十二年九月二十三日)

○柿木原くみ「北條卍山論―熊野における山田寒山師承―」(『相模国文』第二十八号 相模女子大学国文研究会 平成十三年三月)

○本多和宏「山田正平の篆刻について―会津八一からの影響を中心として―」(『書叢』第一五号 新潟大学書道研究会 平成十三年五月)

○真鍋井蛙「篆刻家 山田正平の交遊録① 版画家棟方志功の印癖」(『目の眼』里文出版 平成十四年四月)

○鶴田一雄「銭瘦鐵と秋艸道人」(『秋艸』第六号 会津八一記念館 平成四年八月)

○真鍋井蛙「篆刻家山田正平の交遊録②―④ 画家中川一政1―3」(『目の眼』里文出版 平成十四年六、八、十月)

○柿木原くみ「山田寒山の交友―尾崎紅葉と小平雪人を軸に―」(『相模国文』第三〇号 相模女子大学国文研究会 平成十五年三月)

○柿木原くみ「文人山田寒山・山田正平(資料編)」(『書学書道史研究』第一三三号 書学書道史学会 平成十五年九月)

○岩切誠「山田正平先生のこと(1)」(『書統』、美術出版社、続刊中)

○新潟市會津八一記念館(『雁魚來往』平成二十六年三月)

五 筆者執筆文獻

(山田寒山・正平に関する文獻を中心とする)

○神野雄二「晩年の山田正平」(東京学芸大学教育専攻科書道専攻修了論文 昭和五十四年三月)

○神野雄二「山田正平」(『書道通信三号』NHK学園 昭和五十五年十月)

○神野雄二「山田正平における教育的側面」―東京学芸大学における篆書篆刻講義を通して―(全日本書写書道教育研究会―北海道大会研究集録― 全書研北海道大会事務局 昭和五十七年八月)

○神野雄二「山田正平の遊印」(『日本の遊印』木耳社 昭和五十八年十月)

○神野雄二「山田正平―人と芸術―」(筑波大学大学院 修士課程修了論文 昭和五十八年二月)

○神野雄二「山田正平の篆刻について」(第九回全日本高等学校書道教育研究会『徳島大会研究集録』全高書研徳島大会運営委員会 昭和五十八年十月)

○神野雄二「山田正平年譜」「山田正平研究文献目録」「山田家系図」(増補『山田正平作品集』木耳社 昭和五十九年七月)

○神野雄二「山田正平研究―正平と木村竹香―」(『日本書道新聞』第三号 日本書道新聞社 昭和六十一年一月)

○神野雄二「山田正平研究―正平と木村竹香―」(『日本書道新聞』第四号 日本書道新聞社 昭和六十一年二月)

○神野雄二「山田正平をめぐる人々とその影響 小川芋銭 ①」(『書道芸術』九月号 日本美術出版 昭和六十一年九月)

○神野雄二「山田正平をめぐる人々とその影響 小川芋銭 ②」(『書道芸術』十一月号 日本美術出版 昭和六十一年十一月)

- 神野雄二「山田正平をめぐる人々とその影響―呉昌碩・徐星州―」
〔書道芸術〕一月号 日本美術出版 昭和六十二年一月)
- 神野雄二「高芙蓉の印学―印譜と著述―」(『全国大学書道学会研究集録』昭和六十三年一月)
- 神野雄二『高芙蓉の篆刻』(木耳社 昭和六十三年六月)
- 神野雄二「山田正平」(『書道基本用語詞典』 中教出版 平成三年七月)
- 神野雄二「篆刻の話(4) いろいろな印の姿―山田正平と中村蘭台二世―」(『季刊書道ジャーナル』二八号、書道ジャーナル研究所、平成四年二月)
- 神野雄二「山田寒山研究(上)―篆刻について―」(『修美』第一二巻通巻四一号 修美社 平成五年一月)
- 神野雄二「会津八一の印学」(『書学書道史研究』第三号 書学書道史学会 平成五年六月)
- 神野雄二「会津八一の印学(上)」(『修美』第一二巻通巻四三三号 修美社 平成五年七月)
- 神野雄二「山田寒山研究② 篆刻について(下)」(『修美』第一二巻通巻第四二二号 修美社 平成五年四月)
- 神野雄二「市島春城の印章(上)」(『修美』第一二巻通巻四四号 修美社 平成五年十月)
- 神野雄二「市島春城の印章(下)」(『修美』第一三巻通巻四五号 修美社 平成六年一月)
- 神野雄二「富岡鉄斎研究―園田湖城宛書簡―」(『修美』四十八号 修美社 平成六年十月)
- 神野雄二「山田正平研究(一)―桜井定市宛書簡―」(『修美』第一四巻通巻四十九号 平成七年一月)
- 神野雄二「山田正平研究(二)―山田家蔵画日記翻刻―」(『修美』通巻五十号 修美社 平成七年四月)
- 神野雄二「小曾根乾堂研究(一)」(『修美』五三三号 平成八年一月、修美社)
- 神野雄二「小曾根乾堂論―篆刻を中心として―」(「小曾根乾堂論―篆刻を中心として―」『書学書道史研究』第七号、平成九年九月)
- 神野雄二「山田正平の巨印」(『金石書学』第四号 藝文書院 平成十三年六月)
- 神野雄二「山田正平の刻字」、資料室「山田正平略年譜」(特別企画「山田正平の世界」『墨』第一五二号 芸術新聞社 平成十三年十月)
- 神野雄二「保多孝三論序章」(『広島文教人間文化』創刊号 広島文教女子大学人間文化学会 平成十三年三月)
- 神野雄二「榊莫山と山田正平展」(『文教国文学』第四六号 広島文教女子大学国文学会 平成十四年三月)
- 神野雄二「日本印人研究―山田正平の詩―」(『広島文教女子大学人間文化学会』『広島文教人間文化』第二号 平成十四年三月)
- 神野雄二「日本印人研究―山田正平の書と書論―」(『文教国文学』第四七号 広島文教女子大学国文学会 平成十四年九月)
- 神野雄二「山田正平研究―周辺の人々とその交友(Ⅰ)―」(『広島文教人間文化』第三号 広島文教女子大学人間文化学会 平成十五年三月)
- 神野雄二「日本印人研究―山田正平の生涯と芸術(Ⅰ)―」(『熊本大学教育学部紀要』第五二二号 熊本大学教育学部 平成十五年十一月)
- 神野雄二「人間北大路魯山人の書」(『北大路魯山人展―出会いと美の変遷―』(EMIネットワーク 平成十六年四月)

○神野雄二「印鬼 山田正平先生の魅力」(『回顧山田正平―東京学芸大学における教育者としての側面―付篆刻講義ノート(復刻)』十一月三日、東京学芸大学において、「山田正平先生を語る」シンポジウム開催される。(シンポジスト 小木太法、杉本蹂香、塚本虚斎、益子素州、神野大光)

・神野雄二「印鬼 山田正平先生」(東京学芸大学書道科硯心会 平成十六年七月)

○神野雄二「山田寒山論―新聞資料と篆刻―」(『全国大学書道学会研究集録』平成十五年全国大学書道学会 平成十六年三月)

○図録『山田正平展―寡作な文人篆刻家―』(篆刻美術館 平成十六年九月)

・神野雄二「山田正平年譜考」―附「山田正平研究文献目録」「山田家系図」―

○神野雄二「高芙蓉の顕彰と墓碑について」(『全国大学書道学会紀要』平成十六年度全国大学書道学会 平成十七年三月)

○神野雄二「日本印人研究―明治・大正期新聞資料における山田寒山関連記事見出し一覧稿―」(『国語国文研究と教育』 第四三号 熊本大学教育学部国文学会 平成十八年二月)

○神野雄二「日本印人研究―小曾根乾堂の生涯とその系譜―」(『熊本大学教育学部紀要』第五五号 熊本大学教育学部 平成十八年十一月)

○神野雄二「日本印人研究―中井敬所の高芙蓉研究―」(『大学書道研究』第一号 全国大学書道学会 平成二十年三月)

○神野雄二「日本印人研究―小曾根乾堂と星海―」(『熊本大学教育学部紀要』第五七号 熊本大学教育学部 平成二十年十二月)

○神野雄二「保多孝三小考―附保多孝三談話録―」(『楽篆』第四六号 三圭社 平成二十一年二月)

○神野雄二「日本印人研究―日本印史とその特色―」(『国語国文研究と教育』第四八号 熊本大学教育学部国文学会 平成二十二年二月)

○神野雄二「日本印人研究―山田寒山の印学と『印章備正』―」(『熊本大学教育学部紀要』第五九号 熊本大学教育学部 平成二十二年十二月)

○神野雄二「日本印人研究―山田正平をめぐる人々とその交友(続)―」(『書法漢学研究』第一〇号 書法関学研究會 平成二十四年一月)

○神野雄二「山田正平研究―周辺の人々とその交友(Ⅲ)―」(『国語国文研究と教育』第五十号 熊本大学教育学部国文学会 平成二十四年二月)

○神野雄二「日本印人研究―山田正平の画と画論―」(『熊本大学教育学部紀要』第六一号 熊本大学教育学部 平成二十四年十二月)

○神野雄二「神野大光の世界―書・篆刻作品集」(創想舎出版 平成二十五年三月)

○神野雄二「高等学校芸術科書道教育における鑑賞指導に関する研究」(『国語国文研究と教育』第五二号 熊本大学教育学部国文学会 平成二十六年二月)

○神野雄二「江戸時代の篆刻」(『企画展収蔵作品展Ⅱ「江戸時代の印譜」古賀市篆刻美術館 平成二十六年九月」)

○神野雄二「高等学校芸術科書道における鑑賞指導に関する実践的研究」(『熊本大学教育実践研究』第三二号 熊本大学教育学部附属教育実践総合センター 平成二十七年二月)

○神野雄二「書写書道教育論考」(創想舎出版 平成二十七年三月)

○神野雄二「日本印人研究―中川一政の篆刻と篆刻論」(『書学書道史研究』第二六号 書学書道史学会 平成二十八年十月)

○神野雄二「日本印人研究―現代篆刻家の人と芸術（Ⅰ）―」（『熊本大学教育学部紀要』第六二号 熊本大学教育学部 平成二十八年十二月）

○神野雄二「日本篆刻家の研究―山田寒山年譜稿―」（『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』第四卷第一・二合併号 No. 一八 九州地区国立大学間連携教育系・文系論文集編集委員会 平成二十九年三月）

○神野雄二『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として―』（熊日出版 平成二十九年三月）

○神野雄二「日本篆刻家の研究―山田正平の用具・用材について―」（『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』第五卷第一号 No. 一六 九州地区国立大学間連携教育系・文系論文集編集委員会 平成二十九年九月）

○神野雄二「日本篆刻家の研究―富岡鉄斎の篆刻と篆刻論―」（『熊本大学教育学部紀要』第六六号 熊本大学教育学部 平成二十九年十二月）

○神野雄二『書道』に関する用語の適切な英語翻訳についての研究―「篆刻」に関する用語について―（『国語国文研究と教育』第五六号 熊本大学教育学部 国文学会 平成三十年一月）

○神野雄二「明治時代の篆刻」（『企画展収蔵作品展Ⅳ「明治時代の印譜―日本近人印譜―」古賀市篆刻美術館 平成三十年九月）

○神野雄二「日本篆刻家の研究―山田正平の実父木村竹香について―」（『熊本大学研究紀要』第六五号 熊本大学教育学部 平成三十年十二月）

○神野雄二「高等学校芸術科書道における鑑賞に関する基礎的研究―山田寒山・山田正平の篆刻作品の鑑賞を通して―」（『熊本大学

教育実践研究』第三六号 熊本大学教育学部附属教育実践総合センター 平成三十一年二月）

○神野雄二『日本篆刻の歴史』の和文英訳―篆刻に関する和文英訳の課題と展望―」（『国語国文研究と教育』第五十七号 熊本大学教育学部国文学会 平成三十一年二月）

○神野雄二「日本篆刻家の研究―山田正平における東京学芸大学での「篆書・篆刻」の講義に関する一考察」（『熊本大学教育学部紀要』第六八号 熊本大学教育学部 令和一年十二月）

○神野雄二『書道』・『篆刻』に関する適切な英語翻訳についての考察」（『国語国文学研究と教育』第五八号 熊本大学教育学部国文学会 令和二年一月）

○神野雄二「山田正平における篆刻の美と表現に関する研究」（『全九州大学書写書道教育研究』第四号 全九州大学書写書道教育学会 令和二年三月）

○神野雄二「日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として―【改訂版】」（創想舎 令和二年三月）

○神野雄二 博士論文『山田寒山・正平を中心とする篆刻家の実証的・総合的研究』（令和三年三月十六日 東京学芸大学）

あとがき

本研究「山田寒山・正平を中心とする篆刻家の実証的・総合的研究」は、日本の篆刻家、中でも明治から昭和時代を代表する山田寒山（一八五六―一九一八）・正平（一八九九―一九六二）父子を取り上げ、実証的・総合的研究を行ったものである。

先に上梓した『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として―改訂版』（創想舎、二〇二〇年三月）は、本研究論文集の基礎的著書と言えるが、本研究論文集において、全てに亘り精査し、加筆修正した。章・節を組み替え、研究の主題、目的と意義・方法と構成を見直し、新たな内容とした。また多くの資料・文献を追加し、関係する論文を加えた。

博士論文の完成に至るまでには、多くの方々にお力添えを頂いた。博士論文の主旨の労をお取り下さいました加藤泰弘先生（東京学芸大学）、副査の労をお取り下さいました、青山浩之先生（横浜国立大学）、尾関幸先生（東京学芸大学）樋口咲子先生（千葉大学）、宮戸美樹先生（横浜国立大学）には、大変お世話になった。ここに衷心より深謝申し上げる。また鎌倉女子大学短期大学の杉山勇人先生には、博士論文提出に際し、様々なご助言を頂いた。心からお礼申し上げます。宮崎大学の山元宣宏先生、野中頼僊先生には、論文執筆に際しご教示頂いた。

また熊本大学と広島文教大学のご支援があったればこそと甚深なる謝意を捧げたい。

筆者はこれまで、日本や中国における印章や印人に興味を持ち、それへの史的考察や作品研究をテーマに据え論考を発表してきた。日本の印人の研究、主として高芙蓉研究、並びに彼を祖とする芙蓉派の一系譜と目される、源惟良、小俣螭庵、福井端隱、山田寒山、

山田正平等の事績の調査・研究と作品分析、そして印学の継承とその発展を探ることを目的としてきた。また、わが国の印人伝における唯一の専著と言える中井敬所の『日本印人伝』をさまざまな文献・資料より拾遺し補訂することを課題としている。篆刻の専門家はもちろん、篆刻に関わる傍系の文人・芸術家の研究も併せて進めてきた。

振り返れば、筆者が山田正平と出会ったのは、昭和五十一年（一九七六）十月、東京新宿区百人町のアメミヤ書廊で開催された「第二回一止道人山田正平遺作展」のお手伝いをさせて頂いた時である。その際『山田正平作品集』が木耳社から出版された。正平の芸術は、私の魂を揺さぶった。これが、山田正平を研究する端緒となった。

筆者が、東京学芸大学書道科の学生の頃、担任の小木太法先生（一九三三―二〇一二）が学生に対し、作品の制作とともに卒業論文の執筆を奨められた。その際、卒業作品を制作するとともに、卒業論文「印の起源に関する一考察」（東京学芸大学教育学部特別教科教員養成課程書道科専攻卒業論文、一九七八年）を執筆した。これが、印章や篆刻に関する研究の出発点となった。同大専攻科では「晩年の山田正平」（東京学芸大学教育専攻科書道専攻修了論文、一九七九年）を取り上げた。小木先生は「学生に文章を書くことの大切さを説かれ、大学時代のテーマはライフワークになる」とも話された。また筑波大学芸術研究科での指導教官今井凌雪先生（一九二二―二〇一一）は「論文を書くには、書の制作をしないと、内容がより深まる。書の制作と論文執筆の両者が大切だ。表現と研究の一体です」と話された。今井先生には、筑波大学修了後七年間に亘ってご指導頂いた。この期間は、書技法は言うに及ばず、書学書道史全般にわたる、本格の学習となった。お二人の先生は篆書・篆刻を善くされ、単なる書の制作に留まらず、広く芸術全般について語られた。東京学芸大学では、田邊古邨先生、鶴飼寒鏡先生、伊東参州先生、中村閑葉先生、相川鐵崖先生、堀江知彦先生に、筑波大学では、村上翠亭先生、伊藤伸先生、小松茂美先生、王学仲先生などから様々なご

指導を受けた。先生方はご自身の主義主張を押しつけられることはせず、自分の目で、広い視点でものを観ることを話された。自由に制作や執筆が出来たことは、幸いだった。筑波大学では、作品制作とともに「山田正平―人と芸術―」(筑波大学大学院修士課程芸術研究科美術専攻修了論文、一九八三年)を諸先生方のご指導のもと執筆した。

篆刻では、小林斗盦先生、菅原石廬先生、伏見冲敬先生、古川悟先生、保多孝三先生などから益を受けた。保多先生は、当時國學院大学の教授であったが、いわゆる「もぐり学生」として受講した。書道史・書論は赤井清美先生・杉村邦彦先生・高畑常信先生・平勢隆郎先生など多くの先生方に学恩を受けた。また大学学部時代から、より広く学ぶため、書学書道史はいうに及ばず、漢文学講義・デザイン論など聴講させて頂いた。筑波大学外国人教師として来日されていた天津大学の王学仲先生から講義とともに、放課後絵画実習していただいたことも、研究に大いに役立った。

書を学術・芸術・教育という三領域から探求することは、この頃からの方向性となった。先に刊行した拙著『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として―』(熊日出版、二〇一七年三月)と、その改訂版『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として―【改訂版】(創想舎、二〇二〇年三月)、また『神野大光の世界―書・篆刻作品集―』(創想舎出版、二〇一三年三月)と『書写書道教育論考』(創想舎出版、二〇一五年三月)は、筆者の研究の三部作といえるものである。

筆者による最も初期の論文は「山田正平における教育者の側面―東京学芸大学における篆書・篆刻講義を通して―」(『第二十三回全日本書写書道教育研究会北海道大会研究集録』全書研北海道大会事務局、一九八二年八月)、「山田正平の篆刻について」(『第九回全日本高等学校書道教育研究会徳島大会研究集録』全高書研徳島大会運営委員会、一九八三年十月)である。

私は、大学二年次から東京の山田家を伺い、現在まで四十数年間に亘ってお世話になっている。またこれまで多くの先生方に益を受けてきたが、いまだ学恩に報いることができていない。本論文集が、篆刻・印学研究に、少しでも寄与することがあればこの上もない喜びである。

本論文集が成るにあたり、多数の諸先輩、友人諸氏にご教示頂いた。師友、学恩を被った多くの方々に心から感謝申し上げます。長年の期間にわたって研究を進めたが、図書館・博物館・研究機関と資料・文献の個人所蔵者の皆様のお蔭であると深く感謝している。

思えば、学位論文は、二〇一六年四月十四日と十六日、熊本地方の二度にわたる大地震で被災し、資料・文献など散乱する中での執筆となった。その後、十七年間勤務した熊本大学を退職、東京あきる野市へ転居し、コロナ禍にも直面した。数度にわたる大病を患う中での執筆でもあった。何とか気力を持続出来たのは、人生の師にお応えしたいとの思いと、これまでご教示とご厚誼を頂いてきた諸先輩、友人諸氏への恩返しとの思いからだった。苦しい日々ではあったが、深い喜びも覚えた。

ご縁あって、旧制第五高等学校に繋がる熊本大学に奉職できた事は大きい喜びである。大学では研究と教育、芸術活動、地域貢献に幾分力を尽くせた事は嬉しいことである。

執筆中多くの諸先輩が鬼籍に入られた。『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として―』(熊日出版)に序文を認めて下さった水田紀久先生、蔵書を惜しげもなくお貸し下さりご教示頂いた中野三敏先生など、深く感謝したい。

また、山田正平令夫人喜美子様、ご子息潤平氏、ご令嬢梅枝様、恩師今井凌雪先生、小木太法先生、王学仲先生、親友宮坂蘭州先生などが鬼籍に入られた。その他多くの師友が亡くなられる中、ライフワークともいえる、山田寒山・正平に関する本研究を何としても、纏め上げたいと決意した。

微力ではあるが、今後も、教育・研究、作品制作に尽力してまいりたく念願している。コロナ禍の中、今、書家に何ができるのであろうか。深く考えさせられた。芸術の本来の在り方、作家としての生き方を模索したい。そのためにも、温故知新、歴史に問うべきだろう。書は本来、庶民の希望であり、人間讃歌が第一義。一部の特権階級のものではない。芸術のための芸術でなく、民の心に根差した芸術を目指したい。生命の尊厳性と人間性の回復、これしかない。そしてできれば、人生や芸術を深く味わって参りたい。

本論文集の制作・発行をお引き受け下さった創想舎の関係各位、営業をご担当下さったホープ印刷の森田守尚氏に深謝したい。

本論文集が幾分内容を広く取り扱えられたのは、石牟礼道子先生（作家）、篠田桃紅先生（美術家）、浜田知明先生（版画家）など私にご縁した芸術・文化人の先生方からさまざまなお導きがあつたことによる。ご縁に深く感謝したい。

今後、人生の師が話された「学は光」「堂々とわが人生を朗らかに生きぬき勝ちぬき一生飾れや」との指針を胸に、人間教育に真摯に従事するとともに、生命尊厳の思想に徹した芸術作品の制作や芸術研究に取り組みたいと思っている。

最後に、私事で恐縮であるが、書の道に進む契機を与えてくれた慈父神野榮次（雲山）と、父の逝去後も大学・大学院と支えてくれた母並びに家族に本論文集を捧げたい。母は、愛媛県の新居浜市美術館で開催された、美術コレクション展示（第Ⅲ期）（一月二五日～三月一日・父神野雲山と拙作の作品六点を含む）を家族と鑑賞、その三週間後の三月四日に九三歳で旅立った。

また本書のワープロ入力・校正を含め、長年私の仕事を支えてきてくれた妻和美と、長男城に感謝の気持ちを伝えたい。

本題目による研究期間中に、二度に亘り科学研究費補助金の交付を受けた。

二〇二二年十一月十八日 東京あきる野にて

神野雄二謹記

